昭和四年三月五日印刷
昭和四年三月十日發行

國譯一切經 阿含部 八

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地一番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地一番
振替東京一九四七一番
電話芝三〇四〇番

製本所 兩角製本所

索　引

（頁數は通頁を表す）

—阿含部八索引終—

と。是の故に諸比丘、今より以後未だ、復諍訟して勝負の心有らざれ、然る所以は、念じて當に一切の人民を降伏すべし。若復比丘、勝負の心有りて、共に諍訟心にて、共に競ふ者は、即ち法と律とを以て彼を治せん。比丘、是れを以ての故に、當に自ら修行すべし」と。是の時二比丘、佛の此の語を聞き已つて、卽ち座より起ち、世尊の足を禮し、悔過を求め「今より已後、更に復爲さじ、唯願はくは世尊、其れ悔過を受け給へ」と。世尊告げて曰はく、「大法の中、快く改過を得たり、自ら諍競の心有るを知らば、汝の悔過を聽さん。諸比丘、更に復爾ること莫かれ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

增上と坐と行跡と　無常と園觀池　無漏と無息と禪と　四樂と無諍訟となり

增壹阿含經卷第二十三

[三七]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時目連の弟子と阿難の弟子と、二人共に談るらく、「我等二人、同聲に經唄を誦せん、誰か勝れん」と。是の時衆多の比丘、此の二人の各〻共に論ずるを聞き、聞き已つて便ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時衆多の比丘、世尊に白して言さく、「今二人有りて共に論ずらく、『我等二人共に經唄を誦せんに何者か妙なる』と。爾の時世尊、一比丘に告げたまはく、『汝往いて此の二比丘を呼び來らしめよ』と。比丘對へて曰さく、『是の如し、世尊』と比丘、佛より敎へを受け、卽ち彼の二人の所に往至し、彼の二人に語げて曰く、「世尊は卿を喚びたまふ」と。是の時二人、比丘の語を聞き已つて、卽ち世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて住す。爾の時世尊二人に告げて曰はく、「汝等愚人、實に此の語有るや『我等共に經唄を誦せんに、何者か妙なる』と」。二人對へて曰さく、「是の如し、世尊」と世尊告げて曰はく、「汝等頗は我の此の法を說きしを聞き共に競ひ諍ふや、此の如きの法は何ぞ梵志に異らん」と。諸比丘對へて曰さく、「如來は此の法を說きたまひしを聞かず」と。世尊告げて曰はく、「我由來、諸比丘の與に此の法を說かざるに、當に勝負を諍ふべけんや、然して我今日法を說く所以は、降伏有り、敎化する所有らんと欲してなり。若し比丘有つて法を受くるの時、當に念じて四緣の法を思惟すべし。此の法は竟に契經・阿毘曇・律と共に相應するや不や、設し共に相應せば、當に念じて奉行すべし」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

多く無益の事を誦す　此の法妙と爲すに非らず　牛を頭數を算ふるが猶く　此れ沙門の要に非らず　若しは少多誦習し　法に於て法を行ぜば　此の法極めて上れりと爲し　沙門の法と謂ひつべし　千章を誦すと雖も　不義なれば何か益あらん　一句の聞きて　道を得べきに如かじ
千言を誦すとも　不義なれば何か益あらん　一義の聞きて　道を得べきに如かじ　千々を敵とするも　一夫之に勝つとも　自ら勝ちて　已に忍ぶ者の上に若かず

【三七】 S. 16. 6 Ovāda

檀槃那園中の戲廬に出遊し、轉じて迦尼樹の下に詣り、五欲自ら娛樂しめり。時に彼の天子、樹に登つて遊戲し、心意錯亂し、並に復華を採り、卽便ち樹より墮ちて命終し、此の舍衞城中の大長者の家に生る。是の時五百の玉女、胸を推し、喚呼して自ら勝ふる能はず。我爾の時天眼を以て天子を觀見するに、命終して舍衞城中の大長者の家に生る。八九月を經て便ち男兒を生み、端正にして雙び無く、桃華の色の如し。是の時長者子、漸々に長大し、父母便ち婦を求めて處り、婦を取りて未だ久しからざるに、便ち復命終して、大海の中に生れ、龍蛇の形を作せり。是の時彼の長者の居門の大小、追慕し、號哭痛毒して心を傷めり。是の時彼の龍復金翅鳥の爲に食はれ、身壞命終して地獄の中に生れり。是の時諸の龍女追慕の情切實にして言ふべからず」。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

彼の天華を採りし時　心意亂れて寧らかならず　水の村落を漂はすが如く　悉く沒して濟ふことを得ず　是の時玉女の衆　圍遶して啼哭し　顏貌極めて端正なりしに　華を愛して命終りぬと　人中も亦啼哭し　我窮腸子を失ふと　尋いで復命終を取れり　無常の壞する所なり　龍女後に隨ひて追ひ　諸龍皆共に集り　七頭極めて勇猛なるも　金翅の害する所となれり　諸天亦愁憂ひ　人中も亦復爾り　龍女も亦愁憂ふ　地獄に苦痛を受くることを　四諦の妙法　實の如くに知らざりき　生有れば亦死有り　長流の海を脫れず　是の故に當に想ひを起し　諸の淸淨法を修むべし　必ず當に苦惱を離れて　更に有の患ひを受けざるべし

と。是の故に諸比丘、常に當に無常想を修行し、無常想を廣布すべくんば、便ち色愛・無色愛を斷じ、亦憍慢を斷じ、無明永く盡きて餘り無からん、是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十一

[三四]五蓋・貪欲蓋・瞋恚蓋・睡眠蓋・調戲蓋・疑蓋なり。若しは復苦を知らず、集を知らず、盡を知らず、道を知らざるなり。是れを名けて無明流と爲すと謂ふなり。天子當に知るべし、如來は此の四流を說きたまへり。若し人有つて此れに沒在せば、亦道を得ること能はず』と是の時彼の天、此の語を聞き已つて、猶し力士の臂を屈伸するが如き頃に、三十三天より沒して我所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時彼の天我に白して言さく、『善い哉、世尊、快く此の義を說きたまへり。如來は乃ち四流を說きたまふ。若し凡夫の人にして、此の四流を聞かずば、則ち四樂を獲ざらん。云何が四と爲す、所謂伏息の樂、正覺の樂、沙門の樂、涅槃の樂なり。若し凡夫の人にして此の四流を知らずば、此の四樂を獲ざらん』と。是の語を作し已つて、我復告げて曰く、『是の如し、天子、汝の言ふ所の如く、若し此の四流を覺らずば、則ち此の四樂を覺らざらん』と。我時に彼の天人の與に、漸々に共に論ぜり。所謂論とは施論・戒論・生天の論・欲は不淨想・漏を大患と爲し、出要を樂と爲すと。爾の時天人已に歡喜の心を發せり。是の時我便ち廣く四流の法を演說し、及び四樂を說きぬ。爾の時彼の天專心一意に此の法を思惟し已り、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。我今亦此の四法四樂を說き、便ち四諦の法を得たり。是の如く、諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に無常想を修むべし。當に無常想を廣布すべし。已に無常想を修めて、無常想を廣布せば、欲界の愛、色界の愛、無色界の愛を斷じ、盡く無明を斷じ、盡く憍慢を斷ずること、猶し草木を燎燒せば、皆悉く除盡するが如し。此れも亦是の如く、若し無常想を修めば、盡く一切の諸結を除斷せん。然る所以は、往昔久遠に一天子有り、五百の玉女を將ひ、前後に導從して難

【三四】五蓋(Pañca nivaraṇa)。前出。

[三〇]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「過去久遠に三十三天、釋提桓因及び諸の玉女を將ひ、[三一]難檀槃那園に詣つて遊戲す。是の時一天人有り、便ち此の偈を說く、

難檀園を見ざれば　則ち樂しみ有りと知らざらん　諸天の居る所　是れに過ぐる者有ること無し

と。是の時天有り、彼の天に語りて言く、『汝今無智にして正理を分別すること能はず、憂苦の物を反つて是れ樂と言ひ、無牢の物にして是れ牢と言ひ、無常の物を反つて是れ常と言ひ、不堅要の物を復堅要と言ふ。然る所以は、汝竟に如來の偈を說きたまふを聞かざるか。

一切行無常なり　生ずれば必ず死有り　生ぜずば必ず死ぜず　此の滅を最も樂と爲す

と。彼に此の義有り、又此の偈有り、云何が此の處を最も樂と爲すと言ふや。汝今當に知るべし、如來は亦[三二]四流の法有ることを說きたまひ、若し一切衆生にして此の流に沒在せば、終に道を得ず。云何が四と爲す、所謂欲流・有流・見流・無明流なり。云何が名けて欲流と爲すや、所謂五欲是れなり。云何が五と爲すや、所謂若し眼、色を見ては眼識の想を起し、若し耳、聲を聞いては識想を起し、若し鼻、香を嗅いでは識想を起し、若し舌、味を知つては識想を起し、若し身、細滑を知つては識想を起す、是れを名けて欲流と爲すと謂ふなり。云何が名けて有流と爲すや、所謂有とは[三三]三有是れなり。云何が三と爲すや、所謂欲有・色有・無色有是れなり。是れを名けて有流と爲すと謂ふなり。云何が名けて見流と爲すや、所謂見流とは世は有常、世は無常なり、世有邊の見、無邊の見、彼身彼命、非身非命、如來の死有り、如來の死無し、若しは如來の死有り、如來の死無し、亦如來の死有るに非らず、亦如來の死無きに非ずと。是れを名けて見流と爲すと謂ふなり。彼云何が無明流なるや、所謂無明とは、知無く、信無く、見無く、心意に貪欲し、恒に希望有り、及び其の

【三〇】 S. 1. 2. 1 Nandana

【三一】 難檀槃那(Nandavana)

【三二】 四流 (Cattāro oghā)は、又四暴流ともいひ、欲流(Kāmogha)、有流(Bhavogha)、見流 (Ditthiogha)、 無明流(Avijjogha) の四。

【三三】 三有(Toyobhavā)は、又三界ともいひ、欲有(Kāmabhava)。色有(Rūpabhava)。無色有(Arūpabhava)、の三。三界を見よ。

事を憶ひ、或は一生・二生・三四五生・十生・二十・三十・四十・五十・百生・千生・百千萬生、成劫・敗劫・無數の成劫・無數の敗劫・無數成敗の劫、我曾て此に死し、彼に生れ、彼より命終して此に來生し、其の本末因緣の所縱無し、此の如く無數世の事を憶ひぬ。我復天眼清淨にして瑕穢無きを以て衆生の類を觀、生者・終者・善趣・惡趣・善色・惡色、若しは好、若しは醜、其の行本に隨ひ、皆悉く之を知りぬ。或は衆生有つて身に惡行を修め、口に惡行を修め、意に惡行を修め、賢聖を誹謗し、邪業の本を造り、邪見と相應し、身壞命終して地獄の中に生る。或は衆生の類有つて、身口意に善を行じ、賢聖を誹謗せず、正見と相應し、身壞命終して人間に生る。是れを此の衆生、身口意行に邪業有ること無しと謂ふなり。我三昧の心清淨にして瑕穢無きを以て有漏盡きて無漏を成じ、心解脫し、智慧解脫し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復胎を受けず、實の如くに之を知り、無上正眞の道を成ぜり。若使比丘、或は沙門・婆羅門有つて、諸趣を明に了り、然して此の趣は原本吾昔未だ始めて行かざるにあらず、一淨居天上を除き此の世に來らず、或は復沙門・婆羅門にして、當に所生すべきの處、然るに我生ぜずば則ち其れ宜しきに非ず、已に淨居天に生る、復此の世間に來らず、卿等已に賢聖の戒律を得、我亦之を得たり。賢聖三昧、卿等亦得、我亦之を得たり。賢聖智慧、卿等亦得、我も亦之を得たり。賢聖解脫、卿等も亦得、我も亦之を得たり。賢聖解脫智見、卿等も亦得、我も亦之を得たり。胞胎の根を斷つを以て生死求く盡き、更に復胞胎を受けず。是の故に諸比丘、當に方便を求めて四法を成就すべし。然る所以は、若し比丘にして此の四法を得ば、成道難からじ、我今日無上正眞の道を成ぜしが如きは、皆四法に由つて果を成ずることを得しなり。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

賢聖三昧・賢聖智慧・賢聖解脫なり。爾の時我復是の念を作しき、『此の羸劣の體を以て上尊の道を求むべからず。多少精微の氣を食し、身體を長育し、氣力熾盛にして、然る後に道を修行することを得ん、當に精微の氣を食すべし』と。時に五比丘我を捨て、還えり退けり。『此の沙門瞿曇は性行錯亂し、以て眞法を捨て丶邪業に就けり』と。我爾の時に當り、卽ち座より起ち、東に向つて經行しぬ。是の時我復是の念を作す、『過去久遠恒沙の諸佛の成道の處は何れの所に在りと爲すや』と。是の時虛空神天上に住在して、我に語げて曰く、『賢士、當に知るべし、過去恒沙の諸佛世尊は、道樹の清涼なる蔭下に坐して成佛を得たり』と。時に我復是の念を作しき、『何れの處に坐して佛道を成じ得たりと爲すや、坐せりや、立てりや』と。是の時諸天復來つて我に告げて是の說を作す、『過去恒沙の諸佛世尊は、草蓐に坐し、然る後に佛を成ぜり』と。是の時我を去ること遠からざるに、吉祥梵志有り、側に在つて草を刈れり。卽ち彼に往至して問ふ、『汝是れ何人ぞ、何等と名くと爲すや、姓有りと爲すや』と。梵志報へて曰く、『我は吉祥と名け、其姓は弗星なり』と。我爾の時彼の人に語げて曰く、『善い哉、善い哉、是の如し、姓字は世の希有なり。姓名虛ならず、必ず其の號を成す、當に現世をして、吉にして、不利なからしむべし。生老病死永く除盡せしめん。汝の姓弗里は我と昔同じ、吾今求むる所有らんと欲す、少しく草を惠まれよ』と。吉祥問うて曰く、『瞿曇は今日斯の草を用ふることを爲すや』と。爾の時我吉祥に報へて曰く、『吾樹王下に敷き、四法を求めんと欲す、云何が四と爲す、所謂賢聖戒律・賢聖三昧・賢聖智慧・賢聖解脫なり』と。比丘當に知るべし、爾の時吉祥、躬自ら草を執つて樹王の所に詣る。吾卽ち其の上に坐し、正身正意に結跏趺坐し、懸念して前に在り。爾の時貪欲の意解け、諸の惡法を除き、有覺有觀、心、初禪に遊び、有覺有觀を除盡して、心、二三禪に遊び、護念清淨にして、憂喜を除盡して心、四禪に遊ぶ。我爾の時清淨の心を以て、諸の結使を除き、無所畏を得、自ら宿命の無數の來變を識りぬ。我便ち自ら無數世の

と。或は人有り、見已つて是の說を作せり、『此の沙門は顏色終りに似たり』と。比丘當に知るべし。我六年の中、此の苦行を作しゝも、上尊の法を得ざりき。

爾の時我是の念を作さく、『今日一果を食すべし』と。爾の時我便ち一果を食しぬ。我一果を食するに當るの日、身形萎弱して、自ら起居すること能はず、年百二十にして骨節離散して扶持すること能はざるが如し。比丘當に知るべし、爾の時の一果とは今日の小さき棗に如似たる耳。爾の時我復是の念を作す、『此れ成道の本に非らざるが故に、更に餘道有るべし』と。爾の時我復是の念を作さく、『我自ら昔日を憶ふに、父王の樹下に在つて、婬無く、欲無く、惡不善の法を除去して初禪に遊び、覺無く、觀無き二禪に遊び、護念清淨にして衆想有ること無き三禪に遊び、復苦樂無く意念清淨の四禪に遊べり。此れ或は能く是れ道ならん、我今當に此の道を求むべし。我六年の中勤苦して道を求めて獲ること剋はず。或は荊棘の上に臥し、或は板木鐵釘の上に臥し、或は懸鳥身體地を遠ざかり、兩脚上に在つて頭首を地に向け、或は交脚踦踞し、或は長く鬚髮を養ひ、未だ曾て剪除せず。或は日に曝らし、火に炙り、或は盛冬に氷に坐し、身體を水に沒し、或は寂寞して語らず、或時は一食、或時は二食、或時は三食、四食、乃至七食、或は菜果を食し、或は稻麻を食し、或は草根を食し、或は木實を食し、或は花香を食し、或は種々の果蓏を食し、或時は裸形、或時は弊壞の衣を著け、或は莎草の衣を著け、或は毛毳の衣を著け、或時は人の髮を以て形を覆ひ、或時は髮を養ひ、或時は他の髮を取つて益々戴けり。是の如く比丘、吾昔苦行して乃ち斯に至りぬ。然るに四法の本を獲ざりき。云何が四と爲すや、所謂賢聖戒律は曉り難く、知り難し、賢聖智慧は曉り難く、知り難し、賢聖解脫は曉り難く、知り難し、賢聖三昧は曉り難く、知り難し、是れを比丘、此の四法有り、吾昔苦行して、此の要を獲ざりきと謂ふなり。爾の時我復是の念を作しき、『吾今要ならず當に無上道を求むべし』と。何者か是れ無上の道なるや、所謂四法に向ふ是れなり。賢聖戒律・

若し我手を以て腹を按摩する時、便ち脊骨に値ひ、若し脊を按ずる時、復腹の皮に値ひ、身體の羸弱皆食せざるに由るが故なり。我爾の時復一麻一米を以て、此れを以て食と爲すか、竟に所益無く、亦復上尊の法を得ざりき。若し我意の中に大小便を欲するも、卽便ち地に倒れて自ら起居すること能はざりき。是の時諸天見已つて便ち是の說を作さく『此の沙門瞿曇は以て滅度を取れり』と。或は復諸天有り、是の說を作さく『此の沙門は未だ命終せざるも、今必ず命終せん』と。或は復諸天有つて是の說を作さく『此の沙門は亦命終せしに非ず、此の沙門は實に是れ阿羅漢なり。夫れ羅漢の法に此の苦行有り』と。我爾の時猶神識有りて、外來の機趣を知る。時に我復是の念を作さく、『今無息禪中に入るべし』と。便ち無息禪中に入り、[二九]出入息を數へ、我今出入息を數ふるを以て、氣有つて耳中より出づと覺知す、是の時風聲、雷鳴に如似り。爾の時復是の念を作さく、『我今口を閉じ、耳を塞ぎ、息をして出でざら使めん』と。息已に出でず、是の時內の氣便ち手脚の中より出で、正しく氣をして耳・鼻・口より出づることを得ざら使めき。爾の時內の聲雷吼に如似たり。我爾の時亦復是の如し。是の時神識身に隨つて迴るが猶し。是の時復是の念を作さく『我宜しく、更に無息禪中に入るべし』と。是の時盡く諸孔の息を塞ぐ、我已に諸の出入息を塞ぎぬ。是の時便ち頭額の痛みを患ひ、人有つて鑽を以て頭を鑽すに如似り。我も亦是の如く、極めて頭痛に苦しめり。爾の時我故に神識有り、爾の時我復是の念を作さく『我今更に坐禪して、息氣の出入するを得ざるべし』と。爾の時我便ち出入息を塞げり。是の時諸息盡く腹中に集りぬ。爾の時息轉ずる時極めて少類爲り、猶し屠牛家の刀を以て牛を殺すが如し。我も亦是の如く、極めて苦痛を患へり。亦兩健人、共に一劣人を執へて、火上に炙り、極めて疼痛を患ひ、堪え忍ぶべからざるが如し。我も亦是の如く、此の苦の疼痛具に陳ぶべからず。爾の時我猶神識有りて存せり。我爾の時坐禪の日に當りて、形體人色を作さず。其の中に人有り、見已つて是の說を作せり、『此の沙門は顏色極めて黑し』

【二九】出入息とは、呼吸のこと。

【二六】聞くこと是の如し、一時佛、【二七】毘舍離城外の林中に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我昔未だ佛道を成ぜざるの時、爾の時彼の大畏山に依つて住しぬ。是の時彼の山は、其の欲心有るも、欲心無きものも、中に入る者衣毛皆竪てり。若し復極盛の熱時には野馬縱橫し、其の形體を露して坐し、夜は便ち深林の中に入れり。若し復極寒の日、風雨交流せば、晝便ち村中に入り、夜便ち露坐せり。我爾の時正しく能く一偈を誦しぬ。【二八】昔未だ聞かざる所、昔未だ見ざる所なり。

濟淡なる夜は　大畏山中に安んじ　其の形體を露にす　是れ我誓願なり

と。若し我塚間に至れば、彼の死人の衣を取つて形體を覆ひぬ。爾の時若しは案吒村の人來つて木枝を取りて我耳中に著け、或は鼻中に著け、或は唾する者有り、或は尿する者有り、或は土を以て其の身上を坌せり。然るに我爾の時終に意を起して彼の人民に向けざりき。爾の時此の護心有り、爾の時蝱牛の處有り、設し犢子の屎を見れば、便ち取りて之を食ひ、若し犢子の屎無くば、便ち大牛の屎を取りて之を食へり。爾の時此の食を食して我復是の念を作さく、『今食を用ふると爲す、乃ち終日食せざるべし』と。時に我已に此の念を生ずるや、諸天便ち我所に來到して是の言を作さく、『汝今復食を斷つこと勿れ、若し當に食を斷つべくんば、我當に甘露を以て精氣相益し、其の命を存せしむべし』と。爾の時我復是の念を作さく、『今已に食を斷ぜり、何に緣つてか復、諸天をして甘露を送り、我に與へ使めん、今身將に虛詐有らんとす』と。是の時我復是の念を作さく、『今麻米の餘を食すべし』と。爾の時日に一麻一米を食し、形體劣弱にして骸骨相連り、頂上に瘡を生じ、皮肉自ら墮つること、猶し敗壞せる瓠盧の如し。亦我頭を成就せず、爾の時も亦復是の如し、頂上に瘡を生じ、皮肉自ら墮ちぬ。皆食せざるに由るが故なり。亦深き水の中に、星宿、中に現るゝが如く、爾の時、我眼も亦復是の如し。皆食せざるに由るが故に、猶し故き車の敗壞せしが如し、我身も亦是の如く。皆悉く敗毀して承順すべからず。亦駱駝の脚跡の如く、兩尻も亦復是の如し。

【二六】M. 12 Sīhanāda.
【二七】毘舍離(Vesālī)。前出。
【二八】昔より未だ曾て見聞きせざる希有の意。

若し人胞胎を受けんも　惡行は地獄に入り　善者は天上に生じ　無漏は涅槃に入る　賢者は今胎を受け　梵志地獄に入り　須達は天上に生れ　比丘は滅度を取れり

と。是の時世尊、靜室より起ち、普集講堂に詣つて座に就きたまひぬ、爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「今四事有り、若し人能く修行せば、身壞命終して、人中に生るゝことを得ん、云何が四と爲すや、所謂身・口・意・命清淨にして瑕穢無くば、若し命終の時人中に生るゝを得ん。若し復比丘、更に四法有り、人有つて習行する者は地獄の中に入らん。云何四と爲すや、所謂身口意命清淨ならず、是れを比丘、此の四法有り、若し人有つて親近する者は、身壞命終して、地獄の中に生ると謂ふなり。復次に比丘、復四法有り、習行する者は善處天上に生る。云何が四と爲すや、[二四]惠施・仁愛・利人・等利、是れを比丘、人有つて、此の法を行ずる者は、身壞命終して、善處天上に生ると謂ふなり。復次に比丘、更に四法有り、若し人有つて此の法を行ずる者は、身壞命終して有漏を盡し、無漏を成じ、心解脱し、智慧解脱し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じて、更に復胎を受けず、實の如く之を知るなり。云何が四と爲すや、[二五]有覺有觀禪・無覺無觀禪・護念禪・苦樂滅禪、是れを比丘四事の法有りと謂ひ、若し人有つて習行せば、有漏を盡して無漏を成じ、心解脱し、智慧解脱し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じて更に復胎を受けず。實の如く之を知る。是の故に諸比丘、若し族姓子四部の衆有りて、人中に生れんと欲せば、當に方便を求めて、身口意命の清淨を行ずべし。若し天上に生るゝを得んには、亦當に方便を求めて四恩を行ずべし、若し有漏を盡すことを得て、無漏を成じ、心解脱し、智慧解脱せんには、亦方便を求めて四禪を行ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

【二四】惠施。以下の四を四攝事といふ。前註を見よ。

【二五】有覺有觀禪とは、第一禪のこと。以下順次第二、第三、第四禪のこと。

至ることを得て志移動せざりき。諸比丘、當に知るべし、我今喩を作せり、當に念じて之を解すべし。此の義を說く時に何の義有りと爲すや、四の毒蛇と言ふは即ち四大是れなり。云何が四大と爲すや。所謂地種・水種・火種・風種、是れを四大と謂ふなり。五人刀劍を持するとは、此れは是れ五盛陰なり。云何が五と爲すや、所謂色陰・痛陰・想陰・行陰・識陰是れなり。六怨家とは欲愛是れなり。空しき村とは六入是れなり。云何六と爲すや、所謂〔二三〕六入とは、眼入・耳入・鼻入・口入・身入・意入なり。若し智慧者有りて眼を觀ずる時、盡く空にして所有無く亦牢固ならず。若し復耳・鼻・口・身・意を觀ずる時は、盡く空にして所有無く、皆虛、皆寂にして亦牢固ならざるなり。水と云ふは四流是れなり。云何が四と爲すや、所謂欲流・有流・無明流・見流なり。大なる栰とは賢聖八品道是れなり。云何が八と爲すや、正見・正治・正語・正方便・正業・正命・正念・正定、是れを賢聖八品道と謂ふなり。水中を度ることを求むるとは善權方便精進の力なり。此の岸とは身邪なり、彼の岸とは身邪を滅するなり。此の岸とは阿闍世國界なり、彼の岸とは毘沙王の國界なり。此の岸とは波旬の國界なり。彼の岸とは如來の境界なり」と。是の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在し、爾の時世尊、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時舍衛城中に一優婆塞有つて命終し、還えりて舍衛城中の大長者の家に生れ、最大夫人妊身す。爾の時世尊、天眼を以て觀たまひ、清淨にして瑕穢無し、此の優婆塞、舍衛城中の最富の長者の家に生れしを見たまへり。即ち其の日に於て復梵志有つて身壞命終して地獄の中に生ぜり。爾の時世尊、亦天眼を以て觀たまふに復即ち其の日を以て、阿那邠邸長者命終して、善處天上に生ぜり。是の時世尊亦天眼を以て觀たまふに、即ち其の日に一比丘有つて滅度を取れり。世尊亦天眼を以て觀見したまへり。爾の時世尊、此の四事を見已つて、便ち斯の偈を說きたまはく、

〔二三〕六入。又六處（Chaayatana）といふ、六根のこと。

「猶し四大毒蛇の極めて凶暴を爲し、一の函の中に擧著するが如く、若し人有りて四方より來つて活せ令めんと欲して、死を求めず、樂を求めんと欲し、苦を求めず、愚ならず、闇ならず、心意亂れず、繫屬する所無し、是の時若しは王、若しは王の大臣、此の人を喚び、之に告げて曰く、『今四大毒蛇有り、極めて凶暴爲り。汝今當に時に隨つて、將養し沐浴して淨から令め、時に隨つて飲食して乏しから令使むること無かるべし。今正に是れ時なり、往いて施行すべし』と。是の時彼の人、心に恐懼を懷き、敢えて直ちに前まず。便ち捨てゝ馳走して湊む所を知ること無し。復重ねて彼の人に告げて是の語を作さく、『今五人をして皆刀劍を持し、汝の後に隨は使めん。其が汝を獲ること有らば、當に其の命を斷ずべし、稽遲するに足らず』と、是の時彼の人四の大毒蛇を畏れ、復五人の刀劍を捉持する者を畏れて、東西に馳走して如何に（すべき）やを知らず。復彼の人に告げて曰く、『今復六の怨家をして汝の後に隨はしめ、其れ得ること有らば、當に其の命を斷つべし。所爲せんと欲せば、時に之を辨ずべし』と。是の時彼の人、四の大毒蛇を畏れ、復五人の刀杖を持する者を畏れ、復六怨家を畏れ、便ち東西に馳走し。彼人若し空墟の中を見ば中に入つて藏れんと欲し、若し空舍に値はゞ、若しは破牆の間も、堅牢處無し。彼空器を見るも盡く所有無し。若し復人有つて此の人と親友なり。免濟せ令めんと欲し、便ち之に告げて曰く、『此の間空閑の處諸の賊寇多し。所爲せんと欲せば今意に隨ふべし』と。是の時彼の人復四大毒蛇を畏れ、復五人の刀杖を持する者を畏れ、復六怨家を畏れ、復空墟の村の中を畏れ、便ち東西に馳走す。彼の人前行して若し大水を見る。極めて深く且つ廣し、亦人民及び橋梁の度つて彼の岸に至るを得べき無し。然して復彼の人の所立の處、諸の惡賊多し。是の時彼の人是の思惟を作さく、『此の水は極めて深廣爲り、諸の賊寇饒し、當に云何が彼の岸に度るを得べき、我今材木草蘘を集聚めて栰を作り、此の栰に依つて此の岸より彼の岸に至るを得べし』と。是の時彼の人、便ち薪草を集めて栰を作り已り、卽ち彼の岸に

は、無想天に生れ、壽八萬四千劫なり、若し復人中に來生せば、當に中國の家に生るべし、亦瞋恚無く、恒に一切の非法の行を護る。是れを以ての故に名けて護園と爲すなり。比丘當に知るべし。如來の正法の中に此の四園有りて、諸の聲聞をして其の中に遊戲することを得しむ。然して如來の此の四園の中に四の浴池有つて、我聲聞をして中に於て洗浴し、自ら遊戲し、有漏を盡くして無漏を成じ、復塵垢無からしむ。云何が四と爲すや、一に有覺有觀の浴池と名け、二に無覺無觀の浴池と名け、三を護念浴池と名け、四を無苦無樂浴池と名く。何等を以ての故に名けて有覺有觀の浴池と爲すや、若し比丘有つて、初禪を得已り、諸法中に於て、恒に覺と觀と有つて、諸法を思惟し、結纒を除去し、永く餘り有ること無し。是れを以ての故に名けて有覺有觀と爲すなり。復何を以ての故に名けて無覺無觀の浴地と爲すや、若し比丘有つて、二禪を得已り、有覺有觀を滅し、禪を以て食と爲す。是れを以ての故に、之を名けて無覺無觀と爲すなり。復何を以ての故に、名けて護念浴池と爲すや。若し比丘有つて三禪を得已り、有覺有觀を滅し、無覺無觀を滅し、恒に三禪を護念す。是れを以ての故に、名けて護念浴池と爲すなり。復何を以ての故に名けて不苦不樂浴池と爲すや。若し比丘有つて四禪を得已り、亦樂を念ぜず、復苦を念ぜず、亦過去當來の法を念ぜず、恒に心を現在法中に用ふ。是れを以ての故に、名けて不苦不樂浴池と爲すなり。是の故に諸比丘、如來の正法の中に此の四の浴池有つて、我聲聞をして、中に於て洗浴し、[二]二十一結を滅し、生死の海を度し、涅槃の城に入らしむ。是の故に諸比丘、若し此の生死の海を度せんと欲せば、當に方便を求めて、二十一結を滅し、涅槃の城に入るべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[三]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

【二】 二十一結とは、瞋・害・睡眠・調戲・疑・怒・忌・惱・疾・憎・無慚・無愧・幻・姦・僞・諍・憍・慢・妬・增上慢・貪の二十一の煩惱をいふ。

【三】 S. 35. 197 Āsīvisa

猶し轉輪聖王の入る所の園には、餘王復園中に入つて浴洗することを得ざるが如し、人民の類は正しく、遙に見ることを得べき耳。此れも亦是の如く、若し最尊の神天の園中に入つて浴洗する所は、餘の小天復入ることを得ず。是の故に名けて雜種浴池と爲すなり、復何を以ての故に名けて難陀浴池と爲すや。若し三十三天、此の池中に入り已れば、極めて歡悅を懷く、是の故に名けて難陀浴池と爲すなり。復何を以ての故に名けて難陀頂浴池と爲すや、若し三十三天此の池中に入り已れば、兩々手を捉へて、其の頂きを摩して浴洗す。正使天女も亦復是の如し。是れを以ての故に、名けて難陀頂浴池と爲すなり。復何を以ての故に名けて蘇摩浴池と爲すや。三十三天此の池中に入り已れば、爾の時諸天の顏貌、盡く人色に同じくして、若干有ること無し、是の故に名けて蘇摩浴池と爲すなり。復何を以ての故に名けて歡悅浴池と爲すや。若し三十三天、此の池の中に入り已れば、盡く憍慢上下の想無く、婬意偏少にして、爾の時盡く同一心にして浴洗す。故に名けて歡悅浴池と爲すなり。是れを比丘、此の因緣有つて、便ち此の名有りと謂ふなり。

今如來の正法の中にも亦復是の如く四園の名有り、云何が四と爲すや、一には慈園、二には悲園、三には喜園、四には護園、是れを比丘、如來の正法中に、此の四園有りと謂ふなり。復何を以ての故に名けて慈園と爲すや、比丘當に知るべし、此の慈園に由つて梵天上に生じ、梵天より終つて當に豪貴の家に生るべし、饒財多寶にして、恒に五樂有り、自ら娛しみ、未だ曾て目を離さず。是れを以ての故に名けて慈園と爲すなり。復何を以ての故に名けて悲園と爲すや、比丘當に知るべし、若し能く悲解脫心に親近せば、梵光音天に生れ、若し人中に來生せば、豪族の家に生れて瞋恚有ること無く、亦饒財多寶なり。故に名けて悲園と爲す。復何を以ての故に名けて喜園と爲すや、若し能く喜園に親近する者は光音天に生れ、若し人間に來生せば、國王の家に生れ、恒に歡喜を懷く、故に名けて喜園と爲すなり。復何を以ての故に名けて護園と爲すや、若し人有つて護に親近する者

苦惱を脱すればなり。此れは是れ苦の元本なり。是の故に諸比丘、當に方便を求めて、此の四法を成ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「三十三天に四の園觀有り、諸天中に於て自ら娛樂し、五樂自ら娛しむ。云何が四と爲すや。難檀槃那園觀、麁澁園觀、晝夜園觀、雜種園觀なり。然して此四園の內に四の浴池及び冷浴池、香味浴池、輕便浴池、淸徹浴池有り。云何が四と爲すや、一には難陀浴池と名け、二に難陀頂浴池と名け、三に蘇摩浴池と名け。四に歡悅浴池と名く。比丘當に知るべし。四園の內に此の四の浴池有りて、人をして身體香潔、塵垢有ること無から令む。何を以ての故に、名けて難檀槃那園と爲すや。若し三十三天、難檀槃那園に入り已れば、心性喜悅にして自ら勝ふる能はず、中に於て自ら娛樂す。故に名けて難檀槃那園と爲すなり。復何を以ての故に、名けて麁澁園觀と爲すや、若し三十三天此の園中に入り已れば、身體極めて麁にして、猶し冬の時、香を以て身に塗るに、身體極めて麁なるが如し。此れも亦是の如く、若し三十三天此の園中に入り已れば、身體極めて麁にして、常と同じからず。是れを以ての故に、名けて麁澁園觀と爲すなり。復何を以ての故に名けて晝夜の園と爲すや。若し三十三天此の園中に入り已れば、爾の時諸天の顏色各ゝ異り、若干種の形體を作すこと、猶し婦女の種々の衣裳を著くれば、本の形と同じからざるが如し。此れも亦是の如く、若し三十三天、此の園中に入り已れば、若干種の色を作し、本と同じからず。是れを以ての故に、名けて晝夜の園と爲すなり。復何を以ての故に、名けて雜種の園と爲すや。爾の時最尊の天及び中天・下天、此の園中に入り已れば、皆同一類なり。設し復最下の天の、餘の三園の中に入ることを得ざること、

じ、久しく世に存す。然る所以は、樂を以て樂を求むべからず。苦に由つて然る後に道を成ぜばなり。是の故に諸比丘、恒に方便を以て此の行跡を成ぜよ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[三〇] 聞くこと是の如し、一時佛、羅閲城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時四の梵志皆五通を得て、善法を修行し、普く一處に集り、是の論議を作さく、「此の伺命來る時豪强を避けず、各〻共に隱藏し、伺命をして來る處を知らざらしめん」と。爾の時一梵志、空中に飛在して、死を免るゝを得んと欲す、然も其の死を免れず、卽ち空中に在つて命終す。第二の梵志復大海水の底に入り、死を免るゝを得んと欲するも、卽ち彼に於て命終す。彼の第三の梵志、死を免るゝを得んと欲し、須彌山腹の中に入り、復中に於て死す。彼の第四の梵志地に入り、金剛際に至り、死を免るゝを得んと欲するも、復卽ち彼に命終せり。爾の時世尊、天眼を以て、四梵志の各〻死を避けんとして、普く共に命終せしを觀見したまひ、爾の時世尊、便ち此の偈を説きたまはく、

　空に非ず海中に非ず　山石の間に入るに非ず　地の方所有ること無し　之を脫せば死を受けず

と、爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「是に於て比丘、梵志四人有つて一處に集在し、死を免るを得んと欲し、各〻所奔に歸するが故に死を免れず。一人空に在り、一人海水に入り、一人山腹の中に入り、一人地に入り、皆共に同じく死せり。是の故に諸比丘、死を免るゝを得んと欲せば、當に四法の本を思惟すべし。云何が四と爲すや、一切行無常。是れを初法本と謂ひ、當に念じて修行すべし。一切行苦、是れを第二の法本と謂ひ、當に共に思惟すべし。一切法無我。此れ第三の法本にして、當に共に思惟すべし。滅盡を涅槃と爲す。是れを第四の法本と謂ひ、當に共に思惟すべし。是の如く諸比丘、當に共に此の四の法本を思惟すべし。然る所以は、便ち生・老・病・死・愁・憂・

【三〇】 Dhp. V. 123 の頌。

行しぬ。

三

[一三]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、[一四]「四事の行跡有り、云何が四と爲すや、[一五]樂行跡有りて所行愚惑なり、此れを初行跡と名く。復[一六]樂行跡有りて所行速疾なり。復[一七]苦行跡有りて所行愚惑なり。復[一八]苦行跡有りて所行速疾なり。彼云何が名けて樂行跡にして所行愚惑と爲すや。或は一人有り、貪欲熾盛、瞋意・愚癡熾盛なり、所行甚だ苦にして行本と相應せず。彼の人[一九]五根愚闇にして亦捷疾ならず、云何が五と爲すや、所謂信根・精進根・念根・慧根・定根なり。若し愚なる意を以て三昧を求め、有漏を盡す者、是れを名けて樂行跡にして鈍根の得道者と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて樂根行跡速疾と爲すや。或は一人有つて欲無く、婬無く、然も貪欲に於て、恒に自ら偏少にして慇懃ならず、爲に瞋恚愚癡極めて爲に減少し、五根捷疾にして放逸有ること無し。云何が五と爲すや、所謂信根・精進根・念根・定根・慧根、是れを五根と謂ふなり。然して五根を得て三昧を成じ、有漏を盡して無漏と成ず、是れを名けて利根にして道跡を行ずと爲すと謂ふなり。彼云何が名けて苦行跡愚惑を行ずと爲すや。或は一人有つて、婬意偏へに多く、瞋恚愚癡熾盛なり。彼此の法を以て自ら娛樂し、有漏を盡くして無漏を行ず。是れを名けて、苦行跡鈍根者と爲すと謂ふなり。云何が苦行跡速疾を行ずるや、是に於て或は一人有り、少欲少淫にして、瞋恚有ること無く、亦想を起して此の三法を行ぜず。爾の時此の五根有りて缺漏有ること無し。云何が五と爲すや、所謂信根・精進根・念根・定根・慧根、是れを五と爲すと謂ふなり。彼此の法を以て三昧を得、有漏を盡くして無漏を成ず。是れを苦行跡利根の者と謂ふなり、是れを比丘此の四行跡有りと謂ひ、當に方便を求めて、前の三行跡を捨つべし。後の一行は、當に共に奉行すべし。然る所以は苦行跡三昧は得難し、已に得れば便ち道を成

【一三】 A. IV. 162 別譯に、佛說婆羅門避死經一卷後漢安世高譯あり。
【一四】 四事の行跡 (Catasso paṭipadā) は、又四道跡、四通行ともいひ、涅槃に到達する無漏道を四種に分けしもの。
【一五】 樂行跡有りて所行愚惑とは、樂遲通行 (Sukhāpaṭipadā dandhābhiññā) のこと。
【一六】 樂行跡有りて所行速疾とは、樂速通行 (Sukhāpaṭipadā khippābhiññā) のこと。
【一七】 苦行跡有りて所行愚惑のものとは、苦遲通行(Dukkhāpaṭipadā dandhābhiññā)のこと。
【一八】 苦行跡有りて所行速疾とは、苦速通行(Dukkhāpaṭipadā khippābhiññā)のこと。
【一九】 五根とは、信・勤・念・定・慧の五根、證悟の道具となるもの、前に出づ。

し瞋恚盛んならば、慈心を以て之を除き、愚癡の闇は[三]十二緣法を以て、然る後に除盡す。比丘何故に優塡王の與に說法せざりしや、設し當に與に說法せば、王は極めて歡喜せしならん、正使極盛の火も猶之を滅すべし。何に況んや人をや」と。爾の時彼の比丘默然として語らず。爾の時佛、比丘に告げたまはく、「如來は世に處ること甚奇甚特なり、設ひ天・龍・鬼神・乾沓和にして、如來に義を問うとも、吾當に與に之を說くべし。若し國王・大臣・人民の類にして如來に義を問はゞ亦當に與に之を說くべし。若し刹利四姓來りて義を問はゞ亦當に與に之を說くべし。然る所以は、今日如來は四無所畏を得たれば、說法するに怯弱有ること無く、亦四禪を得たれば、中に於て自在にして、兼ねて四神足を得て稱計すべからず、四等心を行ず、是の故に如來は說法するに怯弱有ること無く、羅漢辟支佛の能く及ぶ所に非るなり。是の故に如來は說法するに亦難きこと有ること無し。汝今諸比丘、當に方便を求めて四等心・慈・悲・喜・護を行ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし。然る所以は、若し比丘の衆生善知識と爲り及び一切の父母知親に遇はゞ盡く四事を以て敎へて法を知ら令むべし。云何が四と爲すや、一には當に佛を恭敬すべし。是の時の如來とは、至眞・等正覺・明行成・善逝と爲し、世間解・無上士・道法御・天人師・佛・衆祐と號し、人を度すること無量なり。當に法を求むべし。正眞の法を修行して穢惡の行を除く、此れは是れ智者の修行する所なり。復當に方便して衆僧を供養すべし。如來の衆とは、恒に共に和合して諍訟有ること無く、法法成就し、戒成就し、三昧成就し、智慧成就し、解脫成就し、解脫智見成就す。所謂四双八輩、十二賢士、此れは是れ、如來の聖衆にして、尊むべく、貴ぶべく、世間の無上の福田なり。復當に勸助して賢聖の法と律・無染・無汚・寂靜・無爲を行ぜしむべし。若し比丘有つて道を行ぜんと欲せば、普く共に此の四事の法を行ぜよ、然る所以は、法の三尊を恭敬するは最尊最上にして、能く及ぶ者無し。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘佛の所說を聞いて歡喜奉

【三】十二緣法は、又十二緣起、十二因緣ともいひ、現實の老死は何故に存するやと、與へられし事實より出發して、その然る所以を見出さんとしての根源に無明の根本煩惱を發見するものにして、その系列の樣式に十二をとりしもの。即ち無明・行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死。後に出づ。

に王に語げて曰く、「唯願はくは大王、此の比丘を觀よ、大神足有つて、今虚空に在つて踊沒自在なり。今此の比丘尙此の力有り、何に況んや釋迦文佛に及ぶべけんや」と。

是の時彼の比丘、瞿師園中に到り、還えつて神足を捨て、常凡の法を以て世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時世尊、比丘に問ひて曰はく、「云何が比丘、舍衞城に在つて夏坐を勞めしや、時に隨つて乞食して亦惓まざりしや」と。比丘曰さく、「我舍衞城に在つて、實に惓む所無かりき」と。佛比丘に語げたまはく、「今日何故に此の間に來至せしや」と。比丘、佛に白さく。「故に來つて世尊を觀、起居を問訊しまつらんとなり」と。世尊告げて曰はく、「汝今我を見、及び此の四佛の住處を見るや。汝今王を脫れることを得るや。甚だ大奇爲り、汝何が爲に王の與に說法せざりしや、又復優塡王是の言を作せり『比丘、今當に我與に法を說くべし、汝今何故に我爲に法を說かざるや』と。若し比丘にして王の與に法を說くべくんば、優塡王極めて歡喜を懷き、已に歡喜有れば、其の形壽を盡くして、衣被・飮食・床敷・臥具・病瘦の醫藥を供養せんに」と、是の時比丘、佛に白して言さく、「時に王は禪中、間事を問はんと欲せり、是の故に此の義を報へざりし耳」と。世尊告げて曰はく、「汝比丘、何故に王の與に禪中間事を說かざりしや」と。比丘報へて曰さく、「優塡王は此の禪を用つて本と爲し、凶暴を懷き、慈心有ること無く、衆生を殺害すること稱計すべからず。欲と相應し、三毒熾盛にして深淵に沒在して正法を覩ず、習惑無知にして、諸惡普く集り、憍慢を行じ、王の力勢に依つて財寶を貪著し、世人を輕慢し、盲ひにして眼有ること無し。此の人復禪を用ふると爲んや、夫れ禪定の法は諸法中の妙にして、覺知すべきこと難く、形相有ること無く、心の測る所に非らず。此れ常人の及ぶ所に非らず、乃ち是れ智者の知る所なり。是の故を以て、王の與に法を說かざりしなり」と。是の時世尊、告げて曰はく、「若し朽故の衣有らば、要らず之を浣ひ、乃ち淨む須し、極盛の欲心は、要らず不淨の想を觀じ、然る後に乃ち除くべし。若

に在りて坐するを見、見已つて比丘の前に往至し、頭面に足を禮し、前に在つて叉手して住す。及び五百の夫人皆悉く頭面に足を禮し、亦復叉手して之を圍遶す。爾の時優塡王、遙に五百の女人、叉手して此の比丘を遶つて住するを見、見已つて便ち是の念を作さく、「此の中に必ず當に群鹿有るべし。若しくは當に雜獸有るべし。必ず然り、疑はじ」と。爾の時王、馬に乘り、急走して女人の聚中に往詣す。是の時舍彌夫人、遙に王の來るを見、便ち是の念を作さく、「此の優塡王は極めて凶惡爲に備はる、能く此の比丘を取つて之を害せん」と。是の時夫人、右手を擧げて王に白して曰さく、「大王、當に知るべし。此れは是れ比丘なり、復驚怖すること勿れ」と。是の時王、卽ち馬を下りて弓を捨て、比丘の所に來至し、比丘に謂ひて言く、「比丘、我與に法を說け」と。是の時彼の比丘卽ち眼を擧げて王を仰ぎ觀、默然として語らず。爾の時王復比丘に語げて曰く、「速に我與に法を說け」と。爾の時比丘復眼を擧げて王を仰ぎ、觀已つて默然として語らず。是の時王復是の念を作さく、「我今禪中間事を問うべし、若し我與に說くべくんば、當に之を供養し、其の形壽を盡して衣被・飮食・床敷・臥具・病瘦の醫藥を施すべし。設し我與に法を說かずば、當に之を取りて殺すべし」と。爾の時王復比丘に語りて言く、「比丘、我與に法を說け」と。爾の時彼の比丘亦默然として對へず。爾の時樹神卽ち其の心を知り、便ち遙に鹿群を化作し、王の耳目を亂して、異想を起さしめんと欲す。是の時王遙に鹿を見已つて便ち是の念を作さく、「今且く此の沙門を捨てん、沙門は竟に何ぞ所至に湊くべけん」と、卽ち馬に乘り、往いて群鹿を射る。是の時夫人、道人に白して曰さく、「比丘、今所詣を爲すや」と。比丘曰く、「四佛の住處に至り、往いて世尊を觀んと欲す」と。夫人白して言さく、「比丘今正に是れ時なり、速に所在に往け、復此に住まること勿れ、王の爲に害せらるれば、王を罪すること甚だ重し」と。是の時彼の比丘卽ち座より起ち、衣鉢を收攝し、虛空を飛在して遠く逝いて去る。是の時夫人、道人の虛空の中に在つて、高く飛んで去りしを見、便ち遙

畏を得、漏心を盡すことを得、亦此の苦を知り、如實にして虚ならず。亦爾の時に當つて此の心を得し時、欲漏・有漏・無明漏より、心解脱を得、已に解脱を得て便ち解脱智を得、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復受胎せず、實の如く之を知りぬ。是れを梵志、我[八]後夜の時、[九]第三明を得、復闇冥無しと謂ふなり云何が梵志、頗は此の心有りや『如來は欲心・瞋恚心・愚心有つて、未だ盡きずして閑居の處に在り』と。梵志、是の觀を作すこと莫かれ、然る所以は、如來は今日諸漏永く除き、恒に閑居を樂しみ、人間に在らず、然して我今日、此の義を觀じ已つて、閑居の處を樂しむ。云何が二と爲すや、又自ら閑居の處に遊び、兼ねて衆生を度すること稱計すべからず」と。爾の時生漏梵志、佛に白して言さく、「衆生の爲に一切を愍度し給ふを以てなり」と。梵志復佛に白して言さく、「止みなん、止みなん、世尊、說き給ふ所多きに過ぎたり。猶し僂者の伸びることを得、迷へる者の道を得、盲者の眼目を得、闇に在つて明を見るが如し。是の如く沙門瞿曇は、無數に方便して爲に法を說き給ひぬ。我今佛・法・衆に歸しまつり、今より以後、五戒を受持して、復殺生せず、優婆塞と爲らん」と。爾の時生漏梵志、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し、一時佛、[一〇]拘深瞿師園中に在しき。是れ過去の四佛の所居の處なり。爾の時[一一]王優塡及び五百の女人、舍彌夫人等、園觀に詣つて遊戲せんと欲す。爾の時に當り、舍衞城中に一比丘有つて便ち是の念を作さく、「世尊と別るゝこと久し、往いて禮敬し、承受し、問訊せんと欲す」と。爾の時彼の比丘、時到り、衣を著け、鉢を持し、舍衞城に入つて乞食し、食して後衣鉢・座具を除去し、又神足を以て虚空に飛在し、拘深園中に往詣す。爾の時彼の比丘、還えつて神足を捨てゝ、林中に往詣し、一閑靜の處に在りて結跏趺坐し、正身正意に繫念して前に在り。爾の時舍彌夫人、五百の女人等を將ひて此の林に往到す。是の時舍彌夫人、遙に比丘、道に神足を以て樹下

【八】後夜とは、午前四時。

【九】第三明とは、三明中の漏盡智作證明（Āsavakkhaya ñāṇa vijjā）。にして、有漏の滅盡を知る明。

【一〇】拘深瞿師園。前出。

【一一】優塡王(Udena)。拘睒彌の王。

若し一心に、貪欲の想無く、有覺有觀、喜樂を念持して初禪に遊ぶ、是れを梵志是れ我初心、現法中に於て自ら娛樂すと謂ふなり。若し有覺有觀の內に歡喜有つて、兼ねて一心有るを除き、無覺無觀の定念喜安二禪に遊ぶ、是れを梵志第二の心、現法中に於て歡樂を得と謂ふなり。我自ら觀知して、內に念欲無く、身に快樂を覺え、諸の賢聖の希望する所の、護念歡樂の三禪に遊ぶ。是れを梵志、第三の心と謂ふなり。若し復苦樂已に除き、復憂喜無く、苦無く、樂無き護念清淨の四禪に遊ぶ。是れを梵志、第四の增上の心と謂ひ、自ら覺知して心意に遊ぶ。我閑居に在るの時に當り、此の四の增上の心有り、我此の三昧の心、清淨にして瑕穢無く、亦結使無く、無所畏を得、自ら宿命無數劫の事を識る。爾の時我宿命の事を憶す、一生・二生・三生・四生・五生・十生・二十・三十・四十・五十・百生・千生、成敗の劫皆悉く分別し。『我曾て彼に生れ、字は某、名は某、是の如きの食を食し、是の如きの苦樂を受けぬ。彼より終つて此の間に生れ、此に死して彼に生る』と、因緣の本末皆悉く明に了る。梵志當に知るべし。[四]我初夜の時[五]初明を得て、其の無明を除き、復闇冥無く、心閑居を樂しみて、自ら覺知し、復三昧心を以て瑕穢無く、亦結使無く、心意定に在つて無所畏を得、復衆生の生者死者を知る。我復天眼を以て衆生の類を觀じ、生者・死者・善色・惡色・善趣・惡趣・若しは好、若しは醜、行ひの善惡に隨つて皆悉く分別す。諸有の衆生にして、身に惡を行じ、口に惡を行じ、意に惡を行じ、賢聖を誹謗し、恒に邪見を懷き、邪見と與に相應せば身壞命終して地獄の中に生ず。諸有の衆生にして、身に善行を行ひ、口に善行を修め、意に善行を修め、賢聖を誹謗せず、恒に正見を修め、正見と相應せば、身壞命終して善處天上に生る。復天眼清淨にして瑕穢無きを以て、衆生の類を觀ずるに、生者・死者・善色・惡色・善趣・惡趣・若しは好、若しは醜、其の行本に隨つて皆悉く之を知る。梵志當に知るべし、若し[六]中夜の時[七]第二明を得て、復闇冥無くして自ら覺知し、閑居を樂しみ、我復三昧心の清淨にして瑕穢無きを以て、亦結使無く、心意に定を得て無所

【四】初夜とは、午後八時。
【五】初明とは、三明（Tis'o vijja）。中の宿命明（Pubba-nivāsānussati-ñāṇa vijja）のこと。卽ち具さには宿住隨念智作證明過去の境遇を憶念して知るの明。明とは智慧のこと。三明はもと、三吠陀を通曉する義に用ひられしもの。
【六】中夜、夜半の十二時。
【七】第二明とは、三明中の死生智作證明（Cutūpapāta-ñāṇa vijja）のことにして、天眼によつて有情の生死を知る明。

『諸有の沙門婆羅門は諸の忘失多く、閑處に居在し、此の行有りと雖も、猶惡不善の法有り。然るに我今日、諸の忘失有ること無し。設し復梵志、忘失の人有らば、彼我有に非ず、諸有の賢聖の忘失せざる者、我は最も上首爲り』と。我今此の義を觀じ已つて、閑居處に在つて、倍す歡喜を增す。爾の時我復是の念を作さく『諸有の沙門婆羅門は意亂れて定まらず、彼便ち惡不善の法有り、惡行と共に幷す。然るに我今日意終に亂れず、恒に若し一心なり。諸有の意を亂し、心定らざる者は彼我有に非ず。然る所以は、我恒に一心なればなり。設し賢聖有りて心一定の者に、我は最も上首なり』と。我今此の義を觀じ已つて、閑靜の處に居ると雖も、倍す歡喜を增せり。我爾の時復是の念を作さく『諸有の沙門婆羅門は愚癡闇冥なること、亦群羊の如し。彼の人便ち惡不善の法有れば、彼我有に非ず、然るに我今日恒に智慧有り、愚癡有ること無く、閑居に處在す。設し此の如きの行有らば、彼是れ我有なり、我今智慧成就す。諸有の賢聖智慧成就する者、我最も上首爲り』と、我今此の義を觀じ已り、閑居に在りと雖も、倍す歡喜を增す。我閑居の中に在るに當り、時に設し樹木摧折し、鳥獸馳走せしめば、爾の時我是の念を作す『此れは是れ大畏の林なり』と。爾の時復是の念を作さく『設し畏怖をして來らしめば、當に方便を求めて復來ら使めざるべし。若し我經行して、畏怖の來ること有らば、爾の時我亦坐臥せず、要らず畏怖を除き、然る後に乃ち坐せん。設し我住する時、畏怖の來ること有らば、爾の時我も亦經行せず、亦復坐せず、要らず其の畏怖を除かしめ、然る後に乃ち坐せん。設し我坐する時畏怖の來ること有らば、爾の時我經行せず、要らず畏怖を除き、然る後に乃ち行かん。若し我臥する時畏怖の來ること有らば、爾の時我亦經行せず、亦復坐せず、要らず其の畏怖を除かしめ、然る後に乃ち坐せん』と。梵志當に知るべし、諸有の沙門婆羅門、日夜の中、道法を解らざるもの、我今說いて彼の人を、極めて愚惑と爲す。然るに我梵志、日夜の中、道法を解り、加ふるに勇猛の心有りて亦虛妄ならず、意錯亂せず、恒に

『諸有の沙門婆羅門は意行清淨ならず、命清淨ならずして、閑居無人の處に親近す。彼此の行有りと雖も、猶眞正ならず。惡不善の法彼皆悉く備具れり。此れ我有に非ず』と。然る所以は、我今の所行、身・口・意・命清淨なればなり。沙門婆羅門有りて、身・口・意・命清淨にして、樂しみて閑居清淨の處に在れば、彼則ち我所有なり。然る所以は、我今の所行、身・口・意・命清淨に、諸有の阿羅漢の身口意命の清淨なる者樂しみて閑靜の處に在りて、我最もその上首爲り。是の如く婆羅門、當に我身口意命を清淨にすべし。閑靜の處に在る時、倍す喜悅を增さん。爾の時我便ち是の念を作さく『是れを沙門婆羅門の畏懼する所多くして、閑靜の處に處在すと謂ひ、爾の時便ち惡不善の法を畏懼す。然るに我今日永く畏るゝ所無く、無人閑靜の處に在り。謂く諸の沙門婆羅門、畏懼の心有つて閑靜處に在る者、彼我有に非ず。然る所以は、我今永く畏懼無く、閑靜の處に在つて自ら遊戲すればなり。諸の畏懼の心有つて閑居に在る者、此れ我有に非ず。然る所以は、我今已に苦患を離れ、此れと同じからざればなり』と、是の如く婆羅門、我此の義を觀じ已り、恐怖有ること無く、喜悅を增せり。『諸有の沙門婆羅門にして、彼を毀り、自ら譽め、閑居の處に在りと雖も、猶不淨の想ひ有り、然るに我梵志、亦他を毀るに非ず、復自ら譽むるに非ず、諸の自ら歎え、復他を毀ること有る者、此れ我有に非ず、然る所以は、我今慢有ること無きが故に、諸の賢聖の慢有ること無き者（の中）、我は最も上首爲り』と、我此の義を觀じ已つて、倍す復喜悅す。『諸有の沙門は利養を求めて自ら休むこと能はず。然るに我今日利養の求むること有ること無し。然る所以は、我今人を求むること無く、自ら足るを知ればなり。然れば我知足の中に、我は最も上首爲り。我此の義を觀じ已つて倍す復歡喜す。『諸有の沙門婆羅門は心に懈怠を懷き、勤めて精進せずして、閑靜の處に親近するも、彼我有に非ず。然る所以は、我今勇猛の心有るが故に、中に懈惓せず、諸の賢聖の勇猛の心有る者に、我は最も上首爲り』と、我自ら此の義を觀じ已つて倍す歡喜を增す。我爾の時復是の念を作さく、

【三】命清淨の命は、行業の意。

巻の第二十三

増上品第三十一

一

[一]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時[二]生漏婆羅門、世尊の所に往至し、共に相問訊し、一面に在りて座す。爾の時婆羅門世尊に白して曰さく、「閑居穴處に在ること甚だ苦爲る哉、獨處隻歩用心甚だ難し」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、梵志、汝の言ふ所の如く、閑居穴處は甚だ苦爲る哉、獨處隻歩用心甚だ難し。然る所以は、我曩昔、未だ佛道を成ぜざりし時、菩薩の行を爲し、恒に是の念を作さく、『閑靜穴處に在るは苦爲る哉、獨處隻歩用心甚だ難し』と」。婆羅門佛に白して言さく、「族姓子有りて、信堅固を以て出家學道せしが若きに、今沙門瞿曇は最も上首爲り、饒益する所多く、彼の萠類の爲に奬導を作したまふ」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、婆羅門、汝の言ふ所の如し、諸有の族姓子、信堅固を以て出家學道し、我は最も上首爲り。饒益する所多く、彼の萠類の與に奬導を作す。設し彼我を見れば、皆慚愧を起し、山澤中の閑靜穴處に詣らん。我爾の時便ち是の念を作さく、『諸有の沙門婆羅門は、身に不淨を行ず、閑居無人の處に親近するも、身に不淨を行ぜば唐に其の功を勞するのみ。是れ眞行にあらざれば、惡不善の法を畏るゝなり』。然るに我今日、身行不淨を爲して、閑居の處に親近するに非ず。諸有の身行不淨にして閑靜の處に親近する者は、此れ我の所有に非ず、然る所以は、我今身行清淨にして、諸の阿羅漢の身行清淨なる者、閑居穴處を樂しみ、我最も上首爲ればなり。是の如く婆羅門、我自ら身を觀じ、所行清淨にして、閑居の處を樂しみ、倍す復喜悅す。我爾の時便ち是の念を作さく、

【一】M. 4 Bhayabherava S.
【二】生漏婆羅門(Jāṇussoṇi)。

は是れ其の義なり。當に念じて奉行すべし。然る所以は、此の四事とは最も是れ福田なり。若し比丘有つて、四事に親近せば、便ち四諦を獲ん。當に方便を求めて四事の法を成ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

增壹阿含經卷第二十二

と。爾の時世尊、以て法を說き訖り、卽ち座より起ち、還えつて所在に詣りたまひぬ。是の時諸比丘、佛に白して言さく「須摩提女は本、何の因緣を作して富貴の家に生れ、復何の因緣を作して、此の邪見の家に墮し、復何の善功德を作して今法眼淨を得、復何の功德を作して八萬四千の人をして皆法眼淨を得せしめしや」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく「過去久遠、此の賢劫中に、迦葉佛・明行成・善逝と爲し、世間解・無上士・道法御・天人師・佛衆祐と號する有つて、波羅㮈國界に在し、中に於て遊化し、大比丘衆二萬人と俱なりき。爾の時王有り、名けて哀愍と曰ひ、女有り、須摩那と名く、是の時此の女、極めて敬ひの心有り、迦葉如來に向つて禁戒を奉持し、恒に布施を好み、又[二六]四事供養せり。云何が四と爲すや。一には施、二には愛敬、三には利人、四には等利なり。迦葉如來の所に於て法句を誦し、高樓上に在つて、高聲にて誦習し、並に此の願を作さく『恒に此の四受の法有り、又如來の前に於て法句を誦し、其の中設し毫釐の福有らば、所生の處は三惡趣に墮せず、亦貧家に墮すること莫く、當來の世にも亦當に復、此の如きの尊に値ふべし。我をして女人の身を轉ずること莫く、法眼淨を得せしめたまへ』と。是の時城中の人民の類、王女の此の如きの誓願を作すを聞き、皆共に聚集り、王女の所に至つて是の說を作さく、『王女は今日極めて篤く信を爲し、諸の功德を作し、四事乏しからず、布施・兼愛・利人・等利なり。復誓願を作して、當來の世に此の如きの尊に値は使め、若し我爲に法を說き、尋いで法眼淨を得せしめたまへ」と。今日王女は以て願誓を作す、并せて及び我等國土の人民同時に得度せん』と。爾の時王女報へて曰く、『我此の功德を持して、并せて汝等に施さん、設し如來の說法に値はゞ、同時に得度せん』と。汝等比丘、豈疑ひ有らんや、是の觀を作すこと莫かれ、爾の時の哀愍王とは今の須達長者是れなり。爾の時の王女とは今の須摩提女是れなり。爾の時の國土の人民の類とは、今の八萬四千の衆是れなり。彼の誓願に由つて今我身に値ふて法を聞き、道を得、及び彼の人民の類盡く法眼淨を得たり。此れ

【二六】四事とは、四攝事(Cattāri saṅgaha vatthūni)のこと。人の心を攝むる法にして
一、施(Dāna)。
二、愛敬(Peyyavajja)。愛語ともいふ。
三、利人(atthacariyā)。利行ともいひ、他人の利益をはかること。
四、等利(Samānattatā)。又同事ともいひ。他人と事を共にすること。

縁を作り　此處に來至することを得しや　鳥の羅網に入るが如く　願はくは此の疑結を斷ちたまへ

と。爾の時世尊、復偈を以て女に報へて曰はく、

汝今快く慮る勿れ　悕怕にして自ら意を開かん　亦想著を起すこと莫かれ　如來は今當に演ぶべし　汝本罪の縁無くして　此の間に來至するを得たり　願ひと誓ひとの果報　此の衆生を度せんと欲す　今當に根原を拔き　三悪趣に墮せざるべし　數千の衆生の類　汝前んで得度すべし　今日當に淨除し　智慧の明を得しめ　天人民の類をして　汝を見ること珠を觀るが如からしむべし

と。是の時須摩提女、此の語を聞き已つて、歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず。是の時長者、己の僕從を將ひて、飲食種々の甘饌を供給し、世尊の食し已訖るを見、清淨水を行き、更に一小座を取り、如來の前に在つて坐す。及び諸の營從及び八萬四千の衆、各ゝ次第して坐し、或は自ら姓名を稱して坐する有り。爾の時世尊、漸く彼の長者及び八萬四千の人民の類の與に、妙論を說きたまふ、所謂論とは戒論・施論・生天の論・欲は不淨想・漏は穢悪爲り、出家を要と爲すと。爾の時世尊、以て長者及び須摩提女、八萬四千の人民の類、心開け、意解するを見、諸佛世尊の常に說きたまふ所の法、苦・集・盡・道なり、普く此の衆生の與に之を說きたまひ、彼各ゝ座上に於て、諸の塵垢盡きて法眼淨を得、猶し極淨の白氎の染むるに色を爲し易きが如し、此れも亦是の如く、滿財長者、須摩提女、及び八萬四千の人民の類、諸の塵垢盡きて法眼淨を得、復狐疑すること無く、無所畏を得、皆自ら三尊に歸し、五戒を受持せり。是の時須摩提女、卽ち佛前に於て此の偈を說けり。

如來の耳は清徹なり　我此の苦に遇ふを聞きたまひ　神を降して此に至り化し　諸人は法眼を得たり

まつる」と。是の時六千の梵志、世尊の此の如き神變を作したまふを見、各〻自ら相謂ひて言く、「我等此の國を離れて、更に他土に適くべし。此の沙門瞿曇は以て此の國中の人民を降せり」と。是の時六千の梵志尋いで國を出でゝ去り、更に復國に入らず。猶し師子獸王の山谷を出でゝ四方を観、復三たび鳴吼して方に求むる所に行けば、諸有の獸虫の類、各所趣に奔り、如く所を知ること莫く、飛び逝き沈伏し、若し復た有力の神象、師子の聲を聞き、各〻所趣に奔つて、自ら安ずることと能はざるが如し。然る所以は、師子獸王は極めて、威神有るに由るが故に、此れも亦是の如し。彼の六千の梵志、世尊の音響の聲を聞き、各〻馳走して自ら寧んずることを得ず、然る所以は、沙門瞿曇に大威力有るに由るが故に。是の時世尊、還えつて神足を捨て、常の法則の如く、滿富城の中に入りたまふ。是の時世尊の足、門の閾の上を踏みたまふや、是の時天地大に動き、諸尊神天華を散じて供養す。是の時人民、世尊の容貌、諸根寂靜にして三十二相八十種好有つて、自ら莊嚴するを見、人民の類便ち此の偈を説く、

〔一五〕二足尊は極妙なり　梵志敢て當らず　故なくして梵志に事ふれば　此の人中の尊を失はん

と。是の時世尊、長者の家に往詣し、座に就いて坐したまふ。爾の時彼の國の人民極めて熾盛なり。時に長者の家に八萬四千の人民の類有り、皆悉く雲集して、長者の房舍を壞せんと欲し、世尊及び比丘僧を見る。爾の時世尊、便ち是の念を作したまはく、「此の人民の類、必ず所損有り、神力を作して、擧國の人民をして、盡く我身及び比丘僧を見せしむべし」と。爾の時世尊、長者の屋舍を化して琉璃色と作し、内外相見ること掌中の珠を觀るに如似たり。爾の時須摩提女、前んで世尊の所に至り、頭面に足を禮し、悲喜交〻集り、便ち此の偈を作さく、

一切の智慧具りて　盡く一切の法を度し　復欲愛の結を斷ちたまふ　我今自ら歸しまつる　寧んぞ我父母をして　我雙目を毀らしめん　來つて此の間　邪見五逆の中に適かじ　宿に何の悪

【一五】二足尊とは、佛の尊號、人中の最尊なるが故に此の名あり。

と。是の時滿財長者、遙に世尊の遠くより來りたまひ、諸根恬怕にして世の希有なり、淨きこと天金の如く、三十二相八十種好有りて其の身を莊嚴し、須彌山の衆山の上に出づるが猶く、亦金聚の如く大光明を放つを見る。是の時長者、偈を以て須摩提に問うて曰く、

此れは是れ日光なるや　未だ曾て此の容を見ず　數千萬億の光　未だ敢えて能く熟視せざるなり

と。是の時須摩提女、長跪叉手して如來に向ひ、此の偈を以て長者に報へて曰く、

日に非ず日ならざるに非ず　而して千種の光りを放つ　一切衆生の爲に　亦復是れ我師なり

皆共に如來を歎ずること　前の說く所の如し　今當に大果を獲べし　勤め加へて之を供養せよ

と。是の時滿財長者、右膝を地に著け、復偈を以て如來を歎じて曰さく、

自ら十力尊に歸しまつる　圓光金色の體　天人の歎び敬ふ所なり　今日自ら歸命しまつる　尊今是れ日の王　月星中の明の如く　以て度せざる者を度す　今日自ら歸命しまつる　尊は天帝の像の如く　梵行慈心の如く　自ら脫し衆生を脫せしめたまふ　今日自ら歸命しまつる　天世人中の尊　諸鬼神王の上は　諸の外道を降伏したまふ　今日自ら歸命しまつる

と。是の時須摩提女、長跪叉手して、世尊を歎じて曰さく、

自ら降し能く他を降し　自ら正し能く人を正し　以て度し人民を度し　已に解り復人を脫せしめたまふ　垢を度し垢を度せしめ　自ら照らし群萠を照らし　度すること有らざる者は靡く鬪を除き鬪訟すること無し　極めて自ら淨潔にして住し　心意傾動せず　[一四]十力世を哀愍したまふ　重ねて自ら頂禮し敬ひまつる

慈・悲・喜・護の心有つて、空無相の願を具し、欲界中に於ける最尊第一、天中の上にして、七財具足し、諸の天人を擁護し自然に梵生じ、亦與に等しもの無く、亦貌を像るべからず、我今自ら歸命し

【一四】十力とは、佛の尊號。

執り、千二百の弟子前後に圍繞し、如來は最も中央に在り、及び諸の神足の弟子、阿若拘隣は月天子を化作し、舍利弗は日天子を化作し、諸餘の神足の比丘、或は釋提桓因を化作し、或は梵天を化作する者、或は提頭賴吒、毘留勒の形の者、毘留博叉を化作する有り、或は毘沙門の形を作す者諸の鬼神を領し、或は轉輪聖王の形を作す者有り。或は火光三昧に入る有り、或は水精三昧に入る有り、或は光を放つ者有り、或は煙を放つ者有りて種々の神足を作す。是の時梵天王、如來の右に在り、釋提桓因如來の左に在りて手に拂を執り、[二]密迹金剛力士、如來の後に在つて手に金剛杵を執り、毘沙門天王、手に七寶の蓋を執つて虚空中に處り、如來の上に在つて、塵土有つて如來の身を坋すことを恐る。是の時[三]般遮旬手に琉璃の琴を執つて如來の功德を歎じ、及び諸天神悉く虚空の中に在つて倡伎樂を作すこと數千萬種なり。天の雜華を雨らして如來の上に散ず。是の時波斯匿王、阿那邠邸長者、及び舍衞城内の人民の類、皆如來の虚空の中に在つて、地を去ること七仞なるを見、見已つて皆歡喜を懐き、踊躍して自ら勝ふること能はず、是の時阿那邠邸長者、便ち此の偈を說く、

如來は實に神妙なり　民を愛すること赤子の如し、快い哉須摩提　當に如來の法を受くべし

と。爾の時波斯匿王及び阿那邠邸長者、種々の名香雜華を散ず。是の時世尊、諸の比丘衆を將ひて前後に圍繞し、及び諸の神天稱計すべからず。鳳凰王の虚空の中に在るに似たるが如く、彼の城に往詣す。是の時般遮旬偈を以て佛を歎ずらく、

諸の生結永く盡き　意念じて錯亂せず　塵垢の碍り無きを以て　彼の舊き邦土に入りたまふ
心性極めて清淨にして　魔の邪惡の念を斷ち　功德大海の如く　今彼の邦土に入りたまふ　顏貌甚だ殊特なり　諸使永く起きず　彼自ら處らずと爲し　今彼の邦土に入りたまふ　四流の淵を渡るを以て　生老死より脫れ　以て有の根原を斷ち　今彼の邦土に入りたまふ

【二】密迹金剛力士。上の密迹力士を見よ。
【三】般遮旬。健沓想の子、五髻童子のこと、上の註を見よ。

と、時に女偈を以て報へて曰く、

　生れし時天地動き　珍寶地より出づ　清淨の眼垢無き　佛の弟阿那律なり

と。是の時阿那律、城を遶ること三匝して、長者の家に往詣す。是の時、尊者大迦葉、五百匹の馬を化作し、皆朱毛の尾なり、金銀校飾し上に在つて坐し、並に天華を雨らし、彼の城に往詣す。長者遙に見、偈を以て女に問うて曰く、

　金馬に朱毛の尾　其の數五百有り　是れ轉輪王爲り　是れを汝の師と爲すや

と。女復偈を以て報へて曰く、

　頭陀行第一にして　恒に貧窮なる者を愍み　如來半座を與へたまふもの　最たる大迦葉是れなり

と。是の時大迦葉城を遶ること三匝して、長者の家に往詣す。是の時尊者大目犍連、五百の白象を化作す、皆六牙有り、七處平整にして、金銀校飾し、上に在つて坐して來り、大光明を放ち、悉く世界に滿ち、城に詣り、虛空の中に在つて倡伎樂を作し、稱計すべからず。種々の雜華を雨らし、又虛空の中に繒・幡・蓋を懸け、極めて奇妙爲り。爾の時長者遙に見已り、偈を以て女に問うて曰く、

　白象六牙有り　上に在ること天王の如し　今伎樂の音を聞く　是れ釋迦文なるや

と。時に女偈を以て報へて曰く、

　彼の大山上に在りて　難陀龍を降伏せし　神足第一のもの　名けて大目連と曰ふ　我師故に未だ來らず　此れは是れ弟子の衆なり　聖師今當に來るべし　光明の照らさゞるはなし

と。是の時尊者大目犍連、城を遶ること三匝して、長者の家に往詣す。是の時世尊、時到るを知るを以て、僧伽梨を被り、虛空の中に在つて、地を去ること七仞なり。是の時尊者阿若拘隣、如來の右に在り、舍利弗、如來の左に在り。爾の時阿難、佛の威神を承け、如來の後に在つて、手に拂を

と。時に優毘迦葉、城を遶ること三匝して、長者の家に往詣す。是の時尊者須菩提、琉璃山を化作し、中に入つて結跏趺坐し、彼の城に往詣す。爾の時長者遙に見已つて、偈を以て女に問うて曰く、

此の山極めて妙爲り　盡く琉璃色を作し　今窟中に在つて坐するもの　此れは是れ汝の師なるや

と。時に女復此の偈を以て報へて曰く、

本布施の報ひに由り　今此の功德を獲　已に良福田を成ぜし　解空の須菩提なり

と。爾の時須菩提、城を遶ること三匝して、長者の家に往詣す、時に尊者大迦旃延、復五百の鵠を化作し、色皆純白なり。彼の城に往詣す。是の時長者遙に見已つて、此の偈を以て女に問うて曰く、

今此の五百の鵠　諸色皆純白なり　盡く虚空の中に滿つ　此れは是れ汝の師なるや

と。時に女復此の偈を以て報へて曰く、

佛經の說く所　其の義句を分別し　又結使の聚に演ぶるもの　此れを迦旃延と名く

と。是の時尊者大迦旃延、彼の城を遶ること三匝して、長者の家に往詣す。是の時離越、五百の虎を化作し、上に在つて坐し、彼の城に往詣す。長者見已つて、此の偈を以て女に問うて曰く、

今此の五百の虎　衣毛甚だ悅澤なり　又上に在つて坐する者　此れは是れ汝の師なるや

と。時に女、偈を以て報へて曰く、

昔祇洹寺に在りて　六年移動せず　坐禪最第一のもの　此れを離越なる者と名く

と。是の時尊者離越、城を遶ること三匝して、長者の家に詣る。是の時尊者阿那律、五百の師子を化作す。極めて勇猛爲り、上に在つて坐し、彼の城に往詣す。是の時長者見已つて、偈を以て女に問うて曰く、

此の五百の師子　勇猛にして甚だ畏るべし　上に在つて坐する者　此れは是れ汝の師なるや

能く千比丘を化し　耆域園中に在つて　心神極めて朗らかなるもの　此れを名けて般特と名く

と。爾の時尊者周利般特、彼の城を遶ること三匝し已つて、長者の家に往詣す。爾の時羅云復五百の孔雀を化作し、色若干種なり、上に在りて結跏趺坐して彼の城に往詣す、長者見已つて、復此の偈を以て女に問うて曰く、

此の五百の孔雀　其の色甚だ妙と爲す　彼の軍の大將の如きは　此れは是れ汝の師なるや

と。時に女復此の偈を以て報へて曰く、

如來禁戒を說き給ひ　一切犯す所無く　戒に於て能く戒を護る　佛子羅云なる者なり

と。是の時羅云、城を遶ること三匝して長者の家に往詣す。是の時尊者迦匹那、五百の金翅鳥を化作し、極めて勇猛爲り、上に在りて結跏趺坐して彼の城に往詣す。時に長者遙に見已り、復此の偈を以て女に問うて曰く、

五百の金翅鳥　極めて盛んにして勇猛爲り　上に在つて畏る所無きは　此れは是れ汝の師なるや

と。時に女偈を以て報へて曰く、

能く出入の息を行じ　廻轉して心善行　慧力極めて勇盛なるもの　此れを迦匹那と名く

と。時に尊者迦匹那、城を遶ること三匝して、長者の家に往詣す。爾の時優毘迦葉、五百の龍を化作す。皆七頭有り、上に在つて結跏趺坐し、彼の城に往詣す。長者遙に見已つて、復偈を以て女に問うて曰く、

今此の七頭の龍　威顏甚だ畏るべく　來る者計るべからず　此れは是れ汝の師なるや

と。時に女報へて曰く、

恒に千の弟子有りて　神足[一]　毘沙を化す　優毘迦葉と　謂ふべきは此の人是れなり

【一】毘沙は、頻毘娑羅王のこと。前出。

時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我弟子の中第一にして舍羅を受くる者は君頭波漢比丘是れなり」と。爾の時世尊、諸の神足の比丘、大目連・大迦葉・阿那律・離越・須菩提・優毘迦葉・摩訶迦葉・匹那・尊者羅云・周利般特・均頭沙彌に告げたまはく、「汝等、神足を以て先きに彼の城中に往至せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時衆僧の使人を名けて乾荼と曰ひ、明日清旦躬ら大釜を負ひ、空中を飛在して彼の城に往至す。是の時彼の長者及び諸の人民、高樓の上に上り、世尊を覲んと欲し、遙に使人の釜を負ふて來るを見る。時に長者女の與に便ち此の偈を說く

白衣にして長髮　身を露して疾風の如く　又復大釜を負ふは　此れは是れ汝の師なるや

と。是の時女人復偈を以て報へて曰く、

此れは尊弟子に非ず　如來の使人なり　三道に五通を具す　此の人を乾荼と名く

と。爾の時乾荼使人、城を遶ること三匝して長者の家に往詣す。是の時均頭沙彌、五百の華樹を化作し、色若干種、皆悉く敷茂し、其の色甚だ好く、優鉢蓮華、是の如きの華計限すべからずして、彼の城に往至す、是の時長者遙に沙彌の來るを見、復此の偈を以て問うて曰く、

此の華若干種　盡く虛空の中に在り　又神足の人有り　是れを汝の師と爲すや

と。是の時女復偈を以て報へて曰く、

須跋前に說く所の　泉上の沙彌なる者　師を舍利弗と名け　是れ彼の弟子なり

と。是の時均頭沙彌、城を遶ること三匝して、長者の家に往詣す。是の時尊者般特、五百頭の牛を化作し、衣毛皆靑し、牛の上に在つて結跏趺坐し、彼の城に往詣す。是の時長者遙に見、復此の偈を以て女に問うて曰く、

此の諸の大群牛　衣毛皆靑色なり　上に在つて獨り坐するは　此れは是れ汝の師なるや

と。女復偈を以て報へて曰く、

然も佛は取つて之を降したまへり　叉羅閲城に在りて　暴象來り害せんと欲するに　見て自ら歸命せしが如く　諸天は善い哉と歎ぜり　復馬提國に至り　復惡龍王に値ひ　[6]密迹力士を見ては　龍は自ら歸命せり　諸變計るべからず　皆正道に立たしめたまふ　我今復厄に値ふ　唯願はくは尊神を屈せよ　爾の時香雲の如く　懸りて虛空中に在り　祇洹の舍に遍滿し　如來の前に住在す　諸釋虛空の中に　歡喜して禮を作し　叉香の在前するを見る　須摩提の請ずる所なり　諸の種々の花を雨らし　計量すべからず　悉く祇洹林に滿ち　如來は笑みて光を放ちたまふ

と。爾の時阿難、祇洹中に此の妙香有るを見、見已つて世尊の所に至り、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時阿難、世尊に白して言さく、「唯願はくは世尊、此れは是れ何等の香の、祇洹精舍の中に遍滿するや」と。世尊告げて曰はく、「此の香は是れ佛の使なり。滿富城中の須摩提女の請ずる所なり。汝今諸比丘を呼び、盡く一處に集め、籌を行じて是の告勅を作せ、『諸比丘、漏盡阿羅漢有りて神足を得し者は、便ち[7]舍羅を取れ、明日當に滿富城の中に詣り、須摩提の請を受くべし』と」。阿難佛に白さく、「是の如し、世尊」と。是の時阿難、佛の敎を受け已つて、即ち諸比丘を集めて普會講堂に在り、而して是の念を作さく、「諸有の得道の羅漢は便ち舍羅を取れ」と。爾の時に當つて、衆僧の上座を[8]君頭波漢と名け、須陀洹を得るも、結使未だ盡きず、神足を得ず。是の時上座是の念を作さく、「我今大衆の中の最も是れ上座なるも叉結使未だ盡きず、未だ神足を得ず、我明日滿富城中に至つて食することを得る能はず。然るに如來の衆中の最下座の者を均頭沙彌と名く、此れ神足有り、大威力有つて、彼に至り請を受くることを得、我今亦往いて彼の請を受くべし」と。爾の時上座、心淸淨なるを以て學地に居在して舍羅を受く。爾の時世尊、天眼淸淨なるを以て、君頭波漢の[9]學地に居在して舍羅を受け、即ち[10]無學を得しを見たまへり。爾の

【六】密迹力士(Vajirapāṇi)。金剛神とも密迹金剛力士ともいひ、手に金剛杵を執つて佛陀の左右に立ちて守護すと。

【七】舍羅(Salākā)。は籌と譯す。

【八】君頭波漢(Kuṇḍadhāna)。佛弟子中取籌第一と稱せらる。

【九】學地に居在すとは、未だ學ぶべき地位にあるもの、有學(Sekha)のこと。未證悟のもの。

【一〇】無學(Asekkha)。學ぶべきものなき阿羅漢のこと。

盡三昧に入り、滅盡三昧より起ちて炎光三昧に入り、炎光三昧より起ちて水氣三昧に入り、水氣三昧より起ちて炎光三昧に入り、次で又滅盡三昧に入り、次で復有想無想三昧に入り、次で復不用處三昧に入り、次で復識處三昧に入り、次で復空處三昧に入り、次で復四禪に入り、次で復三禪に入り、次で復二禪に入り、次で復初禪に入り、初禪より起ちて死人の衣を浣ふ。是の時天龍・鬼神或は與に衣を蹈む者、或は洗ふを以てする者、或は水を取つて飲む者あり。爾の時衣を浣ひ已つて空中に擧著して之を曝せり。爾の時彼の沙彌、衣を收攝し已つて、便ち空中を飛在して所在に還歸せり。長者當に知るべし、我爾の時遙に見るも近づくことを得ざりき。此の女の事ふる所の師の最小の弟子に此の神力有り、況んや復最大の弟子に何ぞ及ぶべきこと有らんや。何に況んや彼の師、如來・至眞・等正覺に及ぶべけんや。此の義を觀じ已つて是の説を作す『甚奇甚特なり、此の女乃ち能く自殺せず、命根を斷たざること』と」。是の時長者梵志に語りて曰く、「我等此の女の事ふる所の師を見ることを得べきや」と。梵志報へて曰く、「還えつて此の女に問ふべし」と。

是の時長者、須摩提女に問うて曰く、「吾今汝の事ふる所の師を見ることを得んと欲す。能く來ら使むるや不や」と。時に女聞き已つて歡喜踊躍し、自ら勝ふる能はずして、是の説を作さく、「願はくは時に飲食を辨具せよ、明日如來は當に此に來至したまふべし。及び比丘僧と」と。長者報へて曰く、「汝今自ら請ぜよ、吾法を解せず」と。是の時長者の女、身體を沐浴し、手に香爐を執つて高樓の上に上り、叉手して如來に向つて是の説を作さく、「唯願はくは世尊、當に善く觀察すべし、能く頂きを見る者無し。然るに世尊は事として知らざるは無く、事として察せざるは無し、女今此の困厄に在り、唯願はくは世尊、當に善く觀察すべし」と。又此の偈を以て歎じて曰く、

世を觀じて周ねからざるは靡く　佛眼の察したまふ所は　鬼と諸神の王とを降し、及び鬼子母を降したまふ　彼の[五]噉人鬼の如きは　人の指を取つて鬘と作し　後復母を害せんと欲するも

【五】指鬘外道のこと。

在りと爲すや、近遠婢聚なるや」と。長者曰く、「此の女は舍衛城中の阿那邠邸の女なり」と。時に彼の梵志修跋、此の語を聞き已つて、愕然驚怪し、兩手にて耳を掩ふて是の說を作さく、「咄々、長者、甚奇甚特なり、此の女は乃ち能く故に在りや、又自殺せずや、樓下に投ぜずや。甚だ是れ大幸なり。然る所以は、此の女の事ふる所の師は皆是れ梵行の人なり。今日現在すること甚奇甚特なり」と。長者曰く、「我汝の語を聞いて復嗤笑せんと欲す。然る所以は、汝は外道異學爲り、何故に沙門釋種子の行ひを歎譽するや、此の女の事ふる所の師に、何の威德有り、何の神變有るや」と、梵志報へて言く、「長者、此の女の師の神德を聞かんと欲するか、我今粗其の原を說かん」と。長者曰く、「願はくは其の說を聞かん」と。梵志報へて曰く、「我昔日雪山の北に詣り、人間に乞食し、食を得已つて飛んで阿耨達泉に來詣しぬ。時に彼の天龍・鬼神遙に我の來るを見、皆刀劍を護持して來り、我に向つて並に我に語りて言く、『修跋仙士、此の泉の邊りに來至すること莫れ、此の泉を汚辱すること莫かれ、設し我語に隨はずば、正しく爾の命根は斷壞せん』と。我此の語を聞き、即ち彼の泉を離るゝこと、遠からざるに食しぬ。長者當に知るべし。此の女の事ふる所の師の最小の弟子を均頭沙彌と名く。然るに此の沙彌も亦雪山の北に至り、乞食し、飛んで阿耨達泉に來詣し、叉手して塚間の死人の衣の血に垢れ、汚染なるを執れり。是の時阿耨達の大神天龍・鬼神皆起つて、前んで迎へ、恭敬し、問訊して『善くぞ來れり、人師、此の座に就くべし』と、時に均頭沙彌、泉水の處に往至せり。又復長者、泉水の中央に當つて、純金の案有り。爾の時沙彌、此の死人の衣を以て水中に漬著し、却後坐して食し、食し竟つて、鉢を盪ひ、金案の上に在つて結跏趺坐し、正身正意に、繫念して前に在り、便ち初禪に入り、初禪より起ちて第二禪に入り、第二禪より起ちて第三禪に入り、第三禪より起ちて第四禪に入り、第四禪より起ちて空處に入り、空處より起ちて識處に入り、識處より起ちて不用處に入り、不用處より起ちて有想無想處に入り、有想無想處より起ちて滅

すべし。此の諸人は皆是れ我の事ふる所の天なり」と。修摩提女報へて曰く、「且く止みなん、族姓子、我此の無慚無愧の裸人に向つて作禮するに堪任せず。我は今是れ人なり、驢犬に向つて禮を作さんや」と。夫復語りて曰く、「止みなん、止みなん、貴女、是の言を作すこと勿れ、自ら汝の口を護りて、犯す所有ること勿れ。此れは亦驢に非ず、復誑惑に非ず、但所著の衣は正しく是れ法衣なり」と。是の時修摩提女、涕零悲泣し顏色變異し、並に是の說を作さく、「我父母五親は寧ろ形毀れ、五分して其の命根を斷つとも、終に此の邪見の中に墮せず」と。時に六千の梵志、各〻共に高聲に是の說を作さく、「止みなん、止みなん、長者、何故に此の婢をして罵詈せしむること乃ち爾るや、若し請ぜし者を見ば時に飲食を供辦せよ」と。是の時長者及び修摩提の夫、卽ち豬肉、豬肉の羹、重釀の酒を辦じ、六千の梵志に食し、皆充足せしむ。諸の梵志食し已り、少多の論議して、便ち起ちて去る。是の時滿財長者、高樓上に在つて、煩寃愁悒し、獨り坐して思惟すらく、「我今此の女を取り來つて、便ち爲に家を破り、我門戶を辱しむるに異ること無し」と。是の時梵志有り、修跋と名け、五通[四]を得、亦諸禪を得たり。然して滿財長者に貴び重ぜらる。時に修跋梵志是の念を作さく、「我長者と別れて來、日久し、今往いて相見るべし」と。是の時梵志滿富城に入つて長者の家に往詣し、守門の者に問うて曰く、「長者今所在爲るや」と。守門の人報へて曰く、「長者は樓上に在つて極めて愁憂ひを爲すこと大なり、言ふべからず」と。時に梵志徑を樓上に上り、長者と相見る。梵志長者に問うて曰く、「何故に愁憂ひて乃ち斯に至るや、縣官・盜賊・水火災變に侵枉せられしことなきや。又家中和順せざるに非ずや」と。長者報へて曰く、「縣官・盜賊の變有ること無し、但小しく家中の事緣遂げず」と。梵志問うて曰く、「其の狀を聞くべし、何の事緣有るや」と。長者報へて曰く、「昨日兒の爲に婦を娶れり、又國限を犯し、五親辱しめらる。諸師を請じて舍に在り、兒、婦を將ひて往いて禮拜するに、命に從はざりき」と。梵志修跋報へて曰く、「此の女の家は何れの國に

【四】五通とは、五種の不思議なる力、一、天眼通。二、天耳通。三、他心通。四、宿命通、五、神足通の五。他心通とは他の心を知り得る力、宿命通とは、前世のことを知り得る力、神足通とは飛行自在にして、障碍なく、奇跡を行ふ力。

財長者、女を得、便ち將ひて滿富城の中に至る。爾の時滿富城中の人民の類、各〻制限を作さく、「若し此の城中に女有つて出で〻他國に適く者は、當に重く刑罰すべし。若し復他國に婦を取つて、將ひて國に入る者も亦重く刑罰せん」と。

爾の時彼の國に六千の梵志有り、國人の奉ずる所、制限して言へる有り、「設し制を犯す者は、當に六千の梵志に飯すべし」と。爾の時長者自ら制を犯せしを知り、卽ち六千の梵志に飯す。然して梵志の食する所は、均しく睹肉及び睹肉の羹、重釀の酒を食す。又梵志の著くる所の衣服、或は白氎を被り、或は毳衣を披く。然るに彼の梵志の法として、國に入るの時は、衣を以て偏に右肩に著け、半身を露現するなり。爾の時長者卽ち白さく、「時到れり、飮食已に具せり」と。是の時六千の梵志、皆偏に衣裳を著け、半身を露現して長者の家に入る。時に長者、梵志の來るを見、膝行し、前んで迎へ、恭敬作禮す。最大の梵志、手を擧げて「善し」と稱し、前んで長者の項を抱き、座所に往詣し、餘の梵志者各〻次に隨ひて坐す。爾の時六千の梵志坐し已つて定り訖る。時に長者修摩提女に語りて曰く、「汝自ら莊嚴し、我等の師に向つて禮を作せ」と。修摩提女報へて曰く、「止みなん、止みなん、大家、我裸人に向つて禮するに堪任せず」と。長者曰く、「此れは裸人に非ず、慚づること有らざるに非ず、但し著くる所の衣は、是れ其の法服なり」と。修摩提女曰く、「此は無慚愧の人なり。皆共に露形にして、體は外に在り、何ぞ法服の用有らん、長者願はくは聽け、世尊も亦說き給へり。二事の因緣有り、世人の貴ぶ所、所謂有慚と有愧となり。若し當に此の二事無かるべくんば、則ち父母・兄弟・宗族・五親の尊卑高下は則ち分別すべからず。今の如きは鷄犬・睹羊・驢騾之屬有り、皆共に同類にして、尊卑有ること無し。此の二法有つて世に在るを以て、則ち尊卑の異り有るを知る。然るに此等の人は此の二法を離れ、鷄犬・睹羊・驢騾の同群に似たり、實に向つて禮拜を作すに堪任せず」と。時に修摩提の夫、其の婦に語りて曰く、「汝今起ちて、我等の師に向つて禮を作

に、事宜爾らざるや、姓望を以て爲るや、財貨を以て爲ろや」と。阿那邠邸長者報へて曰く、「種姓財貨は相儔匹するに足る。但事ふる所の神祠、我と同じからず。此の女は佛に事へて釋迦の弟子なり。汝等は外道異學に事ふ。是の事の故を以て、來意に赴かず」と。時に滿財長者曰く、「我等の事ふる所、自ら當に別に祀るべし。此の女の事ふる所、別に自ら供養せよ」と、阿那邠邸長者曰く、「我女設し汝の家に適くべくんば、出す所の財寶稱計すべからず、長者も亦當に財寶を出すこと稱計すべからざるべし」と。滿財長者曰く、「汝今我に幾許の財寶を索むるや」。阿那邠邸長者曰く、「我今六萬兩金を須ひん」と。是の時長者卽ち六萬兩金を與ふ。時に阿那邠邸長者、復是の念を作さく、「我方便を以て前んで却くるも、猶止め使むること能はず」と、彼の長者に語りて曰く、「設し我女を嫁せんには、當に往いて佛に問ふべし。若し世尊にして敎勅せらるゝこと有らば、當に奉行すべし」。是の時阿那邠邸長者、假りに事務を設け、小行する似て、卽ち門を出でゝ世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時阿那邠邸長者世尊に白して曰さく、「修摩提女、滿富城中の滿財長者の爲に求めらる。與ふべしと爲すや、與ふべからずと爲すや」と。世尊告げて曰はく、「若し當に修摩提女にして彼の國に適くべくんば、饒益する所多く、人民を度脫すること、稱量すべからざらん」と。是の時阿那邠邸長者復是の念を作さく、「世尊は方便智を以て應に彼の土に適くべし」と。是の時長者、頭面に足を禮し、佛を遶ること三匝して、便ち退いて去り、還えつて家の中に至り、種々の甘饌飲食を供辦して滿財長者に與ふ。滿財長者曰く、「我此の食を用ふるが爲めに、但し女を嫁して我に與ふるや不や」と。阿那邠邸曰く、「意爾ることゝ欲せば、便ち相從ふべし。却後十五日、兒をして此に至らしめよ」と。此の語を作し已つて、便ち退いて去る。是の時滿財長者、所須を辦具し、寶羽の車に乘り、八十[三]由延内より來る。阿那邠邸長者、復己れの女を莊嚴し、沐浴香熏し、寶羽の車に乘り、此の女を將ひて往き、滿財長者の男を迎へ、中道に相遇ふ。時に滿

【三】由延（Yojana）。由旬に同じ。

世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の沙彌は却後七日にして、當に四神足を得、及び四諦の法を得、四禪に於て自在を得、善く四意斷を修むべし。然る所以は、此の修摩那沙彌は恭敬の心有つて佛・法。衆に向へばなり。是れを以ての故に、諸比丘、恒に勤加して、佛・法・衆を恭敬すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[二] 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在し、爾の時世尊、大比丘衆千二百五十人と倶なりき。爾の時長者有り、阿那邠邸と名け、饒財多寶にして、金銀・珍寶・車𤦲・馬瑙・眞珠・虎魄・水精・琉璃・象・馬・牛・羊・奴婢・僕使稱計すべからず。爾の時滿富城中に長者有り、滿財と名け、亦饒財多寶にして、車𤦲・馬瑙・眞珠・虎魄・水精・琉璃・象・馬・牛・羊・奴婢・僕使稱量すべからず。復是れ阿那邠邸長者と少小の舊き好みにして、共に相愛敬し、未だ曾て忘捨せず、然して復阿那邠邸長者、恒に數千萬の珍寶財貨有り、彼の滿富城中に在つて販賣し、滿財長者をして經紀將護せしむ。然るに滿財長者も亦數千萬の珍寶財貨有り、舍衞城中に在つて販賣し、阿那邠邸長者をして經紀將護せしむ。是の時阿那邠邸に女有り、修摩提と名け、顏貌端正にして、桃華の色の如く、世の希有なり。爾の時滿財長者、少事縁有つて舍衞城に到り阿那邠邸長者の家に往至し、到り已つて座に就いて坐す。是の時修摩提女、靜室より出でて先づ父母を拜跪し、後滿財長者を拜跪し、還えつて靜室に入りぬ。

爾の時滿財長者、修摩提女の顏貌端正にして、桃華の色の如く、世の希有なるを見、見已つて阿那邠邸長者に問うて曰く、「此れは是れ、誰が家の女なるや」と。阿那邠邸報へて曰く、「向者の女は是れ我所生なり」と。滿財長者曰く、「我に小息有り、未だ婿對有らず、貧家に適くことを得べきや不や」と。是の時阿那邠邸長者報へて曰く、「事宜爾らず」と。滿財長者曰く、「何等を以ての故

[二] Mans p. 517–8
Dhp. A III p. 465
Div. p. 402
これが別譯に
一、佛說三摩竭經、一卷　吳竺律炎譯
二、佛說給孤長者女得度因緣經、一卷　宋　施護譯
三、須摩提女經　一卷　吳　支謙譯

くに滯礙無く、亦怯弱無ければなり。是の故に諸比丘、當に須陀比丘の如く學ぶべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し、一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時無央數の衆の與に、前後を圍遶せられて、爲に法を說きたまへり。爾の時長老の比丘有り、彼の衆の中に在つて、世尊に向つて脚を舒べて睡れり。爾の時[一]修摩那沙彌、年始めて八歲なり。世尊を去ること遠からざる所に結跏趺坐し、繫念して前に在り。爾の時世尊、遙に長老の比丘の、脚を舒べて眠むるを見、復沙彌の端坐して思惟するを見たまへり。世尊見已つて便ち此の偈を說きたまはく、

所謂長老とは　未だ必ずしも鬚髮を剃れるにあらず　復年齒長けたりと雖も　愚行を免れず
若し諦法を見る有つて　群萠を害ふことなく　諸の穢惡の行を捨つるもの此れを名けて長老と
爲す　我今長老と謂ふは　未だ必ずしも先きに出家せしにあらず　其の善本の業を修め　正行
を分別す　設ひ年幼少有らんも　諸根に漏缺なくば　此れを謂ひて長老と名け　正法の行を分
別せん。

と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等頗は此の長老の脚を舒べて睡れるを見るか」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊、我等悉く見る」と。世尊告げて曰はく、「此の長老の比丘は、五百世の中、恒に龍身と爲らん。今設し命終すべくんば、當に龍の中に生るべし。然る所以は、佛・法・衆に於て、恭敬の心有ること無ければなり。若し衆生有つて、佛・法・衆に於て恭敬の心無き者は、身壞命終して、皆當に龍中に生るべし。汝等頗は、修摩那沙彌年八歲に向ふに、我を去ること遠からざるに、端坐して思惟するを見るや」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時

【一】修摩那（Sumana）。

一義に非るなり』と」。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、須陀、汝の言ふ所の如し、衆法の色と散法の色とは、義若干有り、一義に非るなり。云何が須陀、受の義と陰の義と、是れ一義と爲すや、若干有りと爲すや」と。須陀沙彌佛に白して言さく、「受と陰の義とは若干有りて、一義に非るなり。然る所以は、受とは形無くして見るべからず、陰とは色有り、見るべし。是れを以ての故に義若干有り、一義に非るなり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、須陀、汝の言ふ所の如し、受の義、陰の義は事若干有りて一義に非るなり」と。世尊告げて曰はく、「有の字と無の字とは義若干有りや、是れを一義と爲すや」と。沙彌佛に白して言さく、「有の字と無の字と義若干有りて、一義に非るなり。然る所以は、有の字とは是れ生死の結にして、無の字とは是れ涅槃なり。是れを以て之を言へば、義若干有りて、一義に非るなり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、須陀、汝の言ふ所の如し。有の字とは是れ生死、無の字とは是れ涅槃なり」と。世尊告げて曰はく、「云何が須陀、何を以ての故に有の字は是れ生死、無の字は是れ涅槃なりや」と。沙彌佛に白して言さく、「有の字とは生有り、死有り、終り有り、始め有り、無の字とは生無く、死無く、終り無く、始め無きなり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、須陀、汝の言ふ所の如し。有の字とは是れ生死の法、無の字とは是れ涅槃の法なり」。爾の時世尊、沙彌に告げて曰はく、「快し、此の言を說くこと、今卽ち汝を聽して大比丘と爲さん」と。

爾の時世尊、還えつて普集講堂に詣り、諸比丘に告げたまはく、「摩竭國界は快く善利を得ん、須陀沙彌をして、此の境界に遊ば使めん、其れ衣被・飮食・床臥の具・病瘦の醫藥を以て、持して供養すること有る者は亦善利を得ん。彼を生みし所の父母も亦善利を得ん、乃ち此の須陀比丘を生むことを得たればなり。須陀比丘を生みし所の家の若き、彼の家は便ち其れ大幸を獲と爲す。我今諸比丘に告ぐ、「當に須陀比丘の如く學ぶべし。然る所以は何ぞや、此の須陀比丘極めて聰明爲り、法を說

卷の第二十二

須陀品第三十

一

聞くこと是の如し、一時佛、摩竭國波沙山中に在し、大比丘衆五百人と俱なりき。爾の時世尊、淸旦靜室より起ち、外に在りて經行したまふ。是の時須陀沙彌、世尊の後に在つて經行す。爾の時世尊、還顧して沙彌に謂ひて曰はく、「我今卿に義を問はんと欲す。諦に聽いて之を思念せよ」と。須陀沙彌對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時世尊告げて曰はく、「有常色と及び無常色とは是れ一義と爲すや、若干の貌有りと爲すや」と。須陀沙彌佛に白して言さく、「有常色と無常色とは此の義若干にして、一義に非るなり。然る所以は、有常色とは是れ內、無常色とは是れ外なればなり。是れを以ての故に、義若干有りて一有るに非るなり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、須陀、汝の言ふ所の如きは快し、此の義を說くこと、有常色と無常色とは此の義若干にして一義に非るなり。云何が須陀、有漏の義と無漏の義と、是れ一義と爲すや、若干義と爲すや」と。須陀沙彌對へて曰さく、「有漏の義と無漏の義とは是れ若干にして一義に非るなり。然る所以は、有漏の義は是れ生死の結使、無漏の義は是れ涅槃の法なり。是れを以ての故に、義若干有りて一義に非るなり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、須陀、汝の言ふ所の如し、有漏は是れ生死、無漏は是れ涅槃なり」と。世尊告げて曰はく、「聚法と散法と是れ一義と爲すや、是れ若干義と爲すや」と。須陀沙彌、佛に白して言さく、「聚法と色と散法の色とは、此の義若干にして、一義に非るなり。然る所以は、聚法の色とは四大の形なり。散法の色とは苦盡諦なり。是れを以て之を言ふ、「義若干有り

ぬ。

十

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「四等心有り、云何が四と爲すや、慈・悲・喜・護なり。何等を以ての故に名けて梵堂と爲すや、比丘、當に知るべし、梵大梵有り、千と名け、與に等しき者無く、上に過ぐる者無く、千の國界を統ぶ。是れ彼の堂なるが故に名けて梵堂と爲す。比丘、此の四梵堂所有の力勢、能く此の千の國界を觀ず。是の故に名けて梵堂と爲す。是の故に諸比丘、若し比丘有りて、欲界の天を度し、無欲の地に處らんと欲せば、彼の四部の衆、當に方便を求めて、此の四梵堂を成ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

増壹阿含經卷第二十一

【三八】梵堂。無量心、等心皆同じ。

に親近し、悪法を除去すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし、檀越施主をして其の功德を獲、福を受くること無窮にして、甘露の滅を得せ使むべし」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

衣裳用つて布施し　飲食床臥の具　中に於て　愛を起すこと莫く　諸の世界に生ぜざれ

と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「今四大河水有り、[22]阿耨達泉より出づ。云何が四と爲すや、所謂　[23]恒伽・[24]新頭・[25]婆叉・[26]私陀なり。彼の恒伽は水牛の頭口より出で、東に向つて流る。新頭は南流して師子の口より出で、私陀は西流して象の口中より出で、婆叉は北流して、馬の口中より出づ。是の時四大河水は阿耨達泉を遶り已つて、恒河は東海に入り、新頭は南海に入り、婆叉は西海に入り、私陀は北海に入る。爾の時四大河、海に入り已れば、復本の名字無し、但名けて海と爲す。此れも亦是の如く、[27]四姓有り、云何が四と爲すや、剎利・婆羅門・長者・居士種、如來の所に於て鬚髮を剃除し、三法衣を著け、出家學道せば、復本の姓無し、但沙門釋迦の子と言ふのみ。然る所以は、如來の衆は其れ大海の猶く、四諦は其れ四大河の如く、結使を除去して、無畏涅槃の城に入る。是の故に諸比丘、諸有の四姓の鬚髮を剃除し、信堅固を以て出家學道する者は、彼當に本の名字を滅し、自ら釋迦の弟子を稱すべし。然る所以は、我今正に是れ釋迦子、釋種中より出家學道せり、比丘當に知るべし、生子の義を論ぜんと欲せば、當に沙門釋種子是れなりと名くべし。然る所以は何ぞや、生れしは皆我に由つて生れ、法より起り、法に從つて成ぜり。是の故に比丘、當に方便を求めて、釋種子と作ることを得べし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行し

【二二】阿耨達泉(Anavatapta)。無熱と譯す、雪山の北にある池の名、周圍八百里、金銀寶玉を以て岸を飾ると。
【二三】恒伽（梵、Gaṅgā)。
【二四】新頭（梵、Sindhu)。
【二五】婆叉（梵、Vakṣu)。
【二六】私陀（梵、Sītā)。
【二七】四姓。印度の四の社會階級、通常には剎利・婆羅門・毘舍・首陀羅の四を數ふ。

し、量心有り、量心無し、定心有り、定心無し、解脱心有り、解脱心無し』と、皆悉く了知す。是れを名けて誠三昧行盡神足と爲すと謂ふなり。是の如く比丘、此の四神足有り、一切衆生の心中の所念を知らんと欲せば、當に此の四神足を修行すべし。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。

爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

〔三〇〕聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、〔三一〕「四の愛起の法有り、若し比丘愛起る時便ち起る。云何が四と爲すや、比丘衣服に緣るが故に便ち愛起る。乞食に由るが故に便ち愛起る。床座に由るが故に便ち愛起る。醫藥に由るが故に比丘便ち愛起る。是れを比丘、此の四起愛の法有りて、染著する所有りと謂ふなり。其れ比丘有つて、衣裳を著する者、我此の人を說ばず、然る所以は、彼未だ衣を得ざる時、便ち瞋恚を起し、想著の念を興せばなり。其れ比丘有つて、是の食に著する者、我此の人を說ばず、然る所以は、彼未だ乞食を得ざる時、便ち瞋恚を興し、想著の念を興せばなり。其れ比丘有つて床座に著する者、我此の人を說ばず、然る所以は、彼未だ床座を得ざる時、便ち瞋恚を起し、想著の念を興せばなり。其れ比丘有つて醫藥に著する者、我此人を說ばず、然る所以は、彼未だ醫藥を得ざる時、便ち瞋恚を興し、想著の念を生ぜばなり。比丘當に知るべし、我今當に衣裳は二事、亦親近すべく、亦親近すべからさることを說くべし。云何が親近し、云何が親近せざるや、若し衣裳を得て、極めて衣に愛著する者は、不善の法を起す、此れ親近すべからず。若し復衣裳を得て善法を起し、心愛著せざるもの、此れ親近すべし、若し乞食するの時、不善の法を起すもの、此れ親近すべからず、若し乞食する時、善法を起すもの、此れ親近すべし。若し床座を得る時、不善の法を起すもの、此れ親近すべからず、若し床座を得る時、善法を起さば、亦親近すべし。醫藥も亦爾り。是の故に諸比丘、當に善法

〔三〇〕 A, IV. 9. Taṇhuppāda

〔三一〕 四愛起法 (Cattāro taṇha uppādā)
一、衣服(Cīvarahetu)。
二、乞食(Piṇḍapātahetu)。
三、床座(Senāsanahetu)。
四、醫藥 (巴利文には增減 Itibhavābhavahetu)。の四によつて欲望を生ずといふ。

已るが故に、汝等に告ぐる耳、然る所以は、此れ善本功德に非ず、梵行を修むることを得ず、亦復涅槃處に至ることを得ず、然して此れを思議する者は則ち人をして狂ひ、心意錯亂せ令む。然して比丘當に知るべし。彼の人は實に四種の兵を見ぬ。然る所以は、昔日諸天阿須倫と共に鬪ひ、共に鬪ふ時に當つて、諸天は勝ちを得、阿須倫如かざりき、是の時阿須倫便ち恐怖を懷き、形を化して極めて小ならしめ、藕根の孔の中より過ぎぬ。佛眼の見る所にして餘者の及ぶ所に非ず。是の故に諸比丘、當に四諦を思議すべし。然る所以は、此の四諦は義有り、理有り、梵行を修むることを得、沙門の法を行じ、涅槃に至ることを得、是の故に諸比丘、此の世界の法を捨離し、當に方便を求めて、四諦を思議すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「四神足有り、云何が四と爲すや、自在三昧行盡神足・心三昧行盡神足・精進三昧行盡神足・誠三昧行盡神足なり。彼云何が自在三昧行盡神足と爲すや、所謂諸有の三昧自在にして、意の欲する所、心の樂しむ所、身體をして輕便ならしめ、能く形を隱くすこと極めて細なり。是れを第一神足と謂ふなり、彼云何が心三昧行盡神足なるや、所謂所知の法十方に遍滿し、石壁も皆過ぎて罣礙する所無し、是れを名けて心三昧行盡神足と爲すなり。彼云何が名けて精進三昧行盡神足と爲すや、所謂此の三昧は懈惓有ること無く、亦所畏無く、勇猛の意有り、是れを名けて、精進三昧行盡神足と爲すなり。彼云何が名けて誠三昧行盡神足と爲すや、諸有の三昧衆生の心中の所念を知り、生ずる時、滅する時、皆悉く之を知る。『欲心有り、欲心無し、瞋恚心有り、瞋恚心無し、愚癡心有り、愚癡心無し、疾心有り、疾心無し、亂心有り、亂心無し、少心有り、少心無し、大心有り、大心無

ばなり、如來は長壽爲るや、此れ亦不可思議なり、然る所以は、然るに復如來は故世間に興り、周旋し、善權方便と與に相應す。如來の身は模則すべからず、長と言ひ、短と言ふべからず。音聲も亦法則すべからず。如來の梵音、如來の智慧辯は不可思議にして、世間の人民の能く及ぶ所に非ず。是の如きが佛境界不可思議なり。是の如く比丘、此の四處有つて不可思議にして、是れ常人の思議する所に非ず。然して此の四事に善き根本無く、亦此れに由つて梵行を修むることを得ず、休息の處に至らず、乃至涅槃の處に到らず。但人をして狂惑し、心意錯亂して諸の疑結を起さ令む。然る所以は、比丘、當に知るべし。過去久遠に、此の舍衛城中に一凡人有つて便ち是の念を作さく。『我今當に世界を思議すべし』と。是の時彼の人舍衛城を出でゝ、一華池の水側に在りて、結跏趺坐し、世界を思惟す。『此の世界は云何が成り、云何が敗するや。誰か此の世界を造りしや、此の衆生の類は何れより來れりと爲すや、何れより出づると爲すや、何れの時に生ぜしと爲すや』と。是の時彼の人思議す。此の時便ち池水の中に四種の兵有りて出入するを見る。是の時彼の人復是の念を作さく。『我今狂惑し、心意錯亂し、『世間無しと、我今之を見る』と、時に彼の人還えつて舍衛城に入り、里巷の中に在つて是の說を作さく、『諸賢、當に知るべし、世間無しと、我今之を見る』と、是の時衆多の人彼の人に報へて曰く、『云何が世間無しと汝今之を見るや』と。時に此の人衆多の人に報へて曰く、『我向者に是の思惟を作せり、「世界は何れより生ずると爲すや」と、便ち舍衛城を出でゝ華池の側に在つて是の思議を作せり、「世界は何れより來ると爲すや、誰か此の世界を造りしや、此の衆生の類は何れより來つて、誰の生ずる所なるや、若し命終せば何處に生ずべきや、我當に思議すべし」と、此の時便ち、池水の中に四種の兵有りて出入するを見たり。世界無しと我今之を見る』と、是の時衆多の人、彼の人に報へて曰く、『汝の如きは實に狂愚なり、池水の中に那ぞ四種の兵を得ん、諸の世界の狂愚の中、汝は最も上と爲す』と。是の故に比丘、我此の義を觀じ

[一八]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、[一九]「四事有り、終に思議すべからず。云何が四と爲すや、衆生は思議すべからず、世界は思議すべからず、龍國は思議すべからず、佛國境界は思議すべからず。然る所以は、此の處に由つて滅盡涅槃に至ることを得ざればなり。云何が衆生不可思議なるや、『此の衆生は何れより來ると爲し、何れより生ずと爲し、復何れより起り、此れより終るや。當に何より生ずべきや』と。是の如きが衆生不可思議なり。云何が世界不可思議なるや、諸有の邪見の人、『世界は斷滅するや、世界は斷滅せざるや、世界は有邊なりや、世界は無邊なりや、是れ命是れ身なりや、非命非身なりや、梵天の造る所なりや、諸天鬼神此の世界を作すや』と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

梵天人民を造り　世間は鬼の造る所　或は能く諸鬼の作と　此の語誰か定むべき　欲恚の纏ふ所　三者倶共に等しく　心自在を得ずば　世俗に災變有らん

と。是の如きが比丘、世間不可思議なり。云何が龍界不可思議なるや。云何此の雨、龍口より出づると爲すや、然る所以は雨滴に龍口より出でざればなり。眼耳鼻より出づると爲すやと。此れも亦不可思議なり。然る所以は、雨滴は眼耳鼻より出でざればなり。但龍の意の所念なり。若し惡を念ぜば亦雨り、若し善を念ずるも亦雨り、亦行本に由つて此の雨を作す。然る所以は、今須彌山腹に天有り、名けて大力と曰ひ、衆生の心の所念を知り、亦能く雨を作す。然して雨は彼の天の口より出でゝ眼耳鼻より出でず、皆彼の天神力有るに由るが故に、能く雨を作す。是の如く比丘、龍の境界は不可思議なり。云何が佛國境界不可思議なるや。如來の身は是れ父母の所造と爲すや。此れも亦不可思議なり。然る所以は、如來の身は淸淨にして穢れなく、諸天の氣を受くればなり。是れ人の所造と爲すや、此れ亦不可思議なり。然る所以は、如來の身は造作すべからず、諸天の及ぶ所に非ざればなり。如來の壽は短しと爲すや。此れ亦不可思議なり。然る所以は如來は四神足有れ

[一八] A. IV. 77 Acintito

[一九] 巴利文には Cattār-acinteyyāni (四の不可思議)として左の四を列擧す。
一、Buddhavisaya (佛の境界)。
二、Jhānavisa, a (禪定の境界)。
三、Kammavipāka (業異熟)。
四、Lokac nta (世間思)。

る所、梵天を首とし、乃至有想無想天(皆)識を以て食と爲す。是れを名けて識食と爲すと謂ふなり。是れを比丘、此の四食有つて、衆生の類此の四食を以て、生死に流轉し、今世より後世に至ると謂ふなり。是の故に諸比丘、當に共に此の四食を捨離すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

[一〇]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「[一一]四辯有り、云何が四と爲すや、所謂義辯・法辯・辭辯・應辯なり。彼云何が名けて義辯と爲すや、所謂義辯とは彼々の所說、若しは天・龍・鬼神の所說、皆能く其の義を分別す。是れを名けて義辯と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて法辯と爲すや、[一二]十二部經如來の所說、所謂契經・祇夜・本末・偈・因緣・授決・已說・造頌・生經・方等・合集・未曾有及び諸の[一三]有爲法・[一四]無爲法・[一五]有漏法・[一六]無漏法なり。諸法の實にして沮壞すべからず、總持すべき所の者、是れを名けて法辯と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて辭辯と爲すや、若し前の衆生、長短の語、男語・女語・佛語・梵志・天・龍・鬼神の語、阿須倫・迦留羅・甄陀羅彼の說く所、彼の根原に隨ひつ、其の與に說法す。是れを名けて辭辯と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて應辯と爲すや。法を說くべき時に怯弱有ること無く、畏懼有ること無く、能く四部の衆を和悅す。是れを名けて應辯と爲すと謂ふなり。我今當に汝に敎勅すべし。當に[一七]摩訶拘絺羅の如くなるべし。然る所以は、拘絺羅に此の四辯有りて、能く四部の衆の與に、廣く分別して說く、我今日の如く、諸の衆中を觀ずるに、四辯才を得るもの、拘絺羅に出づるもの有ること無し。此の四辯の若きは如來の所有なり。是の故に當に方便を求めて四辯才を成ずべし」。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

【一〇】A IV. 173 Paṭisambhidā

【一一】四辯(Cattāro Paṭisambhidā)。は四無碍辯とも、四辯才ともいふ、四辯才を見よ。
一、義辯(Atthapaṭisambhidā)。
二、法辯(Dhammapaṭisambhidā)。
三、辭辯(Niruttipaṭisambhidā)。
四、應辯(Paṭibhānapaṭisambhidā)。

【一二】十二部經。上に出づ。

【一三】有爲法(Saṅkhatadhamma)。一切諸法をいふ。有爲を見よ。

【一四】無爲法(Asaṅkhatadhamma)。涅槃のこと。

【一五】有漏法(Āsavadhamma)。漏は漏泄の義、煩惱のこと、一切世間の事體をいふ。

【一六】無漏法(Anāsava dhamma)。有漏の反對、煩惱を離れし、六世間の事體をいふ。

【一七】摩訶拘絺羅(Mahākoṭṭhita)。前に出づ。

福に如かず、比丘、當に知るべし、鬱單曰は縱廣四十萬里、地形月の滿つるが如く、三方の人民の福を計るも、故に鬱單曰の一人の福に如かず、比丘當に知るべし。四天下の人民の福を計るも、故に四天王の徳に如かず。四天下の人民の福及び四天王を計るも、故に三十三天の福に如かず、四天下及び四天王三十三天を計るも、故に釋提桓因一人の福に如かす。四天下及び四天王及び、三十三天及び釋提桓因を計るも、故に一豔天の福に如かず。四天下及び四天王、三十三天、釋提桓因及び豔天を計るも、故に一兜術天の福に如かず。四天下より兜術天に至るの福を計るも、故に一化自在天の福に如かず。四天下より化自在天に至るの福を計るも、故に一他化自在天の福に如かず。四天下より他化自在天に至るの福を計るも、故に一梵天王の福に如かず。比丘當に知るべし、此れは是れ梵天の福なり、若し善男子善女人有りて、其の福を求むる者は、此れは是れ、其の量なり、是の故に比丘、梵天の福を求めんと欲する者は、當に方便を求めて、其の功徳を成ずべし。是の如く、比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[四]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「衆生の類に[五]四種の食有りて衆生を長養す。何等をか四と爲す、所謂[六]摶食、或は大、或は小。[七]更樂食・[八]念食・[九]識食なり、是れを四食と謂ふなり。彼云何が名けて摶食と爲すや。彼の摶食とは今の如き人中の所食、諸の口に入るの物、食噉すべき者、是れを名けて摶食と爲すと謂ふなり。云何が更樂食と名くるや、所謂更樂食とは衣裳・繖蓋・雜香華・熏火及び香油、婦人の與に集聚むる諸餘の身體に更樂せらるゝ者、是れを名けて更樂の食と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて念食と爲すや。諸の意中に念想せられ、思惟せらるゝ者、或は口を以て說き、或は體を以て觸り、及び諸の所持の法、是れを名けて念食と爲すと謂ふなり。彼云何が識食と爲すや、念ずる所の識とは、意の知

【四】 S. 12. 11 Āhārā

【五】 四種の食 (Cattāro āhārā) とは、衆生を長養する營養の方面より、その組成要素を分類せしもの、食は食物の意味の外、原因、素材の意も含まれたり。

【六】 摶食 (Kabaliṁkāra āhāra)。とは、普通の物質的食物をいふ。

【七】 更樂食(Phassa āhāra)。は又觸食ともいひ、觸覺の素材となるものをいふ。

【八】 念食 (Manosañcetanā āhāra)とは、記憶の素材となるもの。

【九】 識食(Viññāṇa āhāra)。とは、意識の素材となるもの。

しまざるや、所謂凡夫の人功德を作さず、四事の供養、衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を得る能はず、復地獄・餓鬼・畜生道を免れず、是れを此の人身も樂しまず、心も亦樂しまずと謂ふなり、彼何等の人か、身も亦樂しみ、心も亦樂しむや、所謂功德を作すの阿羅漢、四事の供養に短乏する所無し、衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥なり。復地獄・餓鬼・畜生道を免る。所謂尸波羅比丘是れなり。是れを比丘、世間に此の四人有りと謂ふなり。是の故に比丘、當に方便を求むべし。當に尸波羅比丘の如くなるべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「今當に四梵の福を說くべし。云何が四と爲すや、若し信善男子善女人有りて、未だ曾て偸婆を起てざる處の中に於て、能く偸婆を起す者、是れを初梵の福と謂ふなり。復次に信善男子善女人の故寺を補治する者、是れを第二の受梵の福と謂ふなり。復次に信善男子善女人、聖衆を和合する者、是れを第三の受梵の福と謂ふなり。復次に若し多薩阿竭初轉法輪の時、諸天世人轉法輪を勸請せり、是れを第四受梵の福と謂ふなり。是れを四受梵の福と謂ふなり」と。爾の時異比丘有り、世尊に白して言さく、「梵天の福竟に多少と爲すや」、世尊告げて曰はく、「諦に聽け諦に聽いて、善く之を思念せよ。吾今當に說くべし」と。諸比丘、對へて曰さく、「是の如し」と。世尊告げて曰はく、「閻浮里地東西七千由旬、南北二萬一千由旬、地形車に像たり、其の中の衆生の所有の功德、正に一輪王の功德と等しかるべし。瞿耶尼は縱廣三十二萬里、地形半月の如し、比丘當に知るべし、閻浮地の人民及び一輪王の德を彼の人に比するに、彼の一人の德と等し。復次に比丘、弗于逮里地は縱廣三十六萬里、地形方正にして、閻浮里地及び瞿耶尼の二方の福を計るも、故に彼の弗于逮の一人の

を受く、若し復た少時に福を作し、長時に罪を作さば、後生るゝの時、少時に福を受け、長時に罪を受けん。若し復少時に罪を作り、長(時)に復罪を作さば、彼の人後生るゝの時、先きに苦しみ、後にも苦しまん。若し復少時に於て、諸の功德を作し、分段に布施せば、彼後生るゝに於て、先きに樂にして後も樂ならん。是れを比丘、此の因緣を以て、先きに苦にして、後に樂、亦此の因緣に由つて、先きに樂にして、後に苦、亦此の因緣に由つて、先きに苦にして後にも苦、亦此の因緣に由つて、先きに樂にして、後にも樂と謂ふなり」と。比丘佛に白して言さく、「唯願はくは世尊、若し衆生有つて、先きに樂にして後に樂を欲せば、當に布施を行じ、此の先きに樂にして、後にも樂を求むべきや」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、比丘、汝の言ふ所の如し、若し衆生有つて、涅槃及び阿羅漢道乃至佛道を成ぜんと欲せば、當に中に於て布施を行じ、諸の功德を作すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「四人有りて世に出現す。云何が四と爲すや、或は人有り、身樂しみて心樂しまず。或は人有り、心樂しみて、身樂しまず、或は人有り、心も亦樂しまず、身も亦樂しまず。或は人有り、身も亦樂しみ、心も亦樂しむ。彼何等の人か、身樂しみて心樂しまざるや、是に於て福を作す凡夫の人は、四事に於て衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を供養して、短乏する所無きも、但し餓鬼・畜生・地獄の道を免れず、亦復惡趣の中を免れず、是れを此の人身樂しみて心樂しまずと謂ふなり。彼何等の人か心樂しみて身樂しまざるや、所謂阿羅漢功德を作さず、是に於て四事供養の中、自ら辦ずること能はず、終に得ること能はず、但し地獄餓鬼畜生の道を免るゝこと、猶し羅漢の唯喩の如し。比丘、是れを此の人心樂しみて身樂しまずと謂ふなり。彼何等の人か、身も亦樂しまず、心も亦樂

く、彼便ち此の見有り、『施有り、受者有り、今世後世有り、世に沙門婆羅門有り、亦善惡の報ひ有り、父有り、母有り、世に阿羅漢有り』と。彼の人若し復富貴の家、饒財多寶の者を見れば、便ち是の念を作す『此の人は昔日の布施の致す所』と、若し復貧賤の家を見れば、『此の人昔皆布施せざりしに由るが故に、我今時に隨つて布施して、後更に貧賤の家に生るゝこと莫かるべし』と。然して常に好み喜んで人に施し惠む。彼の人若し沙門道士を見れば、時に隨つて可否の宜を問訊し、衣被・飮食・床臥の具・病瘦の醫藥を供給して、盡く之を惠施す。若し復命終の後、善處天上に生れ、若し人中に在りては富貴の家に生れて饒財多寶ならん。是れを此の人先きに樂にして後にも樂なりと謂ふなり」と。

是の時一比丘有つて、世尊に白して曰さく、「我今世の衆生を觀ずるに、先きに苦にして後に樂なり。或は衆生有り、今世に於て、先きに樂にして、後に苦なり。或は衆生有り、今世に於て、先きに苦にして後にも苦なり。或は衆生有り、先きに樂にして後にも樂なり」と。爾の時世尊、彼の比丘に告げたまはく、「此の因緣有つて、衆生の類は先きに苦にして後に樂ならしむ。亦復此の衆生有つて、先きに樂にして、後に苦なり。亦復此の衆生有り、先きに苦にして、後にも苦なり。亦復衆生有つて、先きに樂にして後にも樂なり」と。比丘、佛に白さく、「復何の因緣を以て、先きに樂にして、後に苦なるや、復何の因緣を以て、先きに苦にして、後にも樂なるや、復何の因緣を以て先きに苦にして、後にも苦なるや、復何の因緣を以て、先きに樂にして、後に樂なるや」と、世尊告げて曰はく、「比丘當に知るべし、若し人壽百歲は正しく十を十すべき耳、若し壽をして冬夏春秋に終らしめ、若し復比丘、百歲の中、諸の功德を作し、百歲の中、諸の惡業を造り、諸の邪見を作し、彼異時に於て、或は冬に樂を受け、夏に苦を受く。若し百歲の中、功德具足して未だ曾て短有らず、若し復中に在つて、百歲の內、諸の邪見を作し、不善行を造り、先きに其の罪を受け、後に其の福

長者種、或は大姓の家、及び諸の富貴の家に生れ、衣食充足して便ち彼の家に生る。然るに彼の人恒に邪見を懷き、邊見と共に相應す。彼便ち此の見有り、『施無く、受者無く、亦今世後世の報無く、亦父母無く、世に阿羅漢無く、亦得證の者有ること無く、亦復善惡の報ひ有ること無し』と。彼の人此の邪見有り、若し復富貴の家有るを見ては是の念を作す、『此の人久しく此の財寶有る耳、男ならば久しく是れ男、女ならば久しく是れ女、畜生ならば久しく是れ畜生』と、布施を好まず、戒律を持たず。若し彼沙門婆羅門の戒を奉持する者を見れば、瞋恚の心を起す。此の人は虛僞なり、何れの處にか、福報の應有るべき、彼の人身壞命終の後に地獄の中に生ぜん。若し人と作ることを得ば貧窮の家に在つて生れ、衣食有ること無く、身體倮露にして衣食充たざらん。是れを此の人先きに樂にして、後に苦なりと謂ふなり。

何等の人か、先きに苦にして後にも苦なりや。是に於て人有つて貧賤の家、或は殺人種、或は工師種、及び諸の下劣の家に生れて、衣食有ること無く、此の人彼の家に生る。然るに復彼の人身に邪見を抱き、邊見と共に相應し、彼の人便ち此の見有り、『施無く、受者有ること無く、亦今世後世善惡の報ひ無く、亦父母無く、世に阿羅漢無し』と、布施を好ます、戒を奉持せず、若し復沙門婆羅門を見れば、卽ち瞋恚を興し、賢聖の人に向ひ、彼の人貧しき者を見ては言く、『久しき來より是れ有り』と、富者を見ては言く、『久しき來より是れ有り』と、父を見ては『昔は是れ父』と。母を見ては、『昔は是れ母』と。彼若し身壞命終せば地獄の中に生じ、若し人中に生るれば、極めて貧賤爲り、衣食充たざらん、是れを此の人先きに苦にして、後にも苦と謂ふなり。

彼云何が人、先きに樂にして、後にも樂なるや。彼或は一人有り、富貴の家に生れ、或は剎利種、或は梵志種、或は國王種に生れ、或は長者種の生れ、及び諸の饒財多寶の家の生れにして、所生の處に乏短有ること無し。彼の人便ち此の家に生れ、然して復彼の人正見有つて、邪見有ること無

【三】邊見。前出。

巻の第二十一

苦樂品第二十九

一

[一]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「今四人有つて世に出現す。云何が四と爲すや、或は人有り、先きに苦にして後に樂なり。或は人有り。先きに樂にして、後に苦なり。或は人有り、先きに苦にして後に苦なり。或は人有り、先きに樂にして後に樂なり。云何が人、先きに苦にして後に樂なるや、或は一人有り、卑賤の家に生れ、或は殺人種、或は工師種、或は邪道の家の生れ、及び餘の貧匱の家衣食充たず、彼の人便ち彼の家に生る。然るに復彼の人邪見有ること無く、彼便ち此の見有り『施有り、受者有り、今世有り、後世有り、沙門婆羅門有り、父有り、母有り、世に阿羅漢等の教を受くる者有り、亦善惡の果報有り』と、若し彼極富の家を見[二]れば、以て昔日の施德の報ひ、不放逸の報ひと知り、彼若し衣食無き家を見れば、此の人等、施德を作さゞれば、恒に貧賤に値ふと知り、我今復貧賤に値ひて衣食有ること無きは、皆曩日に福を造らざりしに由るが故に、世の人を誑惑し、放逸の法を行じ、此の惡行の報ひに緣つて、今貧賤に値ひ、衣食充たず』と、若し復沙門婆羅門の善法を修むる者を見れば、便ち懺悔に向ひ、往の所作を改め、若し復所有の遺餘を人に等分に與へば、彼身壞命終して善處天上に生れ、若し人中に生るれば、多財饒寶乏短する所無けん。是れを此の人先きに苦にして、後に樂なりと謂ふなり。

何等の人か先きに樂にして後に苦なるや、是に於て或は一人有り、豪族の家、或は刹利種、或は

【一】A IV. 85

【二】原文の有は、見の謬寫か。

此の世に來至して苦際を盡くす。若し勇猛の者なれば即ち此の間に於て苦際を盡すこと、猶し邠陀利華の晨朝に花を剖ぶれば、暮に向つて萎死するが如し。是れを邠陀利花の沙門と謂ふなり。彼云何が柔軟沙門なるや。或は一人有つて五下分結を斷じて阿那含を成じ、即ち彼に於て般涅槃して此の世に來らず。是れを柔軟沙門と謂ふなり。彼云何が柔軟中の柔軟沙門なるや。或は一人有つて有漏盡きて無漏を成じ、心解脫し、智慧解脫し、現法中に於て自身に作證して自ら遊戲し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復胎を受けず。實の如くに之を知る。是れを柔軟中の柔軟沙門と謂ふなり。是れを比丘、此の四人有つて、世に出現すと謂ふなり。是の故に諸比丘、當に方便を求めて、柔軟の中に於ける柔軟沙門と作るべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

修陀・修摩均　賓頭盧と翳と手　鹿頭と廣演義　後に樂しむと柔軟經となり

增壹阿含經卷第二十

聲聞品第二十八

先きの憂慼の患ひ有ること無く、苦無く、樂無き護念清淨の、心四禪に遊ぶ。是れを此の四沙門の樂有りと謂ふなり。復次に比丘、若し比丘有つて、此の先きの苦を行じて、後に沙門の四樂の報ひを獲、三結の網を斷ぜば須陀洹を成じ、不退轉の法、必ず滅度に至る。復次に比丘、若し此の三結を斷じ、淫・怒・癡薄ければ、斯陀含を成じ、此の世に來至して必ず苦際を盡す。復次に比丘、若し比丘有つて[一一]五下分結を斷ぜば、阿那含を成じ、彼に於て般涅槃して、此に來らず。復次に比丘、若し比丘有つて、有漏盡きて無漏を成じ、心解脫し、智慧解脫し、現法中に於て、身に作證して自ら遊戲し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復胎を受けず、實の如く之を知る。是れ彼の比丘、此の先苦の法を修めて、後に沙門の四果の樂を獲るなり。是の故に諸比丘、當に方便を求めて、此の先きに苦にして後の樂を成ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[一二]聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「[一三]四種の人有りて世に出現す。云何が四と爲すや。黃藍花に似たる沙門有り、邠陀利華に似たる沙門有り、柔軟に似たる沙門有り、柔軟中に於ける柔軟沙門となり。彼云何が名けて黃藍花に似たる沙門と爲すや。或は一人有つて、[一四]三結使を斷じて須陀洹を成じ、不退轉の法にして、必ず涅槃に至り、極遲のものも七死七生を經、或は復[一五]家々[一六]一種なり。猶し、黃藍の花の朝に取りて暮に長ずるが如し。此の比丘も亦復是の如く、三結使盡きて須陀洹を成じ、不退轉の法にして、必ず涅槃に至り、極遲のものも七死七生を經、若し方便勇猛の意を求むる者は、家々一種にて便ち道迹を成ず。是れを名けて黃藍花の沙門と爲すなり。彼云何が名けて邠陀利花の沙門と爲すや。或は一人有つて三結使盡きて淫怒癡薄く、斯陀含を成じ、此の世に來至して苦際を盡す。若し小遲の者なれば、

【一一】　五下分結(Pañca orambhāgiyā saṃyojanā)。とは、欲界に屬する有情・煩惱をいひ、
一、身見(Sakkāyadiṭṭhi)。
二、疑　(Vicikicchā)。
三、戒禁取見(Sīlabbataparāmāsa)。
四、欲貪(Kāmarāga)。
五、瞋　(Paṭigha)。
【一二】　A. IV. 88 Saññojana
【一三】　四種の人、巴利文には、
1. Samaṇa macala　(マチヤラに似し人)。
2. Samaṇapuṇḍarīka (邠陀利華に似し人)。
3. Samaṇapaduma　(鉢頭摩華に似し人)。
4. Samaṇasukhumāla　(柔軟草に似し人)。
【一四】　三結使は、三結に同じ。
【一五】　家々(梵、Kulaṃkula) とは、二或は二以上の家に生ずる人の義、須陀洹果と斯陀含果の中間に位する聖者。
【一六】　一種(梵、Ekavīcika)。とは一間ともいひ、斯陀含果と阿那含果の中間に位する聖者。

し、王當に此れを知るべし、四の事緣本有つて、先きに苦にして、後に樂なり。云何が四と爲すや、清旦早起し、先きに苦にして、後に樂なり。設し油酥を服せば、先きに苦にして後に樂なり。若し藥を服する時は、先きに苦にして後に樂なり。家業婢娶は先きに苦にして後に樂なり、是れを大王、此の四の事緣本有つて、先きに苦にして後に樂なりと謂ふなり」と。爾の時波斯匿王、世尊に白して言さく、「世尊の說きたまふ所は誠に其の宜しきを得たり。此の四の事緣本有つて、先きに苦にして後に樂なり、然る所以は、「我今日の如きは、此の四事を觀ること、掌に珠を觀るが如し、皆是れ先きに苦にして後に樂なり」と。爾の時世尊、波斯匿王の與に、微妙の法を說きたまひ、歡喜の心を發しぬ。王、法を聞き已つて、世尊に白して言さく、「國事猥多し、所在に還歸せんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「是れ時を知るべし」と。時に波斯匿王、卽ち座より起ち、頭面に足を禮し、佛を遶ること三匝して、便ち退いて去りぬ。

王去りて未だ久しからずして、是の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「今此の四の事緣本有り、先きに苦にして後に樂なり、云何が四と爲すや、梵行を修習するは先きに苦にして後に樂なり。經文を誦習するは、先きに苦にして後に樂なり。坐禪念定は先きに苦にして後に樂なり。出入息を數ふるは先きに苦にして、後に樂なり。是れを比丘、此の四事を行ぜば、先きに苦にして、後に樂なりと謂ふなり。其れ比丘有つて、此の先きに苦にして、後に樂の法を行ぜば、必ず應に沙門として、後に果報の樂を得べし。云何が四と爲すや、若し比丘有つて、此の法を勤めて欲惡法無く、喜安を念持して、心初禪に遊び、沙門の樂しみを得と謂ふなり。復次に有覺有觀息み、內に喜びの心有つて、專精一意に、無覺無觀の喜安を念持して二禪に遊ぶ。是れを第二沙門の樂を得と謂ふなり、復次に、念無く、心護に遊び、恒に自ら覺知し、身に樂しみ有るを覺え、諸の賢聖の喜望する所の念の樂しみを護り、心三禪に遊ぶ。是れを第三沙門の樂しみを獲と謂ふなり。復次に苦樂已に盡き、

已に法有れば則ち比丘僧有り、法有れば則ち四部の衆有り、法有れば則ち四姓有つて世に在り。然る所以は、法世に在るに由つて、則ち賢劫中に大威王有つて世に出づ。是れより已來便ち四姓有つて世に在り、若し法世に在らば、便ち四姓有つて世に在り、刹利・婆羅門・工師・居士種あり、若し法世に在らば、便ち轉輪聖王有つて位絶えず。若し法世に在らば便ち四天王種・兜術天・艷天・化自在天・他化自在天有つて便ち世に在り、若し法世に在らば、便ち欲界天・色界天・無色界天有りて世間に在り。若し法世に在らば、便ち須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛果・佛乘有つて、便ち世に現る。是の故に比丘、當に善く法を恭敬すべし、彼の比丘時に隨つて供養し、其の所須を給せば當に彼の比丘に語つて是の語を作すべし『善い哉、善い哉、汝の言ふ所の如し、今日說く所は、眞に是れ如來の所說なり』と、是れを比丘、此の四大廣演說の義有りと謂ふなり、是の故に諸比丘、當に心を持し、意を執して此の四事を行ずべし。漏脫有ること勿れ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時王波斯匿、淸旦四種の兵を集め、寶羽の車に乘り、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時世尊、大王に問ひて曰はく、「大王何れより來ると爲すや、又塵土體を坌し、四種の兵を集む、何の事緣有るや」と。波斯匿王世尊に白して曰さく、「今國界に大賊有つて起り、昨夜半兵を興して擒獲し、然して身體疲倦せば、還えつて宮に詣らんと欲し、然も中道に復是の念を作さく、『我應に先づ如來の所に至り、然る後に宮に入るべし』と。此事緣を以て寤寐にも安ぜざりしに、今已に賊を壞つて功勞有る在り、歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず、故に來至して拜跪し、覲省するなり。設し我昨夜卽ち兵を興さずば、則ち賊を獲ざるなり」と。爾の時世尊告げて曰はく、「是の如し、大王、王の所說の如

藏に非らざるなり』と、卽ち當に發遣して去らしむべし。此れを初演大義の本と名くるなり。復次に比丘、若し比丘有つて、南方より來つて是の語を作し、『我能く經を誦し、法を持し、禁戒を奉行し、博學多聞なり』と。正使比丘說く所有らんも、承受すべからず、篤く信ずるに足らず、當に彼の比丘を取つて、共に論議すべし、正使比丘、說く所有らんも、義と相應せずば、當に之を發遣すべし。設し義と相應せば、當に彼の人に報へて曰ふべし『此れは是れ義說にして正しく經の本に非ず、爾の時當に彼の義を取るべし、經の本を受くること勿れ』と。然る所以は、義は經を解するの源なればなり。是れを第二演大義の本と謂ふなり。復次に比丘、若し比丘有つて西方より來り『經を誦し、法を持し、禁戒を奉行し、博學多聞なり』と。當に彼の比丘に向つて契經・律・阿毘曇を說くべし。然して彼の比丘正しく味を解して義を解せずば、當に彼の比丘に語げて是の語を作すべし。『我等此の語を明にせず、是れ如來の所說たるや(所說に)非らざるや』と。正使契經・律・阿毘曇を說く時、味を解して義を解せずば、彼の比丘の說く所を聞くと雖も、亦善しと譽むるに足らず、亦惡しと言ふに足らず。復戒行を以て之を問ひ、設し與に相應せば念じて之を承受せよ。然る所以は、戒行、味と相應し、義は明にすべからざるが故に、是れを第三の演義と謂ふなり。復次に比丘、若し比丘有つて北方より來り、經を誦し、法を持ち、禁戒を奉行し、『諸賢、疑難有らば、便ち來つて義を問へ、我當に汝の與に之を說くべし』と。設し彼の比丘、所說有らんも、承受するに足らず、諷誦するに足らず、然して當に彼の比丘に向つて、契經・律・阿毘曇・戒を問うべし。共に相應せば便ち當に義を問うべし。若し復義と相應せば、便ち當に彼の比丘を歎譽すべし。『善い哉、善い哉、賢士、此れは眞に是れ如來の所說の義にして錯亂せず、盡く契經・律・阿毘曇・戒と共に相應す』と、當に法を以て供養し、彼の比丘を待つべし。然る所以は、如來は法を恭敬するが故に、共れ法を供養すること有る者は、則ち我を恭敬し、已に共れ法を觀る者は則ち我を觀、已に法有れば、則ち我有り、

「所謂輕飄・動搖・速疾の物、此れを名けて外風と爲す、是れを世尊、二種有り、其の實四有つて數に八有りと謂ふなり。是の如く世尊、我此の義を觀ず、人若し命終する時は四種各々其の本に歸するなり」と。世尊告げて曰はく、「無常の法も亦有常と幷せず、然る所以は、地種に二有り、或は內、或は外、爾の時內地種は是れ無常の法、變易の法にして、外地種は恒に住して變易せず、是れ地に二種有つて、有常なるものと無常なるものと相應せずと謂ふなり。餘の三大も亦復是の如く、有常なるものと無常なるものと共に相應せず。是の故に鹿頭、八種有りと雖も、其の實は四有り、是の如く鹿頭、當に是の學を作すべし」と。爾の時鹿頭、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

一〇 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「今四大廣演の義有り、云何が四と爲すや、所謂契經・律・阿毘曇・戒なり。是れを四と爲すと謂ふなり。比丘、當に知るべし、若し比丘有つて東方より來つて經を誦し、法を持し、禁戒を奉行し、彼便ち是の語を作さく、『我能く經を誦し、法を持し、禁戒を奉行し、博學多聞なり』と。正使彼の比丘、說く所有らんも、承受すべからず、篤く信ずるに足らず、當に彼の比丘を取つて共に論議し、法を案じて共に論ずべし。云何が法を案じて共に論ずるや、所謂法を案じて論ずとは、此の四大廣演の論、是れを契經・律・阿毘曇・戒と謂ひ、當に彼の比丘に向つて契經を說き、律を布現し、法を分別すべし。正使契經を說く時、律を布現し、法を分別する時、若し彼の布現、所謂契經と相應し、律と法とに相應せば、便ち之を受持せよ、設し契經・律・阿毘曇と相應せずば、當に彼の人に報へて是の語を作すべし、『卿、當に知るべし、之れは此れ、如來の所說に非ず、然れば卿の說く所の者は、正經の本に非ず、然る所以は、我今契經・律と阿毘曇とを說くに、都て與に相應せず』と、相應せざるを以て、當に戒行を問ふべし、設し戒行と相應せずば、當に彼の人に語ぐべし、『此れは如來の

【10】 A. IV. 180 Mahāpadesa. D. 16. 4 7—11

得、閑靜の處に在つて道術を思惟し、所謂族姓子の、鬚髮を剃除し、三法衣を著け、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復胎を受けず、實の如く之を知れり。是の時梵志卽ち阿羅漢を成ぜり。

爾の時尊者鹿頭、世尊に白して言さく、「我今以て阿羅漢の行、所修の法を知れり」と。世尊告げて曰はく、「汝云何が阿羅漢の行を知るや」と。鹿頭、佛に白さく、「今四種の界有り、云何が四と爲すや、地界・水界・火界・風界、是れを如來、此の四界有りと謂ふなり。彼の時人命終れば、地は卽ち自ら地に屬し、水は卽ち自ら地に屬し、火は卽ち自ら火に屬し、風は卽ち自ら風に屬す」と。世尊告げて曰はく、「云何が比丘、今幾(千)の界有るや」。鹿頭、佛に白さく、「是れ實に四界、義に八界有り」と。世尊告げて曰はく、「云何が四界にして義に八界有りや」と。鹿頭、佛に白さく、「今四界有り」、「云何四界なるや」、「地、水、火、風是れを四界と謂ふなり」。「彼云何が義に八界有りや」、「地界に二種有り、或は內地、或は外地なり」。「彼云何が名けて內地の種と爲すや」、「髮毛・爪齒・身體・皮膚・筋骨・髓腦・腸胃・肝膽・脾腎、是れを名けて內地の種と爲すなり」、「云何が外地の種と爲すや」、「諸有の堅牢の者、此れを名けて外地の種と爲す。此れを名けて二の地種と爲すなり」。「彼云何が水種と爲すや」、「水種に二有り、或は內水種、或は外水種なり。內水種とは唌・唾・淚・尿・血・髓、是れを名けて內水種と爲し、諸の外の軟弱物の者、此れを名けて外水種と爲すなり。是れを二の水種と名く」。「彼云何が名けて火種と爲すや」、「火種に二有り、或は內火、或は外火なり」。「彼云何が名けて內火と爲すや」、「所食の物皆悉く消化して遺餘有ること無し、此れを名けて內火と爲すなり」。「云何が名けて外火と爲すや」、「諸の外物の熱盛の物、此れを名けて外火種と爲すなり」、「云何が名けて風種と爲すや」、「又風種に二有り、或は內風有り、或は外風有り、所謂脣內の風、眼風・頭風・出息風・入息風・一切の支節の間風、此れを名けて內風と爲す」。「彼云何が名けて外風と爲すや」、

しや、非なるや、二・三・四・五なるや、非なるや、然るに此の人八關齋の法を持ちて命終を取れり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、汝の言ふ所の如く、八關齋を持ちて命終を取れり」と。

爾の時東方の境界普香山の南に、優陀延比丘有り、無餘涅槃界に於て般涅槃を取れり。爾の時世尊、臂を屈伸する頃に、往いて彼の髑髏を取り來つて梵志に授與し、梵志に問ひて曰はく、「男なるや、女なるや」と。是の時梵志復手を以て之を擊ち、世尊に白して言さく、「我此の髑髏を觀ずるに、元本亦復男に非ず、亦復女に非ず。然る所以は、我此の髑髏を觀ずるに、亦生を見ず、亦斷を見ず、亦周旋往來を見ず、然る所以は、八方上下を觀ずるに、都て音響無し、我今世尊、未だ此の人は是れ誰の髑髏なるかを審にせず」と。世尊告げて曰はく、「止みなん、止みなん、梵志、汝竟に是れ誰れの髑髏なるかを識らず、汝當に之を知るべし、此の髑髏は終り無く、始め無く、亦生死無し、亦八方上下に適くべき所の處無し。此れは是れ、東方境界の普香山の南にて、優陀延比丘、無餘涅槃界に於て般涅槃を取れり。是れ阿羅漢の髑髏なり」と。爾の時梵志、此の語を聞き已つて、未曾有なりと歎じ、即ち佛に白して言さく、「我今此の蟻子の虫を觀ずるに、從來するの處皆悉く之を知る。鳥獸の音響即ち能く別ち知る。此れは是れ雄、此れは是れ雌と。然るに我此の阿羅漢を觀ずるに、永く見る所無く、亦來る處を見ず、亦去る處を見ず、如來の正法は甚だ奇特と爲す。然る所以は、諸法の本は如來の神口より出づ。然して阿羅漢は經法の本より出づ」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、梵志、汝の言ふ所の如し、諸法の本は如來の口より出づ。正使諸天世人魔若しは魔天も、終に羅漢の所趣を知ること能はず」と。爾の時梵志頭面に足を禮し、世尊に白して言さく、「我能く盡く九十六種の道の趣き向ふ所の者を知り、皆悉く之を知るも、如來の法の趣き向ふ所は分別すること能はず、唯願はくは世尊、道次に在ることを得ん」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、梵志、快く梵行を修むるも亦、人汝の趣き向ふ所處を知ること有ること無し」と。爾の時梵志即ち出家學道を

して何處に生ぜりと爲すや」と。是の時梵志復手を以て之を撃ち、世尊に白して言さく、「此の人命終して人道に生ぜり」と。世尊告げて曰はく、「夫れ餓死の人、善處に生ぜんと欲すること、此れ然らず、三惡趣に生れし者に此の理有るべし」と。是の時梵志復手を以て之を撃ち、世尊に白して言さく、「此の女人は持戒完具して命終を取れり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、汝の言ふ所の如し。彼の女人の身は持戒完具して此の命終を致せり、然る所以は、夫れ男子女人有つて、禁戒完具する者は、設し命終の時には、當に二趣若しくは天上の人中に墮すべし」と。

爾の時世尊復一髑髏を捉へて梵志に授與し、問ひて曰はく、「男なるや、女なるや」と。是の時梵志復手を以て之を撃ち、世尊に白して言さく、「此の髑髏は男子の身なり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、汝の言ふ所の如し、此の人何の疾病に由つて此の命終を致せしや」と。梵志復手を以て之を撃ち、世尊に白して言さく、「此の人病無く、人の爲に害せられしが故に命終を致せり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、汝の言ふ所の如く、人の爲に害せられしが故に命終を致せり。」世尊告げて曰はく、「此の人命終して何處に生ぜしと爲すや」と。是の時梵志復手を以て之を撃ち、世尊に白して言さく、「此の人命終して善處天上に生ぜり」と。世尊告げて曰はく、「汝の言ふ所の如きは、前の論と後の論とは相應せず」と。梵志佛に白さく、「何の緣本を以て相應せざるや。」世尊告げて曰はく、「諸有の男女の類、人の爲に害せられて命終を取りしものは、盡く三惡趣に生ずるに、汝云何がして善處天上に生ぜりと言ふや」と。梵志復手を以て之を撃ち、世尊に白して言さく、「此の人五戒を奉持し、兼ねて十善を行ひしが故に命終を致して、善處天上に生ぜり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、汝の言ふ所の如く、持戒の人は觸犯せらるゝこと無ければ、善處天上に生る」と。世尊復重ねて告げて曰はく、「此の人幾戒を持ちて命終を取れりと爲すや」と。是の時梵志復專精一意にして、他の異想なく、手を以て之を撃ち、世尊に白して言さく、「一戒を持ち

以ての故に命終を致せり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、梵志、汝の言ふ所の如し。又彼懷妊は何の方を以て治するや」と。梵志佛に白さく、「原此の病は當に好酥醍醐を須ひて之を服せば則ち差ゆ」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、是の如し、汝の言ふ所の如し、今此の女人已に命終を取りて、何處に生ぜしと爲すや」と。梵志佛に白さく、「此の女人は已に命終を取りて畜生の中に生ぜり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、梵志、汝の言ふ所の如し」と。

是の時世尊、復更に一の髑髏を捉へて梵志に授與し、梵志に問ひて曰はく、「男なるや、女なるや」と。是の時梵志復手を以て之を擊ち、世尊に白して言さく、「此の髑髏は男子の身なり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、汝の言ふ所の如し、何の疾病に由つて此の命終を致せしや」と。梵志復手を以て之を擊ち、世尊に白して言さく、「此の人の命終は飮食の過差なり、又暴下に遇ふが故に命終を致せり」と。世尊告げて曰はく、「此の病は何の方を以て治するや」と。梵志佛に白さく、「三日の中、糧を絕して食せずば、便ち除愈を得ん」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、汝の言ふ所の如し。此の人命終して何處に生ぜしと爲すや」と。是の時梵志復手を以て之を擊ち、世尊に白して曰さく、「此の人命終して、餓鬼の中に生ぜり。然る所以は、意想水に著するが故に」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、汝の言ふ所の如し」と。

爾の時世尊、復更に一髑髏を捉へて梵志に授與し、梵志に問うて曰はく、「男なるや、女なるや」と。是の時梵志復手を以て之を擊ち、世尊に白して言さく、「此の髑髏は女人の身なり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、汝の言ふ所の如し。此の人の命終は何の疾病に由りしや」と。梵志復手を以て之を擊ち、世尊に白して言さく、「產むべきの時、以て命終を取れり」と。世尊告げて曰はく、「云何が產むべきの時、以て命終を取りしや」。梵志復手を以て之を擊ち、世尊に白して言さく、「此の女人の身は氣力虛竭し、又復飢餓にて命終を致せり」と。世尊告げて曰はく、「此の人命終

〔七〕聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城耆闍崛山中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時世尊靜室より起ちて靈鷲山を下り、及び〔八〕鹿頭梵志を將ひて漸く遊行して大畏塚間に到りたまふ。爾の時世尊、死人の髑髏を取り、梵志に授與して是の說を作したまはく、「汝今梵志、星宿を明にし、又醫藥を兼ねて能く衆病を療治し、皆諸の趣きを解し、亦復能く人の死の因緣を知る。我今汝に問はん、此れは是れ何人の髑髏なるや、是れ男なるや、是れ女なるや、復何の病に由つて命終を取りしや」と。是の時梵志卽ち髑髏を取りて反覆觀察し、又復手を以て取りて之を撃ち、世尊に白して曰さく、「此れは是れ男子の髑髏にして女人に非るなり」と。世尊告げて曰く、「是の如し、梵志、汝の言ふ所の如く、此れは是れ男子にして女人に非るなり。」世尊問うて曰はく、「何に由つて命終せしや、梵志復手を以て捉へて之を撃ち、世尊に白して言さく、「此れは衆病集湊し、百節酸疼せしが故に命終を致せり」と。世尊告げて曰はく、「當に何の方を以て之を治すべきや」と。鹿頭梵志佛に白して言さく、「當に〔九〕呵梨勒果を取り、幷せて蜜を取つて之に和し、然る後に之を服せば、此の病は愈ゆることを得べし」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、汝の言ふ所の如し、設し此の人此の藥を得ば亦命終せざりしならん。此の人今日命終つて何處に生れしと爲すや」と。時に梵志聞き已つて復髑髏を捉へて之を撃ち、世尊に白して言さく、「此の人命終して三惡趣に生れて、善處に生れず」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、梵志、汝の言ふ所の如く、三惡趣に生れて善處に生れず」と。是の時世尊、復更に一の髑髏を捉へて梵志に授與し、梵志に問ひて曰はく、「此れは是れ何人ぞや、男なるや、女なるや」と。是の時梵志復手を以て之を撃ち、世尊に白して言さく、「此の髑髏は女人の身なり」と。世尊告げて曰はく、「何の疾病に由つて此の命終を致せしや」と。是の時鹿頭梵志復手を以て之を撃ち、世尊に白して言さく、「此の女人は懷妊の故に命終を致せり」と。世尊告げて曰はく、「此の女人は何に由つて命終せしや」と。梵志佛に白さく、「此の女人は產月滿たずして、復兒を產みしを

〔七〕Com. o Then G. VV. 181--182
〔八〕鹿頭(Migasīla)。
〔九〕呵利勒果(Haritaki)。

し瞋恚愚癡の心起ること有らば、豈善き眠りを得るや」童子報へて言さく、「善き眠りを得ざるなり。然る所以は、三毒の心有るに由るが故に」と。世尊告げて曰はく、「如來は今日復此の心無し、永く盡きて餘り無く、亦根本無し、童子當に知るべし、我今當に四種の座を說くべし、云何が四と爲すや。卑座有り、天座有り、梵座有り、佛座有り、童子當に知るべし、卑座とは是れ轉輪聖王の座なり。天座とは釋提桓因の座なり。梵座とは梵天王の座なり。佛座とは是れ四諦の座なり。卑座とは須陀洹に向ふ座なり。天座とは須陀洹を得し座なり。梵座とは斯陀含に向ふ座なり。佛座とは四意止の座なり。卑座とは斯陀含を得し座なり。天座とは阿那含に向ふの座なり。梵座とは阿那含果を得し座なり。佛座とは四等（心）の座なり。卑座とは欲界の座なり。天座とは色界の座なり。梵座とは無色界の座なり。佛座とは四神足の座なり。是の故に童子、如來は以て四神足の座に坐して快く善き眠りを得、中に於て婬・怒・癡を起さず、已に此の三毒の心を起さゞれば、便ち無餘涅槃界に於て般涅槃し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復有を受けず、實の如く之を知る。是の故に長者子、我此の義を觀じ已れり。是の故に如來は快く善き眠りを得と說くなり」と。爾の時長者子、便ち此の偈を說く、

相見るの日極めて久し　梵志般涅槃し　以て如來の力に逮び　明眠りて滅度を取らん　卑座及び天座　梵座及び佛座　如來は悉く分別したまふ　是の故に善き眠りを得と　自ら人中の尊に歸しまつり　亦人中の上に歸しまつる　我今未だ知ること能はず　何等の禪に依ると爲すや

と。長者子是の語を作し已り、世尊之を然可したまふ。是の時長者子、便ち是の念を作さく、「世尊は已に然可したまへり、我極めて歡喜を懷き、自ら勝ふる能はず」と。卽ち座より起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去る。爾の時彼の童子、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

比丘に四結有りて人の心を覆蔽して開解することを得ず。云何が四と爲すや、一には欲結、人の心を覆蔽して開解することを得ず、二には瞋恚、三には愚癡、四には利養、人の心を覆蔽して開解することを得ず。是れを比丘、此の四結有りて、人の心を覆蔽して開解することを得ずと謂ひ、當に方便を求めて此の四結を滅すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

〔四〕聞くこと是の如し。一時佛、〔五〕阿羅毘祠の側に在しき。爾の時極めて盛寒爲り、樹木凋落しぬ。爾の時〔六〕手阿羅婆長者子、彼の城中を出でゝ外に在りて經行し、漸く世尊の所に來至し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時彼の長者子、世尊に白して言さく、「不審なり、宿宵の中善き眠りを得たまひしや」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、童子、快善眠れり」と。時に長者子佛に白さく、「今盛寒の日、萬物凋落す。然るに復世尊は坐するに草蓐を用ひ、著くる所の衣裳極めて單薄たり、云何が世尊、是の說を作して、『我快く善き眠りを得たり』と(曰ふや)」と。世尊告げて曰はく、「童子、諦に聽け、我今還えつて汝に問はん、隨所に之を報へよ、猶し長者の家は牢く屋舍を治して、風塵有ること無きが如し。然して彼の屋中に床蓐氍氀毾㲪有つて事々倶に具り、四の玉女有り、顏貌端正して、面桃華の如く、世の希有にして視るに厭足無し。好き明燈を燃す。然して彼の長者怯れて善き眠りを得るや」と。長者子報へて曰さく、「是の如し、世尊、好き床臥有らば、快く善き眠りを得ん」と。世尊告げて曰はく、「云何が長者子、若し彼の人快く善き眠りを得るも、時に欲意起ること有らば、此の欲意に緣つて眠りを得ざるや」と。長者子對へて曰さく、「是の如し、世尊、若し彼の人に欲意起らば、便ち眠りを得ざるなり」と。世尊告げて曰はく、「彼の如きは欲意盛ならんも、今如來は永く盡きて餘り無し、復根本無し、更に復興らず。云何が長者子、設

【四】A. III. 34
【五】阿羅毘祠(Āḷavi)。
【六】手阿羅婆 (Hatthaka Āḷavaka)。

すべからず。若し食を得る時、善法增益して不善の法損せば此の食は親近すべし。槳も亦二事有り、若し槳を得る時、不善の法を起して、善法損すること有らば、此れ親近すべからず、若し槳を得る時、不善の法損し、善法益すること有らば、此れ親近すべし。夫れ淸信士の法、限戒に五あり、其の中能く一戒、二戒、三戒、四戒を持ち、乃至五戒、皆當に之を持つべし。當に再三能く持者に問ひ、之を持たしむべし。若し復淸信士にして一戒を犯し已れば、身壞命終して地獄の中に生ぜん。若し復淸信士にして一戒を奉持せば、善處天上に生れん、何に況んや二三四五をや」と。是の時彼の人、佛より敎を受け已つて、頭面に足を禮し、便ち退いて去りぬ。彼の人去りて遠からざるに、是の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「今より已後、優婆塞に五戒及び三自歸を授くることを聽す、若し比丘にして淸信士女に戒を授けんと欲する時は、敎へて臂を露はし、叉手して合掌せしめ、敎へて姓名を稱し、佛法衆に歸すること再三、敎へて姓名を稱し、佛法衆に歸し、復更に自ら稱して、『我今已に佛に歸し、法に歸し、比丘僧に歸しまつる』と。釋迦文佛、最初五百の賈客の三自歸を受け、形壽を盡して殺さず、盜まず、婬せず、欺かず、飮酒せずと(いふが)如し。若しは一戒を持つて餘の四戒を封じ、若しは二戒を受けて、餘の三戒を封じ、若しは三戒を受けて餘の二戒を封じ、若しは四戒を受けて、餘の一戒を封じ、若しは五戒を受けて當に具足して之を持つべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

[三] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「今日月に四重の翳有つて光明を放つことを得ざらしむ。何等か四と爲す、一には雲なり、二には風塵、三には烟、四には阿須倫、日月を覆ふて、光明を放つことを得ざらしむ。是れを比丘、日月に此の四翳有つて、日月をして、大光明を放つことを得ざらしむと謂ふなり。此れも亦是の如く、

【三】 A. IV.50 Upakkilesā

爾の時長者世尊に白して曰さく、「我兄跋提及び姉難陀は、如來の法化を受けしや」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、長者、今跋提・難陀は已に四諦を見、諸の善法を修む」と。爾の時優婆迦尼長者世尊に白して曰さく、「我等の居門極めて大利を獲たり」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、長者、汝の言ふ所の如し、汝今父母極めて大利を獲、後世の福を種えたり」と。爾の時世尊、長者の與に微妙の法を說きたまひ、長者法を聞き已つて卽ち座より起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去り、王阿闍世の所に往詣し、一面に在りて坐す。爾の時王、長者に問うて曰く、「汝の兄及び姉は如來の化を受けしや」と。對へて曰く、「是の如し、大王」と。王此の語を聞いて歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず、卽ち鐘を撃ち、鼓を鳴らし、城內に告勅すらく、「今より已後、佛に事ふる家に貫輸する所有らしむること無れ、亦佛に事ふるの人を來迎去送せしめよ。然る所以は、此れ皆是れ我道の法の兄弟なればなり」と。爾の時王阿闍世、種々の飮食を出し、持して長者に與ふ。時に長者便ち是の念を作さく、「我竟に世尊の、夫れ優婆塞の法、何等の食を食すべしと爲すや、何等の漿を飮むべきやを說きたまふを聞かず、我今先づ世尊の所に往至して此の義を問ひ、然る後に當に食すべし」と。爾の時長者、左右の一人に告げて曰く、「汝世尊の所に往至し、到り已つて頭面に足を禮し、我聲を持して世尊に白して云へ、優婆迦尼長者、世尊に白して曰さく、夫れ賢者の法は當に幾(干)の戒を持すべきや、又幾(干)の戒を犯さば淸信士に非るや、當に何等の食を食すべく、何等の漿を飮むべきや』と」。爾の時彼の人、長者の教を受けて世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ、爾の時彼の人、長者の名を持して世尊に白して曰さく、「夫れ淸信士の法は幾(干)の戒を持つべく、幾(干)の戒を犯さば優婆塞に非るや、又何等の食を食し、何等の漿を飮むべきや」と。世尊告げて曰はく、「汝今當に知るべし、食に二種有りて、親近すべき有り、親近すべからざる有り。云何が二と爲すや、若し親近して食する時に、不善の法を起し、善法損すること有らば、此の食は親近

陀に告げたまはく、「汝今當に此の餅を持して、比丘尼衆・優婆塞・優婆夷衆に與ふべし」と。然るに故に餅の在る有り。世尊告げて曰はく、「此の餅を持して諸の貧窮者に施與すべし」と。然るに故に餅の在る有り、世尊告げて曰はく、「此の餅を持して淨地に棄て、若しは極めて清淨なる水中に著くべし。然る所以は、我終に沙門婆羅門天及び人民の能く此の餅を消すを見ず、如來至眞等正覺を除く」と。對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時母難陀、即ち此の餅を以て淨水中に捨著す、即ち時に火焰起る。母難陀見已つて尋いで恐懼を懷き、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時世尊、漸く與に法を說きたまふ。所謂論とは施論・戒論・在天の論、欲は不淨想、漏を穢汚と爲し、出家を要と爲す」と。爾の時世尊、已に母難陀の心意開解するを見、諸佛世尊の常に說きたまふ所の法、苦・集・盡・道なり。爾の時世尊、盡く母難陀の與に之を說きたまひぬ。是の時老母即ち座上に於て法眼淨を得、猶し白氍の染りて色を爲し易きが如し。此れも亦是の如し。時に母難陀、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。彼已に法を得、法を成じ、孤疑有ること無く、已に猶豫を度して無所畏を得、三尊に承事して五戒を受持せり。爾の時世尊重ねて與に法を說き、歡喜を發さしめたまひぬ。爾の時難陀、世尊に白して曰さく、「今より已後、四部の衆をして、我家に在りて施しを取らしめん。今より已去恒常に布施し、諸の功德を修め、諸の賢聖を奉せん」と。即ち座より起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去りぬ。

是の時跋提長者及び母難陀に弟有り、名けて優婆迦尼と曰ひ、是れ阿闍世王と少小の同好にして極めて相愛念す。爾の時優婆迦尼長者、田作を經營す。兄の跋提及び姉の難陀、如來の法化を受けしを聞き、聞き已つて歡喜踊躍し、自ら勝ふる能はず、七日の中復睡眠せず、亦飲食せず。是の時長者田作を辦じ已つて還えり、羅閱城の中道に詣り、復是の念を作さく、「我今先づ世尊の所に至り、然る後に家に到らん」と。爾の時長者世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾

盧卽ち滅盡三昧に入り、出入息無く、老母の前に在りて死す。時に老母出入息を見ざるを以て卽ち恐怖を懷き、衣毛皆竪ちて是の語を作さく、「此の沙門釋種子は、多くに識知せられ、國王の敬ふ所なり。設し我家に在りて死せりと聞かば、必ず官事に遭ひて、恐らく免濟ざらん」と。並に是の語を作さく、「沙門にして還えり活くれば、我當に沙門に食を與ふべし」と。是の時賓頭盧卽ち三昧より起ちぬ。時に母難陀復是の念を作さく、「此の餅は極めて大なり、當に更に小なる者を作りて之を與ふべし」と。時に老母少許りの麪を取りて餅を作る。餅遂に長大なり。老母見已つて復是の念を作さく、「此の餅は極めて大なり、當に更に小なる者を作るべし」と。然るに餅遂に大なり。當に先前に作りし者を取り、持して之に與ふべし」と。便ち前んで之を取りぬ、然るに復諸の餅皆共に相連なれり。時に母難陀、賓頭盧に語りて曰く、「比丘、食を須ひんとならば、便ち自ら取れ、何故に相嬈はすこと乃ち爾るや」と。賓頭盧報へて曰く、「大姉當に知るべし、我食を須ひず、但母を須つて所說有らんと欲する耳」と。母難陀報へて曰さく、「比丘、何をか戒勅する所」と。賓頭盧曰く「老母、今當に知るべし、今此の餅を持して世尊の所に往詣せよ、若し世尊にして戒勅する所有らば、我等當に共に奉行すべし」と。老母報へて曰く、「此の事甚だ快し」と。是の時老母、躬ら此の餅を負ひ、尊者賓頭盧の後に從つて世尊の所に往至し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時賓頭盧、世尊に白して曰さく、「此の母難陀は是れ跋提長者の姉なり、慳貪にして獨り食し、人に施すことを肯ぜず、唯願はくは世尊、爲に篤信の法を說いて、開解を得せ使め給へ」と。

爾の時世尊、母難陀に告げたまはく、「汝今餅を持して如來に施與し、及び比丘僧に與へよ」と。是の時母難陀、卽ち以て如來及び餘の比丘僧に奉上す。故に遺餘の餅の在る有り、母難陀世尊に白して言さく、「故に殘餅有り」と。世尊曰はく、「更に佛比丘僧に飯はせよ」と。母難陀、佛の敎令を受け、復此の餅を持して佛及び比丘僧に飯はし、然る後に復故に餅の在る有り。是の時世尊、母難

復是の如し。卽ち座上に於て法眼淨を得、已に法を得、法を見、狐疑有ることなく、五戒を受けて自ら佛・法・聖衆に歸せり。時に目連已に長者の法眼淨を得しを見、便ち此の偈を說く、

　如來の所說の經は　根原悉く備具る　眼淨くして瑕穢無く　疑ひ無く猶豫無し

是の時跋提長者、目連に白して曰しく、「今より已後、恒に我請を受けよ、及び四部衆に當に衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を供給すべし、愛惜する所無けん」と。是の時目連、長者の與に說法し已つて便ち座より起ちて去りぬ。

餘の大聲聞なる尊者大迦葉、尊者阿那律は、尊者賓頭盧に語りて言く、「我等已に跋提長者を度せり、汝今往いて彼の老母難陀を降すべし」と。賓頭盧報へて曰く、「此の事大に佳なり」と。爾の時老母難陀、躬ら酥餅を作る。爾の時尊者賓頭盧、時到つて衣を著け、鉢を持して羅閱城に入り、食を乞ふて、漸々に老母難陀の舍に至り、地中より踊り出で、手を舒べて鉢を持し、老母難陀より食を乞ふ。是の時老母、賓頭盧を見已つて、極めて瞋恚を懷き、並に是の惡言を作さく、「比丘、當に知るべし、設ひ汝の眼脫するとも我終に汝に食を乞はじ」と。是の時賓頭盧、卽ち三昧に入りて、雙眼を脫出せしむ。是の時母難陀倍す復瞋恚し、復惡言を作さく、「正使沙門、空中に倒懸するとも、終に汝に食を與へじ」と。是の時尊者賓頭盧、復三昧力を以て空中に在つて倒懸す。時に母難陀倍す復瞋恚して惡言を作さく、「正使沙門、身を擧げて烟りを出すとも、我終に汝に食を與へじ」と。是の時賓頭盧復三昧力を以て、身を擧げて烟を出す。是の時老母、見已つて倍す復恚怒つて是の語を作さく、「正使沙門、身を擧げて燃すとも、我終に汝に食を與へじ」と。是の時賓頭盧卽ち三昧を以て身體を盡く燃さしむ。老母見已つて復是の語を作さく、「正使沙門、身を擧げて水を出すとも、我終に汝に食を與へじ」と。時に賓頭盧復三昧力を以て、便ち擧身皆水を出す。老母見已つて復是の語を作さく、「正使沙門我前に在つて死すとも、我終に汝に食を與へじ」と。是の時尊者賓頭

跋提長者・此の語を聞き已つて極めて歡喜を懷きて是の念を作さく、「釋迦文佛の說く所甚だ妙なり、今の演說する所は、乃ち寶物を用ひず、我今日の如くんば殺生するに堪えず、此れを奉行することを得べし、又我家の中は饒財多寶なれば、終に偸盜せじ、此れも亦是れ我の所行なり。又我家の中には上妙の女有り、終に他を淫せじ、是れ我の所行なり。又我妄語の人を好まず、何に況んや自ら妄語すべけんや、此れも亦是れ我の所行なり。今日の如きは意に酒を念はず、何に況んや自ら嘗めんや。此れも亦是れ我の所行なり」と。是の時長者目連に語りて言く、「此の五施は我能く奉行せん」と。是の時長者、心の中に是の念を作さく、「我今此の目連に飯すべし」と。長者頭を仰ぎ目連に語りて言く、「神を屈して下顧し、此れに就て坐す可し」と。是の時目連聲に尋いで下坐しぬ。是の時跋提長者、躬自ら種々の飲食を辦じ、目連の與にす、目連食し訖りて淨水を行く、長者是の念を作さく、「一端の氎を持して目連に奉上すべし」と。是の時藏の內に入つて白氎を選び取り、好まざる者を取らんと欲し、便ち好む者を得て尋いで復之を捨て、更に氎を取り、又故の爾の好むところなり、之を捨てゝ復更に之を取る。是の時目連、長者の心中の所念を知り、便ち此の偈を說く、

施と心と鬪諍す　此れ福賢の棄つる所　施す時は鬪ふ時に非ず　時に心に隨つて施すべし

と。爾の時長者便ち是の念を作さく、「今目連は我心中の所念を知る」と。便ち白氎を持して目連に奉上す。是の時目連卽ち與に呪願すらく、

施を觀察するは第一　賢聖の人有りと知るを　施中の最も上となす　良田果實を生ぜばなり

と、時に目連呪願し已つて、此の白氎を受け、長者をして福を受くること窮り無からしむ。

是の時長者便ち一面に在りて坐し、目連漸く與に說法し、妙論す。所謂論とは施論・戒論・生天の論、欲は不淨想なり、出要を樂と爲すと。諸佛世尊の說く所の法、苦・集・盡・道、時に目連盡く與に之を說き、卽ち座上に於て法眼淨を得、極淨の衣の染りて色を爲し易きが如く、此の跋提長者も亦

天乾沓恕　羅刹鬼神と爲すや　又言く是れ天　羅刹・鬼神に非ずと　乾沓恕に似ず　方域に遊行する所　汝今何等と名くるや　我今知ることを得んと欲す

と、爾の時目連復偈を以て報へて曰く、

天乾沓恕に非ず　鬼神羅刹の種にも非ず　三世に解脫を得て　今我是れ人身なり　降すべき所の魔を伏し　無上道を成ず　師は釋迦文と名けまつり　我は大目連と名く

と。是の時跋提長者、目連に語りて言く、「比丘何をか敎勅する所」と。目連報へて言く、「我今汝の與に法を說かんと欲す、善く之を思念せよ」と。時に長者復是の念を作さく、「此の諸の道士、長夜に飮食に著す、然して今論ぜんと欲すること、正しく飮食を論すべき耳、若し我より食を索むべくんば、我當に無しと言ふべし」と。然して復是の念を作さく、「我今少多此の人の說く所を聽かん」と。爾の時目連、長者の心中の所念を知り、便ち此の偈を說く、

如來二施を說きたまふ　法施と財施となり　今當に法施を說くべし　專心一意に聽けよ

と。是の時長者法施を說くべしと聞き、便ち歡喜を懷き、目連に語りて言く、「願はくは時に演說せよ、聞いて當に之を知るべし」と。目連報へて言く、「長者、當に知るべし、如來は五事の大施を說きたまへり、形壽を盡して當に念じて修行すべし」と。時に長者復是の念を作さく、「目連向者『法施の行を說かんと欲す』と、今復言く、『五大施有り』と」。是の時目連長者の心中の所念を知り、復長者に告げて言く、「如來は二大施有りと說きたまへり、所謂法施と財施となり。我今當に法施を說くべし、財施を說かじ」と。長者報へて言く、「何者か是れ五大施なるや」と、目連報へて言く、「一に殺生を得ず、此れを名けて大施と爲すなり。長者當に形壽を盡くして之を修行すべし。二には不盜を名けて大施と爲す、當に形壽を盡して修行すべし。婬せず、妄語せず、飮酒せず、當に形壽を盡くして之を修行すべし。是れを長者、此の五大施有りと謂ひ、當に念じて修行すべし」と。是の時

して出づる者有ること無し。然して如來も亦說きたまはく、『我弟子の中、天眼第一なるは、所謂阿那律比丘是れなり』と。次で第二の比丘の來り入つて乞ひし者を識ると爲すや不や」と。長者報へて言く、「我之を識らず」と。其の婦語りて言く、「長者頗は、此の羅閲城內に大梵志あり、迦毘羅と名け、饒財多寶にして稱計すべからず、九百九十九頭の耕牛有つて田作するを聞きしや」と。長者報へて言く、「我躬自ら此の梵志の身を見たり」と。其の婦報へて言く、「長者頗は彼の梵志の息を名けて比波羅耶檀那と曰ひ、身は金色を作し、婦を婆陀と名け、女の中の殊勝なる者にして、設ひ紫磨金を擧げて前に在るも、黑きこと、白きに比するが猶きを聞きしや」。長者報へて言く、「我聞く、此の梵志に子有り、名けて比波羅耶檀那と曰ふ、然も復見ず」と。其の婦報へて言く、「向きの者の後に來りし比丘は卽ち是れなり。其の身此の玉女の寶を捨てゝ出家學道して今阿羅漢を得、恒に頭陀を行じ、諸有の頭陀の行ひ法を具足する者にして、尊迦葉の上に出づるもの有ること無きなり。世尊も亦說きたまはく、『我弟子中、第一の比丘にして頭陀行の者は所謂大迦葉是れなり』と。今長者快く善利を得たり、乃ち賢聖の人をして此の間に來至して乞食せしむ。我此の義を觀じ已るが故に是の言を作す、『善く自ら口を護り、賢聖の人を誹謗して幻化を作すと言ふこと莫れ』と。此れは釋迦の弟子にして皆神德有り」と。此の語を說くに當り、時に尊者大目犍連、衣を著け、鉢を持して虛空を飛騰して長者の家に詣り、此の鐵の籠を破つて落し、虛空中に在つて結跏趺坐す。是の時跋提長者、目犍連の虛空の中に在つて坐するを見、便ち恐怖を懷きて是の說を作さく、「汝は是れ天なるや」と。目連報へて言く「我は天に非ざるなり。」長者問うて言く、「汝是れ乾沓惒なるや」と。目連報へて言く、「我は乾沓惒に非ず」と。長者問うて言く、「汝は是れ鬼なるや」と。目連報へて言く、「我は鬼に非ず」と。長者問うて言く、「汝是れ羅刹、人を噉ふの鬼なるや」と、目連報へて言く、「我亦羅刹、人を噉ふ鬼に非ず」と。是の時跋提長者便ち此の偈を說く、

爾の時跋提長者清旦餅を食す。是の時尊者阿那律、時到つて衣を著け、鉢を持し、便ち長者の舍の地中より踊り出で、鉢を舒べて長者に向ふ。是の時長者極めて愁憂を懐き、即ち少許りの餅を授けて阿那律に與ふ。是の時阿那律、餅を得已つて還えり、所在に詣る。是の時長者便ち瞋恚を興し、守門の人に語げて言く、「我教勅有り、『人をして門内に入らしむること無れ』と、何故に人をして來り入らしめしや」と。時に守門の者報へて曰く、「門閤牢固なり、知らず、此の道士何れより來れりと爲すや」と。爾の時長者默然として言はず。時に長者已に餅を食し竟り、次で魚肉を食ふ。尊者大迦葉、衣を著け、鉢を持し、長者の家に詣り、地中より踊り出で、鉢を舒べて長者に向ふ。時に長者甚だ愁憂を懐き、少許りの魚肉を授けて之に與ふ。是の時迦葉肉を得て便ち彼に於て沒して所在に還歸へりぬ。是の時長者倍す復瞋恚し、守門の者に語りて言く、「我先きに敎令有り、『人をして家の中に入ら使めざれ』と。何故に復二沙門をして、家に入つて乞食せしめしや」と。時に守門の人報へて曰く、「我等此の沙門の何れより來り入りしやを見ず」と。長者報へて曰く、「此の禿頭の沙門、幻術を善くし、世人を狂惑して正行有ること無し」と。

爾の時長者の婦、長者を去ること遠からざる(處)に坐して之を觀る。然るに此の長者の婦は是れ質多長者の妹にして、摩師山中より之を取れり。時に婦、長者に語りて言く、「自ら口を護るべし、是の語言を作すこと勿れ、『沙門幻術を學ぶ』と。然る所以は、此の諸の沙門に大威神有り、長者の家に來至する所以は饒益する所多からんとなり。長者、竟に先前の比丘を識るや」と。長者報へて曰く「我之を識らず」と。時に婦報へて言く、「長者頗は迦毘羅衞國の[三]斛淨王の子を阿那律と名け、生るゝの時に當り、此の地六反震動し、舍を遶ること一由旬、内に伏藏して自ら出でしを聞きしや」と。長者報へて言く、「我聞く、阿那律有り、然も之を見ざる耳」と。時に婦長者に語りて言く、「此れ豪族の子にして、居家を捨て已り、出家學道して梵行を修め、阿羅漢を得、天眼第一に

【三】斛淨王(Dhotodana)。淨飯王の弟。

巻の第二十

聲聞品第二十八

一

「聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。是の時四大聲聞集り、一處に在りて是の說を作さく、「我等共に此の羅閱城の中を觀ずるに、誰か佛・法・衆を供奉し、功德を作さゞる者有らん。由來信無き者には當に勸めて如來・法・僧、尊者大目犍連・尊者迦葉・尊者阿那律・尊者賓頭盧を信ぜ令むべしと。爾の時、長者有り、跋提と名け、饒財多寶にして稱計すべからず、金・銀・珍寶・硨磲・瑪瑙・眞珠・琥魄・象馬・車乘・奴婢・僕從皆悉く備具はる。又復慳貪にして布施を肯ぜず、佛法衆に於て毫釐の善も有ること無く、篤信有ること無きが故に、福已に盡きて、更に新しきを造らず、恒に邪見を懷き、『施無く、福無く、亦受くる者無く、亦今世後世・善惡の報ひ無く、父母及び阿羅漢を得し者無く、亦復證を取る者有ること無し』と。彼の長者に七重の門有り、門と門とに守人有つて、乞ふ者をして門に詣ら使むることを得ず、復鐵の籠を以て中庭を絡覆し、中に飛鳥有りて庭中に來至することを恐る。長者に姉有り、難陀と名く、亦復慳貪にして惠施するを肯ぜず、功德の本を種えざれば、故き者は已に滅して更に新しきを造らず、亦邪見を懷きて、『施無く、福無く、亦受者も無く、亦今世後世・善惡の報ひ無く、亦父母(無く)阿羅漢を得しもの無く、亦復證を取る者有ること無し』と。難陀の門戶も亦七重有り、亦守門の人有りて、來りて乞ふ者を有ら令めず、亦復鐵の籠を以て上を覆ひ、飛鳥も來つて家の中に入ら使めざれば、我等今日難陀母をして篤く佛法衆を信ぜしむべし」と。

【一】 Dhp. A. I, pp. 366–374

爲すと謂ふなり。是れを比丘、此の四人有りと謂ひ、當に念じて上の三人を除き、念じて身證の法を修むべし、是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

增壹阿含經卷第十九

所にして、猶し海水の計量して一斛・半斛・一合・半合と稱數の名を言ふべからざるが如し。但し其の福業は具に陳ぶべからず。是の如く善男子・善女人の所作の功德、稱計して大福業を獲、甘露滅を得て、當に爾許の福德有るべしと言ふべからず。是の故に比丘、善男子、善女人は當に此の四の功德を具すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、今四種の人有つて、敬ふべく、貴ぶべく、世の福田なり。云何が四と爲すや、所謂持信・奉法・身證・見到なり。彼云何が名けて持信の人と爲すや、或は一人有つて人の教誡を受け、篤き信心有つて、意に疑難せず、如來・至眞・等正覺・明行成・善逝と爲し、世間解・無上士・道法御・天人師・佛・世尊と號すに信有り、亦如來の語を信じ、亦梵志の語を信じ、恒に他の語を信じて、已れの智に任さず。是れを名けて持信の人と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて奉法の人と爲すや、是に於て人有つて、法を分別して他人を信ぜず、法を觀察して、『有りや、無きや、實なるや、虛なるや』と。彼便ち是の念を作す、『此れは是れ如來の語なり、此れは是れ梵志の語なり』と。是れを以て如來の諸語を知らば、便ち之を奉持し、諸有の外道の語は之を遠離す。是れを名けて奉法の人と爲すと謂ふなり。彼云何が身證の人と爲すや、是に於て人有つて身自ら作證し、亦他人を信ぜず、亦如來の語を信ぜず、諸尊の所說言教も亦復信ぜず、但だ已れの性に任して遊ぶ。是れを名けて身證の人と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて見到の人と爲すや、是に於て人有つて三結を斷じ、或は須陀洹不退轉の法を成じ、彼に此の見有り、便ち『惠施有り、受者有り、善惡の報ひ有り、今世後世有り、父有り、母有り、阿羅漢等の受教者有り』と、身に信じ、證を作して自ら遊化す。是れを名けて見到の人と

二十八萬里なり。水を搏つて下り、至つて胎種の龍に値ふ。若し卵生の龍に値はゞ、亦能く之を捉へて銜み、海水を出づ。若し濕生の龍に値はゞ、鳥の身卽ち死す。比丘、當に知るべし、若し濕生の金翅鳥、龍を食はんと欲する時は、鐵叉の樹上に上り、自ら海に投じ、彼若し卵生の龍、胎生の龍、濕生の龍を得ば、皆能く之を捉へ、設し化生の龍に値はゞ鳥の身卽ち死す。若し比丘、化生の金翅鳥、龍を食はんと欲する時は、鐵叉の樹上に上り、自ら海に投ず。然して彼の海水は縱廣二十八萬里なり。水を搏つて下に至り、卵種の龍、胎種の龍、濕種の龍、化種の龍に値はゞ、皆能く之を捉へ、海水の未だ合はざるの頃に、還えつて鐵叉の樹上に上る。比丘、當に知るべし、若し龍王をして身佛に事へ使めば、是の時金翅鳥は食噉ふこと能はず。然る所以は、如來は恒に四等の心を行ず、是れを以ての故に、鳥は龍を食ふこと能はざるなり。云何が四等と爲すや、如來は恒に慈心を行じ、恒に悲心を行じ、恒に喜心を行じ、恒に護心を行じたまふ。是れを比丘、如來は恒に此の四等心有り、大筋力有り、大勇猛有つて、沮壞すべからずと謂ふなり。是れを以ての故に、金翅の鳥は龍を食ふこと能はざるなり。是の故に諸比丘、當に四等の心を行ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し善知識の惠施するの時四事の功德有り、云何が四と爲すや、時を知つて施し、時を知らざるに非ず。自ら手にて惠施し、他人を使はず。常に淨潔を布施して不淨潔に非ず、極めて微妙なるを施して穢濁有らず。善知識の惠施するの時、此の四の功德有り。是の故に諸比丘、善男子善女人の布施の時、當に此の四の功德を具すべし。已に此の功德を具せば大福業を獲、甘露の滅を得ん。然して此の福德は稱量して當に爾許の福業有るべしと言ふべからず。虛空も容受すること能はざる

して、古を博くし、今を明にして、大衆の中に在るを、最も第一と爲す。優婆塞の多聞にして、古を博くし、今を明にして大衆の中に在るを最も第一と爲す。優婆斯の多聞にして、古を博くし、今を明にして大衆の中に在るを、最も第一と爲す。是れを比丘、此の四人有つて、大衆の中に在るを最も第一と爲すと謂ふなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

勇悍にして畏る所無く　多聞にして能く法を說き　衆に在つて師子(吼)を爲し　能く弱法を除き去る　比丘は戒成就し　比丘尼は多聞にして　優婆塞信有り　優婆斯亦然り　衆に在りて第一爲り　若し能く衆に和順し　此の義を知らんと欲する者は　日の初めて出づる時の如し

と。「是の故に諸比丘、當に古を博くし、今を明にし　法と法とを成就することを學ぶべし、是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

[三九]聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「四種の[四〇]金翅鳥有り、云何が四と爲すや、[四一]卵生の金翅鳥有り、胎生の金翅鳥有り、濕生の金翅鳥有り、化生の金翅鳥有り、是れ四種の金翅鳥なり。是の如く比丘、四種の龍有り、云何が四と爲すや、卵生の龍有り、胎生の龍有り。濕生の龍有り、化生の龍有り、是れを比丘四種の龍有りと謂ふなり。比丘當に知るべし。若し彼の卵生の金翅鳥、龍を食はんと欲する時は、鐵叉の樹上に上り、自ら海に投ず。彼の海水は縱廣二十八萬里、下に四種の龍宮有つて、卵種の龍有り、胎種の龍有り、濕種の龍有り、化種の龍有り。是の時卵種の金翅鳥、大翅を以て水の兩向を搏ち、卵種の龍を取つて之を食す、設し當に胎種の龍に向ふべくんば、金翅鳥の身は卽ち當に喪亡すべし。爾の時金翅鳥水を搏つて龍を取り、水猶未だ合せざるに、還えつて鐵叉の樹上に上る。比丘當に知るべし、若し胎生の金翅鳥、龍を食はんと欲する時は、鐵叉の樹上に上り、自ら海に投ず、然して彼の海水は縱廣

【三九】 S. 31. 1- S. 29. 1-
【四〇】 前に出づ。
【四一】 卵生・胎生・濕生・化生。四生といふ。前に出づ。

爾の時彌勒、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[三五] 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「如來出世して[三六]四無所畏有り、如來は此の四無所畏を得て、便ち世間に於て所著無く、大衆の中に在つて師子吼して梵輪を轉ず、云何が四と爲すや、我今已に此の法を辨ずれば、正使沙門・婆羅門・魔・若しは魔天・蜎飛蠕動の類、大衆の中に在つて、『我此の法を成ぜず』と言ふも、此の事然らず、中に於て無所畏を得たり、是れを第一の無所畏と爲すなり。我今日の如きは、諸漏已に盡きて、更に胎を受けず、若し沙門婆羅門衆生の類有つて、大衆の中に在つて『我諸漏未だ盡きず』と言はん。此の事然らず、是れを第二の無所畏と謂ふなり。我今已に愚闇の法を離れ、還えつて愚闇の法に就かしめんと欲するも、終に此の處無し、若し復沙門・婆羅門・魔・若しは魔天・衆生の類、大衆の中に在つて、『我還えつて愚闇の法に就くと言はんも、此の事然らず、是れを如來の(第三)無所畏と謂ふなり。諸の賢聖の出要の法、苦際を盡し、出要せざらしめんと欲するも、此の處無し。若し沙門・婆羅門・魔若しは魔天・衆生の類、大衆の中に在つて『如來は苦際を盡くさず』と言はんも、此の事然らず、是れを如來の(第)四の無所畏と謂ふなり。是の如く比丘、如來は四無所畏(有りて)、大衆の中に在つて能く師子吼し、梵輪を轉ず、是の如く比丘、當に方便を求めて、四無所畏を成ずべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[三七] 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「今四人有つて、聰明にして勇悍、古を博くし、今を明にし、[三八]法と法とを成就す。云何が四と爲すや、比丘の多聞にして古を博くし、今を明にして、大衆の中に在るを最も第一と爲す。比丘尼の多聞に

【三五】 A. IV. 8 Vesārajja

【三六】 四無所畏(Cattārivesārajjāni)。

【三七】 A. IV. 7 Sobhati

【三八】 法と法とを成就す。(Dhammānudhamma-paṭipanno 法と隨法との成就)。

離し。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時[三一]彌勒菩薩、如來の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時彌勒菩薩世尊に白して言さく「[三二]菩薩摩訶薩幾の法を成就して[三三]檀波羅蜜を行じ、[三四]六波羅蜜を具足して、疾く無上の正眞道を成ずるや」と。佛彌勒に告げたまはく「若し菩薩摩訶薩四の法本を行じ、六波羅蜜を具足せば、疾く無上の正眞等正覺を成ぜん。云何が四と爲すや。是れ菩薩惠施するに於て、佛・辟支佛下及び凡人皆悉く平均して人を選擇せず、恒に斯の念を作せ『一切は食することに由つて存し、食すること無くば則ち喪はん』と。是れを菩薩此の初法を成就し、六度を具足すと謂ふなり。復次に菩薩、若し惠施の時、頭目・髓腦・國財妻子も歡喜して惠施し、著想を生ぜずば、由つて死すべきの人時に臨み、還えり活き、歡喜踊躍して自ら勝ふる能はざるが如し。爾の時菩薩發心喜悅すること亦復是の如く、布施の誓願、想著を生ぜず。復次に彌勒、菩薩布施の時、普く一切に及び、自ら己れの爲に無上正眞の道を成ぜしめず。是れを此の三法を成就して六度を具足すと謂ふなり。復次に彌勒、菩薩摩訶薩は布施の時、是の思惟を作せ『諸有の衆生の類(の中)菩薩は最も上首爲り、六度を具足して諸法の本を了る。何を以ての故に、食し已つて諸根寂靜に、禁戒を思惟し、瞋恚を興さず、慈心を修行し、勇猛精進にして其の善法を增し、不善の法を除き、恒に一心の若く、意錯亂せず、辯才を具足し、法門終に次を越えず、此の諸の施しをして六度を具足し、檀波羅蜜を成就せしむ。若し菩薩摩訶薩、此の四法を行ずれば、疾く無上正眞等正覺を成ぜん』と、是の故に彌勒、若し菩薩摩訶薩、施さんと欲するの時は、當に此の誓願を發して諸行を具足すべし。是の如く彌勒、當に是の學を作すべし」と。

【三一】彌勒菩薩 (Metteyabodhisatta) 前に出づ。
【三二】菩薩摩訶薩 (Bodhisattamahāsatta) 前に出づ。
【三三】檀波羅蜜 (Dānapāramitā)。六波羅蜜の一、布施のこと。
【三四】六波羅蜜 (Cha-pāramitā)。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六。六度ともいふ。

如かず、此の福の功德稱計すべからざるなり。正使彼の人是の如きの施を作し、僧の房舍を作り、三自歸を受け、五戒を奉持し、及び彈指の頃も衆生を慈愍し、此の福有りと雖も、故に須臾の間、世間不可樂想を起すに如かず、此の福の功德稱量すべからざるなり。然して彼の所作の功德、我盡く證明す、僧の房舍を作るもの、我亦此の福を知る、三自歸を受くるも、我亦此の福を知る。五戒を受持するも我亦此の福を知る。彈指の間も衆生を慈愍するを我亦此の福を知る。須臾の間世間不可樂想を起すも我亦此の福を知る。爾の時の彼の婆羅門是の如きの大施を作す者、豈是れ異人ならんや、是の觀を作すこと莫かれ、然る所以は、爾の時の施主とは即ち我身是れなり。長者當に知るべし、過去久遠の所作の功德、信心斷ぜず、著想を起さず、是の故に長者、若し布施を欲するの時は、若しは多、若しは少、若しは好、若しは醜、歡喜して惠施し、想著を起すこと勿く、手自ら布施して他人をしてせしむること莫く、發願して報ひを求め、後に受福を求めば、長者當に無窮の福を獲べし。是の如く長者、當に是の學を作すべし」と。爾の時長者、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し日の初めて出づるの時、人民の類普く共に田作し、百鳥悲鳴し、嬰孩哀喚す。我今比丘、當に知るべし、此れは是れ譬喩なり、當に其の義を解るべし。此の義云何が解るべき、若し日の初めて出づるの時とは、此れ如來の出世を譬ふるなり。人民の類普く共に田作すとは、此れ譬へば檀越施主、時に隨つて衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を供給するが如し、百鳥悲鳴すとは、此れ高德の法師の喩にして、能く四部の衆の與に微妙の法を說くなり。嬰孩の喚呼とは、此れ弊魔波旬の喩へなり。是の故に諸比丘、日の初めて出づるが如く、如來世に出でゝ闇冥を除き去つて、照明せざるは

ず、意も亦復好き衣裳に樂著せず、亦復好き田業に樂著せず、心亦五欲の中に著せず、正使僕從奴婢有らんも亦復其の教を受けざらん。然る所以は、正しく其の中に由つて心を用ひざるが故なり。故に其の報ひを受くるなり。若し長者布施の時、若しは好、若しは醜、若しは多、若しは少、當に至誠、心を用ひて增損有ること勿く、後世の橋梁を發すべし。彼若し所生の處、飮食自然にして七財具足し、心恒に五欲の中に樂しみ、正使奴婢使人有らば恒に其の教を受けん。然る所以は、中に於て歡喜の心を發すに由るが故に。長者當に知るべし、過去久遠に梵志有り、[二八]毘羅摩と名く。饒財多寶にして、眞珠・琥珀・硨磲・瑪瑙・水精・瑠璃あり。好んで布施を喜べり。爾の時布施の時、八萬四千の銀鉢を用つて碎金を盛滿し、復八萬四千の金鉢有つて碎銀を盛滿す、是の如きの施しを作しぬ。復八萬四千の金銀の澡罐を以て施し、復八萬四千の牛を以てし、皆金銀を以て角を覆ひ、皆是の如きの布施を作す。復八萬四千の玉女を以て布施し、衣裳自ら覆ふ。復八萬四千の臥具を以て、皆毾㲪文繡氍毹を用つて自ら覆ひ、復八萬四千の衣裳を以て布施し、復八萬四千の龍象を以て布施し、皆金銀を用つて挍飾し、復八萬四千の匹馬を以て布施し、皆金銀の鞍勒を用つて自ら覆ひ、復八萬四千の車を以て布施し、是の如きの大施を作し、復八萬四千の房舍を以て布施し、四の城門の中に於て布施し、食を須ふるものには食を與へ、衣を須ひるものには衣を與へ、衣被・飮食・床臥の具・病痩の醫藥皆悉く之を與へぬ。長者當に知るべし、彼の毘羅摩は是の布施を作すと雖も、一の房舍を作つて、持し用つて[二九]招提僧に布施するに如かず。此の福計量すべからざるなり。正使彼是の如きの施を作し、及び房舍を作り、持し用つて招提僧に施すも、[三〇]三自歸佛・法・聖衆を受くるに如かず。此の福に稱計すべからざるなり。正使彼の人、是の如きの施を作し、及び房舍を作り、又三自歸を受けて、此の福有りと雖も、猶五戒を受持するに如かず、正使彼の人是の如きの施を作し、及び房舍を作り、三自歸を受け、五戒を受持し、此の福有りと雖も、故に彈指の頃も、衆生を慈愍するに

【二八】毘羅摩(Velāma)。

【二九】招提僧。前に出づ。

【三〇】三自歸。三寶に歸依すること。

に復沙門婆羅門有りて、盡く諸受を分別するも、然も復具せざる者有り。此れを四受と名く。何等の義有りて、云何が分別するや、所謂四受とは愛に由つて生ず。是の如く比丘、是の妙法有りて分別すべき所なり。若し此の諸受を行ぜざること有らば、此れを名けて平等と爲さず、然る所以は、諸法の義は了り難く、解し難し。此の如き非法の義は　[二四]三耶三佛の所說に非るなり。比丘當に知るべし、如來は盡く能く一切の諸受を分別し、能く一切の諸受を分別するを以て、則ち與に想應す。則ち能く欲受・見受・我受・戒受を分別す。是の故に如來は盡く諸受を分別す。則ち法と共に相應して相違有ること無し。此の四受は何に由つて生ずるや、然るに此の四受は愛に由つて生じ、愛に由つて長じ、此の受を成就すれば、彼便ち諸受を起すこと能はず。已に諸受を起さずば、則ち恐懼せず、已に恐懼せずば便ち般涅槃し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所造已に辨じて更に復有を受けず、實の如くに之を知る。是の如く比丘、此の妙法有れば、實の如く之を知り、諸法の法行の本を具足す。然る所以は、其れ此の法は微妙なるを以ての故に、諸佛の說く所は則ち諸行に於て缺漏有ること無し、是に於て比丘、[二五]初沙門、第二沙門、第三沙門、第四沙門有つて、更に復沙門の此の上に出づる者、能く此に勝る者有ること無し」と、是の如く師子吼を作したまひ、諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[二六]聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時　[二七]阿那分邸長者、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時世尊、長者に問ひて曰はく、「云何が長者、汝家中に恒に布施するや」と。長者佛に白さく、「貧家に恒に布施を行じ、又飮食麁弊常と同じからず」と。世尊、告げて曰はく、「若し布施の時、若しは好、若しは醜、若しは多、若しは少、然も心意を用ひず、復發願せず、復た信心無くば、此の行の報ひに由つて所生の處に好き食を得ず、意貪樂せ

三、戒禁取(Sīlabbatupādāna)
四、我語取(Attavādupādāna)

【二四】三耶三佛(Sammāsambuddha)。譯して正等覺といふ。佛の十號の一。

【二五】四沙門果とは、證悟の階段をいひ、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果の四。前に出づ。

【二六】A. IX. 20 Velāma

【二七】阿那邠邸長者(Anāthapiṇḍika)。給孤獨長者のこと。

りや』と、『所謂彼の究竟とは、無癡の究竟なり』と。『云何が彼の究竟とは是れ[一六]有愛の究竟と爲すや、無愛の究竟と爲すや』と、『所謂彼の究竟とは無愛の究竟なり』と『云何が彼の究竟とは[一七]有受の究竟なりや、無受の究竟と爲すや』と、『所謂彼の究竟とは無受の究竟なり』と。『云何が彼の究竟とは是れ[一八]智者と爲すや、智者に非ずと爲すや』と。『所謂智者の究竟する所なり』と。『此の究竟とは是れ[一九]怒者の究竟する所と爲すや、[二〇]非怒者の究竟する所と爲すや』、所謂此の究竟は、彼當に是の說を作すべし、『非怒者の究竟する所なり』と』。

比丘此の[二一]二見有り、云何が二見と爲すや、所謂有見と無見となり。諸有の沙門婆羅門は此の二見の本末を知らず、彼便ち欲心有り、瞋恚心有り、愚癡心有り、愛心有り、受心有り、彼是れを知ること無し。彼に怒心有つて行ひと相應せずば、彼の人生・老・病・死・愁・憂・苦・惱を脫せず、辛酸萬端なるも苦より脫れず。諸有の沙門婆羅門にして實の如く之を知れば、彼便ち愚癡瞋恚の心無く、恒に行ひて相應し、便ち生・老・病・死を脫することを得ん、今苦の元本を說くこと是の如し、比丘、此の妙法有り、斯れを平等の法と名く。諸の平等の法を行ぜざる者は則ち[二二]五見に墮せん、今當に四受を說くべし、云何が[二三]四受と爲すや、所謂欲受・見受・戒受・我受、是れを四受と謂ふなり。若し沙門婆羅門有つて、盡く欲受の名を知る。彼欲受の名を知ると雖も、復相應せざる者なり、彼盡く諸受の名を分別するも、先づ欲受の名を分別して、見受・戒受・我受の名を分別せざるなり。然る所以は、彼の沙門婆羅門此の三受の名を分別すること能はざるを以てなり。是の故に或は沙門婆羅門有つて、盡く此の諸受を分別するも、彼便ち欲受・見受を分別して、戒受・我受を分別せざるなり。然る所以は、彼の沙門婆羅門は二受を分別すること能はざるを以てなり。若し沙門婆羅門にして、盡く能く諸受を分別せしむれば、或は復具せざる者有り、彼便ち能く欲受・見受・戒受を分別するも、我受を分別せず、然る所以は彼の沙門婆羅門は我受を分別すること能はざるを以ての故に。是の故

【一六】有愛(Sataṇhā)。無愛(Vītaṇhā)。
【一七】有受は、巴利文には(San-pādāna)(有取)無受は、Anupādāna(無取)となれり。
【一八】智者(Viddasuna)。非智者(Aviddasuna)。
【一九】怒者は　Anuruddhapaṭiviruddha(悅ばされ易く、怒に喜ばさるゝ人)。
【二〇】非怒者(Ananuruddhaappaṭiviruddha)。
【二一】二見(Dvediṭṭhiyo)とは、有見(Bhavadiṭṭhi)無見(Vibhavadiṭṭhi)前出。
【二二】五見とは、身見・邊見・邪見・見取見・戒禁取見の五、五利使ともいふ。
一、身見(Sakkāyadiṭṭhi)。前出。
二、邊見(Antagāhadiṭṭhi)。前出。
三、邪見(Micchadiṭṭhi)。因果の理を否定すること。
四、見取見(Diṭṭhiparāmāsa)誤れる見解を正しいと執着すること。
五、戒禁取見(Sīlabbataparāmāsa)。前出。
【二三】四受は、四取(Cattāri upādānāni)。ともいひ、欲・見・戒・我取の四。
一、欲取(Kāmupādāna)。
二、見取(Diṭṭhupādāna)。

二

〔七〕聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時衆多の比丘、舍衞城に入る。時に衆多の比丘、便ち是の念を作さく、「然るに我等乞食するに日猶故に早し、我等は外道異學の村に往至して與共に論議すべし」と。是の時衆多の比丘、便ち外道の村の中に往至し、到り已つて共に相問訊し、一面に在りて坐し、已に一面に在りて坐す。爾の時異學、〔八〕道人に問うて曰く、「沙門瞿曇は諸弟子の與に此の法を說く、『汝等比丘盡く當に此の法を學ぶべし、悉く當に了知すべし、以て了知し已りて、當に共に奉行すべし』と。我等も亦諸弟子の與に此の法を說く『汝等盡く當に此の法を學ぶべし、悉く當に了知すべし。以て了知し已りて、當に共に奉行すべし』と。沙門瞿曇と我等と何等の異り有らんや、何の增減有らんや、所謂彼說法せば、我も亦說法す、彼教誨せば我も亦教誨す」と。爾の時衆多の比丘、此の語を聞き已り、亦是なりとも言はず、復非なりとも言はず、即ち座より起ちて去る。爾の時衆多の比丘、自ら相謂ひて曰く、「我當に此の義を以て往いて世尊に白すべし」と。

爾の時衆多の比丘、舍衞城に入つて乞食し、食し已つて衣鉢を收攝め、尼師檀を以て左の肩の上に著け、世尊の所に往詣し、頭面に足を禮し、一面に在つて坐す。爾の時衆多の比丘、此の因緣を以て具に世尊に白せり。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し彼の外道にして此の問ひを作さば、汝等當に此の語を以て彼に報ふべし。曰く、『〔九〕一究竟と爲すや、〔一〇〕衆多の究竟と爲すや』と。或は能く彼の梵志にして、平等說の者は、應に是の說を作すべし、『是れは一究竟にして衆多の究竟に非ず』と、『彼の究竟とは〔一一〕有欲の究竟と爲すや、〔一二〕無欲の究竟と爲すや』と、〔一三〕『所謂彼の究竟とは無欲の究竟を謂ふなり』と。『云何が彼の究竟とは〔一四〕有恚の究竟なりや、無恚の究竟と爲すや』と、所謂彼の究竟とは無恚の究竟にして、有恚の究竟に非ず』と。『云何が、〔一五〕有癡の究竟なりや、無癡の究竟な

〔七〕 M. 11. Sīhanāda s. 中阿含第百三經獅子吼經。

〔八〕 道人は、出家沙門をいふ。

〔九〕 究竟(Eka niṭṭha)。究竟は終極の意。

〔一〇〕 衆多の究竟 (Puthū niṭṭha)。

〔一一〕 有欲の究竟 (Sarāgassa niṭṭha)。とは、有欲の人の究竟の意。

〔一二〕 無欲の究竟(Vītarāgassa niṭṭha)。

〔一三〕 平等說の梵志の答へなり。

〔一四〕 有恚 (Sadosa)。 無恚(Vītadosa)。

〔一五〕 有癡(Samoha)。 無癡(Vītamoha)。

の法を觀察し、其の義を分別し、廣く人の與に演べ、無數の方便を以て集・盡・道諦を說き、此の法を觀察し、其の義を分別し、廣く人の與に演べたり。汝等比丘、當に舍利弗比丘に親近し、承事し、供養すべし。然る所以は、彼の舍利弗比丘は、無數の方便を以て此の四諦を說き、廣く人の與に演べぬ。舍利弗比丘の、諸の衆生及び四部衆の與に、其の義を分別し、廣く人の與に演べし時に當り、計るべからざるの衆生、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。汝等比丘、當に舍利弗・目犍連比丘に親近し、承事し、供養すべし。然る所以は、舍利弗比丘は衆生の父母なり。以て生み已つて長養し、大ならしむる者は目犍連比丘なり。然る所以は、舍利弗比丘は人の與に說法して、要らず四諦を成じ、目犍連比丘は人の與に說法して、要らず第一義を成じ、無漏行を成ず。汝等當に舍利弗・目犍連比丘に親近すべし」と。世尊是の語を作し已り、還えりて靜室に入りたまへり。世尊去りたまふて未だ久しからざるに、爾の時舍利弗、諸比丘に告ぐらく、「其れ能く四諦の法を得ること有る者は、彼の人快く善利を得ん、云何が四と爲すや、所謂苦諦、無數の方便を以て廣く其の義を演べん、云何が苦諦と爲すや、所謂生苦・老苦・病苦・死苦・憂悲惱苦・怨憎會苦・恩愛別苦・所求不得苦、要を取りて之を言はゞ、五盛陰苦なり。是れを苦諦と謂ふなり。云何が苦集諦なるや、所謂[六]愛結是れなり。云何が盡諦と爲すや、所謂盡諦とは、愛欲の結永く盡きて餘り無し、是れを盡諦と謂ふなり。云何が道諦と爲すや、所謂賢聖八品道是れなり。正見・正治・正語・正方便・正命・正業・正念・正定、是れを道諦と謂ふなり。彼の衆生にして、快く善利を得るは、乃ち能く此の四諦の法を聞けばなり」。爾の時尊者舍利弗、此の法を說くに當り、無量の計るべからざるの衆生、此の法を聞きし時、諸の塵垢盡きて法眼淨を得、「我等も亦快く善利を得たり。世尊、我與に法を說きたまふて、福地に安處せり」と。是の故に四部の衆、方便を求めて此の四諦を行ぜよ、是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

【六】愛結。渴愛のこと、前出。

爾の時世尊、魔波旬の神識の所在を知ることを得んと欲するを觀、世尊諸比丘に告げたまはく、「汝等頗ば此の精舍の中に大聲有るを聞くや、又光の怪しきこと在りや」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊、我等已に見ぬ」と。世尊告げて曰はく、「此れ弊魔波旬、婆迦梨の神識の所在を知ることを得んと欲してなり」と。是の時尊者阿難、世尊に白して曰さく、「唯願はくは世尊、婆迦梨比丘の神識何れの所在爲るやを說き給はんことを」と。世尊告げて曰はく、「婆迦梨比丘の神識は永く所著無し、彼の族姓子已に般涅槃して、是の如き持を作すべし」と。是の時尊者阿難、世尊に白して曰さく、「此の婆迦梨比丘は何れの日に此の四諦を得しや」。世尊告げて曰はく、「今日の中に此の四諦を得たり」と。阿難佛に白さく、「此の比丘は病を抱き、久しきを經たり、本是れ凡人なりや」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、阿難、汝の言ふ所の如し、但彼の比丘は苦を嫌ふこと甚だ久し、『諸有の釋迦文佛の弟子の中、信解脫の者此の人最勝なり。然るに有漏心未だ解脫することを得ず、我今刀を求めて自ら刺すべし』と。是の時彼の比丘、自ら刺せし時に臨み、卽ち如來の功德を思惟し、壽を捨つるの日、五盛陰を思惟し、『是れは謂く此れ色の集、此れ色の滅盡』と、爾の時彼の比丘、此れを思惟し已り、諸有の集の法皆悉く滅盡し、此の比丘已に般涅槃せり」と。爾の時阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四意斷の法　四闇と老耄の法と　阿夷と法の本末と　舍利と婆迦梨となり

等趣四諦品第二十七

一

[五] 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「是れは諸比丘、我等の常に說法する所、所謂四諦なり、無數の方便を以て此の法を觀察し、其の義を分別し、廣く人の與に演べたり。云何が四と爲すや、所謂苦諦の法なり、無數の方便を以て、此

【五】 M. 141 Saccavibhanga. 中阿含第三十一經分別聖諦經。

の如きの日、釋迦文佛の弟子中、信解脱の者にして、我上に出づるもの無し」然るに我今日有漏心にして解脱せず。然る所以は、然も如來の弟子苦惱に遇ふ時亦復刀の自殺を求む。我今此の命を用つて、此の岸より彼の岸に至る能はずと爲す」と。是の時婆迦梨の弟子、出家して未だ久しからず、未だ今世後世を知らず、此の岸より彼の岸に至るを知らず、亦復此に死して彼に生るゝことを知らず、便ち刀を授けて之に與ふ、時に婆迦梨手に刀を執り已り、信堅固を以て、刀を持して自ら刺しぬ。是の時婆迦梨、刀を以て自ら刺して是の念を作す、「釋迦文佛の弟子の中、所作、法に非ず、惡利を得て善利を得ず、如來の法中に於て、證を受けて命終を取ることを得ず」と。是の時尊者婆迦梨、便ち是の五盛陰を思惟し、「是れは謂く、此れ色、是れは謂く色の集、是れは謂く色の滅盡、是れは謂く痛・想・行・識、是れは謂く痛・想・行・識の集、是れは謂く痛・想・行・識の滅盡」と。彼此の五盛陰に於て熟ら之を思惟し、「諸有の生法は皆是れ死法なり」と此れを知り已つて便ち有漏に於て心解脱を得たり。爾の時尊者婆迦梨は無餘涅槃界に於て般涅槃せり。

爾の時世尊、天耳を以て尊者婆迦梨の刀を求めて自殺せしを聽聞たまへり。爾の時世尊、阿難に告げたまはく、「諸比丘の舍衞城に在る者は盡く一處に集めよ、吾所勅せんと欲す」と。是の時尊者阿難、世尊の教を受け、卽ち諸比丘を集めて、普集講堂に在り。還えつて世尊に白して曰さく、「今日比丘已に一處に集まれり」と。是の時世尊、比丘衆を將ひて前後に圍遶せられて彼の婆迦梨比丘の精舍に至りたまへり。爾の時に當り、弊魔波旬、尊者婆迦梨の神識の所在、何處に在りと爲すやを知ることを得んと欲し、「人に在りと爲すや、人に非ずと爲すや、天・龍・鬼神・乾沓和・阿須倫・迦留羅・摩休勒・閱叉なるや、今此の神識竟に所在爲るや、何處に在りて生じ、遊ぶや不や」と、東西南北四維上下を見るも、皆悉く周遍して神識の處を知らず。是の時魔波旬、身體疲極して所在を知ること莫し。爾の時世尊、比丘僧を將いて前後に圍遶せられて、彼の精舍に至り給ひぬ。

行ふことを教ふ。云何が十と爲すや、己身殺生せず、復他人を教へて殺生せざらしめ、己身盜まず、復他人を教へて盜まざらしめ、己身婬せず、復他人を教へて婬せざらしめ、己身妄語せず、復他人を教へて妄語せざらしめ、己身綺語せず、復他人を教へて綺語せざらしめ、己身嫉妬せず、復他人を教へて嫉妬せざらしめ、己身鬪訟せず、復他人を教へて鬪訟せざらしめ、己身意正しく、復他人を教へて意を亂れざらしめ、身自ら正見にして、復他人を教へて正見を行はしむ。比丘當に知るべし、轉輪聖王に此の十の功德有り、是の故に應に與に偸婆を起つべし」と。是の時阿難、世尊に白して曰さく、「復何の因緣を以て、如來の弟子は應に與に偸婆を起つべきや」と。世尊告げて曰はく、「阿難當に知るべし、漏盡阿羅漢は以て更に復有を受けず、淨きこと天金の如く、[一]三毒五使永く復現ぜず。此の因緣を以て如來の弟子は應に與に偸婆を起つべし」と。阿難、佛に白さく、「何の因緣を以て辟支佛は應に與に偸婆を起つべきや」と。世尊告げて曰はく、「辟支佛有り、無師にして自ら悟り、諸の結使を去り、更に胎を受けず。是の故に應に與に偸婆を起すべし」と。是の時阿難、世尊に白して曰さく、「復何の因緣を以て、如來に應に與に偸婆を起つべきや」と、世尊告げて曰はく、「是に於て阿難、如來に[二]十力四無所畏有り、降らざる者を降し、度せざる者を度し、得道せざる者をして得道せしめ、般涅槃せざる者をして般涅槃せしむ。衆人見已つて極めて歡喜を懷く。是れを阿難、如來は應に與に偸婆を起つべしと謂ふなり。是れを如來は應に與に偸婆を起つべしと謂ふなり」と。爾の時阿難、世尊の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

[三]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時尊者[四]婆迦梨、身に重き患ひを得、臥して大小便の上に在り、意に自ら刀殺せんと欲するも、此の勢、自ら坐起すべき無し。是の時尊者婆伽梨、侍者に告ぐらく、「汝今刀を持して來るべし、吾自殺せんと欲す。然る所以は、『今

【一】 三毒。貪欲・瞋恚・愚癡の三、前に出づ。五使とは、五利使、五鈍使をいふ。五鈍使とは瞋・慢・無明・見・疑の五、その性遲鈍なるも、然も心を驅使するが故に此の名あり、五利使とは、身見・邊見・邪見・見取見・戒禁取見の五、その性快利にして、常に心を驅使するが故に此の名あり。(後に出づ)

【二】 十力四無所畏。(前出)。

【三】 S. 22. 87

【四】 婆迦梨(Vakkali)。佛弟子中信解脱第一と稱せらる。舍衞城の婆羅門、佛陀は「法を見るものは我を見る」と敎化し給ひ、病苦に堪えず自殺せり。

持して、尊者目犍連の尸の上に散じぬ。

爾の時世尊、羅閲城より漸々に乞食し、五百の比丘を將ひて、人中に遊化し、那羅陀村に往詣したまひ、五百の比丘と倶なりき。爾の時舍利弗・目連滅度を取りて未だ久しからず。爾の時世尊、露地に在つて坐し、默然として諸比丘を察し已り、默然として諸比丘を觀じ已り、諸比丘に告げたまはく、「我今此の衆人の中を觀るに、大に損減有り、然る所以は、今此の衆中に舍利弗・目犍連比丘有ること無し、若し舍利弗・目犍連の所遊の方、彼の方は便ち空しからずと爲す。舍利弗・目犍連は今此の一方に在り、然る所以は、舍利弗・目犍連比丘は此の外道を降すに堪任なり」と。爾の時世尊、比丘に告げたまはく、「諸佛の所造は甚奇甚特なり、此の二の智慧神足の弟子有りて般涅槃を取れり。然るに如來は愁憂有ること無し、正使過去恒沙の如來も亦復、此の智慧神足の弟子有り、正使當來に諸佛世に出でゝ亦、當に此の智慧神足の弟子有るべし。比丘當に知るべし、世間に二の施業有り、云何が二と爲すや、所謂財施と法施となり。比丘當に知るべし。若し財施を論ずる者は、舍利弗・目連比丘に從つて求むべし。若し法施を求めんと欲する者は、當に我に從つて之を求むべし。然る所以は、我今如來は財施有ること無し、汝等今日舍利弗・目連比丘の舍利を供養すべし」と。爾の時阿難、佛に白して言さく、「云何が舍利弗・目犍連の舍利を供養することを得べき」と。世尊告げて曰はく、「當に種々の香華を集め、四衢道頭に於て四寺偸婆を起つべし。然る所以は、若し寺を起すこと有らば、此の人に四種有りて應に偸婆を起つべし、云何が四と爲すや、轉輪聖王は應に偸婆を起つべし、漏盡阿羅漢は應に偸婆を起つべし、辟支佛は應に偸婆を起つべし。如來は應に偸婆を起つべし」と。是の時阿難、世尊に白して曰さく、「何の因緣有つて、如來は應に偸婆を起つべきや、復何の因緣有つて辟支佛・漏盡阿羅漢・轉輪聖王は應に偸婆を起つべきや」と。世尊告げて曰はく、「汝今當に知るべし、轉輪聖王は自ら十善を行ひ、十功德を修む。亦復人に十善功德を

後に從ふ。是の時衆多の比丘、目連と共に摩瘦村に到り、彼に在つて遊化し、身に重き患ひを抱く。是の時目連躬自ら露地に座を敷いて坐し、初禪に入り、初禪より起ちて第二禪に入り、第二禪より起ちて第三禪に入り、第三禪より起ちて第四禪に入り、第四禪より起ちて空處に入り、空處より起ちて識處に入り、識處より起ちて不用處に入り、不用處より起ちて有想無想處に入り、有想無想處より起ちて火光三昧に入り、火光三昧より起ちて水光三昧に入り、水光三昧より起ちて滅盡定に入り、滅盡定より起ちて水光三昧に入り、水光三昧より起ちて火光三昧に入り、火光三昧より起ちて有想無想定に入り、有想無想定より起ちて不用處に入り、不用處より起ちて識處・空處・四禪・三禪・二禪・初禪に入り、初禪より起ちて空中に飛在し、坐臥して經行し、身上に火を出し、身下に水を出し、或は身下に火を出し、身上に水を出し、十八變を作し、神足變化す。是の時尊者大目犍連、還えり下つて座に就いて結跏趺坐し、正身正意に繫念して前に在り、復初禪に入り、初禪より起ちて第二禪に入り、第二禪より起ちて第三禪に入り、第三禪より起ちて第四禪に入り、第四禪より起ちて空處に入り、空處より起ちて識處に入り、識處より起ちて不用處に入り、不用處より起ちて有想無想處に入り、有想無想處より起ちて火光三昧に入り、火光三昧より起ちて水光三昧に入り、水光三昧より起ちて滅盡定に入り、滅盡定より起ちて還えつて水光・火光・有想無想處・不用處・識處・空處・四禪・三禪・二禪・初禪に入り、復初禪より起ちて第二禪に入り、第二禪より起ちて第三禪に入り、第三禪より起ちて第四禪に入り、第四禪より起ちて、尋いで時に滅度を取りぬ。爾の時大目犍連已に滅度を取りぬ。是の時此の地極めて大震動し、諸天各〻相告げて來下し、大目犍連を省覲し、持し用つて尊德を供養し、或は種々の香華を以て來り供養する者あり、諸天は空中に在つて倡伎樂を作し、琴を彈いて歌舞し、用つて尊者目犍連の上に供養しぬ。爾の時尊者大目犍連已に滅度を取りぬ。是の時那羅陀村の中一由旬內に、諸天其の中に側滿せり。爾の時復衆多の比丘有り、種々の香華を

巻の第十九

四意斷品第二十六の餘

世尊阿難に告げて曰はく、「汝今舍利弗の舍利を授け來るや」。阿難對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時阿難卽ち舍利を授けて世尊の手に在り。爾の時世尊、手に舍利を執り已つて、諸比丘に告げたまはく、「今此れは是れ、舍利弗比丘の舍利なり。智慧聰明にして、高才の智、若干種の智、智は窮むべからず、智は涯底無く、智は速疾の智有り、輕便之智有り、利機の智有り、甚深の智有り、審諦の智有り、少欲にして足るを知り、閑靜の處を樂しみ、猛勇の意有り、所爲亂れず、怯弱の心無く、能く忍ぶ所有り、惡法を除去し、體性柔和にして鬪訟を好まず、恒に精進を修め、三昧を行じ、智慧を習ひ、解脫を念じ、解脫所知見身を修行せり。比丘當に知るべし、猶し大樹の其の枝無きが如し、然して今日比丘僧、如來は是れ大樹にして、舍利弗比丘の滅度を取りしは、樹の枝無きに似たり、若し舍利弗所遊の方、彼の方便ち大幸に遇ふて云く、『舍利弗彼の方に在りて止る』と」。然る所以は、舍利弗比丘は能く外道異學と共に論議して降伏せざる者無ければなり。

是の時大目犍連、舍利弗の滅度を聞き、卽ち神足を以て世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて住す。爾の時大目犍連、世尊に白して曰さく、「舍利弗比丘は今已に滅度せり、我今世尊を辭して滅度を取らんと欲す」と。爾の時世尊默然として對へたまはず、是の如きこと再三、世尊に白して曰さく、「我滅度を取らんと欲す」と。爾の時世尊亦復默然として報へたまはず。爾の時目連已に世尊の默然として報へたまはざるを見、卽ち世尊の足を禮し、便ち退いて去り、還えつて精舍に詣り、衣鉢を收攝めて羅閱城を出で、自ら本生處に往きぬ。爾の時衆多の比丘有り、尊者目連の

と。」

增壹阿含經卷第十八

利を持して阿難の所に往至し、阿難に白して曰さく、「我師は已に滅度を取れり、今舍利及び衣鉢を持して來り、用つて世尊に上らん」と。時に阿難見已つて、卽ち涙を墮して是の語を作さく、「汝も亦來れ、共に世尊の所に至り、此の因緣を以て共に世尊に白し、若し世尊にして說きたまふ所有らば、我等は當に之を奉行すべし」と。均頭報へて曰さく、「是の如し、尊者」と。

是の時阿難、均頭沙彌を將ひて世尊の所に至り、頭面に足を禮し、世尊に白して曰さく、「此の均頭沙彌『我所に來至し、我に白して言さく、『我師は已に滅度せり、今衣鉢を持して來り、如來に奉上せん』と。我今日心意に煩惱の志性、迷惑して東西を知ること莫きに、尊者舍利弗の般涅槃を取りしを聞き、悵然として心を傷む」と。世尊告げて曰はく、「云何が阿難、舍利弗比丘は戒身を用つて般涅槃せしや」。阿難對へて曰さく、「非なり世尊」と。世尊告げて曰はく、「云何が阿難、定身・慧身・解脫身・解脫所見身を用つて滅度を取りしや」と。阿難佛に白して言さく、「舍利弗比丘は[二四]戒身・定身・慧身・解脫身・解脫所見身を用つて滅度を取らず、但し舍利弗比丘は、恒に喜んで敎化し、說法して厭足無く、諸比丘の與に敎誡するも亦厭足無かりき。我今此の舍利弗の深恩過多なるを憶ひ是れを以て愁悒ふる耳」と。世尊告げて曰はく、「止みなん、止みなん、阿難、愁憂を懷くこと莫かれ、無常の物をして、恒に在らしめんと欲すること、此の事然らず、夫れ生あれば死有り、云何が阿難、過去の諸佛は盡く滅度せしに非ずや、譬へば燈炷の油盡きて卽ち滅するが如く、寶藏・錠光より今の七佛及び弟子衆に至るが如く、盡く般涅槃せしに非ずや、是の如く辟支佛衆諦・高稱・遠聞・尼咩優尼般咩伽羅・優般伽羅・爾許の辟支佛盡く滅度せしに非ずや、賢劫の初め、大國の聖王を名けて善悅摩訶提婆と曰ふ。是の如き轉輪聖王は今所在爲るや、豈盡く般涅槃せしに非ずや」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく。

一切行無常なり　生ずれば當に死有るべし　生ぜず復滅せず　此の滅は最第一たり

【二四】戒身・定身・慧身・解脫身・解脫所見身の五を五分法身といひ、五種の功德法を以て、佛身を成ずるが故に、五分法身といふ。
一、戒身とは、如來の身口意の三業一切の過非を離るゝをいひ、
二、定身とは、如來は寂靜にして、一切の妄念を離るゝをいひ、
三、慧身とは、如來の眞智圓かにして法性を觀達するをいひ、
四、解脫身とは、如來の身心は一切の縛を解脫するをいひ、
五、解脫智見身とは、自ら我解脫せりと明に知るをいふ。

是の時尊者舍利弗、精舍に往詣し、到り已つて衣鉢を收攝め、竹園を出で丶、本生住處に往詣す。是の時尊者舍利弗、漸々に乞食して摩瘦國に至る。爾の時尊者舍利弗、摩瘦の本生の處に遊び、身疾病に遇ひ、極めて苦痛たり、時に唯均頭沙彌有りて供養し、目下不淨を除き去り、清淨を供給す。是の時釋提桓因、舍利弗の心中の所念を知り、譬へば力士の臂を屈伸するが如き頃に、三十三天より沒し、現ぜずして舍利弗の精舍の中に來至し、至り已つて頭面に足を禮し、復兩手を以て舍利弗の足を摩し、自ら姓名を稱して是の說を作さく、「我は是れ天王帝釋なり」と。舍利弗言さく、「快い哉、天帝、受命窮り無からん」と。釋提桓因報へて言さく、「我今、尊者舍利弗を供養せんと欲す」と。時に舍利弗報へて言さく、「止みなん、止みなん、天帝、此れ則ち供養を爲し已る、諸天清淨、阿須倫・龍鬼及び諸天の衆、我今自ら沙彌有り、使令に堪ふるに足る」と。時に釋提桓因再三舍利弗に白して言さく、「我今福業を作さんと欲す、願ひに違ふを見ること莫かれ、今尊者舍利弗を供養せんと欲す」と。是の時舍利弗默然として對へず、時に釋提桓因躬自ら糞を除き嫌苦を辭せず、是の時尊者舍利弗、卽ち其の夜を以て般涅槃せり。是の時此の地六反震動し、大音聲有り、諸の天華を雨らし、倡伎樂を作し、諸天虛空を側塞して神妙なり、諸天亦拘牟頭華を散じ、或は旃檀の雜碎の香を以て其の上に散ず。時に舍利弗已に滅度を取り、諸天皆空中に在つて悲號啼哭して自ら勝ふること能はず、虛空の中の欲天・色天・無色天悉く共に淚を墮し、亦春の月の細雨して和暢なるが如く、爾の時も亦復是の如く、「今尊者舍利弗の般涅槃を取ること何ぞ其れ速きや」と。是の時釋提桓因一切の衆香を集めて、尊者舍利弗の身を耶維し、種々に供養し已つて、舍利及び衣鉢を收めて均頭沙彌に付し、又之に告げて曰く、「此れは是れ汝の師の舍利及び衣鉢なり、往いて世尊に奉り、到り已つて此の因緣を以て、具に世尊に白し、若し說きたまふ所有らば便ち之を奉行せよ」と。是の時均頭報へて曰さく、「是の如し、拘翼」と。是の時均頭沙彌、衣を捉り、鉢及び舍

と名く」と。是の時諸比丘、「未曾有なり、甚奇甚特なり」と歎じ、「尊者舍利弗は三昧に入ること速疾にして乃ち爾り」と。爾の時舍利弗、即ち座より起ち、頭面に世尊の足を禮し、便ち退いて去る。爾の時に當り、衆多の比丘、舍利弗の後に從ふ。時に舍利弗還えり、顧みて語ぐ、「諸賢、各〻所至を欲へ」と。衆多の比丘報へて曰さく、「我等尊者舍利弗を供養することを得んと欲す」と。舍利弗言く、「止みなん、止みなん、諸賢、此れ則ち供養を爲し已る。吾自ら〔三〕沙彌有り、我を供養し得るに足る耳、汝等各〻所在に還えりて、道化を思惟し、善く梵行を修めて苦際を盡くせ、如來の出世は甚だ遇ふべきこと難く、時々に乃ち出づること、優曇鉢華の時々に乃ち出づるが猶し、如來も亦復是の如く、億劫にして乃ち出でたまふ。人身亦復剋くし難し、信有りて成就することも亦復得難し、出家して如來の法を學ばんと欲求することも亦復得難し。一切の諸行をして滅盡せざらしめんと欲すること、此れも亦得難し、愛欲を滅し、永く盡きて餘り無きは、滅盡涅槃なり。今四法の本末有り、如來の說きたまふ所なり。云何が四と爲すや、一切の諸行は無常なり。是れを初法の本末と謂ひ、如來の說きたまふ所なり。一切の諸行は苦なり、是れを第二法の本末と謂ひ、如來の說きたまふ所なり。一切の諸行は無我なり、是れを第三法の本末と謂ひ、如來の說きたまふ所なり。涅槃は永寂たり是れを第四法の本末と謂ひ、如來の說きたまふ所なり。是れを諸賢、四法の本末と謂ひ、如來の說きたまふ所なり」と。爾の時諸比丘咸共に淚を墮し、「今舍利弗の滅度すること、何ぞ速にして乃ち爾るや」と。爾の時尊者舍利弗、諸比丘に告ぐらく、「止みなん、止みなん、諸賢、愼しみて愁憂ふること莫かれ、變易の法をして、變易せざらしめんと欲すること、此の事然らず、須彌山王の如きも尙無常の變有り、況んや復芥子の體をや」と。「舍利弗比丘は此の患ひを免るゝや」「如來の金剛の身も久しからずして亦當に般涅槃を取りたまふべし、何に況んや我身をや、汝等各〻其の法行を修め、苦際を盡くすことを得よ」と。

【三】沙彌(Sāmaṇera)。出家してより比丘となる迄の間をいふ。二十歳に至り、具足戒を受けて、比丘となることを許るさる。

艶天・兜術天・化自在天・他化自在天・梵迦夷天・欲天・色天・無色天有り、亦其の日に於て無餘涅槃界に於て般涅槃したまへり。而して今舍利弗言く、『衆生の壽短きを以ての故に、如來の壽命も亦短し』と。云何が舍利弗、是の說を作し『如來當に一劫を住まり、一劫に至るべくんば、我も亦當に一劫を住り、一劫に至るべし』と、然るに復衆生は如來の壽命の長短を知る能はず、舍利弗當に知るべし、如來に四の不可思議事有り。小乘の能く知る所に非ず、云何が四と爲すや、世不可思議・衆生不可思議・龍不可思議・佛土境界不可思議なり。是れを舍利弗、四の不可思議有りと謂ふなり」と。舍利弗言さく、「是の如し、世尊、四の不可思議有り、世界・衆生・龍宮・佛土は實に不可思議なり、然るに長夜に恒に此の念有り『釋迦文佛は終に一劫を住りたまはず』と。又復諸天、我所に來至し、我に語げて言さく、『釋迦文佛は久しく世に在らず、年八十に向ふ、然して今、世尊は久しからずして當に涅槃を取りたまふべし』と。我今世尊の般涅槃を取りたまふを見るに堪えず。又我躬ら如來より此の語を聞く『諸の過去當來今現在の諸佛の上足の弟子、先きに般涅槃を取り、然る後に佛は般涅槃を取りたまふ。又最後の弟子も亦先きに般涅槃を取り、然る後に世尊は久しからずして當に滅度を取りたまふべし』と。唯願はくは世尊、滅度を取れることを聽したまはんことを」と。世尊告げて曰はく、「今正に是れ時なり」と。舍利弗卽ち如來の前に於て坐し、正身正意に繫念して前に在つて初禪に入り、初禪より起ちて二禪に入り、二禪より起ちて復三禪に入り、三禪より起ちて復四禪に入り、四禪より起ちて復空處・識處・不用處・有想無想處に入り、有想無想より起ちて滅盡定に入り、滅盡定より起ちて有想無想處に入り、有想無想より起ちて不用處・識處・空處に入り、空處より起ちて第四禪に入り、第四禪より起ちて三禪に入り、第三禪より起ちて第二禪に入り、第二禪より起ちて初禪に入り、初禪より起ちて第二禪に入り、第二禪より起ちて第三禪に入り、第三禪より起ちて第四禪に入る。時に尊者舍利弗、四禪より起ち已り、諸比丘に告ぐ、「此れを師子奮迅三昧

ず、然るに我今日身極めて疼痛を患ふ。故に來りて汝を辭し、般涅槃を取らん」と。舍利弗言く、「諸有の比丘・比丘尼にして、四神足を修め、多く廣く、其の義を演ぶるもの、若し彼の人の意の中に、劫を住まらんと欲せば、劫を過ぐるも乃至滅度せざるに、何を以て住つて滅度せざるや」と。目連報へて言く、「是の如し、舍利弗、如來は言へり、『若し比丘・比丘尼にして四神足を修むるもの、壽を住めて劫を經んと欲せば、亦得べき耳』但し如來にして劫を住めて住したまはゞ、我も亦住まる耳、但し今日世尊は久しからずして、當に般涅槃を取りたまふべし。衆生の類は壽命極めて短し、又我世尊の般涅槃を取りたまふを見るに忍びず、然して我身體は極めて疼痛爲り、般涅槃を取らんと欲す」と。爾の時舍利弗目連に語げて言く、「汝今小しく停れ、我當に先きに滅度を取るべし」と。是の時目連默然として對へず。是の時舍利弗世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。時に舍利弗、世尊に白して言さく、「我今滅度を取らんと欲す、唯願はくは聽許したまはんことを」と。是の時世尊默然として對へたまはず、時に舍利弗、再三世尊に白して言さく、「我今正に是れ時なり、般涅槃を取らんと欲す」と。是の時世尊舍利弗に告げたまはく、「汝今何故に一劫を住り、乃ち一劫を過ぎざるや」と。舍利弗世尊に白して言さく、「我躬自ら世尊より聞き、躬自ら承受せり、『衆生の類壽命極めて短し、極壽も百歳を過ぎじ、衆生の命短きを以ての故に、如來の壽も亦短し、若し當に如來にして壽を住むること一劫なるべくんば、我當に亦壽を住むること一劫なるべし」と。

世尊告げて曰はく、「舍利弗の言の如し、衆生の命短きを以ての故に、如來の壽も亦短し、然して復此事は亦論ずべからず、然る所以は、過去久遠阿僧祇劫に佛有り、善念誓願如來・至眞・等正覺と名け、世に出現したまへり、爾の時に當りて人壽八万歳、中夭の者有ることなし、彼の善念誓願如來成佛の時に當り、即ち其の日に、便ち無量の佛を化作し、無量の衆生を立て、三乘の行在りて不退轉地に在つて住する者有り、復無量の衆生を立て、四姓家在り、復無量の衆生を立て、四天王宮・

舍利弗告げて曰はく、「何等か是れ四辯才なる、我證を得しものは所謂義辯なり。我此れに由つて所謂法辯を證ることを得、我此れに由つて所謂應辯を證ることを得、我此れに由つて所謂自辯を證ることを得たり。我今當に廣く其の義を分別すべし、若し四部の衆にして、狐疑有るべくんば、我今現在すれば、其の義を問ふべし。若し復諸賢、四禪に於て狐疑有らば、若し復諸賢、四等心に於て狐疑有らば、我に問ふべし、今當に之を說くべし。設し復諸賢、四意斷に於て狐疑有らば、我に義を問ふべし、我今當に說くべし、四神足・四意止・四諦に狐疑有らば、便ち來つて我に義を問へ、我今當に之を說くべし。今問はずば後悔するも益無けん、我今唯世尊・無所著・等正覺の所有の深法所行の衆事有り、亦我に義を問へ、我當に之を說くべし、後に悔ひること有ること勿れ」と。

是の時尊者大目揵連、時到り、衣を著け、鉢を持し、羅閱城に入り、乞食せんと欲す。是の時執杖梵志、遙に目連の來るを見、各ゝ相謂ひて曰く、「此れは是れ沙門瞿曇の弟子の中、此人の上に出づるもの有ること無し。我等盡く共に圍み已つて、取つて打ち殺せ」と。是の時彼の梵志便ち共に圍みて捉へ、各ゝ瓦石を以て打ち殺し、便ち捨て去り、身體は處として、遍く骨肉爛盡せざるはなく、酷痛苦惱稱計すべからず。是の時大目揵連是の念を作さく、「此の諸の梵志、我を圍み取りて打ち、骨肉爛盡して我を捨て去り、我今身體處として痛まざるは無く、極めて疼痛を患ふ。又氣力の還えつて園に至るべき無し、我今神足を以て還えり、精舍に至るべし」と。是の時目連即ち神足を以て還えつて精舍に至り、舍利弗の所に到り、一面に在りて坐す。是の時尊者大目揵連、舍利弗に語りて言く、「此の執杖梵志は我を圍み、取りて打ち、骨肉爛盡し、身體の疼痛、實に堪ふべからず、我今般涅槃を取らんと欲す。故に來つて汝を辭せん」と。時に舍利弗言く、「世尊の弟子の中、神足第一にして大威力有り、何故に神足を以て避けざりしや」、目連報えて言く、「我本造る所の行極めて深重たり、要らず報を索受して、終に避くべからず、是れ空中にして、此の報ひを受くるに非

[19]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今獨り比丘・比丘尼・淸信士・淸信女の中に在つて、尊しと爲すに非ず、乃至世間の人民中獨り尊し、今四法の本末有り、我躬自ら之を知り、四部の衆、天上人中に(於て)作證せり。云何が四と爲すや、一に一切の諸行皆悉く無常なりと我今之を知り、四部の衆天上人中に於て作證せり、二に一切の諸行は苦なり、三に一切の諸行は無我なり、四には涅槃は休息なりと、我今之を知り、四部の衆、天上人中に於て作證しぬ。是れを比丘四法の本と謂ふなり。是の故に天上人中に於て、獨り尊きを得たり」と、爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在し、爾の時世尊大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時世尊、羅閱城に詣り、[20]夏坐せんと欲したまふ。舍利弗も亦羅閱城に詣つて夏坐せんと欲し、千二百五十の弟子、皆羅閱城に詣つて夏坐せんと欲す。然して舍利弗・目犍連夏坐し竟り、當に涅槃を取るべしと。爾の時世尊、諸比丘、舍利弗・目犍連等を將ひて、羅閱城迦蘭陀竹園に遊び、夏坐を受け已りたまふ。爾の時世尊、舍利弗に告げたまはく、「今千二百五十の弟子、汝等の爲に此に在りて夏坐せり。然らば舍利弗・目犍連比丘、當に滅度を取るべし、云何舍利弗、諸比丘の輿に、堪任して妙法を説くや、我今背痛し、少しく止息せんと欲す」と。舍利弗對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。爾の時世尊躬ら[21]僧迦利を襞み、右脇を地に著け、脚と脚とを相累ね、意を繫けて明に在り、爾の時尊者舍利弗、諸比丘に告ぐ、「我初め戒を受けし時、已に半月を經て[22]四辯才を得て證を作し、義理具足せり。我今當に之を説いて其の義を分別し、汝等をして知らしめ、布現して之を分別せしむべし、諦に聽け、諦に聽いて善く之を思念せよ」と。諸比丘、對へて曰はく、「是の如し」と。是の時諸比丘、舍利弗より敎を受く。

【一九】 A. IV. 185 Samapas-saca 參照。

【二〇】 夏坐とは、安居のこと。印度に於ては雨期の三ケ月間は、比丘の外出に不便のため、比丘は一切の遊行を禁ぜられ、一定の住處に集り、俗人の施物を受けつゝ、自己の修養を計る、これを安居(Vassa)といひ、地方により、多少の相違あるも、大體四月十六日より七月十五日まで行ふ、これを前安居といひ、一ケ月後れて、五月十五日より、八月十四日に終るを後安居といふ、その安居の終りの日に、自恣(Pavāraṇā)とて、僧伽に向ひて、安居中の犯罪について、疑ひあらば、告發せんことを乞ふ。

【二一】 僧迦利。(三衣をみよ)。

【二二】 四辯才。前出。

の變易の法をして、變易せざらしめんと欲すること、終に此の事有らず、大王當に知るべし、人身の法は猶し雪揣の如し、要らず當に壞に歸すべし。亦土坏の如く、同じく亦壞に歸して、久しく保つべからず。亦野馬の如く、幻化虛僞にして眞ならず、亦空拳以て小兒を誑すが如し。是の故に大王、愁憂を懷き、此の身を恃怙すること莫かれ、當に知るべし、此の四大恐怖有つて此の身に來至し、障護すべからず、亦言語・呪術・藥草・符書を以て除去すべき所なかるべからず、云何が四と爲すや、一に名けて老と爲し、少壯を壞敗して顏色なから使む。二に病盡と名け、無病を壞敗す、三に名けて死盡と爲し、命根を壞敗す。四に有常の物無常に歸す。是れを大王、此の四法有つて障護すべからず、力の能く伏する所に非ずと謂ふなり。大王、當に知るべし、猶し四方に四の大山有り、四方より來つて衆生を壓し、力の却く所に非ざるが如し。是の故に大王、牢固の物に非ず、恃怙すべからず。是の故に大王、當に法を以て治化し、非法を以てすること莫かるべし。王も亦久しからずして、當に生死の海に至るべし。王も亦當に知るべし、諸の法を以て治化する者は、身壞命終して善處天上に生れ、若し復非法を以て治化する者は、身壞命終して地獄の中に生る。是の故に大王、當に法を以て治化し、非法を以てすること莫かるべし。是の如く大王、當に是の學を作すべし」と。爾の時波斯匿王、世尊に白して曰さく、「此の法は何等と名くるや、當に云何が奉行すべきや」と、世尊告げて曰はく、「此の法は愁憂を除くの刺と名く」と。王、佛に白して言さく、「實に爾り、世尊、然る所以は、我此の法を聞き已つて所有の愁憂の刺を、今日已に除けり、然るに世尊、國界事猥し、所在に還えらんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「宜しく是れ時を知るべし」と。波斯匿王、卽ち座より起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去る。爾の時波斯匿王、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

らずば、當に兵衆を集め、共に大に戰鬪して之を取るべし」と。時に波斯匿王大に笑ふて曰く、「此れは是れ愚人の法なり、以て摩竭魚の口に墮つれば終に出づることを得ず」と。時に王曰く、「汝當に之を知るべし、頗らくは生有りて死せざるや」と。時に大臣曰さく、「此れは實に得べからざるなり」と。時に大王報へて曰く、「實に得べからず、諸佛も亦是の說を作したまへり、夫れ生るれば死有り、命も亦得難し」と。是の時不奢蜜跪いて王に白して曰さく、「是の故に大王甚だしく愁憂ふること莫かれ、一切衆生は皆死に歸す」と。時に王問うて曰く、「我何故に愁憂へん」と。時に臣、王に曰さく、「王當に之を知るべし。大王の母今日已に死せり」と。是の故に波斯匿王此の語を聞き已つて八九たび歎息し、大臣に語りて曰く、「善い哉、汝の言ふ所の如し、乃ち能く善權方便を知る」と。是の時王波斯匿、還えつて城に入り、種々の香華を辦じ、亡き母を供養し、亡き母を供養し已つて、便ち還えつて乘に駕し、世尊の所に至り、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時世尊問うて曰はく、「大王、何故に塵土身を坌すや」。王世尊に白さく、「天母命終し、向に送つて城外に至り、今世尊の所に來詣し、其の所由を問ふ。然して天母在りし時、持戒・精進恒に善法を修め、年百歲に向ひて、今日已に命終せり、故に世尊の所に來至する耳、若し當に我象を持して命を贖ふべく、得べくんば、亦當に象を用つて之を贖ふべし、若し當に馬もて命を贖ふべく、得べくんば、當に馬を用つて之を贖ふべし。若し當に車乘もて命を贖ふべく、得べくんば、便ち當に車乘を用つて之を贖ふべし。若し金銀珍寶もて命を贖ふべく、得べくんば、當に金銀珍寶を用つて之を贖ふべし。若し當に奴婢僕從を以て、城廓國界もて命を贖ふべく、得べくんば、當に城廓國界を以て、命を贖ふべし、若し迦尸國界の人民を以て、命を贖ひ得べくんば、當に迦尸の人民を以て之を贖ひ、我天母をして命終せしむること莫かるべし」と。世尊告げて曰はく、「是の故に大王、甚だしく愁憂ふること莫かれ、一切衆生は皆死に歸す。一切

て飲食すること能はずして重病を得ん、我今當に方便を設けて、王をして愁憂へざら使め、亦病まざら使めん」と。是の時大臣卽ち五百の白象を嚴駕し、亦五百疋の馬を嚴駕し、復五百の步兵を嚴り、復五百の妓女を嚴駕し、復五百の老母を嚴駕し、復五百の婆羅門を嚴駕せり。復五百の沙門有り、復五百の衣裳を嚴駕し、復五百の珍寶を嚴駕し、亡者の輿に、好き大棺を作り、彩畫極めて妙なら令使、繒・幡・蓋を懸け、倡妓樂を作すこと、稱計すべからず。舍衞城を出づ。是の時波斯匿王還えり來つて城に入る。是の時王波斯匿少事有り、是の時王遙に亡者を見、左右に問うて曰く、「此れは是れ何人の供養で、乃ち斯に至る」と。時に不奢蜜曰さく、「此の舍衞城の中に長者の母有りて無常なり。是れは彼の具なり」と。時に王復告げて曰く、「此の諸の象馬車乘復爲に用ふるや」と。大臣報へて曰さく、「此の五百の老母は用つて[一七]閻羅王に奉上し、持し用つて命を贖はん」と。時に王便ち笑ひて是の說を作さく、「此れは是れ愚人の法なり、命や保ち難し、何ぞ免くすべきこと有らんや、人有つて[一八]摩竭魚の口に墮し、出づることを求めんと欲するも、實に復得難きが如し。此れも亦是の如く、閻羅王の邊に墮つれば、出でんことを求めんと欲するも、實に得べきこと難し」と。「此の五百の妓女も亦用つて命を贖はん」と。王報へて曰く、「此れも亦得ること難し」と。時に大臣曰さく、「若し此の妓女(を以ても)得べからずば、當に餘の者を用つて之を贖はん」と。王曰く、「此れも亦得ること難し」と。大臣曰さく、「若し此れ得べからずば、當に五百の珍寶を用つて之を贖ふべし」と。王報へて曰く、「此れも亦得ること難し」と。大臣曰さく、「若し此れも得べからずば、五百の衣裳を用つて之を贖はん」と。王曰く、「此れ亦得ること難し」と。臣曰さく、「若し此の衣裳も得べからずば、當に此の五百の梵志の呪術を用ひて之を取るべし」と。王曰く、「此れも亦得ること難し」と。大臣曰さく、「若し此の五百の梵志も得べからずば、復當に此の沙門の高才の說法を持すべく、持し用ひて之を贖はん」と。王曰く、「此れも得べからず」と。大臣曰さく、「若し說法も得べか

【一七】閻羅王(Yamarāja)。又閻魔王といひ、雙王と譯す、地獄の主。

【一八】摩竭魚(Makara)。想像上の怪魚、或は鯨をいふか。

四と爲すや、少壯の年は、世間の人民の愛敬する所、病痛有ること無きは、人の愛敬する所、壽命は人の愛敬する所、恩愛の集聚は人の愛敬する所なり。是れを比丘、此の四法有つて、世間の人民の愛敬する所と謂ふなり。復次に比丘、復四法有つて世間の人民の愛敬せざる所なり。云何が四と爲すや、比丘當に知るべし、少壯の年若き時の老病は、世人の喜ばざる所なり、若し病無き者も、後に便ち病を得るは、世人の喜ばざる所なり。若し壽命を得る有るも、後便ち命終するは世人の喜ばざる所なり、恩愛の集り得て後復別離するは、是れ世人の喜ばざる所、是れを比丘、此の四法有りて世と與に廻轉すと謂ひ、諸天世人乃至轉輪聖王、諸佛世尊も共に此の法有り。是れを比丘、世間に此の四法有りて世と與に廻轉すと爲し、若し此の四法を覺らざる時は、便ち生死に流轉して五道を周旋するなり。云何が四と爲すや、賢聖戒・賢聖三昧・賢聖智慧・賢聖解脫、是れを比丘、此の四法有りて覺知せずば、則ち上の四法を受くと爲すなり。我今及び汝等、以て此の賢聖の四法を覺知せば、生死の根を斷ちて復有を受けず。今の如き如來の形體は衰老せり、當に此の衰耗の報ひを受くべし。是の故に諸比丘、當に此の永寂・涅槃・不生・不老・不病・不死を求め恩愛の別離に常に無常の變を念ずべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[一六]聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時王波斯匿、卽ち臣佐に勅すらく、「寶羽の車を嚴り、舍衛城を出でゝ、地講堂を觀んと欲す」と。爾の時に當り、波斯匿王の母、命過ぎ、年極めて衰老して百歲に垂向せり、王甚だ尊敬し、念じて未だ曾て目を離さゞりき。是の時波斯匿王の邊に大臣有り、不奢蜜と名く、高才にして世を蓋ひ、世人尊重す。時に大臣便ち是の念を作さく、「此の波斯匿王の母、年百歲に向ひ、今日命終せり、設し聞くべくんば、王甚だ愁憂ひ

【一六】S. 3. 3. 2 Ayyakā 參照。

て精妙たり、金銀の所造なるも、今日壞敗しては復用ふべからず、是の如く外物尙壞敗す、況んや復內なる者をや」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

咄此の老病死　人の極盛の色を壞る　初めの時は甚だ意を悅ばすも　今は死に逼めしめらる　當に壽百歲なりと雖も　皆當に死に歸すべし　此の患苦を免るゝことなく　盡く當に此の道に歸すべし　內身の所有は　死の爲めに驅らゝるが如く　外諸の四大は悉く本無きに趣く　是の故に死無きを求めて　唯涅槃有る耳　彼に死無く生無く　都て此の諸行無し

と。爾の時世尊、卽ち波斯匿王の座に就きたまふ。是の時王波斯匿、世尊の與に種々の飮食を辦じ、世尊の食し竟れるを觀、王は更に一小座を取りて、如來の前に在つて坐し、世尊に白して曰さく、「云何が世尊、諸佛の形體皆金剛數なるや、亦老病死有るべきや」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、大王、大王の語の如し、如來も亦當に此の生老病死有るべし、我今亦是れ人の數なり、父は眞淨と名け、母は[一五]摩耶と名け、轉輪聖王の種より出でたり」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

諸佛は人より出づ　父は名けて眞淨と曰ひ　母は極清妙と名け　豪族刹利種なり　死の徑に極めて困しめらるゝこと　都て尊きと卑しきとを觀ず　諸佛も尙免れず　況んや復餘の凡俗をや

と。爾の時世尊、波斯匿王の與に、此の偈を說きたまはく、

祠祀火は上と爲し　詩書頌は尊しと爲す　人中の王は貴しと爲し　衆流の海は首と爲す　衆星に月は上と爲し　光明に日は先と爲し　八方上下中　世界の載く所なり　天及び世の人民に如來は最も尊しと爲す　其れ福祿を求めんと欲せば　當に三佛を供養すべし

と。

是の時世尊、此の偈を說き已つて、便ち座より起ちて去り、祇洹精舍に還えり、座に就いて坐したまふ。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「四法有り、世間に在つて人の愛敬する所なり、云何が

【一五】摩耶(Māyā)。

んで善法を求む　設し諸の道士　及び諸の施すべき者を見れば　起ちて恭しく迎へて之を敬ひ
而して正見を學び　與ふる時極めて和悅し　常に平均することを念ふ　惠施するに悋惜無く
人の心に逆はず　彼の人命の決を受けて　諸の非法を造らず　知るべし彼の人は　命終らん
と欲する時に臨みては　必ず好き善處に生る　先に明にして後も明なればなり

是の故に大王、當に先に明にして後も明なるを學ぶべし。先に明にして後の闇を學ぶこと莫かれ。是の如く大王、當に是の學を作すべし」と。爾の時波斯匿王、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[一]「聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時尊者阿難、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて住す。斯須して復兩手を以て如來の足を摩し已り、復口を以て如來の足の上に鳴らして是の說を作さく、「天尊の體何故に乃ち爾るや、身極めて緩るみて爾るや、如來の身は本故の如からざるや」と。世尊告げて曰はく、「是の如し阿難、汝の言ふ所の如し、今如來の身の皮肉已に緩めり、今日の體は本故の如からず、然る所以は、夫れ形體を受くれば、病の爲に逼めらる。若し病むべき衆生は、病の爲に苦しめられ、死すべき衆生は、死の爲に逼めらる。今日如來、年已に衰微し、年八十を過ぎたり」と。是の時阿難、此の語を聞き已つて、悲泣哽噎して自ら勝ふる能はず。並に是の語を作さく、「咄嗟、老至つて乃ち斯に至る」と。是の時世尊、時到り、衣を著け、鉢を持し、舍衞城に入つて乞食したまふ。是の時世尊、漸々に乞食して王波斯匿の舍に至りたまふ。爾の時に當り、波斯匿の門前に故壞の車數十乘有り、捨てゝ一面に在り。是の時尊者阿難、以て車の棄てゝ一面に在るを見、見已つて世尊に白して曰さく、「此れは是れ王波斯匿の車なり、昔日作りし時は極めて精妙爲りしに、今日之を觀るに、瓦石と同色なるが如し」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、阿難、汝の言ふ所の如し。今の如く所有の車を觀ずるに、昔日の時は、極め

【一】 S. 3. 1. 3 Rāja

如し。彼の人恒に正見有つて心錯亂せず。彼に此の正見有り、『施有り、福有り、受者有り、善惡の報ひ有り、今世後世有り、沙門婆羅門有り』、設し復、彼の人若し沙門婆羅門を見れば恭敬心を起し、顏を和げ、色を悅び、己の身は恒に布施を喜び、亦復人に勸めて布施を行ぜ令め、布施を設くるの日は心踊躍を懷き、自ら勝ふる能はず、彼身に善を行ひ、口に善を行ひ、意に善を行ひ、身壞命終して善處に生るゝこと、猶し人有つて、講堂より講堂に至り、宮より宮に至るが如し、是れに由つて言ふ『我今說く、此の人明より明に至る』と、是れを大王、世間に此の四人有りと爲すなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

王當に知るべし貧しき人は、信有りて布施を好み　沙門婆羅(門)　及び諸の施すべき者を見ては　能く復起ちて迎逆へ　正見を敎ふ　施す時極めて歡喜し　求むる所人に逆はず　彼の人是れ良友にして　終に惡行を爲さず　恒に喜びて正見を行じ　常に念じて善法を求む　大王彼の人の如きは　死する時適く所有り　必ず兜術天に生れ　先に闇にして後に明なり　如し人極めて富を爲すも　不信にして恚を好喜し　慳貪の心怯弱　邪見にして改めず　沙門梵志　及び諸の乞ひ求むる者を見るも　恒に喜び呵して罵詈し　邪見にして有ること無きを言ひ　施すを見ては瞋恚を起し　人に施すことを有らしめず　彼の人行極めて弊しくして　諸惡の元本を造る　是の如き彼の人は命終せんと欲する時に臨みては　當に地獄の中に生るべく　先に明にして後闇なり　如し貧賤の人有りて　信無く　瞋恚を好み　諸の不善の行を造り　邪見にして正しきを信ぜず　設し沙門士　及び諸の事ふべき者を見ては輙ち之を輕んじ毀り　慳貪にして信有ること無く　施す時に喜ばず　他の施すを見るも亦然り　彼の人の造る所の行　適く所に安き處無し　此の如きの彼の人は　必ず當に命終を取るべく　當に地獄の中に生るべし　先に闇にして後も闇なり　如し人極めて財有りて　信有り布施を好み　正見にして他を念はず　恒に喜

婢稱計すべからず、象・馬・賭・羊皆悉く具足す。然して復此の人顏貌端正にして桃華の色の如きも、彼の人恒に邪見を懷き、〔二〕邊見と相應す、彼便ち此の見有り、『施無、〔三〕受無く、亦前人の施すべき所の物無く、亦善惡の行無く、亦今世後世無く、亦得道の者無く、世に阿羅漢の承敬すべき者、今世後世に於て證を作すべき者無し』と。彼若し沙門婆羅門を見れば、便ち瞋恚を起し、恭敬の心無く、若し人に惠施するを見れば、心喜び樂しまず、身口意の所作の行平均せず、以て非法の行を行ぜば、身壞命終して地獄の中に生る。猶し人有つて、講堂より、象に至り、象より馬に至り、馬より床に至り、床より地に至るが如し、是れに由るが故に、我今說く、此の人是の如し。大王所謂此の人は、先に明にして後に闇きなり。

彼云何が人有つて、闇より闇に至るや、若し復人有つて卑賤の家に生れ、或は旃陀羅の家、或は噉人の家、或は極下の窮家、此の人必ず此の中に生れ、或は復時有つてか諸根具はらず、顏色麁惡なり。然も復彼の人、恒に邪見を懷く。彼れ便ち此の見有り、『今世後世無し、沙門婆羅門無し、亦得道の者無し、亦阿羅漢の承敬すべき者無し、亦今世後世に證を作すべき者無し』と。彼若し沙門婆羅門を見れば、便ち瞋恚を起し、恭敬心無く、若し人來つて惠施する者を見ば、心喜び樂しまず、身口意の所作の行平等ならず、聖人を誹謗し、三尊を毀り辱かしむ、彼既に自ら施さず、又他の施すを見ては甚だ瞋恚を懷き、以て瞋恚を行ずれば、身壞命終して地獄の中に生るゝこと、猶し人有つて闇より闇に至り、火焰より火焰に至り、智を捨てゝ愚に就くが如し。是れに由つて言く、『此の人先に闇にして後に闇なり』と謂ふべし。大王當に知るべし、故に此の人闇より闇に至ると名くるなり。

彼何等の人、明より明に至ると名くるや。或は一人有り、豪家の家、或は刹利種、或は國王の家、或は大臣の家に生れ、饒財多寶にして稱計すべからず、然も復、彼の人顏色端正にして桃華の色の

【二】邊見（Antagahaditthi）。斷滅を主張する斷見と、常住を主張する常見との二の極端なる見解に執着すること。
【三】受とは、施しを受くる者、受者の意。

べし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

【〇】

聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき、爾の時王波斯匿、寶羽の車に乘り、舍衛城を出でゝ祇洹精舍に至り、世尊を覲んと欲す。諸王の常法として五の威容有り、一面に捨著し、前んで世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時世尊、大王に告げて曰はく、「大王、當に知るべし、世間に四種の人有りて世に出現す。云何が四と爲すや。或は一人有り、先に闇にして後に明なり。或は一人有り、先に明にして後に闇なり。或は一人有り、先に闇にして後も闇なり。或は一人有り、先に明にして、後も明なり。彼の人云何が先に闇にして、後に明なるや、是に於て或は一人有り、卑賤の家に生れ、或は【一】旃陀羅種、或は噉人種、或は工師種、或は婬泆の家に生れ、或は目無く、或は手足無く、或は時に裸跣し、或は諸根錯亂するも、然も復身口に善法を行じ、意に善法を念ず。彼若し沙門婆羅門諸の尊長者を見れば、恒に念じて禮拜し、時節を失はず、迎來起送し、先づ笑ひて後に語り、時に隨つて供給す。若し復時有つて乞兒者、若しは沙門婆羅門、若しは路行者、若しは貧匱者を見、若し錢財有らば便ち持して施與し、設し錢財無くば、便ち長者の家に往至し、乞ひ求めて施與し、若し復彼に施すを見れば、便ち還つて歡喜踊躍して、自ら勝ふること能はず、身に善法を行ひ、口に善法を修め、意に善法を念じ、身壞命終して善處・天上に生るゝこと、猶し人有つて、地より床に至り、床より馬に乘り、馬より象に乘り、象より講堂に入るが如し。是れに由るが故に我今說く、此の人は先に闇にて、後に明なりと、是の如く大王、此の人を名けて先に闇くして後に明るしと曰ふなり。

彼の人云何が先に明にして後に闇なるや、是に於て或は一人有り、大家に在りて生る。若しは刹利種、若しは長者種、若しは婆羅門種なり、饒財多寶・金銀・珍寶・車渠・馬碯・水精・琉璃・僕從・奴

【〇】S. 3. 3. 1 Puggala 參照。別譯に佛說四人出現世間經一卷、劉宋求那跋陀羅譯あり。

【一】旃陀羅 (Caṇḍāla) は、又闡提とも音譯す。印度の最下級の民。

と欲し、未生の善法は、方便を求めて生ぜ令め、已生の善法は重ねて増多せ令めて、終に忘失せず、具足し、修行して心意に忘れず。是の如く諸比丘、四意斷を修めよ。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[五]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「諸有の星宿の光(の中)、月光は最も第一爲り、此れも亦是の如く、諸の善き功德三十七品の法、無放逸の行は最も第一、最尊、最貴爲り、無放逸の比丘は四意斷を修む。云何が四と爲すや、是に於て比丘、若し未生の弊惡法は、方便を求めて生ぜざら令め、若し已生の弊惡法は、方便を求めて滅せ令め、若し未生の善法は、方便を求めて生ぜ令め、若し已生の善法は、方便を求めて重ねて増多せ令めて終に忘失せず、具足し、修行して心意に忘れず。是の如く比丘、四意斷を修む。是の故に諸比丘、當に方便を求めて四意斷を修むべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[六]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「諸有の華の屬(の中)、瞻蔔華、須摩那華、天上の人中の婆師華は最も第一爲り。此れも亦是の如く、諸善功德三十七道品の法(の中)、無放逸の行第一爲り。若し無放逸の比丘、四意斷を修む。云何が四と爲すや、是に於て比丘、若し未生の弊惡法は、方便を求めて生ぜざら令め、已生の弊惡法は、方便を求めて滅せ令め、若し未生の善法は、方便を求めて生ぜ令め、已生の善法は、方便を求めて増多せ令めて、終に忘失せず、具足し修行して心意に忘れず、是の如く比丘、四意斷を修む。是の故に諸比丘、當に方便を求めて、四意斷を修むべし。是の故に諸比丘、當に是の學を作す

【五】S. 3. 2. 7 Appamāda 參照。

【六】S. 3. 2. 7 Appamāda 參照。

【七】瞻蔔華(Campakā)。

【八】須摩那華(Sumanā)。

【九】婆師華(Vassikā)は、雨時華と譯す。

卷の第十八

四意斷品第二十六の一

一

[一]聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき、爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「猶し山河・石壁・百草・五穀皆地に依つて長大を得、然も亦此の地最尊最上なるが如く、此れも亦是の如し、諸の善道品の法は[二]不放逸の地に住し、諸の善法をして長大なることを得使む。無放逸の比丘は[三]四意斷を修め、多く四意斷を修む。云何が四と爲すや、是に於て比丘、未生の弊惡法は、方便を求めて生ぜざら令め、心遠離せず、恒に滅せ令めんと欲し。已生の弊惡法は、方便を求めて生ぜざら令め、心恒に遠離せず、恒に滅せ令めんと欲し、未生の善法は方便を求めて生ぜ令め、已生の善法は、方便を求めて增多せ令めて忘失せず、具足して修行し、意に忘れず。是の如く比丘、四意斷を修む。是の故に諸比丘、當に方便を求めて、四意斷を修むべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

[四]聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「比丘當に知るべし、諸有の粟散國王、及び諸大王皆來つて轉輪王に附近し、轉輪王は彼に於て最尊最上なり。此れも亦是の如く、諸の善き三十七道品の法、無放逸の法は最も第一爲り。無放逸の比丘は四意斷を修む。是に於て比丘、未生の弊惡法は、方便を求めて生ぜざら令め、心遠離せず、恒に滅せ令めんと欲し、已生の弊惡法は、方便を求めて生ぜらしめ、心遠離せず、恒に滅せ令めん

【一】 S. 3. 2. 7 Appamāda 參照。

【二】 不放逸(Appamāda)。放逸ならざること。

【三】 四意斷(Cattārisammappadhānā)。は、四正斷とも四正勤ともいふ。前出。

【四】 S. 3. 2. 7 Appamāda 參照。

の人雲に像り、何等か四人、或は比丘有り、雷つて雨らず、或は比丘有り、雨つて雷らず、或は比丘有り、亦雨らず、亦雷らず、或は比丘有り、亦雨り、亦雷る。彼云何が比丘雷つて雨らざるや、或は比丘有り、高聲に誦習す、所謂[一六]契經・[一七]祇夜・[一八]受決・[一九]偈・[二〇]本末・[二一]因緣・[二二]已說・[二三]生經・[二四]頌・[二五]方等・[二六]未曾有法・[二七]譬喩、是の如きの諸法を善く諷誦して讀み、其の義を失はず、廣く人の與に說法せず、是れを此の人雷つて雨らずと謂ふなり。彼云何が人、雨つて雷らざるや、或は比丘有つて、顏色端正にして、出入行來進止の宜皆悉く具に知り、諸の善法を修め、毫釐の失なし。然るに多聞ならず、亦高聲に誦習せず、復契經・本末・授決・偈・因緣・譬喩・生經・方等・未曾有法を修行せず、然も他より承受して亦忘失せず、好く善知識と相隨ひ、亦好く他の與に說法す。是れを此の人雨りて雷らずと謂ふなり。彼何等の人か亦雨らず亦復雷らざるや、或は一人有り、顏色端正ならず、出入行來進止の宜皆悉く具せず、諸の善法を修めず、然も多聞ならず、亦高聲に誦習して讀まず、復契經より方等に至るを修行せず、亦復他の與に說法せず、是れを此の人亦雨らず亦雷らずと謂ふなり。復何等の人有つてか、亦雨り亦雷るや、或は一人有り、顏色端正にして、出入行來進止の宜、亦悉く具に知り、學問を好んで喜び、受くる所を失はず、亦好んで他の與に法を說き、他人を勸進して、承受せしむ。是れを此の人亦雷り、亦雨ると謂ふなり。是れを比丘、世間に此の四人有りと謂ふなり。是の故に比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

諦に饒益と阿難　重擔と四生と結　四果と隨嵐風　四鳥と雷は後に在り

【一九】偈(梵、Gāthā)。は、音譯して伽陀ともいひ、獨立せる詩の經文。
【二〇】本末(梵、Itivṛttaka)。佛陀や佛弟子の過去世の物語を語るもの。
【二一】因緣(Nidāna)。緣起又は因緣を述べしもの、律の前叙の如し。
【二二】已說。十二部經には大敎を數ふ。大敎(梵、Upadeśa)。は問答體の論義の經文。
【二三】生經(梵、Jātaka)。佛陀の前生物語。
【二四】頌(梵、Udāna)。優陀那と音譯し、問者なくして、佛陀の自ら說ける卽興詩。
【二五】方等(梵、Vaipulya)。鞞佛略と音譯し、深遠なる義理を含む經文。
【二六】未曾有法(梵、Adbhuta)。佛陀の神通物語。
【二七】譬喩(梵、Avadāna)。譬喩の說、これらを十二部敎又は十二部經といひ北傳にありてはかく十二に佛陀の敎說を分類するも、南傳にありては九種に分類す。因に列擧せば、修多羅(Sutta)。祇夜(Geyya)。授記(Veyyākarana)。伽陀(Gāthā)。優陀那(Udāna)。如是語(Iti-vuttaka)。本生(Jātaka)。未曾有(Vbbhuta)。方廣(Vedalla)これを九分敎といふ。

復諸の所有の法を、初めも善く、中も善く、竟りも善く諷誦する所有る能はず、法の敎を承くる能はず、亦復善く諷誦し、讀むこと能はず、是れを此の人、形好くして、聲好からずと謂ふなり。復何等の人有つてか、聲も好くして形醜きや、或は一比丘有つて、出入・行來・屈伸・俯仰に、衣を著け、鉢を持し、威儀成就せざるも、恒に好く廣說し、然も復彼の人精進にして、戒を持ち、法を聞いて能く所學を知り、多く諸の所有の法を、初めも善く、中も善く、竟りも善く聞き、義理深邃にして具足し、梵行を修む、然も復彼の法を善く持ち、善く誦す。是れを此の人、聲好くして形醜しと謂ふなり。彼復何等の人有つてか、聲醜く形も亦醜きや、或は一人有つて戒を犯し、精進ならず、多聞ならず、聞く所を便ち失ふ。彼此の法に於て具足して梵行を行ずべきに、然も肯て承受せず、是れを此の人聲も亦醜く、形も亦醜しと謂ふなり。彼何等の人か、聲も亦好く、形も亦好きや、或は比丘有つて、顏貌端正にして出入行來に衣を著け、鉢を持し、左右を顧視せず、然も復精進にして善法を修し、然も戒律具足し、小非法を見るも尙恐懼を懷く、何况んや大なる者をや、亦復多聞にして受くる所を忘れず、是の所有の法、初めも善く、中も善く、竟りも善く、其の善行を修む、此の如きの法善く諷誦して讀む。是れを此の人聲も好く、形も亦好しと謂ふなり。是れを世間に此の四人有りて、世間に在る者は當に共に覺知すべしと謂ふなり。是の故に諸比丘、當に聲も好く形も亦好きを學ぶべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

[一五] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「四種の雲有り、云何が四と爲すや、或は雲有り、雷つて雨らず、或は雲有り、雨つて雷らず、或は雲有り亦雨り亦雷る、或は雲有り、亦雨らず、亦雷らず、是れを四種の雲と謂ふなり。世間に四種

【一五】 A. IV. 102 Valāhaka
【一六】 契經(梵、Sūtra)。は又修多羅と音譯す。散文の經文をいふ。
【一七】 祇夜(梵、Geya)。は散文の意を詩の形にて說けるもの重頌ともいふ。
【一八】 受決(梵、Vyākaraṇa)。は又受記、授記、ともいひ、佛弟子の未來の得果を預言せるもの。

れを比丘、世間に此の四果の人有りと謂ひ、當に熟果の人を學ぶべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

[一三]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「今日空中に[一四]隨嵐風有り、設し復飛鳥有つて彼に至らば、若しは烏鵲鴻鵠彼の風に値はゞ、頭腦羽翼各〻一處に在らん。此の間一比丘も亦復是の如し、禁戒を捨て已つて白衣の行を作さば、是の時三衣鉢器鍼筒六物の屬各々一處に在ること、隨嵐の風の、彼の鳥を吹殺するが猶し。是の故に諸比丘、當に梵行を修行すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「比丘當に知るべし、此の四鳥有り、云何が四と爲すや、或は鳥有り、聲好くして形醜し、或は鳥有り、形好くして聲醜し、或は鳥有り、聲醜く、形も亦醜し、或は鳥有り、形も好く、聲も亦好し。彼云何が鳥、聲好くして形醜きや、拘翅羅鳥是れなり。是れを此の鳥、聲好くして形醜しと謂ふなり。彼云何が鳥、形好くして聲醜きや、所謂鷙鳥是れなり。是れを此の鳥形好くして、聲醜しと謂ふなり。彼云何が鳥、聲醜く形も亦醜きや、所謂兎梟是れなり。是れを此の鳥聲醜く形も亦醜しと謂ふなり。復何の鳥有つて聲も好く、形も亦好きや、所謂孔雀鳥是れなり。是れを此の鳥聲も好く、形も亦好しと謂ふなり。是れを比丘、此の四鳥有りと謂ふなり。當に共に覺知すべきこと、此れも亦是の如し。世間に亦四人有りて鳥に似たり、當に共に覺知すべし。云何が四と爲すや、是に於て或は比丘有り、顏貌端正にして、出入行來に衣を著け、鉢を持し、屈伸・俯仰・威儀、成就するも、亦

【一三】 S. 17. 9 Ve'a'nlā
【一四】 隨嵐風(Verambā)

〔三〕聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の四果有り、云何が四と爲すや、或は果有り、生じて熟するに似たり、或は果有り、熟して生ずるに似たり、或は果有り、熟して熟するに似たり。或は果有り、生じて生ずるに似たり。是れを比丘、世間に此の四果有りと謂ふなり。世間に此の四人有り、亦復是の如し、云何が四と爲すや、或は人有り、熟して生ずるに像り、或は人有り、生じて熟するに似たり、或は人有り、生じて生ずるに似たり、或は人有り、熟して熟するに似たり。何等か人、生じて熟するに似たるや、或は人有つて往來行歩、卒暴を行ぜず、眼目視瞻恒に法教に順ひ、衣を著け、鉢を持し、亦復法に隨つて行歩し、地を視て左右を顧望せず、然るに復戒を犯して正行に隨はざるは、實に沙門に非ずして沙門に似たり、梵行を行ぜずして自ら梵行を行ずと言ひ、盡く正法を壞敗する根敗の種なり。是れを此人生じて熟するに像たりと謂ふなり。

此の人云何が熟して生ずるに像るや、或は比丘有つて性行蹤に似、視瞻端ならず、亦法行に隨はず、左右を顧視することを喜び、然るに復精進にして多聞、善法を修行して、恒に戒律を持し、威儀を失はず、少非法を見るも便ち恐懼を懷く。是れを此の人熟して生ずるに像たりと謂ふなり。彼云何が人有つて生じて、生ずるに像たるや、或は比丘有つて禁戒を持たず、行歩に禮節を知らず、亦復出入行來を知らず、亦復衣を著け、鉢を持することを知らず、諸根錯亂し、心色・聲・香・味・細滑の法に著し、彼禁戒を犯して正法を行ぜず。是れ沙門にして沙門に似ず、梵行を行ぜずして梵行に似、根敗の人修飾すべからざるなり。是れを此の人生じて生ずるに似たりと謂ふなり。彼云何が人有つて熟して熟するに似たるや、或は比丘有つて戒禁の限を持ち、出入行歩に時節を失はず、看視するに威儀を失はず、然も極めて精進にして、善法を修行し、威儀禮節皆悉く成就し、小非法を見るも便ち恐怖を懷く、況んや復大なる者をや、是れを此の人熟して熟するに似たりと謂ふなり。是

【三】 A. IV 106 Ambāni.

所に遊び、時到つて衣を著け、鉢を持して羅閱城に入つて乞食し、彼の車師の舍に至り、門外に在りて默然として立ちぬ。是の時彼の工師、手に斧を執りて材を斫れり。是の時更に長老の工師有り、少事緣有つて此の工師の舍に來至す。是の時彼の工師材板を修治せり。是の時彼の老工師此の念を生ず、『此の小工師は材を斫ること我意の如きや不や、我今當に之を觀ずべし』と。是の時彼の工師の所嫌の處を、彼の工師盡く取りて之を斫りぬ。是の時彼の老工師、甚だ歡喜を懷きて是の念を作さく、『善い哉、善い哉、卿の斫る所の材盡く我意の如し』と。此れも亦是の如し、諸有の比丘、心に柔和ならず、沙門の行を捨てゝ心に姦僞を懷き、沙門の法に從はず、性行麁踈にして慚愧を知らず、强顏耐辱にして卑賤の行を爲し、勇猛有ること無く、或は喜び多くして忘失し、所行を憶せず、心意定かならず、所作錯亂して諸根定まらず。然るに今尊者舍利弗は性行を觀察し已つて之を修治す。諸有の族姓子、信堅固を以て出家學道して甚だ戒を恭敬し、沙門賢聖の法を捨てず、幻僞有ること無く、卒暴を行ぜず、心意柔和にして言常に笑ひを含み、人の意を傷つけず、心恒に一定して是非有ること無く、諸根亂れず、彼尊者舍利弗の語を聞き已つて、便ち自ら承受して亦忘失せず、猶し若しは男、若しは女、端正無雙にして、極めて自ら沐浴し、好き新衣を著け、香を用つて身に塗る。若し復人有つて復加ふるに優鉢華を以て、持し用つて奉上し、彼の人得已つて卽ち頭上に著け、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はざるが如し。此れも亦是の如し、若し族姓子有つて、信堅固を以て出家學道し、戒を恭敬し、沙門の法を失はず、幻僞有ること無く、卒暴を行ぜず、心意柔和にして言常に笑ひを含み、人の意を傷つけず、心恒に一定して是非有ること無く、諸根亂れず、彼尊者舍利弗より是の語を聞き已つて、甚だ歡喜を懷き、自ら勝ふる能はずして其の敎を受く。此の如く諸の族姓子、此の法敎を說く、」と爾の時諸賢、各〻其の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

優婆夷の斯の諸の梵行者をして恒に來つて我を供養せしめん』と。彼の比丘に是の念有りと雖も、然も四部の衆亦時に隨つて供養せず、然る所以は、彼の比丘惡不善の行を未だ除かざるを以ての故に、見聞念知すること、猶し人有つて一銅器極めて清淨たり、復不淨を以て銅器の中に盛著し、復餘器を以て其の上を蓋ひ、持して國界に行詣す。衆人見已つて、彼の人に問うて曰く『君の持する所の者は是れ何物なるや、我等觀見せんことを得んと欲す』と。是の時衆人素より既に飢儉なり。謂ひて『是れは好き飲食なり』と呼び、尋いで器の蓋を發く。然るに是れ不淨なり、皆共に見ることを得るが如し。此の比丘も亦復是の如く、阿練若行有りて、時に隨つて乞食し、五納衣を著け、正身正意に繫念して前に在りと雖も、彼此の念を生じ、諸の梵行者をして、時に隨つて來り供養せしむと雖も、然も復諸の梵行の人、時に隨つて供養せず、然る所以は、彼の比丘惡不善の法結使未だ盡きざるを以ての故に、目連當に知るべし、諸有の比丘、此の惡不善の法なく、結使已に盡き、見聞念知せば、城の傍に在つて行くと雖も、猶是れ法を持つの人にして、或は人の請を受け、或は長者の供養を受く。彼の比丘、此の貪欲の想なければなり。是の時四部の衆及び諸の梵行者皆來つて供養す。然る所以は、彼の比丘の行ひ清淨なるを以ての故に、皆見聞念知す、猶し人有つて好き銅器有り、好き飲食氣味極香を盛り、復物を以て其の上を蓋し、持して國界に行詣し、衆人見已つて彼の人に問うて曰く『此れは是れ何物ぞや、我等觀見せんことを得んと欲す』と。時に尋いで發き看、『是れ飲食』と見て、皆共に取りて食ふが如し。此れも亦是の如く、比丘見聞念知し、城の傍に在つて行き、長者の供養を受くと雖も、彼是の念を作さず、『諸の梵行者をして來つて我を供養せしめん』と。然るに復諸の梵行者皆來りて之を供養す。然る所以は、彼の比丘、惡不善の行を已に除き盡すを以ての故に、是の故に目連、此の諸行を以ての故に、名けて結使と爲すなり」と。是の時尊者大目犍連歎じて曰く「善い哉、善い哉、舍利弗、然る所以は、我昔此の羅閱城の迦蘭陀竹園

或は、復、時有つてか比丘、是の念を作す『我當に園中に至り、長者婆羅門の與に說法すべし、餘の比丘をして園中に至り、長者婆羅門の與に說法せしめじ』と。或は復時有つてか餘比丘園中に至り、長者婆羅門の與に說法し、餘比丘をして園中に至り、長者婆羅門の與に說法せしめずば、『我をして園中に至り、長者婆羅門の與に說法せしめず』と、既に不善有り、又貪欲有り、此の二は倶に不善なり。

或は復時有つてか比丘是の念をなす『我今戒を犯せり、諸比丘をして、我戒を犯せしことを知らざらしめん』と。或は復時有つてか彼の比丘、戒を犯し、諸比丘、此の比丘の戒を犯せしを知らば既に不善有り、又貪欲有り、此の二は倶に不善なり。或は復時有つてか比丘是の念を作す『我今戒を犯し、餘比丘をして語げて、我の戒を犯せしを言はしめじ』と。或は復時有つてか彼の比丘、戒を犯し、餘比丘語げて、戒を犯せしことを言へば、既に不善有り、又貪欲有り、此の二は倶に不善なり。或は復時有つてか彼の比丘是の念を作す『我今戒を犯し、清淨の比丘をして我に告げしめ、不清淨の比丘をして我に告げしめじ』と。或は復時有つてか不清淨の比丘彼の比丘に告げて言ひ『彼の比丘戒を犯せり』と、既に不善有り、又貪欲有り、此の二は倶に不善なり。或は復時有つてか比丘、是の念を作す『我今戒を犯せり、若し比丘有つて我に告げば、當に屛處に在つて大衆の中に在らざるべし』と。或は復時有つて彼の比丘戒を犯し、大衆の中に在つて告語し、屛處に在らず、比丘復是の念を作す『此の諸比丘、大衆の中に在つて我に告げて屛處に在らず』と、既に不善有り、又貪欲有り、此の二は倶に不善なり。目連當に知るべし、此の諸法の本、此の行を興起す者を名けて結使と爲すなり。目連復知れ、諸有の四部の衆にして此の行を犯す者は皆共に聞知す、我阿練若を行じ、閑靜の處に在つて、正しく五納衣を著けしめ、恒に乞食を行じ、貧富を擇ばず、行ひ卒暴ならず、往來・住止・坐起・動靜・言語・默然たりと言ふと雖も、彼の比丘是の念を作す『比丘・比丘尼・優婆塞・

ず、內に結無しと、實の如く之を知り、一人を上と爲し、一人は下賤なりと謂ふなり」と。

是の時尊者目連、舍利弗に問うて曰く、「何を以ての故に名けて結と曰ふや」と。舍利弗曰く、「目連當に知るべし、惡不善の法、諸の邪見を起すが故に名けて結と爲すなり。或は復人有つて是の念を作す、『如來は我に義を問ひ已つて、然る後に諸比丘の與に法を說きたまへ、餘の比丘に義を問ひ給はずして、如來は比丘の與に法を說きたまへ』と。或は復是の時有つて、世尊は餘の比丘に語げて法を說き、然して彼の比丘に語りたまはずば、『如來は法を說き、如來は語りたまはず、我比丘の與に法を說かん』と。或は不善有り、或は貪欲有り、既に不善有り、又貪欲有り、此の二は倶に不善なり。或は復時有つてか、比丘是の念を作す、『我恒に諸比丘の前に在つて、村に入り、乞食せん、餘の比丘をして、比丘の前に在つて村に入り、乞食せしめじ』と。或は是の時有つて、餘比丘前に在つて村に入り乞食し、彼の比丘をして、比丘の前に在つて、村に入り乞食せしめずば、『我比丘の前に在つて村に入り乞食せず』と、既に不善有り、又貪欲有り、此の二は倶に不善なり。目連當に知るべし、或は復是の時有つて、比丘是の念を作す『我當に比丘の前に在つて坐す、先前に水を受け、先前に食を得べし、餘の比丘をして、比丘に先きんじて坐し、先前に水を受け、先前に食を得しめじ』と。或は復時有つてか、餘比丘、比丘の前に在つて坐し、先前に水を受け、先前に食を得て、彼の比丘をして、比丘の前に在つて坐し、先前に水を受け、先前に食を得せしめずば、『我、比丘の前に在つて坐し、先前に水を受け、先前に食を得ず』と、既に不善有り、又貪欲有り、此の二は倶に不善なり。或は復時有つてか比丘、是の念を作す『我食し已つて檀越の與に說法し、餘比丘をして食し訖つて、檀越の與に說法せしめじ』と。或は復時有つてか餘比丘、食し竟つて檀越の與に說法し、彼の比丘をして食し竟つて檀越の與に說法せしめずば、『我をして食し竟つて檀越の與に說法せしめず』と。既に不善有り、又貪欲有り、此の二は倶に不善なり。

淨想を思惟して便ち欲心を生ぜず、方便を求めて得ざる者を得、獲ざる者を獲、及ばざる者に及び、便ち貪欲・瞋恚・愚癡なく、亦復結なくして命終る。猶し人有つて市中より銅器を買得するに、塵垢の染する所、彼の人時に隨つて修治し、洗蕩して淨ならしむるが如し。此の人も亦復是の如し。結と與に相隨ひ、內に結有りと實の如く之を知る。彼の人便ち淨想を捨てゝ不淨想を思惟す、彼不淨想を思惟して更に方便を求めて得ざる者を得、獲ざる者を獲、證を作さゞる者に證を得しむることを教へ、已に欲心なく、瞋恚・愚癡なくして命終す、是れを目連、此の二人有りて結と與に相隨ふも、一人は下賤にして、一人最妙爲りと謂ふなり」と。目連曰く、「復何の因緣を以て、此の二人結と與に相隨はずして、一人は下賤、一人を最妙たらしむるや」と。舍利弗曰く、「彼の第三人は結と與に相隨はず、內に結無しと實の如くに知らず、彼便ち是の思惟を作す、『我方便を求め、思惟せずして得ざる者を得、獲ざる者を獲、證を作さゞる者にして證を作せり』と、彼の人欲心有り、瞋恚・愚癡に縛せられて命終す。猶し人有りて市に詣り、銅器を買ひ、塵垢の染する所なるも、然るに時に隨つて洗治せず、亦時に隨つて修治せざるが如し。此の第三の人も亦復是の如く、結と與に相隨はず、內に結無しと實の如くに知らず、亦是の學を作さず、『我方便を求めて此の諸の結を滅すべし』と。而して貪欲・瞋恚・愚癡の心有つて命終す。彼の第四の人は、結と與に倶ならず、內に結無しと實の如くに之を知る。彼便ち是の思惟を作さく、『方便を求めて得ざる者を得、獲ざる者を獲、證を作さゞる者に證を作さしめん』と。彼以て此の結無くして命終す。猶し人有つて市に詣り、好き銅器の極めて淨潔なるを得、復加ふるに時に隨つて其の器を修治し、磨洗す。爾の時彼の器倍す復淨好なるが如し。此の第四の人も亦復是の如く、結と與に相隨はず、內に結無しと實の如く之を知り、彼便ち是の思惟を作す、『方便を求めて獲ざる者を獲、得ざる者を得、證を作さゞるものに證を作す』と、彼便ち結使貪欲、瞋恚・愚癡無くして身壞命終す。是れを目連、此の二人有りて結と與に相隨は

比丘に告ぐ「世間に此の四人有り、云何が四と爲すや、所謂第一人の者は[二]結と與に相隨ひ、然も内に結有りと知らず。或は一人有り、結と與に相隨ひ、然も内に結有りと如實に之を知る。或は一人有り、結と與に相隨はず、然も内に結無しと如實に知らず、或は一人有り、結と與に相隨はず、然も内に結無しと如實に之を知る。諸賢當に知るべし、第一人の者は結と與に相隨ひ、然も内に結有りを知らず、此の二の結有る人の中、此の人は最も下賤なり、所謂彼の第二人は結と與に相隨ひ、内に結有りと如實に之を知る、此の人を極めて妙と爲す。彼の第三人は結と與に相隨はず、内に結無しと如實に知らず、此の人二の結無き人の中に於て此の人最も下賤なり、所謂第四の人は結と與に相隨はず、内に結無しと如實に之を知る。此の人結無き人の中に於て最も第一たり。諸賢當に知るべし、世間に此の四人有り」と。是の時尊者目連、舍利弗に問うて曰く、「何の因緣有つて、有結の、相隨ふの人の一人下賤にして、一人最妙なるや。復何の因緣有つて此の二の無結の人の相隨ふて、一人は下賤にして、一人最妙なるや。」舍利弗對へて曰く、「彼結と與に相隨ひ、内に結有りと實の如く知らず、彼の人是の念を作す『我當に淨想を作すべし』と、彼便ち思惟して淨想を作し、當に淨想を作すべし、時に便ち欲心を起し、以て欲心を起し已つて、便ち貪欲・瞋恚・癡心有つて命終る。爾の時方便を求めて此の欲心を滅せず、便ち瞋恚愚癡の心有つて命終る。目連當に知るべし、猶し人有つて市に詣り、銅器を買得するに、塵土垢坌極めて不淨たり、彼の人時に隨つて摩拭せず、時に隨つて淨洗せず、然も彼の銅器倍す更に垢を生じ、極めて不淨たるが如し。此の第一人も亦復是の如く、垢と與に相隨ひ、内に結有りと實の如く知らず、彼便ち是の念を作す、『我當に淨想を思惟すべし』と、已に淨想を思惟して便ち欲心を生じ、已に欲心を生ぜば則ち貪欲・瞋恚・愚癡有りて命終す、方便を求めて此の欲心を滅せず。彼の第二人は結と與に相隨ひ、内に結有りと實の如く之を知り、『我今淨想を捨てゝ不淨想を思惟すべし』と、彼已に淨想を捨てゝ不淨想を思惟す、彼已に不

【二】 結（Angaṇa）穢。

擔の因緣を說き、已に擔を持する人を說き、已に擔を捨つるを說きぬ。然して諸の如來の行ずべき所のもの、我今已に辨ぜり。若し樹下空處に露坐し、常に念じて坐禪し、放逸を行ずること莫かれ」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

當に念じて重擔を捨つべし　更に新擔を造ること莫かれ　擔は是れ世間の病　擔を捨つるは第一の樂なり　亦當に愛結を除き　及び非法の行を捨つべし　盡く當に此れを捨離すべし　更に復有を受けず

と。是の故に諸比丘、當に方便を作して、擔を捨離すべし、是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の[九]四生有り、云何が四と爲すや、所謂卵生・胎生・濕生・化生なり。彼云何が名けて卵生と爲すや、所謂卵生とは、鷄・雀・烏・鵲・孔雀・蛇・魚・蟻子の屬は皆是れ卵生なり。是れを名けて卵生と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて胎生と爲すや、所謂人及び畜生、二足虫に至る、是れを名けて胎生と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて因緣生と爲すや、所謂腐肉中の虫、厠の中の虫、尸中の虫の如し、是の如きの屬皆名けて因緣生と爲すなり。彼云何が名けて化生と爲すや、所謂諸天・大地獄・餓鬼、若しは人、若しは畜生、是れを名けて化生と爲すと謂ふなり。是れを比丘此の四生有りと謂ふなり。諸比丘此の四生を捨離し、當に方便を求めて四諦の法を成ずべし、是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[一〇]聞くこと是の如し。一時尊者舍利弗、尊者目犍連、羅閱城迦蘭陀竹園所に在り、爾の時舍利弗諸

【九】四生(Catasso-yoniyo)。とは、生類の出生の種類を四種に分類したもの。卵生(Aṇḍaja)。胎生(Jalābuja)。濕生(Saṃsedaja)。化生(Opapātika)がこれである。

【一〇】M. 5 Anaṅgaṇa 中阿含第八十七穢品經。

の類、恒に憍慢を懷き、心首を去らず、若し說法せしむるも亦復承受して、心遠離せず、然して復阿難、此の衆生の類は、恒に憍慢を懷き、須臾も去らず、設し復法を說く時、亦復承受す。是れを第三未曾有の法、世に出現すと謂ふなり。復次に阿難、此の衆生の類、[五]無明に覆はれ、設し復有明の法を說く時も亦復承受して忘失せず。若し復阿難、此の有明無明の法を說く時、心意柔和にして、恒に喜び修行す。是れを阿難、若し如來世に出現する時、便ち此の四未曾有の法有りて、世に出現すと謂ふなり。若し[六]多薩阿竭有りて現在する時、便ち此の四未曾有の法有りて世に出現す。是の故に阿難、當に喜びの心を發し、如來の所に向ふべし。是の如く阿難、當に是の學を作すべし」と。爾の時阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[七]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に[八]擔を說くべし、亦當に擔を持する人を說くべし、亦當に擔の因緣を說くべし。亦當に擔を捨つることを說くべし。汝等比丘、諦に聽け、諦に聽いて善く之を思念せよ、我今當に說くべし」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時諸比丘、佛より敎へを受く、世尊告げて曰はく、「彼云何が名けて擔と爲すや、所謂五盛陰是れなり。云何が五と爲すや、所謂色・痛・想・行・識陰、是れを名けて擔と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて擔を持する人と爲すや、所謂擔を持する人とは人身是れなり。字は某、名は某、是の如く生れ、是の如きを食と爲し、是の如きの苦・樂・壽命の長短を受く、是れを名けて擔を持するの人と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて擔の因緣と爲すや、所謂擔の因緣とは愛着の因緣是れなり。欲と共俱にして心遠離せず。是れを名けて擔の因緣と爲すなり。云何が名けて擔を捨離すべしと爲すや。所謂能く彼をして愛永く盡きて餘りなく、已に除き、已に吐かしむ。是れを比丘擔を捨離すと名くと謂ふなり。是の如く比丘、我今已に擔を說き、已に

【五】無明(Avijja)とは、煩惱のこと。明とは智慧。
【六】多薩阿竭 Tathāgata。譯して如來といふ、前出。
【七】S. 22. 22 Bhāra
【八】擔(Bhāra)。

の岸より彼の岸に至り、此の義を成就し、生死の根本を斷ち、更に復有を受けず、實の如く之を知れり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

今四諦の法有り　實の如く知らずば　生死の中に輪轉して　終に解脫すること有らず　如し今
四諦有りて　已に覺り、已に曉了して　已に生死の根を斷たば　更に亦有を受けじ

と、若し四部の衆有りて、此の諦を得ず、覺らず、知らずば五道に墮せん。是の故に諸比丘、當に方便を作して、此の四諦を成ずべし、是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の四法有り、多く人を饒益す。云何が四と爲すや、第一法とは當に善知識に親近すべし。第二は當に法を聞くべし。第三は當に法を知るべし、第四は當に法々の相を明にすべし。是れを比丘、此の四法有りて多く人を饒益すと謂ふなり。是の故に諸比丘、當に方便を求めて此の四法を成ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[三]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、阿難に告げて曰はく、「若し如來世に出現する時便ち四の[四]未曾有法有りて世に出現す、云何が四と爲すや、此の衆生の類多く所著有り、若し不染著の法を說く時は亦復承受し、念じて之を修行し、心遠離せず、若し如來世に出現する時、此の四未曾有の法有つて世に出現す。是れを初未曾有の法、世に出現すと謂ふなり。復次に阿難、輪轉して住らず、恒に五道に在り、正使說法せんと欲する時、亦復承受して心遠離せず、若し如來世に出現する時、此の二未曾有の法有りて、世に出現す。復次に阿難、此の衆生

【三】 A. IV. 127 Abbhutadhammā.
【四】 未曾有法(Abbhutadhamma)。

卷の第十七

四諦品第二十五[一]

一

[二]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に四諦の法を修行すべし、云何が四と爲すや、所謂初めは苦諦なり、義盡くすべからず、義窮むべからず、說法盡くること無し。第二は苦集諦なり、義盡くすべからず、義窮むべからず、說法盡くることなし。第三は苦盡諦なり、義盡くすべからず、義窮むべからず、說法盡くること無し。第四は苦出要諦なり、義盡くすべからず、義窮むべからず、說法盡くること無し。彼云何が名けて苦諦と爲すや、所謂苦諦とは生苦・老苦・病苦・死苦・憂悲惱苦・怨憎會苦・恩愛別離の苦・所欲不得苦なり。要を取りて之を言はゞ、五盛陰苦、是れを名けて苦諦と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて苦集諦と爲すや、所謂集諦とは、愛、欲と想應して心恒に染著す、是れを名けて苦集諦と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて苦盡諦と爲すや、所謂盡諦とは欲愛永く盡きて餘り無く、復更に造らず、是れを名けて苦盡諦と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて苦出要諦と爲すや、所謂苦出要諦とは謂く賢聖八品道なり。所謂正見・正治・正語・正行・正命・正方便・正念・正三昧、是れを名けて苦出要諦と爲すと謂ふなり。是の如く比丘、此の四諦有りて、實有つて虛しからず。世尊の說きたまふ所の故に名けて諦と爲すなり。諸有の衆生・二足・三足・四足・欲・色・無色・有想無想に如來は最上なり、然して此の四諦を成じたまふが故に、名けて四諦と爲すなり、是れを比丘、此の四諦有りと謂ふなり。然して覺り知らずば、長く生死に處つて五道を輪轉するなり。我今此の四諦を得しを以て、此

【一】四諦品以下四法を明す。
【二】S. 56. 21. Vijja

ふなり。是の故に諸比丘、當に方便を求めて此の三結を滅すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

[二八] 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の[二九]三々昧有り、云何が三と爲すや、空三昧・無願三昧・無想三昧なり。彼云何が名けて空三昧と爲すや、所謂空とは一切諸法皆悉く空虛なりと觀ず。是れを名けて空三昧と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて無想三昧と爲すや、所謂無想とは一切諸法に於て都て想念なく、亦見るべからず、是れを名けて無想三昧と爲すと謂ふなり。云何が名けて無願三昧と爲すや、所謂無願とは一切諸法に於て亦願ひ求めず、是れを名けて無願三昧と爲すと謂ふなり。是の如く諸比丘、當に方便を求めて此の三々昧を得べし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

幢と毘沙と法王と　瞿默と神足化と　齊戒と現在前と　長壽と結と三昧となり

增壹阿含經卷第十六

【二八】 A-III. 163°

【二九】 三三昧 (Tayo samādhi)。前に出づ。
一、空三昧(Suññatasamādhi)。
二、無願三昧(Appaṇihitasamādhi)。
三、無想三昧(Animittasamādhi)。無想は又無相とも記す。

人を歎說すべし。若し人有つて無貪欲・無愚癡・無瞋恚を歎說する者は、亦當に此の三人を歎說すべし。若し人有つて此の福田を歎說する者は、亦當に此の三人を歎說すべし。我の如きは三阿僧祇劫に於て行ぜし所の勤苦は無上道を成じ、此の三人をして此の法義を成ぜしめたり。是の故に大將、當に此の三族姓子に於て歡喜の心を起すべし。是の如く大將、當に是の學を作すべし」と。爾の時大將、世尊の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、[二七]「三の結使有りて衆生を繫縛し、此の岸より彼の岸に至ること能はず。云何が三と爲すや、所謂身邪・戒盜・疑なり。彼云何が名けて身邪と爲すや、所謂身に我有りて計し、吾我の想を生じ、衆生想を生じ、命有り、壽有り、人有り、士夫有り、緣有り、著有りと、是れを名けて身邪の結と爲すと謂ふなり。云何が名けて疑結と爲すや、所謂我有りや、我なきや、生有りや、生無きや、我人の壽命有りや、我人の壽命無きや、父母有りや、父母無きや、今世後世有りや、今世後世無きや、沙門婆羅門有りや、沙門婆羅門無きや、世に阿羅漢有りや、世に阿羅漢無きや、得證の者有りや、得證の者無きやと、是を名けて疑結と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて戒盜結と爲すや、所謂戒盜とは、『我當に此の戒を以て大姓家に生れ、長者の家に生れ、婆羅門の家に生れ、若しは天上及び諸神の中に生るべし』と、是れを名けて戒盜結と爲すと謂ふなり。是れを比丘、此の三結有りて、衆生を繫縛し、此の岸より、彼の岸に至ること能はずと謂ひ、猶し、兩牛の同一の軛、終に相離れざるが如し。此の衆生の類も亦復是の如く、三結に繫がれ、此の岸より彼の岸に至ることを得ること能はざるなり。云何が此の岸なるや、云何が彼の岸なるや、所謂此の岸とは身邪是れなり、彼の岸とは所謂身邪の滅是れなり。是れを比丘、三結衆生を繫縛して此の岸より、彼の岸に至ること能はずと謂

【二七】三結使、略して三結ともいひ、
一、身見(Sakkāyadiṭṭhi)。五蘊假和合の肉體に、常一主宰の我、及び我所有ありと執ずること、身邪とも、有身見ともいふ。
二、戒禁取見(Sīlabbataparāmāsa)。誤れる戒律に執着すること、戒盜ともいふ。
三、疑(Vicikicchā)。

「是の如し、世尊、我等は更に上人の法を得たり」と。世尊告げて曰はく、「何者か是れ上人の法なるや」と。阿那律曰さく、「此の妙法有り、上人の法の上に出づ、若し復我等慈心を以て一方に遍く満たし、二方・三方・四方も亦復是の如し、四維上下も亦復是の如し、一切中の一切、慈心を以て其の中に遍く満たし、無数無限にして稱計すべからず。而して自ら遊戯す。復悲心・喜心・護心を以て一方に遍く満たし、二方・三方・四方も亦復是の如く、四維上下に自ら遊戯す。是れを世尊、我等は更に此の上人の法を得たりと謂ふなり」と。爾の時尊者難提・金毘羅、阿那律に語げて曰く、「我等何れの日に汝の許に至りて此の義を問ひしや、今世尊の前に在つて自ら稱説せよ」と。阿那律曰く、「汝等亦未だ曾て我許に至りて此の義を問はず、但諸天我所に來至して此の義を説けり、是の故に世尊の前に在つて、此の義を説くのみ、但我長夜の中に諸賢の心意を知る、然して諸賢は此の三昧を得たるが故に、世尊の前に在つて此の語を説くのみ」と。爾の時、此の法を説くの時、長壽大將世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時長壽大將世尊に白して曰さく、「今日世尊、此の諸人の與に法を説きたまふや」と。是の時世尊、此の因緣を以て具に長壽大將に向つて之を説きたまへり。是の時大將、世尊に白して曰さく、「跋耆大國は快き大利を得たり、此の三族姓子有りて自ら遊化す、阿那律・難提・金毘羅なり」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、大將、汝の言ふ所の如し、跋耆大國は快き善利を得たり、且つ跋耆大國を捨てゝも、摩竭大國は快き善利を得たり、乃ち此の三族姓子有り、若し當に摩竭大國の人民の類、此の三族姓子を憶へば、便ち長夜に安隱を獲べし。大將當に知るべし、若し縣・邑・城・郭に此の三族姓子有らば、彼の城郭の中の人民の類、長夜に安穩を得ん、此の三族姓子を生む所の家も亦大利を獲ん、乃ち能く此の上尊の人を生みし彼の父母、五種親族にして、若し當に此の三人を憶へば亦大利を獲べし。若し復天・龍・鬼神にして、此の三族姓子を憶へば亦大利を獲ん。若し人有つて阿羅漢を歎説する者は亦、當に此の三

に遊ぶ。是の時難提金毘羅、阿那律の心中の所念を知り、亦復欲不淨想を思惟し、喜安を念持して初禪に遊ぶ。若し復尊者阿那律、二禪・三禪・四禪を思惟せば、爾の時尊者難提・金毘羅も亦復二禪・三禪・四禪を思惟す。若し復尊者阿那律、[二一]空處・[二二]識處・[二三]不用處・[二四]有想無想處を思惟せば、是の時尊者難提・金毘羅も亦復空處・識處・不用處・有想無想處を思惟す、若し復尊者阿那律、[二五]滅盡定を思惟せば、爾の時尊者難提・金毘羅も亦復滅盡定を思惟す。此の如き諸法、諸賢此の法を思惟す。爾の時世尊師子國中に往きたまふ。爾の時守國の人、遙に世尊の來りたまふを見、便ち是の說を作さく、「沙門、來つて國中に入ること勿れ、然る所以は、此の國中に三族姓子有り、阿那律・難提・金毘羅と名く、愼しみて觸嬈すること莫かれ」と。是の時尊者阿那律、天眼淸淨なると及び[二六]天耳通とを以て、守國の人の、世尊の與に是の如きの說を作し、世尊をして國に入ることを、得ざら使むるを聞きぬ。是の時尊者阿那律卽ち出でゝ守門の人に告げて曰く、「遮すること勿れ、世尊今來つて此に至りたまふを、看んと欲す」と。是の時尊者阿那律尋いで入つて、金毘羅に告げて曰く、「速に來れ、世尊は今門外に在り」と。是の時三人卽ち三昧より起ち、世尊の所に往至し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在つて住し、各ゝ自ら稱へて言く、「善くぞ來りたまへり、世尊」と、尊者阿那律前みて世尊の鉢を取り、尊者難提前みて座を敷き、尊者金毘羅水を取つて世尊の與に足を洗へり。

爾の時世尊、阿那律に告げて曰はく、「汝等三人此に在つて和合し、他念有ること無く、乞食意の如きや」と。阿那律曰さく、「是の如し、世尊、乞食するに以て勞を爲さず、然る所以は、若し我初禪を思惟する時は、爾の時難提・金毘羅も亦復初禪を思惟す、若し我二禪・三禪・四禪・空處・識處・不用處・有想無想處・滅盡三昧を思惟せば、爾の時難提・金毘羅も亦復二禪・三禪・四禪・空處・識處・不用處・有想無想處・滅盡定を思惟す。是の如く世尊、我等は此の法を思惟す」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、阿那律、汝等頗る是れ時有り、更に上人の法を得るや」と。阿那律報へて曰さく、

【二一】空處とは、具には空無邊處(Ākāsānañcāyatana)。といひ、一切の物質の觀念を超越して、たゞ空間の無限のみの思惟せられる心境

【二二】識處とは、具には識無邊處(Viññāṇañcāyatana)といひ、空處定を超越して、意識の無限のみの思惟せられる心境をいふ。

【二三】不用處。前に出づ。

【二四】有想無想處。前に出づ。

【二五】滅盡定(Nirodhasamāpatti)とは、滅受想定ともいひ、受と想との滅盡せし狀態の心境にして、これを以て禪定の究極に達せしものとす、四禪及び空處以下の五を加へ、これを九次第定といふ。

【二六】天耳通とは、五通の一、非凡の聽力をいふ。

しこと』と、即ち自ら天冠を脱ぎ、長生に與へて著けしむ。復加ふるに女を嫁して、舍衛の國土人民を還付し、尋いで長生に付して領せしめ、王は波羅捺に還えりて治めぬ。比丘當に知るべし、然して古昔の諸王に此の常法有り、此の諍國の法有りと雖も、猶相堪忍して相傷害せず、況んや汝等比丘、信堅固を以て出家學道し、貪欲・瞋恚・愚癡の心を捨て、今復諍ひ競ふて相和順せず、各々相忍ばずして懺改せず、諸比丘、當に此の因縁を以て鬪ふことの、其れ宜しく然るに非ることを知るべし。同一の師侶、共に一の水乳なり、共に鬪訟すること勿れ」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

　鬪ふことなく諍ひ有ること無く　慈しみの心もて一切を愍み　一切に患ひなくば　諸佛の歎譽する所とならん

是の故に諸比丘、當に忍辱を修行すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。是の時拘睒彌の比丘、世尊に白して曰さく、「唯願はくは世尊、此の事を慮ること勿れ、我等は自ら當に此の法を分明すべし、世尊、此の語有りと雖も、其の事然らず」と。是の時世尊便ち捨てゝ去り、跋耆に詣りたまへり。

〔一七〕爾の時跋耆國の中に三族姓子有り、〔一八〕阿那律・〔一九〕難提・〔二〇〕金毘羅なり。然るに彼の族姓子共に制限を作し、其の出でゝ乞食する者有れば、後の住する者は便ち地を掃灑して淨めしめ、事々に乏しからず。其食を得來る者は分ち與へて食せしめ、足れば則ち善し、足らざれば意の如く所に隨ふ。遺餘有れば器の中に瀉著し便ち捨て去る。若し復最後に乞食し來る者、足れば則ち善し、足らざれば便ち器の中の食を取りて自ら鉢の中に著す。爾の時便ち水瓶を取り、更に一處に著し、即ち當に一日房舍を掃除すべし。復更に閑靜の處に在て、正身正意に繫念し、前に在つて妙法を思惟す。然して復彼の人終に共に語らず、各自寂然たり。爾の時尊者阿那律、欲不淨想を思惟し、喜安を念持して初禪

【一七】M. 128 Vol. III. p.155 ff
【一八】阿那律(Anuruddha)。
【一九】難提(Nandiya)。
【二〇】金毘羅(Kiṃbila)。

長生太子を捉へ、諸人に語げて言く、『此れは是れ、長壽王の兒長生太子とは、此の人の身是れなり。卿等復語有つて敢えて所說有ることを得る勿れ、然る所以は、長生太子に吾命は活されたり。吾も亦此の人の命を活さん』と。時に諸の群臣此の語を聞き已つて未曾有なりと歎じ、『此王の太子は甚奇甚特なり、乃ち能く怨みに於て怨を報ぜず』と。時に梵摩達王、長生に問うて曰く、『汝我を取りて殺すべきに、何故に見放して、復之を殺さゞりしや、將た何の因緣有りてや、今願はくは之を聞かん』と。長生對へて曰く、『大王、善く聽け、父王の命終せんと欲するに臨みし時、是の說を作せり、「汝今亦長を見ること莫かれ、亦短を見ること莫かれ」と。又是の語を作しき、「怨みと怨みとは休息せず、古より此の法有り、怨みなくば能く怨みに勝たん、此の法は終に朽ちじ」と』。是の時群臣、父王の此の語を聞き、相謂ひて言く、「此れ狂惑多し、說く所有るも、長生とは竟に是れ何人ぞ」と。長壽王對へて曰く、「卿等當に知るべし、其の中の智有るの人、乃ち此の語を明すのみ」と。父王の此の語を憶ひ已り、是の故に王の命根を全うせし耳』と。梵摩達王此の語を聞き已つて、甚だ所作を奇とし、未曾有なりと歎じ、乃ち『能くも父の教勅を守りて、墮する所有らざる』と。時に梵摩達王、太子に語げて曰く、『汝今說く所の義、吾猶解せず、今吾與に其の義を說いて、意に解することを得せ使むべし』と。時に長生太子對へて曰く、『大王善く聽け、我當に之を說くべし、梵摩達王は長壽王を取つて殺せり、設し王長壽王の本所有の群臣極めて親しく有る者も亦當に王を取つて之を殺すべし。設し復梵摩達王の所有の臣佐も復、當に長壽王の臣佐を取つて之を殺すべし。是れ怨みと怨みとは終に斷絕せずと謂ふなり。怨みをして斷たしめんと欲せば、唯人に報ずること無きこと有るのみ、我今此の義を觀じ已れり、是の故に王を害せざりしなり』と。是の時梵摩達王、此の語を聞き已つて、甚だ踊躍を懷き、自ら勝ふる能はず、『此の王の太子は極めて聰明たり、乃ち能く廣く其の義を演ぶ』と。時に王梵摩達卽ち向つて懺悔し、是れ我罪過なり、長壽王を取りて之を殺せ

名けて怨みを報ずと爲すなり』と、是の時復憶念を作さく『汝長生、亦長を見ること莫かれ、亦短を見ること莫かれと、父王の是の敎勅有り、「怨みと怨みとは休息せず、古より此の法有り、怨なくば能く怨みに勝たん、此の法は終に朽ちず」と。我今此の怨みを捨つべし』と。卽ち還えつて劍を內る。是の時王梵摩達、夢に『長壽王の兒長生太子、我を取りて殺さんと欲す』と見、卽便ち恐懼す、尋いで時に覺むることを得たり。時に長生太子曰く『大王、何故に驚き起きて乃ち斯に至るや』と。梵摩達曰く『向者睡眠るに、夢に、長壽王の兒長生太子、劍を拔き吾を取つて殺さんとするを見たり。是の故に驚きし耳』と。是の時長生太子便ち是の念を作さく『今此の王は已に我の是れ長生太子なることを知る』と。卽ち右手に劍を拔き、左手に髮を捉へ、王に語げて曰く『我今正に是れ長壽王の兒長生太子なり。然して王は是れ我大怨なり、又我父母を取つて之を殺し、加ふるに我國界に住す、今にして怨を報ぜずば、何れの日にか當に剋くすべき』と。時に梵摩達王卽ち長生に向ひて是の說を作さく『我今命汝の手に在り、願はくは原捨を垂れて生命を全うするを得ん』と。長生報へて曰く『我王を活すべきも、王は我命を全うせざらん』と。王長生に報へて、『唯願はくは濟ひを垂れよ、吾終に汝を取つて殺さじ』と。是の時長生太子王と共に、言の誓ひを作し、『俱に共に命を相濟はゞ、終に相害せざらん』と。比丘當に知るべし、爾の時長生太子は卽ち王の命を活せり。是の時梵摩達王長生太子に語げて曰く『願はくは太子、還えつて我と與に寶羽の車を嚴駕し、還えつて國界に至らん』と。是の時太子卽ち、寶羽の車を嚴駕し、二人共に乘つて徑を舍衞城に來至す。時に王梵摩達卽ち群臣を集めて是の語を作さく『設し卿等長壽王の兒を見ば、取つて何をか爲さんと欲するや』と、其の中に或は大臣有つて是の說を作さく『當に手足を斷つべし』と。或は言へる有り『當に身を分ちて三段にすべし』と。或は言へる有り『當に取つて之を殺すべし』と。是の時長生太子、王の側に在つて坐し、正身正意來言を思惟す。時に梵摩達王、躬自ら手にて

く、「善い哉、善い哉、汝今人となり極めて聰明たり、今復汝に勅す、宮内の可否、汝悉く之を知れ」と。是の時、長生太子内宮中に在りて、此の琴音を以て諸の妓女に教へ、亦復象馬に乗らしめ、技術事として知らざるは無し。是の時梵摩達、意に出でゝ園館に遊び、共に相娯樂しまんと欲し、即ち長生に勅して寶羽の車を催駕す。時に長生太子卽ち王の教へを受け、尋いで寶羽の車を駕せしめ、象に金銀の鞍勒を被せ、還えり來つて王に曰さく、『嚴駕已に辦ぜり、王是れ時を知れ』と。梵摩達王、寶羽の車に乗り、長生をして之を御せしめ、及び四部の兵衆を將ゆ。時に長生太子、車を御し、引導して恒に大衆を離る。時に梵摩達王、長生太子に問うて曰く、『今日軍衆斯れ所在爲るや』と。長生對へて曰く、『臣も亦軍衆の所在を知らず』と。時に王告げて曰く、『小しく停り住すべし。吾體疲極せり、小しく止息せんと欲す』と。時に長生太子卽ち自ら停り住し、王をして憩息めしむ。頭に比ぶも軍衆未だ至らず。比丘當に知るべし、爾の時梵摩達王、卽ち太子長生の膝の上に枕して睡眠りぬ。時に長生太子、王の眠むるを見しを以て、便ち是の念を作さく、『此の王は我に於ては極めて是れ大怨なり。又我父母に取つては之を殺し、加ふるに我國界に住す、今怨みを報ぜずば、何れの時か怨みを報ずべけん。我今其の命根を斷たん』と。時に長生太子右手に自ら劍を拔き、左手に王の髪を摸へ、然して復是の念を作さく、『我父命終せんとせしに臨みし時、我に告げて言く、「長生當に知るべし、亦長を見ること莫かれ、亦短を見ること莫れ」と。加ふるに此の偈を說く、

　怨みと怨みとは休息せず　古へより此の法有り　怨みなくば能く怨みに勝たん　此の法は終に朽ちじ

と。我今此の怨みを捨てん』と、卽ち還えつて劍を內る。是の如きこと再三なり、復是の念を作さく、『此の王は我に於ては極めて是れ大怨なり、又我父母を取りて之を殺し加ふるに我國界に住す、今にして怨みを報ぜずば、何れの日にか當に尅くすべき。我今正に爾り、其の命根を斷つを、乃ち

爾の時梵摩達王高樓の上に在つて、遙に小兒有りて長壽王及び夫人の身を耶維するを見、見已つて左右に勅して曰く、『此れ必ず是れ長壽王の親里のものたらん、汝倶り一收捉し來れ』と。時に諸の臣民即ち彼に往詣す、未だ到らざる頃に、兒は已に走り去れり。時に長生太子便ち是の念を作さく、『此の梵摩達王は我父母を殺し、又我國の中に住す、我今當に父母の怨みを報ずべし』と。是の時長生太子便ち彈琴師の所に往至し、到り已つて便ち是の說を作す、『我今琴を彈くことを學ばんと欲す』と。時に琴師問うて曰く、『今汝の姓は誰ぞや、父母所在爲るや』と。小兒對へて曰く、『我に父母無し、我本此の舍衞城の中に住し、父母早く死せり』と。琴師報へて曰く、『學ばんと欲せば便ち之を學べ』と。比丘當に知るべし、爾の時長生太子便ち彈琴歌曲を學ぶ。時に長生太子素自ら聰明にして、未だ數日を經ざるに、便ち能く彈琴歌曲、事として知らざるはなし。是の時長生太子、琴を抱いて梵摩達王の所に詣り、象の廐の中に在りて、人の非る時獨り琴を彈き並に復清歌す。爾の時梵摩達王高樓の上に在りて、彈琴歌曲の聲を聞き、便ち問ひ、左右の人に勅して曰く、『此れ何人ぞ象廐の中に在りて獨り琴を彈いて歌ひ戲るや』と。臣佐報へて曰く、『此の舍衞城の中に小兒有り、獨り琴を彈いて歌ひ戲る』と。時に王侍者に告げて曰く、『汝約勅して此の小兒をして、此に來在して戲れ使むべし　吾之を見んと欲す』と。時に彼人をして、此の小兒を喚ばしめ、王の所に來至す。是の時梵摩達王小兒に問ふ、『汝昨夜象廐の中に在つて琴を彈きしや』と。對へて曰く、『是の如し、大王』と。梵摩達曰く、『汝今吾側に在りて、琴を彈いて歌ひ舞ふべし、我當に衣被飲食を供給すべし』と。比丘當に知るべし。爾の時長生太子、梵摩達の前に在りて琴を彈き、歌ひ舞ふこと極めて精妙なり。時に梵摩達王、此の琴の音を聞き、極めて歡喜を懷き、便ち長生太子に告ぐ、『當に吾與に珍寶を守藏すべし』と。時に長生太子、王の教勅を受け、未だ曾て失ふこと有らず、恒に王の意に隨ひ、先づ笑ひて後に語り、恒に王の意を認む。爾の時梵摩達王、復告勅して曰

人民悉く皆長壽王の身を捉へ得しを聞知す。時に夫人も亦復、長壽王の梵摩達の爲に捉得せられしと聞き、聞き已つて便ち是の念を作す『我今復活きることを用つて爲さん、寧ろ大王と共に一時命を同じうせん』と。是の時夫人卽ち太子を將ひて舍衞城に入る。夫人太子に語げて曰く『汝今更に活きる處を求めよ』と。時に長生太子聞き已つて、默然として語らず。時に夫人徑を梵摩達王の所に往至す。王遙に來るを見、歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず、卽ち大臣に勅し『此の夫人及び長壽王を將ひて四衢道頭に至り、分ちて四分と作せ』と。時に諸大臣、王の敎令を受け、長壽王及び夫人の身を將ひ、皆取つて返縛し、舍衞城を遶り、萬民をして見せしむ。爾の時人民の類、心を痛めざるは莫し、時に長生太子、大衆の中に在つて、父母を將ひて市に詣り、取りて殺さんとするを見るも、顏色變せず。時に長壽王還顧して長生に告げて曰く『汝長を見ること莫かれ、亦短を見ること莫かれ』と。爾の時便ち此の偈を說く、

怨みと怨みとは休息せず　古へより此のゑ有り　怨みなくば能く怨に勝たん　此の法は終に朽ちじ

と、是の時諸臣自ら相謂ひて曰く『此の長壽王は極めて愚惑たり、長生太子とは竟に是れ何人ぞ、我等の前に在つて此の偈を說く』と。時に長壽王諸臣に告げて曰く『我は愚惑ならず、但其の中の智者乃ち吾語を明すのみ、諸賢當に知るべし、我一夫の力を以て、能く此の百萬の衆を壞るに足る。然るに我復是の念を作しぬ。「此の衆生の類の死するもの數へ難し、我一身の故を以て歷世に罪を受くべからず。怨みと怨みとは休息せず、古くより此の法有り、怨みなくば能く怨みに勝たん、此の法は終に朽ちず」と』。時に彼の諸臣、長壽王及び夫人の身を將ひて四衢道頭に到り、分ちて四分となし、卽ち捨て去り、各〻所在に還える。時に長生太子、暮に向つて薪草を收拾し、父母を耶[一六]維して去る。

【一六】耶維は荼毘に同じ。前出。

の敎勅有るや』と。長壽王曰く、『我舊恩を憶はゞ、便ち反復有れ』と。時に臣對へて曰く、『大王、敎令あれ、我當に之を辨ずべし』と。長壽王曰く、『我夫人は昨夜夢に、市中に在つて產むと、又四部の兵有つて圍遶し、一男兒を生み、極めて自ら端正なるを見る。若し夢の如くに產まずば、七日の中に當に命終を取るべし』と。大臣報へて曰く、『我今此の事を辨ずるに堪えん。王の來勅の如し』と、此の語を作し已つて、各〻捨てゝ去りぬ。是の時大臣便ち、梵摩達王の所に往至し、到り已つて是の說を作す、『七日の中に、意に大王の軍衆、象兵・馬兵・車兵・步兵の竟に多少なるを觀んと欲す』と。是の時梵摩達、左右に勅して曰く、『時に上兵の衆を催すこと、善華の語の如くせん』と。是の時善華大臣、七日の中に卽ち兵衆を集め、舍衛の都市の中に在り、是の時彼の夫人七日の中に來つて都市の中に在り。時に善華大臣遙に夫人の來るを見、便ち是の說を作す、『善くぞ來れり、賢女、今正に是れ時なり』と。爾の時夫人四部の兵衆を見已つて便ち歡喜を懷き、左右の人に勅して大幔を施張す。時に夫人、日初めて出づるの時、便ち男兒を生む、端正にして雙びなく、世の希有なり。時に夫人兒を抱いて還えり、山中に詣る。時に長壽王遙かに夫人の兒を抱いて來るを見、便ち是の語を作す、『兒は老壽にして命を受くること極りなからしめんと、夫人、王に白さく、『願はくは王、當に字を立つべし』と。時に王卽ち以て字を立て、名けて長生と曰ふ。時に長生太子、年八歲に向ふ。父王長壽、小因緣有つて舍衛城に入る。爾の時長壽王の昔の臣の劫比、王の城に入るを見、頭より足に至るまで熟觀視し、見已つて便ち梵摩達王の所に往至し、到り已つて是の說を作す、『大王は極めて放逸たり、長壽王今此の城に在り』と。時に王瞋恚り、左右の人に勅し、催して長壽王を收捕せしむ。是の時左右の大臣、此の劫比を將ひて東西に求索む。時に劫比、遙かに長壽王を見、便ち目示して大臣に語げて曰く、『此れは是れ長壽王なり』と。卽ち前んで收捕し、梵摩達王の所に至り、到り已つて白して言く、『大王、長壽王とは此の人の身なり』と。是の國の中の

す。爾の時梵摩達王、便ち是の念を作さく、『此の長壽王に臣佐有ること無く、又財貨に乏しく、珍寶有ること無し。我今往いて其の國を攻伐す可し』と。爾の時梵摩達王即便兵を興し、往いて其の國を伐てり。爾の時長壽王、兵を興して其の國を攻伐すと聞き、即ち方計を設け、『我今七寶の財、臣佐の屬、四部の兵無しと雖も、彼の王復、諸の兵衆多しと雖も、我の今日の如きは、一夫の力能く彼の百千の衆を壞り、衆生を殺害すること、稱計すべからざるに足らんも、一世の榮を以て、永世の罪を作す可からず、我今此の城を出でゝ、更に他國に在つて鬪諍なから使むべし』と。爾の時長壽王、臣佐に語げずして、第一夫人を將ひ、及び一人を將ひて舍衞城を出で、深山の中に入りぬ。是の時舍衞城中の臣佐人民、長壽王を見ざるを以て、便ち信使を遣し、梵摩達王の所に往詣して是の說を作す、『唯願はくは大王、此の土に來至せよ、今は長壽王所在を知る無し』と。是の時梵摩達王、迦尸國の中に來至して自ら治化す。然るに長壽王に二夫人有り、皆懷妊し、產むこと在らんと欲するに臨み、是の時夫人自ら夢に、『都市の中に在りて生むと、又日初に四部の兵を出して、手に五尺の刀を執つて各〻共に圍遶して、獨り自ら產む、佐くる者有ること無し』と。見已つて便ち自ら驚き覺む。此の因緣を以て長壽王に白す、王夫人に告げて曰く、『我今此の深山の中に在り、何の緣か乃ち當に舍衞城内に在り、都市の中に在りて產むべけんや。汝今產まんと欲せば、當に鹿の生むが如かるべし』と。是の時夫人曰く、『設し我此の如く產むを得ずば、正に爾り、死を取らんのみ』と。是の時長壽王、此の語を聞き已つて、即ち其の夜に於て、更に衣服を更め、人衆を將ひずして舍衞城に入る。時に長壽王に一大臣有り、名けて善華と曰ふ、甚だ相愛念せり。小事緣有つて城を出でて、長壽王の城に入るを見る。時に彼の善華大臣、王を熟視し已つて便ち捨てゝ去り、嘆息して淚を墮し、道を復へして行く。時に長壽王、便ち彼の大臣を逐ひ、將ひて屛處に在つて語言すらく、『愼しみて口に出すこと莫かれ』と、大臣對へて曰く、『大王の敎への如し、不審なり、明王、何

み、諸の惡行を犯し、面りに相談說し、或時は刀杖相加へぬ。爾の時世尊、淸旦彼の比丘の所に往詣し、到り已つて世尊、彼の比丘に告げたまはく、「汝等比丘、愼んで鬪訟すること莫かれ、相是非すること莫かれ。諸比丘當に共に和合し、共に一師侶たるべし。同一の水乳なるに、何ぞ鬪訟を爲すや」と。爾の時拘睒彌の比丘、世尊に白して曰さく、「唯願はくは世尊、此のことを憂ふること勿れ、我當に自ら此の理を慮るべし。此の如きの過狀、自ら其の罪を識る」と。世尊告げて曰はく、「汝等云何、王種の爲に道を作すや、畏恐の爲の故に道を作すや、世の險を以ての故に道を作すと爲すや」と。諸比丘對へて曰さく、「非なり、世尊」と。世尊告げて曰はく、「云何、比丘汝等豈生死を離れ、無爲の道を求めんと欲して、道を作すに非ずや。然も五陰の身は實に保つべからず」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊、世尊の敎への如し、我等族姓子の出家學道せし所以の者は、無爲の道を求め、五陰の身を滅するを以てなり、是れを以て學道せり」と。世尊告げて曰はく、「諸比丘、道を作して復鬪諍し、手拳相加へ、面りに相是非し、惡聲相向ふべからず。汝等當に此の行を成就し、共に同一の法を共に一師より受くべし。亦當に此の六種の法を行ずべし、亦當に此の身口意行を行ずべし、亦此の諸の梵行者を供養することを行ずべし」と。諸比丘對へて曰さく、「此れは是れ、我等の事、世尊、此の事を慮るに足ること勿れ」と。爾の時世尊、拘睒彌の比丘に告げたまはく、「云何が愚人、汝等如來の語を信ぜざるや。方に如來に語ぐるに、『此の事を慮ること勿れ』と。然らば汝等自ら當に此の邪見の報ひを受くべし」と。爾の時世尊、重ねて彼の比丘に告げて曰はく、「過去久遠に此の舍衞城中に王有り、名けて[一四]長壽王と曰ひ、聰明黠慧にして、事として知らざるはなし。然も善く刀劍の法を明にす、又寶物に乏しく、諸藏充つることなく、財貨減少し、四部の兵も亦復多からず、臣佐の屬も亦復減少す。爾の時に當つては波羅㮈國に王有り、[一五]梵摩達と名く、勇猛剛健にして降伏せざるは無し。錢財七寶悉く皆藏に滿ち、四部の兵も亦復乏しからず、臣佐具足

[一四] 長壽王(Dīghāyu)

[一五] 梵摩達(Brahmadatta)

知るべし、善男子・善女人にして、八關齋を持つものは、[八]四姓の家に生れんと欲せば、亦復生るゝことを得ん。又善男子・善女人にして八關齋を持つの人、一方の天子二方、三方、四方の天子に作ることを求めんと欲せば、亦其の願ひを獲ん、轉輪聖王と作ることを求めんと欲せば亦其の願ひを獲ん。然る所以は、其れ戒を持つの人の願ふ所の者は得るを以てなり。若し善男子・善女人にして、聲聞・緣覺・佛乘を作ることを求めんと欲せば、悉く其の願ひを成ぜん。吾今佛を成ぜしは其れ戒を持ちしに由る。五戒十善、願ひとして獲ざるはなし。諸比丘、若し其れ道を成ぜんと欲せば、是の學を作すべし」と」。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[九]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園におはしき。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「三事有りて[一〇]現在前せば、爾の時善男子・善女人の福を獲ること無量なり。云何が三と爲すや、信現在前せば、善男子・善女人の福を獲ること無量なり。若し財現在前せば、爾の時善男子・善女人の福を獲ること無量なり、若し復梵行を持つこと現在前せば、爾の時善男子・善女人の福を獲ることを無量なり。是れを比丘此の三事有つて現在前せば、福を獲ること無量と謂ふなり。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

信と財と梵とは得難し　受者と持戒の人　此の三事を覺り已れば　智者は時に隨つて施し　長夜に安穩を獲　諸天は恒に扶は將し　彼に在つて自ら娛樂のみ　五欲に厭足なけん

是を以て諸比丘、若し善男子・善女人は、當に方便を求めて、此の三法を成ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

[一一]聞くこと是の如し、一時佛、[一二]拘睒彌城[一三]瞿師羅園中に在しき。爾の時拘睒彌の比丘恒に鬪訟を好

【八】四姓とは、印度の社會的四階級にして、
一、婆羅門(Brāhmaṇa)。
二、刹帝利(Khattiya)。
三、毘舍(Vessa)。
四、首陀羅(Sudda)。
毘舍は一般の農工商に從事するもの、首陀羅は奴隸の階級。印度にありては、此の四階級嚴然として、互に犯すべからざるものとされたり。

【九】宋・元・明藏の三本、いづれも、これを第十六卷の首とす。
A. III. 41

【一〇】現在前（Sammukhībhāva）巴利文は、次の三をあぐ
一、Saddhā(信)
二、Deyyadhamma(供養)
三、Dakkhiṇeyya(布施)

【一一】M. 48 Kosambiya s. の初部 M. 128 Upakkilesiya s. & J. 428 中阿含第七十二經長壽王本起經の后部 Vinaya Mv. Kosambi 10-12

【一二】拘睒彌(Kosambi)は又憍賞彌とも音譯し、印度十六大國の婆蹉の(Vaṃsā)首都、今のヤムナ河の南岸に位す。優塡王こゝに王たり。

【一三】瞿師羅園（Ghositārāma）は瞿師羅長者の献納せし園

莫く、亦轉輪聖王と作ること莫く、恒に佛前に生れて、自ら佛を見、自ら信を聞き、諸根をして亂れざらしむ。若し我誓願して三乘行に向はゞ、速に道果を成ぜん。比丘當に知るべし、若し優婆塞・優婆夷有りて、此の八關齋法を持てば、彼の善男子・善女人は當に三道に趣き、或は人中に生じ、或は天上に生じ、或は般涅槃すべし』と」。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

殺さず亦盜まず　淫せず妄語せず　酒を避け香花を遠ざけ　味に著し齋を犯す者　歌舞倡伎を
作し　捨を學ぶこと羅漢の如く　今八關齋を持ちて　晝夜に忘れず　生死の苦有らず　周旋期
有ることなく　恩愛の與に集ることなく　亦怨憎と會すること莫く　願はくば五陰の苦　諸病
生死の惱みを滅し　涅槃に諸の患ひなく　我今自ら之に歸す

是の故に諸比丘、若し善男子・善女人有つて、八關齋を持ち、諸の苦を離れ、善處を得んと欲する者、諸漏を盡くして涅槃の城に入ることを得んと欲する者は、當に方便を求あて、此の八關齋の法を成ずべし。然る所以は、人中の榮位も貴しと爲すに足らず、天上の快樂稱計すべからざるも、若し善男子・善女人にして無上の福を求めんと欲する者は、方便を求めて此の齋法を成ずべし。我今重ねて汝に告勅せん、若し善男子・善女人有りて、八關齋を成ずる者は、四天王天に生るゝことを求めんと欲せば、亦此の願を獲、戒を持つの人にして、願ふ所の者を得ん、我是の故を以て此の義を說くのみ、人中の榮位は貴しと爲すに足らず、若し善男子・善女人にして八關齋を持つ者は、身壞命終して善處天上に生れ、亦豔天・兜術天・化自在天・他化自在天に生れて終に虛しきこと有らず、然る所以は其れ戒を持つの人の願ふ所のものを得るを以てなり。諸比丘、我今重ねて汝に告げん、『若し男子女人有りて、八關齋を持つものは、欲天に生るゝもの、色天に生るゝもの亦、其の願を成ぜん。何を以ての故に爾るや、其れ持戒の人の願ふ所の者を得るを以てなり。若し復善男子・善女人にして、八關齋を持てば、無色天に生るゝことを得んと欲せば、亦其の願ひを果さん。比丘當に

らず、或は能く比丘僧と闘ひ、或は能く父母諸尊師長を殺せり、我今自ら懺悔して自ら覆藏せず、戒に依り、法に依つて其の戒行を成じ、八關如來の齊法を受けん』と。云何が八關齊法と爲すや、心を持すること眞人の如く、形壽を盡して殺さず、害心有ること無く、衆生に於て慈心の念有り、『我今字某、齊を持して明日清旦に至り、殺さず、害心有ること無く、慈心有り、一切衆生に於て、阿羅漢の如く、邪念有ることなく、形壽を盡して盜まず、布施を好んで喜び、我今字某、形壽を盡して盜まず、今より明日に至るまで、心を持すること是れ眞人の如く、我今形壽を盡して淫泆せず、邪念有ることなく、恒に梵行を修め、身體香潔にして、今日不淫の戒を持ち、亦己れの妻を念はず、復他の女人の想を念はず、明日清旦に至るまで觸犯する所なく、阿羅漢の如く、形壽を盡くして妄語せず、恒に至誠を知つて他人を欺かず、今より明日に至るまで妄語せず、我今より以後復妄語せず、阿羅漢の如く飲酒せず、心意亂れず、佛の禁戒を持して觸犯する所なし、我今亦是の如かるべし。今日より明旦に至りて、復飲酒せず、佛の禁戒を持して觸犯する所なく、阿羅漢の如く形壽を盡して齊法を壞らず、恒に時を以て食し、少食にして足るを知り、味に著せず、我今亦是の如し、形壽を盡くして齊法を壞せず、恒に時を以て食し、少食にして足るを知り、味に著せず、今日より明旦に至るまで、阿羅漢の如く、恒に高廣の床上に在つて坐せず。所謂高廣の床、金銀象牙の床、或は角床、佛の座、辟支佛の座、諸の尊師の座なり。是の時阿羅漢此の八種の座に在り、我も亦上り坐せず、此の座を犯さず、阿羅漢の如く、香華脂粉の飾りを著けず、我今亦、當に是の如かるべし。形壽を盡くして香華脂粉の好きを著けず。我今字某、此の八事を離れ、八關齊法を奉持して、三惡趣に墮せず、是の功德を持てば地獄・餓鬼・畜生・八難の中に入らず、恒に善知識を得て、惡知識に從事すること莫く、恒に好き父母の家に生るゝことを得て、邊地無佛法の處に生るゝこと莫く、長壽天上に生るゝこと莫く、人の與に奴婢と作ること莫く、梵天と作ること莫く、釋身と作ること

の所に往至し、此の因縁を以て具に天帝に白す、『大王當に知るべし、今此の世間に、衆生の父母・沙門・婆羅門及び諸の尊長の者に、孝順するもの有ること無し』と。是の時釋提桓因三十三天皆愁憂を懷き、慘然として悅ばず、『諸の天衆を減じ、阿須倫衆を增益す』と。設し復是の時、衆生の類、父母・沙門・婆羅門及び諸の尊長に孝順し、八關齋を持するもの有らば、爾の時四天王便ち歡喜を懷き、踊躍して自ら勝ふる能はず、即ち帝釋の所に往き、此の因緣を以て具に天帝に白す、『聖王、當に知るべし、今此の世間に多く衆生有つて、父母・沙門・婆羅門及び諸の尊長に孝順す』と。是の時釋提桓因三十三天、及び四天王、皆歡喜を懷き、踊躍して、自ら勝ふる能はず、『諸の天衆を增益し、阿須倫衆を減損す』と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまひ、『云何が十五日に八關齋法を持するや』と。是の時諸比丘、世尊に白して曰さく、『如來は是れ諸法の王、諸王の印なり。唯願はくは世尊、當に諸比丘の爲に此の義を布演すべし、諸比丘聞き已つて、當に之を奉行すべし』と。世尊告げて曰はく、『諦に聽け、諦に聽いて、善く之を思念せよ、吾當に汝の爲に具に分別して說くべし。是に於て比丘、若し〔七〕善男子、善女人有つて、月の十四、十五日、戒を說き、齋を持する時に於て、四部衆の中に到り、當に是の語を作すべし、『我今齋日に八關齋法を持せんと欲す、唯願はくは尊者、當に我與に之を說くべし』と。是の時四部衆、當に敎へて與に八關齋の法を說くべし。先づ敎へて是の語を作せ、『善男子、當に自ら名字を稱すべし。彼已に名字を稱せば、便ち當に與に八關齋の法を說くべし。是の時敎授するものは當に前の人に是の語を作すことを敎ふべし、『我今如來の齋法を奉持し、明日清旦に至り、清淨戒を修めて、惡法を除き去り、若し身惡行、口に惡語を吐き、意に惡念を生じ、身三口四意三、諸有の惡行已に作し、當に作すべし、或は能く貪欲を以ての故に造る所、或は能く瞋恚を以て造くる所、或は能く愚癡を以て造る所、或は能く豪族を以ての故に造る所、或は能く惡知識に因つて造る所、或は能く今身後身無數の身、或は能く佛を識らず、法を識

【七】善男子・善女人は、族姓子・族姓女に同じ、良家の子女の意。

「天帝、當に知るべし、今此の世間に多く衆生有りて、父母・沙門・婆羅門及び諸の尊長に孝順す」と。時に帝釋三十三天皆歡喜を懐き、自ら勝ふる能はず、「諸の天衆を増益し、阿須倫衆を減損し、地獄の拷掠自然に休息し、毒痛行はれざらん」と。

若し十四日の齋日の時、太子を遣して下天下を案行して、人民の施、行ひの善惡を伺察し、衆生にして佛を信じ、法を信じ、比丘僧を信じ、父母・沙門・婆羅門及び尊長の者に孝順し、布施を好み喜び、八關齋を持し、六情を閉塞し、五欲を防制するもの有りやと。設し衆生にして正法を修むる者にして、父母・沙門・婆羅門に孝順するものなくば。爾の時太子、四天王に白し、四天王聞き已つて便ち愁憂を懐き、慘然として悦ばず、釋提桓因の所に往至し、此の因緣を以て具に天帝に白す、『大王當に知るべし、今此の世間に、衆生の父母・沙門・婆羅門及び尊長の者に孝順するもの有ることなし』と。是の時天帝三十三天皆愁憂を懐き、慘然として悦ばず、『諸の天衆を減じ、阿須倫衆を増益す』と。設し復衆生にして父母・沙門・婆羅門及び尊長の者に孝順し、八關齋を持するもの有らば、爾の時太子歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず、卽ち往いて四天王に白す、『大王當に知るべし、今此の世間に多く衆生の父母・沙門・婆羅門及び諸の尊長に孝順するもの有り」と。是の時四天王、此の語を聞き已つて、甚だ喜悦を懐き、卽ち釋提桓因の所に往詣し、此の因緣を以て具に天帝に白す、『聖王當に知るべし、今此の世間に多く、衆生の父母・沙門・婆羅門及び諸の尊長に孝順し、三自歸を受け、慈心にして諫諍の誠信にして欺かざるもの有り』と。時に天帝四王、及び三十三天皆歡喜を懐き、自ら勝ふる能はず、『諸の天衆を増益し、阿須倫衆を減損す』と。比丘當に知るべし、十五日〔六〕説戒の時、四天王躬自ら來下し、天下を案行して人民を伺察し、『何等の衆生か父母・沙門・婆羅門及び尊長に孝順し、布施を好んで喜び、八關齋如來の齋法を持するや』と。設し衆生の父母・沙門・婆羅門及び尊長の者に孝順するものなくば、時に四天王便ち愁悒を懐き、慘然として悦ばず、帝釋

【六】説戒は、布薩のこと。

卷の第十六

高幢品第二十四の三

六

[一]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「十五日中に[二]三齋法有り、云何が三と爲すや、八日・十四日・十五日なり、比丘當に知るべし、或は是の時有り、八日の齋日に、四天王諸の輔臣を遣して、世間を觀察す。誰か善惡を作す有らん、何等の衆生父母・沙門・婆羅門及び尊長の者に慈孝有るや、衆生にして[三]布施を好み喜び、戒・忍辱・精進・三昧を修め、經の義を演布し、[四]八關齋を持するもの有らば、具に之を分別し、設し衆生にして父母・沙門・婆羅門及び尊長の者に孝順なくば、是の時輔臣四天王に白す、「今此の世間に、衆生の父母・沙門・道士に孝順し、[五]四等心を行じ、衆生を慈愍するもの有ること無し」と。時に四天王聞き已つて便ち愁憂を懷き、慘然として悦ばず。是の時四天王卽ち忉利天上に往き、善法講堂に集り、此の因緣を以て具に帝釋に白す、「天帝當に知るべし、今此の世間に、衆生の父母・沙門・婆羅門及び尊長の者に孝順するものあること無し」と。是の時帝釋三十三天斯の語を聞き已つて、皆愁憂を懷き、慘然として悦ばず、「諸の天衆を減じ、阿須倫衆を增益す」と。設し復時有つて、若し世間の衆生の類にして、父母・沙門・婆羅門及び諸の尊長の者に孝順し、八關齋を持し、德を修め、清淨にして、禁戒の大さ、毛髮の如きをも、犯さゞること有れば、爾の時使者歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず、卽ち四天王に白す、「今此の世間に多く衆生有つて、父母・沙門・婆羅門及び諸の尊長に孝順す」と。天王聞き已つて、甚だ喜悅を懷き、卽ち釋提桓因の所に往き、此の因緣を以て具に帝釋に白す。

【一】 A. III. 36 & 70 長阿含卷二十、世記經忉利天品。

【二】 三齋法とは、月の八日、十四日、十五日とに僧園に於て行はるゝ布薩(Uposatha)の會のこと。此の日は教團の特定の懺悔日にして、此の日比丘等は一堂に集りて、戒律の要綱をあげし波羅提木叉を誦し、毎段の終りに至り、誦者は座中の比丘の中にこれらの箇條に觸れしものなきや否やを尋ね、若しあらばその罪は懺悔すべく、なければ更に誦出す。此の日は在家の信者は八戒を守り、身心を清めて業務を休すむを常とせり。

【三】 布施以下は、六波羅蜜(六度)をあぐ。

【四】 八關齋は又八齋戒とも、略して八戒ともいひ、布薩の日に俗人は八戒を守る。一、殺生。二、偸盜。三、邪淫。四、妄語。五、飲酒。六、身に香を塗り、花鬘を飾ること。七、舞踏を見、歌曲を聽くこと。八、高廣の床に坐臥すること。

【五】 四等心とは、慈・悲・喜・護の四、四無量心のこと。前の註を見よ。

如し、大王、大王の教への如し、此の優陀耶比丘極めて神力有り、大威德有り」と。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく「第一の弟子にして、博識多知國王に念ぜらるゝもの、所謂阿若拘鄰比丘是れなり。能く人民を勸化するもの優陀耶比丘是れなり。速疾智有るもの所謂摩訶男比丘是れなり。恒に喜んで飛行するもの、所謂須婆休比丘是れなり。空中を往來するものは所謂婆破比丘是れなり。諸の弟子多きものは所謂優毘迦葉比丘是れなり、意に空を觀ずることを得るもの、所謂江迦葉比丘是れなり。意に止觀を得るもの所謂象迦葉比丘是れなり」と、爾の時世尊、廣く眞淨王の與に微妙の法を説きたまひ、爾の時王は法を聞き已つて、即ち座より起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去る。爾の時諸比丘及び眞淨王、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

增壹阿含經卷第十五

乘り、黄蓋・黄馬之に駕し、第四釋は赤車に乘り、赤蓋・赤馬之に駕す。是の時諸釋の象に乘るもの有り、馬に乘るもの有り、皆悉く來り集る。是の時世尊、遙に眞淨王の諸釋の衆を將ひて來るを見、諸比丘に告げたまはく、「汝等此の釋衆を觀じ、幷せて眞淨王の衆を觀ぜよ、比丘當に知るべし、三十三天の園觀に出づる時も亦此の法の如く、異り有ること無し」と。是の時阿難、大白象に乘り、白衣・白蓋なり、見已つて諸比丘に告げて曰はく、「汝等此の阿難釋の白車・白象に乘るを見るや不や」と。諸比丘對へて曰さく、「唯然り、世尊、我等は之を見る」と。佛比丘に告げたまはく、「此の人當に出家學道して、第一の多聞にして、左右に侍するに堪ゆべし。汝等此の阿那律釋を見るや不や」と。諸比丘對へて曰さく、「唯然り、之を見る」と、佛、比丘に告げたまはく、「此の人は當に出家學道して天眼第一たるべし」と。是の時眞淨王及び兄弟四人、幷せて難陀阿難皆步進して前み、五好を除去して世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時眞淨王、佛に白して曰さく、「昨日夜此の念を生ぜり『剎利の衆は梵志の衆を將ひるべからず、還つて剎利衆を將ゆ、此れは是れ其の宜しきなり。我便ち國中に告令して『諸の兄弟二人有るものは、便ち一人を取つて出家學道せしめよ』と。唯願はくは世尊、出家學道することを聽し給へ」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、大王、饒益する所多く、天人安きを得ん。然る所以は、此れは是れ善知識、良祐福田なり。我亦善知識に緣つて、此の生老病死を脫することを得たり」と。是の時諸釋の衆、便ち道を爲すことを得たり。是の時眞淨王、世尊に白して曰さく、「唯願はくは世尊、此の新比丘を教誨したまへ、當に優陀耶を教誨するが如くなるべし。然る所以は、此の優陀耶比丘は極めて神力有り、願はくは、優陀耶比丘、恒に宮中に在つて教化し、衆生の類をして長夜に安穩を獲せしめよ、然る所以は、此の比丘極めて神力有り、我初めて優陀耶比丘を見て、便ち歡喜の心を發し、我便ち此の念を作せり『弟子尙神力有り、況んや彼の如來に此の神力なからんや』と」。世尊告げて曰はく、「是の

已つて座に就いて坐したまふ。時に王、世尊の座の定まるを見、手自ら斟酌して種々の飲食を行じ、世尊食し竟つて淨水を行じたまふを見、更に一小座を取りて法を聽く、爾の時世尊、眞淨王の與に、漸く妙義を說きたまふ。所謂論とは施論・戒論・生天の論・欲は不淨行、出要を樂となすと。爾の時世尊、王の心開け、意に解するを見、諸佛世尊の常に說きたまふ所の法、苦、集、盡、道、盡く王に向つて說きたまふ。是の時眞淨王卽ち座上に於て、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり、是の時世尊、王の與に法を說き已つて、卽ち座より起ちて去りたまひぬ。

是の時眞淨王、普く釋衆を集めて、是の說を作す「諸の沙門等顏貌極めて醜し、刹利三種の諸の梵志衆を將ひること、此れ其の宜しきに非ず、刹利の釋種は還えつて刹利衆を得ること此れ乃ち妙と爲す」と。諸釋報へて言く「是の如し、大王、大王の敎への如く、刹利種は還えつて刹利衆を得ること、此れ乃ち妙と爲す」と。是の時王、國中に告げて、諸の兄弟二人有らば、當に一人を取りて道を作すべし、其の爾らざるものは當に重く謫罰すべし」と。時に諸釋の衆、王の敎令を聞き、諸の兄弟二人有らば、一人を取りて道を爲すべし、其の敎へに從はざるものは當に重く謫罰すべしと。是の時提婆達兜釋種、阿難釋に語げて言く「眞淨王今日敎へ有り『諸の兄弟二人有らば、當に一人を分ちて道を作すべし』と。汝今出家學道せよ、我當に家に在りて家業を修治すべし」と。是の時阿難釋、歡喜踊躍して報へて言く、「兄の來り敎ふるが如し」と。是の時難陀釋、阿那律釋に語げて言く「眞淨王敎へ有り『其れ兄弟二人有るものは、當に一人を分ちて道を作すべし、其の爾らざるものは、當に重く謫罰すべし』と。汝今出家せよ、我當に家に在るべし」と、是の時阿那律釋、此の語を聞き已つて歡喜踊躍し、自ら勝ふる能はず、報へて曰く「是の如し、兄の來り敎ふるが如し」と。是の時眞淨王は[一六]斛淨釋・[一七]叔淨釋・[一八]甘露釋を將ひて世尊の所に至る。爾の時四馬の車、白車に駕し白蓋・白馬之に駕し、第二釋は靑車に乘り、靑蓋・靑馬之に駕し、第三釋は黃車に

【一六】 斛淨（Dhotodana）。斛飯王ともいふ。
【一七】 叔淨（Sukhodana.）。白飯王。
【一八】 甘露（Amatodana）。甘露飯王いづれも白淨王の弟。

衣服は何の類を像ると爲すや「優陀耶報へて言く「如來の著くる所の衣裳は名けて袈裟と曰ふ」と。時に王問うて言く「何等の食を食するや」と。優陀耶報へて言く「如來の身は法を以て食と爲す」と。王復問うて曰く「云何が優陀耶、如來は見ることを得べきや不や」と。優陀耶報へて言く、「王、愁悒すること勿れ、却後七日にして、如來は當に來つて城に入るべし」と。是の時王極めて歡喜し、自ら勝ふる能はず、手自ら優陀耶を供養しぬ。是の時眞淨王大に鳴鼓を撃ちて國界の人民に勅し、道路を平治し、不淨を除き去り、香汁を以て地に灑ぎ、繒・幡・蓋を懸け、倡伎樂を作すこと稱計すべからず　復國中に勅して「諸有の聾・盲・瘖・瘂は盡く現れざらしめよ。却後七日、悉達當に來つて城に入るべし」と。是の時眞淨王、佛の當に來つて城に入るべしと聞き、七日の中亦睡眠せず。是の時世尊、已に七日に至り、便ち是の念を作したまはく「我今宜しく、神足力を以て迦毘羅衞國に往詣すべし」と。是の時世尊、卽ち諸比丘を將ひ、前後に圍遶して迦毘羅衞國に往詣し、到り已つて便ち、城の北の薩盧園中に詣りたまふ。是の時眞淨王、世尊は已に迦毘羅衞城の北、薩盧園中に達したまふと聞き、是の時眞淨王諸の釋衆を將ひて世尊の所に往詣す。是の時世尊復是の念を作したまはく「若し眞淨王にして躬自ら來ること、此れ我宜しきに非ず、我今當に往いて與に共に相見るべし。然る所以は、父母の恩は重く、育養の情は深し」と。是の時世尊諸の比丘衆を將ひて、城門に往詣し、虛空に飛在し、地を去ること七仞なり。是の時眞淨王、世尊の端正にして比ひなく、世の希有なり、諸根寂靜にして、衆多の念ひなく、身に三十二相八十種好有つて、自ら莊嚴するを見、歡喜の心を發し、卽便頭面に足を禮して是の說を作さく「我は是れ刹利王種、名けて眞淨王と曰ふ」と、世尊告げて曰はく「大王、享壽窮りなからしめよ。是の故に大王、當に正法を以て治化し、邪法を用ふること勿るべし。大王當に知るべし、諸有の正法を用つて治化するものは、身壞命終して善處天上に生れん」と。是の時世尊卽ち空中より、眞淨王の宮中に行至し、到り

大殿の上に在つて坐し、及び諸の婇女となり。是の時優陀耶空中に飛在す、時に眞淨王、優陀耶、手に鉢を執り、杖を持し、前に在つて立つを見、見已つて便ち恐怖を懷き、是の說を作さく、「此れは是れ何人ぞや、人なるや、非人なるや、天なるや、鬼なるや、閱叉・羅刹・天・龍・鬼神なるや」と。時に眞淨王優陀耶に問うて曰く、「汝は是れ何人ぞや」と、又此の偈を以て優陀耶に向つて說く、

　天なるや是れ鬼　乾沓惒等なるや　汝今名けて誰とかなすや　我今之を知らんと欲す

と、是の時優陀耶復此の偈を以て王に報へて曰く、

　我亦是れ天に非ず　是れ乾沓惒に非ず　是の迦毘國に於ける　大王の邦土の人なり　昔十八億の　弊魔波旬の衆を壞りしは　我師釋迦文　是れ彼の眞の弟子なり

と。時に眞淨王復此の偈を以て優陀耶に向つて說く、

　誰か十八億の　弊魔波旬の衆を壞りし　誰をか釋迦文と字する　汝今之を歎び說くや

と、是の時優陀耶、復此の偈を說く

　如來の初め生れし時　天地普く大動しぬ　誓願悉く成辦して　今日[一四]悉達と號す　彼十八億の　弊魔波旬の衆を壞り　彼釋迦文と名け　今日佛道を成ぜり　彼の人釋師子　瞿曇の次弟子　今日沙門と作るも　本優陀耶と字す

と。是の時眞淨王、此の語を聞き已つて、便ち歡喜を懷き、自ら勝ふる能はず、優陀耶に語げて曰く、「云何が優陀耶、悉達太子は故在するや」と。優陀耶報へて言く、「釋迦文佛は今日現在したまふ」と。時に王問うて曰く、「今已に佛を成じたまひしや」優陀耶報へて言く、「今已に佛を成じ給へり」と。王復問うて言く、「今日如來は竟に所在爲るや」と。優陀耶報へて言く、「如來は今摩竭國界の[一五]尼拘類樹下に在はせり」と。時に王報へて言く、「翼從の弟子は斯是何人ぞや」と。優陀耶報へて曰く、「諸天億數及び千比丘なり、四天王恒に左右に在り」と。時に王問うて言く、「著くる所の

【一四】悉達(Siddhattha)とは、又悉達多に作り、佛陀の幼名全て圓やかに成就せりの意にて名けられしもの。

【一五】尼拘類樹(Nigrodha)。

敎を受け已つて、十比丘盡く阿羅漢を成ぜり、是の時世尊千比丘の、羅漢を得しを見たまひしを以て、爾の時閻浮里地に千の阿羅漢及び五比丘有り、佛は六の師たり、座を廻して〔一〇〕迦毘羅衛に向ひ給ふ。是の時優毘迦葉便ち是の念を作さく、「世尊は何故に迦毘羅衛に向つて坐したまふや」と。是の時優毘迦葉即ち前んで長跪し、世尊に白して曰さく、「不審なり、如來、何故に迦毘羅衛に向つて坐したまふや」と。世尊告げて曰はく、「如來は世間に在つて五事を行ずべし。云何が五と爲すや、一に法輪を轉ずべし、二に當に父の與に法を說くべし、三に母の與に法を說くべし、四に當に凡夫人を導いて菩薩の行を立つべし、五に菩薩に〔一一〕莂を授くべし。是れを迦葉、如來出世して當に此の五法を行ずべしと謂ふなり」と。是の時優毘迦葉、復是の念を作さく、「如來は故に親族の本邦を念じ、故に彼に向つて坐したまふのみ」と。

是の時五比丘漸く尼連水の側に來至し、世尊の所に到り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時尊者〔一二〕優陀耶、遙に世尊迦毘羅衛に向つて坐したまふを見、見已つて便ち是の念を作さく、「世尊は必ず當に迦毘羅衛に往至し、諸の親里を見んと欲したまふべし」と。是の時優陀耶即ち前んで、長跪して世尊に白して曰く、「我今堪任たり、問ふ所有らんと欲す、唯願はくは敷演したまへ」と。世尊告げて曰はく、「問ふ所有らんと欲せば、便ち之を問へ」と。優陀耶世尊に白して曰さく、「如來の意を觀ずるに、迦毘羅衛に向はんと欲したまふにや」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、汝の言ふ所の如し。優陀耶、當に知るべし、先づ〔一三〕白淨王の所に至らん、吾後に比んで當に往くべし。然る所以は、刹利の種を先づ使に遣はして知ら使むべし。然る後に如來は當に往くべし。汝到つて王に語げよ、『後七日にして、如來は當に來つて王を見るべし』と」。優陀耶對へて曰く、「是の如し、世尊」と。是の時優陀耶、即ち座より起ち衣服を整へ、世尊の足を禮し、世尊の前より現れずして迦毘羅衛に往至し、眞淨王の所に到り、到り已つて王の前に在つて立つ。爾の時眞淨王、

【一〇】迦毘羅衛（Kapilavatthu)。

【一一】莂は、記莂の略。又記別授記に作る。弟子の證悟について預言をすること。

【一二】優陀耶(Udayi)。又優陀夷に作り、迦樓陀夷(Kaludayi)。ともいふ。迦毘羅衛城の大臣の子、釋尊の友にして、佛成道の後、父王の命を受け、佛陀に使して、佛陀を歸城せしむ。在家に悅ばるゝ第一と稱せらる。色黑きが故に迦樓陀夷と呼ばれしもの。

【一三】白淨王(Suddhodana)。眞淨王とも淨飯王ともいひ、釋尊の父。迦維羅衞城主。

成佛して未だ久しからざるに千の弟子を將ひ給へり。是れ皆耆舊の宿長なり。

是の時世尊三事を以て教化したまふ。云何が三と爲すや、所謂神足教化、言教々化、訓誨教化なり。彼云何が神足教化と爲すや」と。爾の時世尊或は若干の形を作し、還り合うて一と爲し、或は現ぜず、或は石壁に現れ、皆過ぐるに罣礙する所無し、或は地を出で、或は地に入ること、猶し流水に觸礙する所なきが如し、或は結跏趺坐して虚空の中に滿つること、鳥の空を飛ぶに罣礙有ることと無きが如く、亦大火山の烟出づること無量なるが如し。此の日月に大神力有り、限量すべからざるに、手を以て往いて身を捉へ、乃ち梵天に至るなど、是の如く世尊は神足を現じたまへり。彼云何が名けて言教々化と爲すや、爾の時世尊諸比丘に教へて、「『當に是れを捨つべし、是れを置け、當に是れに近づくべし、是れを遠ざけよ、當に是れを念ずべし、是れを去れ、當に是れを觀ずべし、是れを觀ぜざれ』と、彼云何が『當に是れを修すべし、是れを修せざれ』とは、當に七覺意を修むべし、三結を滅せよ。彼云何が當に觀ずべし、當に觀ぜざるべしとは、當に三結沙門の善を觀ずべし。所謂出要の樂、無恚の樂、無怒の樂なり。彼云何が觀ぜざるや、所謂三沙門の苦なり。云何が三と爲すや、所謂欲觀・恚觀・怒觀なり、彼云何が念じ、云何が念ぜざるや、爾の時當に苦諦を念ずべし、當に集諦を念ずべし、當に盡諦を念ずべし、當に道諦を念ずべし、邪諦を念ずること莫かれ、『有常見・無常見・有邊見・無邊見・彼・命・彼・身[七]・非命非身[八]・如來[九]は命終し、如來は命終せず終り有り、不終有り、亦終り有らず、亦終り無きに非らず』と、是の念を作すこと莫かれ、彼云何が名けて訓誨教化と爲すや、復次に當に是の去を作すべし、『是の去を作すべからず、是の來を作せ、是の來を作すべからず、默然として是の言說を作せ、當に是の如き衣を持すべし、是の如き衣を持すべからず、是の如く村に入るべし、是の如く村に入るべからず』と、是れを名けて訓誨教化と爲すと謂ふなり」。是の時世尊、此の三事を以て千比丘を教化したまひぬ。是の時彼の比丘佛の

【七】彼・命・彼・身とは、生命と身とは同一なるものとの見。
【八】非命非身とは、生命と身體とは同一ならずとの見。
【九】如來は衆生のこと、衆生の死後存するや不やの問題。

及び大迦葉五百の弟子に前後を圍遶せられて、爲に法を說きたまふを見、見已つて便ち前んで迦葉の所に至つて是の語を作さく、「此の事好しと爲すや。本人の師たりしに、今は弟子たること、大兄何故に沙門の與に弟子と作りしや」と。迦葉對へて曰く、「此の處は妙たり、此の處に過ぐるはなし」と。是の時優毘迦葉、江迦葉に向つて此の偈を說く。

　此の師は人天の貴ぶところ　我今之に師事す　諸佛の世に興出したまふこと　甚だ遇ふこと得難しと爲す。

是の時江迦葉、佛の名號を聞き、甚だ歡喜を懷き、踊躍して自ら勝ふる能はず、前んで世尊に白さく、「願はくは道を爲さんことを聽したまへ」と。世尊告げて曰はく、「善くぞ來れり、比丘、善く梵行を修めて苦際を盡せよ」と。是の時江迦葉及び三百の弟子卽ち沙門を成じ、袈裟身に著き、頭髮自ら落ちぬ。是の時江迦葉及び三百の弟子、呪術の具を盡く水中に投じぬ。爾の時順水の下頭に梵志有り、（六）伽夷迦葉と名け、水の側に在りて住す。遙に呪術の具水の爲に漂さるゝを見、便ち是の念を作さく、「我に二兄有り、上に在りて道を學ぶ。今呪術の具盡く水の爲に漂さる。二大迦葉必ず水の爲に害せらる」と。卽ち二百の弟子を將ひて順水の上流、乃ち學術の處に至り、遙に二兄の沙門と作れるを見、便ち是の語を作さく、「此の處は好しや、本人の尊ぶところなりしに、今沙門の弟子と爲ること」と。迦葉報へて曰く、「此の處は最妙なり、此の處に過ぐるはなし」と。是の時伽夷迦葉便ち是の念を作さく、「今我二兄は多知博學なり、此の處は必ず善き地ならん、我二兄をして中に在つて道を學ばしむ。我今亦中に在りて道を學ぶべし」と。是の時伽夷迦葉前んで世尊に白さく、「唯願はくは世尊、沙門と作ることを聽したまへ」と。世尊告げて曰はく、「善くぞ來れり、比丘、善く梵行を修めて苦際を盡せよ」と。是の時伽夷迦葉卽ち沙門を成じ、袈裟身に著き、頭髮自ら落ち、頭を剃り已つて七日を經しに如似たり、是の時世尊、彼の河の側に在りて尼拘類樹下に住し、

【六】伽夷迦葉（Gayakassa-pa）。又伽耶迦葉とも音譯す。

邪見の心を捨てゝ、長夜に此の苦惱を受けしむることなかるべし」と。是の時迦葉、世尊の語を聞き已つて、便ち前んで頭面に足を禮し、「我今過ちを悔ゆ、深く非法の如來に觸れしを知る、唯願はくは我悔ひを受けたまへ」と。是の如く再三なり。世尊告げて曰はく、「汝過を改めしを聽す、乃ち能く自ら如來を觸擾せしを知れ」と。是の時迦葉五百の弟子に告げて曰く、「汝等各〻所宜に隨へ、我今自ら沙門瞿曇に歸しまつらん」と。是の時五百の弟子、迦葉に白して言く、「我等先きに亦心沙門瞿曇に有り、龍を降せし時に當り、尋いで歸命せんと欲しぬ。若し師自ら瞿曇に歸しまつるとならば、我等五百の弟子盡く自ら瞿曇の所に歸しまつらん」と。迦葉報へて言く、「今正に是れ時なり。然して復我心此の愚癡に執じ、爾許の變化を見るも、意猶解らず、故に自ら稱して、我道は眞正なりと言へり」と。是の時迦葉、五百の弟子を將ひて前後に圍遶して世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて立ち、世尊に白して曰さく、「唯願はくは世尊、我等を聽して沙門と作し、淸淨の行を修することを得しめたまへ。諸佛の常法に若し、『善くぞ來れり、比丘』と稱したまはゞ、便ち沙門を成ぜん」と。是の時世尊、迦葉に告げて曰はく、「善くぞ來れり、比丘、此の法は微妙なり、善く梵行を修せよ」と。是の時迦葉及び五百の弟子の著くる所の衣裳盡く變じて[四]袈裟と作り、頭髮自ら落ちて剃髮して已に七日を經しに如似たり。是の時迦葉學術の具及び呪術に於けるを盡く水中に投ぜり、時に五百の弟子、世尊に白して曰さく、「唯願はくは世尊、我等に聽して沙門と爲ることを得しめたまへ」と。世尊告げて曰はく、「善くぞ來れり比丘」と。時に五百の弟子卽ち沙門を成じ、袈裟身に著き、頭髮自ら落ちぬ。

爾の時順水の下流に梵志有り[五]江迦葉と名け、水の側に在つて住す。是の時江迦葉、呪術の具盡く水の爲に漂さるゝを見、便ち是の念を作さく、「咄なる哉、我大兄は水の爲に溺らされしか」と。是の時江迦葉三百の弟子を將ひ、順水の上流に兄の屍骸を求め、遙に世尊の一樹下に在りて坐し、

【四】袈裟(Kāsāya)。茶褐色の衣の總稱、虛飾を避けてかゝる色に染めしもの、これに三衣あり。(三衣を見よ)間色衣、壞色衣などゝもいふ。

【五】江迦葉(Nadīkassapa)。音譯して那提迦葉ともいふ。

の側に著し、世尊に白して曰さく、「此に在つて衣を蹋むべし」と。是の時世尊復是の念を作したまはく、「吾何處に於て此の衣を曝さん」と。時に樹神、世尊の心中の所念を知り、便ち樹枝を垂れて世尊に白して曰さく、「唯願はくは此に在つて衣を曝したまへ」と。明日清旦、迦葉世尊の所に至り、世尊に問うて曰く、「本此の池なかりしに、今此の池有り、本此の樹なかりしに、今此の樹有り、本此の石なかりしに、今此の石有り、何の因縁有つて此の變有るや」と。世尊告げて曰はく、「此れは是れ昨夜、天帝釋、吾の衣を浣がんと欲するを知るが故に、此の浴池を作せり。吾復是の念を作しぬ、『當に何處に於て此の衣を蹋浣すべきや』と、時に四天王、吾心中の所念を知り、便ち此の石を持ち來りぬ。吾復是の念を作しぬ『當に何處に於て此の衣を曝すべきや』と。時に樹神、我心中の所念を知り、便ち此の樹枝を垂れしのみ」と。是の時復迦葉是の念を作さく、「此の沙門瞿曇は神なりと雖も、故に我道の眞を得たるに如かじ」と。

是の時世尊、食し已つて還えり、彼に於て宿りたまひぬ。是の時夜半に大黒雲有つて起り、大雨を作し、連若大河は爲に瀑溢を極む。是の時迦葉復是の念を作さく、「此の河瀑溢す、沙門は必ず當に水の爲に漂はさるべし。我今之を看ん」と。是の時迦葉及び五百の弟子、河の所に往至す。爾の時世尊水上に在つて行きたまふに、脚水の爲に漬けられず。是の時迦葉遙に、世尊の水上に在つて行きたまふを見、是の時迦葉便ち是の念を作さく、「甚奇甚特、沙門瞿曇、乃ち能く水上に在りて行く、我も亦能く水上に在つて行く、但し脚を汚さゞらしむること能はざるのみ、此の沙門、神なりと雖も、故に我道の眞を得たるに如かず」と。是の時世尊、迦葉に語げて言はく、「汝亦阿羅漢に非ず、復阿羅漢道を知らず、汝尚阿羅漢の名を識らず、況んや道を得んや、汝是れ盲人にして目覩る所なし、如來爾許の變化を現ずるも、故に言ふ、『我道の眼を得たるに如かず』と。汝方に是の語を作す、『吾能く水上に在りて行く』と。今正に是れ時なり、共に水上に在つて行くべきや。汝今

所に至り、到り已つて世尊に白して曰さく、「昨夜は是れ何の光明か此の山野を照す」と。世尊告げて曰はく、「昨夜四天王我所に來至して法を聽きぬ、是れ彼の四天王の光明ならん」と。是の時迦葉復是の念を作さく、「此の大沙門、極めて神力有り、乃ち能く四天王をして來つて經法を聽かしむ、此の力有りと雖も、由つて我の道の眞を得しに如かず」と。

是の時世尊、食し已つて彼に在つて止宿したまへり。夜半に釋提桓因世尊の所に來至して法を聽きぬ。天帝の光明復彼の山を照らす。時に迦葉夜起きて星を瞻、此の光明を見、明日清旦、迦葉、世尊の所に至り、問うて曰さく、「瞿曇、昨夜光明極めて殊特なり、何の因緣有つて此の光明有りしや」と。世尊告げて曰はく、「昨夜天帝釋此に來至して經を聽きぬ。故に此の光明有りし耳」と。時に迦葉復是の念を作さく、「此の沙門瞿曇は極めて神力有り、大威神有り、乃ち能く天帝釋をして來つて經法を聽かしむ。爾りと雖も故に我道の眞を得しに如かず」と。是の時世尊、食し已つて還えつて、彼に在つて宿りたまへり。夜半に梵天王、大光明を放つて彼の山中を照らし、世尊の所に至りて經法を聽きぬ。時に迦葉夜起きて光明を見、明日世尊の所に至りて問うて曰く、「昨夜光明倍す照らす所有り、日月の光明に勝れり、何等の因緣有つて此の光明を致せしや」と。世尊告げて曰はく、「迦葉當に知るべし、昨夜大梵天王我所に來至して經法を聽きぬ」と。是の時迦葉復是の念を作さく、「此の沙門瞿曇極めて神力有り、乃ち能く我祖父をして此の沙門の所に來至して經法を聽かしむ。爾りと雖も故に我道の眞を得しに如かず」と。

爾の時世尊弊壞せる五納衣を得、意に浣濯せんと欲し、便ち是の念を作したまはく、「我何處に於て此の衣を浣ぐべきや」と。是の時釋提桓因、世尊の心中の所念を知り、卽ち浴池を化作し、世尊に白して曰さく、「此に在つて衣を浣ぐべし」と。是の時世尊復是の念を作したまはく、吾當に何處に於て此の衣を蹋浣すべきや」と。時に四天王世尊の心中の所念を知り、便ち大方石を擧げて水

ることを得ず」。迦葉復佛に白して言さく、「斧何故に擧らざるや」と。世尊告げて曰はく、「斧を擧げしめんと欲するや」と。曰さく、「擧げしめんと欲す」と。斧尋いで擧ぐることを得たり。爾の時迦葉の弟子、意に火を然やさんと欲するも、火然ゆることを得ず。是の時迦葉復是の念を作さく。「此れ必ず沙門瞿曇の所爲なり」と。迦葉佛に白さく、「火何故に然えざるや」と。佛迦葉に告げたまはく、「火をして然やさしめんと欲するや」、曰く、「然さしめんと欲す」と。火尋いで時に然えぬ。爾の時意に火を滅せんと欲するも、火復滅せず。迦葉佛に白さく、「火は何故に滅せざるや」と。佛迦葉に告げたまはく、「火をして滅せしめんと欲するや」、曰く、「滅せしめんと欲す」と。火尋いで時に滅す。迦葉便ち是の念を作さく、「此の沙門瞿曇は面目端正にして世の希有なり。吾明日大祠せんと欲す。國王人民盡く當に來集せん。設し當に此の沙門を見ば、吾復供養を得ざらん。此の沙門は明日來らざれば便ち大なる幸なり」と。是の時世尊、迦葉の心中の所念を知り、明日清旦欝單曰に至り、自然の粳米を取り、瞿耶尼に乳汁を取り、阿耨達泉に往至して食し竟日彼に在りて住し、暮に向ひて還えつて石室に至り、止宿したまへり。迦葉明日世尊の所に至り、問うて曰さく、「沙門は昨日何故に來らざりしや」と。佛迦葉に告げたまはく、「汝昨日是の念を作せり『此の瞿曇は極めて端正たり、世の希有なれば、吾明日大祠せんに、若し國王人民にして、見ば便ち吾供養を斷たん。設し來らずば便ち是れ大なる幸なり』と。我尋いで汝の心の所念を知り、乃ち欝單曰に至り、自然の粳米を取り、瞿耶尼に乳汁を取り、阿耨達泉上に往いて食し、竟日彼に在つて、暮に向ひて還えり、石室中に至りて止宿せり」と。是の時迦葉復是の念を作く、「此の大沙門に極めて神足有り、實に威神有り、爾りと雖も故に我道の眞を得たるに如かじ」と。是の時世尊食し已つて石室に還えつて止宿したまへり。卽夜四天王世尊の所に至り、經法を聽く。四天王も亦光明在り、佛も亦大に光を放つて、彼の山野を照らしたまひ、洞然として一色なり。時に彼の迦葉、夜光明を見、明日清旦世尊の

【三】 阿耨達泉(Anutatta)。

つて彼に還えつて止宿したまへり。

明日迦葉世尊の所に至り、是の說を作さく、「食時已に至れり、往いて食に就くべし」と。佛迦葉に告げたまはく、「汝並に前に在れ、吾後に當に往くべし」と。迦葉の去りて後、世尊は瞿耶尼に至り、呵梨勒果を取り、先づ迦葉の石室の中に至つて坐したまふ。迦葉佛に問はまく、「沙門、何れの道より此の座に來至すと爲すや」と。佛迦葉に告げたまはく、「汝去りし後、吾瞿耶尼に至り、此の果を取りて來る。極めて香美となす、迦葉、須ふれば取りて之を食すべし」と。迦葉對へて曰さく、「我是れを須ひず、沙門自ら取りて之を食せよ」と。迦葉復是の念を作さく、「此の沙門に極めて神力有り、大威神有り、爾りと雖も故に我道の眞を得しに如かず」と。是の時世尊食し已つて彼に還えり、止宿したまふ。明日迦葉世尊の所に至つて白さく、「時至れり、往いて食に就くべし」と。佛迦葉に告げたまはく、「汝並に前に在れ、吾後に當に往くべし」と。迦葉去りて後、世尊は弗于逮に至り、毘醯勒果を取り、先づ迦葉の石室の中に至つて坐したまふ。迦葉佛に問はまく、「沙門、何れの道より此の座に來至すと爲すや」と。佛迦葉に告げたまはく、「汝の去りし後、吾弗于逮に至り、此の果を取り來れり。極めて香り好しと爲す。迦葉、須ふれば取りて之を食すべし」と。迦葉對へて曰く、「吾是れを須ひず、沙門自ら取りて之を食せよ」と。迦葉復是の念を作さく、「此の沙門は極めて神力有り、大神足有り、爾りと雖も故に我道の眞を得しに如かず」と。是の時世尊、食し已つて彼に還えり止宿したまひぬ。

是の時迦葉、時に大祠せんと欲し、五百の弟子斧を執りて薪を破り、手に斧を擧ぐるも斧は下らず、是の時迦葉復是の念を作さく、「此れ必ず沙門の所爲なり」と。是の時迦葉、世尊に問うて曰さく、「今薪を破らんと欲するに、斧何故に下らざるや」と、世尊告げて曰はく、「斧を下すことを得んと欲するや」、曰さく、「下さしめんと欲す」と。斧尋いで時に下る。是の時彼の斧旣に下りて復擧ぐ

【二】 呵梨勒果(Harītakī)。

「汝の去りて後、吾閻浮提界の上に至り、閻浮果を取り、還えつて此に來至して坐せり。迦葉當に知るべし、此の果は甚だ香美たり、取りて之を食すべし」と。迦葉對へて曰さく、「我是れを須ひず沙門自ら取りて之を食せよ」と。是の時迦葉復是の念を作さく、「此の沙門は極めて神足有り、大威力有り、乃ち能く閻浮界上に至つて此の美果を取る。爾りと雖も、故に我道の眞なるに如かず」と。是の時世尊食し已つて、還えつて彼に在つて止宿したまふ。

迦葉清朝世尊の所に至り、到り已つて世尊に白して曰さく、「食時已に至れり、往いて食に就くべし」と。佛迦葉に告げたまはく、「汝並に前に在れ、吾後に當に往くべし」と。迦葉の去りて後、便ち閻浮界上に至り、阿摩勒果を取りて還えり、先づ迦葉の石室の中に至り坐したまふ。迦葉世尊に白して曰さく、「沙門、何れの道より此の間に來至すと爲すや」と。世尊告げて曰はく、「汝去りし後、閻浮界上に至り、此の果を取り來れり。極めて香美なり、若し須ふれば、便ち取りて之を食せよ」と。迦葉對へて曰さく、「吾是れを須ひず、沙門自ら取りて之を食せよ」と。是の時迦葉復是の念を作さく、「此の沙門は極めて神力有り、大威神有り、吾去るの後、此の果を取り來る。爾りと雖も故に我に如かじ、我已に道を得たり」と。是の時世尊、食し已つて彼に還えつて止宿したまへり。明日迦葉、世尊の所に至り、是の說を作さく、「食時已に至れり、往いて食に就くべし」と。復迦葉に告げたまはく、「汝並に前に在れ、吾後に當に往くべし」と。迦葉の去りし後、世尊は北鬱單曰に至り、自然の粳米を取り來り、還えつて迦葉の石室に至りたまふ。迦葉佛に問はまく、「沙門何れの道より此の座に來至すと爲すや」と。世尊告げて曰はく、「迦葉當に知るべし、汝去りて後、吾鬱單曰に至り、自然の粳米を取りぬ。極めて香好たり、迦葉、須ふれば便ち取りて之を食せよ」と。迦葉對へて曰さく、「吾是れを須ひず、沙門自ら取りて之を食せよ」と。迦葉復是の念を作さく、「此の沙門は極めて神足有り、大神力有り、爾りと雖も、故に我の道の眞を得しに如かず」と。是の時世尊、食し已

巻の第十五

高幢品第二十四の二

爾の時彼の惡龍舌を吐き、如來の手を舐めて熟如來の面を視る。是の時世尊、明日清旦、手に此の惡龍を擎げて迦葉の所に往詣し、迦葉に語げて曰はく、「此れは是れ惡龍極めて兇暴たりしも、今以て之を降せり」と。爾の時迦葉惡龍を見已つて、便ち恐怖を懷き、世尊に白して曰さく、「止みなん、止みなん、沙門、復來り前むこと勿れ、龍備く相害せん」と。世尊告げて曰はく、「迦葉懼ること勿れ、我今已に之を降せり、終に相害せじ。然る所以は、此の龍は已に教化を受けたり」と。是の時迦葉及び五百の弟子歎ずらく、「未曾有なり、甚奇甚特なり、此の瞿曇、沙門は極めて大威神ありて、能く此の惡龍を降して惡を作さゞら使む。爾りと雖も、故に我得道の眞なるに如かず」と。

爾の時迦葉世尊に白して曰さく、「大沙門、當に我九十日の請を受くべし、須ひる所の衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥盡く當に供給すべし」と。爾の時世尊默然として迦葉の請を受けたまふ。時に世尊、此の神龍を以て大海の中に著したまひぬ、彼の惡龍は壽の長短に隨つて命終の後、四天王天の上に生れぬ。是の時如來は還えつて石室に止りたまひ、迦葉種々の飲食を供辦し已つて往いて世尊に白さく、「飲食已に辦ぜり、往いて食に就くべし」と。世尊告げて曰はく、「迦葉前に在れ、吾正に爾り、當に往くべし」と。迦葉の去りて後、便ち閻浮提界の上に往至し、[一]閻浮樹下に閻浮果を取り還えつて先づ迦葉の石室の中に至つて坐したまふ。是の時迦葉、世尊の石室の中に在るを見、世尊に白して曰さく、「沙門、何れの道より石室に來至せりと爲すや」と。佛迦葉に告げたまはく、

【一】閻浮樹(Jambu)。

弟子を將ひ、石室に往詣して此の火を救ふ。或は水を持つて灑ぐもの、或は梯を施すもの有り、而るに火をして時に滅せ使むること能はず。皆是れ如來の威神の致す所なり。爾の時世尊、慈三昧に入り、漸く彼の龍をして復瞋恚なから使めたまふ。時に彼の惡龍、心に恐怖を懷き、東西に馳走して石室を出づることを得んと欲するも、然も石室を出づることを得る能はず。是の時彼の惡龍來つて如來に向ひ、世尊の鉢の中に入つて住す。是の時世尊、右手を以て惡龍の身を摩し、便ち此の偈を說きたまはく、

龍出づること甚だ難しと爲す　龍々と共に集る　龍よ害心を起すこと勿れ　龍出づること甚だ難しと爲す　過去に[三五]恒沙の數の　諸佛般涅槃したまひしに　汝竟に遭遇ず　皆瞋恚の火に由ればなり　善き心もて如來に向ひ　速に此の恚りの毒を捨て　已に瞋恚の毒を除けば　便ち天上に生ることを得ん

【三五】恒沙とは、恒河の砂の意、恒沙數は恒河の砂の數程の意にして無數をいふ。

三人は乞食せよ。三人の得し所の食は六人當に共に之を食すべし。三人住りて教誨を受くれば、二人は往いて乞食せよ。二人の得し所の食は、六人當に取りて之を食すべし」と。爾の時教誨したまひ、此の時無生の涅槃の法を成じ、亦無生・無病・無老・無死を成じ、是の時五比丘盡く阿羅漢を成じぬ。是の時三千大千刹土に[三一]五阿羅漢有り、佛は第六たり。

爾の時世尊、五比丘に告げたまはく、汝等盡く共に人間に乞食し、愼しみて獨り行くこと莫かれ、然して復衆生の類、諸根純熟して得度すべきもの有り、我今當に[三二]優留毘村の聚落に往き、彼に在つて法を說くべし」と。爾の時世尊、便ち優留毘村の聚落所に往至したまへり。爾の時[三三]尼連河の側に[三四]迦葉有り、彼に在つて止住し、天文地理を知り、貫博せざるはなく、算數樹葉皆悉く了知し、五百の弟子を將ひて日々敎化す。迦葉を去ること遠からざるに石室有り。石室の中に於て毒龍有り、彼に在つて止住す。爾の時世尊、迦葉の所に至り、到り已つて迦葉に語げて言はく、「吾石室の中に寄在して一宿せんと欲す、若し聽さるれば、當に往いて止住すべし」と。迦葉報へて曰さく、「我は愛惜せず、但彼に毒龍有り、相傷害することを恐るゝ耳」と、世尊告げて曰はく、「迦葉、苦なし、龍は吾を害せじ、但聽許るれば、止住して一宿せん」と。迦葉報へて曰さく、「若し住せんと欲せば意に隨ひて、往ひて住せよ」と。爾の時世尊、即ち石室に往いて座を敷いて宿り、結跏趺坐し、正身正意に繫念して前に在り。是の時毒龍世尊の坐したまふを見、便ち毒火を吐く。爾の時世尊慈三昧に入り、慈三昧より起ちて焰光三昧に入りたまふ。爾の時龍火と佛光一時に倶に作る。爾の時迦葉夜起きて星宿を瞻視し、石室の中を見るに大火光有り、見已つて便ち弟子に告げて曰く、「此の瞿曇沙門は容貌端正なるも、今龍の爲に害せらる。甚だ憐愍すべし。我先きに亦此の言有り、「彼に惡龍有り、止宿すべからず」と。是の時迦葉五百の弟子に告ぐ、「汝水瓶を持して、及び高梯を擧げ、往いて彼の火を救ひ、彼の沙門をして此難より濟ふことを得使めよ」と。爾の時迦葉、五百の

【三〇】梵天(Brahmadeva)。
【三一】五阿羅漢とは、五比丘阿羅漢となりし故に。
【三二】優留毘村(Uruvelā)。
【三三】尼連河(Nerañjarā)。
【三四】迦葉(Kassapa)。

じ、明生じ、覺生じ、光生じ、慧生ぜり、本未だ聞かざる法なり。復次に苦諦は實に定まりて虛ならず、妄ならず、終に異り有らず、世尊の說きたまふ所の故に名けて苦諦と爲す。苦集諦は本未だ聞かざる法に眼生じ、智生じ、明生じ、覺生じ、光生じ、慧生ぜり。復次に苦集諦は實に定りて虛ならず、妄ならず、終に異り有らず、世尊の說きたまふ所の故に名けて苦集諦と爲すなり。苦盡諦は、本未だ聞かざるの法に、眼生じ、智生じ、明生じ、覺生じ、慧生じ、光生ぜり。復次に苦盡諦は、實に定まりて虛ならず、妄ならず、終に異り有らず、世尊の說きたまふ所の故に名けて苦盡諦と爲す。苦出要諦は、本未だ聞かざるに、眼生じ、智生じ、明生じ、覺生じ、光生じ、慧生ぜり、復次に苦出要諦は、實に定まりて虛ならず、妄ならず、終に異り有らず、世尊の說きたまふ所の故に名けて苦出要諦と爲す。五比丘、當に知るべし、此の四諦[二三]三轉十二行を實の如く知らざる者は則ち無上の正眞等正覺を成ぜず、我此の四諦三轉十二行を分別し、實の如く之を知りしを以て、是の故に無上の至眞等正覺を成じたり」と。爾の時此の法を說きたまふ時、[二四]阿若拘隣諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。是の時世尊拘隣に告げて曰はく、「汝今以て法に逮び、法を得たるや」と、拘隣報へて曰く、「是の如し、世尊、已に法を得、法に逮べり」と。是の時地神、此の語を聞き已つて是の唱を作しぬ。「今如來は婆羅㮈國に在つて法輪を轉じ給ふ。諸天世人・魔、若しは魔天、人及び非人の轉ずること能はざる所のものなり。今日如來は此の法輪を轉じたまひ、阿若拘隣已に甘露の法を得たり」と。是の時[二五]四天王は[二六]地神より唱令の聲を聞いて復傳へ告げて曰く、「阿若拘隣已に甘露の法を得たり」と。是の時[二七]三十三天復四天王より聞き、[二八]艶天は三十三天より聞き、乃至[二九]兜術天展轉して聲を聞き、乃至[三〇]梵天も亦復聲を聞く。「如來は婆羅㮈に在つて法輪を轉じたまへり。諸天世人、魔若しは魔天、人及び非人の轉ぜざる所のもの、今日如來は此の法輪を轉じたまへり。爾の時便ち名けて阿若拘隣と爲す」と。爾の時世尊、五比丘に告げたまはく、「汝等の二人は住つて敎誨を受け、

【二二】眼(Cakkhu)。智(Ñāṇa)。明(Vijjā)。覺(ambodhi)。光(Āloka)。慧(Paññā)。
【二三】三轉十二行とは、苦諦については、こは苦諦なり、苦諦は知られざるべからず、苦諦は、知られたりと。(三轉三相)集諦について、こは集諦なり、集諦は斷ぜざるべからず。集諦は既に斷ぜられたりと。(三轉三相)滅諦について、こは滅諦なり、滅諦は證せざるべからず、滅諦は既に證せられたりと。(三轉三相)道諦について、こは道諦なり、道諦は修めざるべからず、道諦は既に修められたりと。(三轉三相)の十二の樣式をいふ。
【二四】阿若拘隣(Aññāta-Koṇḍañña)。了知者なる拘隣(憍陳如)の意。拘隣證悟せし時世尊、"Aññāsi vata bho Koṇḍañño"「憍陳如は實に了知せり」と宣ひしより、以後憍陳如を「阿若憍陳如」と呼ぶに至れり。五比丘中最初に阿羅漢となれり。
【二五】四天王(Cātumahārājikadeva)。
【二六】地神(Bhummadeva)。
【二七】三十三天(Tāvatiṁsadeva)。
【二八】艶天(Yāmadeva)。夜摩天ともいふ。
【二九】兜術天(Tusitadeva)。

此の人敬ふべからず　亦共に親しく視ること莫かれ　復善く來れりと稱すること莫かれ　亦請じて坐せ使むること莫かれ

と。爾の時五人此の偈を說き已つて、皆共に默然たり。爾の時世尊、五比丘の所に至り、漸々に至らんと欲したまふ。時に五比丘漸く起ちて來り迎ふ。或は與に床を敷くもの、或は與に水を取るものあり。爾の時世尊、即ち前みて座に就いて是の思惟を作したまはく、「此れは是れ愚癡の人、竟に[16]其の本限を全うすること能はず」と爾の時五比丘、世尊を稱して卿と爲す。是の時世尊、五比丘に告げて曰はく、「汝等無上の至眞・正覺を輕んずること莫かれ、然る所以は、我今已に無上の至眞・等正覺を成じ、已に甘露善を獲たり。自ら專念して吾法語を聽けよ」と。爾の時五比丘、世尊に白して曰さく、「瞿曇、本苦行せし時尚上人の法を得ること能はざりき。況んや復今日意情錯亂しても道を得たりと言ふや」と。世尊告げて曰はく、「云何が五人、汝等曾て吾の妄語せしを聞きしや」と、五比丘曰さく、「不なり、瞿曇」と。世尊告げて曰はく、「如來等正覺は已に甘露を得たり、汝等悉く共に專心に吾の法を說くを聽けよ」と。是の時世尊便ち復是の念を作したまはく、「我今此の五人を降すに堪任たり」と。是の時世尊、五比丘に告げたまはく、「汝等當に此の[17]四諦有るを知るべし。云何が四と爲す、苦諦・苦集諦・苦盡諦・苦出要諦なり。彼云何が名けて苦諦と爲すや、所謂生苦・老苦・病苦・死苦・憂悲惱苦・愁憂苦痛稱計すべからず。[18]怨憎會苦・[19]恩愛別苦・[20]所欲の不得も亦復是れ苦、要を取りて之を言はゞ、[21]五盛陰苦、是れを苦諦と謂ふなり。云何が苦集諦なるや、所謂受愛の分、之を集めて惓かず、意常に貪著す、是れを苦集諦と謂ふなり。彼云何が苦盡諦なるや、能く彼をして愛滅盡して餘りなく、亦更に生ぜざらしむ。是れを苦盡諦と謂ふなり。彼云何が名けて苦出要諦と爲すや、所謂賢聖八品道、所謂等見・等治・等語・等業・等命・等方便・等念・等定、是れを名けて四諦の法と爲すと謂ふなり。然るに復五比丘、此の四諦の法の苦諦は本未だ聞かざる法に[22]眼生じ、智生

【一六】本限を全うすとは、五比丘に堅き制約をせしこと。

【一七】四諦は、四眞諦・四聖諦ともいふ、佛教の根本教理をなすもの。
一、苦諦(Dukkhasacca)。
二、苦集諦(Dukkhasamudayasacca)。
三、苦盡諦(Dukkhanirodhasacca)。
四、苦出要諦 (Dukkhanirodhagāminī paṭipadāsacca)。
苦盡諦は又苦滅諦ともいひ、苦出要諦とは苦滅道諦ともいふ。
略して、苦・集・滅・道諦といふ。(前出)。

【一八】怨憎會苦 (Appiyehi sampayogadukkha)。憎み合ふものと會ふ時に受ける苦しみ。

【一九】恩愛別苦 (Piyehivippayoga dukkha)。愛別離苦ともいひ、相愛するものとの別離の苦。

【二〇】所求失苦 (Yam pi iccham na labhati tam pi dukkham)。

【二一】五盛陰苦(Pañca upādānakkhandhādukkhā)。五取蘊苦ともいひ、執着より生ずる五蘊は苦の意、生・老・病・死以下の八苦は要するに身心に受くる苦なるが故に、五盛陰苦に要約せしもの。

七日の中熟ら道場を視、目未だ曾て眴からず、爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

我今此の坐處に　生死の苦を經歷りぬ　智慧の斧を執御して　永く根元の栽を斷ちぬ　天王此に來至し　及び諸魔の怨屬　復方便を以て降し　解脫の冠を著けしめぬ　今此の樹下に於て金剛の床に坐し　已に一切智を獲て　礙げらるゝことなき慧に逮びぬ　我此の樹下に坐し　生死の苦を見　已に死の原本を却けて　老ひと病ひと永く餘りなし

と。爾の時世尊此の偈を說き已つて、便ち座より起ちて去り、波羅㮈國に向はんと欲したまへり。是の時[14]優毘伽梵志、遙に世尊の光色炳然として日月の明を翳ふを見已つて、世尊に白して曰さく、「瞿曇の師主今所在爲るや。何人に依りて出家學道をなせしや。恒に喜びて何の法敎を說くや。何れより來ると爲すや。所至せんと欲すと爲すや」と。爾の時世尊、彼の梵志に向ひ、此の偈を說きたまはく、

我阿羅漢を成じ　世間の最にして比ひなし　天及び世間の人に　我今最も上れたりとなす　我に亦師保無く　亦復與に等しきもの無し　獨り尊くして過ぐるもの無く　冷かにして復溫なし今當に法輪を轉ぜんと　[15]迦尸の邦に往詣し　今甘露の藥を以て　彼の盲冥のものを開くべし波羅㮈國界　迦尸國の王土　五比丘の住處に　微妙の法を說き　彼をして早く道を成じ　及び漏盡通を得て　以て惡法の原を除かしめんと欲す　是の故に最も勝れたりと爲す

と、時に彼の梵志歎吒し儼頭叉手し、指を彈いて笑ひを含み、道を引いて去りぬ。時に世尊波羅㮈に往詣したまふ。

是の時五比丘遙に世尊の來りたまふを見、見已つて各〻共に論議す、「此れは是れ沙門瞿曇、遠くより來る。情性錯亂して、心專精ならず、我等復共に語ること勿れ、亦起ちて迎ふること莫かれ、亦請じて坐せしむる莫かれ」と。爾の時五人、便ち此の偈を說く、

【一四】優毘伽（Upaka　優波迦）。

【一五】迦尸（Kāsi）。婆羅㮈の舊名。前に出づ。

閑靜の處に在りて思惟して自ら修め、族生子の鬚髮を剃除し、三法衣を著け、家を離れて無上の梵行を修むる所以の生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復有を受けず、如實に之を知り、是くて彼の比丘便ち阿羅漢を成ぜり。爾の時彼の比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

[九]聞くこと是の如し。一時佛、摩竭國道場樹の下に在し、初始て佛を得たまひぬ。爾の時世尊、便ち是の念を作したまはく、「我今已に此の甚深の法を得たり。解し難く、了り難く、曉り難く、知り難し。極微妙にして智の覺知する所、我今當に先づ誰の與にか法を説くべき、吾法を解らしめるものは是れ誰ぞや」と。爾の時世尊、便ち是の念を作したまはく、「[一〇]羅勒迦藍は諸根純熟す、先づ度することを得べし。又且つ我の法有るを待つ」と。此の念を作し已つて、虚空中に天有り、世尊に白して曰さく、「羅勒迦藍は死して已に七日なり」と。是の時世尊復念を作して曰はく、「何ぞ其れ苦なる哉、吾法を聞かずして命終を取れる、設し吾法を聞くべくんば、即ち解脱を得んに」と。是の時世尊復是の念を作したまはく、「我今先づ誰の與にか法を説いて解脱を得しむる、今[一一]欝頭藍弗、先づ度することを得べし。當に與に之を説くべし。吾法を聞き已つて先づ解脱を得ん」と。世尊是の念を作したまふに、虚空中に天有り、語げて言さく、「昨日夜半已に命終を取れり」と。是の時世尊、便ち是の念を作したまはく、「鬱頭藍弗は何ぞ其れ苦なる哉、吾法を聞かずして命過を取れり、設し吾法を聞くことを得ば、即ち解脱を得んに」と。爾の時世尊、復是の念を作したまはく、「誰か先づ法を聞いて解脱を得るや」と。是の時世尊、重ねて更に思惟したまはく、「[一二]五比丘に饒益せられしこと多し、我初め生れし時、吾後に追隨せり」と。是の時世尊復是の念を作したまはく、「今五比丘竟に所在爲るや」と、即ち天眼を以て五比丘を觀じ、乃ち[一三]波羅㮈の仙人鹿園所止の處に在り、我今當に往いて、先づ五比丘の與に説法すべし。吾法を聞き已つて、當に解脱を得べし」と。爾の時世尊、

これを六境といふ、六根・六境・六識を合せて十八界といひ、有情の身心組成の要素を認識作用の方面より分類せしもの。

【九】 Vinaya Mv. 1. 6 15-20 & 54

【一〇】 羅勒迦藍 (Ālārakālāma)。

【一一】 欝頭藍弗(Uddaka Rāmaputta)。

【一二】 五比丘とは、憍陳如(Koṇḍañña)。婆沙波(Vappa)跋陀梨迦(Bhaddiya)。摩訶男(Mahānāma)。阿說示(Assaji)。

【一三】 波羅㮈の仙人鹿園所。(前出)。

來至し、門外に多く傷害有りて稱計すべからず。我爾の時に於て便ち是の念を作さく、「此の八萬四千の神象は朝々に來至して、門外に多く傷害有つて稱計すべからず。我今意の中に分ちて二分と爲し、四萬二千をして朝々に來賀せしめんと欲す」と、爾の時比丘、我是の念を作さく、「昔何の福を作し、復何の德を作し、今此の威力を得るや」と。乃至是に於て復是の念を作さく、「三事の因緣に由るが故に、我をして此の福祐を獲しむ。云何が三と爲すや、所謂惠施・慈仁・自守なり」と。比丘當に觀ずべし、爾の時諸行永く滅して餘り無し。爾の時欲意に遊んで厭足有ること無し。所謂厭足とは賢聖の戒律に於て乃ち厭足を爲すなり。云何が比丘、此の色は有常なるや、無常なるや」、比丘對へて曰さく、「無常なり、世尊」と。「若し復無常ならば變易の法たり、汝此の心を生ずることを得べし、此れ我所なるや、我は是れ彼所なるや」と。對へて曰さく、「不なり、世尊」と。「痛・想・行・識は是れ常なるや、是れ無常なるや」と。比丘對へて曰さく、「無常なり、世尊」と。「設使無常ならば變易の法たり、汝此の心を生ずることを得べし。此れは是れ我所なるや、我は是れ彼所なるや」と、對へて曰さく、「不なり、世尊」と。是の故に比丘、諸の所有の色、過去・當來・今現在のもの、若しは大、若しは小、若しは好、若しは醜、若しは遠、若しは近、此の色も亦我所に非ず、我は亦彼所に非ず、此れは是れ智者の覺る所なり。諸の所有の痛、過去・當來・今現在、若しは遠、若しは近、此の痛も亦我所に非ず、我も亦彼所に非ず、是の如きは智者の覺知する所なり。比丘當に是の觀を作すべし。若し聲聞の人にして眼を厭患し、色を厭患し、[八]眼識を厭患し、若しは眼に緣つて苦樂を生ずるを亦復厭患し、亦耳を厭患し、聲を厭ひ、耳識を厭ひ、若しは耳識に依つて苦樂を生ずるをも亦復厭患し、鼻・舌・身・意・法も亦復厭患し、若しは意に依つて苦樂を生ずるをも亦復厭患し、已に厭患せば便ち解脫し、已に解脫せば便ち解脫智を得、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復有を受けず、實の如く之を知る」と。爾の時彼の比丘世尊の是の如きの敎へを得、

【八】眼識とは、眼を通じてその對象の色を見分ける作用をいふ。眼・耳・鼻・舌・身・意識の六を六識といひ、六識は眼・耳・鼻・舌・身・意根の六根によつて生じ、六根の對象となるものは、次ぎの如く、色・聲・香・味・觸・法の六にして、

比丘に語げて曰はく、「云何が比丘、此の爪の上の土を見るや不や」と。比丘對へて曰さく、「唯然り、見已る、世尊」と。佛、比丘に告げたまはく、「設し爾許の色にして恒に世に在ること有るべくんば、則ち梵行の人分別して苦際を盡すこと得べからず。是れを以て比丘、爾許の色も在ること無きを以て、便ち梵行を行ずることを得て、苦の本を盡くすことを得るなり。然る所以は、比丘當に知るべし。我昔曾て大王と爲り、四天下を領し、法を以て治化し、人民を統領し、七寶具足しぬ。所謂七寶とは輪寶・象寶・馬寶・珠寶・玉女寶・居士寶・典兵寶なり。比丘當に知るべし、我爾の時に於て、此の轉輪聖王と作り、四天下を領し、八萬四千の神象有り、象を菩呼と名く。復八萬四千の羽寶の車有り、或は師子の皮を用つて覆ひ、或は狼狗の皮を用つて覆ふもの、盡く幢・高蓋を懸けたり。復八萬四千の高廣の台有り、猶し天帝の所居の處の如し。復八萬四千の講堂有り、法講堂の比の如し。復八萬四千の玉女の衆有り、像天女の如し。復八萬四千の高廣の座有り、皆金銀七寶を用つて廁間す。復八萬四千の衣被服飾有り、皆是れ文繡柔軟なり。復八萬四千の飲食の具有り、味若干種なり。比丘當に知るべし、我爾の時一の大象に乘りき、色極白にして好く、口に六牙有り、金銀交々具して身能く飛行し、亦能く形を隱し、或は大、或は小なり。象を菩呼と名く、我爾の時一神馬に乘りき、毛尾朱色にして、行くに身動かず。金銀交々飾りて身能く飛行す。亦能く形を隱くし、或は大、或は小なり馬を毛王と名く。我爾の時に於て、八萬四千の高廣の台の一台中に住す、台を須尼摩と名け、純金もて作る所なり。爾の時我一講堂の中に在りて止宿す。講堂を法說と名け、純金にて造らる。我爾の時に於て、一の寶羽の車に乘る。車を最勝と名け、純金にて造らる。我爾の時に於て一玉女を將つて、左右の使令とすること亦姉妹の如し。我爾の時に於て八萬四千の高廣の座に於て、一座上に在り、金銀瓔珞稱計すべからず。我爾の時に於て、一の妙服を著く、像ること天衣の如し。食する所の食味は甘露の如し、爾の時に當つて、我轉輪聖王と作り、時に八萬四千の神象、朝朝に

絶せ令むること無かるべし」と。世尊告げて曰はく、「我今正に是れ王の身なり、名けて法王と曰ふ。然る所以は、我今汝に問はん、云何が諸釋、轉輪聖王は七寶具足し、千子勇猛なりと言ふや。我今三千大千刹土の中に於て最尊最上にして能く及ぶもの無し。七覺意の寶を成就し、無數千の聲聞の子、以て營從を爲す」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

　今此の位を用ひるが爲に　得已つて後復失はん　此の位は最も勝れたり　終りなく始め有ること無し　已に勝されば能く奪ふなし　此れは勝れ最も勝れたりとなす　然して佛の無量の行は跡なし誰か跡を將ひん

是の故に諸釋、當に方便を求めて、正法の王治むべし。是の如く諸釋、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸釋、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[七]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時一比丘有り、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時彼の比丘世尊に白して曰さく、「頗くば此の色有り、恒に在つて變易せざるや、久しく世に存して亦移動せざるや、頗くは痛・想・行・識有り、恒に在つて變易せざるや、久しく世に存して亦移動せざるや」と。世尊告げて曰はく、「比丘、此の色は恒に在つて變易せず、久しく世に存すること有ること無し。亦復痛・想・行・識も恒に在つて變易せず、久しく世に存すること無し。若し復比丘、當に此の色にして恒に在りて變易せず、久しく世に存すること有るべくんば、則ち梵行の人分別すべからず。若し痛・想・行・識久しく世に存して變易せずば、梵行の人分別すべからず。是の故に比丘、色を以て分別すべからず、久しく世に存せざるが故に。是の故に梵行の人乃ち能く分別して苦の本を盡す。亦痛・想・行・識も亦久しく世に存すること無し。是の故に梵行乃ち分別して苦の本を盡すべし」と。爾の時世尊、少許りの土を取つて爪の上に著け、彼の

【七】 S. 22. 977 Nakhāsikhā

より起ち、頭面に足を禮し、退いて所在に還えり、種々の飲食味若干種を辦じ、淸且自ら時の到れることを白す。

爾の時世尊、時到り、衣を著け、鉢を持し、拔祇城に入り、長者の家に至り、座に就て坐したまふ。是の時長者已に世尊の坐の定まれるを見、手自ら斟酌して種々の飲食を行じ、已に世尊の食し訖れるを見、清淨の水を行き已つて便ち一座を取り、如來の前に在つて坐し、世尊に白して曰さく、「善い哉世尊、若し四部の衆にして、衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を須ひんとならば、盡く我家に在り、之を取らしめん」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、長者、汝の言ふ所の如し」と、世尊は卽ち長者の與に微妙の法を說き、以て法を說き竟つて便ち座より、起ち去りたまひぬ。爾の時世尊、臂を屈申するが如き頃に、拔祇より現れずして還えつて舍衞の祇洹精舍に來至し給ひぬ。爾の時世尊諸比丘に告げ給はく、「若し四部の衆にして衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を須ひんには、當に那優羅の父の舍より之を取るべし」と。爾の時世尊、復比丘に告げ給はく、「我今日の如く、優婆塞中の第一の弟子にして愛惜する所なきもの、所謂那優羅の父是れなり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、釋翅尼拘留園中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時釋種の諸の豪姓のもの數千人の衆、世尊の所に往詣し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。

爾の時諸釋、世尊に白して曰さく、「今日當に王と作り、此の國界を治領すべし、我等の種姓は便ち爲に朽ちず、轉輪聖王の位を、汝に於て斷滅せ令むることなかれ、若し當に世尊にして出家したまはずば、當に天下に於て轉輪聖王となり、四天下を統べ、千子具足し、我等の種姓の名稱遠布し、轉輪聖王は釋姓より出づべし。是を以ての故に、世尊、當に王と作りて治し、王種をして斷

と。是の時彼の鬼世尊に白して曰さく、「不審なり、世尊、更に何の敎有りや」と。世尊告げて曰はく、「汝今汝の本形を捨てゝ三衣を著けて沙門となり、拔祇城に入り、在々處々に此の敎令を作せ、『諸賢當に知るべし、如來世に出でたまひて、降らざる者を降し、度せざる者を度し、解脫せざる者に解脫を知らしめ、救ひなき者の與に救護を作し、盲ひの者に眼目となり、諸天・世人・天・龍・鬼神・魔若しは魔天、若しは人非人に、最尊最上にして與に等しきものなく、敬ふべく、貴ぶべく、人の爲に良祐福田と作りたまふ。今日那優羅小兒を度し、及び毘沙惡鬼を降したまへり。汝等往いて彼に至り、化を受くべし』と」と。對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。

爾の時毘沙鬼、沙門となり、服を被、三法衣を著け、諸の里巷に入りて此の敎令を作す、「今日世尊は那優羅小兒を度し、及び毘沙惡鬼を降伏したまへり。汝等往いて彼の敎誨を受くべし」と。爾の時に當り、拔祇國界の人民熾盛なり。是の時長者善覺、此の語を聞き已り、歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず、八萬四千の人民の衆を將ひて、彼の世尊の所に至り、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時拔祇の人民或は足を禮するもの有り、或は手を叉ぐるもの有り。爾の時八萬四千の衆、已に一面に在りて坐す。是の時世尊、漸く與に微妙の法を說きたまふ。所謂論とは、施論・戒論・生天の論、欲は不淨想漏にして大患たり」と。爾の時世尊、彼の八萬四千の衆の心意の歡悅びを觀察し、諸佛世尊の常に說きたまふ所の法、苦・集・盡・道、普く彼の八萬四千の衆の與に此の法を說きたまひ、各々座上に於て諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。猶し白淨の衣の染むるに色をなし易きが如し。此の八萬四千の衆も亦復是の如く、諸の塵垢盡きて法眼淨を得、法を得、法を見、諸法を分別して孤疑有ること無く、無所畏を得、自ら三尊・佛・法・聖衆に歸して五戒を受けぬ。爾の時那優羅の父長者、世尊に白して曰さく、「唯願はくは世尊、當に我請を受くべし」と。爾の時世尊、默然として請を受けたまふ。時に彼の長者、以て世尊の默然として受けたまふを見已つて、卽ち座

是れ故行なり。囊時造る所の緣痛行を成ず、耳・鼻・口・身・意、此れは是れ故行なり。囊時造る所の緣痛行を成ず。是れを惡鬼、此れは是れ故行と謂ふなり」と。毘沙鬼曰さく、「沙門、何等か是れ新行なるや」と。世尊告げて曰はく、「今身に造る所の　五身三口四意三なり。是れを惡鬼此れは是れ新行と謂ふなり」と。時に惡鬼曰く、「何等か是れ行の滅なるや」と。世尊告げて曰はく、「惡鬼當に知るべし、故行滅盡して更に興起らず、復造行せず、能く此の行を取つて、永く以て生ぜず、永く盡きて餘りなし、是れを行の滅と謂ふなり。是の時彼の鬼世尊に白して曰さく、「我今極めて飢えたり、何故に我食を奪ふや、此の小兒は是れ我食する所なり、沙門、我に此の小兒を歸へすべし」と。世尊告げて曰はく、「昔我未だ成道せざりし時、曾て菩薩たりき。鴿有り、我に投じぬ。我尙身命を惜しまずして彼の鴿の厄を救へり。況んや我今日已に如來を成ぜり、能く此の小兒を捨てゝ汝に食噉はしめんや。汝今惡鬼、其の神力を盡くすとも、吾終に汝に此の小兒を與へざらん、云何が惡鬼汝曾て迦葉佛の時、曾て沙門と作り、梵行を修持し、後復戒を犯して此の惡鬼に生れたり」と。爾の時惡鬼、佛の威神を承け、便ち囊昔造る所の諸行を憶ひ、爾の時惡鬼世尊の所に至り、頭面に足を禮し、並に是の說を作す。「我今愚惑にして眞僞を別たず、乃ち此の心を生じ、如來に向へり、唯願くは世尊、我懺悔を受けたまへ」と。是の如きこと三四なり、世尊告げて曰はく「汝の悔過を聽さん、復更に犯すこと勿れ」と。爾の時世尊、毘沙鬼の與に微妙の法を說き、勸めて歡喜せしめたまへり。時に彼の惡鬼手に數千兩金を擎げて世尊に奉上し、世尊に白して曰さく、「我今此の山谷を以て　六招提僧に施さん、唯願はくは世尊、我與に之を受けたまへ、及び此の數千兩金を」と。是の如きこと再三なり。爾の時世尊、卽ち此の山谷を受け、便ち此の偈を說きたまはく、

園果は清凉を施し　及び水に橋樑を作る　設し能く大船　及び諸の養生の具を造りて　晝夜に
懈息なくば　福を獲ること量るべからず　法義戒成就し　終に後に天上に生る

【五】身三とは、身に行ふ三不善にして、殺生・偸盜・邪淫をいふ。口四とは、口に行ふ四不善にして、妄語・惡口・兩舌・綺語をいひ、意三とは、意に思惟する三不善にして、貪・瞋・恚の三をいふ。

【六】招提僧(Cāturdiśa saṃgha)。とは、譯して四方僧といひ、比丘・比丘尼・沙彌・沙彌尼・式叉摩那の五衆のこと、廣き範圍の敎團のこと。

ふ所の如し、我は今是れ如來至眞等正覺なり、故に來つて汝を救ひ、及び此の惡鬼を降さん」と。是の時那優羅此の語を聞き已つて歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず、便ち世尊の所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時世尊、與に妙義を說きたまふ。所謂論とは施論・戒論・生天の論、欲は穢惡たり、漏不淨行なり、出家は要たり、諸の亂想を去る。爾の時世尊以て那優羅小兒の心意歡喜し、意性柔軟なるを見、諸佛世尊の常に說きたまふ所の法、苦集盡道、是の時世尊、具に彼の與に說きたまふ。彼卽ち座上に於て諸の塵垢盡き、法眼淨を得、彼已に法を見、法を得、諸法を成就し、諸法を承受して狐疑有ること無く、如來の敎を解し、佛・法・聖衆に歸して五戒を受けぬ。是の時毘沙惡鬼還えり來つて本の住處に到る。爾の時惡鬼遙に世尊の端坐して思惟し、身傾動せざるを見、見已つて便ち恚怒を興し、雷電霹靂を雨らし、如來の所に向つて或は刀劍を雨すも、未だ地に墮ちざるの頃に、便ち優鉢蓮華と化しぬ。是の時彼の鬼倍す復瞋恚して、諸の山河石壁を雨らすも未だ地に墮ちざるの頃に、種々の飲食と化作す。是の時彼の鬼復大象を化作して吼え喚めいて如來の所に向ふ。爾の時世尊復師子王を化作したまふ。是の時彼の鬼復師子の形を化作して如來の所に向ふ。爾の時世尊は大火聚を化作したまふ、是の時彼の鬼倍す復瞋恚して大龍を化作して七首あり、爾の時世尊は[四]大金翅鳥を化作したまふ。是の時彼の鬼便ち此の念を生ず、「我今所有の神力今已に之を現はす、然るに此の沙門衣も動かず、我今當に往いて其の深義を問うべし」と。

是の時彼の鬼、世尊に問うて曰さく、「我今毘沙深義を問はんと欲す、設し我に報ふること能はずば、當に汝の兩脚を持つて海南に擲著すべし」と。世尊告げて曰はく、「惡鬼當に知るべし、我自ら觀察するに、天及び人民、沙門婆羅門、若しは人非人も能く、我兩脚を持つて海南に擲つ者なし、但し今義を問はんと欲せば、便ち之を問うべし」と。是の時惡鬼問うて曰さく、「沙門、何等か是れ故行、何等か是れ新行、何等か是れ行の滅たる」と。世尊告げて曰はく、「惡鬼當に知るべし、眼は

【四】金翅鳥(Garuda)。龍を取つて食となす鳥類の王、迦樓羅に同じ、見よ。

び四天王咸共に歸命す、願くば此の兒を擁護して、免れ濟ふこと得使めよ。及び釋提桓因に亦向つて歸命す、願くば此の兒の命を濟へ、及び梵天王に亦復歸命す、願くば此の命を脫れんことを。諸有の鬼神、護世者に亦向つて歸命す、此の厄を脫がれ使めよ。諸の如來の弟子、漏盡阿羅漢に我今亦歸命す、此の厄を脫れ使めよ。諸の辟支佛、無師自覺に亦復自ら歸す、此の厄を脫れしめよ。彼の如來に今亦自ら歸す、降らざる者を降し、度せざるものを度し、獲ざる者を獲、脫せざる者を脫し、般涅槃せざる者をして般涅槃せしめ、救ひなき者の與に救護となり、盲ひの者に眼目と作り、病める者に大醫王と作り、若しは天・龍・鬼神一切の人民、魔及び魔天、最尊最上にして能く及ぶ者なく、敬ふべく、貴ぶべく、人の爲に良祐福田と作り、如來の上に出づる者有ること無し。然れば如來は當に之を鑒察したまふべし。願はくは如來、當に此の至心を照し給ふべし」と。是の時那優羅の父母卽ち此の兒を以て鬼に付し已り、便ち退いて去りぬ。

　爾の時世尊、天眼淸淨なるを以て、復天耳徹聽なるを以て、此の言有るを聞きたまへり。那優羅の父母啼哭して稱計すべからず。爾の時世尊、神足力を以て、彼の山中の惡鬼の住所に至りたまふ。時に彼の惡鬼、雪山の此鬼神の處に集在せり。是の時世尊、鬼の住處に入りて坐し、正身正意に結跏趺坐したまふ。是の時那優羅小兒、漸く以て彼の惡鬼の住處に至る。是の時那優羅小兒、遙に如來、惡鬼の住所に在りて、光色炳然として、正身正意に繫念在前し、顏色端正にして、世の與に奇有り、諸根寂靜にして諸の功德を得、諸魔を降伏したまふ。此の如きの諸德稱計すべからず。三十二相八十種好有りて其の身を莊嚴し、須彌山の如く諸の山頂に出で、面は日月の如く、亦金山の如くして、光の遠く照らしたまふこと有るを見、見已つて便ち歡喜の心を起し、如來に向つて便ち此の念を生ず、「此は必ず是れ毘沙惡鬼にあらず、然る所以は、我今之を見て極めて歡喜の心あり、設し是れ惡鬼なるべくんば、意に隨つて之を食へ」と。是の時世尊告げて曰はく、「那優羅、汝の言

ば、當に念じて恐怖有るべけんや。若し比丘有つて恐怖有るとも、便ち自ら消滅せん。是の故に諸比丘、當に三尊佛・法・聖衆を念ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時拔祇國界に鬼有り、名けて毘沙と爲す。彼の國界に在りて、極めて凶暴たり。民を殺すこと無量にして、恒に日に一人を殺す。或は日に二人・三人・四人・五人・十人・二十人・三十人・四十人・五十人を殺す。爾の時諸の鬼神・羅刹彼の國に充滿せり。是の時拔祇の人民皆共に集り聚つて是の說を作さく、「我等此の國を避けて、他の國界に至ることを得べし、此に住まることを須ひじ」と。是の時毘沙惡鬼、彼の人民の心の所念を知り、便ち彼の人民に語げて曰く、「汝等此の處を離れて、他の邦土に至ること莫かれ、然る所以は、終に吾手を免れざればなり。卿等日々一人を持して吾を祠らば、吾要ず汝を觸擾せざらん」と。是の時拔祇の人民、日に一人を取りて彼の惡鬼を祠る。是の時彼の鬼は彼の人を食し已り、骸骨を取りて、他方の山中に擲著す。然して彼の山中の骨は谿谷に滿ちたり。

爾の時長者有り、善覺と名け、彼に在つて住止し、財饒く寶多く、財を積むこと千億、騾・驢・駱駝稱計すべからず。金・銀・珍寶・車渠・馬瑙・眞珠・琥珀も亦稱計すべからず。爾の時彼の長者に兒有り、那優羅と名く。唯一子有り、甚だ愛敬念して、未だ曾て目前を離れず。爾の時此の限制有り、「那優羅小兒は次で鬼を祠るべし」と。是の時那優羅の父母、此の小兒を沐浴し、與に好衣を著け、將ひて塚間に至り、彼の鬼の所に至り、到り已つて啼哭し、喚呼すること稱計すべからず。並に是の說を作さく、「諸神、地神皆共に證明せよ、我等に唯此の一子有り、願くば諸の神明、當に此れを證明すべし、及び二十八大鬼神の王當に共に此れを護るべし、乏しきこと有ら令むること無し、及

卷の第十四

高幢品第二十四の一

一

[1]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「昔天帝釋、三十三天に告ぐ、『卿等若し大戰の中に入る時は、設し恐怖畏懼の心有らば、汝等還えつて我高廣の幢を顧へり視よ、設し我幢を見らば、便ち畏怖なけん。若し我幢を憶はずば、當に伊[2]沙天王の幢を憶ふべし。以て彼の幢を憶はゞ所有の畏怖便ち自ら消滅せん。若し我幢を憶はず、伊沙の幢を憶はざるものは、爾の時當に　[3]婆留那天王の幢を憶ふべし。以て彼の幢を憶はば、所有の恐怖便ち自ら消滅せん』と。我今亦汝等に告ぐ、設し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷にして、若し畏怖有つて衣毛竪たば、爾の時は當に我身を念ずべし『此れは是れ如來・至眞・等正覺・明行成・善逝と爲し、世間解・無上士・道法御・天人師・佛・衆祐と號しまつり、世に出現したまふ』と、設ひ恐怖有つて衣毛竪つとも、便ち自ら消滅せん。若し復我を念ぜざる者は、爾の時は當に法を念ずべし『如來の法は甚だ微妙たり、智者の學ぶ所なり』と。以て法を念ぜば、所有の恐怖、便ち自ら消滅せん。設し我を念ぜず、復法を念ぜずば、爾の時は當に聖衆を念ずべし『如來の聖衆は極めて和順たり、法法成就・戒成就・三昧成就・智慧成就・解脫成就・解脫見慧成就・所謂四雙八輩、此れは是れ如來の聖衆にして、敬ふべく、事ふべく、世間の福田なり』と。是れを如來の聖衆と謂ふなり。爾の時若し僧を念じ已れば、所有の恐怖便ち自ら消滅せん。比丘當に知るべし、釋提桓因には猶淫・怒・癡有り、然も三十三天は其の主を念じて卽ち恐怖なし、況んや復如來には欲・怒・癡心有ること無れ

【一】 S. 11. 1. 3 Dhajagga

【二】 伊沙天子 (Pajāpatideva-rāja)。

【三】 婆留那 (Varuṇa)。

獄の中に墮せんや。若し瞋恚想を觀ぜば、命終るの時畜生の中に生れ、所謂鷄狗の屬、蛇蚖の類として其の中に生れん。若し害想を觀ずれば、亦命終りて餓鬼の中に生れ、形體燒燃として苦痛陳べ難し、是れを比丘、此の三想有つて地獄の中、餓鬼、畜生に生ると謂ふなり。復三想有り、云何が三と爲すや、所謂[三三]出要想・[三四]不害想・[三五]不恚想なり。若し人有りて、出要想有る者は、命終るの時此の人中に生れん、若し不害想有る者は、命終るの時自然に天上に生れん。若し人有つて不殺心の者は、命終の時[三六]五結を斷じ、便ち彼所に於て般涅槃せん、是れを比丘、此の三想有りと謂ふなり。常に念じて修行し、此の三惡想は當に之を遠離すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。

爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

地主と婆拘と耳と　婆提と逆順香　愚と世と三不善　三聚と觀は後に在り

【三三】出要想（Nekkhamma-vitakka）。

【三四】不害想（Avyāpādavitakka）。

【三五】不恚想（Avihiṃsāvitakka）。

【三六】五結は、五下分結のこと。上の註を見よ。

善根を修むべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の[25]三聚有り、云何が三と爲すや、所謂[26]等聚　[27]邪聚　[28]不定聚なり、彼云何が等聚と爲すや、所謂等見・等治・等語・等業・等命・等方便・等念・等定、是れを等聚と謂ふなり。彼云何が名けて邪聚と爲すや、所謂邪見・邪治・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定・是れを邪聚と謂ふなり。彼云何が名けて不定聚と爲すや、所謂苦を知らず、集を知らず、盡を知らず、道を知らず、等聚を知らず、邪聚を知らざるを謂ひ、是れを名けて不定聚と爲すと謂ふなり。諸比丘、當に知るべし、復三聚有り、云何が三と爲すや、所謂善聚・等聚・定聚なり。彼云何善聚と名くるや、所謂三善根なり。何等か善根なる、所謂不貪善根、不恚善根、不癡善根なり、是れを善聚と謂ふなり。云何が名けて等聚と爲すや、所謂賢聖八品道、等見・等治・等語・等業・等命・等方便・等念・等三昧、是れを等聚と謂ふなり。彼云何が名けて定聚と爲すや、所謂苦を知り、集を知り、盡を知り、道を知り、善聚を知り、惡趣を知り、定聚を知る、是れを名けて定聚と爲すと謂ふなり。是の故に諸比丘、此の三聚の中、邪聚・不定聚は當に之を遠ざくべし、此の正聚は當に奉行すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

[29]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の三觀想有り、云何が三と爲すや、所謂[30]欲想・[31]瞋恚想・[32]殺害想を觀ずるなり。是れを比丘、此の三想有りと謂ふたり。比丘當に知るべし、若し欲想を觀ずること有らば、命終るの時、便ち地

[25] 三聚(Tayo rā i)。
[26] 等聚 (Sammattan ya-tarāss)。
[27] 邪聚(Micchattarāsi)。
[28] 不定聚(Aniyatarāsi)。
[29] Iti-vuttaka 87
[30] 欲想(Kāmavitakka)。
[31] 瞋恚想 (Vyāpādavitakka)。
[32] 殺害想 (Vihiṃsāvitakka)。

〔三三〕聞くこと是の如し、一時佛、羅閲城迦蘭陀竹園所に在し、五百人と俱なりき。爾の時王阿闍世は、恒に五百釜の食を以て提婆達兜に給與しぬ。彼の時、提婆達兜の名聞四遠し、戒德具足し、名稱悉く備り、乃ち能く王をして日に來つて供養せしむ。是の時提婆達兜此の利養を得已りぬ。諸比丘之を聞き、世尊に白して曰さく、「國中の人民、提婆達兜を歎說し、名稱遠布し、乃ち王阿闍世をして、恒に來つて供養せ使む」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等比丘、此の心を抱いて提婆達兜の利養を貪ること莫かれ。然る所以は、提婆達兜愚人は此の三事を造り、身口意行終に驚懼なく、亦恐怖せず。如し今提婆達兜愚人にして、當に復此の諸の善功德を盡すべくんば、惡狗の鼻を取りて之を壞り、倍す復凶惡なるが如し、提婆達兜愚人も亦復是の如く、此の利養を受けて遂に貢高を起す。是の故に諸比丘、亦意を興して利養を著すること莫かれ。設し比丘有つて利養に著せば三法を獲ざらん。云何が三と爲すや、所謂〔三四〕賢聖戒、賢聖三昧、賢聖智慧なり。若し此の三法を成ぜんと欲せば、當に善心を發して利養に著せざるべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の三不善根有り、云何が三と爲すや、貪不善根・恚不善根・癡不善根なり、若し比丘にして此三不善根有らば三惡趣に墮せん。云何が三と爲すや。所謂地獄・餓鬼・畜生なり、是の如く比丘、若し此の三不善根有る者に便ち三惡趣有り、比丘、當に知るべし、此の三善根有り、云何が三と爲すや、不貪善根・不恚善根・不癡善根なり。是れを比丘の三善根有りと謂ふなり。若し此の三善根有るものに、便ち二の善處有り、涅槃を三と爲す、云何が二趣なるや、所謂人天是れなり、是れを比丘此の三善有る者は則ち此の善處に生ると謂ふなり。是の故に諸比丘、當に三不善根を離れて、三

〔三三〕 A. VI. 63, S. 17. 36, 1 參照。

【三四】 戒(Sīla)。三昧(Samādhi)。智慧(Paññā)の三、これを三學といひ、三の學ばざること。即ち戒を修めて身心を清淨にし、三昧に入つて心寂靜に、智慧を修めて如實に四諦の理を知り、初めて涅槃に到達するなり。

來るを見、便ち退いて去らんと欲したまふ。是の時阿難、世尊に白して曰さく、「何故に此の巷より遠ざからんと欲したまふや」と。世尊告げて曰はく、「提婆達兜は今此の巷に在り、是れを以て之を避けんとす」と、阿難佛に白して曰さく、「世尊、豈に提婆達兜を畏れたまふや」。世尊告げて曰はく、「我提婆達兜を畏れざるも、但此の惡人と與に相見るべからず」と。阿難曰さく「然らば、世尊、此の提婆達兜に使すべし、乃ち他方に在らしむべし」と。爾の時世尊、此の偈を說いて言はく、

　我終に　此の心なし　彼をして他方に在らしめんこと　彼自ら當に造行し　便ち自ら他所に在るべし

と。阿難世尊に白して曰さく、「然らば提婆達兜は如來に過ぐる所有りや」世尊告げて曰はく、「愚惑の人は與に相見るべからず」と。是の時世尊、阿難に向ひて此の偈を說きたまはく、

　愚人を見るべからず　愚と與に事に從ふこと莫かれ　亦與に言論して　是非の事を說くこと莫かれ

と、是の時阿難復此の偈を以て世尊に報へて曰さく、

　愚なる者は何の能くする所ぞ　愚なる者に何の過有らん　正使共に言說すとも　竟に何等の失か有らん

と、爾の時世尊、復此の偈を以て、阿難に報へて曰はく、

　愚なる者は自ら造行す　作す所のものは法に非ず　正見常律に反し　邪見日に以て滋し

是の故に阿難、惡知識と與に事に從ふこと莫かれ。然る所以は、愚人と與に事に從はゞ信なく、戒なく、聞なく、智なし。善知識と與に事に從はゞ、便ち諸の功德を增益し、戒具成就せん、是の如く、阿難、當に是の學を作すべし」と。爾の時阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

亦順風香、亦逆順風香あり」阿難、佛に白して言さく、「此れは何等の香か、亦逆風香、亦順風香、亦逆順風香なるや」世尊告げて曰はく、「此の三種の香、亦逆風香、亦順風香、亦逆順風香あり」阿難言さく、「何等か三と爲すや」世尊告げて曰はく、「戒香と聞香と施香となり、是れを阿難、此の香の種有りて、然も復逆風香、亦順風香、亦逆順風香と謂ふなり。諸の世間所有の香に此の三種の香は最勝最上にして與に等しきもの無く、能く及ぶもの無し、猶し牛に由つて酪有り、酪に由つて酥有り、酥に由つて醍醐有り、然るに此の醍醐は最勝最上にして與に等しきものなく、亦能く及ばざるが如し。諸の所有の世間の諸香に、此の三種は最勝最上にして、能く及ぶもの無し」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說き給はく、

木蜜及び栴檀　優鉢及び諸の香　亦諸の種々の香に　戒香最も勝れたり　此の戒以て成就し
欲なく所染なく　等智にして解脫し　逝く處魔は知らず　此の香妙なりと雖も　及び諸の檀蜜
の香　戒香の妙なること　十方悉く之を知る　栴檀香有りと雖も　優鉢及び餘香　此の諸の衆
香の中　聞香は最第一なり　栴檀香有りと雖も　優鉢及び餘香　此の諸の衆香の中　施香は最
第一なり

と。是れを此の三種の香、亦逆風香、亦順風香、亦逆順風香と謂ふなり。是の故に阿難、當に方便を求めて、此の三香を成ずべし。是の如く阿難、當に是の學を作すべし」と。爾の時阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

聞くこと是の如し、一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と俱なりき。爾の時世尊、時到つて衣を著け、鉢を持し、羅閱城に入つて乞食し給ひぬ。爾の時提婆達兜亦城に入りて乞食す、時に提婆達兜の入りし所の巷の中に、佛も亦彼に往至したまへり。然るに佛遙に提婆達兜の

にして此の財貨を得ば、當に廣く布施すべし、惜しむ所有ること莫かれ、復當に無極の財を得べし。是の如く大王、當に是の學を作すべし」と。爾の時波斯匿王世尊に白うて曰さく、「今より以後、當に廣く沙門婆羅門四部の衆に布施すべし。諸の外道異學の乞ひ求むるものには我與ふるに堪えず」と。世尊告げて曰はく、「大王、是の念を作すこと莫かれ、然る所以は、一切衆生は皆食に由つて存することを得、食なくば便ち喪はん」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

念じて當に廣く惠施すべし　終に施しの心を斷つこと莫かれ　必ず當に賢聖に値ひ　此の生死の源を度すべし

と、爾の時波斯匿王、世尊に白して曰さく、「我今倍す復歡慶び、如來に向ふ、然る所以は、『一切衆生皆食に由つて存することを得、食なくば存せざらん」と』。爾の時波斯匿王曰さく、「今より以後、當に廣く惠施して悋惜む所なかるべし」と。是の時世尊、王の與に微妙の法を說きたまふ。時に王は即ち座より起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去る。爾の時王波斯匿、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

[一九] 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時尊者阿難、閑靜處に在つて便ち此の念を生ず、「世間には此の香亦[二〇]逆風香、亦[二一]順風香、亦[二二]逆順風香有りや」と。爾の時尊者阿難、便ち座より起ち、世尊の所に往詣し、頭面に足を禮し、一面に在つて坐す。爾の時尊者阿難、世尊に白して曰さく、「我閑靜の處に於て便ち此の念を生ず、『世間に此の香、亦逆風香、亦順風香、亦逆順風香有りや』と」。爾の時世尊、阿難に告げて曰はく、「此の妙香、亦逆風香、亦順風香、亦逆順風香有り」と。是の時阿難、世尊に白して曰さく、「此れは是れ何なる香か、亦逆風香、亦順風香、亦逆順風香なるや」と、世尊告げて曰はく、「此の香有り、然も此の香氣の力、亦逆風香、

【一九】A. III. 79 Gandha 雜阿含經卷三十八の第十一經。
【二〇】逆風香 (Paṭivātagandha)。
【二一】順風香 (Anuvātagandha)。
【二二】逆順風香 (Anuvātapaṭivātagandha)。

きしに、更に新しきを造らざりき」と。王波斯匿曰さく、「彼の長者に遺餘の福有りや」と。世尊告げて曰はく、「無きなり、大王、乃ち毫釐の餘も存在する者有ること無く、彼の田家の公の但收めて種えず、後に便ち窮困して漸く以て命終するが如し。然る所以は、但故業を食して、更に新を造らざればなり。此の長者も亦復是の如し、但故福を食して、更に新福を造らず、此の長者は今夜當に涕哭地獄の中に在るべし」と。爾の時波斯匿王便ち恐怖を懷き、涙を收めて曰さく、「此の長者は昔日何の功德福業を作りて、生れて富家に在りしや、復何の不善根の本を作して、此の極富の貨を食することを得ず、五樂の中に樂しまざりしや」と。爾の時世尊、波斯匿王に告げて曰はく、「過去久遠、迦葉佛の時、此の長者は此の舍衞城中に在つて田家の子たりき。爾の時佛、世を去り給ひて後、辟支佛有りて世に出で、此の長者の家に往詣す。爾の時此の長者辟支佛の門外に在るを見、見已つて便ち是の念を生ず『此の如き尊者の世に出づること甚だ難し、我今飮食を以て往いて之の人に施すべし』と。爾の時長者便ち、彼の辟支佛に食を施しぬ、辟支佛食を得已つて、便ち虛空を飛在して去れり。時に彼の長者、辟支佛の神足を作すを見、是の誓願を作さく、『此の善本の願を持して、世々所生の處に三惡趣に墮せず、常に財寶多からしめん』と。後に悔ゆる心有つて『我向きに所有の食は奴僕に與ふべく、此の禿頭の道人に與へて食せしめず』と、爾の時の田家の長者は豈異人ならんや。是の觀を作すこと莫かれ、然る所以は爾の時の田家の長者は今此の婆提長者是れなり。是の時施し已つて此の誓願を發し、此の功德を持して所生の處に惡趣に墮せず、恒に多財饒寶・富貴の家に生れて渴乏する所なく、既に復施し已つて、後悔ひの心を生じ『我寧ろ奴僕に與へて食せしめ、此の禿頭の道人に與へて食せしめず』と、此の因緣本末を以て、此の極有の貨を食することを得ず、亦復五樂の中に樂しまず、自ら供養せず、復父母・兄弟・妻子・僕從・朋友・知識に與へず、沙門婆羅門諸の尊長者に施さず、但故業を食して、新なるものを造らざりき、是の故に大王、若し有智の士

族姓子の出家學道せし所以の鬚髮を剃除し、無上の梵行を修め、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じて更に復有を受けず、實の如く之を知り、尊者二十億耳は便ち阿羅漢を成じぬ。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我聲聞中、第一の弟子にして精勤苦行するものは、所謂二十億耳比丘、是れなり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

〔一七〕聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時舍衞城中の〔一八〕婆提長者病に遇ひて命終しぬ。然るに彼の長者に子息有ることなく、所有の財寶盡く沒して官に入りぬ。爾の時王波斯匿、塵土に身を坌して世尊の所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時世尊、王に問うて曰はく、「大王、何故に塵土にを坌して我所に來至するや」と。波斯匿王世尊に白して曰さく、「此の舍衞城內に長者有り、婆提と名く、今日命終し、彼に子息なかりしかば、躬往いて財寶を收攝し、理をして官に入らしめぬ、純金八萬斤、況んや復餘の雜物をや、然るに彼の長者存在の日に、食する所の此の如きの食は極めて弊惡のために、精細なるを食せず、著る所の衣服は垢坌不淨にして、乘る所の車騎極めて瘦弱たり」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、大王、王の來り言ふが如く、夫れ慳貪の人は此の財貨を得るも、食り噉ふ能はず、父母・妻子・僕從・奴婢に與へず、亦復朋友・知識に與へず、亦復沙門婆羅門諸の尊長者に與へず。若し智有るの士にして此の財貨を得ば、便ち能く惠施して廣く濟ふて、一切愛惜する所なく、沙門婆羅門諸の高德の者に供給す」と。時に王波斯匿說いて曰さく、「此の婆提長者は命終つて何處に生るゝと為すや」。世尊告げて曰はく、「此の婆提長者は命終つて涕哭大地獄の中に生る、然る所以は、此れ善根を斷つの人は身壞命終せば涕哭地獄の中に生るればなり」と。波斯匿王曰さく、「婆提長者は善根を斷ちしや」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、大王、王の所說の如し、彼の長者は善根を斷ち、然も彼の長者は故福已に盡

【一七】(S. 3. 2. 10 Aputtaka)。
【一八】婆提長者は、巴利文にはだゞ(Seṭṭhi-gahapati 長者の家主となれり)。

を第一と爲したまへり。然るに我今日漏より心解脱するを得ず、又我家業多財饒寶なり、宜しく服を捨て丶還えり、白衣と作り、財物を持して廣く惠施すべし。然して今沙門と作るも甚だ難くして易からず」と。

爾の時世尊、遙に二十億耳の心の所念を知り、便ち虛空に騰遊して、彼の經行處に至り、座具を敷いて坐したまふ。是の時尊者二十億耳、前みて佛所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時世尊、二十億耳に問うて曰はく、「汝向きに何故に是の念を作せしや、『釋迦文佛は精進苦行の弟子中、我を第一と爲したまへり。然るに我今日漏より心解脱するを得ず、又我家業饒財多寶なり、宜しく服を捨て、還つて白衣と作り、財物を持して廣く施すべし。然して今沙門と作るも甚だ難くして易からず』と」。二十億耳對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊告げて曰まく、「我今還えつて汝に問はん、隨つて汝我に報へよ、云何が二十億耳、汝本家に在りし時、善く琴を彈きしや」、二十億耳對へて曰さく、「是の如し、世尊、我本家に在りし時、善く能く琴を彈けり」。世尊告げて曰はく、「云何が二十億耳、若し絃を彈くに極めて急なれば、響彌等ならず。爾の時琴の音は聽き採るべきや不や」と。二十億耳對へて曰さく、「不なり、世尊」と。世尊告げて曰はく、「云何が二十億耳、若し琴の絃復緩なれば、爾の時琴の音は聽き採るべきや不や」と。二十億耳對へて曰さく、「是の如し、世尊、若し琴の絃緩ならず、急ならざれば、爾の時琴の音は便ち聽き採るべし」と。世尊告げて曰はく、「此れも亦是の如し、極めて精進なるものは、猶し調戲の如し、若し懈怠するものは此れ邪見に墮し、若し能く中に在る者は、此れ即ち上行なり。是の如きは久しからずして、當に無漏人を成ずべし」と。爾の時世尊、二十億耳比丘の與に微妙の法を說き已つて、雷音池の側に還えりたまひぬ。

爾の時尊者二十億耳、世尊の教勅を思惟して捨てず、須臾にして閑靜處に在つて其の法を修行し、

『比丘當に知るべし、當に自ら熾然して邪法を起すこと無かれ、亦當に賢聖默然たるべし』と、我此の義を觀じ已るが故に默然たるのみ」と。是の時釋提桓因、遙に世尊に向つて叉手し、便ち此の偈を說く、

十力尊に歸命しまつる　圓光にして塵翳なし　普く一切の人のためにす　此は甚だ奇特なり

と、尊者婆拘盧報へて曰く、「何故に帝釋にして是の說をなすや『此は甚だ奇特なり』と」。釋提桓因、報へて曰く、「自ら念ふに、我昔世尊の所に至り、到り已つて世尊の足を禮し、此の義を問ふ、『天人の類に何の想念有るや』と。爾の時世尊、我に告げて曰はく『此の世界は若干種、各〻殊異りて根原同じからず』と。我此の語を聞き已つて尋いで對へて曰さく『是の如し、世尊、說きたまふ所の世尊は若干種、各〻同じからず、設し彼の衆生の與に法を說きたまはゞ、咸共に受持して、果を成ずる者有らん』と。我此れを以ての故に『此は甚だ奇特なり』と說くなり、然るに尊者婆拘盧の說く所も亦復是の如し、世界は若干種各〻同じからず」と。是の時釋提桓因便ち是の念を作さく、「此の尊は人の與に法を說くに堪任せり、能はずと爲すに非ざるなり」と。是の時釋提桓因、卽ち座より起ちて去る。爾の時釋提桓因、尊者婆拘盧の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

〔一三〕聞くこと是の如し、一時佛、〔一四〕占波國雷聲池の側に在しき。是の時尊者〔一五〕二十億耳、一靜處に在りて自ら法本を修めて〔一六〕頭陀十二法行を捨てず、晝夜經行して三十七道品の敎を離れず。若しは坐し、若しは行じて常に正法を修め、初夜・中夜・竟夜に、恒に自ら剋勵して斯須も捨てず。然るに復欲漏法に於て心解脫を得ること能はざりき。是の時尊者二十億耳、經行する所處にて脚壞れ、血流れて路の側に盈ち滿ちて猶し屠牛處に烏鵲の血を食するが如し。然るに復欲漏に於て心解脫を得ること能はざりき。是の時尊者二十億耳、便ち是の念を作さく、「釋迦文佛は苦行精進の弟子中、我

【一三】A. IV. 55, Soṇa

【一四】占波國(Campā)。は、古代印度十六國の一なる鴦伽國(Aṅgā)の首都。巴利文にありては、王舍城耆闍崛山(Rājagaha Gijjhakūṭa pabbata)の說法となれり。

【一五】二十億耳(Soṇa)。

【一六】頭陀十二法行は、頭陀行の註を見よ。

二

聞くこと是の如し、一時佛、羅閱城耆闍崛山中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時尊者[一]婆拘盧、一山曲に在りて、故き衣を補納す。是の時釋提桓因、遙に尊者婆拘盧の一山曲に在りて、故き衣を補納するを見、見已つて便ち是の念を作さく、「此の尊者婆拘盧は已に阿羅漢を成じ、諸縛已に解け、長壽無量にして、恒に自ら降伏し、非常・苦・空・非身を思惟して、世事に著せず、亦復他人の與に法を說かず、寂默として自ら修めて外道異學の如し。不審なり、此の學は能く他の與に法を說くに堪任せずと爲すや、我今當に與に之を試むべし」と。爾の時天帝釋、便ち三十三天より沒し、現ぜずして耆闍崛山に來至し、尊者婆拘盧の前に在つて住し、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時釋提桓因便ち此の偈を說く、

智者の歡び說く所　何故に法を說かざるや　結を壞して聖行を成じ　何ぞ爲に寂然として住するや。

と、爾の時尊者婆拘盧復此の偈を以て、釋提桓因に報へて白す。

佛・舍利弗　阿難・均頭・槃　亦及び諸の尊長有りて　善く能く妙法を說けばなり

と。

爾の時釋提桓因、尊者婆拘盧に白して曰く、「衆生の根に若干種有り、然して尊、當に知るべし、世尊も亦衆生の種類を說きたまふこと、地土より多し。何故に尊者婆拘盧は、他人の與に法を說かざるや」と、婆拘盧報へて曰く、「衆生の類覺知すべきこと難し、世界若干國土同じからず、皆[二]我所・非我所に著す、我今此の義を觀察し已る。故に人の與に法を說かず」と。釋提桓因曰く、「願はくは尊、我與に我所・非我所の義を說けよ」と。尊者婆拘盧曰く、「我人の壽命、若しは男、若しは女、士夫の類、盡く此の命に依つて存在することを得、然して復拘翼、世尊も亦說きたまへり、

[一] 婆拘盧(Bakkula)。は、憍賞彌の長者の子、佛弟子中無病第一と稱せらる、又薄拘羅に作る生涯他の爲に說法せざりき。

[二] 我所非我所とは、我所有、我所有に非ず。

是の念を作さく。今如來は城に入りたまふ、必ずや飲食を須ひたまはん』と、卽ち家に入つて食を出し、如來に施し與へて、此の願ひを興發す、『此の功德を持して三惡趣の中に墮つること莫かれ、我をして當來の世に、當に此の如き聖尊に値はしめよ。亦彼の聖尊、我爲に法を說きたまふ時、解脫を得せしむべし』と。世尊、幷せて波斯匿王咸共に之を知る。爾の時に當つて純黑使人とは豈異人ならんや、是の觀を作すこと莫かれ、然る所以は、爾の時の純黑使人とは卽ち我身是れなり。我爾の時に於て、式詰如來に飯して此の誓願を作しぬ。『將來の世に此の如き聖尊に値ひまつり、我與に法を說きたまふ時、解脫を得しめよと。我三十一劫に於て三惡趣の中に墮せず、天人の中に生れて最後の今日、此の身分を受け、聖尊に遭値て出家學道することを得、諸の有漏を盡して阿羅漢を成ぜり』と、世尊の說きたまふ所の如きは極めて微妙なり。波斯匿王に語げて、『身口意に作す所の衆行盡きて解脫を求め、生死に在つて此の福業を貪すること莫かれ』と、我若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆斯にして歡喜の心意もて如來に向ふものを見ば、我便ち此の念を生ぜん。『此の諸の賢士、意を用ふるも、猶如來を愛敬し供奉せず』と。設し我四部の衆を見れば、卽ち往いて告げて曰はん『汝等諸賢、何物を須ふと爲すや、衣鉢なるや、尼師檀なるや、針筒なるや、澡罐なるや、及び餘の沙門の什物なるや、我盡く當に供給すべし』。と我已に之を許す。便ち處々に在りて乞求し、若し我得ば是れ其の大幸なり。若し得ざらしめば便ち鬱單越・瞿耶尼・弗于逮に往至して、求索し求與せん。然る所以は、皆此の四部の衆涅槃道を得しに由るなり」と。

爾の時世尊、迦旃延比丘尼の心を觀察して、諸比丘に告げたまはく、「汝等頗ふらくは此の如きの信心の比に解脫すること、迦旃延比丘の如きを見るや」と。諸比丘對へて曰さく、「見ず、世尊」と。世尊告げて曰はく、「我聲聞中、第一の比丘尼にして信解脫を得しものは、所謂迦旃延比丘尼是れなり」と。爾の時迦旃延比丘尼、及び波斯匿王、四部の衆、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

中に於て形像舍利を供養し、香を燒き、燈を然し、繒・幡・蓋を懸けて渴乏する所なかりき。我爾の時に於て此の功德を以て、求めて生死に在つて、此の福祐を獲、解脫を求めざりき。大王當に知るべし、『爾の時所有の福德、今遺餘有りや』と。是の觀を作すこと莫かれ、我今日の如くに、彼の福祐を觀ずるに、毫氂毛髮許りの如き有ること無し。然る所以は、生死長遠にして、稱記すべからず。中に於て悉く食し、福盡きて毫氂許りも有ること無し。是の故に大王、是の說言を作すこと莫かれ、我作す所の福祐、今日已に辨ぜり。大王當に是の說を作すべし、『我今身口意に作す所の衆行盡きて解脫を求め、生死に在つて福業を求めず、便ち長夜に於て安穩無量なり』と。

爾の時王波斯匿、便ち恐懼を懷き、衣毛皆竪ち悲泣交々集り、手を以て淚を拭ひ、頭面に世尊の足を禮し、自ら過ちの狀を陳べて、『愚の如く、騃の如くして、覺知する所無し、唯願はくは世尊、我悔過を受けたまへ、今五體を地に投げて已往の失を改め、更に此の言教を造らじ、唯願はくは世尊、我悔過を受けたまへ』と。是の如きこと再三なり。世尊告げて曰はく、『善い哉、善い哉、大王、今如來の前に於て、其の非法を悔ゆ、往を改めて來を修む。我今要らず汝の悔過を受けん、更に復造ること莫かれ』と。爾の時大衆の中に於て一比丘尼有り、迦旃延と名く、即ち座より起ち、頭面に足を禮し、世尊に白して曰さく、『今世尊の說きたまふ所、甚だ微妙なり、又世尊、波斯匿王に告げて是の語を作したまはく『大王當に知るべし、身口意に作す所の衆行盡きて解脫を求め、生死に在つて其の福業を食むことを求むること莫くば、更に長夜に於て安穩を獲ること量りなし。然る所以は、我自ら三十一劫を憶ふに、式詰如來・至眞・等正覺世に出現したまひしこと有り、明行成・善逝と爲し、世間解・無上士・道法御・天人師・佛・衆祐と號し、野馬世界に遊在したまへり。』爾の時彼の佛、時到つて衣を著け、鉢を持し、野馬城に入つて乞食したまふ。是の時城內に一の使人有り、名けて純黑と曰ふ。時に彼の使人、如來の鉢を持して城に入り、乞食したまふを見、見已つて便ち

勝ふる能はず。卽ち座より起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去り、還つて宮中に至り、到り已つて諸の群臣に告ぐ、『我今意に其の形壽を盡して、燈光如來・至眞・等正覺及び比丘衆に、衣被・飮食・床臥の具・病瘦の醫藥を供養せんと欲す。汝等も亦勸發して吾供辦を佐くべし』と。諸臣對へて曰さく、『大王の敎への如し』と。城を去ること遠からざる一由旬の內に、堂舍を造立し、文を彫り、鏤を刻し、五色の玄黃繒・幡・蓋を懸け、倡伎樂を作し、香汁を地に灑ぎ、浴池を修治し、燈明及び甘饌・飮食を辨具し、座具を施設し、便ち白さく、『時到れり、今正に是れ時なり、願はくは世尊、屈顧したまへ』と。

時に燈光如來以て時至れるを知り、衣を著け、鉢を持し、比丘衆を將ひて前後に圍遶せられ、便ち講堂の所に往至し、各〻座に就いて坐す。時に地主大王、佛と比丘僧との坐し訖るを見、宮人婇女及び諸大臣を將ひて、手自ら斟酌し、種々の飮食味各〻百種を行きぬ。大王當に知るべし、爾の時地主國王七萬歲中、燈光如來及び八十億衆の諸の阿羅漢に供養し、未だ曾て懈廢せざりき。時に彼の如來、敎化周く訖りて、便ち無餘涅槃界に於て般涅槃したまひぬ。時に地主大王若干百種の香花を以て供養し、四衢道路に於て四の廟寺を起て、各〻七寶・金・銀・琉璃・水精を用つて繒・幡・蓋を懸け、及び八十億の衆各〻以て漸く無餘涅槃界に於て般涅槃しぬ。爾の時大王八十億の衆を取つて、其の舍利を收め、各〻神寺を興起し、皆繒・幡・蓋を懸け、香華を供養せり。大王當に知るべし。爾の時地主大王は復燈光如來の寺及び八十億の羅漢の寺を供養せり。復七萬歲を經、時に隨つて供養し、燈を然し、華を散じ、繒・幡・蓋を懸けたり。大王當に知るべし。燈光如來の遺法滅盡し、然る後彼の王、方に滅度を取りぬ。爾の時の地主大王とは豈是れ異人ならんや。是の觀を作すこと莫かれ、然る所以は、爾の時の地主大王とは卽ち我身是れなり。我爾の時に於て七萬歲中、衣被・飮食・床臥の具・病瘦の醫藥を以て彼の佛に供養し、減少せざら令めぬ。般涅槃し給ふて後も復、七萬歲

りて坐す。爾の時燈光如來、漸く彼の王及び四十億の衆の與に、面りに妙論を說きたまへり。所謂論とは、施論・戒論・生天の論なり、欲は穢汚たり、漏不淨行なり、出家は要たり、淸淨の報ひを獲と。爾の時如來、衆生の意心性柔和なるを觀じ、諸佛如來の常に說きたまふ所の法、苦・集・盡・道、盡く彼の四十億の衆の與に、廣く其の義を說きたまひ、卽ち座上に於て諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。時に四十億の衆、燈光如來に白して曰さく『我等意に鬚髮を剃除して、出家學道せんことを願ふ』と。大王當に知るべし、爾の時四十億の衆、盡く出家學道することを得たり。卽ち其の日を以て阿羅漢道を成じぬ。時に地主國王卽ち座より起ち、頭面に足を禮し、便ち退き去れり。

時に燈光如來、八十億の衆を將ひ、皆是れ阿羅漢なり。彼の國界に遊びたまひ、國土人民四事供養しぬ。衣被・飮食・床臥の具・病瘦の醫藥、事に供給して乏短する所なし。是の時地主國王、復餘の時、諸の群臣を將ひて彼の如來の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時燈光如來彼の國王の與に微妙を說きたまふ。地主大王如來に白して曰さく『唯願はくは世尊、我形壽を盡して我供養を受けたまへ、及び比丘僧に供養すべし。衣被・飮食・床臥の具・病瘦の醫藥悉く供養すべし』と。爾の時燈光如來默然として彼の王の請ひを受けたまふ。時に王、佛の默然として請ひを受けたまふを見、重ねて世尊に白さく『我今世尊に從つて願ひを求む、願くは唯聽許せられよ』と。世尊告げて曰はく『如來の法は以て此の願ひに過ぐ』と。王世尊に白さく『我今願ひを求むとは極めて淨妙たり』と、世尊告げて曰はく『求むる所の願ひは云何が淨妙なるや』と。王世尊に白さく、『我意中の如きは、今日衆僧一器に在りて食し、明日復餘の器を用ひて食し、今日衆僧一種の服を著け、明日復更に服を易へ、今日衆僧一種の座に坐して、明日復更に餘の座に坐し、今日人をして衆僧の與に使はしめ、明日復更に使人を易へん、我求むる所の願ひとは、正しく此れを謂ふのみ』と。燈光如來告げて曰はく『汝の願ふ所に隨はん、今正に是れ時なり』と。地主大王歡喜踊躍して自ら

り、出家を要となし、清淨の報ひを獲と。爾の時如來、衆生の意、心性柔和なるを觀じ、諸佛如來の常に說く所の法、苦・集・盡・道、盡く彼の四十億衆の與に、廣く其の義を說きたまひ、卽ち座上に於て、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。時に四十億の衆、燈光如來に白して曰さく、『我等の心鬚髮を剃除して出家學道せんことを願ふ』と、大王當に知るべし。爾の時四十億の衆盡く出家學道することを得、卽ち其の日を以て阿羅漢を成ぜり。

爾の時燈光如來四十億の衆を將ひ、皆是れ著なし、彼の國界に遊びたまふ。國土人民四事供養し、衣被・飮食・床臥の具・病瘦の醫藥渴乏する所なし。是の時地主大王、子の燈光、無上正眞等正覺を成し、四十億の衆を將ひ、皆是れ著なし、彼の國界に遊ぶを聞き、「我今當に信を遣し、往いて如來此に在つて遊化したまふべし。若し來ら使めば、我本願を充し、若し來らずば、我躬自ら當に往いて、拜跪して問訊すべし」と。卽ち一臣に勅して、『汝彼に往至して如來を問訊し、我名字を持して、頭面に足を禮し、興居輕利に遊步康强なるや。王地主、如來を問訊して、興居輕利に遊步康强なるや。唯願はくは世尊、此土を臨顧したまへ』と。爾の時彼の人、王の教勅を受けて、便ち彼の國界に往至し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて立ち、便ち是の說を作す、『大王地主、如來の足を禮し、問訊し、禮し竟つて、興居輕利に、遊步康强なるや、唯願はくは世尊、彼の國を臨顧したまへ』と。爾の時世尊默然として彼の請ひを受けたまへり。

時に燈光如來、諸の大衆を將ひ、以て漸く人間に遊行し、大比丘四十億の衆と俱なり。在々處々に恭敬せざるものなく、衣被・飮食・床臥の具・病瘦の醫藥皆悉く貢獻す。漸く地主國界に至りたまふ。時に地主大王、『燈光如來、此の國界に在り、北婆羅園中に在りと聞く。大比丘衆四十億人を將ひたまふ。我今躬自ら往いて迎ふべし』と。時に地主大王復四十億衆を將ひ、燈光如來の所に往詣し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。及び四十億の衆の足を禮し已つて一面に在

に勅し、更に座具を施設して快樂み比ひなし。夫人懷姙して日數遂に滿ちて一男子を生む。生むの時に當り、閻浮里晃然として金色を見、顏貌端正にして三十二相身體金色なり。善明大王此の太子を見、歡喜踊躍して慶賀ぶこと量り無し。便ち諸師婆羅門の道士を召して、躬ら太子を抱き、彼をして相を瞻せ使む『我今以て此の子を生む。卿等吾與に相を瞻て、便ち名字を立てよ』と。時に諸の相師、王の教令を受け、各ゝ共に抱いて瞻、形貌を觀察し、咸共に王に白さく『聖王、太子は端正にして雙びなく、諸根缺けずして三十二相有り、今此の王子は當に兩趣有るべし。若し在家すべくんば、便ち轉輪聖王となり、七寶具足せん。所謂七寶とは輪寶・象寶・馬寶・珠寶・玉女寶・居士寶・典兵寶・是れを七と爲す。當に千子有るべし。勇悍にして剛強、能く衆敵を却け、此の四海の内に於て刀杖を加へずして自然に靡伏せん。若し此の王子にして出家學道せば、無上の正覺を成じ、德遠と名け、布く世界に彌滿せん。此の王子を生む此の日に當つて、光明遠く照らせば、今王子に字し、名けて燈光と曰はん』と。時に諸の相師以て名字を立て、各ゝ座を退き去れり。

時に王竟日此の太子を抱き、未だ嘗て目を離さず。時に王此の王子の爲に、三講堂を立て、秋冬夏の節に所宜に隨適し、宮人婇女宮裏に充滿し、吾太子をして、此に於て遊戲せしむ。時に王の太子年二十九、信堅固を以て出家學道し、卽日出家し、卽夜に成佛せり。爾の時閻浮里地悉く共に聞知す『彼の王の太子、出家學道して卽日成佛せり』と。父王は清旦、王の太子の出家學道して、卽夜に成佛せりと聞き、時に父王は便ち是の念を作さく『昨夜吾聞く、諸天空に在りて皆共に善しと稱す、此れ必ず善にして惡嚮有るに非らざらん。我今往いて共に相見るべし』と。時に王四十億の衆を將ひ男女に圍遶せられて、便ち燈光如來の所に詣り、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。及び四十億の衆各ゝ共に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時如來、父王及び四十億衆の與に、漸く妙論を說きたまふ。所謂論とは施論・戒論・生天の論なり。欲を穢汚と爲し、漏不淨行な

爾の時世尊、以て時の到れるを見、衣を著け、鉢を持し、諸の比丘僧を將ひ、前後に圍遶せられて舍衞城に入り、彼の講堂の所に至り、到り已つて、座に就て坐したまふ。及び比丘僧各々次いで隨つて坐す。是の時王波斯匿、諸の宮人を將ひて、手自ら食を行き、所須を供給し、乃至三月短乏する所なく、衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を給與し、世尊の食し訖るを見、種々の華を持して、世尊、及び比丘僧の上に散じ、更に小座を取りて如來の前に於て坐し、世尊に白して曰さく、「我曾て佛より因緣本末を聞けり、『畜生に食を施す者は、福を獲ること百倍、犯戒の人に食を與ふる者は、福を獲ること千倍、持戒の人に食を施す者は、福を獲ること萬倍、欲を斷ぜし仙人に食を施す者は福を獲ること億倍、[二]須陀洹に向へるものに食を與ふる者は福を獲ること計るべからず、況んや復[三]須陀洹を成ずるをや、況んや[四]斯陀含に向ふて、[五]斯陀含道を得、況んや[六]阿那含に向ふて[七]阿那含道を得、況んや[八]阿羅漢に向ふて[九]阿羅漢道を得、況んや[一〇]辟支佛に向ふて、辟支佛を得、況んや如來・至眞・等正覺に向ひ、況んや佛を成ずるをや、及び比丘僧、其の福の功德稱計すべからず』と。我今作す所の功德、今日已に辦ぜり」と。世尊告げて曰はく、「大王、是の語を作すこと勿れ、福を作して厭くこと無かれ、今日何故に所作已に辦ぜりと說くや。然る所以は、生死長遠にして稱計すべからず。過去久遠に王有り、名けて地主と曰ひ、此の閻浮里地を統領す。彼の王に臣有り、名けて善明と曰ひ、少小も王と與に周旋して畏難する所無し。是の時彼の王、閻浮里地を分ちて、半ば彼の臣に與へて治め使む。是の時善明小王自ら城郭を造る。東西十二由旬、廣さ七由旬なり。土地豐熟して人民衆多し。爾の時彼の城を名けて遠照と曰ひ、善明王主の第一夫人を日月光と名け、長からず、短かゝらず、肥えず、瘦せず、白からず、黑からず、顏貌端正にして世の希有なり。口優鉢華香を出し、身栴檀香を作す。未だ幾日を經ずして、身便ち懷妊す。彼の夫人卽ち往いて王に白さく。『我今娠むこと有り』と。王此の語を聞き、歡喜踊躍して、自ら勝ふる能はず。便ち左右

【二】須陀洹向（Sotapattimagga）。前出。
【三】須陀洹果(Sotapattiphala)。四沙門果の一、前出。
【四】斯陀含向(Sakadāgāmimagga)。
【五】斯陀含果(Sakadāgāmiphala)。
【六】阿那含向(Anāgāmimagga)。
【七】阿那含果(Anāgāmiphala)。
【八】阿羅漢向(Arahattamagga)。
【九】阿羅漢果（Arahattaphala)。
【一〇】辟支佛(Pa ceka buddha)。

巻の第十三

地主品第二十三

一

聞くこと是の如し。一時佛、舎衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時王【一】波斯匿、諸の群臣に告げて曰く、「汝等羽寶の車を催厳せよ、吾世尊の所に往詣して禮拜問訊せんと欲す」と。是の時左右、王の教令を受け、尋で羽寶の車を嚴駕し、即ち王に白して曰く、「嚴駕已に辨ぜり、今正に是れ時なり」と。爾の時王波斯匿、即ち寶羽の車に乗り、歩騎數千、前後に圍遶して舎衛國を出で、祇洹精舎に至り、世尊の所に往詣して、諸王の法の如く、五飾を除去す。所謂蓋・天冠・劍・履屣及び金拂を一面に捨著し、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時世尊與に深法を説き、歡樂して喜ば令めたまふ。是の時王波斯匿、説法を聞き已り、世尊に白して曰さく、「唯願はくは世尊、我三月の請を受けたまへ、及び比丘僧と餘處に在ること莫かれ」と。是の時世尊默然として波斯匿の請を受けたまふ。時に王波斯匿は、世尊の默然として請を受けたまふを見、即ち座より起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去り。還えつて舎衛城に至り、諸の群臣に勅して曰く、「吾佛及び比丘僧に飯し、三月供養し、所須の物、衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を給せんと欲す。汝等も亦當に歡喜の心を發すべし」と。諸臣對へて曰く、「是の如し」と。時に王波斯匿、即ち宮門の外に於て大講堂を作り、極めて殊妙たり、繒・幡・蓋を懸けて倡妓樂を作し、稱計すべからず。諸の浴池を施し、諸の油燈を辨じ、種々の飯食を辨じ、味百種有り。是の時王波斯匿、即ち白さく、「時の到れり、唯願はくは世尊、此の處に臨顧したまへ」と。

【一】波斯匿(Pasenadi)。前出。

云何が三と爲すや。晨朝に嫉妬の心を以て自ら纏縛し、若し日中に至れば復睡眠結を以て自ら纏絡し、暮に向へば貪欲心を以て自ら纏縛す。此の因緣を以て彼の女人は身壞命終して三惡趣に生ぜん。是の故に諸比丘、當に念じて此の三法を離るべし」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

嫉妬と睡眠と調と　貪欲とは是れ惡法なり　人を牽ふて地獄に至り　至竟解脫すること無し
是れを以て當に　嫉妬と睡調とを捨離すべし　亦當に欲を捨つべし　彼の惡行を造ること莫かれ

と。「是の故に諸比丘、當に念じて嫉妬を去離すべし、慳悋の心なく、常に惠施を行じて、睡眠に著せず、當に不染を行じて、貪欲に著せざるべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

四九 聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の三法有り、之を習ひ、之を翫ふて厭足を知らず、亦復休息處に至ること能はず。云何が三と爲すや。所謂貪欲なり。若し人有つて此の法を習はゞ、初めて厭足なし。若し復人有つて飲酒を習はゞ厭足無く、若し復人有つて睡眠を修習せば初めて厭足無し、是れを比丘、若し人有つて此の三法を習ふ者は、初めて厭足なく亦復滅盡の處に至ること能はずと謂ふなり。是の故に諸比丘、常に當に此の三法を捨離して、之に親近すべからざるべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

供養と三善根と　三痛と三覆露　相と法と三不覺　愛敬と春と無足となり。

增壹阿含經卷第十二

【四九】 A. III. 104 參照。

を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

[四四]聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「三法有り、甚だ敬愛すべく、世の人の貪る所なり。云何が三と爲すや。所謂[四五]少壯は甚だ愛敬すべく、世の人の貪る所なり。[四六]無病は甚だ愛敬すべく、世の人の貪る所なり。[四七]壽命は甚だ愛敬すべく、世の人の貪る所なり。是れを比丘、此の三法有りて、甚だ愛敬すべく、世の人の貪る所と謂ふなり。

復次に比丘、此の三法有りて甚だ愛敬すべく、世の人の貪る所なりと雖も、然かも更に三法有りて愛敬すべからず、世の人の貪らざる所なり。云何が三と爲すや、少壯有りと雖も、然も必ず當に老ゆべくんば、愛敬すべからず、世の人の貪らざる所なり。比丘當に知るべし。無病有りと雖も、然も必ず當に病むべくんば、愛敬すべからず、世の人の貪らざる所なり。比丘當に知るべし、壽命有りと雖も、然も必ず當に死すべくんば愛敬すべからず、世の人の貪らざる所なり。是の故に諸比丘、設ひ少壯有るとも、當に不老を求めて、涅槃界に至るべし。無病有りと雖も、當に方便を求めて、病有らざらしむべし。壽命有りと雖も、當に方便を求めて、命終らざらしむべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

[四八]聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「猶し春時に天大雹を雨らすが如く、設し如來世に出でずば、衆生の地獄に入ること亦復是の如し。是の時女人の地獄に入ること、男子より多からん。然る所以は、比丘當に知るべし、三事を以ての故に、衆生の類身壞命終して三惡趣に入る。云何が三と爲すや。所謂貪欲・睡眠・調戲なり。此の三事有つて心意に纏著せば、身壞命終して三惡趣に入らん。女人は竟日三法を習翫して自ら娛樂む、

【四四】A. III. 39 Mada。
【四五】少壯(Yobbanamada 青春の憍)。
【四六】無病(Ārogyamada 健康の憍)。
【四七】壽命(Jīvitamada 壽命の憍)。
【四八】A. III. 127 參照。

是の如く智者は思惟すべきは便ち之を思惟す。云何が智者は之を論說すべきは便ち之を論說するや。是に於て智者は口の四行を成就す、云何が四と爲すや。是に於て智者は妄語を行ぜず、亦人に妄語を教へず、人の妄語を見れば、意に喜樂せず。是れを智者は其の口を護ると謂ふなり。復次に智者は綺語・惡口、彼と此と鬪亂することを行ぜず。亦人を教へて綺語・惡口・鬪亂を行ぜしめず。是の如く智者は口の四行を成就す。云何が智者は身の三行を成就するや。是に於て智者は身行を思惟して觸犯す所なし。然して復智者は自ら殺生せず、亦人に殺生を教へず。人の殺すを見て心喜樂せず。自ら偸竊せず、人に盜みを教へず、人の盜みを見て心喜樂せず。亦淫泆ならず、他の女人の色を見るも、心想ひを起さず、亦人に教へて淫泆を行はしめず。設し老母を見れば之を視ること己の親の如く、中なるものは姉の如く、小なるものは妹の如くして、意に高下なし。是の如く智者は身に三行を成就す。是れを智者の所行と謂ふなり。是の如く比丘に此の三の有爲相有り、是の故に諸比丘、愚者は當に三想を常に捨離すべし。此の三は智者の所行にして、斯れを須ひることを發さず。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の三法有りて覺知すべからず、見ず、聞かずして生死を經歷し、未だ曾て瞻視せず、我及び爾等曾て見聞かざりき。云何が三と爲すや。所謂賢聖の戒は覺知すべからず、見ず、聞かずして、生死に經歷して未だ曾て瞻視せず、我及び爾等曾て見聞かざりき。賢聖の三昧、賢聖の智慧は覺知すべからず、見ず、聞かざりき。如し今我身并及び汝等皆悉く賢聖の禁戒、賢聖の三昧、賢聖の智慧を覺知し、皆悉く成就せば復有を受けず。已に生死の根源を斷ぜばなり。是の故に諸比丘、當に念じて此の三法を修行すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說

住らず、常なく、諸陰散壊して宗族別離し、命根斷絶す。是れを滅盡を爲すと謂ふなり。彼云何が變易するや。齒落ち、髮白く、氣力竭盡き、年遂に衰微して身體解散す。是れを變易の法と爲すと謂ふなり。是れを比丘三有爲の有爲相と爲すなり。當に知るべし、此の三有爲の相は善く之を分別せよ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

四三 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「愚人に三相三法有りて恃怙すべからず、云何が三と爲すや。是に於て愚者は思惟すべからざるに之を思惟し、論説すべからざるに之を論説し、行ずべからざるに之を修習す。云何が愚者は思惟すべからざるに之を思念するや。是に於て愚者は意三行に便ち之を思憶す。云何が三と爲すや。是に於て愚者は嫉みの心を起し、他の財物に於て、及び女色に於て心念し惡言悉く嫉みの心を興し、『彼の所有の願ひは是れを我許す』と。是の如く愚者は思惟すべからざるに之を思惟す。云何が愚者は論説すべからざるに之を論説するや。是に於て愚者は口の四過を造る、云何が四と爲すや。是に於て愚者は恒に妄言綺語・惡口を喜び、彼と此と鬪亂す。是の如く愚者は口の四過を造る。云何が愚者は惡行を造るや。是に於て愚者は身惡行を造り、常に殺生・竊盜・淫泆を念ず。是の如く愚者は惡行を造る。是の如く比丘、愚者に此の三行有り、愚癡の人は此の三事を習ふ。

復次に比丘、智者に三事有り、當に念じて修行すべし。云何が三と爲すや。是に於て智者は思惟すべきは、便ち之を思惟し、論説すべきは、便ち之を論説し、善を行ずべきは、便ち善を修行す。彼云何が智者は思惟すべき事は、便ち之を思惟するや。是に於て智者は意の三行を思惟す。云何が三と爲すや。是に於て智者は嫉妬・恚・癡せず、常に正見を行じて、他の財貨を見るも想念を生ぜず。

【四三】 A. III. 2-9.

觀じ、内外に法を觀じて自ら遊戲す。是の如く比丘、當に自ら熾然すべし、盛に其の法を修行し、無比法を得よ。諸比丘、此の法を行ずるものは、聲聞の中に於て第一の弟子たり。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[35] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、[36]「三事有りて覆へば則ち妙露も則ち妙ならず。云何が三と爲すや。一には女人覆へば妙露も則ち妙ならず、婆羅門の呪術覆へば則ち妙露も則ち妙ならず。邪見の業覆へば則ち妙露も則ち妙ならず。是れを比丘、此の三事有りて覆へば則ち妙露も則ち妙ならずと謂ふなり。復[37]三事有りて露れば則ち妙、覆へば則ち妙ならず。云何が三と爲すや。日月露れば則ち妙なるも、覆へば則ち妙ならず。如來の法語露れば妙なるも、覆へば則ち妙ならず。是れを比丘、此の三事有りて露れば則ち妙なるも、覆へば則ち妙ならずと謂ふなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を説きたまはく、

女人及び呪術　邪見は不善行なり　此れは是れ世の三法にして　覆ひ隱せば最妙なり　日月は廣く照らす所　如來の正法の語と　此れは是れ三の世法　露れば則ち第一の妙なり

是の故に諸比丘、當に如來の法を露現して、覆ひ隱くさしむること勿るべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

[38] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の[39]三有爲の有爲相あり、云何が三と爲すや。[40]從起する所を知り、當に[41]遷變すべきを知り、當に[42]滅盡すべきを知る。彼云何が從起する所を知るや、所謂生なり。長大し、五陰の形を成じ、諸の持入を得、是れを從起する所を知ると謂ふなり。彼云何が滅盡と爲すや、所謂死なり、命過ぎて

【三五】 A. III. 129

【三六】 三事(Tīṇi paṭicchannāni 三覆蔽)とは、女(Mātugāma) 婆羅門の呪術(Brāhmaṇānaṁ mantā) 邪見(Micchādiṭṭhi)の三。

【三七】 三事(Tīṇi vivaṭāni 三顯露)とは、月輪(Candamaṇḍala)。日輪(Sūriyamaṇḍala)。如來の開顯せる法と律(Tathāgatappavedita dhammavinaya) との三をいふ。

【三八】 A. III. 47

【三九】 三有爲の有爲相 (Tīṇi saṅkhatassa saṅkhatalakkhaṇāni)。

【四〇】 從起(Uppāda)。

【四一】 遷變(Ṭhitassa aññathatta)。

【四二】 滅盡(Vaya)。

恚癡せず、亦復他人を教へて此の法を習はず、自ら正見を行ひ、復他人を教へて邪見せざら使む。此の因緣を以て、此の本末を以て轉輪聖王をして、世人の供養す應き所ならしむるなり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、阿難に告げたまはく、「三善根有り、窮盡す可からずして、漸く涅槃界に至る。云何が三と爲すや。所謂如來の所に於て功德を種う。此の善根窮盡すべからず。正法に於て功德を種う、此の善根窮盡す可からず。聖衆に於て功德を種う、此の善根窮盡す可からず。是れを阿難、此の三善根は窮盡す可からず、涅槃界に至ることを得と謂ふなり。是の故に阿難、當に方便を求めて、此の窮盡す可からざるの福を獲べし。是の如く阿難、當に是の學を作すべし」と。爾の時阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の三痛あり、云何が三と爲すや。所謂樂痛・苦痛・不苦不樂痛なり。諸比丘當に知るべし。彼の樂痛とは欲愛使なり。彼の苦痛とは瞋恚使なり。不苦不樂痛とは是れ癡使なり。是の故に諸比丘、當に方便を學びて此の使を滅することを求むべし。然る所以は、當に自ら熾然すべし、當に自ら法を修行して無比法を得べし。諸比丘、當に知るべし、我滅度の後には、其れ比丘有つて、自ら熾念することを念じ、其の行法を修め、無比法を得ば、此れ則ち是れ第一の聲聞なり。云何が比丘、當に自ら熾念すべく、當に自ら修行し、法を修行することを得、無比法を獲べきや。是に於て比丘、內に自ら身を觀じ、外に自ら身を觀じ、內外に自ら身を觀じて自ら遊戲し、內に痛を觀じ、外に痛を觀じ、內外に痛を觀じ、內に意を觀じ、外に意を觀じ、內外に意を觀じ、內に法を觀じ、外に法を

三供養品第二十二

一

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「三人有り、世人の供養す應き所なり。云何が三と爲すや。如來至眞等正覺は世人の供養す應き所なり。如來の弟子、漏盡阿羅漢は世人の供養す應き所なり。轉輪聖王は世人の供養す應き所なり。何の因緣有つて如來は世人の供養す應き所なるや。夫の如來は伏せざる者を伏し、降らざる者を降し、度せざる者を度し、未だ解脫を得ざる者をして解脫を得令め、未だ般涅槃せざる者をして涅槃を成ぜ令め、救護なき者の與に救護と作り、盲ひなる者の與に眼目と作り、病める者の與に救護を作し、最尊第一にして、魔若しは魔天、天及び人民の中に於て、最尊の福田にして、敬ふべく、貴ぶべく、人の與に導きとなつて正しき路を知ら令め、未だ道を知らざる者の與に、說いて導き敎へたまふ、此の因緣を以て如來は世人の供養す應き所なり。

復何の因緣有つて、如來の弟子、漏盡阿羅漢は世人の供養す應き所なるや。比丘當に知るべし。漏盡阿羅漢は以て生死の源を度し、更に復有を受けず。以て無上の法を得、淫・怒・癡盡きて永く全きを得ず。是れ世の福田なり、此の因緣の本末を以て漏盡阿羅漢をして世人の供養す應き所ならしむ。

復何の因緣を以て轉輪聖王は世人の供養す應き所なるや。比丘當に知るべし。轉輪聖王は法を以て治化して終に殺生せず、復人を敎化して殺生せざら使め、自ら盜竊せず、亦復他人を敎へて偸盜せざら使め、自ら淫泆ならず、復他人を敎へて淫泆を行はざら使め、自ら妄語せず、亦復人を敎へて妄語せざら使め、自ら兩舌して彼と此と鬪亂せず、亦復他人を敎へて兩舌せざら使め、自ら嫉妬

著色味色、色を大患となせば、能く色を捨離することを說き、以て著痛味痛、痛を大患と爲せば、能く痛を捨離することを說く。諸の如來の行ず應きところのもの、所謂施設は我今周く訖れり。常に當に念じて樹下空閑の處に在りて、坐禪し、思惟して懈怠有ること莫かるべし。是れを我の教勅と謂ふなり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「三不牢要有り、云何が三と爲すや。身不牢要・命不牢要・財不牢要、是れを比丘、此の三不牢要有りと謂ふなり。此に於て比丘、三不牢要の中、當に方便を求めて三牢要を成ずべし。云何が三と爲すや。不牢要身に牢要を求め、不牢要命に牢要を求め、不牢要財に牢要を求むるなり。云何が不牢要身に牢要を求むるや。所謂謙敬・禮拜時に隨つて問訊す。是れを不牢要身に牢要を求むると謂ふなり。云何が不牢要命に牢要を求めるや、是に於て若し善男子・善女人有つて常に惠施を念じ、沙門婆羅門諸の貧匱者の與に、食を須ひるものには食を與へ、漿を須ひるものには漿を與へ、衣被・飲食・床敷臥の具、病瘦の醫藥、舍宅城郭、須ひる所の具悉く皆之を與ふ。是の如く財不牢要に牢要を求む。是れを比丘此の三不牢要を以て、此の三牢要を求むと謂ふなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

身の不牢要　命も亦不牢固　財貨の衰耗の法を知り　當に牢要なるものを求むべし　人身甚だ得難し　命も亦久しく停らず　財貨は磨滅の法なり　歡喜して惠施を念ぜよ

と、爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

第一德・福業　三因・三安と瞿　三夜・病と惡行　苦除と不牢要となり

知る。若し食を得て樂痛の時は、便ち我食を得て樂痛なりと知り、若し食を得て苦痛の時は、便ち我食を得て苦痛なりと知り、若し食を得て不苦不樂痛の時は、便ち我不苦不樂痛を得たりと知り、食せざる苦痛の時は、便ち自ら我食せざるの苦痛なりと知り、若し食せざるの樂痛の時は、便ち自ら我食せざるの樂痛なりと知り、若し食せざるの不苦不樂痛の時は、便ち自ら我食せざるの不苦不樂痛なりと知る。復次に比丘、若し樂痛を得ば、爾の時苦痛を得ず、亦復不苦不樂痛無し。爾の時我唯樂痛有りと。若し苦痛を得し時は、爾の時樂痛有ること無く、亦不苦不樂痛無く、唯苦痛有り。若し復比丘、不苦不樂痛を得し時は、爾の時樂痛苦痛有ること無く、唯不苦不樂痛有り。復次に痛とは無常變易の法なり。以て痛の無常變易の法なることを知る。是れを痛を大患と爲すと謂ふなり。

云何が痛を出要となすや。若し能く痛に於て痛を捨離し、諸の亂想を除く、是れを痛を捨離すと謂ふなり、諸有の沙門婆羅門にして痛に於て痛に著し、大患たることを知らず、亦捨離せず、實の如く知らざるものは、此れ沙門婆羅門に非ず、沙門に於て沙門の威儀を知らず、婆羅門に於て婆羅門の威儀を知らず、身を以て證を作して自ら遊戲すること能はざるなり。諸有の沙門婆羅門にして、痛に於て痛に著せず、深く大患たることを知り、能く捨離を知る。是れを沙門に於て沙門の威儀を知り、婆羅門に於て婆羅門の威儀を知り、身を以て證を作し、自ら遊戲すと謂ひ、是れ痛を捨離すと謂ふなり。

復次に比丘、若し沙門婆羅門有つて、苦痛・樂痛・不苦不樂痛を知らず、實の如くに知らずして、復人を教化し、行かしめること、此れ其の宜しきに非ず。若し沙門婆羅門有つて、能く痛を捨離し、實の如くに知り、復勸めて人を教へ、之を遠離せしむること、此れ正しく其の宜しきなり。是れを痛を捨離すと謂ふなり。我今比丘、以て著欲味欲、欲を大患となせば復能く捨つることを說き、亦

告げて曰はく、「是れ色を大患と爲すと謂ふなり。復次に、若し復彼の女人の身の骸骨散落して各〻一處に在り、或は脚骨を一處に、或は膊骨を一處に、或は髀骨を一處に、或は臗骨を一處に、或は脇肋を一處に、或は肩臂骨を一處に、或は頸骨を一處に、或は髑髏を一處に見る。云何が諸比丘、本妙色有りしも今此の變を致し、中に於て苦樂の想を起す。此れ豈大患に非ずや」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊告げて曰はく「是れ色を大患と爲すと謂ふなり」。復次に若し彼の女人の身骨皜白色にして或は鴿の色に似たるを見る。云何が比丘、本妙色有りしも、今此の變を致し、中に於て苦樂の想ひを起す、豈大患に非ずや」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊告げて曰はく、「是れ色を大患と爲すと謂ふなり。復次に若し彼の女人の骸骨、無數歳を經て、或は腐爛壞敗すること有つて、土と色を同じうするを見る。云何が比丘、彼本妙色有りしも、今此の變を致し、中に於て苦樂の想ひを起す、豈大患に非ずや」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊告げて曰はく、「是れ色を大患と爲すと謂ふなり。復次に此の色は無常變易にして久しく停ることを得ず、老幼有ること無し、是れ色を大患と爲すと謂ふなり。

云何が色を出要と爲すや。若し能く色を捨離して、諸の亂想を除かば、是れ色を捨離すと謂ふなり。謂く諸の沙門婆羅門は、色に於て色に著し、大患を知らず、亦捨離せず、實の如くに知らず、此れ沙門婆羅門に非ず、沙門に於て沙門の威儀を知らず、婆羅門に於て婆羅門の威儀を知らず、己の身に證を作して自ら遊戯すること能はざるなり。謂く諸有の沙門婆羅門にして、色に於て色に著せず、深く大患たることを知り、能く捨離することを知る。是れを沙門に於て沙門の威儀を知り、婆羅門に於て婆羅門の威儀を知り、己の身に證を作して自ら遊戯すと謂ふなり。是れ色を捨離すと謂ふなり。

云何が名けて痛味と爲すや。是に於て比丘、樂痛を得し時は、便ち我樂痛を得たりと知り、苦痛を得し時は便ち我苦痛を得たりと知り、若し不苦不樂痛を得し時は、便ち我不苦不樂痛を得たりと

患と爲すと謂ふなり。復次に此れ、若し彼の女人の身重き患ひを抱いて床褥に臥し、大小便を失し、起ちて止ること能はざるを見る。云何が比丘、本妙色を見るも今此の患ひを致す、「豈大患に非ずや」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊告げて曰く、「諸比丘、是れ色を大患と爲すと謂ふなり。復次に比丘、若し彼の女人、身壞命終せば、將て塚間に詣るを見る。云何か比丘、本妙色を見るも、今以て變改し、中に於て苦樂の想ひを現起する豈大患に非ずや」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊告げて曰はく、「是れ色を大患と爲すと謂ふなり、復次に若し彼の女人死して、一日、二日、三日、四日、五日乃至七日を經て、身體膖脹して爛れて臭ひ一處に散落するを見る。云何が比丘、本妙色有りしも、今此の變を致す、豈大患に非ずや」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊告げて曰はく、「是れ色を大患と爲すと謂ふなり。復次に若し彼の女人を、烏鵲鵄、鷲競ひ來つて食噉ひ、或は狐狗狼虎の爲に食噉れ、或は蜎飛蠢動、極細の蠕蟲の爲に食噉る。云何が比丘、彼本妙色有りしも今此の變を致し、中に於て苦樂の想ひを起す、豈大患に非ずや」と諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊告げて曰はく、「是れ色を大患と爲すと謂ふなり。復次に若し彼の女人の身を、蟲鳥にて其の半を食ひ、腸胃肉血汚穢不淨を見る。云何が比丘、彼本妙色有りしも、今此の變を致し、中に於て苦樂の想ひを起す。此れ大患に非ずや」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊告げて曰はく、「是れ色を大患と爲すと謂ふなり。復次に若し彼の女人の身、肉以て盡き、骸骨相連るを見る。云何が比丘、彼本妙色有りしも今此の變を致し、中に於て苦樂の想ひを起す、此れ豈大患に非ずや」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊告げて曰はく、「是れ色を大患と爲すと謂ふなり。復次に若し彼の女人の身の血肉以て盡き、唯筋有りて束薪に纏ふを見る。云何が比丘、本妙色有りしも、今此の變を致し、中に於て苦樂の想ひを起す、豈大患に非ずや」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊

闘ひ、象を見れば象と共に闘ひ、車を見れば車と共に闘ひ、歩兵を見れば歩兵と共に闘ふ。或は相斫射し、矟を以て相斫刺す、此の如きは此欲を大患と爲すなり、欲を本と爲すに縁つて此の災變を致すなり。復次に此の欲を本とすることに縁つて鎧を著け、仗を執り、或は城門に在り、或は城の上に在つて共に相斫射し、或は矟を以て刺し、或は鐵輪を以て共の頭を轢み、或は鐵を消して相灑ぐ、此の苦惱を受けて死するもの衆多し。復次に欲なるものは亦常有ることなく、皆代謝し、變易して停まらず、此の欲の變易し無常なることを解らざれば、此れを欲を大患と爲すと謂ふなり。

云何が當に欲を捨離すべきや、若し能く修行して貪欲を除くもの、是れを欲を捨つと謂ふなり。謂く諸有の沙門婆羅門は欲の大患なることを知らず、亦復欲の原を捨てることを知らず。實の如く沙門にして沙門の威儀を知らず、婆羅門にして婆羅門の威儀を知らずば、此れ沙門婆羅門に非ず、亦復身を擧げて證をなし、自ら遊戲すること能はず。謂く諸の沙門婆羅門は審に欲の大患たることを知り、能く欲を捨離して、實の如く虛しからずば、沙門にして沙門の威儀有ることを知り、婆羅門にして婆羅門の威儀有ることを知り、已に身に證を作して自ら遊戲せん。是れを欲を捨離すと謂ふなり。

云何が色味なるや、設し[三四]刹利女の種、婆羅門女の種、長者女の種にして、年十四、十五、十六、長からず、短からず、肥えず、瘦せず、白からず、黑からず、端正にして雙び無く、世の希有なるを見ること有り、彼初め彼の顏色を見て喜樂の想ひを起す。是れを色味と謂ふなり。云何が色を大患となすや、復次に若し後彼の女人を見るに、年八十、九十乃至百歲、顏色變異し、年少壯を過ぎて牙齒缺け落ち、頭髮皓白にして身體垢堺し、皮緩み面皺み、脊僂み、呻吟して身は故き車の如く、形體戰き掉ひ、杖に扶て行く、云何が比丘、初め妙色を見るも後に復變易す。豈是れ大患に非ずや」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と、世尊諸比丘に告げたまはく、「是れ色を大

【三四】刹利女(Khattiyani)。とは、刹帝利種の女、王族の女のこと。

味と謂ふなり、云何が欲に何の過有りやとは、若し一の族姓子有つて、諸の技術を學び、自ら己れを營む。或は田作を學び、或は書疏を學び、或は傭作を學び、或は算數を學び、或は權詐を學び、或は剋鏤を學び、或は信を通じて彼に至り、此に來るを學び、或は王に承事することを學び、身寒さ暑さを避けず、記累懃苦して自ら己に由らず、此の辛苦を作して財業を獲、是れを欲は大過たりと謂ひ、現世の苦惱は此の恩愛に由り、皆貪欲に由るなり。然るに復彼の族姓子、此の懃勞を作して財寶を獲ずば、彼便ち愁憂を懷き、苦惱稱計すべからず。便ち自ら思惟すらく、『我此の功勞を作し、諸の方計を施すも財貨を得ず、此の如きの比者、當に念じて捨離すべし』と。是れを當に欲を捨離すべしと爲すなり。

復次に彼の族姓子、或は時に此の方計を作して財貨を獲、財貨を獲るを以て廣く方宜を施し、恒に自ら擁護し、王に奪はれ、賊の偸竊むところとなり、水の爲に漂はされ、火の爲に燒かるゝことを恐れて、復此の念を作さく、『正に藏窖せんと欲すれば、後の亡失を恐る、正に出利せんと欲すれば、復剋はざるを恐る。或は家に惡子を生ぜば、吾財を費散せん』と。是れを欲を大患と爲すと謂ふなり。皆欲を本とすることに緣つて此の災變を致すなり。

復次に族姓子、恒に此の心を生じて財貨を擁護せんと欲するも、後猶復國王の爲に奪はれ、賊の爲に劫められ、水の爲に漂され、火の爲に燒かる。藏窖する所のものも亦復剋はず。正使出利するも亦復獲ず、居家に惡子を生ずれば、財貨を費散し、萬に一を獲ずば、便ち愁憂苦惱を懷き、胸を椎つて喚呼して、『我の本得し所の財貨、今は盡く亡失せり』と、遂に愚惑を成じ、心意錯亂せん。是れを欲を大患と爲すと謂ひ、此の欲を本とすることに緣つて無爲に至らざるなり。

復次に此の欲を本とすることに緣り、鎧を著け、仗を執つて共に相攻伐し、以て相攻伐し、或は〔三三〕象衆前に在り、或は馬衆前に在り、或は步兵前に在り、或は車衆前に在り、馬を見れば馬と共に

〔三三〕象衆・馬衆・步兵・車衆は、四軍又は四兵といふ。

を著け、鉢を持し、城に入つて乞食す。是の時衆多の比丘、便ち此の念を生ず、「我等城に入つて乞食するに日時猶早し、今相率ひて外道梵志の所に至るべし」と。爾の時衆多の比丘、便ち[25]異學の梵志の所に往至し、到り已つて共に相問訊し、一面に在りて坐す。是の時梵志沙門に問うて曰く、「瞿曇道士は恒に[26]欲の論・[27]色の論・[28]痛の論・[29]想の論を說く、此の如き諸論は何の差別有るや。我等の所論も亦是の沙門の所說なり。沙門の所說も亦是れ我等の所論なり。說法は我說法と同じく、教誨は我教誨と同じ」と。是の時衆多の比丘、彼の語るを聞き已つて亦善しとも言はず、復惡しとも言はず、卽ち座より起ちて去り、並に是の念を作さく、「我等は當に此の義を以て往いて世尊に問うべし」と。

爾の時衆多の比丘、食後に便ち世尊の所に至り、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時衆多の比丘、梵志の所に從つて事を問ひし、因緣本末を盡く世尊に白す。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「設し彼の梵志にして是の問ひを作さば、汝等當に此の義を以て、彼の來り問うに誂ふべし『欲に何の[30]味有るや、復何の[31]過あるや、當に欲を捨離すべし。色に何の味有るや。復何の過有るや、當に色を捨離すべし。痛に何の味有るや、復何の過有るや、當に痛を捨離すべし』と。汝等設し此の語を以て、彼の來り問うに誂ふれば、彼の諸の梵志は默然として對へざらん。設し說く所有らば亦此の深義を解すること能はずして、遂に愚惑を增し、邊際に墮せん。然る所以は彼の境界に非ればなり。然るに復比丘、魔及び魔天・釋梵・四天王・沙門婆羅門・人及び非人にして能く此の深義を解する者は、如來等正覺及び如來の聖衆を除く。吾教を受くるものは此れを卽ち論ぜざるなり。欲に何の味有るや、所謂[32]五欲なるもの是れなり。云何五と爲すや、眼色を見、爲に眼識を起し、甚愛敬念して世人の喜ぶ所、若し耳聲を聞き、鼻香を嗅ぎ、舌味を知り、身細滑を知り、甚愛敬念して世人の喜ぶ所なり。若し復此の五欲の中に於て、苦樂の心を起すを、是れを欲

【二五】異學(Titthiya)。とは、異教徒。學ぶところを異にするもの〻意。

【二六】欲の論(Kāmānaṁ pariññā)。

【二七】色の論(Rūpānaṁ pariññā)。

【二八】痛の論 (Vedanānaṁ pariññā)。

【二九】想の論は、巴利文になし。

【三〇】味(Assāda) とは、味ひ、心快さ。

【三一】過(Ādīnava) とは、過患、禍ひの意。

【三二】五欲 (Pañca kāmaguṇa) とは、眼・耳・鼻・舌・身の五官に受くる感覺的快樂、巴利文は五欲の功德と。

此の三の大患有りと謂ふなり。然るに復此の三の大患に三の良藥有り、云何が三と爲すや、若し貪欲起る時は、不淨を以て往治し、及び不淨道を思惟するなり。瞋恚大患には慈心を以て往治し、及び慈心道を思惟するなり。愚癡の大患には智慧を以て往治し、及び因緣所起の道なり、是を比丘、此の三患に此の三藥有りと謂ふなり。是の故に比丘、當に方便を以て、此の三藥を索むべし。是の如く比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

〔二三〕聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「三惡行有り、云何が三と爲すや。所謂身惡行・口惡行・意惡行なり、是れを比丘、三惡行有りと謂ふなり。當に方便を求めて三善行を修むべし。云何が三と爲すや、身惡行の者は當に身善行を修むべし。口惡行の者は當に口善行を修むべし。意惡行の者は當に意善行を修むべし」と。爾の時世尊、便ち此の偈を説きたまはく。

當に身惡行を護りて　身善行を修習すべし　念じて身惡行を捨てゝ　當に身善行を學ぶべし
當に口惡行を護りて　口善行を修習すべし　念じて口惡行を捨てゝ　當に口善行を學ぶべし
當に意惡行を護りて　意善行を修習すべし　念じて意惡行を捨てゝ　當に意善行を學ぶべし
身行善なれば　口行も亦復然り　意行善なれば　一切も亦是の如し　口意を護りて清淨なれば　身口惡行を爲さず　此の三行跡を淨めば　仙無爲處に至らん

と。是の如く諸比丘、當に三惡行を捨てゝ三善行を修むべし。是の如く比丘、當に是の如き學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

〔二四〕聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時衆多の比丘有り、時到つて衣

【二三】 Iti-vuttaka 64. 65

【二四】 M. 13. Mahādukkhakkhandha s. 中阿含第九十九經、苦陰經。

ことを得、梵行をして絶えざら使むべし』と。是の如く比丘、飲食に節を知るなり。

云何が比丘、經行を失はざるや。是に於て比丘、前夜後夜に恒に念じて經行して時節を失はず、常に念じ、意を繫けて道品の中に在り、若し晝日に在れば、若しは行き若しは坐するに妙法を思惟して陰蓋を除去し、復初夜に於て、若しは行き、若しは坐するに妙法を思惟して陰蓋を除去し、復中夜に於て右脇に臥し、思惟して意を繫けて明に在り、彼復後夜に於て起き、若しは行き、若しは坐するに深法を思惟して陰蓋を除去す。是の如く比丘、經行を失はず。若し比丘有つて諸根寂靜にして飲食に節を知り、經行を失はず、常に念じて意を繫け、道品の中に在らば、此の比丘便ち二果を成じ、現法の中に於て阿那含を得ん。猶し善く御するの士、平正の道の中に在つて、四馬の車を御するに凝滯有ること無く、到らんと欲する所、必ず果すに疑はざるが如し。此の比丘も亦復是の如く、若し諸根寂靜にして、飲食に節を知り、經行を失はず、常に念じて意を繫け道品の中に在らば、此の比丘便ち二果を成じ、現法の中に於て漏盡きて阿那含を得ん」と、爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「三の大患有り、云何が三と爲すや、所謂風は大患たり、痰は大患たり、冷は大患たり、是れを比丘此の三の大患有りと謂ふなり。然して復此の三の大患に三の良藥有り、云何が三と爲すや、若し風患ならば酥は良藥たり、及び酥にて作る所の飯食なり、若し痰患ならば蜜は良藥たり、及び蜜にて作る所の飯食なり、若し冷患ならば油は良藥たり、及び油にて作る所の飯食なり。是れを比丘、此の三の大患に、此の三の藥有りと謂ふなり。

是の如く比丘、亦此の三の大患有り、云何が三と爲すや、所謂貪欲・瞋恚・愚癡なり。是れを比丘、

や、身行の善、口行の善、意行の善なり、是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[一九]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し比丘有つて三法を成就せば、[二〇]現法中に於て善き快樂を得、勇猛精進して有漏を盡くすことを得ん、云何が三と爲すや、是に於て比丘、諸根寂靜にして、飮食に節を知り、經行を失はざるなり。云何が比丘、諸根寂靜なるや。是に於て比丘は若し眼色を見るも想著を起さず、識念有ることなく、[二一]眼根に於て淸淨を得、彼に因つて解脫を求め、恒に眼根を護り、若し耳聲を聞き、鼻香を嗅ぎ、舌味を知り、身細滑を知り、意法を知るも想著を起さず、識念有ることなく、意根に於て淸淨を得、彼に因つて解脫を求め、恒に意根を護る。是の如きが比丘、諸根寂靜なり。云何が比丘、飮食に節を知るや、是に於て比丘、飮食の從來する處を思惟して肥白を求めず、形を支へ、[二二]四大を全うし得ることを趣欲し、『我今當に故き痛みを除き、新なるものをして生ぜざらしめ、身に力有らしめ、道を修行することを得、梵行を絕えざらしむべし』と。猶し男女の身に惡瘡を生じ、或は脂膏を用つて瘡に塗るが如し。瘡に塗る所以のものは、時をして癒さ使めんと欲するが故に、此れも亦是の如し、諸比丘、飮食に節を知るなり。是に於て比丘、飮食の從來する處を思惟して肥白を求めず、形を支へ、四大を全うし得ることを趣欲し、『我今當に故き痛みを除き、新なるものをして生ぜざら令め、身に力有ら令め、道を修行することを得、梵行を絕えざら令むべし』と。猶し重載の車の轂を膏にする所以の者は、重きを致して所至有らんと欲するが如し。比丘も亦是の如く、飮食に節を知り、從來する所を思惟して肥白を求めず、形を支へて四大を全うし得ることを趣欲し、『我今當に故き痛みを除き、新たるものをして生ぜざら使め、身に力有ら令め、道を修行する

[一九] A. III. 16

[二〇] 現法とは、現在のこと。

[二一] 眼根(Cakkhundriya)。根は感官の意。

[二二] 四大とは、地・水・火・風の四、全て物質は此の四の原素より成ると。

の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐し、須臾にして退いて坐し、世尊に白して曰さく、「瞿波離比丘は何處に生ずと爲すや」と。世尊告げて曰はく、「彼命終して蓮華地獄の中に生ぜり」と。是の時目犍連世尊に白して曰さく、「我は今彼の地獄に往至して彼の人を教化せんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「目連、彼に往くを須ひざれ」と。目連復重ねて世尊に白して曰さく、「彼の地獄の中に往至して、彼の人を教化せんと欲す」と。爾の時世尊亦默然として對へたまはず。是の時尊者大目犍連、力士の臂を屈伸するが如き頃に、舍衞より沒して現ぜずして、便ち蓮華大地獄の中に至る。爾の時に當つて瞿波離比丘の身體火然たり。又百頭の牛有り、以て其の舌を犁へり。

爾の時尊者大目犍連、虛空の中に在つて結跏趺坐し、指を彈いて彼の比丘に告げぬ。彼の比丘即ち仰いで問うて曰く、「汝是れ何人ぞや」と。目犍連報へて曰く、「瞿波離、我は是れ釋迦文佛の弟子にして、字は目犍連、姓は[八]拘利陀なり」と。是の時比丘目連を見已つて此の惡言を吐けり、「我今此の惡趣に墮つるも、猶汝の前を免れざるか」と。此の語を說き訖をや、即ち其の時以て千頭の牛有り、以て其の舌を犁ふ。目連見已つて倍す愁悒を增し、變悔心を生じ、即ち彼に於て沒し、還つて舍衞國に至り、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在つて住す。爾の時目連、此の因緣を以て具に世尊に白す。世尊告げて曰はく、「我前に汝に語げぬ、『彼に至つて此の惡人を見ることを須ひざれ』と」。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

夫の士の生るゝや　斧口中に在りき　所以は身を斬り　其の惡言に由ればなり　彼の息と我息と　此の二は俱に善なり　已に惡行を造れば　斯れ惡趣に墮す　此れを最惡となし　有盡無盡の如來に向ふの惡　此のもの最も重し　一萬三千　六一の灰獄　聖を誹りし彼を墮す　身と口との造る所なり。

と、爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に三法を學び、其の行を成就すべし。云何が三と爲す

【八】拘利陀(kolita)。

に奉事せんと欲せば、當に三處に安じて移動せざら令むべし。云何が三と爲すや。當に歡喜を發し如來の所に於て心移動せざるべし。彼の如來・至眞・等正覺・明行成・善逝となし、世間解・無上士・道法御・天人師・佛・世尊と號しまつる。復意を正法の中に發すべし。如來の法とは善說無礙にして極めて微妙なり。此れに由つて果を成ず。是の如く智者は當に學んで之を知るべし。亦當に意を此の聖衆の所に發すべし。如來の聖衆は悉く皆和合して錯亂有ること無く、法々成就し、戒成就し、三昧成就し、智慧成就し、解脫成就し、解脫見慧成就す、所謂聖衆とは四雙八輩十二賢聖、此れは是れ如來の聖衆にして、敬ふべく、貴ぶべく、此れは是れ世間の無上の福田なり。諸有の比丘此の三處を學ばゞ則ち大果報を成ぜん。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

[一四]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時[一五]瞿波離比丘、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在つて坐す。爾の時彼の比丘世尊に白して曰さく、「此の舍利弗・目揵連比丘の所行甚だ惡しく、諸の惡行を造る」と。世尊告げて曰はく、「是の語を作すこと勿れ、汝歡喜の心を如來の所に發せよ、舍利弗・目揵連比丘の所行は純ら善にして、諸惡有ること無し」と。是の時瞿波離比丘、再三世尊に白して曰さく、「如來の所說は誠に虛妄なし。然るに舍利弗・目揵連比丘の所行は甚だ惡しく、善本有ること無し」と。世尊告げて曰はく、「汝是れ愚人、如來の所說を信ぜざるか。方に言ふ『舍利弗・目揵連比丘の所行甚だ惡し』と。汝今此の惡行を造る。後報ひを受くること久しからざらん」と。爾の時彼の比丘卽ち座上に於て身に惡瘡を生じ、大なること芥子の如く、轉じて大豆の如く、漸く[一六]阿摩勒果の如く、稍胡桃の如く、遂に合掌の如く、膿血流逸して身壞命終して[一七]蓮華地獄の中に生れぬ。是の時尊者大目揵連、瞿波離の命終せしを聞き、便ち世尊

【一四】 S 6. 1. 10 kokālika

【一五】 瞿波離 (kokālika)。

【一六】 阿摩勒果(Āmalaka)。は、又菴摩羅につくり、葉は小棗に似て、花白く小し、果は胡桃の如く、其の味酸くして且甜し。

【一七】 蓮華地獄 (Padumaniraya)。音譯して鉢頭摩。八寒地獄の第七、此の地獄の衆生は、寒苦の爲に、割けて、紅蓮に似たるが故に此の名あり。

かんと欲するも、父母集らざれば則ち胎を成ぜず。若し復母人欲なくして、父母共に一處に集るも、爾の時父の欲意盛にして、母大に慇懃ならずば則ち胎を成ぜず、若し復父母一處に集在するも、母の欲熾盛にして、父大に慇懃ならずば、則ち胎を成ぜず。若し復父母一處に集在するも、父に風病有り、母に冷病有れば則ち胎を成ぜず。若し復父母一處に集在するも、母に風病有り、父に冷病有れば則ち胎を成ぜず。若し復時有つて父母一處に集在するも、父の身に水氣偏多にして、母に此の患ひなくば則ち胎を成ぜず。若し復時有つて父母一處に集在するも、父の相に子有りて、母の相に子なくば、則ち胎を成ぜず。若し復時有つて、父母一處に集在するも、母の相に子有りて、父の相に子なくば、則ち胎を成ぜず。若し復時有つて父母倶に相に子なくば則ち胎を成ぜず。若し復時有つて識神胎に趣くも、父行いて在らざれば、則ち胎を成ぜず。若し復時有つて、父母一處に集るべきに、然るに母遠く行きて在らずば、則ち胎を成ぜず。若し復時有つて、父母一處に、集るべきに、然るに父の身重き患ひに遇ふ時識神來り趣かば、則ち胎を成ぜず。若し復時有つて父母一處に集るべきに、識神來り趣くも、然も母の身に重き患ひを得ば、則ち胎を成ぜず。若し復時有つて父母一處に集るべきに、識神來り趣くも、然も復父母の身倶に疾病を得ば、則ち胎を成ぜず。若し復比丘、父母一處に集在し、父母に患ひなく、識神來り趣き、然も復父母倶に相に兒有れば、此れ則ち胎を成ず。是れを此の三因緣有つて來れば、胎を受くと謂ふなり。是の故に諸比丘、當に方便を求めて三因緣を斷ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[三]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し衆生有つて慈しみの心を起し、篤信の意有りて承受し、父母・兄弟・宗族・室家・朋友・知識

【三】 A. III. 75 (§ 2)。

恒に慚愧を知り、惡想を興さず亦盜竊せず、好んで人に惠施して貪悋の心なく、語言和雅にして人の心を傷けず亦他に淫ならず、自ら梵行を修めて、已に色自ら足れりとす。亦妄語せず、恒に至誠を念じて欺誑を言はざれば世人に敬はれて增損あることなし。亦飲酒せず、恒に亂を避くることを知り、復[9]慈心を以て一方に遍く滿す、二方・三方・四方亦爾り、八方上下、其の中に遍く滿ちて量りなく限りなく、限るべからず、稱計すべからず。此の慈心を以て普く一切を覆ひ、安穩を得しむ。復悲・喜・護心を以て普く一方に滿ち二方・三方・四方亦爾り。八方上下悉く其の中に滿ち、無量無限にして稱計すべからず。此の悲・喜・護心を以て悉く其の中に滿つ、是れを名けて平等となし、福の業となすと謂ふなり。彼の法、云何が名けて思惟を福業となすや、是に於て比丘[10]念覺意を修行して無欲に依り、無觀に依り、滅盡に依り、出要に依る。法覺意を修め、[11]念覺意を修め、猗覺意を修め、定覺意を修め、護覺意を修め、無欲に依り、無觀に依り、滅盡に依り、出要に依る。是を名けて思惟を福業と爲すと謂ふなり。是の如く比丘、此の三福業有り」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく。

布施及び平等　慈心と護と思惟と　此の三の處所有りて　智者の親近する所なり　此の間に其の報ひを受け　天上も亦復然り　此の三處有るに緣つて　生天必ず疑はじ

是の故に諸比丘、當に方便を求めて、此の三處を索むべし。是の如く諸比丘、當に是の如きの學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[12]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「三因緣有りて、識來りて受胎す。云何が三と爲すや。是に於て比丘、母に欲意有りて父母共に一處に集り、與に共に止宿するも、然も復外識未だ來り趣かずば便ち胎を成ぜず。若し復識來り趣

【九】慈は、下の悲・喜・護と共に四無量心の一、四等を見よ。

【一〇】念覺意以下七覺意を出す。七覺意の註を見よ。

【一一】念覺意は、喜覺意の誤寫。

【一二】M. 38 Taṇhāsaṅkha-yas. 參照。

の徳と名く。云何が名けて自ら聖衆に歸すると爲すや。所謂聖衆とは大衆大聚の有形の類なり。衆生の中、如來の衆僧は此の衆の中に於て最尊最上にして能く及ぶものなし。牛に由つて乳を得、乳に由つて酪を得、酪に由つて酥を得、酥に由つて醍醐を得、然して復醍醐は中に於て最尊最上にして能く及ぶものなし。此れも亦是の如く、所謂聖衆とは大衆大聚、有形の類衆生の中、如來の衆僧は此の衆の中に於て最尊最上にして能く及ぶものなし。是れを第一の徳に承事すと謂ひ、第一の徳を獲るを以て、便ち天上人中の福を受く此れを第一の徳と名く。爾の時世尊、便ち此の偈を説きたまはく。

第一は佛に承事す　最尊にして上有ることなし　次で復法に承事す　欲なく所著なし　賢聖の衆を敬ひ奉するは、最も是れ良き福田なり　彼の人は第一の智にして　福を受くること最も前に在り　若し天人の中に在らば　衆に處するに正導をなし　亦最妙の座を得て　自然に甘露を食す　身に七寶の衣を著け　人の爲に敬はれ　戒具最も完全にして　諸根缺漏せず　亦智慧の海を獲て　漸く涅槃界に至る　此の三歸有るものは　道に趣くこと亦難からず

と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

[八]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の三福の業有り。云何が三と爲すや。施を福業となし、平等を福業となし、思惟を福業となす。彼云何が施を名けて福業となすや。若し一人有り、心を開いて、沙門婆羅門、極めて貧窮なるもの、孤獨のもの、趣き向ふ所なきものに布施し、食を須ふるものに食を與へ、漿を須ひるものに漿を給し、衣被・飲食・床臥の具、病瘦の醫藥、香花宿止の身に便する所に隨つて愛惜する所なし、此れを施福の業と曰ふなり。云何が名けて平等を福業となすや。若し一人有つて殺さず、盜まず、

【八】A. IV. 32 の頌參照。
Iti-vuttaka 60 參照。

卷の第十二

三寶品第二十一

一

[1]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、[2]三自歸の德有り、云何が三と爲すや。所謂佛に歸するは第一の德なり、法に歸するは第二の德なり。僧に歸するは第三の德なり。彼云何が名けて佛に歸するの德と爲すや。諸有の衆生、[3]二足・[4]四足・[5]衆多の足のもの、[6]有色・無色・有想・無想より [7]尼維先天の上に至るも、如來は中に於て最尊最上にして能く及ぶものなし、牛に由つて乳を得、乳に由つて酪を得、酪に由つて酥を得、酥に由つて醍醐を得、然も復醍醐は中に於て最尊最上にして、能く及ぶものなし、此れも亦是の如く、諸有の衆生、二足・四足・衆多の足のもの、有色・無色・有想・無想より尼維先天の上に至るも、如來は中に於て最尊最上にして能く及ぶものなし、諸有の衆生の佛に承事するもの、是れを第一の德の承事すと謂ひ、第一の德を獲るを以て、便ち天上人中の福を受く。此れを第一の德と名く。云何が名けて自ら法に歸する者と爲すや。所謂諸法、有漏・無漏・有爲・無爲・無欲・死染・滅盡涅槃なり。然して涅槃の法は諸法の中に於て最尊最上にして能く及ぶものなし。牛に由つて乳を得、乳に由つて酪を得、酪に由つて酥を得、酥に由つて醍醐を得、然して復醍醐は中に於て最尊最上にして能く及ぶものなし。此れも亦是の如く、所謂諸法とは有漏・無漏・有爲・無爲・無欲・無染・滅盡・涅槃なり。然して涅槃の法は諸法の中に於て最尊最上にして能く及ぶものなし。諸有の衆生にして法に承事するもの是れを第一の德に承事すと謂ひ、第一の德を獲るを以て、便ち天上人中の福を受く、此れを第一

【一】 A. IV. 34 Pasāda

【二】 三自歸とは、佛・法・僧の三寶に歸依すること。略して三段ともいふ。

【三】 二足とは、人類をいふ。

【四】 四足とは、獸類をいふ。

【五】 衆多の足のもの、百足の如きもの。

【六】 有色無色(Sarūpino vā arūpino vā)。有想無想(Saññino vā asaññino vā)。

【七】 尼維先天(Nevasaññinā-saññī)。と非想非々想處天のこと。無色界の第四天、何ものもなしといふ概念を超越して、概念の有無を離れし境地の天界。

き、生ぜ令めざるべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

増壹阿含經卷第十一

善知識品第二十

一七三

有り、今已に慧有り、今已に掃拌を解せり」と。世尊告げて曰はく、「比丘、云何が之を解せるや」と。朱利槃特報へて曰さく、「除とはこれ慧を謂ひ、垢とはこれ結を謂ふ」と。世尊、告げて曰はく、「善い哉、比丘、汝の言ふ所の如し、除とは是れ慧、垢とは是れ結なり」と。爾の時尊者朱利槃特、世尊に向ひて此の偈を說く、

今此れを誦し已つて足りぬ　尊の所說の如く　智慧は能く結を除く　其の餘の行に由らざるたり

と。世尊告げて曰はく、「比丘、汝の所言の如し、智慧を以てして、其の餘に由るに非らざるなり」と。爾の時尊者、世尊の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十三

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の二法有り、款待すべからず、亦愛著するに足らず、世の人の損棄する所なり。云何が二法と爲すや、怨憎共會、此れ款待すべからず、亦愛著するに足らず、世人の損棄する所なり。恩愛別離は款待すべからず、亦愛著するに足らず、世人の損棄する所なり。是れを比丘、此の二法有りて世人の喜ばず、款待すべからざる所と謂ふなり。比丘復二法有り、世人の棄てざる所なり、云何が二法と爲すや、怨憎別離は世人の喜ぶ所、恩愛一處に集るは甚だ愛敬すべく、世人の喜ぶ所なり。是れを比丘、此の二法有りて世人の喜ぶ所と謂ふなり。我今此の怨憎共會と恩愛別離とを說き、復怨憎別離と恩愛共會とを說くは何の義有り、何の緣有るや」。比丘報へて曰く、「世尊は諸法の主なり、唯願はくは世尊、我等の與に說きたまへ、諸の比丘聞き已つて當に共に奉行すべし」と。世尊、告げて曰はく、「諦に聽いて善く之を思念せよ。吾當に汝の爲に分別して之を說くべし。諸比丘、此の二法は愛に由つて興り、愛に由つて生じ、愛に由つて成り、愛に由つて起る。當に學んで其の愛を除

に告げて曰く、「若し持戒すること能はずば、還えつて白衣と作れ」と。是の時朱利槃特、此の語を聞き已つて、便ち祇洹精舍に詣り、門外に立つて涙を墮す。爾の時世尊、天眼の清淨なるを以て、是の朱利槃特比丘、門外に在りて立ち、悲泣して自ら勝ふる能はざるを觀じたまふ。時に世尊は靜室より起ち、經行に如々似て祇園精舍の門外に至り、朱利槃特に告げて曰はく、「比丘、何故に此に在りて悲泣するや」と。朱利槃特報へて曰さく、「世尊、兄に驅逐せられぬ。『若し持戒すること能はずば、還つて白衣と作れ、此に住するを須ひず』と、是の故に悲泣するのみ」と。世尊告げて曰はく、「比丘、畏怖を懷くこと勿れ、我無上等正覺を成ぜしも、卿の兄槃特に由つて道を得ず」と。爾の時世尊、手に朱利槃特を執らへて靜室に詣り、敎へて座に就かしめたまふ。世尊復掃箒を執らしめることを敎へて、「汝此の字を誦せよ、字は何學と爲すや」と。是の時朱利槃特、掃を誦し得るも復箒を忘れ、若し箒を誦し得るも復掃を忘る。爾の時尊者朱利槃特、此の箒掃を誦して乃ち數日を經たり。然して此の掃箒は復除垢と名く。朱利槃特復是の念を作さく、「何者か是れ除、何者か是れ垢、垢は灰土屋石なり、除は淸淨なり」と。復是の念を作さく。「世尊は何故に此れを以て我を敎誨したまふや、我今當に此の義を思惟すべし。以て此の義を思惟せん」と。復是の念を作さく、「今我身の上に亦塵垢有り、我自ら喩を作さん、何者か是れ除、何者か是れ垢」と。彼復是の念を作さく。「縛結是れ垢、智慧は是れ除、我今智慧の箒を以て、此の結縛を掃ふべし」と。

爾の時尊者朱利槃特、五盛陰の成と敗とを思惟す。所謂此れは色、色の[三]集、色の滅、是れを痛・想行・識の成と敗と謂ふなり。爾の時此の五盛陰を思惟し已つて欲漏心解脫を得、有漏心・無明漏心解脫を得、已に解脫を得て便ち解脫智を生じ、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復胎有を受けず。實の如く之を知り、尊者朱利槃特便ち阿羅漢を成じ、已に阿羅漢を成じて卽ち座より起ち、世尊の所に詣り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐し、世尊に白して曰さく、「今已に智

【三】集(Samudaya)とは、因の義。

し。慳貪有ること莫かれ、是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「二法有り、凡夫人の與に大功德を得、大果報を成じ、甘露味を得て無爲處に至る。云何が二法と爲すや。父母を供養す。是れを二人大功德を獲、大果報を成ずと謂ふなり。若し復[一七]一生補處の菩薩を供養せば、大功德を獲、大果報を得ん、是れを比丘、此の二人に施せば大功德を獲、大果報を受け、甘露味を得て無爲處に至ると謂ふなり。是の故に諸比丘、常に念じて孝順し、父母を供養せよ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十一

[一八]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「二人は善を作すも、恩の報ひを得べからずと教ふ。云何が二と爲すや、所謂父母なり。若し復比丘、人有つて父を以て左肩の上に著け、母を以て右肩の上に著け、千萬歲に至るも、衣被・飮食・床蓐の臥具・病瘦の醫藥、卽ち肩の上に於て屎溺を放つも猶報恩を得ること能はず。比丘當に知るべし、父母の恩は重く、之を抱いて之を育て、時に隨ひ、將て護り、時節を失はず、日月を見るを得るも、此の方便を以て此の恩の報じ難きを知る。是の故に諸比丘、當に父母を供養すべし。常に當に孝順して時節を失はざるべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十二

[一九]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時尊者[二〇]槃特、弟の[二一]朱利槃特

【一七】一生補處の菩薩とは、一生を過ぎて後成佛し、佛處を補ふ菩薩のことにして、釋迦の後佛處を補ふ彌勒の如し。

【一八】A. II. 4. 2 Duppaṭi-kāra.

【一九】J. I. p. 114-120

【二〇】槃特(Panthaka)。は朱利槃特の兄にして、摩訶槃特と稱せらる。

【二一】朱利槃特(Cullapan-thaka)。前に出づ。

の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「二人有り、善く法語を説くこと能はず。云何が二人と爲すや。無信の人、與に信法を説くこと、此のこと甚だ難し。慳貪の人、爲に施法を説くこと、此れ亦甚だ難し。猶し狗の惡加はりて復鼻を傷つけ、倍す更に瞋恚するが如し。諸の比丘、此れも亦是の如し。無信の人にして、與に信法を説かば、便ち瞋恚を起し、傷害の心を生ぜん。若し復比丘、慳貪の人にして、與に施法を説かば、便ち瞋恚を生じ、傷害の心を起さん。猶し癰瘡の未だ熟せざるに復、刀を加へて痛みを割れば忍ぶべからざるが如し。此れも亦是の如く。慳貪の人にして、與に施法を説かば、倍す復瞋恚して傷害の心を起さん。是れを比丘、此の二人は爲に法を説くこと難しと謂ふなり。

復次に比丘、二人有り、爲に法を説くこと易し、云何が二と爲すや、有信の人にして、與に信法を説くと、慳貪ならざる人にして、與に施法を説くとなり。若し比丘、有信の人にして、與に信法を説かば、便ち歡喜を得、意變悔せず。猶し病有るの人、與に除病の藥を説かば、便ち平復を得るが如し。此れも亦是の如く。有信の人にして、與に信法を説かば、便ち歡喜を得て心改變せざらん。若し復無貪の人にして、與に施法を説かば、即ち歡喜を得て悔心有ることなけん。猶し男女有りて端正にして自ら喜んで手面を沐浴し、復人有つて來り、好き華を持して奉上し、倍す顏色有り、復好衣服飾を以て其の人に奉上せんに彼の人得已つて益々歡喜を懷くが如し。此れも亦是の如く、慳貪なき人にして、與に施法を説かば、便ち歡喜を得て悔心有ることなけん。是れを比丘、此の二人は爲に説法すること易しと謂ふなり。是の故に諸比丘、當に有信を學ぶべし。亦當に布施を學ぶべ

休息して止を得ば、則ち戒律成就して威儀を失はず、禁行を犯さず、諸の功德を作さん。若し復阿練比丘にして觀を得已れば、便ち此の苦を觀じて實の如くに之を知り、苦の集を觀じ、苦の盡を觀じ、苦の出要を觀じて實の如く之を知る。彼是の如く觀じ已つて、欲漏心解脫を得、有漏心無明漏心解脫を得、便ち解脫智を生じ、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に亦復有を受けず、實の如く之を知る。過去の諸の多羅阿竭・阿羅訶・三耶三佛皆此の二法に由つて成就することを得たり。然る所以は猶し菩薩樹王下に坐する時の如く、先づ此の法止と觀とを思惟せしなり。若し[一六]菩薩摩訶薩にして止を得已れば便ち能く魔怨を降伏す。若し復菩薩、觀を得已れば尋いで三達智を成じ、無上至眞等正覺を成ず。是の故に諸比丘、阿練比丘は當に方便を求めて此の二法を行ずべし。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げ給はく、「若し阿練比丘有りて、閑靜處に在つて衆中に在らず、恒に當に恭敬して歡喜の心を發すべし。若し復阿練比丘にして、閑靜處に在りて恭敬有ることなく、歡喜の心を發さずば、正使大衆の中に在つて、人の爲に論ずる所あらんも、阿練の法を知らざるなり。云何とならば此の阿練比丘は恭敬の心なく、歡喜を發さゞればなり。復次に比丘、阿練比丘閑靜處に在つて衆中に在らず。常に精進して懈慢有ること莫かるべし。悉く當に諸法の要を解了すべし。若し復阿練比丘にして、閑靜の處に在りて、懈慢の心有り、諸の惡行を作さば、彼衆中に在りて人の爲に論ぜられん。此れ阿練比丘、懈怠にして精進有ることなければなり。是の故に比丘、阿練比丘は閑靜處に在りて、衆中に在らずとも、常に當に意を下して歡喜の心を發すべし。懈慢有ること莫く、恭敬の念有つて精進を行じ、意移轉せず、諸の善法に於て悉く當に具足すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾

【一六】菩薩摩訶薩(Bodhisatte. Mahasatto.)。菩薩は菩提薩多の略、譯して覺有情といひ、摩訶薩とは大有情と譯す、菩薩を聲聞・緣覺と區別して大有情といふ。

[一〇] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し衆生にして反復を知る者有らば、此の人は敬ふべし、小恩尙忘れず、何況んや大恩をや。設使此の間を離るゝこと千由旬、百千由旬なるも、故に遠しと爲さず、猶我に近きが如きと異ならず。然る所以は、比丘當に知るべし、我恒に返復を知る者を歎譽すればなり。諸有の衆生にして反復を知らざる者は、大恩も尙憶せず、何況んや小をや。彼は我に近きに非ず、我は彼に近づかず、正使[一一]僧伽梨を著けて吾左右に在るも、此の人猶遠し、然る所以は、我恒に反復なき者を說かざればなり。是の故に諸比丘、當に反復を念じて無反復を學ぶこと莫るべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[一二] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し人有つて懈惰して不善行を種うれば、事に於て損有り。若し能く懈惰せず精進するもの、此の人は最妙にして、諸の善法に於て便ち增益有らん。然る所以は、[一三]彌勒菩薩三十劫を經て、應に佛・至眞等正覺と作るべし。我精進力勇猛の心を以て、彌勒をして後に在らしむ。過去恒沙の多薩阿竭・阿羅訶・三耶三佛は皆勇猛に由つて成佛を得たり、此の方便を得、此の方便を以て當に知るべし。懈惰なれば苦を爲し、諸の惡行を作し、事に於て損有り、若し能く精進して勇猛心强ければ、諸善功德便ち增益有らん、是の故に諸比丘、當に精進を念じて懈怠有ること勿るべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[一四] 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、[一五]「阿練比丘は當に二法を修行すべし。云何が二法なるや、所謂止と觀となり。若し阿練比丘にして

【一〇】 A. II. 3. 15。
【一一】 僧伽梨 (Saṅghāṭi) とは三衣の一、大衣のこと。
【一二】 (Div. p. 481.)。
【一三】 彌勒(Metteyya)。前に出づ。
【一四】 A. II. 3. 15 參照。
【一五】 阿練比丘 (Āraññaka bhikkhu)。森の中に住む比丘をいふ。森の中に住むことは頭陀行の一なり。

「我今當に說くべし、人にして師子に似たる者有り、羊に似たる者有り、汝等諦に聽け、諦に聽いて善く之を思念せよ」と。諸比丘對へて曰く、「是の如し、世尊」と、爾の時諸比丘、佛より敎へを受く、世尊告げて曰はく、「彼の人にして云何が師子に似たるや、是に於て比丘、或は人有つて衣被・飮食・床臥の具・病瘦の醫藥を供養するを得るも、彼得已つて便ち自ら食噉ふて染著の心を起さず、亦欲意有ることなく、諸の想ひを起さず、都て此の念なく、自ら出要の法を知り、設使利養を得ざるも亂念を起さず、增減の心なきこと猶し師子王の小畜を食噉ふが如し。爾の時彼の獸王も亦是の念を作さず、『此れは好し、此れは好からず』と染著の心を起さず、亦欲意なく、諸の想ひを起さず。此の人も亦復是の如し。若し衣被・飮食・床臥の具・病瘦の醫藥を供養するを得、彼得已つて便ち自ら食噉ふに想著の意を起さず、設使得ざるも亦諸念なし、猶し人有つて人の衣被・飮食・床臥具・病瘦醫藥を供養するを受け、得已つて便ち自ら食噉ふに染著の心を起し、愛欲の意を生じて出要の道を知らずば、設使得ざるも、恒に此の想念を生じ、彼の人供養を得已つて、諸比丘に向つて自ら貢高して他人を毀蔑し、『我の能く得る所の衣被・飮食・床臥の具・病瘦の醫藥は此の諸比丘之を得る能はず』と、猶し大群羊中に一羊有るが如し。群を出で已つて大糞聚に詣り、此の羊屎を飽食し已り、還えつて羊群の中に至り、便ち自ら貢高して、『我能く好き食を得たり、此の諸羊は食することを得る能はず』と。此れも亦是の如し。若し一人有つて衣被・床臥の具・病瘦の醫藥を利養するを得て、諸の亂想を起し、染著の心を生じ、便ち諸比丘に向つて自ら貢高し、『我能く供養を得るも、此の諸比丘は供養を得ること能はず』と、是の故に諸比丘、當に師子王の如く學ぶべし。羊の如くなること莫かれ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

爾の時錠光如來默然として語りたまはず。時に彼の梵志手に五莖の華を執り、右膝を地に著けて錠光如來に散じ、並に是の說を作さく、『是の福祐を持つて將來の世に、當に錠光如來至眞等正覺の如くして、異り有ること無かるべから使めよ』と、即ち自ら髮を散じ、淤泥に在つて、『若し如來我に決を授けたまはゞ、便ち足を以て我髮の上を踏み過ぎたまへ』と。比丘當に知るべし、爾の時錠光如來は梵志の心中の所念を觀察し、便ち梵志に告げて曰はく、『汝將來の世に當に釋迦文佛如來至眞等正覺と作るべし』と。時に超術梵志に同學有り、曇摩留支と名く、如來の邊に在つて、錠光佛の超術梵志に決を授け、又足髮の上を踏みたまふを見、見已つて便ち是の說を作す、『此の禿頭の沙門は何ぞ忍んで乃ち足を擧げて、此の淸淨の梵志の髮の上を踏むや、此れ人の行ひに非ず』と、佛諸比丘に告げたまはく、爾の時の耶若達梵志とは豈異人ならんや、是の觀を作すこと莫かれ、然る所以は、爾の時の耶若達とは今の　白淨王是れなり、爾の時の八萬四千の梵志の上座とは今の提婆達兜の身是れなり。時の超術梵志とは即ち我身是なり。是の時の梵志女にして華を賣る者は今の　瞿夷是れなり。爾の時の祠主とは今の　執杖梵志是れなり。爾の時曇摩留支、口に造くる所の行、不善の響を吐くものは今の曇摩留支是れなり。然して復曇摩留支は無數劫の中に恒に畜生となり、最後に身を受けて大海に在つて魚と作り、身長七百由旬、彼に從つて命終して此の間に來生し、善知識の與に從事し、恒に親しく善知識に近在して諸の善法を習ひ、根門通利なりき。此の因緣を以ての故に、我言く、『久しくして此の間に來れり』と。曇摩留支も亦復自ら陳べて、『是の如し、世尊、久しくして此の間に來りぬ』と、是の故に諸比丘、常に當に身口意行を修習すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

【七】白淨王(Śuddho dana)とは、淨飯王とも記し、佛陀の父。

【八】瞿夷(Gopikā)。釋尊在俗時代の妃。

【九】執杖(Daṇḍapāṇi)。

を作し、各〻自ら別れ去りぬ。

是の時錠光如來至眞等正覺、時到つて衣を著け、鉢を持し、比丘僧と與に前後を圍遶して鉢摩大國に入りたまふ。時に超術梵志遙に錠光如來の顏貌端正なるを見、見て歡ばざること莫し。諸根寂靜にして行くに錯亂せず、三十二相[六]八十種好有りて、猶し澄水の穢濁有ることなきが如し。光明徹照して罣礙せらるゝなく、亦寶の山の諸の山の上に出づるが如きを見已つて便ち歡喜心を發し、如來の所に於て此の五莖の華を持つて錠光如來の所に至り、到り已つて一所に在りて住す。時に超術梵志錠光佛に白して言さく『願はくは採受せられよ、設し世尊にして決を授けたまはずば、便ち當に此の處に於て、其の命根を斷つべし。此の生を願はず』と。爾の時世尊、告げて曰はく『梵志、此の五莖の華を以て、無上の等正覺に授くべからず』と。梵志白して曰さく『願はくは世尊、我與に菩薩所行の法を說きたまへ』と。錠光佛告げて曰はく『菩薩の所行は愛惜する所なし』と。爾の時梵志便ち此の偈を說いて言さく、

敢えて父母を以て　持して外人に施さず　諸佛は眞人の長なれば　亦復敢えて施さず　日月世を周行す　此の二は施すべからず　餘は盡く施すべし　意決すれば難きこと有ること無し

と。爾の時錠光佛、復此の偈を以て梵志に報へて曰はく、

汝の所說の施の如きは　亦如來の言ならず　當に億劫の苦を忍び　頭身耳目　妻子國の財寶車馬僕從の人をも施すべし　設し能く與ふるに堪ふれば　今當に汝に決を授くべし

と。爾の時摩納、復此の偈を說く、

大山熾んにして火の如くとも　億劫に頂戴くに堪えて　道意を壞ぶる能はず　唯願はくは時に決を授けたまへ

と。

【六】八十種好は、又八十隨形好ともいひ、三十二の相形に隨ふ優れし點をいふ。

ふ、水瓶を持し、行きて水を取り、手に五枚の華を執る。梵志見已つて彼の女人に語げて曰く、『大妹、我今華を須ひん、願はくは妹、我に賣り與へ見れよ』と。梵志女曰く、『我何の時か是れ、汝の妹なる、我父母を謗ると爲すや不や』と。時に超術梵志復此の念を生ず、『此の女人の性行寛博にして、意に戯笑在り』と。即ち復語げて言く、『賢女、我當に價を與ふべし、是非此の華を惠ま見れよ』と、梵志曰く、『豈聞かずや、大王の嚴しき教ありて、華を賣ることを得ざるを』と。梵志曰く、『賢女、此の事苦なし、王汝を奈何ともせざらん。我今急ぎ此の五枚の華を須ふ、我此の華を得ば、汝は貴き價を得ん』と。梵志女曰く、『汝急ぎ華を須ひて何等を作さんと欲するや』と。梵志報へて曰く、『我今良地有るを見て此の華を種えんと欲す』と。梵志女曰く、『此の華は已に其の根を離るれば、終に生ずべからず。云何が方に「我之を種えんと欲す」と言ふや。』梵志報へて曰く、『我今日見る所の良田の如きは、死灰を種うるも尚生ぜん、何に況んや此の華をや』と。梵志女曰く、『何をか是れ良田死灰を種えて乃ち生ずるや。』梵志報へて曰く、『賢女、錠光佛・如來・至眞等正覺有りて世に出現したまふ』と。梵志女曰く、『錠光如來は何等の類なるや。』梵志即ち彼の女に報へて曰く、『錠光如來には是の如きの德有り、是の如きの戒有り、諸の功德を成じたまふ』と。梵志女曰く、『設し功德有らば、何等の福を求めんと欲するや。』梵志報へて曰く、『願はくは我後に生れて、當に錠光如來・至眞等正覺の如くなるべし。禁戒功德も亦是の如くなるべし』と。梵志女曰く、『設し汝、我と世々に夫婦と作ることを許さば、我便ち汝に華を與へん』と。梵志曰く、『我今所行意欲に著せず。』梵志女曰く、『我今身の如く汝の爲に妻と作ることを求めず、我をして將來の世に汝の與に妻と作らしめよ』と。超術梵志曰く、『菩薩の所行は愛惜有ることなし、設し我與に妻と作らば、必ず我心を壞らん』と、梵志女曰く、『我終に汝の施意を壞らじ、正使我身を持して人に施與すとも、終に施の心を壞らざらん』と。是の時便ち五百の金錢を持し、用つて五枚の華を買ひ、彼の女人と共に誓願

師に供養すべし。此の女人及び牛千頭は施主の人に還えさん。然る所以は、吾欲を習はず、亦財を積まざればなり』と。是の時超術梵志、此の金杖澡罐を受け已つて、便ち鉢摩大國に往詣す。其の王を名けて光明と曰ふ。時に彼の國の王、錠光如來及び比丘衆を請じて衣食を供養す。時に彼の國の王、城内に告令して、『其れ人民有つて香華有るも、盡く賣ることを得ざれ、若し賣ること有るものは當に重く之を罰すべし、吾自ら出でて買ひ、轉賣を須ひず』と。復人民に勅して、掃灑して淨めしめ、土沙穢惡をして有らしむること勿れ、繒・幡・蓋を懸け、香汁を地に塗り、倡妓樂を作すこと稱計すべからざれ』と。爾の時彼の梵志見已つて、便ち道行く人に問うて曰く、『今は是れ何の日なるや、道路を掃灑し、不淨を除治し、繒・幡・蓋を懸けて稱計すべからず、將て國主太子の娉娶する所有りや』と。彼の道行く人報へて曰く、『梵志知らずや、鉢摩大國の王今、錠光如來至眞等正覺を請じて衣食を供養せんとす。故に道路を平治して繒・幡・蓋を懸くるのみ』と。然るに梵志祕記して亦此の語有り『如來の出世は甚だ遇ふこと得難し、時々乃ち出で丶實に見るべからず、猶し優曇鉢華の時々乃ち出づるが如し。此れも亦是くの如く、如來の世に出現すること甚だ値ふべからず。又梵志の書に亦此の語有り。二人有りて出世するも甚だ値ふこと得難し。云何が二人なるや、如來及び轉輪聖王、此の二人は出現するも甚だ値ふこと得難し』と。爾の時彼復是の念を作さく。『我今急ぎ速に佛の恩を報ずべし、今は且く此の五百兩の金を以て錠光如來に奉上せん』と。復是の念を作さく、『書記の載する所、如來は金銀珍寶を受けたまはずと、我此の五百兩の金を持し、用つて華香を買ひ如來の上に散ずべし」と、是の時梵志卽ち城内に入つて華香を買ひ求む。爾の時城中の行人報へて曰く、『梵志知らずや、國王教令有つて、「其れ香華を賣る者有らば、當に重く之を罰すべし」』と。時に彼の超術梵志便ち是の念を作さく、『是れ我薄祐なり、華を求めて獲ざること、將知る如何』と。便ち還つて城を出で、門外に在りて立つ。爾の時婆羅門の女有り、名けて善味と曰

を見、各〻聲を高めて喚んで曰く、『善い哉祠主、今大利を獲たり、乃ち梵天をして躬自ら下降せしめたり』と。時に八萬四千の諸の梵志等各〻起ちて共に迎へ、異口同音に是の語を作さく、『善くぞ來れり大梵神天』と、時に超術梵志便ち此の念を生ずらく、「此の諸の梵志は謂ひて、吾を『是れ梵天』と呼ぶ。然るに復吾亦梵天に非ず」と。是の時超術梵志、諸の婆羅門に語りて曰く、『止みなん、止みなん、諸賢、吾を是れ梵天と呼ぶこと勿れ、汝等豈聞かずや、雪山の北に大梵志衆の師有り、耶若達と名け、天文地理にして貫錬せざるはなし』と。諸の梵志曰く、『吾等之を聞く、但見ざるのみ』と。超術梵志曰く、『我は是れ其の弟子なり、名けて超術と曰ふ』と。是の時超術梵志、便ち彼の衆の第一の上座に向ひ、之に告げて曰く、『設し技術を知らば吾に向つて之を說け』と。

爾の時彼の衆の第一の上座、卽ち超術梵志に向ひ、三藏の技術を誦して漏失有ることなし。時に超術婆羅門復彼の上座に語げて曰く、『一句五百言、今之を說く可し』と。是の時彼の上座曰く、『我此の義を解せず、何等か是れ一句五百言なる』と、時に超術梵志告げて曰く、『諸賢、默然として一句五百言の大人の相を說くを聽け』と、比丘當に知るべし、爾の時超術梵志、便ち三藏の術及び一句五百言の大人の相を誦しぬ、爾の時八萬四千の梵志、未曾有にして甚奇甚特なりと歎じ、『我等初め一句五百言の大人の相を聞かず、今尊者宜しく上頭第一の上座に在るべし』と。爾の時超術梵志、彼の上座に移り已つて、便ち第一の座に在りて坐す。爾の時彼の衆の上座極めて瞋恚を懷き、此の誓願を發す『今此の人我座處に移りて、自ら其の處を補へり。我今誦する所の經籍持戒苦行にして、設し當に福有るべきものは盡く持し、用つて誓ひを作して、此の人の所生の處、作さんと欲する所のこと、我恒に、當に其の功を壞敗るべし』と。是の時彼の施至、卽ち五百兩の金、及び金杖一枚、金の澡罐一枚、牛千頭、好き女一人を出し、持し用つて上座に與へて呪願せしむ。

爾の時上座、主人に告げて曰く、『我今此の五百兩の金及び金杖、金の澡罐を受けて、當に用つて

志便ち前んで師に白さく「唯願はくは教へたまへ。何をか未だ誦せざる」と。是の時耶若達梵志、便ち思惟して五百の言誦を造り、雲雷に告げて曰く「今此の書有り、五百言誦と名く、汝之を受くべし」と。雲雷白して言さく「願はくは師に授けられて諷誦することを得んと欲す」と。比丘當に知るべし、爾の時耶若達便ち弟子に此の五百言誦を授けて、未だ幾日を逕ざるに、悉く皆流利す。是の時耶若達婆羅門、五百の弟子に告げて曰く「此の雲雷梵志は技術悉く備り、事として通ぜざるはなし。卽ち以て名を立て、名けて超術と曰ふ。此の超術梵志は極めて高才たり、天文地理にして貫博せざるはなく、書疏文學亦悉く了知す」爾の時超術梵志、復數日を經て、復師に白して曰さく、「梵志の學ぶ所の技術の法は今悉く知り已りぬ。然して復書籍に載する所の諸有の術を學び過ぐれば、當に師の恩を報ずべし。加ふるに復貧乏しくして金銀珍寶の用つて師に供養すべきもの有ること無ければ、今は國界に詣りて財物を求索め、用つて師を供養せんと欲す、唯願はくは聽許たまへ」と。爾の時耶若達梵志告げて曰く「汝是れ時を知れ」と。超術梵志前んで師の足を禮し、便ち退いて去りぬ。

爾の時鉢摩大國の城を去ること遠からざるに、衆の梵志有りて普く一處に集り、共に大祠せんと欲し、亦講論せんと欲す。時に八萬四千の梵志有りて共に集る。第一の上座も亦復外道の書疏を諷誦して練知せざるはなく、天文・地理・星宿・變怪皆悉く了知す。各ゝ散らんとするの時、便ち五百兩の金及び金杖一枚、金の澡罐一枚、牛千頭を以て、用つて師に奉上し、第一の上座に與ふ。爾の時超術梵志、鉢摩大國を去ること遠からざるに、諸の梵志八萬四千有りて一處に集在し、其の術を試むること有りて、過ぐる者に便ち五百兩の金及び金杖一枚、金の澡罐一枚、大牛千頭を與ふと聞きぬ。是の時超術梵志自ら念へらく「我今何故に家々に乞ひ求むる、如かず、彼の大衆に詣つて共に技術を捔かんに」と、是の時超術梵志、便ち大衆の所に往至す。爾の時衆多の梵志、遙に超術梵志

たまはく、「曇摩留支は久しくして此の間に來ると爲すが故に我此の義を言ふに非らず。然る所以は、昔過去無數劫の時、[五]錠光如來・至眞・等正覺・明行成・善逝と爲し、世間解・無上士・道法御・天人師・佛・衆祐と號する有つて世に出現し、鉢摩大國に治在し、大比丘衆十四萬八千人と倶なりき。爾の時四部の衆稱計すべからず。國王・臣吏・人民の類、皆來つて供養し、其の所須を給す。爾の時梵志有り、耶若達と名け、雪山の側に在りて住し、諸の祕讖・天文・地理を看て貫博せざるはなく、書疏文字亦悉く了知し、諷誦一句五百言、大人の相も亦復了知し、諸の火神日月星宿に事へ、五百の弟子を教へて宿夜に惓まざりき。耶若達梵志に弟子有り、名けて雲雷と曰ひ、顏貌端正世の希有にして、髮は紺青色なり。雲雷梵志は聰明にして博見、事として通ぜざるはなく、恒に耶若達の爲に愛敬せられて須臾も去らず。是の時婆羅門の行ずる所の呪術盡く皆備擧す。

爾の時雲雷梵志便ち是の念を作す。「我今學ぶべき所のものは悉く皆備り已る。然して復自ら念ふに、書籍に載する所の諸有の梵志の所を學び術過ぐれば、當に師の恩を報ずべし。又我は今日學ぶべき所のもの皆復之を知る。我今宜しく師の恩を報ずべし。然るに復貧匱にして空しく、所有の用つて師に供養すべきものなければ、宜しく當に國界に往詣して所須のものを求むべし」と。爾の時雲雷梵志、便ち師の所に往至し、師に白して曰く、「梵志の學ぶ所の技術の法は今悉く知り已りぬ。然して復書籍に載する所の諸有の學術過ぐれば、當に師の恩を報ずべし。然るに復貧乏しくして、金銀珍寶の用つて供養すべきもの有ること無ければ、今國界に詣りて財物を求索め、用つて師に供養せんと欲す」と。爾の時耶若達婆羅門便ち是の念を作す。「此の雲雷梵志は我の愛する所にして心首を去らず、設し吾死すとも尙別離すること能はず、何況んや今日吾を捨て去らんと欲するをや、我今當に何の方宜を作して留めて住することを得せ使むべきや」と。是の時耶若達梵志雲雷に告げて曰く、「汝梵志、今の故に婆羅門の學ぶべきところのもの有り、卿は尙知らず」と。是の時雲雷梵

【五】錠光如來(Dīpaṅkara)。とは、燃燈佛ともいひ、過去久遠の昔に出現せし佛にして、釋尊に豫言を授けられし師佛なり。

時世尊、彼の五百の比丘の懺悔を受け、便ち與に法を說きて信根を得せしめたまひぬ。爾の時五百の比丘、閑靜處に在つて深法を思惟す。然る所以は、族姓子出家學道して、信堅固を以て無上の梵行を修すればなり、爾の時彼の五百の比丘、便ち阿羅漢を成じ、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復胎有を受けず、實の如く之を知りぬ。爾の時五百の人は阿羅漢を成じ、諸比丘は佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[二]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、無央數の衆の與に圍遶せられて法を說きたまひぬ。是の時[三]曇摩留支、靜室中に在り、獨り自ら思惟し、禪三昧に入り、前身大海中に在つて魚身と作り、長さ七百由旬なりしを觀見し、卽ち靜室より起ち、猶し力士の臂を屈伸するが如き頃に、便ち大海中の故の死屍の上に往至して經行す。爾の時曇摩留支便ち此の偈を說く、

生死無數劫　流轉して計る可からず　各々所安を求めて　數々苦惱を受く　設し復身を見已つて　意舍宅を造らんと欲するも　一切の支節壞れて　形體全きを得ず　心已に諸行を離るれば　愛著永く餘りなく　更に此の形を受けずして　長く涅槃の中に樂しむ

と。爾の時尊者曇摩留支、此の偈を說き已つて卽ち彼より沒して、舍衞の祇洹精舍に來至し、世尊の所に往至す。爾の時世尊、曇摩留支の來るを見て是の告を作して曰はく、「善い哉、曇摩留支、久しくして此の間に來れり」と。曇摩留支世尊に白して曰さく、「是の如し世尊、久しくして此の間に來れり」と、爾の時[四]上座及び諸比丘各々斯の念を生じぬ。「此の曇摩留支は恒に世尊の左右に在り、然るに今世尊は告げて曰はく、『善い哉、曇摩留支、久しくして此の間に來れり』と。

爾の時世尊、諸比丘の心中の所念を知り、狐疑を斷たんと欲したまふが故に、便ち諸比丘に告げ

【二】D'v. p.p. 346-354

【三】曇摩留支（Dhammaru-ci）。

【四】上座（Thera）。とは長老のこと。

卷の第十一

善知識品第二十

一

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に[一]善知識に親近すべし、惡行を習ひ、惡業を信ずること莫かれ、然る所以は、諸比丘、善知識に親近し、已に信ずれば便ち增益し、聞・施・智慧普く悉く增益せん。若し比丘、善知識に親近して惡行を習ふこと莫かれ、然る所以は、若し惡知識に近づかば便ち、信・戒・聞・施・智慧なし。是の故に諸比丘、當に善知識に親近すべし。惡知識に近づくこと莫かれ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦羅陀竹園所に在し、大比丘五百人と俱なりき。前後に圍遶して爲に法を說きたまひき。爾の時提婆達兜五百の比丘を將ひ、如來を去ること遠からざるを逕過す。世尊遙に提婆達兜自ら門徒を將ひるを見、便ち此の偈を說きたまはく、

惡知識に親しむ莫かれ　亦愚に從事すること莫かれ　當に善知識　人中の最勝者に近づくべし
人は本惡有ること無し　惡知識に習近せば　後に必ず惡根を種えて　永く闇冥の中に在らん

と。是の時提婆達兜の五百の弟子、世尊の此の偈を說きたまふを聞き已つて、便ち世尊の所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。斯くて須くして退いて坐し、世尊に向ひて過ちを悔ひ、「我等は愚惑にして識知する所無し。唯願はくは世尊、我等の懺悔を受けたまはんことを」と。爾の

【一】善知識(Kalyāṇamitta)とは、善き友の意。

法を說きたまひ、聞き已つて各ゝ座より起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去る。是の時女人即ち其の夜、種々の甘饌飲食を辦じ、諸の座具を敷き、淸旦便ち白さく、「時刻今正に是れ時なり。唯願はくは世尊、鄙舍を臨顧したまへ」と。爾の時世尊、衣を著け、鉢を持し、諸比丘を將ひて前後に圍遶し、毘舍離城に往至して女の舍に到りたまへり。是の時女世尊の座定まるを見、手自から食を擎げて佛及び比丘僧に上り、佛及び比丘僧に飯し已り、淸淨の水を行き已つて、更に小金鏤の座を取り、佛前に在りて坐す。爾の時女、世尊に白して曰さく、「此の菴婆婆利園を用つて如來及び比丘僧に奉上し、當來過去現在の衆僧をして、中に止住することを得しめん。願はくは世尊、此の園を受けたまへ」と。爾の時世尊、彼の女の爲の故に、便ち此の園を受けたまひ、世尊便ち此の呪願を說きたまはく、

園果は淸凉を施し　橋梁は人民を度す　近道に圊厠を作らば　人民休息を得ん　晝夜に安穩を獲　其の福計るべからず　諸法戒成就し　死して必ず天上に生れん

と。爾の時世尊、此の語を說き已り、即ち起ちて去りたまふ。爾の時女、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

斷愛及び師子　無智と少と財と　家貧しきと須深女　迦旃と法說と女となり

增壹阿含經卷第十

の法の如く、毘舍離城を出でゝ世尊の所に往至す。未だ到らざる頃の道に、彼の女の走つて車牛を打つて城内に馳せ向ふに逢ふ。

是の時諸の童子、女に問うて曰く、「汝是れ女人、當に羞辱すべし、何を以て牛を打ち、車を走せて城内に馳せ向ふや」と。時に女報へて曰く、「諸賢、當に知るべし、我明日、佛及び比丘僧を請ぜり、是の故に車を走らす耳」と。童子報へて曰く、「我も亦佛及び比丘僧に飯はさんと欲せば、今汝に千兩の純金を與へんに、明日を限り、我等をして飯はさしめよ」と。時に女報へて曰く、「止みなん、止みなん、族姓子、我は聽許じ」と。童子復報ふ、「汝に二千兩・三千・四千・五千乃至百千兩金を與へんに、是非聽許せよ。明日我等をして佛及び比丘僧に飯はさしめよ」と。女報へて曰く、「我は聽許さじ。然る所以は、世尊は恒に說きたまへり。「二の希望有り、世の人捨離すること能はず、云何が二と爲すや、利望と命望となり。誰か能く我を保して、明日に至るとならば、我以て先づ如來を請じ、今當に具を辯ずべし」と。時に諸の童子各ゝ其の手を振り、「我等爾許の人女人に如かざるなり」と、是の語を作し已つて各ゝ自ら別れ去りぬ。時に諸の童子世尊の所に往至し、頭面に禮を作し、一面に在りて住す。其の時世尊、童子の來るを見、諸比丘に告げたまはく、「汝等比丘、諸の童子の威容服飾、天帝釋の出でゝ遊觀する時の如く、等しくして差別なきを觀ぜよ」と。

爾の時世尊、童子に告げて曰まく、「世間に二事有り、最も得べからず、云何が二と爲すや、反復の人有り、小恩を作して常に忘れず、況んや復大なるをや。是れを諸の童子、此の二事有り、最も得べからずと謂ふなり。童子、當に知るべし。念じて反復有れば、亦小恩をして忘れざら使むことを識る。況んや復大なるをや」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

恩を知つて反復を識り　恒に念じて人に教授せば　智者は敬侍せ所れ　名天と世人に聞えん

是の如く諸の童子、當に是の學を作すことを知るべし」と。爾の時世尊、具に諸の童子の與に微妙の

聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「二人有り、世間に出現して甚だ遇ふこと得難し。云何が二人と爲すや、能く法を說くの人、世に出現し甚だ値ふこと得難し、能く法を聞き人受持し奉行するもの甚だ値ふこと得難し。是れを比丘、此の二人有つて世間に出現し、甚だ遇ふこと得難しと謂ふなり。是の故に諸比丘、當に說法を學ぶべし。聞法を學ぶべし。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十一

[二六]聞くこと是の如し、一時佛、摩竭國界に遊び、漸く[二七]毘舍離城に來至したまへり。爾の時毘舍離の北の[二八]菴婆婆利園中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時[二九]菴婆婆利女、世尊來つて園中に在し、大比丘五百人と倶なりと聞きぬ。爾の時彼の女は羽寶の車に駕乘し、便ち往いて毘舍離城を出で、俠き道の口に至り、即ち世尊の所に到り、自ら車を下り、世尊の所に往至す。爾の時世尊、遙に彼の女の來るを見、便ち諸比丘に告げたまはく、「皆悉く專精して邪想を起すこと勿れ」と。是の時女人、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時世尊極妙の法を說きたまひ、極妙の法を說き已りたまふや、女佛に白して言さく、「唯願はくは世尊、當に我請を受くべし、及び比丘僧」と、爾の時世尊默然として女の請を受けたまへり、女世尊の默然として請を受けたまへるを見已つて、即ち座より起ち、頭面に足を禮し、復の道を歸へりぬ。

爾の時毘舍離城の男女大小、世尊菴婆婆利園中に在し、大比丘衆五百人と倶なりと聞きぬ。時に城中に五百の童子有り、種々の羽寶の車に乘り、其の中の或ものは白車白馬に乘り、衣蓋・幢幡・侍從皆白し。其の中の或ものは赤車、赤馬に乘り、衣蓋・幢幡・侍從皆赤し。或ものは青車、青馬に乘り、衣蓋・幢幡・侍從皆青し。或ものは黃車、黃馬に乘り、衣蓋・幢幡・侍從皆黃し。威容嚴飾、諸王

【二六】D. 16. Mahāparinibbāna s. 2. 12-25)。
【二七】毘舍離(Vesāli)
【二八】菴婆婆利(Ambapāli)。
【二九】菴婆婆利女は、毘舍離の娼婦なりしが、歸佛して、その所有の林園を寄進せり。

ず」と、迦遮延曰く、「婆羅門、當に知るべし、彼の如來至眞等正覺は此の二地を說きたまへり。云何が二地と爲すや、一を[二四]老地と名け、二を[二五]壯地と名く」と。婆羅門問うて曰く、「何をか老地と爲し、何をか壯地と爲すや」。迦遮延曰く、「正使婆羅門、年八十九十に在るとも、彼の人婬欲を止めず、諸の惡行を作さば、是れを婆羅門、老と言ふべしと雖も、今は壯地に在るなり」と。婆羅門曰く、「何者か年壯にして、老地に住在するや」、迦遮延曰く、「婆羅門、若し比丘有つて、年二十、或は三十、四十、五十に在るとも、彼亦婬欲を習はず、亦惡行を作さずば、是れを婆羅門、年壯にして老地に在りと謂ふなり」と。婆羅門問うて曰く、「此の大衆中に一比丘として婬法を行ぜず、惡行を作さゞるもの有りや」と。迦遮延曰く、「我大衆中には一比丘として欲を習ひ、惡を作す者有ることなし」と。時に彼の婆羅門卽ち座より起ち、諸比丘の足を禮し、並に是の語を作す、「汝今年少にして老地に住するも、我は今年老いて少地に住す」と。爾の時彼の婆羅門復迦遮延の所に往至し、頭面に足を禮し、自ら陳べて說く、「我今自ら迦遮延及び比丘僧に歸す、形壽を盡して殺さず」と。迦遮延曰く、「汝今自ら我に歸すること莫かれ、我の自ら歸する所の者、汝之に趣向すべし」と。婆羅門曰く、尊者迦遮延、自ら誰に歸を爲すや」、時に尊者迦遮延、便ち長跪して如來の般涅槃したまひし所に向ひ、「釋種子有り、出家學道せり。我恒に自ら彼に歸しまつる。然して彼の人は卽ち是れ我師なり」と。婆羅門曰く、「此の沙門瞿曇は何處に在りと爲すや、我今之を見んと欲す」と。迦遮延曰く、「彼の如來は已に涅槃を取り給へり」と。婆羅門言く、「若し如來世に在さば、我乃ち百千由旬なるも往いて之を問訊すべし。彼の如來は涅槃を取りたまひしと雖も、我今重ねて、自ら歸して佛と法と衆とに禮を作し、其の形壽を盡して復殺生せざらん」と。爾の時上色婆羅門、尊者迦遮延の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

【二四】老地(Vuddhn-bhūmi)。
【二五】壯地(Daharabhūmi)。

ことなきに由るが故に、是の故に世尊は、彼の人何の時に當に苦際を盡すべしと記したまはざるなり」と。須深女人曰く、「是に於て如來已に涅槃に趣きたまへり、是の故に之を問うことを得ざりしなり。若し當に世に在さば、往いて其の義を問うべし、如し今尊者拘絺羅我與に之を說け、彼の人は何の時に當に苦際を盡すべき」と。爾の時尊者拘絺羅、便ち此の偈を說く、

　種々の果は同じからず　衆生の趣も亦然り　自ら覺めて人を覺す者　我に此の辯說なし　禪智解脫の辯　本[一九]天眼通を憶し　能く苦の原本を盡くす　我に此の辯說なし

爾の時須深女人便ち此の偈を說く、

　善逝に此の智有り　質直にして瑕穢なし　勇猛伏する所有り　大乘の行を求む

と、是の時尊者拘絺羅復此の偈を說く、

　是の意甚だ得難し　能く異法の要を獲　爲し難きを能く之を辦じ　奇特の事に向ふ

と、爾の時尊者、彼の須深女人の與に、具に法の要を說き、便ち喜びの心を發す、時に彼の女人卽ち座より起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去る。時に須深女人、尊者拘絺羅の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

[二〇]聞くこと是の如し、一時尊者[二一]摩訶迦遮延、[二二]婆那國の深池水側に遊び、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時尊者迦遮延、此の名聞有りて四遠に流聞す。尊者長老、[二三]姦荼婆羅門此に在りて遊化す。爾の時婆羅門、「尊者迦遮延此の池の側に在り、遊化して五百の比丘を將ひ、尊者長老功德を具足す」と聞き、「我今往いて彼の人を問訊すべし」と。是の時上色婆羅門、五百の弟子を將ひて、尊者迦遮延の所に往至し、共に相問訊し、一面に在りて坐す。爾の時此の婆羅門、尊者迦遮延に問うて曰く、「迦遮延の所行の如きは此れ法と律とに非ず、年少の比丘なるに我等諸高德の婆羅門に向ひて作禮せ

【一九】天眼通は、五通の一、肉眼を超越してあらゆるものを見分ける非凡の視力をいふ。

【二〇】A. II 4. 7。

【二一】摩訶迦遮延（Mahākaccāna）。

【二二】婆那國深池水側は、巴利文にては（Madhura, Gundāvana）となる。

【二三】姦荼婆羅門（Kaṇḍarāyana）。

なり。是れを比丘、此の二法有り、人をして富貴なら令むと謂ふなり。是の如く諸比丘、當に惠施を學んで、貪りの心有ること勿るべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の二法有り、人をして貧賤の家に生れ令む。云何が二法と爲すや、父母諸尊師長に孝せざると、亦已に勝さる者に承事せざるとなり。是れを比丘、此の二法有つて、人をして貧賤の家に生れ令むと謂ふなり。諸比丘、復二法有り、豪族の家に生る。云何が二と爲すや、父母兄弟宗族を恭敬し、將て已の家に至つて所有を惠施するとなり。是れを比丘、此の二法有つて、豪族の家に生ると謂ふなり。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時梵志女を須深と名く、尊者、[一四]大拘絺羅の所に往至し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在つて坐す。爾の時彼の梵志女須深、拘絺羅に白して曰く、「[一五]優蹋藍弗・羅勒伽藍、此の深法中に竟に化を受けずして各々命終を取れり。世尊は此二人を記して曰はく、『一人は[一六]不用處に生れ、一人は[一七]有想無想處に生る、此の二人は其の壽命盡きて各々復命終し、一人は當に邊地の國王と爲るべし。人民を傷害すること稱計すべからず。一人は當に著翅惡狸と爲るべし、飛行走獸は脫を得ることなく、命終の後各々地獄の中に生る』と。然して復世尊は彼の人何の時に當に苦際を盡くべしとは[一八]記したまはず、何故に世尊は彼の人の當に苦際を盡すべきを記したまはざるや」と。

爾の時尊者拘絺羅、須深女人に語りて曰く、「世尊の說きたまはざる所以は、皆人の此の義を問ふ

【一四】大拘絺羅（Mahakoṭṭhita）佛弟子中四無得達第一と稱せらる。舍衞城の婆羅門の出身。

【一五】優蹋藍弗（Uddaka Rāmaputta）羅勒伽藍（Āḷāra Kālāma）此の二人は釋尊出家の最初に、師とせしもの、王舍城の郊外に住せし仙人。優蹋藍弗は有想無想處に、羅勒伽藍は不用處の禪定の恍惚境に醉ひ、これを以て證悟となせしもの、轉法輪の初めに、此の二人に說法せんとせられしも、いづれも時既に沒して在らざりき。

【一六】不用處とは、無所有處（Ākiñcaññāyatana）ともいひ、識無邊處定を超越して、何ものもなしといふ不用處定に入りしものゝ生るゝ天界。

【一七】優蹋藍弗の入りし境地は非想非々想處定とせらる。非想非々想處（Nevasaññānāsaññāyatana）とは、不用處定を超越して、想の有無を離れし狀態卽ち非想非々想處定に入りしものゝ生るゝ天界。

【一八】記すとは、記莂すること、卽ち豫告すること。

四

[二] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「世間に此の二人有つて、若し雷電霹靂を見るも恐怖有ることなし。云何が[三]二人と爲すや、獸王師子と漏盡阿羅漢となり。是れを比丘此の二人有つて、世間に在りて、若し雷電霹靂を見るも恐怖を懷かずと謂ふなり。是の故に諸比丘、當に漏盡阿羅漢を學ぶべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の二法有つて人をして智慧有ることなから令む。云何が二法と爲すや、喜びて勝人に問ふを喜ばざると、但睡眠を貪りて精進の意なきとなり、是れを比丘、此の二法有つて人をして智慧有ること無から令むと謂ふなり。復二法有り、人をして大智慧を成ぜしむ。云何が二法と爲すや、好みて他義を問ふと、睡眠を貪らずして精進の意有るとなり。是れを比丘、此の二法有り、人をして智慧有らしむと謂ふなり。當に學んで惡法を遠離すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の二法有り、人をして貧賤にして財貨有ること無から令む。云何が二法と爲すや、若し他の施しを見る時、便ち之を禁じ制すると、又自ら布施を肯ぜざるとなり。是れを比丘、此の二法有り、人をして貧賤にして、財寶有ることなからしむ。比丘、復二法有り、人をして富貴無から令む。云何が二法と爲すや。若し人の他に物を與ふるを見る時、其れを助けて歡喜すると、已好んで布施すると

【二】 A. II 6. 8

【三】 二人とは、巴利文に、(Bhikkhu ca khīṇāsavo sīho ca migarājā.)。

知り已り、若しは苦、若しは樂、若しは不苦不樂は無常なりと觀了し、滅し盡して餘りなく、亦斷壞なし。彼已に此れを觀じ已れば、都て所著なく、已に世間想を起さず、復恐怖なく、已に恐怖なければ便ち般涅槃す。生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復有を受けず、實の如く之を知る。是れを釋提桓因、比丘は欲を斷じて心解脱を得、乃ち究竟無爲の處に至り、患苦有ることなく、天人の敬ふ所と謂ふなり』と。爾の時我此の語を聞き已つて便ち世尊の足を禮し、遶ること三匝、即ち退いて去り、天上に還歸せり」と。是の時尊者大目犍連、深法の語を以て釋提桓因に向ひ、及び毘沙門に向ひて具に之を分別す。

爾の時目犍連具に説法し已つて、猶し士夫の臂を屈伸するが如き頃に、三十三天より沒して現ぜず、便ち舍衞城祇樹給孤獨園に來至し、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時目犍連即ち座上に於て、世尊に白して曰さく、「如來は前に釋提桓因の與に除欲の法を説きたまへり。唯願はくは世尊、當に我與に之を説きたまへ」と。爾の時世尊、目犍連に告げて曰はく、「汝當に之を知るべし、釋提桓因我所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時釋提桓因我に此の義を問へり、『云何が世尊、比丘は愛欲を斷じ、心解脱を得るや』と。爾の時我釋提桓因に告げて曰く、『拘翼、若し比丘有つて、一切諸法は空にして所有なく、亦所著なしと解知せば、盡く一切諸法を了して、所有なしと解し、以て一切諸法は無常にして、滅盡して餘りなく、亦斷壞なしと知る。彼已に此れを觀じ已れば、都て所著なく、已に世間想を起さず。復恐怖なく、已に恐怖なければ便ち般涅槃し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復有を受けず、實の如く之を知る。是れを釋提桓因、比丘欲を斷じて心解脱を得ると謂ふなり』と。爾の時釋提桓因即ち座より起ち、頭面に我足を禮し、便ち退いて去り、天上に還歸せり」と。爾の時大目犍連、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

坐しぬ。鬪ひ勝ちしに因るが故に、故に名けて最勝講堂となす。階巷行を成すに陌々相値ふ。一々の階頭に七百の樓閣有り、一々の樓閣の上に各〻七玉女有り、一々の玉女に各〻七使人有り、願はくは目連彼に在つて觀看せよ」と。

爾の時釋提桓因及び毘沙門天王、尊者目連の後に在つて最勝講堂の所に往至す。是の時釋提桓因及び毘沙門天王、大目犍連に白して曰く「此れは是れ最勝講堂なり、悉く遊看すべし」と。目犍連天王に曰ふ「此の處は極めて微妙と爲す。皆前身の所作の福祐に由るが故に、此の自然の寶堂を致す。猶し人間小しく樂しみ有る處は、各〻自ら慶賀するが如く、天宮の如きも異ることとなし。皆前身の作福に由つて致す所なり」と。爾の時釋提桓因の左右の玉女各〻馳け走りて如く所を知ること莫し、猶し人間禁忌する所有れば皆慚愧を懷くが如し。是の時釋提桓因の將ひる所の玉女も亦復是の如く、遙に大目犍連の來るを見、各〻馳け走つて湊る所を知ること莫し。時に大目犍連便ち是の念を作す「此の釋提桓因は意甚だ放逸なり、我今宜しく恐怖を懷かしむべし」と。是の時尊者大目犍連、即ち右の脚指を以て地を案ずれば、彼の宮殿六返震動す。是の時釋提桓因及び毘沙門天王皆恐怖を懷き、衣毛皆竪ちて是の念を作さく「此の大目犍連は大神足有つて乃ち能く此の宮殿をして六返震動せしむ、甚奇甚特にして未だ曾て是れ有らず」と。是の時大目犍連便ち是の念を作す「今此の釋は身に以て恐怖を懷く、我今宜しく其の深義を問うべし」と。「云何が拘翼」如來の說き給ふ所の愛欲を除く經とは、今正に是れ時なり、唯願はくは我等の與に說け」と。釋提桓因報へて言く、「目連、我前に世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて住す。是の時我即ち世尊に白して曰さく『云何が比丘、愛欲を斷じ、心解脫を得、乃ち究竟無爲處に至り、患苦有ること無く、天人の敬ふ所ぞ』、爾の時世尊、便ち我に告げて言はく『是に於て拘翼、諸比丘は法を聞き已れば、都て所著なく、亦色に著せず、盡く一切の諸法を了して所有なしと解し、以て一切の諸法を

到り已つて頭面に足を禮し、一面に在つて住し、世尊に白して曰さく、「云何が比丘、愛欲を斷じて心解脫を得、乃ち究竟安穩の處に至り、諸患有ること無く、天人の敬ふ所となるや」と。爾の時世尊、釋提桓因に告げて曰はく、「是に於て〔一〕拘翼、若し是れ比丘にして、此の空法を聞きて無所有を解せば、則ち一切の諸法を解了することを得、實の如く之を知らん。身に覺知する所の苦樂の法、若しは不苦不樂の法は卽ち此の身に於て悉く無常にして皆空に歸すと觀じ、彼已に此の不苦不樂の變を觀じて亦想を起さず、已に想有ることなくば則ち恐怖なく、已に恐怖なくば則ち般涅槃し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復有を受けず。實の如く之を知る。是れを釋提桓因、比丘は愛欲を斷じて心解脫を得、乃ち究竟安穩の處に至りて災患有ることなく、天人の敬ふ所と謂ふなり」と。爾の時釋提桓因、世尊の足を禮し已つて遶ること三匝して退けり。

爾の時に當つて、尊者大目犍連、世尊を去ること遠からざるところに結跏趺坐し、身を正し、意を正し、繫念して前に在り。爾の時尊者大目犍連便ち是の念を作さく、「向者帝釋道跡を得て事を問ひしにや、道跡を得ずと爲して義を問ひしにや、我今當に之を試むべし」と。爾の時尊者大目犍連、卽ち神足を以て臂を屈伸するが如き頃に、便ち三十三天に至れり。爾の時釋提桓因、遙に大目犍連の遠くより來るを見、卽ち起ちて奉迎し、並に是の語を作さく、「善くぞ來れり、尊者大目犍連、尊は自ら此に至らざること亦大に久し、願はくは尊と與に法義を論說せんと欲す、願はくは此の處に在つて坐せよ」と。是の時目犍連、釋提桓因に問うて曰く、「世尊は汝の與に愛欲を斷ずるの法を說きたまへり、我之を聞かんと欲す、今正に是れ時なり、我與に之を說くべし」と。釋提桓因白して言く、「我今諸天の事猥りに多し。或は自ら事有り、或は復諸天の事有りて、我聞く所のものは卽時に忘れたり。昔目連、諸の阿須倫と共に鬪ひぬ。鬪ひの日に當つて諸天勝つことを得て阿須倫退けり。爾の時我身と躬往いて自ら戰ひ、尋で復諸天を領して上天宮に還えり、最勝の講堂に

【一】拘翼。釋提桓因のこと。前に出づ。

梵天今來り　如來に法門を開くことを勸む　聞者篤き信を得よ　深法の要を分別せん　猶高山の頂に在りて　普く衆生の類を觀ず　我今此の法有り　堂に昇りて法眼を現ぜん

と、爾の時梵天便ち是の念を作す、「如來は必ず衆生の爲に深妙の法を說きたまはん」と、歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず。頭面に足を禮し已つて、卽ち天上に還える。爾の時梵天、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

[七]聞くこと是の如し。一時佛、[八]波羅㮈國仙人鹿苑中に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の[九]二事有りて、學道の者は親近すべからず。云何が二事と爲すや。所謂著欲及び樂の法なり。此れは是れ下卑凡賤の法なり、又此れ諸苦衆惱百端なり。是れを二事(ありて)學道の者は親近すべからずと謂ふなり。是の如く此の二事を捨て已り、我自ら至要の道有りて、正覺を成ずることを得、眼生じ、智生じ、意休息を得、諸の神通を得て沙門果を成じ涅槃に至れり。云何が至要の道と爲し、正覺を成ずることを得て眼生じ、智生じ、意休息を得、諸の神通を得て、沙門果を成じ、涅槃に至るや。所謂此れ賢聖八品道是れなり。所謂等見・等治・等語・等業・等命・等方便・等念・等定なり。此れを至要の道と名く。今我正覺を成ずることを得て、眼生じ、智生じ、意休息を得て諸の神通を得、沙門果を成じて涅槃に至りぬ。是の如く諸比丘、當に上の二事を捨て、至要の道を習ふことを學ぶべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

羅云・迦葉・龍　二難・大愛道　誹謗・非梵請　二事は最も後に在り

三

[一〇]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時釋提桓因、世尊の所に至り、

【四】優鉢蓮華(Uppala)とは、青い蓮華。
【五】拘牟頭華(Kumuda)とは、赤蓮華。
【六】分陀利華(Puṇḍarika)。
【七】M. 26 Ariyapariyesana. S. 56. 11 Dhammacakka. 雜阿含卷十五の第十六經。
【八】波羅捺國仙人鹿苑(Bārāṇasī Isipatana Migadāya)。波羅捺は今のベナレス。仙人は具には仙人墮處又は仙人住處といひ、鹿苑は具には鹿野苑といひ、今のベナレス市の北サルナート(Sārnāth)。鹿に施し、鹿のこの林園に自由に棲むを許されしよりこの名あり。
【九】二事とは、禁欲と快樂との二の極をいふ。
【10】M. 37. Taṇhāsaṅkhaya.

巻の第十

勸請品第十九

一

[一]聞くこと是の如し。一時佛、摩竭國道場樹下に在しき。爾の時世尊、道を得て未だ久しからずして、便ち是の念を生じたまへり。「我今甚深の法曉り難く了し難く、覺知すべきこと難く、思惟す可からず。休息微妙の智者の覺知する所にして、能く義理を分別し、之を習ふて厭はざれば、卽ち歡喜を得ん設し吾人の與に妙法を說くとも、人信受せず、亦奉行せずば、唐しく其の勞有つて則ち所損有らん。我今宜しく默然たるべし、何ぞ說法を須ひん」と。

爾の時梵天、梵天上に在つて、遙に如來の所念を知り、猶し[二]士夫の臂を屈伸するが如き頃に、梵天上より沒して現ぜず、世尊の所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて住す。爾の時梵天、世尊に白して曰さく、「此の閻浮提は必ず當に[三]三界を壞敗して目を喪ふべし。如來至眞等正覺は世に出現したまひて法寶を演ぶ應きに、然るに今復法味を暢演したまはず。唯願はくは如來、普く衆生の爲に廣く深法を說きたまはんことを。又此の衆生の根源度し易し。若し聞かずば永く法眼を失はん。此れ法の遺子たる應し。猶し[四]優鉢蓮華、[五]拘牟頭華、[六]分陀利華の、地より出づと雖も、未だ水上に出でず。或は時に此の華以て水上に出で、或は時に此の華爲に水に著せられざるが如し。此の衆生の類も亦復是の如く、生老病死の爲に逼促せ所見て諸根熟すべし。然るに法を聞かずして便ち喪はゞ、亦苦ならずや、今正に是れ時なり。唯願はくは世尊、當に爲に法を說くべし」と。爾の時世尊、梵天の心中の所念を知り、又一切の衆生を慈愍したまふが故に此の偈を說いて曰はく、

【一】 S. 6. 1. 1 Brahmayācana D. 14. 3. 2. Mahāpadāna s. Mahāvagga I. 5 1-13 M. 26 Ariyapariyesana s. vol. I. P. 168

【二】 士夫とは、壯年の血氣盛んなもの。

【三】 三界（Tayo dhātavo）とは欲界（Kāmadhātu）・色界（Rūpadhātu）・無色界（Arūpadhātu）の三をいひ、迷ひの衆生の流轉する世界を三種に分ちしものにして、又三有ともいふ。欲界とは食欲・色欲・睡眠欲など存し、所謂欲情の支配を受くるところにして、五趣と六欲天より成り、色界とは淨妙の色法の存するところ、卽ち四禪天これにして、欲界の上に存し、欲情の支配を脫し、欲界の如き粗雜なる物質なきも、未だ物質の囚れを脫せずして、微細なる物質存するが故に色界と名く。無色界とは色法卽ち物質の存することなき世界にして、四無色天これなり、心作用のみ存する天界をいふ。

〔三〕聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の二人有つて如來に於て誹謗を興す。云何が二人と爲すや、謂く非法を是法と言ひ、謂く法を是れ非法と言ふ。是れを二人、如來を誹謗すと謂ふなり。復二人有つて如來を誹謗せず、云何が二と爲すや、所謂非法なれば卽ち是れ非法、眞法なれば卽ち是れ眞法と、是れを二人如來を誹謗せずと謂ふなり。是の故に諸比丘、非法は當に非法と言ふべし。眞法は當に眞法と言ふべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

〔三〕聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の二人有つて福を獲ること無量なり、云何が二と爲すや、所謂稱譽すべき者は便ち之を歎譽し、稱すべからざる者は亦これを稱歎せず。是れを二人、福を獲ること無量と謂ふなり。復二人有つて罪を受くること無量なり。何等を二と爲す、所謂稱歎すべきに、反つて更に誹謗し、稱歎すべからざる者を更に稱歎するなり。諸比丘是の學を作すこと莫かれ」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

増壹阿含經卷第九

【三】A. II 3. 5 參照。
【三】A. II 12. 6

はく、

我今難陀の　沙門の法を修行して　諸惡皆以て息み　頭陀に失有ることなきを見る

と。爾の時世尊、諸比丘に告げて言はく、「阿羅漢を得しもの、今難陀比丘是れなり、婬怒癡なきもの、亦是れ難陀比丘なり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

聞くこと是の如し、一時佛、釋翅瘦迦毘羅越尼拘留園中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時〔三〕大愛道瞿曇彌、便ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、世尊に白して曰さく、「願はくは世尊、長く愚冥を化して恒に生命を護りたまへ」と、世尊告げて曰はく、「瞿曇彌、如來に向つて是の言を作すべからず、如來は延壽無窮にして、恒に其の命を護る」と。是の時大愛道瞿曇彌、卽ち此の偈を說く、

云何が最勝を禮せん　世間に與に等しきもの無く　能く一切の疑を斷ちたまふ　是れに由つて此の語を說く

と。爾の時世尊、復偈を以て瞿曇彌に報へて曰はく、

精進して意缺け難く　恒に勇猛の心有つて　平等に聲聞を視れば　此れ則ち如來を禮するなり

と。是の時大愛道世尊に白して曰さく、「今より以後當に世尊を禮すべし。如來は今勅して一切衆生を視るに意に增減なし。天上・人中及び阿須倫に、如來を上りて爲す」と。是の時世尊、大愛道の所說を可し、卽ち座より起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去る。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我聲聞中の第一の弟子にして廣識多知なるものは所謂大愛道是れなり」と。是の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

〔三〕大愛道瞿曇彌（Mahāpajāpati Gotamī）。前に出づ。

しく我爲めのみ」と。世尊の所に來至し、頭面に足を禮し、世尊に白して曰さく、「願くは懺悔を受けたまへ、我自ら罪あり、梵行を修めずして如來を觸嬈するに緣る」と。爾の時尊者難陀、便ち此の偈を說く、

　人生は貴ぶに足らず　天壽盡くれば亦喪ふ　地獄の痛み酸苦にして　唯涅槃有りて樂し

爾の時世尊難陀に告げて曰はく、「善い哉、善い哉、汝の所言の如し、涅槃は最も是れ快樂し、難陀、汝の懺悔を聽す、汝は愚、汝は癡、自ら咎有るを知る。如來の所に於て今汝の悔過を受く、後更に犯すこと莫かれ」と。爾の時世尊、臂を屈伸する頃に、手に難陀を執へ、地獄より現ぜずして便ち舍衛城祇樹給孤獨園に至りたまひぬ。

　爾の時世尊、難陀に告げて曰はく、「汝今難陀、當に二法を修すべし。云何が二法と爲すや、所謂止と觀なり。復當に更に二法を修むべし。云何が二法と爲すや、生死は樂しむ可からず、涅槃は樂しみ爲りと知る。是れを二法と謂ふなり。復當に更に二法を修すべし。云何が二法と爲すや、所謂智と辯となり」と。爾の時世尊、此の種々の法を以て難陀に向つて說きたまふ。是の時尊者難陀、世尊より敎へを受け已つて座より起ち、世尊の足を禮し、便ち退いて去り、[二〇]安陀園に至り、到り已つて、一樹下に在つて結跏趺坐し、身を正し、意を正し、繫念して前に在つて、如來の斯の如き言敎を思惟す。是の時尊者閑靜處に在り、恒に如來の敎へを思惟して須臾もあらず、所以は族姓子信牢固を以て出家學道し、無上の梵行を修め、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復有を受けず、實の如く之を知る。是の時尊者難陀、便ち阿羅漢を成じ、已に阿羅漢を成じて卽ち座より起ち、衣服を整へて世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時尊者難陀世尊に白して曰さく、「世尊前に弟子に五百の天女を許證したまひしも、今盡く之を捨つ」と。世尊告げて曰はく、「汝今生死已に盡き、梵行已に立てり。吾卽ち之を捨つ」と。爾の時便ち偈を說いて曰

【二〇】 安陀園(Andhavana)。舍衛城の郊外にありし比丘尼の精舍の林園。比丘は祇園精舍に止住し、比丘尼は安陀園に止住せり。

に云何、難陀、汝の意に云何」と。難陀報へて曰さく、「爾の時卽ち自ら念を生ぜり、『我は是れ世尊の弟子、又且復是れ佛の姨母の兒なり、此の諸の天女は盡く當に我が爲に妻と作るべし』と。世尊告げて曰はく、「快い哉、難陀、善く梵行を修めば、我當に汝の爲に證を作し、此の五百の女人をして皆給使を爲さ使むべし」と。世尊復告げたまはく、「云何が難陀、孫陀利釋女は妙なりや、是の五百の天女を妙と爲すや。」難陀報へて曰さく、「猶し山頂の瞎の獼猴の孫陀利の前に在つて、光澤有ること無く、亦色有ること無きが如し、此れも亦是の如し。孫陀利は彼の天女の前に在れば、亦復是の如く、光澤有ることなけん」と。世尊告げて曰はく、「汝善く梵行を修めよ、我當に汝、此の五百の天女を得ることを證すべし」と。

爾の時世尊便ち是の念を作したまはく、「我今當に火を以て難陀の火を滅すべし」と。猶し力人の臂を屈伸するが如き頃に、世尊は右手に難陀の臂を執へ、將ひて地獄の中に至りたまへり、爾の時地獄の衆生、若干の苦惱を受く、爾の時彼の地獄の中に一の大鑊有り、空しくして人有ることなし。見已つて便ち恐怖を生じ、衣毛皆竪つ。前んで世尊に白して曰さく、「此の諸の衆生皆苦痛を受くるに唯此の釜有りて獨り空しくして人無し」と。世尊告げて曰はく、「此れは名けて阿毘地獄と爲す」と。爾の時難陀倍す復恐怖し、衣毛皆竪ち、世尊に白して曰さく、「此れは是れ阿毘地獄にして獨り自ら空なりや、亦罪人無きや」と。世尊告げて曰はく、「汝難陀、自ら往いて之を問へ」と。是の時尊者難陀、便ち自ら往いて問うて曰く、「云何が獄卒、此れは是れ何の獄、此れは是れ何の獄にして空しく人有ること無きや」と。獄卒報へて曰く、「比丘當に知るべし、釋迦文佛の弟子に名けて難陀と曰ふ。彼如來の所に於て梵行を淨修し、身壞命終して善處天上に生れ、彼に於て壽千歲、快く自ら娛樂し、復彼に於て終り、此の阿毘地獄の中に生ぜん。此の空鑊は卽ち是れ其の室なり」と。時に尊者難陀、此の語を聞き已つて便ち怖懼を懷き、衣毛皆竪つ。卽ち此の念を生ず、「此の空釜は正

釋種を妙となすや、此の瞎の獼猴を妙となすや」と。難陀對へて曰さく、「猶し人有つて極惡の犬の鼻を傷つけ、復毒を加へて彼の犬に塗りて、倍惡なるが如し。此れも亦是の如く、孫陀利釋女は今、此の瞎の獼猴を以て相比するに喩へをなすべからず。猶し大火積の山野を梵燒し、加ふるに益々乾薪を以てせば、火轉じて熾然たるが如し。此れも亦是の如く、我彼の釋女を念じて心懷を去らず」と。

爾の時世尊、臂を屈伸するが如き頃に、彼の山より現ぜずして便ち三十三天に至りたまへり、爾の時三十三天上の諸天普く善法講堂に集る。善法講堂を去ること遠からざるに復宮殿有り、五百の玉女自ら相娛樂す。純ら女人有つて男子有ることなし。爾の時難陀遙に五百の天女の倡伎樂を作し、自ら相娛樂するを見、見已つて世尊に問うて曰さく、「此れは是れ何等ぞ、五百の天女倡伎樂を作して自ら相娛樂するや」と。世尊告げて曰はく、「汝難陀、自ら往いて之を問へ」と。是の時尊者難陀、便ち五百の天女の所に往至し、彼の宮舍を見るに好座具を敷くこと若干百種、純ら是女人にして男子有ることなし。是の時尊者難陀、彼の天女に問うて曰く、「汝等、是れ何の天女ぞ、各ゝ相娛樂して快樂是の如きや」と。天女報へて曰く、「我等五百人有り、悉く皆清淨にして夫主有ること無し、我等聞くならく、世尊に弟子有り、名けて難陀といふ。是れ佛の姨母の兒なり。彼如來の所に於て清淨にして梵行を修め、命終の後當に此の間に生れ、我等の與に夫主となり、共に相娛樂すべし」と。是の時尊者難陀甚だ喜悅を懷き、自ら勝ふること能はず、便ち是の念を作す。「我今是れ世尊の弟子なり、且又復是れ姨母の兒なり。此の諸の天女は皆當に我が爲に婦と作るべし」と。是の時難陀便ち退いて去り、世尊の所に至り、世尊告げて曰はく、「云何が難陀、彼の玉女は何をか言說する所ぞ」と。難陀報へて曰さく、「彼の玉女は各々是の說を作す。『我等は各ゝ夫主無し、聞くならく世尊に弟子有り、善く梵行を修め、命終の後當に此に來生すべし』」と。世尊告げて曰はく、「難陀、汝の意

く、「世尊は難陀を喚びたまふ」と。對へて曰く、「是の如し」と。爾の時難陀比丘、尋で此の比丘に隨ひ、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在つて坐す。是の時世尊、難陀に告げて曰はく、「云何が難陀、梵行を修むることを樂しまずして、法衣を脫ぎ、白衣の行を欲するや」と。難陀對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊告げて曰はく、「何を以ての故にや、難陀」、難陀對へて曰さく、「欲心熾盛にして自ら禁むること能はず。」世尊告げて曰はく、「云何が難陀、汝族姓子にして出家學道せしに非ずや」と。難陀對へて曰さく、「是の如し、世尊、我は是れ族姓子なり、信牢固を以て出家學道せり」と。世尊告げて曰はく、「汝族姓子、此れ、其の宜しきに非ず、已に家を捨てゝ道を學び、清淨の行を修むるに、云何が正法を捨てゝ穢汚を習はんと欲するや。難陀、當に知るべし。二法有りて厭足なく、若し人有つて此の法を習はゞ、終に厭足なからん。云何が二法と爲すや。所謂婬欲及び飲酒なり。是れを二法厭足なしと謂ふなり。若し人有つて此の二法を習はゞ終に厭足なく、此の行果に緣るも亦無爲の處を得ること能はざらん。是の故に難陀、當に念じて此の二法を捨つべし。後必ず無漏の報ひを成ぜん。汝今難陀、善く梵行を修せよ。道に趣くの果にして之に由らざるは無し」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

屋を蓋ふに密ならずば　天雨ふれば則ち漏る　人惟行はずば　婬怒癡漏らん　屋を蓋ふに善く
密なれば　天雨ふるも漏らず　人能く惟行はば　婬怒癡無からん

爾の時世尊、復是の念を作したまはく、「此の族姓子は欲意極めて多し、我今宜しく火を以て火を滅すべし」と。是の時世尊、卽ち神力を以て手に難陀を執り、猶し力人の臂を屈伸するが如き頃に、難陀を將いて香山上に至りたまへり。爾の時山上に一の巖穴有り、復一瞎の獼猴有り、彼に在つて住して止まる。是の時世尊、右手に難陀を執らへ、之に告げて曰はく、「汝難陀、此の瞎の獼猴を見るや不や」と、對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊告げて曰はく、「何者か妙となす、孫陀利

一比丘に告げたまはく、「汝速に難陀比丘に往至し、『如來は卿を呼びたまふ』」と、對へて曰さく、「是の如し、世尊」と、時に彼の比丘世尊の教へを受け、頭面に足を禮して去り、難陀比丘の所に往至し、到り已つて難陀に語げて曰く、「世尊は卿を呼びたまふ」と、是の時難陀、比丘の語を聞き、即ち世尊の所に來至し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時世尊、難陀に告げて曰はく、「汝今何故に此の極妙の衣を著け、又則ち履屣を著けて舍衞城に入りて乞食するや」と。時に尊者難陀默然として語らず、世尊復重ねて告げて曰はく、「云何が難陀、汝豈信牢固を以て出家學道せざりしや」。難陀對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊告げて曰はく、「汝今族姓子、律行に應ぜず、信牢固を以て出家學道しつゝ、何に由つて復極妙の衣を著け、形服を摩治し、舍衞城に入つて乞食せんと欲するや。彼の白衣と何の差別有りや」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

　何の日にか難陀　能く阿練行を持して　心沙門の法を樂しみ　頭陀度無極なるを見んや

汝今難陀、更に此れ是の如きの行を造ること莫れ」と。爾の時尊者難陀及び四部の衆、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[一九] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時尊者難陀、梵行を行ずるに堪えず、法衣を脫し、白衣の行を習はんと欲す。爾の時衆多の比丘、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時衆多の比丘世尊に白して曰さく、「難陀比丘は梵行を行ずるに堪えず、法服を脫し、居家の行を習はんと欲す」と、爾の時世尊、一比丘に告げたまはく、「汝難陀の所に往至して云へ、『如來は卿を喚びたまふ』」と、對へて曰く、「斯の如し、世尊」と、時に彼の比丘、世尊の教へを受け、即ち座より起ち、世尊の足を禮し、便ち退いて去り、彼の難陀比丘の所に至つて云

【一九】 Dhp. A. I. P. 115 ff 參照。

及び火坑を見、即ち尿を失し、糞を放ちて走り、突く處なし。便ち前んで如來に進向す。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

汝龍を害すること莫かれ　龍の現るゝこと甚だ遇ひ難し　龍を害し已るに由らずば　善處に生るゝを得ん

と、爾の時暴象、世尊の此の偈を說きたまふを聞き、火に燃れたるが如く、即ち自ら劍を解き、如來に向ひて跪き、雙膝を地に投げ、鼻を以て如來の足を舐めぬ。時に世尊、右手を伸し、象の頭を摩して是の說を作したまはく、

瞋恚は地獄に生れて　亦蛇蚖の形と作らん　是の故に當に恚を捨つべし　更に此の身を受くること莫れ

と。爾の時神尊諸天、虛空中に在り、若干百千種の花を以て如來の上に散ず。是の時世尊、四部の衆天・龍・鬼神の與に微妙の法を說きたまふ。爾の時象を降し給ひしを見し男女六萬餘人、諸の塵垢盡きて法眼淨を得、八萬の天人も亦法眼淨を得たり。時に彼の醉象の身中に刀風起り、身壞命終して四天王宮に生れぬ。爾の時比丘・比丘尼諸の優婆塞・優婆夷及び天・龍・鬼神、世尊の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[一八]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時尊者難陀極妙の衣を著け、色人目を曜らし、金剛の履屣を著け、復兩目を挍飾し、手に鉢器を執りて舍衛城に入らんと欲す。爾の時衆多の比丘、遙に尊者難陀、極妙の衣を著け、舍衛城に入つて乞食するを見る。爾の時衆多の比丘便ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。須臾にして退坐し、世尊に白して曰さく、「向者難陀比丘極妙の衣を著け、色人目を曜らし舍衛城に入つて乞食せり」と。爾の時世尊

【一八】 S. 21. 8 Nanda。

斯、正法を聞き已つて各〻座より起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去る。

爾の時世尊、淸旦衣を著け、鉢を持して羅閱城に入り、乞食せんと欲したまふ。是の時提頭賴吒天王乾沓惒等を將ひて東方より來つて世尊に侍從す。是の時毘留勒王[一六]拘槃茶衆を將ひて南方より來つて如來に侍從し、西方の毘留波叉諸の龍衆を將ひて如來に侍從し、北方の天王[一七]拘毘羅・羅剎の鬼衆を將ひて如來に侍從す。是の時釋提桓因諸天人數千萬衆を將ひ、兜術天より沒して世尊の所に來至す。時に梵天王、諸の梵天數千萬衆を將ひ、梵天上より世尊の所に來至し、釋梵四天王及び二十八天、大鬼神王各〻相謂ひて言く、「我等今日當に二神、龍象の共に鬪ふを觀るべし。誰か勝ち、負くるや」と。時に羅閱城の四部の衆、遙に世尊の諸比丘を將ひて城に入り、乞食したまふを見、時に城內の人民皆聲を擧げ、喚いて曰ひ、王阿闍世復此の聲を聞き、左右に問うて曰く、「此れは是れ、何等の聲響か乃ち此の閒に徹するや」と。侍臣對へて曰く、「此れは是れ、如來城に入つて乞食したまひ、人民見已るが故に此の聲有り」と。阿闍世曰く、「沙門瞿曇も亦聖道なし、人の心の來變の驗を知らず」と。王阿闍世卽ち象師に勅し、「汝速に象を將ひて飮ますに醇酒を以てし、鼻に利劍を帶ばして卽ち放ちて走らしめよ」と。

爾の時世尊諸比丘を將ひて城門に詣り。適足を擧げて門に入りたまふ。時に天地大に動く、諸神尊天、虛空中に在つて種々の華を散ず、時に五百の比丘醉象の來るを見、各〻馳走して如く所を知ること無し。時に彼の暴象遙に如來を見、便ち走つて趣き向ふ。侍者阿難醉象の來るを見、世尊の後に在つて自ら安處せず、世尊に白して曰さく、「此の象暴惡なれば將て相害することを恐る。宜しく之を遠ざかりたまふべし」と。世尊告げて曰はく、「懼るゝこと勿れ、阿難、吾今、當に如來の神力を以て此の象を降伏すべし」と。如來は暴象の近からず、遠からざるを觀察して、便ち左右を化して諸の師子王と作し、彼の象の後に於て大火坑を作りたまふ。時に彼の暴象、左右の師子王を見、

【一六】　拘槃茶(Kumbhaṇḍa)。は陰囊・形卵と譯し、厭眉鬼・又は冬瓜鬼と名づく。人の精氣を噉ふといふ鬼の名。
【一七】　拘毘羅(kumbhira)。又金毘羅に作る。王舍城の守護神たる夜叉、又龍王ともいはる。

設し一切智有らば、明日清旦城に入りて乞食せざらん」と。

爾の時、羅閱城内の男女大小の佛に事ふるの者、王阿闍世、清旦醉象を放つて如來を害すべきことを聞き、聞き已つて各〻愁憂を懷き、便ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在つて住し、世尊に白して曰さく、「明日清旦、願はくは世尊、復城に入ること勿れ、然る所以は、王阿闍世、今敎令有り、城内の人民の類に勅して語り、『明日復里巷に在つて行來すること勿れ、吾醉象を放つて沙門瞿曇を害せんと欲す。設し沙門にして一切智有らば、明日清旦城に入つて乞食せざらん』と、唯願はくは世尊、復城に入ること勿れ、如來を傷害せば世人は目を喪ひ、復救護なけん」と。世尊告げて曰はく、「止みなん、止みなん、諸の優婆塞、愁惱を懷くこと勿れ、然る所以は、如來の身は俗數の身に非ず、然れば他人の爲に害せ所れず、終に此の事なし、諸の優婆塞、當に知るべし、閻浮里地は東西の廣さ七千由旬、南北の長さ二十一千由旬なり。瞿耶尼は縱廣八千由旬にして半月形の如し。弗于逮は縱廣九千由旬にして土地方正なり。鬱單越は縱廣十千由旬にして土地圓きこと滿月の如し。正使此の四天下に醉象其の中に滿ち、似ること稻麻叢林の如く、其の數是の如きも、猶如來の毫毛をも動かすこと能はず、況んや復如來を害せんことを欲するも、終に是の處なし、則ち四天下を捨てゝ復千の天下、千の日月、千の[一五]須彌山、千の四海水、千の閻浮提、千の瞿耶尼、千の弗于逮、千の鬱單越、千の四天王、千の三十三天、千の兜術天、千の豔天、千の化自在天、千の他化自在天の如き有り、此れを千世界と名く。乃至二千世界、此れを中千世界と名く、乃至三千世界、此れを三千大千世界と名く、其の中に伊羅鉢龍王滿つるとも、猶如來の一毛だに動かすこと能はず。況んや復此の象の如來を害せんと欲するをや。終に是の處なし。然る所以は、如來の神力不可思議なれば、如來出世して終に人の爲に傷害せられず。汝等各〻所在に歸へれ、如來は自ら當に此の變趣を知るべし」と。爾の時世尊、四部衆の與に廣く爲に微妙の法を說きたまふ。時に優婆塞・優婆

【一五】須彌山（Sumeru）は、妙高山と譯す。世界の中央、金輪の上にありて海に圍遶せられ、四方に各〻一大洲あり、四面各〻一色にして、東は金、南は頗梨、西は銀、北は瑠璃より成り、日月之によりて廻り、神々これによつて住し、地獄・餓鬼・畜生・阿修倫・人間・天の六種の有情これに住す。その狀景長阿含世記經に詳し。

て餘りなし、瞋恚愚癡も亦復是の如し。如來は復此の結なし」と。婆羅門曰さく、「唯願はくは世尊、深妙の法を說きたまへ、復此の諸の結縛、著すること有ること無からん」と。是の時世尊、漸く彼の婆羅門の與に微妙の論を說きたまふ。所謂論とは施論・戒論・生天の論なり。「欲は不淨たり、斷漏を上と爲し、出家を要と爲す」と。爾の時世尊、彼の婆羅門の心開け、意に解し、甚だ歡喜を懷けるを知り、古昔の諸佛の常に說く所の法、苦・集・盡・道・爾の時世尊、盡く婆羅門の爲に之を說きたまへり。時に婆羅門卽ち座上に於て諸の塵垢盡き、法眼淨を得たり。猶し新淨の白氈の染むるに色を爲し易きが如し。時に婆羅門も亦復是の如く、卽ち座上に於て法眼淨を得たり。彼已に法を得、法を見、其の法を分別して狐疑有ることなく、已に無畏に逮び、自ら三尊佛・法・聖衆に歸し、五戒を受持し、如來の眞子となり、復退還することなし。爾の時彼の婆羅門夫婦、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

[一四] 聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時王阿闍世に象有り。那羅祇梨と名け、極めて兇弊にして暴虐たり。勇健にして能く外怨を降し、彼の象力に緣つて、摩竭國の靡伏せざるものなからしむ。

爾の時提婆達兜便ち阿闍世王の所に往至し、到り已つて是の說を作す、「大王當に知るべし。今此の象の惡は能く衆怨を降伏すれば、醇酒を以て彼の象に飲まして醉はしむべし、淸旦沙門瞿曇、必ず來つて城に入つて乞食せん、當に此の醉象を放てば蹋蹈して之を殺すべし」と。時に王阿闍世、提婆達兜の敎へを聞き、卽ち國中に告令して、「明日淸旦醉象を放つべければ、人民をして里巷に在りて遊行せしむること勿れ」と。是の時提婆達兜王阿闍世に告げて曰く、「若し彼の沙門瞿曇、一切智有つて當來の事を知らば、明日必ず城に入りて乞食せざらん」と。王阿闍世曰く、「亦尊敎の如く、

【一四】 Vinaya cullavagga VII. 3. 2°

無畏に逮び、自ら三尊佛と法と聖衆とに歸し【一三】五戒を受持す。是の時尊者大迦葉は重ねて梵志婦の爲に微妙の法を說き已つて卽ち座より起ちて去る。迦葉去つて未だ久しからざるの時、婦の夫婿家に來至す、婆羅門婦の顏色甚だ悅びて、復常の人に非ざるを見ぬ。時に婆羅門卽ち其の婦に問ひ、婦卽ち此の因緣を以て具に夫婿に向つて之を說く、時に婆羅門是の語を聞き已つて便ち其の婦を將ひて、共に精舍に至り、世尊の所に往至す。時に婆羅門、世尊と共に相問訊し、一面に在つて坐す。婆羅門婦は頭面に世尊の足を禮し、一面に在りて坐す。時に婆羅門世尊に白して曰さく、「向に婆羅門有りて我家に來至せり。今所在爲るや」と爾の時尊者大迦葉、世尊を去ること遠からざるところに結跏趺坐し、身を正し、意を正して妙法を思惟す、爾の時世尊、遙に大迦葉を指示して曰はく、「此れは是れ、尊長婆羅門なり」と。婆羅門曰さく、「云何が瞿曇、沙門は卽ち是れ婆羅門なりや、沙門と婆羅門とは豈異らずや」と。世尊告げて曰はく、「沙門と言はんと欲せば、卽ち我身是れなり。然る所以は、我卽ち是れ沙門なり。諸有の沙門の奉持する戒律は、我皆已に得。今の如く婆羅門を論ぜんと欲せば、亦我身是れなり。然る所以は、我卽ち是れ婆羅門なり。諸の過去の婆羅門の所持の法行、吾已に悉く知る。沙門を論ぜんと欲せば卽ち大迦葉是れなり。然る所以は、諸有の沙門律、迦葉比丘皆悉く包攬すればなり。婆羅門を論ぜんと欲せば、亦是れ迦葉比丘なり。然る所以は、諸有の婆羅門の奉持する禁戒は、迦葉比丘皆悉く了知すればなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

我梵志は能く　呪術を知る者と說かず、唱へて梵天に生ると言はゞ　此れ則ち縛を離れじ　縛なく生趣なく　能く一切の結を脫れ　復天福を稱せざるもの　卽ち沙門梵志なり

爾の時婆羅門世尊に白して曰さく、「結縛と言ふは、何等を名けて結と爲すや」と。世尊告げて曰はく、欲愛は是れ結なり、瞋恚は是れ結なり、愚癡は是れ結なり。如來は此の欲愛なく、永く滅し

【一三】五戒とは、不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不飮酒の五にして、在俗の信者の守るべき戒律。

無欲無恚の者は　愚を去りて癡有ることなし　漏盡阿羅漢　是れを謂ひて梵志と名く　無欲無恚の者は愚を去りて癡有ることなく　以て結使の聚を捨つ　是れを謂ひて梵志と名く　無欲無恚の者は　愚を去りて癡有ることなし　以て吾我慢を斷ず　是れを謂ひて梵志と名く　若し法を知らんと欲せば　八三佛の說く所　至誠にして自ら彼に歸せよ　最尊にして上有ることなし

爾の時世尊大迦葉に告げて曰はく、「汝往いて此の梵志婦の爲に便ち身を現ぜば、宿罪を免るることを得べし」と。是の時迦葉佛より教へを受け、梵志婦の舍に往至し已つて座に就いて坐す。是の時彼の婆羅門婦は便ち餚饍種々の飲食を供辦し以て迦葉に奉る。是の時迦葉卽ち飲食を受く。人を度せんと欲するが故に彼の人の爲に此の　九達嚫を說く、

祠祀は火を上となし　衆書は頌を最となし　王は人中の尊たり　衆流は海を上となす　衆星は月を首となし　照明は日を先となし　一〇四維及び上下は　諸方の域境に於てす　天と世間の人佛は最尊上たり　其の福を求んと欲せば　當に三佛に歸すべし

是の時彼の梵志婦此の語を聞き已つて卽ち歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず、前んで大迦葉に白して曰く、「唯願はくは梵志、恒に我請を受け、此の舍に在つて食せよ」と。大迦葉卽ち彼の請を受け、彼の處に在つて彼の食を受く。是の時婆羅門婦迦葉の食し訖るを見、更に一卑座を取り、迦葉の前に在つて坐す、是の時迦葉、次を以て與に微妙の法を說く、「所謂論とは　一一施論・戒論・生天の論、欲は不淨たり、斷漏を上となし、出家を要となすと。尊者大迦葉は已に彼の梵志婦の心開け、意に解して甚だ歡喜を懷くを知り、諸佛の常に說くべき所の法　一二苦・集・盡・道を說けり」と。是の時尊者大迦葉、悉く梵志婦の爲に之を說く時、梵志婦は卽ち座上に於て、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。猶し新淨の白氎の塵垢有ることなく、染むるに色を爲し易きが如し、時に梵志婦亦復是の如く、卽ち座上に於て法眼淨を得たり。彼已に法を得、法を見、其の法を分別して狐疑有ることなし。已に

【八】三佛(Sambuddha)。正覺と譯す。佛のこと。

【九】達嚫(Dakkhinā)。とは、布施のこと。

【一〇】四維とは、東北・東南・西北・西南のこと。維は隅の義にて四隅のこと。

【一一】施論とは、布施について說くこと。戒論とは身の行ひを正すことについて說くこと。生天の論とは、かく〳〵のことをなす時はその報ひによりて天上に生ると說くこと。佛陀は常に初めて俗人に說く時は、かゝる通俗說法より始め、次第に相手を誘引して、遂に四諦の理を說くを常とせり。

【一二】苦・集・盡・道とは、四諦のこと。(上の註を見よ)。

に知るべし、年少の比丘は三處に於て便ち名稱有り、云何が三と爲すや。是に於て比丘、世尊寂靜の處を樂しみたまひ、年少の比丘も亦寂靜の處を樂しめば、年少の比丘に便ち名稱有り、世尊『人當に此の法を滅すべし』と教へたまひ、爾の時比丘便ち此の法を滅すれば、年少の比丘に便ち名稱有り。中に於て亂想の念を起さず、意常に專一なれば、年少の比丘に便ち名稱有り。諸賢、當に知るべし。之を貪れば病となり、甚大の災患とならん。瞋恚も亦然り、貪と婬と瞋恚滅すれば、便ち處中の道を得、眼生じ、智生じ、諸縛休息して涅槃に至ることを得ん。慳と嫉とは病と爲り亦復極めて重し、煩惱燒煮して憍慢も亦深し。幻僞・不眞・無慚・無愧は婬欲敗正を捨離すること能はず。[五]慢と增上慢も亦復捨てず。此の二慢滅すれば便ち[六]處中の道を得、眼生じ、智生じ、諸縛休息し、涅槃に至ることを得」と。比丘白して曰く、「云何が尊者舍利弗、處中の道、眼生じ、智生じ、諸縛休息して涅槃に至ることを得るや」と、舍利弗言く、「諸賢、當に知るべし、所謂賢正八品道是れなり。所謂正見・正治・正語・正行・正命・正方便・正念・正三昧、是れを諸賢、處中の道と謂ひ、眼生じ、智生じ、諸縛休息して涅槃に至ることを得るなり」と。爾の時衆多の比丘、尊者舍利弗の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[七]聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時世尊、時到つて衣を著け、鉢を持し、羅閱城に入り、乞食して一街巷に在せり。爾の時彼の街巷に一梵志婦有り、飯食せんと欲す。婆羅門即ち門を出でゝ、遙に世尊を見、便ち世尊の所に往至し、世尊に問うて曰さく、「婆羅門を見るや不や」と。爾の時尊者大迦葉先に其の巷に在り、世尊便ち手を擧げて指示して曰はく、「此れは是れ婆羅門」と。是の時梵志婦如來の面を熟視し、默然として語らず。爾の時世尊此の偈を說きたまはく、

【五】慢(Māna)。增上慢(Adhimāna)。とは、證悟を得ずして、得たりと慢ずるをいふ。
【六】處中の道とは、中道(Majjhimamaggo)のこと。快樂主義と禁欲主義との二の極端を離れしもの。
【七】M. 3 Dhammadāyāda。中阿含第八十八經求法經。

羞恥有り。諸賢、當に知るべし。中比丘は三處に於て便ち羞恥有り、云何が三と爲すや、世尊は常に寂靜の處を樂しみたまふに、爾の時聲聞にして是の學を作さゞれば、中比丘に便ち羞恥有り。世尊は『人當に此の法を滅すべし』と敎へたまふに、然るに彼の比丘此の法を滅せずば、中比丘に便ち羞恥有り。中に於て亂想の念を起し、意專一ならずば、中比丘に便ち羞恥有り。諸賢、當に知るべし。年少の比丘は三處に於て便ち羞恥有り。云何が三と爲すや。世尊の弟子常に寂靜の處を樂しむに、爾の時聲聞にして是の學を作さゞれば、年少の比丘に便ち羞恥有り。世尊は『人當に此の法を滅すべし』と。敎へたまふに、然るに彼の比丘にして此の法を滅せずば、年少の比丘に便ち羞恥有り。中に於て復亂想の念を起して意專一ならずば、年少の比丘に便ち羞恥有り、是れを諸賢、財に貪著して法に著せずと謂ふなり」と。諸比丘、舍利弗に白して曰く、「云何が比丘、法に貪著して財に著せざるや」。舍利弗曰く、「是に於て比丘、世尊は寂靜の處を樂しみたまへば、聲聞も亦如來の寂靜の處を樂しみたまふを學び、世尊の說きたまふ所『此の法を滅すべし』とならば、諸比丘便ち此の法を滅して懈怠せず、亦亂れず、行ずべき所のものは便ち之を修行し、行ずべからざる所のものは便ち之を行ぜず。諸賢、當に知るべし。長老の比丘は三處に於て名稱有り、云何が三と爲すや、世尊寂靜の處を樂しみたまへば、聲聞も亦寂靜の處を樂しむときは、長老の比丘に便ち名稱有り。世尊は人の當に此の法を滅すべし」と敎へたまへば、爾の時比丘便ち此の法を滅する時に、長老の比丘に便ち名稱有り。中に於て亂想の念を起さず、意常に專一なれば、長老の比丘に便ち名稱有り。諸賢、當に知るべし、中比丘は三處に於て便ち名稱有り、云何が三と爲すや、世尊寂靜の處を樂しみたまへば、聲聞も亦寂靜の處を樂しむときは、中比丘に便ち名稱有り、世尊『人當に此の法を滅すべし』と敎へたまひ、爾の時比丘便ち此の法を滅すれば、中比丘に便ち名稱有り、中に於て亂想の念を起さず、意常に專一なれば中比丘は、便ち名稱を得。諸賢、當

於て足るを知り、充たし易く、滿たし易し。諸比丘當に法施を學びて思欲の施を學ぶこと勿るべし、我前に說く所は此の因緣に由るなり」と。爾の時世尊、此の語を說き已つて便ち座より起ちて去りたまふ。

是の時衆多の比丘復是の念を作す。「向者世尊は其の要を略說したまひて竟に廣普したまはず、便ち座より起ちて寂靜室に入りたまへり、今此の衆中に誰か能く、此の略義に於て廣く普く其の義を演ぶるに堪任するや」と。是の時衆多の比丘、復是の念をなす「今尊者舍利弗は世尊の譽めたまふ所、我當に盡く共に彼の舍利弗の所に詣らん」と。是の時衆多の比丘、便ち尊者舍利弗の所に往至し、共に相禮拜し、一面に在りて坐す。一面に在りて坐し已る。是の時衆多の比丘、世尊より聞く可き所の事を盡く舍利弗に向つて之を說く。是の時尊者舍利弗諸比丘に告ぐ「云何が世尊の弟子、利養に貪著して法を修行せざるや、云何が世尊の弟子、修行の法を貪つて利養を貪らざるや」と。爾の時衆多の比丘舍利弗に白して曰さく「我等乃ち遠くより來つて其の義を請問し、之を修行することを得ん、尊者舍利弗は堪任者なり。便ち我等の與に廣く其の義を演べよ」と。舍利弗曰く、「諦に聽け諦に聽いて、善く之を思念せよ、吾當に汝の與に廣く其の義を演ぶべし」と。爾の時衆多の比丘對へて曰く、「是の如し」と。舍利弗告げて曰く、「世尊の弟子の學ぶ所は寂靜にして念安し、聲聞の弟子は是の如きを學ばず。世尊の敎を吐きたまふは滅すべき所の法なるに、諸比丘亦之を滅せず、中に於て懈怠して諸の亂想を起し、爲すべき所のことも亦肯じて行はず、爲すべからざる所のこと便ち之を修行す。爾の時諸賢、長老の比丘は三處に於て便ち羞恥有り、云何が三と爲すや。世尊は常に寂靜の處を樂しみたまふに、爾の時聲聞にして是の學を作さゞれば、長老の比丘に便ち羞恥有り。世尊は『人當に此の法を滅すべし』と敎へたまふに、然るに比丘にして此の法を滅せずば長老の比丘に便ち羞恥有り。中に於て亂想の念を起し、意專一ならずば長老の比丘に便ち

り。汝今比丘、當に法施を念じて欲施を思ふこと勿るべし。便ち稱譽を得て、名聞四遠し、法を恭敬して財物を貪らずば、此れ則ち羞恥有ること無し。然る所以は、如來の弟子は好むに法施を以てし、思欲の施を貪らず。是れを比丘、當に法施を念ずべし。財施を學ぶこと勿れと謂ふなり。汝等比丘、吾此の義を說き、何の義に因つて此の緣を說くと爲すや」と。爾の時諸比丘世尊に白して曰さく、「唯願はくは世尊、事々分別したまへ」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「昔一人有つて吾を請じて供養せり。然るに吾爾の時遺餘の法の除棄すべきもの有り、一比丘有つて遠方より來る。形體困しむこと篤く、顏色變易せり。爾の時我便ち彼の比丘に語つて是の語を作す、『遺餘の法にして除棄すべきもの有り、時に隨つて須ひんとならば、便ち之を取つて自ら己を營むべし』と。時に一比丘便ち是の念を作す、『世尊は今日遺餘の法にして除棄すべきもの有り、時に隨つて須ひんとならば、便ち之を取るべし』と。設し復我等食を取らずば、便ち當に此の食を以て淨地に捨つるか若しは水中に著すべし。然れば今我等は宜しく此の食を取りて以て虛乏を充し、氣力を加得すべし』と。爾の時彼の比丘復是の學を作す、「佛亦是の說を作したまふ。『當に法施を行じて、思欲の施を行ずること莫かるべし。然る所以は、施の中の上は財施に過ぐるものなし。然して復法施は中に於て最尊なり』と。我今竟日食せずして猶自濟を得るに堪任せん、彼の信施の福を受くるを須ひじ」と。爾の時彼の比丘、便ち自ら意を息して彼の施を取らず、形體困しむこと篤く、自ら命を顧みざりき。彼の時第二の比丘復是の念を作す「世尊亦『遺餘の法にして除くべきもの有り』と、設し我等食を取らずば、便ち困しむこと篤かるべし。今此の食を以て用ひて虛乏を充し、氣力を加得せば、晝夜安寧ならん』と。爾の時彼の比丘、便ち取つて之を食し、晝夜安穩にして氣力充足せり」と。佛諸比丘に告げたまはく、「彼の比丘は復彼の供養を取りて虛乏を除去し、氣力充足すと雖も、先の前比丘の、敬ふべく、貴ぶべく、甚だ尊重すべきに如かず。彼の比丘は長夜に名稱遠く聞え、律に

り、諸の技術を學ぶ、或は田作を習ひ、或は書疏を習ひ、或は計算を習ひ、或は天文を習ひ、或は地理を習ひ、或は卜相を習ひ、或は遠使を學び、或は王佐と作りて、寒暑を避けず、飢寒に懃苦して自ら己を營む。彼是の功力を作して財物を獲るも、彼の人食噉すること能はず、亦妻子に與へず、亦奴婢に與へず、親々の屬皆悉く與へず、彼得る所の財物、或は王劫奪し、或は賊に盜まれ、或は火に燒け、水に漂ふて異處に分散して其の利を獲ず、即ち家中に於て人有つて此の物を分散して停住を得ず。是れを比丘、財を得て藏擧するものと謂ふなり。彼云何が財を得て分布するや。族姓子有つて諸の技術を學び、或は田作を習ひ、或は書疏を習ひ、或は計算を習ひ、或は天文地理を習ひ、或は卜相を習ひ、或は遠使を學び、或は王佐と作つて寒暑を避けず、飢寒に懃苦して自ら己を營む。彼是の功力を作して財物を獲るも、彼の人衆生に惠施し、父母・奴婢・妻子に給與し、亦復廣く沙門婆羅門に及び、諸の功德を造りて天上の福を種う。是れを比丘、得て惠施すと謂ふなり。是れを比丘、二人厭足なしと謂ふなり、前の一人は財物を得て擧ぐる者の如し。當に捨離することを念ずべし。第二人は得て廣布す。當に此の業を學ぶべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。

爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「常に當に法施して食施を習ふこと勿るべし。然る所以は、汝等今果報の福有り、我弟子をして法を恭敬して、利養を貪らざら使む。設し利養を貪らば、則ち大に如來の所に過ち有らん、何を以ての故に、謂く衆生の類は法を分別せず、世尊の教を毀る、已に世尊の教を毀れば、後に復涅槃の道に至るを得ず、我便ち恥有り。然る所以は、謂く如來の弟子は利養に貪著して法を行ぜず、法を分別せず、世尊の教を毀り、正法に順はず、已に世尊の教を毀れば復涅槃の道に至らざればな

卷の第九

慚愧品第十八

一

[一]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊　諸比丘に告げたまはく、「二の妙法有り。世間を擁護す。云何が二法と爲すや。所謂[二]有慚と[三]有愧となり。諸比丘、若し此の二法無くば、世間は則ち父有り、母有り、兄有り、弟有り、妻子知識尊長大小有るを別たず。便ち當に猪・鷄・狗・牛・羊六畜の類と同一にして等しかるべし。其れ世間に此の二法有りて世間を擁護するを以て、則ち父母・兄弟・妻子・尊長・大小有ることを別ち、亦六畜と共に同じからざるなり。是の故に諸比丘、當に有慚・有愧を習ふべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

[四]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「世に二人有り、厭足有ること無くして命終を取る。云何が二人と爲すや。所謂財物を得て恒に之を藏擧すると、復物を得て喜んで人に與ふること有るとなり。是れを二人厭足有ること無くして命終を取ると謂ふなり」と。爾の時比丘有り、世尊に白して曰さく、「世尊、此の略說の義を解せず、云何が物を得て藏擧するや。云何が物を得て人に與ふるや。唯願はくは世尊、廣く其の義を演べたまへ」と。世尊告げて曰はく、「諦に聽け諦に聽いて善く之を思念せよ。吾當に汝の爲に其の義を分別すべし」對へて曰さく、「是の如し」と。爾の時佛、諸比丘に告げたまはく、「是に於て族姓子有

【一】 A. II. 1. 9 Hirottapa Hi-vuttaka 42 雜阿含卷四十七の第三經。本事經卷四、第六經。
【二】 有慚(Hiri)。
【三】 有愧(Ot'appa)。
【四】 A. II. I. I. Vajja

くにして終に增損なく、有形の類顏色光潤にして食自ら消化し、災害有ることなく、壽命極めて長くして人に愛敬せられん」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

猶し牛の水を渡るが如く、導者にして正からずば　一切皆正しからず　斯れ本の導きに由るが故に　衆生も亦是の如く　衆中必ず導有り　導者非法を行ず　況んや復下細の人をや　萠類盡く苦を受くるは　王法の正しからざるに由る　以て非法の行を知る　一切の民亦然り　猶し牛の水を渡るが如く　導者にして行くこと正しければ　從者も亦皆正し　斯れ本の導きに由るが故に　衆生も亦是の如し　衆中必ず導き有り　導者正法を行ず　況んや復下の庶人をや　萠類盡く樂を受くるは　王の法敎の正しきに由る　以て正法の行と知る　一切の民も亦然り

是の故に諸比丘、當に非法を捨てゝ正法を行ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

增壹阿含經卷第八

安般品の二

ば亦痛ましからずや。王子、時に父王の命を斷ちて國人を統領すべし。我今當に沙門瞿曇を殺し、無上至眞等正覺となるべし。摩竭國界に於て新王新佛 亦 快らずや。日雲を貫き、照さゞる所靡きが如く、月雲消えて衆星中に明なるが如し」と。爾の時婆羅留支王子卽ち父王を收めて鐵牢中に著し、更に臣佐を立てゝ人民を統領す。爾の時衆多の比丘有り、羅閱城に入つて乞食し、便ち提婆達兜、王子に父王を收めて鐵牢中に著し、更に臣佐を立つることを敎へしを聞けり。是の時衆多の比丘乞食し已つて所在に還歸し、衣鉢を攝擧して世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、世尊に白して曰さく、「朝城に入つて乞食し、提婆達兜愚人、王子に敎へて父王を收めて牢獄に閉著し、更に臣佐を立て使めしを聞けり、復王子に勅して言く『汝父王を殺し、我如來を害せば、此の摩竭國界に於て新王新佛たり、亦快らずや』と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し主にして治化するに正理を以てせずば、臣佐も亦非法を行ぜん。臣佐已に非法を行ぜば、爾の時王の太子亦非法を行ぜん。太子已に非法を行ぜば、爾の時群臣長吏亦非法を行ぜん。群臣長吏已に非法を行ぜば、爾の時國界の人民亦非法を行ぜん。國界の人民已に非法を行ぜば、爾の時人衆兵馬亦非法を行ぜん。兵衆已に非法を行ぜば、爾の時日月倒錯し、運度して時を失はん。日月已に時を失へば便ち年歲なけん。已に年歲なくば日差ひ月錯つて復精光なけん。日月已に精光なくば、爾の時星宿怪を現ぜん。星宿已に變怪を現ぜば、便ち暴風有つて起らん、已に暴風有つて起れば神祇瞋恚せん。神祇已に瞋恚せば、爾の時風雨時ならざらん。爾の時穀子、地に在るものは便ち長大ならず、人民の類蜎飛蠕動、顏色改變し、壽命極めて短し。若し復時有つてか王の法治正しければ、爾の時群臣亦正法を行ぜん。群臣已に正法を行ぜば、時に王の太子亦正法を行ぜん、王の太子已に正法を行ぜば、爾の時長吏も亦正法を行ぜん。長吏已に正法を行ぜば、國界の人民亦正法を行ひ、日月常に順ひ、風雨時を以てし、災怪現ぜず。神祇歡喜し、五穀熾盛し、君臣和穆して相視ること兄の如く、弟の如

正定・是を名けて賢聖八品道と爲すと謂ふなり」と。

爾の時周利槃特廣く爲に法を說き已る。婆羅門、比丘より此の如き教を聞き已つて、諸の塵垢盡き、法眼淨を得、卽ち其の處に於て身中に刀風起つて命終す。是の時尊者舍利弗、其の形を還復し、空中に飛在して還えつて所止に詣る。是の時尊者周利槃特比丘、普集講堂の衆多の釋種の所に往至し、到り已つて彼の釋に語つて言く、「汝等速に蘇油と薪柴とを辦じ、往いて世典婆羅門を[一六]耶維せよ」と。是の時釋種卽ち蘇油を辦じ、往いて世典婆羅門を耶維し、[一七]四道頭に於て[一八]鍮婆を起て、各々相率ひて尊者周利槃特比丘の所に往至し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。時に諸の釋種此の偈を以て尊者周利槃特に向つて說いて曰く、

耶維して鍮婆を起つ　尊者の教に違はず　我等大利を獲て　此の福祐に遇ふことを得たり

是の時尊者周利槃特便ち此の偈を以て釋に報へて曰く、

今尊[一九]法輪を轉じて　諸の外道を降伏せり　智慧大海の如く　此に來つて梵志を降せり　作す所の善惡の行　[二〇]去來今現在　億劫にも忘失せず　是の故に當に福を作すべし

是の時尊者周利槃特、廣く彼の釋種の與に法を說き已る。諸釋周利槃特に白して言く、「若し尊者衣被・飮食・床褥・臥具・病瘦の醫藥を須ひば、我等盡く當に事々供給すべし。唯願はくは[二一]請を受けよ、微情を拒むこと勿れ」と時に尊者周利槃特默然として之を可す。爾の時諸の釋種、尊者周利槃特の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十一

[二二]聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘五百人と倶なりき。爾の時提婆達兜惡人便ち婆羅留支王子の所に往至し、王子に告げて言く、「昔は民萠壽命極めて長かりしも、今の如きは人壽百年に過ぎず。王子當に知るべし。人の命は常なし、備へて位に登らざる中に命終ら

【一六】耶維(Jhāpeti)は、又闍維・茶毗とも音譯す。火葬にすること。
【一七】四道頭とは、街の十字路、四辻のこと。
【一八】鍮婆(Thūpa)。は塔婆にも作る。塔のこと。
【一九】法輪を轉ずるとは、說法すること。
【二〇】去來今現在とは、過去未來現在のこと。
【二一】請とは、供養の請待のこと。
【二二】A. IV. 70

當に與に弟子と作るべし」と。

是の尊門者舍利弗、天耳を以て是の語有つて、周利槃特は世典婆羅門と此の論議を作すを聽聞す。是の時尊者舍利弗、卽ち身を變じて槃特の形を作し、槃特の形を隱して復現ぜざら使め、婆羅門に語つて曰く、汝婆羅門、若し是の念を作し、『此の沙門は神足有るに止つて、論議に堪えず』とならば、汝今諦に聽け、吾之を說かん。汝向に義を報へよ。此の論の本に依つて當に更に喩を引くべし。汝今婆羅門、名字は何等ぞや」と。婆羅門曰く、「吾梵天と名く」。周利槃特問うて曰く、「汝是れ丈夫にや。」婆羅門曰く、「吾は是れ丈夫なり。」復問ふ、「是れ人なるか」婆羅門報へて曰く、「是れ人なり」と。周利槃特問うて曰く、「云何が婆羅門 丈夫亦是れ人なり、人は亦是れ丈夫なり。此れ亦是れ一義なり、豈煩重に非ずや。然るに婆羅門、盲は無目と此の義同じからざるなり」と。婆羅門曰く、「云何が沙門、之を名けて盲と爲すや」。周利槃特曰く「猶し今世後世の生者・滅者・善色・惡色・若しは好、若しは醜、衆生の造る所の善惡の行を見ず、如實に知らず、永く覩る所なきが如し。故に之を稱して盲と爲すなり」と。婆羅門曰く、「云何が無眼の者と爲すや」と。周利槃特曰く、「眼とは無上の智慧の眼なり、彼の人は此の智慧の眼なし、故に之を稱して無目となすなり。」婆羅門言く、「止みなん。止みなん、沙門、此の雜論を捨てよ、我今深義を問はんと欲す。云何が沙門、法に依らずして涅槃を得るや」。周利報へて曰く、「五盛陰に依つて涅槃を得ず」と。婆羅門曰く、「云何が沙門、此の五盛陰は緣有つて生ずるや、緣なくして生ずるや」周利槃特對へて曰く、「此の五盛陰は緣有つて生ず、緣なきに非るなり」と。婆羅門の曰く、「何等か是れ五盛陰の緣なりや」、比丘曰く、「愛は是れ緣なり」と。婆羅門曰く、「何者か是れ愛なるや」。比丘報へて曰く、「生なるもの是れなり」。婆羅門曰く、「何者をか名けて生と爲すや」。比丘曰く、「卽ち是れ愛なり。」婆羅門曰く、「愛に何の道有るや」。沙門曰く、「賢聖八品道是れなり、所謂正見・正業・正語・正命・正行・正方便・正念・

の所に往詣す。彼の釋種に語げて言く、「云何が諸君此の中に沙門婆羅門及び世俗の人有りて、能く吾と共に論議するか」と。爾の時衆多の釋、世典婆羅門に報へて曰く、「此の中に今二人の高才博學有りて 一四迦毘羅越國に居在す。云何が二人と爲すや。一を 一五周利般特比丘と名け、二を瞿曇釋種如來至眞等正覺と名く。衆中少知にして聞なく亦智慧なく、言語醜陋にして去就を別たざること此の槃特の比の如く、又此の加維羅越一國の中知なく聞なく、亦黠慧なく、人の爲に醜陋にして、諸の穢惡多きは此の瞿曇の比の如し、汝今彼と與に論議すべし、設し婆羅門能く彼の二人と與に論議して勝つことを得ば、我等五百餘人、便ち當に供養して、時の所須に隨ふべし、亦千鎰の純金を相惠むべし」と。

爾の時婆羅時便ち此の心を生す。「此の迦毘羅越の釋種は悉く皆聰明にして諸の技術多く、姦宄虛僞にして正行有ること無し。設し吾彼の二人と論議して勝つことを得ば、何ぞ奇と爲すに足らん、或は復彼の人にして吾に便を得ば、便ち愚者の爲に伏せ所る、此の二理を思はゞ、吾彼と論議するに堪えざるなり」と。是の語を作し已つて便ち退いて去る。是の時、周利槃特、時到り、衣を着け、鉢を持して迦毘羅越に入りて乞食す。時に世典婆羅門遙に周利槃特の來るを見、便ち是の念を作す。「我今當に往いて彼の人に義を問ふべし」と。時に世典婆羅門、便ち比丘の所に往至し、周利槃特に語りて曰く、「沙門、字は何等と爲すや」と、周利槃特曰く、「止みなん、婆羅門、何ぞ字を問うを須ひん、此に來りし所以は、義を問はんと欲せば、時に之を問うべし」と。婆羅門言く、「沙門、能く吾と共に論議するか」と。周利槃特言く、「我今倘能く梵天と論議す、何に況んや汝盲無目の人とをや」。婆羅門曰く、「盲者は卽ち目なき人に非ずや。目なくば則ち盲に非ずや。此れは是れ一義、豈煩重に非ずや」と、是の時周利槃特便ち空中に騰り逝き十八變を作す。爾の時婆羅門便ち是の念を作す、「此の沙門は神足有るに止つて論議を解せざるなり。設し吾と此の義を解すべくんば、身便ち

【一四】 迦毘羅越國(Kapilavatthu)。迦維羅衞城のこと。釋迦族の都、恒河の支流コーハーナ(kohāna)。河に臨む。

【一五】 周利般特(Cullapanthaka)。弟子品の註を見よ。

り。是れを比丘、惡知識の人と謂ひ、此の邪業を行ずるなり。彼云何が善知識の法と爲すや、是に於て比丘、善知識の人は是の念を作さず、『我豪族の家の生れにして、此の餘の比丘は是れ豪族の家ならざるも、己身は彼と異り有ること無し』と。是れを名けて善知識の法と爲すと謂ふなり。復次に善知識の人は是の念を作さず、『我今戒を持ち、此の餘の比丘は戒行を持たざるも、己身と彼とは增減有ること無し』と。彼此の戒に依つて自ら貢高せず、他人を毀らず、是れを比丘、名けて善知識の法と爲すと謂ふなり。復次に比丘、善知識の人は復是の念を作さず、『我三昧成就し、此の餘の比丘意亂れて定まらざるも、己身は彼と亦增減無し』と。彼此の三昧に依つて自ら貢高せず、亦他人を毀呰せず。是れを比丘、名けて善知識の法と爲すと謂ふなり。復次に比丘、善知識の人は是の念を作さず、『我智慧成就し、此の餘の比丘は智慧有ることなきも、己身は彼と亦增減なし』と。彼此の智慧に依つて自ら貢高せず、亦他人を毀呰せざるなり。是れを比丘名けて善知識の法と爲すと謂ふなり。復次に比丘、善知識の人は是の念を作さず、『我能く衣被・飲食・床褥・臥具・疾病の醫藥を得、此の餘の比丘は衣被・飲食・床褥・臥具・疾病の醫藥を得ること能はざるも、己身は彼と亦增減なし』と。彼此の利養に依つて自ら貢高せず、亦他人を毀らず。是れを比丘、名けて善知識の法と爲すと謂ふなり」。

爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今汝の與に惡知識の法を分別し、亦復汝の與に善知識の法を說けり、是の故に諸比丘、惡知識の法は當に共に遠離し、善知識の法は念じて共に修行すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し、一時佛、釋翅[一三]尼拘留園に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時國中の豪貴の諸大釋種五百餘人、所論有らんと欲し、普義講堂に集りぬ。爾の時世典婆羅門便ち彼の釋種

【一三】尼拘留園(Nigrodha)。

爾の時生漏婆羅門世尊に白して曰さく、『善い哉瞿曇、猶し屈するものゝ伸ぶることを得、冥きものゝ明を見、迷へるものゝ路を見、闇冥に明を然すが如し、此れ亦是の如し。沙門瞿曇は無數に方便して我爲に法を說きたまへり。我今自ら[三]世尊及び法と衆僧とに歸しまつらん。今より以て往いて我を聽して優婆塞となしたまへ、形壽を盡して殺生せざらん」と。爾の時生漏、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に善知識の法を說くべし。亦當に惡知識の法を說くべし。諦に聽け、諦に聽いて善く之を思念せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。爾の時諸比丘、佛より教を受く、世尊告げて曰はく、「彼云何が名けて惡知識の法と爲すや。是に於て比丘、惡知識の人は便ち此の念を生ず、『我豪族より出家學道し、餘の比丘は卑賤の家の出家なり』と。己の姓望に依つて餘人を毀訾す。是れを名けて惡知識の法と爲すと謂ふなり。復次に惡知識の人は便ち此の念を生ず、『我極めて精進にして諸の正法を奉ずるも、餘の比丘は精進持戒せず』と、復此の義を以て他人を毀訾して自ら貢高す。是れを惡知識の法と爲すと謂ふなり。復次に惡知識の者は復是の念を作す、『我三昧を成就するも餘の比丘には三昧有ること無く、心意錯亂して一定ならず』彼此の三昧に依つて、常に自ら貢高して他人を毀訾す。是れを名けて惡知識の法と爲すと謂ふなり。復次に惡知識は復是の念を作す、『我智慧第一なるも、此餘の比丘は智慧有ることなし、彼此の智慧に依つて自ら貢高して、他人を毀訾す。是れを名けて惡知識の法と爲すと謂ふなり。復次に惡知識の人は復是の念を作す、『我今常に飲食・床褥・臥具・病瘦の醫藥を得るも、此の餘の比丘は此の供養の具を得ること能はず』と。彼此の利養の物に依つて自ら貢高して他人を毀訾す。是れを名けて惡知識の法と爲すと謂ふな

〔三〕世尊と法と衆僧は、卽ち佛法僧の三寶。

識の人を觀ずべきや」。世尊告げて曰はく、「當に觀ずること月を觀ずるが如くすべし」と。婆羅門曰さく「當に云何善知識を觀ずべきや」と。世尊告げて曰はく、「當に觀ずること月を觀ずるが如くすべし」と。婆羅門曰さく、「沙門瞿曇の今說く所のものは、其の要を略說するものにして、未だ廣義を解せず、唯願はくは瞿曇、廣く、普く義を說きて、未だ解せざるものをして解せしめたまへ」と。世尊告げて曰はく、「婆羅門諦に聽け、諦に聽いて善く之を思念せよ、吾當に汝の與に其の義を演ぶべし」と、婆羅門對へて曰さく、「是の如し、瞿曇」と。生漏婆羅門は佛より敎へを受く、世尊告げて曰はく、「猶し婆羅門、月末の月の如し、晝夜に周り旋るも、但其の損すること有つて、未だ其の盈つること有らず。彼減損するを以てなり。或は復時有つてか月現れず、見るもの有ること無し。此れも亦是の如し。婆羅門、若し惡知識あつて晝夜に經歷するも、漸く信有ることなく、戒有ることなく、聞有ることなく、施有ることなく、智慧有ることなし。彼信・戒・聞・施・智慧有ることなきを以て、是の時彼の惡知識身壞命終せば地獄の中に入らん。是の故に婆羅門、我今是の惡知識を說くは猶し月末の月の如し。猶し婆羅門、月の初めて生ずる時の如し。日夜を經過する所に隨つて、光明漸く增し、稍稍盛滿して、便ち十五日に於て具足して盛滿し、一切の衆生の見ざる者靡し。是の如く婆羅門、若し善知識、日夜を經歷して信・戒・聞・施・智慧を增益す。彼信・戒・施・聞・智慧を增益するを以てなり、爾の時善知識、身壞命終して天上善處に生る。是の故に婆羅門、我今此の善知識の所趣は『猶し月の盛滿するが如し』と說くなり」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

若し人　[一]貪欲有り　瞋恚癡盡きずば　善に於て漸く減ずること有り　猶し月の盡くるに向ふが如し
若し人貪欲なく　瞋恚癡亦盡きれば　善に於て漸く增すこと有り　猶し月の盛滿するが如し

是の故に婆羅門、當に月の初めの如く學ぶべし」と。

【一】貪欲（Rāga）。瞋恚（Dosa）。癡（Moha）。の三を三毒といふ。根本の煩惱。

り、珠寶自ら滅し、玉女寶・居士寶・典兵寶斯れ皆命終りぬ。爾の時頂生聖王身に重病を得、諸の宗族親屬普く悉く雲集して王の病を問訊す、『云何が大王、若し大王をして命終らしめば後、人有り來つて此の義を問はん、「頂生大王は命終るに臨むの時に、何の言教有りしや」と。設し此の問ひ有らば、當に何を以て之に報ふべきや』と。頂生聖王報へて曰く、『若し我をして命終らしめば、命終の後人有つて問はゞ、此れを以て之に報へよ「頂生王は此の四天下を領して厭足なきに、復三十三天に至り、彼に在つて數百千歳を經、意に猶貪欲を生じて天帝を害せんとし、便ち自ら墮落して即ち命終を取れり」』と。汝今阿難、狐疑を懷くこと勿れ、爾の時の頂生王とは豈異人ならんや。是の觀を作すこと莫かれ、然る所以は、時に頂生王とは即ち我身是れなり、爾の時我此の四天下を領し、及び三十三天に至り、五欲の中に於て厭足有ることなかりき。阿難當に此の方便を以て所趣を證知すべし。貪欲心を興せば、倍其の想を增し、愛欲中に於て厭足なし。厭足を求めんと欲せば、當に聖賢智慧の中に從つて求むべし」と。爾の時世尊大衆の中に於て便ち此の偈を說きたまはく、

貪婬は時雨の如く　欲に於て厭足なし　樂少くして苦多く　智者の屛棄する所なり　正使天の樂しみを受けて　五樂にして自ら娛しむも　愛の心を斷ずるに如かず　正覺の弟子よ　貪欲億劫に延ぶれば　福盡き還つて獄に入る　樂しみを受けて詎ること幾時ぞ　輒ち地獄の痛みを受けん

と、是の故に阿難、當に此の方便を以て、欲を知り、欲を去るべし、永く其の想を興さざれ。當に是の學を作すべし」と。爾の時阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

[一〇] 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時生漏婆羅門便ち世尊の所に往至し、共に相問訊し、一面に在りて坐す。是の時生漏婆羅門世尊に白して曰さく、「當に云何が惡知

【一〇】A. V. 31の頌參照。

し』と。爾の時聖王小しく復前み行きて、復彼の土の普く悉く平正なるを見、遙に高台の顯望の殊特なるを見、復諸臣に告ぐ、『汝等此の土の普く地の平正なるを見るや』、對へて曰く、『是の如し、皆悉く之を見る』と。大王報へて曰く、『此れは劫波育樹衣と名く。汝等も亦復當に此の樹衣を著くべし』と。爾の時阿難、彼の土の人民、大王の來るを見、皆起ちて前んで迎禮し、跪いて問訊し、異音同響に是の說を作す、『善くぞ來れり、聖王、此の鬱單越は人民熾盛にして諸の珍寶多し、唯願はくば大王、當に此に於て諸の人民を治化して、法の教に從は使むべし』と。爾の時阿難、頂生聖王は即ち鬱單越に於て人民を統領し、乃ち百千萬歲を經たり、是の時頂生聖王は復餘の時に於て便ち此の念を生ず、『我今閻浮地有り、人民熾盛にして諸の珍寶多し、亦七寶を雨らし、乃ち膝に至る。今亦復此の瞿耶尼・弗于逮及び此鬱單越有り、人民熾盛にして諸の珍寶多し。我も亦曾て耆年の長老の邊に從つて聞く、三十三天有り、快樂無比にして壽命極めて長く、衣食自然なり、玉女營從して稱計すべからず。我今當に往いて彼の天宮を領し、法を以て治化すべし』と。爾の時阿難、頂生聖王は適斯の念を生じ、四部の兵を將ひて鬱單越より沒して便ち三十三天の上に往至す。爾の時天帝釋、遙に頂生聖王の來るを見、便ち是の說を作す『善くぞ來れり大王、此の座に就くべし』と。爾の時阿難、頂生聖王は即ち釋提桓因と共に一處に坐す。二人共に坐して分別すべからず。顏貌擧動、言語聲響一にして異らず。爾の時阿難、頂生聖王彼に在つて、乃ち數千百歲を經、已つて、便ち此の念を生ず、『我今此の閻浮地有り、人民熾盛にして諸の珍寶多く、亦七寶を雨らし乃ち膝に至る。亦瞿耶尼有り、亦復弗于逮有り、亦復鬱單越有り、人民熾盛にして諸の珍寶多し。我今此の三十三天に至る。我今宜しく此の天帝釋を害して便ち此の間に於て獨り諸天に王たるべし』と。爾の時阿難、頂生聖王は適此の念を生ずるや、即ち座上より自ら退墮して閻浮里地に至り、及び四部の兵も皆悉く落墮す。爾の時亦輪寶を失ひ、所在を知ること莫し、象寶・馬寶は同時に命終

して諸の珍寶多く、亦七寶を雨らして乃ち膝に至る。今亦復此の瞿耶尼有り、人民熾盛にして諸の珍寶多し。我も亦曾て長年より聞くことを許す、復[八]弗于逮有り、人民熾盛にして諸の珍寶多し。我今當に往いて彼の國土を統べ、法を以て治化すべし』と。爾の時阿難、頂生聖王は適斯の念を生じ、四部の兵を將ひ瞿耶尼より沒して便ち弗于逮に往至す。爾の時彼の土の人民聖王の來るを見、皆悉く前んで迎禮し、跪いて問訊し、異口同響に是の語を作す『善くぞ來れり、大王、今此の弗于逮は人民熾盛にして、諸の珍寶多し、唯願はくば大王、當に此に於て諸の人民を治化して法の敎に從はしむべし』と。爾の時阿難頂生聖王は卽ち弗于逮に於て人民を統領し、乃ち百千萬歲を經たり。是の時聖王頂生、復餘の時に於て便ち此の念を生ず『我閻浮提に於て人民熾盛にして諸の珍寶多く亦七寶を雨らして乃ち膝に至る。今亦復此の瞿耶尼有り、人民熾盛にして諸の珍寶多し、今亦復此の弗于逮國有り、人民熾盛にして諸の珍寶多し。我も亦曾て耆年の長老の邊に從つて聞く、復[九]鬱單越有り、人民熾盛にして諸の珍寶多く、爲す所自由にして固守する者なり。壽は中夭ならずして正しく壽千歲なり、彼に在りて壽終れば必ず天上に生じて餘趣に墮せず、劫波の育衣を著けて自然の粳米を食す。我今當に往いて彼の國土を統領し、法を以て治化すべし』と。爾の時阿難、頂生聖王は適斯の念を生じ、四部の兵を將ひ、弗于逮より沒して便ち鬱單越に往至し、遙に彼の土の鬱然として青色なるを見、見已つて便ち左右の臣に問うて曰く、『汝等普く此の土の鬱然として青色なるを見るや不や』と。對へて曰く、『唯然り、之を見る』と。王群臣に告げて曰く、『此れは是れ柔軟の草、軟きこと天衣の如くして異り有ることなし。此等の諸賢當に斯に於て坐すべし』と。小しく復前み行きて、遙に彼の土の晃然として黃色なるを見、便ち諸臣に告げて曰く、『汝等普く此の土の晃然として黃色なるを見るや不や』と。對へて曰く、『皆悉く之を見る』と。大王告げて曰く、『此れは自然の粳米と名く。此等の諸賢は恒に此の食を食す。今卿等の如く。亦當に此の粳米を食すべ

【八】弗于逮(Pubbavideha)。とは、四洲の一、須彌山の東の大海の中にありて、國土は圓形をなし、住民の顏の形も亦圓しと、一に東勝身洲といふ。

【九】鬱單越(Uttarakuru)とは、四洲の一、須彌山の北の大海の中に在りて、國土・人民の顏共に正方形をなすと、一に北俱盧洲ともいふ。

べし。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[5]聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時尊者阿難、閑靜の處に在つて、獨り自ら思惟して便ち是の念を生ず。諸有の生民欲愛の想を興して便ち欲愛を生じ、晝夜に之を習ふて厭足有ることなし」と。爾の時尊者阿難、向暮に卽ち座より起ち、衣を著けて服を正し、便ち世尊の所に往至し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時尊者阿難、世尊に白して曰く、「向に閑靜の處に在つて便ち此の念を生じぬ、『諸有の衆生は欲愛の想を興して便ち欲愛を生じ、長夜に之を習ふて厭足有ることなし』」と。

世尊告げて曰はく、「是の如し、阿難、汝の言ふ所の如し、諸有の人民欲愛の想を興して便ち欲想を増し、長夜に之を習ふて厭足有ることなし。所以は何ぞや、昔阿難、過去世の時に轉輪聖王有り、名けて頂生と曰ひ、法を以て治化して奸罔有ることなく、七寶成就す所謂七寶とは、輪寶・象寶・馬寶・珠寶・玉女寶・居士寶・典兵寶なり。是れを七寶と謂ふなり。復千子有り、勇猛强壯にして能く諸惡を降伏し、四天下を統領し、刀杖を加へず。阿難、當に知るべし。爾の時頂生聖王便ち此の念を生ず、『我今此の閻浮提地有り、人民熾盛にして諸の珍寶多し、我も亦曾て耆年の長老の邊に從つて聞きぬ。西に[6]瞿耶尼土有り、人民熾盛の珍寶多し。我今當に往いて彼の國土を統ぶべし』と。爾の時阿難、頂生は適斯の念を生じ、[7]四部の兵を將ひて此の閻浮地より沒し、便ち瞿耶尼土に往至す。爾の時彼の土の人民、聖王の來るを見、皆悉く前んで迎禮し、跪いて問訊し、『善くぞ來れり、大王、今此の瞿耶尼國は人民熾盛なり。唯願はくは聖王、當に此に於て諸の人民を治化し、當に法の教に從はしむべし』と。爾の時阿難、聖王頂生卽ち瞿耶尼に於て人民を統領し、乃ち數百千年を經たり。是の時聖王頂生は復餘の時に於て、便ち此の念を生ず、『我閻浮提に有り、人民熾盛に

【五】 A. IV. 2. 5 M.no 參照。
Theri G. V. 486
Theri G.A. p. 287

【六】 瞿耶尼(Aparagoyāna)。とは四洲の一、須彌山の西、大海の中にありて、半月形をなすと、漢譯に西牛貨洲といふものこれなり。

【七】 四部の兵とは、象軍、馬軍、車軍、步軍の四。

することを念ずべし。不煩惱の法は當に修行することを念ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘 佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

[三] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「邪見の衆生の所念所趣、及び餘の諸行の一切は貴ぶべきものなく、世間の人民の貪り樂しまざる所なり。然る所以は、其れ邪見は不善なるを以ての故なり。猶し諸の苦果の子あるが如し 所謂苦果、苦蔘子、葶藶子、畢地槃持子及び諸餘の苦子なり、便ち良地に於て此の諸子を種え、然る後苗を生ずるも復故の苦の如し。然る所以は、其の子本苦なるを以ての故に、此の邪見の衆生も亦復是の如し。作す所の身行・口行・意行・所趣所念及び諸の惡行は一切貴ぶべきものなく。世間の人民の貪り樂しまざる所なり。然る所以は其の邪見惡不善を以ての故に、是の故に諸比丘、當に邪見を除き、正見を習行すべし。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

【三】 A. I. 17. 9

六

[四] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「正見の衆生の所念所趣及び諸餘の行一切は盡く貴敬すべく、世間の人民の貪り樂しむ可き所なり。所以は何ぞや。其の正見の妙なるを以ての故に、猶し諸の甜果有るが如し。若しは甘蔗、若しは蒲桃果及び諸の一切の甘美の菓、人有つて良地を修治して取つて之を種ゆ、然る後に子を生じて皆悉く甘味にして、人の貪り樂しむ所なり。然る所以は、其の果子は本甘美なるを以ての故に、此の正見の衆生も亦復是の如く、所念所趣及び諸餘の行、一切皆貪り樂しむ可し。世間の人民の喜ばざる者なし。所以は何ぞや、其の正見の妙なるを以ての故に、是の故に諸比丘、當に正見を習行す

【四】 A. I. 17. 10

巻の第八

安般品の二

二

[一]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「二人世に出現すること甚だ得難しとなす。云何が二人となすや。所謂如來至眞等正覺世に出現すること甚だ得難しとなす。轉輪聖王世に出現すること甚だ得難しとなす。此の二人世間に出現すること甚だ得難しとなす」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[二]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「二人世に出現すること甚だ得難しとなす。云何が二人と爲すや。所謂辟支佛世間に出現すること甚だ得難しとなす。如來の弟子漏盡阿羅漢世間に出現すること甚だ得難しとなす。是れを比丘、此の二人は世に出現すること甚だ得難しとなすと謂ふなり」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の二法有り、世間に在つて甚だ煩惱となす。云何が二法と爲すや。所謂衆惡の本を作して諸の怨嫌を起す。復善行諸德の本を造らず。是れを比丘、此の二法有つて甚だ煩惱と爲す。是の故に諸比丘當に此の煩惱の法を覺知すべし。亦常に不煩惱の法を覺知すべし。諸の煩惱の法は當に斷除

【一】A. II. 6. 2
【二】A. II. 6. 2

趣、若しは好、若しは醜、所行所造を觀じて實の如く之を知り、或は衆生有つて身に惡を行ひ、口に惡を行ひ、意に惡を行ひ、賢聖を誹謗して邪見を行じ、邪見の行を造れば、身壞命終して地獄の中に入り、或は衆生有つて身に善を行ひ、口に善を行ひ、意に善を行ひ、賢聖を誹謗せず、恒に正見を行じ、正見の行を造れば、身壞命終して善處天上に生る。是れを天眼淸淨にして瑕穢なく、衆生の類の生るゝもの、逝くもの、善色惡色、善趣惡趣、若しは好、若しは醜、所行所造を觀じ、實の如く之を知ると謂ふなり。復更に施意、盡漏心を成じ、彼此の苦を觀じて實の如く之を知り、復苦の集を觀じ、亦苦の盡を知り、亦苦の出要を知り、實の如く之を知る。彼是の觀を作すを以て欲漏より心解脫を得、有漏無明漏より心解脫を得、便ち解脫智を得て生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復有を受けず。實の如く之を知る。是の時尊者羅雲便ち阿羅漢を成ぜり。是の時尊者羅雲已に阿羅漢を成じて便ち座より起ち、更に衣服を整へ、世尊の所に往至し、頭面に足を禮して一面に在りて住し、世尊に白して曰さく、「求むる所已に得て諸漏除盡せり」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「諸の阿羅漢を得しもの羅雲と等しきもの有ることなし。諸有の漏盡きることも亦是れ羅雲比丘なり。諸の禁戒を持するもの亦是れ羅雲比丘なり。然る所以は、諸の過去の如來等正覺に亦此の羅雲比丘有りて、佛子と言はんと欲しき。亦是の羅雲比丘は親しく佛より生ぜし法の上なるものなり」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我聲聞中第一の弟子にして能く禁戒を持するものは所謂羅雲比丘是れなり」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

禁戒の法を具足し　諸根亦成就す　漸々に當に逮得して　一切の結を盡くさしむべし

爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

增壹阿含經卷第七

安般品第十七の一

り、時有つて息有れば亦復有りと知り、時有つて息なければ亦復なしと知り、若し息心より出づれば亦復心より出づと知り、若し息心より入れば亦復心より入ると知る、是の如く羅雲、能く安般を修行せば則ち愁憂惱亂の想なく、大果報を獲て甘露味を得ん」と。

爾の時世尊、具足して羅雲の與に微妙の法を說き已りたまふや、羅雲卽ち座より起ち、佛足を禮して遶ること三匝して去り、安陀園に往詣し、一樹下に在つて、身を正し、意を正し、結跏趺坐して他の餘念なく、心を鼻頭に繫ぎ、出息長ければ亦息長しと知り、入息長ければ亦息長しと知り、出息短ければ亦息短しと知り、入息短ければ亦息短しと知り、出息冷かなれば亦息冷かなりと知り、入息冷かなれば亦息冷かなりと知り、出息暖ければ亦息暖しと知り、入息暖ければ亦息暖しと知り、盡く身體を觀じて入息出息皆悉く之を知る、時有つて息有れば亦復有りと知り。時有つて息なくば亦復無しと知り、若し息心より出づれば亦復心より出づと知り、若し息心より入れば亦復心より入ると知る」と。爾の時羅雲、是の如き思惟を作して、欲心便ち解脫を得て復衆惡なく、有覺有觀、喜安を念持して初禪に遊び、有覺有觀息み內に自ら歡喜して其の一心を專らにし、無覺無觀三昧念喜の二禪に遊び、復喜念なく、自ら專ら覺知して身樂しみ、諸の賢聖の常に護を求むる所を喜念して三禪に遊び、彼苦樂已に滅して復愁憂なく、苦なく樂なく護念清淨にして四禪に遊び、彼此の三昧を以て心清淨にして塵穢なく、身體柔軟にして從來する所を知り、本の所作を憶ひて自ら宿命無數劫のことを識り、亦一生・二生・三生・四生・五生・十生・二十生・三十生・四十生・五十生・百生・千生・萬生・數十萬生、成劫敗劫、無數の成劫、無數の敗劫、億載不可計劫を知り、我曾て彼に生れ、名は某、姓は某、此の如き食を食し、此の如き苦樂を受く、壽命の長短、彼に終つて此に生れ、此に終つて彼に生ると、彼此の三昧を以て心清淨にして瑕穢なく、亦諸結なし。亦衆生の所起の心を知り、彼復天眼清淨にして瑕穢なきを以て、衆生の類の生るゝもの、逝くもの、善色惡色・善趣惡

べし。已に悲心を行ぜば所有の害心悉く當に除盡すべし。汝今羅雲、當に喜心を行ずべし。已に喜心を行ぜば所有の嫉心皆當に除盡すべし。汝今羅雲、當に護心を行ずべし。已に護心を行ぜば所有の憍慢悉く當に除盡すべし」と。爾の時世尊、羅雲に向つて便ち此の偈を說きたまはく、

數著想を起すこと莫かれ　恒に自ら法に順ふべし　此の如きは智の士　名稱則ち流布し人
人の與に炬明を執り　大闇冥を壞れば　天龍戴きて奉敬し　師長尊を敬奉せん

と。是の時羅雲比丘、復此の偈を以て世尊に報へて曰さく、

我著想を起さず　恒に復法に順ふ　此の如き智の士は　則ち能く師長に奉ず

と。爾の時世尊、是の敎勅を作し已つて便ち捨てゝ去り、還えつて靜室に詣りたまへり。

是の時尊者羅雲復是の念を作す、「今云何が安般を修行して愁憂を除去し、諸想有ることなけん」と。是の時羅雲、卽ち座より起ち、便ち世尊の所に往き、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐し、須臾にして退いて坐し、世尊に白して曰さく、「云何が安般を修行して愁憂を除去し、諸想有ることなく、大果報を獲て甘露味を得るや」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、羅雲、汝乃ち能く如來の前に於て師子吼して此の如き義を問へり。『云何安般を修行して愁憂を除去し、諸想有ることなく、大果報を獲て甘露味を得るや』と。汝今羅雲、諦に聽け、諦に聽いて善く之を思念せよ、吾當に汝の爲に具に分別して說くべし」と。對へて曰さく、「是の如し、世尊」と、爾の時尊者羅雲、世尊より敎へを受く、世尊告げて曰はく、「是に於て羅雲、若し比丘有つて、閑靜にして無人の處を樂しみ、便ち身を正し、意を正して結跏趺坐し、他の異念なく、意を鼻頭に繫ぎ出息長ければ、息長しと知り、入息長ければ亦息長しと知り、出息短かければ亦息短しと知り、入息短かければ亦息短しと知り、出息冷かなれば亦息冷かと知り、入息冷かなれば亦息冷かと知り、出息暖なれば亦息暖しと知り、入息暖なれば亦息暖しと知り、盡く身體を觀じて、入息出息皆悉く之を知

禁戒の法を具足し　諸根も亦成就す　漸々に當に逮得して　一切の結を盡さしむべし

是の故に諸比丘、常に當に念じて正法を修治して漏失有ることなかるべし、是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

難陀と涅槃と烏　驢不善に二有り　燭及び忍思惟と　梵志と羅雲となり

安般品第十七の一

一

[四二]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、時到り、衣を著け鉢を持し、羅雲を將ゐて舍衞城に入つて分衞し給ひぬ。爾の時世尊右旋し顧みて羅雲に謂はまく、「汝今當に色は無常なりと觀ずべし」と。羅雲對へて曰さく、「是の如し、世尊、色は無常なり」と。世尊告げて曰はく、「羅雲、痛・想・行・識皆悉く無常なり。」羅雲對へて曰さく、「是の如し、世尊、痛・想・行・識皆無常なり」と。是の時尊者羅雲、復是の念を作す。「此れ何の因緣有つて今方に城に向つて分衞し、又道路に在つて何故に世尊は面りに我に告げて誨へたまふや、今宜しく所在に還歸すべし。入城して乞食すべからず」と。

爾の時尊者羅雲、卽ち中道に還えつて祇洹精舍に到り、衣鉢を持して一樹下に詣り、身を正し、意を正して結跏趺坐し、專精一心に色の無常を念じ、痛・想・行・識の無常を念ず。爾の時世尊、舍衞城に於て乞食し已つて、食後祇洹精舍に在りて自ら經行し、漸々に羅雲の所に至り、到り已つて羅雲に告げ曰はく、「汝當に[四三]安般の法を修行すべし。此の法を修行せば、所有の愁憂の想皆當に除盡すべし。汝今復當に惡露不淨想を修行すべし。所有の貪欲盡きて當に除滅すべし。汝今羅雲、當に慈心を修行すべし。已に慈心を行ぜば所有の瞋恚皆當に除盡すべし。汝今羅雲、當に悲心を行ず

【四二】 M. 62. Rāhulovādas.

【四三】 安般(Ānāpāna)。呼吸を觀念すること。前註を見よ。

て吾我を生ずるもの是れを名けて憍慢結と爲すなり。是の故に梵志、當に方便を求めて此の諸結を除くべし、是の如く梵志、當に是の學を作すべし」と。梵志即ち座より起ち、阿那律の足を禮し、遶ぐること三匝して去る。未だ所在に至らざる中道に於て此の義を思惟し、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。爾の時天有り、昔此の梵志と親友なりき。梵志の心中の所得を知識し、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。爾の時彼の天復尊者阿那律の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて住し、即ち此の偈を以て阿那律を歎じて曰く、

梵志未だ家に至らずして　中道に道跡を得たり　垢盡きて法眼淨　疑ひなく猶豫なし

爾の時尊者阿那律、復偈を以て天に告げて曰く、

我先に彼の心を觀ずるに　中間道跡すべし　彼の人は迦葉佛なり　曾て此の法教を聞けり

爾の時尊者阿那律即ち其の時彼の處を離れ、人間に在りて遊び、漸々に舍衞國に至り、世尊の所に到り、頭面に足を禮し、一面に在りて住す。爾の時世尊、具に法語を以て阿那律に告げたまひ、阿那律佛の教を受け已つて便ち座より起ち、頭面に足を禮して便ち退いて去る。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我聲聞中の弟子にして、天眼第一を得し者は所謂阿那律比丘是れなり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時尊者羅雲禁戒を奉修して觸犯する所なく、小罪も尙避く、況んや復大をや。然るに有漏心解脱を得ず。爾の時衆多の比丘、便ち世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在つて坐す。爾の時衆多の比丘、世尊に白して曰さく、「羅雲比丘は禁戒を奉修して觸犯する所なし、然るに有漏心解脱せず」と。爾の時世尊便ち此の偈を說き給はく、

人非人なるや」と。爾の時阿那律、梵志に報へて曰く、「向者釋梵四天王及び五百の天人、并せて二十八の大鬼神王我所に來至して、頭面に足を禮し、一面に在りて住し、復此の偈を以て我を歎じて曰く、

人中の上に歸命す　衆人の敬奉する所　我等今　爲に何等の禪に依るかを知らず

と。梵志問うて曰く、「何等を以ての故に、我今其の形を見ざるや。釋梵四天王は何の所在爲るや」と。阿那律報へて曰く、「汝天眼有ることなきを以ての故なり。是の故に釋梵四天王及び五百の天人及び二十八の大鬼神王を見ざるなり。」梵志問うて曰く、「設し我能く天眼を得ば、此の釋梵四天王、及び二十八大鬼神王を見るや。」阿那律報へて曰く、「設し當に天眼を得は、便ち能く釋梵四天王及び五百の天人并せて二十八の大鬼神王を見るなり。然して復梵志、此の天眼は何ぞ奇となすに足らん、梵天有り、名けて千眼と曰ふ。彼此の千世界を見ること、有眼の士の自ら掌中に於て、其の寶冠を觀るが如し。此の梵天も亦是の如く、此の千世界を見るに罣礙有ることなし。然るに此の梵天は自ら身に著くる所の衣服を見ず」と。梵志問うて曰く、「何を以ての故に千眼の梵天、自ら形に著くる所の服飾を見ざるや」と。阿那律曰く、「其れ彼の天は無上の智慧の眼有ることなきを以ての故に。故に自ら己れの身に著くる所の服飾を見ざるなり。」梵志問うて曰く、「設し我れ無上の智慧の眼を得ば、此の身に著くる所の服飾を見るや不や。」阿那律曰く、「汝戒有りや。」梵志問うて曰く、「云何が之を名けて戒と爲すや。」阿那律曰く、「衆惡を作さず、非法を犯さゞるなり。」梵志報へて曰く、「是の如きが戒ならば、我此の如きの戒を奉持するに堪ゆ」と。阿那律曰く、「汝今梵志、當に禁戒を持つべし。毫釐も失ふことなかれ、亦當に憍慢の結を除去して、吾我に染著するの想を計すること莫かるべし」と。時に梵志復阿那律に問うて曰く、「何者か是れ吾、何者か是れ我なるや、何者か是れ憍慢の結なるや」と。阿那律曰く、「吾とは是れ神識なり、我とは是れ形體の具なり。中に於て識を起し

道に趣くの業と謂ふなり。我此れに由つて已に燭明を說き、亦燭に由つて道に趣くの業說けり。如來の爲すべき所のものは今已に周く訖りぬ。善念諷誦して懈怠なること勿れ。今行ぜずば後に悔ひるも及ぶことなけん」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の二力有り、云何が二力を得るや。所謂忍力と思惟力となり。設し吾に此の二力なくば終に無上正眞等正覺を成ぜざりしならん。又此の二力なくば、終に〔三九〕優留毘處に於て六年苦行せざりしならん、亦復魔怨を降伏して無上正眞の道を成じて道場一坐すること能はざりしならん。我に忍力思惟力有りしを以ての故に、便ち能く魔衆を降伏して、無上正眞の道を成じ、道場に坐せしなり。是の故に諸比丘、當に方便を求むべし。此の二力,忍力・思惟力を修せば、便ち〔四〇〕須陀洹道・斯陀含道・阿那含道・阿羅漢道を成じ、無餘涅槃界に於て般涅槃せん。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。」

九

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時尊者阿那律、〔四一〕拘尸那竭國本所生處に在りき。爾の時釋梵四天王、及び五百の天人幷せて二十八大鬼神王あり。便ち尊者阿那律の所に往至し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて住す。復此の偈を以て阿那律を歎じて曰く、

人中の上に歸命す　衆人の敬奉する所　我等今　爲に何等の禪に依るかを知らず

爾の時梵志有り、名けて闍拔吒と曰ふ、是梵摩喩の弟子なり。復尊者阿那律の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時彼の梵志阿那律に問うて曰く、「我昔王宮に在つて生るゝも、未だ曾て此の自然の香を聞かず。何人の有つて此の間に來至する爲めにや。是れ天・龍・鬼神なるや、

【三九】優留毘處(Uruvela)。

【四〇】須陀洹道(Sotāpattimagga)は、預流向ともいふ。斯陀含道(Sakadāgāmimagga)は、一來向ともいふ。阿那含道(Anāgāmimagga)。不還向ともいふ。阿羅漢向(Arahattamagga)。上の註を見よ。

【四一】拘尸那竭國本所生處(Kusinārāupavattana)。拘尸の昔生れしことのある場所の意。

善と爲す。[三六]恚を起すを不善と爲し、恚を起さゞるを善と爲す。[三七]邪見を不善と爲し、正見を善と爲す。是の如く比丘、此の惡を行じ已れば畜生・餓鬼・地獄中に墮す、設し善を行ずる者は、便ち人中天上及び諸の善趣・阿須倫中に生る。是の故に當に惡行を遠離し、善行を修習すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我當に汝等の與に微妙の法を說くべし。初めも善く、中も善く、至竟も亦善く、義有り、味有り、具足して梵行の法を修むることを得、所謂二法なり。諦に聽け、諦に聽いて善く之を思念せよ。吾當に汝の與に具足して之を說くべし」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時諸比丘、佛より教を受く。世尊告げて曰はく、「彼云何が二法と爲すや。所謂[三八]邪見と正見、邪治と正治、邪語と正語、邪業と正業、邪命と正命、邪方便と正方便、邪念と正念、邪三昧と正三昧、是れを比丘、名けて二法と爲すと謂ふなり。我今已に汝の與に此の二法を說く。如來の爲すべき所は今已に周く訖る。善念、諷誦して懈惓有ること勿れ。今行ぜずば後に悔いるも及ぶことなけん」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に燭明の法を說くべし。亦燭に由つて道に趣くの業を說くべし。諦に聽け、諦に聽いて善く之を思念せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「彼云何が燭明者と名くるや。」所謂貪・婬・瞋恚・愚癡盡く。彼云何が名けて燭に由つて道に趣くの業と爲すや。所謂正見・正治・正語・正業・正命・正方便・正念・正三昧なり。是れを燭に由つて道

【三六】恚(Vyāpāda)。
【三七】邪見(Micchādiṭṭhi)。とは誤れる見解、以上の十種を十不善、又は十惡といふ。從てその反對を十善といふ。
【三八】邪見と正見以下八邪道と八正道とを出す。

なるべく、諸の善想を生ず。亦能く制持して復諸惡なし。常に眼根を擁護し、耳聲鼻香口味身細滑意法に識病を起さず。爾の時意根則ち清淨を得、彼の人便ち、諸の梵行人の所に到れば、諸の梵行の人は遙に以て來るを見、各ゝ自ら聲を揚げて『善くぞ來れり、同學[二七]』と、時に隨つて供養して乏しきことあらしめず。猶し良牛の牛の衆中に入りて自ら稱說して『我今是れ牛』と。然も其の毛尾耳角音聲都て悉く是れ牛なり、諸牛見已つて各來つて體を舐めるが如し。此れも亦是の如く、鬚髮を剃除して三法衣を著け、信牢固を以て出家學道す。爾の時彼の人諸根寂定にして飲食に節を知り、竟日經行して未だ曾て捨離せず、意三十七道品の法に遊び、若し眼色を見るも色想を起さず、亦流馳の念なし。爾の時眼根則ち清淨を得、諸の善想を生じ、亦能く制持して復諸惡なし。常に眼根を擁護し、耳聲鼻香口味身細滑意法に識病を起さず。爾の時意根則ち具足を得、是れを此れ人にして牛に像たるものと謂ふなり。是の如く諸比丘、當に牛の如くして驢の如く像ること莫かれと學ぶべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に善不善の行を說くべし。諦に聽け、諦に聽いて善く之を思念せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。爾の時諸比丘、佛より教を受く、世尊彼に告げて曰はく、「云何が名けて不善と爲すや。云何が名けて善と爲すや。所謂殺生[二八]を不善と爲し、不殺を善と爲す。不與取[二九]を不善と爲し、與取を善と爲す。婬泆[三〇]を不善と爲し、不婬を善と爲す。妄語[三一]を不善と爲し、不妄語を善と爲す。綺語[三二]を不善と爲し、不綺語を善と爲す。兩舌[三三]を不善と爲し、不兩舌を善と爲す。彼此[三四]と鬪亂するを不善と爲し、彼此と鬪亂せざるを善となす。他を貪る[三五]を不善と爲し、他を貪らざるを

【二七】同學(Samasikkhatā)。同一の師に從つて同一の學をなす仲間のこと、同輩に同じ。

【二八】殺生(Pāṇātipāta)。

【二九】不與取(Adinnādāna)。

【三〇】淫泆　Kāmesumicchācāra)。非梵行とも邪淫ともいふ。

【三一】妄語　Musāvāda)。

【三二】綺語(Samphappalāpa)とは、不要の無駄話に耽ること。

【三三】兩舌(Pisuṇāvācā)は、離間語ともいひ、相互の和合を破るために二枚舌を使ふをいふ。

【三四】惡口のこと。(Pharusāvācā)粗語ともいひ、荒々しい暴言を吐くこと。

【三五】貪(Abhijjhā)。

て色想を起し．萬端に流馳す。爾の時眼根則ち清淨に非らずば諸の亂想を生じ、制持すること能はず、衆惡普く至る。亦復眼根を護ること能はず、耳に聲を聞き、鼻香を嗅ぎ　舌味を知り、身細滑を知り。意法を知る．隨つて識の病を起し、萬端に流馳す。爾の時意根清淨に非ずば、諸の亂想を生じ、制持すること能はず、衆惡普く至る。亦復意根を護ること能はず。威儀禮節の宜しき有ることなく、行歩進止屈伸低仰、衣鉢を執持するに、都て禁戒に違へば、便ち梵行の人の爲に譏彈せられて、『咄此の愚人、像ること沙門の如し』と、便ち彈擧を取る。設ひ是れ沙門なるも宜爾るべからず。彼是の說を爲す『我も亦是れ比丘、我も亦是れ比丘』と、猶し驢の牛群の中に入つて、自ら稱して曰く『我も亦是れ牛、我も亦是れ牛』と。然るに其の兩耳を觀るに、復牛に似ず、角も亦似ず、尾も亦似ず。音聲各〻異る。爾の時群牛或は角を以て觸れ、脚を以て蹋り、或は口を以て嚙むが如し。今此の比丘も亦復是の如く、諸根定らずして、若し眼色を見れば隨つて色想を起して萬端に流馳す。爾の時眼根則ち清淨に非ざれば、諸の亂想を生じ、制持すること能はず、衆惡普く至り、亦復眼根を護ること能はず。耳に聲を聞き、鼻香を嗅ぎ、舌味を知り、身細滑を了り、意法を知り、隨つて識に病を起し、萬端に流馳す。爾の時意根則ち清淨に非ざれば諸の亂想を生じ、制持すること能はず、衆惡普く至り、亦復意根を護念すること能はず、威儀禮節の宜しき有ることなく、行歩進止屈伸低仰、禁戒を執持し便ち梵行の人の爲に譏彈せられて、『咄、此の愚人、像ること沙門の如し』と。便ち彈擧せらる。設ひ是れ沙門なるも、宜爾るべからず。爾の時彼是の說を作す。『我は是れ沙門なり』と、猶し驢の牛の群に入るが如し。是れを人にして驢に像たるものと謂ふなり。

彼の人云何が牛に像るものなるや。若し一人有つて鬚髮を剃除し、三法衣を著け、信牢固を以て出家學道す。爾の時彼の人、諸根寂定にして飲食に節を知り、竟日　經行[二六]して未だ曾て捨離せず。意三十七道品の法に遊び、若し眼色を見るも色想を起さず、亦流馳の念なし。爾の時眼根則ち清淨

【二六】經行とは、逍遙散歩すること。坐禪に倦めるもの靜かに散歩す。

以は、或は諸の梵行人の爲に譏彈所見れて、『此の人欲を習ひて諸の惡行を作す』と、彼諸の惡行を作し已つて、人の向つて悔過し、自ら羞恥を知ること、猶し彼の鳥の恒に苦飢を患ひ、便ち不淨を食し、尋で卽ち嘴を拭ひ、餘鳥有り見て、『此の鳥不淨を食せり』と言ふを恐るゝが如し。此れも亦是の如く、若し一人有り、閑靜處に在つて婬欲を習ひ、不淨行を作して後、便ち羞恥して自ら悔過し、人に向つて演說して所作の事を陳べん。然る所以は、或は諸の梵行人の爲に記識所見れて、『此の人欲を習ひて諸の惡行を作す』と。是れを名けて人の猶し烏の如しと爲すと謂ふなり。彼云何が名けて人の猪の如しと爲すや。若し一人有り、閑靜處に在つて、長く婬欲を習ひ、諸の惡行を作して亦羞恥せず、復悔過せず、人に向つて自ら譽め貢高して自ら用ふ、『我能く五欲を得て自ら娛しむも、此の諸人等は五欲を得ること能はず』と。彼惡を作し已つて羞恥せず。此の人喩へば、猪の恒に不淨を食し、不淨に臥して便ち自ら跳踉して餘の猪に向ふが如し。此れも亦是の如く、若し一人有つて婬欲を習ひ、諸の惡行を作すも亦羞恥せず、復悔過するに非ず、人に向つて自ら譽め、貢高して自ら用ふ、『我能く五欲を得て自ら娛しむに、此の諸人は五欲を得て自ら娛しむこと能はず』と、是れを名けて人の猪の如しと爲すと謂ふなり。是の故に諸比丘當に捨てゝ遠離すべし、是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[二四] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に人にして[二五]驢に似たるもの有り、牛に似たるもの有ることを說くべし。諦に聽け、諦に聽いて善く之を思念せよ」と。諸比丘對へて曰く、「是の如し、世尊」と、是の時諸比丘佛より敎を受く、世尊告げて曰はく、「彼云何が人にして驢に像たるものと名くるや。若し一人有つて鬚髮を剃除し、三法衣を著け 信牢固を以て出家學道す。爾の時彼の人諸根定らず、若し眼色を見、隨つ

【二四】 A. III. 82. 1.
【二五】 驢(Gadrabha)。

丘に勝るもの有ることなし。諸根澹泊なる亦難陀比丘是れなり。欲心有ることなきも亦是れ難陀比丘なり。瞋恚有ることなきも亦是れ難陀比丘なり。愚癡有ることなきも亦是れ難陀比丘なり。阿羅漢を成ずるも亦是れ難陀比丘なり。然る所以は、難陀比丘は端正にして諸根寂靜なればなり」と。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「我聲聞中、弟子の端正なる者は難陀比丘是れなり。諸根寂靜なるもの是れ亦難陀比丘なり。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

二〇
聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此に二法涅槃界有り、云何が二となすや。二一有餘涅槃界と無餘涅槃界なり。彼云何が名けて有餘涅槃界と爲すや。是に於て比丘、二二五下分結を滅して卽ち彼に般涅槃して此の世に還來せず。是れを名けて有餘涅槃界となすなり。彼云何が名けて無餘涅槃界となすや。是の如く比丘、二三有漏を盡くし、無漏を成じ、意解脱智慧解脱、自身に作證して自ら遊戲し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に有を受けず、實の如く之を知る。是れを無餘涅槃界と爲すと謂ふなり。此れ二涅槃界なり。當に方便を求めて無餘涅槃界に至るべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に烏の喩を説くべし。亦當に猪の喩を説くべし。善く之を思念せよ。吾當に演説すべし」と。對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時諸比丘佛より教へを受く、世尊告げて曰はく、「彼云何が名けて、人を喩ふるに烏の如しと爲すや。猶し人有り、寂靜處に在つて恒に婬欲を習ひ、諸の惡行を作し、後便ち羞恥して便ち自ら悔過し、人に向つて演説して所作の事を陳ぶるが如し。然る所

【二〇】 Iti-vuttaka 44。
【二一】 有餘涅槃界 (Saupādisesanibbānadhātu) とは、依身(肉體)ある涅槃の義にして、卽ち煩惱を斷盡して涅槃を得るも、未だ五蘊假和合の肉體存し、五官によりて快不快を感ずるもの、無餘涅槃の未來のものなるに對して、現在に於て到達する涅槃をいふ。
【二二】 五下分結(Pañcorambhāgiyasaṃyojanāni)とは、欲界に屬する有情の煩惱にして、一、身見(Sakkāyadiṭṭhi)有身見に同じ、二、疑(Vicikicchā)三、戒禁取見(Sīlabbataparāmāsa) 誤りし戒律に執着すること。四、欲貪(Kāmarāga)、貪欲のこと。五、瞋(Paṭigha)の五をいふ。
【二三】 有漏(Āsava)。

を觀察すれば此のこと然らず、彼是の觀察を作すを以て婬坑の火を解了すること、猶し骨鎖・肉聚・蜜塗利刀・菓繁折枝・假借不久の如く、亦劍樹毒樹の如く、毒害藥の如し。悉く觀じて此れを了知すれば、則ち處有り、已に解了して婬火の興る所を知れば、便ち能く欲流・有流・見流・無明流を渡ることを得、此のこと必ず然り、彼已に欲流・有流・見流・無明流を渡る。此のこと必ず然り。云何が大王、何の見、何の知を以て是の說を作すや。今我大王、已に羅漢を成じ、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復母の胞胎を受けず。心解脫を得たり」と。

爾の時王波斯匿、心に歡喜を懷き、善心生じ、尊者難陀に白して曰く、「我今狐疑の毛髮許りの如きもなし。方に知る、尊者は阿羅漢と成ぜり。今請ふ、辭して還えらん。國事衆多なり」と。難陀對へて曰く、「宜しく是れ時を知るべし」と。爾の時王波斯匿、卽ち座より起ち、頭面に足を禮して便ち退いて去る。波斯匿王去つて未だ幾時もならずして、時に彼の魔天、尊者難陀の所に來至し、虛空中に住し、復此の偈を以て難陀に向つて曰く

夫人の面は月の如く　金銀瓔珞の身　彼の姿容顏を憶ふて　五樂恒に自ら娛しむ　琴を彈き絃歌を鼓ち　音響甚だ柔軟にして　能く諸の愁憂を除き　此の林間に樂しみをなす

是の時尊者難陀便ち是の念をなす。「此れは是れ魔行天人なり」と。此れを覺知し已り、復偈を以て報へて曰く、

我昔此の念有りて　婬泆に厭足なく　欲の爲に纏裹せられて　老病死を覺らざりき　我愛欲の淵を度して　汚れなく　所染なし　榮位悉く是れ苦なり　獨り眞如の法を樂しむ　我今諸の結なし　婬・怒・癡悉く盡き　更に此の法を習はず　愚者當に覺知すべし

爾の時彼の魔行天人、此の語を聞き、便ち愁憂を懷き、卽ち彼に於て沒して現ぜず。爾の時衆多の比丘、此の因緣を以て具に世尊に白す。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「端正の比丘。難陀比

白象に乘駕し、彼の園に往至し、到り已つて便ち華象池中に入り、遙に尊者難陀を見、便ち前んで難陀の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時尊者難陀、波斯匿に告げて曰く、「大王、何故に此の間に來至して顏色變異するや、復何事有つてか吾所に來至するや」と。波斯匿報へて曰く、「尊者當に知るべし。向に普會講堂に在つて、尊者は法服を捨て、還えつて白衣と作りしと聞きぬ。此の語を聞き已るが故に此に來至せり、審ならず尊者、何の告勅する所ぞ」と。是の時難陀笑ひを含み、徐に王に告げて曰く、「見ず、聞かずして、大王、何故に此の語を作すや。大王、豈如來の邊より聞かざるや、我諸結已に除き、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復[一八]胞胎を受けず、如實に知つて今阿羅漢を成じ、心解脫を得たり」と。波斯匿曰く、「我如來より聞かず、難陀比丘生死已に盡き阿羅漢を得、心に解脫を得しことを」。然る所以は、天有り來つて孫陀利釋種女に告げて曰ふ。是の時孫陀利夫人此の語を聞き已つて便ち倡妓樂を作し、服飾を修治し、諸の座具を敷けり。我此の語を聞き已つて、便ち尊者の所に來至せり」と。難陀告げて曰く、「王、知らず聞かず、何故に大王にして是の語を作すや、諸有の沙門婆羅門は此の休息の樂しみ、善逝の樂しみ、沙門の樂しみ、涅槃の樂しみを樂しまざることなく、自ら此の淫火の坑を觀ず。復就くべきもの此のこと然らず。骨は猶し鎖の如く、肉は聚石の如く、猶し蜜を刀に塗るが如し、坐して小利を貪り、後患を慮からず。亦菓の繁りて枝を折るが如く、亦假借久しからずして當に還えるが如く、猶し劍樹の藪の如し。亦毒樹の如く、亦毒葉の如く、毒華菓の如し。此の淫欲を觀ずることも亦復是の如し。意染著するものは此のこと然らず。火坑の欲乃至毒菓に從つて此のことを觀ぜず。欲流・有流・見流・無明流を度することを得んと欲するものは此のこと然らず。已に欲流・有流・見流・無明流を度せずして、[一九]無餘泥洹界に入つて般泥洹を得んと欲すること此のこと然らず。大王、當に知るべし。諸有の沙門婆羅門は、此の休息の樂しみ、善逝の樂しみ、沙門の樂しみ、涅槃の樂しみ

【一八】胞胎とは、後の生のこと。

【一九】無餘泥洹界(Anupadisesanibbānadhātu)とは、依身(肉體)なき涅槃の意にして、依身ある涅槃即ち有餘涅槃より、更に一歩を進めて、快不快を感ずることなく、寂靜にして有無の境を脫せし涅槃の最後の狀態、即ち常には聖者の命終るときを以て完全にこの境に入るとせらる。

「[一一]二因二縁有りて正見を起す。云何が二と爲すや。法の敎化を受くると、内に[一〇]止觀を思ふとなり。是れを比丘、此の二因二縁有つて正見を起すと謂ふなり。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二見及び二施　愚者に二相有り　法と如來の廟とを禮す　正見は最も後に在り

火滅品第十六

一

二　聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時尊者[一二]難陀、舍衛城象華園中に在り。是の時尊者難陀、閑靜處に在りて便ち是の念を生ず、「如來の出世は甚だ遇ひ難しと爲す。億劫に乃ち出でたまひ、實に見るべからず。如來は久遠長夜の時に乃ち出でたまふ耳にして、猶し[一三]優曇鉢花の時に乃ち出現するが如し。此れも亦是の如し。如來の出世は甚だ遇ひ難しと爲す。億劫に乃ち出でたまふて實に見るべからず。此の處も亦遇ひ難し。一切の諸行悉く休息して止み、[一四]愛盡きて餘りなく、亦染汚なく、[一五]滅盡泥洹なり」と。

爾の時一魔行天子有り、尊者難陀の心中の所念を知り、便ち[一六]孫陀利[一七]釋種女の所に往至し、飛んで虛空に在り、頌を以て嗟嘆して曰く、

汝今歡喜を發して　服を嚴り五樂を作す　難陀今服を捨つ　當に來つて相娛樂むべし

爾の時孫陀利釋種女、天の語を聞き已つて歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず。便ち自ら莊嚴し、房舍を嚴修し、好座具を敷き、倡妓樂をなす、難陀の家に在るが如く異ることなし。爾の時王波斯匿、普會講堂に集在し、難陀比丘の還えつて法服を捨て家業を習ふを聞く。然る所以は、天有り空中に在つて其の妻に告げて曰へばなり。是の時王波斯匿は是の語を聞き已つて、便ち愁憂を懷き、即ち

【一〇】止觀とは、止(Samatha)と觀(Vipassanā)の二にして、止とは心を靜めること、觀とは物を明に觀察することをいふ。

【一一】Theragāthā V. 279 註參照。

【一二】難陀(Nanda)。

【一三】優曇鉢花(Udumbara)とは、靈瑞華、瑞應華と譯し、三千年に一度開く靈瑞殊勝の華にして、此の花開く時佛世に出現すといふ。

【一四】愛は、渴愛、愛盡くるは涅槃のこと。

【一五】滅盡は、涅槃の異名。

【一六】孫陀利(Sundari)の許婚の女。

【一七】釋種女とは、釋迦種族の女。

七

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の二法有り、內に自ら思惟し、專精意を一にして如來を禮すべし。云何が二法と爲すや、一に智慧と爲し、二に滅盡と爲す。是れを比丘、內に自ら思惟し、專精意を一にして當に如來を禮すべしと謂ふなり。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の二法有り、內に自ら思惟し、專精意を一にして當に法寶を禮すべし。亦如來の神廟を禮せよ。云何が二法なるや。力有り、無畏有り、是れを比丘、此の二法有つて內に自ら思惟し、專精意を一にして、當に法寶及び如來の神廟を禮すべしと謂ふなり。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の二法有り、內に自ら思惟して、專精意を一にし、如來の寺を禮せよ。云何が二法と爲すや。如來は世尊の人民と、與に等しきものなし。如來に大慈大悲有りて十方を矜念したまふ。是れを比丘、此の二法有つて內に自ら思惟し、專精意を一にして如來の寺を禮すといふなり。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

過ぎず。是の故に諸比丘、當に當に法施を學ぶべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[八] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の[九]二業有り、云何が二業となすや。有法業、有財業なり。業中の上なるものは法業に過ぎざるなり。是の故に諸比丘、當に法業を學び、財業を學ばざるべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の二恩有り、云何が二と爲すや、所謂法恩と財恩となり。恩中の上なるものは所謂法恩に過ぎざるなり。是の故に諸比丘、當に法恩を修行すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「愚者に此の二の相像貌有り、云何が二と爲すや、此に於て愚者は辨じ能はざる所の者之を辨じ、垂辨の事厭ふて之を捨つ。是れを諸比丘、愚者に此の二の相像貌有りと謂ふなり。復次に比丘、智者に二の相像貌有り。云何が二と爲すや、是に於て智者は辨じ能はざる所の事は亦成辨せず。垂辨の事は亦厭捨せず。是の故に諸比丘、愚者の二の相像貌は當に之を捨離すべし、當に念じて智者の二相を修行すべし、是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

【八】 A. II. 13. 2

【九】 二業 (Dveyāgā) とは有財業(Āmisayāgā) 有法業(Dhammayāgā)との二、yāga は供犧の意。

見に於て習ひ已り、誦し已つて終に其の法に從はざれ。如實に此れを知らずば、則ち沙門婆羅門に非ず。沙門に於て則ち沙門の法を犯し、婆羅門に於て則ち婆羅門の法を犯さば、此の沙門婆羅門は終に身を以て作證して自ら遊戯せじ。諸有の沙門婆羅門此の二見に於て誦讀し、諷念して捨つべきを知り、如實に知れば、此れ卽ち沙門にして沙門の行を持し、婆羅門にして婆羅門の行を知り、自身に取證して自ら遊戯し、生死已に盡き、梵行已に立ち、更に復有を受けず、如實に之を知るなり。是の故に諸比丘、此の二見に於て習行すべからず、諷誦すべからず、盡く當に捨離すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の二見有り。云何が二見と爲すや、所謂見有・無有なり。彼云何が有見と爲すや、所謂欲有見、色有見、無色有見なり。彼云何が欲有見と爲すや。所謂五欲是れなり。云何が五欲と爲すや、所謂眼に色を見て甚だ愛敬念し、未だ曾て世人の宗奉を捨離せず。耳に聲を聞き、鼻に香を嗅ぎ、口に味を知り、身に細滑を知り、意に諸法を了するが如き、是れを有見と謂ふなり。彼云何が名けて無見と爲すや、所謂有常見・無常見・有斷滅見・無斷滅見・有邊見・無邊見・有身見[三]・無身見・有命見・無命見・異身見・異命見[四]、此の六十二見[五]を名けて無見と曰ひ、亦眞見に非ず。是れを謂ひて名けて無見となす。是の故に諸比丘、當に此の二見を捨つべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[六]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の二施[七]有り。云何が二と爲すや、所謂法施と財施となり。諸比丘、施中の上なるものは法施に

【三】有身見(Sakkāyaditthi)は薩伽耶見と音譯され、五蘊假和合の身に於て、常一主宰の我あり、我所有なる我所ありとの見を起すこと。

【四】異身見異命見は肉體と生命の同異を論ずること。

【五】六十二見とは釋尊時代に於ける過去未來に關する諸見を六十二に分類せしもの。長阿含卷十四梵動經に出づ。卽ち過去に關して、自我と世界の常住論に四、半常半無常論に四、世界の有限無限論(有邊、無邊)に四、異問異答論に四、無因論に二の十八種、これを本劫本見といふ。未來に關しては、死後有識論に十六、無識論に八、非有識非無識論に八、現存する生類の斷滅論に七、現在生涅槃論に五の四十四種。(長阿含を見るべし。

【六】A. II. 13. 1. Ti-vat aka 98

【七】二施(Dvedānāni)とは、法施 Dhammadāna) と財施 (Āmisadāna)の二。

當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の衆中に於て、我一法を見ず、修行し已り、多く修行し已れば、畜生・餓鬼・地獄の罪を受け、若し人中に生るれば狂愚癡惑にして眞僞を識らざらん。所謂飲酒なり。諸比丘、若し人有つて心に飲酒を好めば、所生の處に智慧有ることなく、常に愚癡を懷かん。是の如く諸比丘、愼しみて飲酒すること莫かれ、是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の衆中に於て一法として此の法に勝るもの有ることなし。若し修行し已り、多く修行し已れば、人中の福を受け、天上の福を受けて泥洹の證りを得ん。云何が一法と爲すや。所謂不飲酒なり、諸比丘、若し人有つて酒を飲まずば、生れて便ち聰明にして愚惑有ることなく、博く經籍を知り、意錯亂せじ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

第五の地獄經　此を不善行と名く　五とは天及び人をして　次第數を知らしむ

有無品第十五[一]

一

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に知るべし。此の二見有り。云何が二と爲す。所謂有見・無見なり。[二] 諸有の沙門婆羅門、此の二

【一】有無品以下二法について

【二】有見とは、後の生ありとの見、無見とは後の生なしとの見解をいふ。

學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時佛、諸比丘に告げたまはく、「此の衆中に於て、我一法を見ず。修行し已り、多く修行し已れば、人中の福を受け、天上の福を受けて、泥洹の證りを得ん。所謂他を婬せず、身體香潔にして亦邪想なきなり。佛諸比丘に告げたまはく、若し人有つて貞潔にして婬せざれば、便ち天上人中の福を受けん。是の故に諸比丘、邪婬を行じて以て婬意を興すこと莫かれ。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の衆中に於て、我一法を見ず、修行し已り、多く修行し已れば、地獄行・餓鬼畜生行を成じ、若し人中に生るれば口氣臭惡にして、人の爲に憎まる。所謂妄語なり。諸比丘、若し人有つて妄言綺語鬪亂是非せば、便ち畜生餓鬼中に墮せん。所以は何ぞや、其れ妄語を以ての故なり。是の故に當に至誠にして妄語を得ること莫かるべし。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の衆中に於て我一法を見ず、修行し已り、多く修行し已れば、人中の福を受け、天上の福を受けて泥洹の證りを得ん。云何が一法と爲すや。所謂妄語せざるなり。諸比丘、其れ妄語せざるものは、口氣香芬、名德遠く聞ゆ。是の故に諸比丘當に行じて妄語すること莫かるべし。是の如く諸比丘、

此の衆中に於て、我一法を見ず。修行し已り、多く修行し已れば地獄行、餓鬼畜生行を成じ、若し人中に生るれば極めて貧匱となり、衣は形を蓋はず、食は口に充たざらん。所謂劫盗なり。諸比丘、若し人有つて意に劫盗を好み、他の財物を取らば、便ち餓鬼畜生中に墮し、若し人中に生ずれば極めて貧匱とならん。然る所以は、他生の業を斷ずるを以ての故に、是の故に諸比丘、當に不與取を遠離することを學ぶべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の衆中に於て我一法を見ず、修行し已り、多く修行し已れば、人中の福を受け、天上の福を受けて泥洹の證りを得ん。所謂廣施なり。佛諸比丘に告げたまはく、「若し人有つて廣く布施を行ぜば、現世の中に於て、色を得、力を得、衆徳具足し、天上、人中の食福無量なり。是の故に諸比丘、當に布施を行じ、慳心有ること勿るべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の衆中に於て一法を見ず、修行し已り、多く修行し已れば、地獄・餓鬼・畜生行を成じ、若し人中に生るれば居家姦淫して淨行有ることなく、人の爲に譏られ、常に誹謗せられん。云何が一法なるや。所謂邪淫なり。」佛諸比丘に告げたまはく、「若し人有つて婬泆にして度なく、好んで他の妻を犯さば、便ち地獄・餓鬼・畜生中に墮し、若し人中に生るれば、閨門婬亂なり。是の故に諸比丘、常に當に意を正しうして淫想を興すことなく、愼しみて他を婬する莫かるべし。是の如く諸比丘、當に是の

卷の第七

五戒品第十四

一

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

「是の衆中に於て、我一法を見ず、修し已り、多く修し已り、地獄行を成じ、畜生行を成じ、餓鬼行を成じ、若しは人中に生るゝも壽命極めて短きものを、所謂殺生なり。諸比丘、若し人有つて意に殺生を好めば、便ち地獄・餓鬼・畜生に墮し、若し人中に生るれば壽命極めて短し、然る所以は他の命を斷ずるを以ての故に、是の故に殺生莫きことを學ぶべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

「此の衆中に於て我一法を見ず。修行し已り、多く修行し已れば、人中の福を受け、天上の福を受けて泥洹の證りを得ん。所謂不殺生なり。」佛諸比丘に告げたまはく、「若し人有つて殺生を行はず、亦殺すことを念はざれば、壽命極めて長し。然る所以は彼嬈亂せざるを以ての故に、是の故に諸比丘、當に不殺生を學ぶべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

と。是の時釋提桓因、須菩提に白して言く、「我も亦愁憂苦惱有りしに、今此の法を聞きて復愁憂有ることなし。衆事猥りに多し、天上に還えらんと欲す。已に亦事有り、及び諸天の事、皆悉く猥りに多し」と。時に須菩提言く、「今正に是れ時なり。宜しく時に去るべし」と。是の時釋提桓因、即ち座より起ち、前んで須菩提の足を禮し、遶ること三匝して去る。是の時尊者須菩提便ち此の偈を說く。

能仁此の語を說きたまひ　根本悉く具足す　智者は安穩を獲　法を聞いて諸病を息む

爾の時釋提桓因、尊者須菩提の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

調達及び二經　皮と利師羅と　竹膊と孫陀利善業と釋提桓となり。

增壹阿含經卷第六

利養品第十三

結盡きて永く無餘なり　諸念錯亂せず　諸の塵垢悉く盡きたり　願はくは速に禪より覺めんことを　心息みて　有河[30]を渡り　魔を降して諸結を度す　功德大海の如し　願はくは速に定より起たんことを　眼の淨きこと蓮花の如く　諸穢永く著せず　歸するなきには與に歸と作る　空定より速時に起たんことを　四流[31]を渡りて爲すなく　善く解りて老病なく　以て　有爲[32]の災を脫す　唯尊時に定より覺めんことを　五百の天上に在り　釋種[33]躬自ら來り　聖尊顏を覩んと欲す　解空より速時に起たんことを。

爾の時尊者須菩提卽ち座より起ち、復波遮旬を歎じて曰く、「善い哉、波遮旬、汝今聲琴と合し琴聲と合して異り有ることなし。然るに琴音歌音を離れず、歌音琴音を離れず、二聲共に合して乃ち妙聲を成ず」と。

爾の時釋提桓因便ち尊者須菩提の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時釋提桓因須菩提に白して言く、「云何が善業の抱く所の患苦に增損有るや。今此の身の病は何より生ずると爲すや。身生なりや、意生なりや」と。爾の時尊者須菩提、釋提桓因に語りて言く、「善い哉、拘翼[34]、法法は自ら生じ、法法は自ら滅す。法法は相動き、法法は自ら息む。猶し拘翼の如し。毒藥有れば復毒を害する藥有り。天帝釋、此れも亦是の如し。法法相亂れ、法法は自ら息む。法は能く法を生じ、黑法[35]には白法を用ひて治し、白法には黑法を用ひて治す。天帝釋、貪欲の病のものには不淨を用ひて治し、瞋恚の病のものには慈心を用ひて治し、愚癡の病のものには智慧を用ひて治す。是の如く釋提桓因、一切の所有は皆空に歸して、我なく人なく、壽なく、命なく、士なく夫なし。形なく像なく、男なく、女なし。猶し釋提桓因、風の大樹を壞るが如し。枝葉凋落し、雪雹苗を壞り、華葉初め茂るも水なくば自ら萎む。天時雨を降らせば生苗存することを得、是の如く天帝釋、法法相亂れ、法法自ら定まる。我本患ふ所の疼痛苦惱は、今日已に除いて復患苦なし」

【三〇】有河とは、生死の迷ひの河。

【三一】四流(Cattāro oghā)は、四暴流、四漏四軛ともいひ、流は煩惱の異名、欲流(Kāmogha) 有流(Bhavogha) 見流(Diṭṭhogha) 無明流(Avijjogha)の四にして、三漏に見漏を加へしもの、見流とは邪見のこと。

【三二】有爲(Saṅkhata)とは、造作せられしもの、聚められしもの、因緣によつて生じたもの〻意で、一切の現象をいふ、無爲に對し、無常なもの。

【三三】釋種は、こ〻にては釋提桓因のこと。

【三四】拘翼(Kosika)とは、釋提桓因の異名。

【三五】黑法・白法とは、惡法・善法のこと。

の此の衆生の類の　所作の福徳の業　行を造ること若干種、僧に施せば福を獲ること多し　此の衆は無量を度し　猶し海の珍寶を出すが如し　聖衆も亦是の如く　慧の光明法を演ぶ　瞿曇彼の善處は　能く衆僧に施す者　福を獲ること計るべからず　最勝の所說なり。」

爾の時釋提桓因、佛の所說を聞き已つて、即ち佛足を禮して便ち彼に於て退きて去る。爾の時釋提桓因、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城耆闍崛山中に在し、大比丘五百人と倶なりき。爾の時尊者[二八]須菩提も亦王舍城耆闍崛山の側に在つて、別に屋廬を作つて自ら禪思す。爾の時尊者須菩提、身に苦患を得、甚だ沈重たり。便ち是の念を作す、「我此の苦痛は何より生ずと爲すや。復何より滅して、何の所に至るとなすや」と。爾の時尊者須菩提、便ち露地に於て座具を敷き、身を直くし、意を正し、專精一念に結跏趺坐して、諸入の欲害苦痛を思惟す。

爾の時釋提桓因、尊者須菩提の所念を知り、便ち偈を以て[二九]波遮旬に勅して曰く、

善業諸縛を脫して　靈鷲山に居在す　今極重患を得て　空諸根定を樂しむ　速に來往して疾を問はん　尊上顏を觀省するに　既に大福を得獲　徳を種うること是れに過ぎたるはなし。

時に波遮旬對へて曰く、「是の如し、尊者」と。爾の時釋提桓因、五百の天人及び波遮旬を將ひて、譬へば士夫の臂を屈伸するが如き頃に、便ち三十三天より沒して靈鷲山中に來至し、尊者須菩提を離れて遠からずして、復此の偈を以て波遮旬に語つて曰く、

汝今善業　禪三昧定を樂しむことを覺る　柔和にして清淨の音は　今禪より起たしむ。

波遮旬對へて曰く、「是の如し」と。爾の時波遮旬、釋提桓因より語を聞き已つて、便ち琉璃の琴を調べ、須菩提の所に至り、便ち此の偈を以て須菩提を歎じて曰く、

【二八】　須菩提(Subhūti)。

【二九】　波遮旬(Pañcasikha)。譯して五髻といひ犍闥婆(Gandhabba)の子。

は常に快樂し　禁戒は淸くして亦快し淸き者は淸き行ひをなし　彼の願ひは必ず果成す　設し
[二一]不與取を護り　慈しみを行じて殺生せず　誠を守りて妄語せずば　心等しくして增減なし　汝
今此に於て浴せば　必ず安穩處を獲ん　彼の河は何所にか至る　猶し盲の冥に投ぐるが如し

爾の時婆羅門、世尊に白して曰さく、「止みなん、止みなん瞿曇、猶し聾者の伸ぶることを得、闇に明を見、迷へる者に道を示し、闇室に於て明を然し、目なきものの爲に眼目と作るが如し。是の如く、沙門瞿曇は無數に方便して、此の妙法を說きたまへり。願くば道となることを聽かん」と。爾の時江側婆羅門は卽ち道を作すことを得、[二二]具足戒を受けたり。所以は族姓子、出家學道して無上の梵行を修めば、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復有を受けず。實の如く之を知る」と。是の時尊者孫陀羅諦利、卽ち阿羅漢を成ず。爾の時尊者孫陀羅諦利、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[二三]聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城耆闍崛山中に在して大比丘五百人と俱なりき。爾の時釋提桓因、日時已に過ぎて暮に向ひ、便ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在つて坐す。爾の時釋提桓因卽ち偈頌を以て如來に義を問はまく、

能く說き能く宣布して　流れを渡して　[二四]無漏を成じ　以て生死の淵を渡す　今瞿曇に義を問は
ん　我此の衆生の　所作の福祐の業を觀ずるに行を造ること若干種　誰に施すの福か最尊なる
尊今[二五]靈鷲山　唯願はくは此の義を演べたまへ　釋意の所趣を知りて　亦施者の爲に宣べん

と。爾の時世尊、偈を以て答へて曰く、

[二六]四趣に福を造ることとなし　[二七]四果具足して成る　諸の學跡を得るの人は　其の法を信奉すべし
欲なく亦恚りなく　愚盡きて無漏を成ず　盡して一切の淵を度し　彼に施して大果を成ず　諸

【二一】　不與取とは、偷盜に同じく、與へられざるものを取ること。

【二二】　具足戒(Upasampadā)とは、出家して後、比丘・比丘尼となる時に受ける戒、その初めは三寶歸依の表白にてよかりしも、後種々復雜なるものとなれり。男女いづれも二十歲に至りて受く。

【二三】　S.XI. 2. 6 Yajamāna

【二四】　無漏(Anāsava)とは、煩惱の穢れなきこと。涅槃の異名。

【二五】　靈鷲山と耆闍崛山(Gijjhakūṭapabbata)の譯。

【二六】　四趣(Cattāro paṭipan-na)とは四向に同じく、四果に趣く過程にある聖者、預流・一來・不還・阿羅漢向・四雙八輩を見よ。

【二七】　四果とは、四沙門果のこと。

終り有り、善色醜色、善趣惡趣、若しは好、若しは醜、衆生の行ひに隨つて、作す所の果報皆悉く之を知る。或は衆生有つて身に惡を行ひ、口に惡を行ひ、心に惡を行ふて、賢聖を誹謗し、邪見にして邪見の行ひを造れば、身壞命終して三惡道に生じ、泥犂の中に趣く。或は復衆生有つて身に善を行ひ、口に善を行ひ、意に善を行ふて賢聖を誹謗せず、正見にして邪見有ることなくば、身壞命終して天上善處に生る。是れを清淨の天眼衆生の類を觀ずと謂ふなり。生有れば終り有り、善色醜色、善趣惡趣、若しは好、若しは醜、衆生の行ひに隨つて所作の果報皆悉く之を知る。彼復此の三昧を以て心清淨にして瑕穢なく、結使有ることなくば、心性柔軟にして神通に逮び、復漏盡通を以て自ら娛樂む。彼此の苦を觀じて實の如く之を知り、復〔一七〕苦集を觀じ、復苦盡を觀じ、復〔一八〕苦の出要を現じて實の如くに之を知る。彼是の觀を作し已つて〔一九〕欲漏より心解脫を得、有漏心無明漏より心解脫を得已つて解脫を得、便ち〔二〇〕解脫智を得、生死已に盡き梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復有を受けず。實の如く之を知る。是の如く比丘、賢聖の弟子は心に解脫を得。復粳粮善美の種々の餚饌を食し、博く須彌の如しと雖も終に罪有ることなし。然る所以は、無欲盡愛を以ての故に。無瞋盡恚を以ての故に、無愚癡盡愚癡を以ての故に、是れを比丘中の比丘なれば、則ち內に極めて沐浴し已ると謂ふなり」と。

　爾の時江側婆羅門、世尊に白して曰く、『瞿曇沙門、孫陀羅江の側に往至して沐浴すべし」と。世尊告げて曰はく、「云何が婆羅門、之を名けて孫陀羅江水と爲すや」。婆羅門曰さく、「孫陀羅江水は是れ福の深淵、世の光明なり。其れ人物有つて彼の河水に在つて浴する者は一切の諸惡皆悉く除盡す」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

　此の身無數劫　彼の河を經歷して浴す　及び諸の小陂池　悉く周遍せざるはなし　愚者は常に彼を樂しみ　闇に不清淨を行ひ　宿罪內に躬を充たす　彼の河は寧んぞ能く救はん　淨き者

〔一七〕苦集とは、苦の因。
〔一八〕苦の出要とは、苦の出離。
〔一九〕欲漏心解脫とは、欲漏より心解脫すること。
〔二〇〕解脫智とは、われ解脫せりとの明かなる智慧。

中に遍滿し、歡喜を得已つて心意便ち正し。復悲心を以て普く一方を滿して自ら娛樂しみ、二方三方四方亦爾り、四維上下、一切中に於て一切亦一切、一切世間は以て無量無限にして稱計すべからず。心に恚怒なくして自ら遊戲し、此の喜心を以て其の中に遍滿し、歡喜を得已つて心意便ち正し、復護心を以て普く一方を滿して自ら娛樂しみ。二方三方四方亦爾り。四維上下、一切中に於て一切亦一切、一切世間は以て無量無限にして稱計すべからず。心に恚怒なくして自ら遊戲す。此の護心を以て其の中に遍滿し、歡喜を得已つて心意便ち正し。便ち如來の所に於て信根を成じ、根本は移らず、高顯の幢を竪て、移動すべからず。諸天・龍神・阿須倫・沙門・婆羅門或は世の人民、中に於て歡喜を得て心意便ち正し。此れは是れ如來・至眞・等正覺・明行足・善逝爲・世間解・無上士・道法御・天人師・佛衆祐と號し、中に於て歡喜を得て心意便ち正し。亦復法を成就す。如來法は甚だ清淨にして移動すべからずとなし、人の愛敬する所なり。是の如く智者は當に是の觀を作すべし。便ち中に於て歡喜を得、亦復衆を成就せん。如來の聖衆は甚だ清淨爲り、性行純和にして法法成就し、戒成就し、三昧成就し、智慧成就し、解脫成就し、解脫見慧成就す。聖衆とは四双八輩なり。此れは是れ如來の聖衆にして愛すべく、貴ぶべく、實に承事すべし。中に於て歡喜を得て心意便ち正し。彼復此の三昧を以て心清淨にして瑕穢なく、諸結便ち盡きて亦沾汚なし。性行柔軟にして神通に逮べば、便ち自ら無量の宿命の事を識ることを得、從來所る、處にして之を知らざることなし。若しは一生・二生・三生・四生・五生・十生、二十生・三十生・四十生・五十生・百生・千生・百千生、成敗劫・不成敗劫・成敗不成敗劫・無數の成敗劫・無數の不成敗劫に、我曾て彼に在りて字は某、名は某、姓は某と、是の如きの生、是の如きの食、是の如き苦樂を受け、壽命の長短、彼より終に彼の間に生れ、彼より終に此の間に生れりと。是の如く自ら無數の宿命の事を識る。復此の三昧を以て心清淨にして瑕穢なく、衆生の心の所念の事を知る。彼復天眼を以て衆生の類を觀じ、生有れば

爾の時世尊、婆羅門の心中の所念を知るを以て諸比丘に告げたまはく、「其れ衆生有つて二十一結を以て心に染著するものは、當に觀ずべし。彼の人必ず惡趣に墮して善處に生ぜず。云何が二十一結と爲すや。瞋心結・恚害心結・睡眠心結・調戲心結・疑是心結・怒爲心結・忌爲心結・惱爲心結・疾爲心結・憎爲心結・無慚心結・無愧心結・幻爲心結・姦爲心結・僞爲心結・諍爲心結・憍爲心結・慢爲心結・妬爲心結・增上慢爲心結・貪爲心結なり。」諸比丘、若し人有つて此の二十一結有つて、心に染著有るものは當に觀ずべし。其の人必ず惡趣に墮して善處に生ぜじ、猶し白氎の新衣も久久しく朽ちるが故に、諸の塵垢多く、意に其の色を染成せんと欲する、青黃赤黑終に成ずることを得ざるが如し。何を以ての故に、塵垢有るを以ての故に。是の如く比丘、若し人有つて此の二十一結を以て心に染著するものは當に觀ずべし。其の人必ず惡趣に墮して善處に生ぜず。設し復人有つて此の二十一結の心に染著することなきものは、當に知るべし。斯の人必ず天上に生じて地獄の中に墮せじ。猶し新淨の白氎の意に隨つて何れの色を作さんと欲するも、青黃赤黑必ず其の色を成じて、終に敗壞せざるが如し。然る所以は、其の淨なるを以ての故に、此れも亦是の如し。其れ此の二十一結の心に染著することなきもの有らば、當に觀ずべし。其の人必ず天上に生れて惡趣に墮せじ。若し彼の賢聖の弟子にして瞋恚心結を起さば、觀じ已つて便ち能く之を息めよ。恚害心結を起し、睡眠心結を起し、調戲心結を起し、疑心結を起し、怒心結を起し、忌心結を起し、惱心結を起し、疾心結を起し、憎心結を起し、無慚心結を起し、無愧心結を起し、幻心結を起し、姦心結を起し、僞心結を起し、諍心結を起し、憍心結を起し、慢心結を起し、妬心結を起し、增上慢心結を起し、貪心結を起す。若し彼の賢聖の弟子にして無瞋無恚にして愚惑有ることなくば、心意和悅し、慈心を以て普く一方に滿ちて自ら娛樂しまん。二方三方四方亦爾り。四維上下、一切中に於て一切亦一切、一切世間は以て無限無量にして稱計すべからず。心に恚怒なくして自ら遊戲す。此の慈心を以て其の

中に色有り、彼の色と我色とは一處に合會す。彼の色と我色とは以て一處に集る。色は便ち敗壞遷移して停らず。中に於て復愁憂苦惱を起す。痛・想・行・識皆觀ずるに、我に識有り、識の中に我有り、此の中に識有り、彼の識と我識とは一處に合會す。此の識と我識とは以て一處に會す。識は便ち敗壞遷移して停らず。中に於て復愁憂苦惱を起す。是の如く長者、身亦患ひ有り、心も亦患ひ有り」と。長者、舍利弗に問うて曰く、「云何が身に患ひ有るも心に患ひなきや」と、舍利弗言く、「是に於て長者、賢聖の弟子は聖賢に承事し、禁法を修行し、善知識と與に從事し、善知識に親近す。彼亦我に色有りと觀ぜず。色の中に我有り、我の中に色有りと見ず、色は是れ我所。我は是れ色所と見ず。彼の色遷轉して住まらず、彼の色移易するを以て愁憂苦惱憂色の患ひを生ぜず 亦復痛・想・行・識を見ず。識の中に我有り、我の中に識有りと見ず、亦識は我所と見ず、亦我所は識と見ず。彼の識と我識とは以て一處に會すれば識は便ち敗壞す。中に於て愁憂苦惱を起さず。是の如く長者、身に患ひ有つて而も心に患ひなし。是の故に長者、當に是の習を作し、身を遺して心を去るも亦染著なかるべし。是の如く長者、當に是の學を作すべし」と。爾の時那憂羅公、舍利弗の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

[13]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、數千萬衆を與に前後を圍遶し爲に法を說きたまふ。爾の時江側婆羅門、身に重擔を負ひ、便ち世尊の所に至り、到り已つて擔を捨て一面に世尊の所に在つて默然として住す。爾の時彼の婆羅門是の思惟を作さく、「今日沙門瞿曇、數千萬衆と與に前後を圍遶して、爲に法を說きたまふ。我今清淨なり、沙門瞿曇と等しくして異り有ることなし。然る所以は、沙門瞿曇は好き粳糧種々の餚饌を食ふも、今我は菓蓏を食ひ、以て自ら命を濟ふ」と。

【13】 M. 7. Vatthūpama

爾の時長者復是の念を作さく、「我今尊者舍利弗の所に往至して、斯の義を問うべし」と。舍利弗彼を去ること遠からざる樹下に在つて坐す。是の時那優羅公、舍利弗の所に往至して頭面に足を禮し、一面に在つて坐す。是の時舍利弗、長者に問ふ、「顏貌和悅、諸根寂靜なり必ず所因有らん、長者、故に當に佛より法を聞くべきや」と時に長者、舍利弗に白して言く、「云何が尊者舍利弗、顏貌焉んぞ和悅せざることを得んや。然る所以は、向者世尊、甘露の法を以て胸懷を漑灌したまへり」と。舍利弗言く、「云何が長者、甘露の法を以て胸懷を漑灌したまひしや」。長者、報へて言く、「是に於て舍利弗、我、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在つて坐す。爾の時我世尊に白して曰さく、『年朽ち長大にして恒に疾病を抱く、諸の苦痛多し、稱計すべからず。唯願はくは世尊、此の身を分別して、普く衆生をして此の安穩を獲しめたまへ』と。爾時世尊便ち我に告げて言はく、『是の如し、長者、此の身諸の衰苦多し、但薄皮を以て其の上を覆ふのみ、長者當に知るべし。其れ此の身に恃怙有るものは正に斯の須臾の樂有るべし、長夜に苦を受くること無量なることを知らず。是の故に長者、此の身患ひ有りと雖も、當に心をして患ひなからしむべし。是の如く長者、當に是の學を作すべし』と。世尊は此の甘露の法を以て漑灌したまへり」と。舍利弗言く、「云何が長者、更に重ねて如來に此の義を問はざるや、『云何が身に患つて心に患ひなきや、云何が身に病有つて心に病なきや』」と。長者舍利弗に白して言く、「實に此の辯重ねて世尊に問うことなし。身に患ひ有れば心に患ひ有り。身に患ひ有るも心に患ひなし。尊者舍利弗、必ず此の辯有り、願はくは具して分別せよ」と。舍利弗言く、「諦に聽け諦に聽いて善く之を思念せよ。吾當に汝の與に廣く其の義を演ぶべし」と對へて曰く、「是の如し、舍利弗」と。彼より教へを受く。舍利弗長者に告げて曰く、「是に於て長者、凡夫の人は聖人を見ず、聖教を受けず、其の訓に順はず。亦善知識を見ず、善知識と與に從事せず。彼色を計して我と爲し、色は是れ〔一五〕我所、我は是れ色所、色の中に我有り、我の

〔一五〕我所とは、我所有物の意。

ば、我命存せざらん。況んや愁憂を言んや。然る所以は、我迦尸・拘薩羅國の人民の力に因つて當に自ら存することを得べし。此の方便を以て知る、命尚存せず、何に況んや愁憂を生ぜざらんや」と。夫人言く、「此を以て之を知る、恩愛別離に皆此の苦有り、歡樂有ることなし」と。

爾の時王波斯匿、右膝を地に著け、叉手合掌して世尊に向つて是の說を作さく、「甚だ奇なり、甚だ奇なり。彼の世尊は此の法を說く、若し彼の沙門瞿曇にして爾るべくんば、爾乃ち共に言論することを得べし」と。復夫人に語げて、「今より以後、更に汝を看ること常日に勝るべし　著くる所の服飾吾と異ることなけん」と。爾の時世尊、摩利夫人、大王のために此の論の本を立てしを聞き、諸比丘に告げたまはく、「摩利夫人は甚大聰明なり、設し王波斯匿、我に此の語を問うべくんば、我も亦此の義を以て彼の王に向つて之を說くこと、夫人の王に向つて說く所の如く、異り有ることなかるべし」。又諸比丘に告げたまはく、「我聲聞中、第一の得證の優婆斯にして篤信牢固なるもの、所謂摩利夫人是れなり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

〔一〕聞くこと是の如し。一時佛、〔二〕拔祇國〔三〕尸牧摩羅山鬼林鹿園中に在しき。爾の時〔四〕那憂羅公長者、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在つて坐す。須臾にして退坐して世尊に白して曰さく、「我今年朽ちたり、加ふるに復病を抱き、諸の憂惱多し、唯願はくは世尊　時に隨つて敎訓へ、衆生の類をして長夜に安穩を獲せしめたまへ」と。爾の時世尊、長者に告げたまはく、「汝の言ふ所の如し、身に畏痛多く何をか恃怙すべき、但薄皮を以て其の上を覆ふのみ。長者當に知るべし。其れ此の身に依憑することを有るものは正に須臾の樂を見るのみ、此れは是れ愚心のもの、智慧者の貴ぶ所に非ず。是の故に長者、身に病有りと雖も、心をして病なからしめよ。是の如く長者、當に是の學を作すべし」と。爾の時長者斯言を說きたまふを聞き、座より起ち、世尊の足を禮し、便ち退きて去る。

〔一〕 S. XXII. 1 Nakula
〔二〕 拔祇國(Bhagga)
〔三〕 尸牧摩羅山 (Suṁsu-māragiri)
〔四〕 那憂羅公長者 (Nakula-pitā)

樂しからず。然る所以は　昔我に一子有り、我を捨てゝ無常なり。晝夜追憶するも心懐を離れず。時に我兒を念ふて心意狂惑し、東西に馳走して人を見れば便ち問ふ、『誰か我兒を見るや』と。沙門瞿曇の今說く所は誠に所言の如し。國事煩多なり、所止に還えらんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「今正に是れ時なり」と。

竹膞婆羅門は即ち座より起ち、佛を遶ること三匝して去り、往來して摩利夫人の所に至り、此の因縁を以て具に夫人に白す。時に摩利夫人復波斯匿王の所に至り、到り已つて大王に白して曰さく、「今所問有らんと欲す。唯願はくは大王、事々に報へたまへ。云何が大王、[九]琉璃王子を念ずることをなすや不や」と。王報へて言く、「甚だ念じ、愛愍して心首を去らず」と。夫人問うて曰く、「若し王子に遷變有るべくんば、大王、憂ひ有りと爲すや」と。王復報へて言く、「是の如し。夫人、汝の所言の如し」。夫人問うて曰く、「六王、當に知るべし。恩愛別離皆愁想を興す。云何が大王、伊羅王子を念ずることを爲すや不や」。王報へて言く、「我甚だ愛敬す」。夫人問うて曰く、「大王若し王子に遷變有るべくんば愁憂有りや」。王報へて言く、「甚だ愁憂有り」と。夫人報へて言く、「當に此の方便を以て知るべし。恩愛別離は歡樂有ることなし。云何が大王、[一〇]薩羅陀刹利種を念ふや不や」。王報へて言く、「甚だ愛敬念す」と。夫人言く、「云何が大王、若し薩羅陀夫人に變易有らしめば、大王憂ひ有りと爲すや」。王報へて言く、「吾愁憂有り」と。夫人言く、「大王、當に知るべし。恩愛別離は此れ皆是れ苦なり」と。夫人言く、「王、我を念ふや不や」。王言く「我汝を愛念す」と。夫人言く、「設し我身に變易あるべくんば、大王愁憂有りや」王言く、「設し汝の身に變易有らば便ち愁憂有らん」。「大王當に此の方便を以て知るべし。恩愛別離・怨憎合會に歡樂心なし」。夫人言く、「云何が大王、迦尸・拘薩羅の人民を念ふや」。王言く「我甚だ迦尸・拘薩羅の人民を愛念す」と。夫人言く、「迦尸・拘薩羅の人民設し變易すべくんば、大王、愁憂有りや」。王言く、「迦尸・拘薩羅の人民當に變易有るべくん

【九】　琉璃王子(Viḍūḍabha)。

【一〇】　薩羅陀刹利種　(Vāsabha Khattiya) 刹利種とは印度四姓の一、武士の階級。

に相問訊し、共に相問訊し已つて一面に在つて坐す。時に彼の梵志世尊に白して曰さく、「摩利夫人は世尊の足を禮して問訊す。如來は起居輕利に遊歩康强なるや。盲冥を訓化して勞れなきを得るや」と。復是の語を作す。「此の舍衞城内に普く此の言を傳ふ。『沙門瞿曇は是の教へを作す。恩愛別離・怨憎の會此れは樂快き哉』と。不審なり、世尊、是の言教有りや」と。

爾の時世尊、竹膊婆羅門に告げて曰はく、「此の舍衞城内に於て、一長者有りて一子を喪失ふ。彼此の子を念じて狂惑して性を失ひ、東西に馳走して人を見れば便ち問ふ、『誰が我子を見るや』と、然るに婆羅門、恩愛別離苦・怨憎會苦此れ皆歡樂有ることとなし。昔日此の舍衞城中に復一老母有り無常なり。[八]亦復狂惑して東西を識らず。復一老父有り無常なり。亦復兄弟姉妹有り、皆悉く無常なり。彼此の無常の變を見て狂ひを生じ、性を失ふて東西を識らざるなり。婆羅門、昔日此の舍衞城中に一人有つて新に婦を迎ふ。端正にして雙びなし。爾の時彼の人未だ幾時も經ずして便ち自ら貧窮す。時に彼の婦の父母、此の人の貧しきを見て便ち此の念を生ず『吾當に女を奪ふて更に餘人に嫁與すべし』と。彼の人、竊に婦の家の父母、吾婦を奪ふて更に餘の家に嫁與せんと欲するを聞けり。爾の時彼人衣の裏に利刀を帶び、便ち婦の家に往至しぬ。爾の時に當つて彼の婦牆外に在つて紡作す。是の時彼の人、婦の父母の家に往至して問ふ、『我婦今所在爲るや』と。母報へて言く、『卿の婦は牆外の陰中に在つて紡作す』と。爾の時彼の人、便ち婦の所に往至し、到り已つて婦に問うて曰く、『卿の父母は汝を奪ふて更に餘に嫁せんと欲するや』と。婦報へて言く、『信に此の語有り。然るに我此の言を聞くことを樂しまざるなり』と。爾の時彼人卽ち利劍を拔き、婦を取りて刺殺し、復利劍を取りて自ら腹を刺し、並に復是の語を作しぬ。『我二人倶に死を取らん』と。婆羅門、當に此の方便を以て知るべし。恩愛別離・怨憎會苦、此れ皆愁憂にして實に言ふべからず」と。

爾の時竹膊婆羅門、世尊に白して曰さく、「是の如し、世尊、是れ諸の惱み有り、實に苦にして

【八】母を失ひし子のこと。

共に博戲す。爾の時彼の人便ち是の念を作す、「此の諸男子は聰明にして智慧有り、事として知らざるはなけん。我今當に此の義を以て彼の諸人に問うべし」と。

爾の時卽ち博戲の所に詣り、衆人に問うて曰く、「沙門瞿曇は我に向つて說いて曰く、『恩愛別離苦、怨憎會苦とは此れ快樂なり』と、諸人等、今意に於て云何」と。是の時諸の博戲する者、斯の人に報へて曰く、「恩愛別離に何の樂しみかあらん。快樂と言はゞ此の義然らず」と。是の時彼の人便ち是の念を作す、「審し、如來の言は終に虛妄ならざるも、云何が恩愛別離に當に樂しみ有るべけんや。此の義然らず」と。

爾の時彼の人、舍衞城に入り、宮門外に至りて稱す。「沙門瞿曇は是の教へを作す。『恩愛別離・怨憎の會此れ快樂し』と。爾の時舍衞城及び中宮內に普く此の語を傳へて周遍せざるはなし。爾の時に當り、大王波斯匿及び摩利夫人は共に高樓の上に在り、相娛樂して戲る。爾の時王波斯匿は六摩利夫人に告げて曰く、「沙門瞿曇に審し斯の語有り、『恩愛離別・怨憎の會、此れは皆快樂し』と。夫人報へて曰く、「吾如來より此の言教を聞かず。設し如來に此の教へ有るべくんば、事亦虛ならず」と。王波斯匿告げて曰く、「猶し師の弟子に教ふるに『是れを爲せ、是れを捨てよ』と、弟子報へて『是の如し、大師』と言ふが如し。汝今摩利も亦復是の如く、彼の瞿曇沙門是の說を作すと雖も、汝是の言を作すべし、『是の如く異らず。虛妄有ることなし」と。然れば卿は速に去れ、吾前に在つて立つことを須ひざれ」と。爾の時摩利夫人、七竹膊婆羅門に語りて曰く、「汝今祇洹精舍に往詣し、如來の所に到りて、我名字を持し、如來の足に跪き、復此の義を以て具に世尊に白して云へ、舍衞城內及び中宮の人に此の言論有り、『沙門瞿曇言く、恩愛別離・怨憎合會此れ皆快樂し』と。不審なり、世尊に此の教へ有りや。若し世尊の說くこと有る所のものは、汝善く承受して還えり、我に向つて說け」、と。是の時竹膊婆羅門、夫人の教勅を受けて、尋で祇洹精舍に往至し、世尊の所に到り、共

【六】摩利(Mallikā)。

【七】竹膊(Naljjangha)。巴利文にありては王の使者となりて世尊のもとに往く。

「當に一法を滅すべし。我證す汝等神通を成果し、諸漏盡くすことを得ん。云何が一法を爲すや。所謂味欲なり。是の故に諸比丘、當に此の味欲を滅すべし。我證す、汝等神通果を成じ、諸漏盡くすことを得ん」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

衆生は此の味を著し　死して惡趣の中に墮す　今當に此の欲を捨つべし　便ち阿羅漢を成ぜん

是の故に諸比丘、常に當に此の味著の想を捨つべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[一]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時舍衛城内に於て一長者あり、適一子を喪ひ、甚愛敬念、未だ曾て捨つること能はず。彼子の死を見て便ち狂惑を生じ、周旋往來して一處に停らず。若し人を見る時は便ち是の語を爲す。『我兒を見ること有りや』と。

爾の時彼の人漸々に祇園精舍に往至して世尊の所に至り、一面に在つて住す。爾の時彼の人世尊に白して曰さく、「[二]瞿曇沙門、頗くは我兒を見るや」と。世尊長者に告げて曰はく、「何故に顏貌悅ばず、諸根錯亂するや」と。爾の時長者瞿曇に報へて曰さく、「焉んぞ爾らざるを得んや、然る所以は我今唯一子有り、我を捨てゝ無常なり。甚愛敬念未だ曾て目前を離れず、彼の子を哀愍するが故に我をして狂ひを生ぜしむ。我今沙門に問ふ。我兒を見るや」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、長者、汝の所問の如し。生老病死は世の常法なり。[三]恩愛離苦あり、[四]怨憎會苦あり。子汝を捨てゝ無常なり。豈念ぜざるを得んや」と。爾の時彼の人世尊の所說を聞いて、其の[五]懷に入らず、便ち捨てゝ退き去り、前行して人を見、復是の語を作さく。「沙門瞿曇斯の言を說いて曰く、『恩愛別離せば便ち快樂有り』と、沙門の所說の如くんば寧しとなす。爾りや不や」と。前人對へて曰く、「恩愛別離に何の樂しみか有らん」と、爾の時に當り、舍衞城を去ること遠からざるに、衆多の人あり、

【一】 M. 87. Piyajātika (愛生經) 中阿含卷六十、愛生經。
【二】 瞿曇(Gotama)、又喬答摩につくり、釋尊の姓。
【三】 恩愛離苦とは、相愛し逢ふものとも別れざるべからざる苦しみ。
【四】 怨憎會苦とは、憎み恨むものとも時には逢はざるべからざる苦しみ。
【五】 巴利文にありては、「梵志、世尊に告げて、「世尊よ、何故に若し愛を生ずる時には、愁戚、啼哭、憂苦、煩悩、懊惱を生ずるのであるか、世尊よ、愛を生ずる時は喜樂の心を生ずるのである」と。梵志の意見が喜樂說にして、世尊に反對せしもの、從つて、市人を初め梵志の意見に同ずるも漢譯は全く反對のことをいへるもの。

卷の第六

利養品第十三

一

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「人の利養を受くること、甚だ易からずとなす。人をして無爲の處に至らざらしむ。然る所以は、若し受羅陀比丘にして、利養を貪らずば、終に我法中に於て、三法衣を捨て、居家を作さゞりしならん。修羅陀比丘は本阿練若行をなし、時到れば乞食し、一處に一坐し、或は正中に食し、樹下に露坐し、閑居の處を樂しみ、五納衣を著け、或は三衣を持し、或は塚間を樂しみ、身を勤めて苦行し、此の頭陀を行じぬ、是の時修羅陀比丘、常に蒲呼國王の供養を受け、百味の食を以て、日來給與せられぬ。爾の時彼の比丘意に此の食を染し、漸く阿練若行を捨て、時到れば乞食し、一處一坐、正中食、樹下の露坐、閑居の處、五納衣を著け、或は三衣を持し、或は塚間の勤身苦體を樂しむなど盡く此れを捨て已り、三法衣を去つて、還えつて白衣となり、屠牛殺生稱計すべからず。身壞命終して地獄の中に生れぬ。諸比丘、此の方便を以て利養の甚だ重く、人をして無上正眞の道に至ることを得ざらしむ、若し利養未だ生ぜずば制して生ぜざらしめ、已に生ぜば方便を求めて滅せしめよ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

こと莫かれ　師利は以て定を得　乃ち天帝の宮に至り便ち神通より退きて　屠殺中に墮しぬ

諸比丘、當に此の方便を以て知るべし。人の利養を受くること、甚だ易からずとなす。是の如く比丘、當に是の學を作すべし。未だ利養の心を生ぜずば制して生ぜざらしめ、已に此の心を生ぜば方便を求めて滅せしめよ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

増壹阿含經卷第五

には皆報應有り。若し彼提婆達兜愚人は善惡の報ひの有ることを知らば、便ち當に枯渇愁憂樂しま。沸血便ち面孔より出づべし。彼の提婆達兜は善惡の報ひを知らざるを以て、是の故に大衆の中に在つて是の說を作す。『善惡の報ひなし、惡の爲の殃なし。善を作すも福なし』と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

　愚者は審に自ら明かなるに　惡を爲して福有りと爲す　我今豫め善惡の報應を了知す

是の如く諸比丘、當に惡を遠離すべし。福の爲に倦むこと莫かれ。諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

[三二]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「人の利養を受くること甚だ重くして易からず、人をして無爲の處に至ることを得ざらしむ。然る所以は、利養の報ひは人の皮を斷入す、以て皮を斷ぜば便ち肉を斷ず。以て肉を斷ぜば便ち骨を斷ず。以て骨を斷ぜば便ち髓を徹す。諸比丘、當に此の方便を以て、利養の甚だ重きを知るべし。若し未だ利養心を生ぜずば便ち生ぜず、已に生ぜば之を滅せしむることを求めよ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「人の利養を受くること、甚だ易からずと爲す。人をして無爲の處に至ることを得ざらしむ。然る所以は、若し彼の師利羅比丘にして利養を貪らずば、爾許無量の殺生を作して、身壞命終して地獄の中に生れざりしならん」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

　人の利養を受くるは重く、人の淸白の行を壞る　是の故に當に心を制すべし　味に貪著する

【三二】S. XVII. 28

七

〔五八〕聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき、爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「利養は甚だ重く、人をして、無上正眞道に至ることを得ざら令む。然る所以は、諸比丘、彼の提婆達兜は愚人なり。彼の王子〔五九〕婆羅留支五百釜の食を取りて供養しぬ、設し彼與へずば、提婆達兜愚人は終に此の惡を作さざらん。婆羅留支王子五百釜の食を以て日來供養しぬ。是の故に提婆達兜は五の逆惡を起して、身壞命終して〔六〇〕摩訶阿鼻地獄の中に生じぬ。此の方便を以て當に知るべし。利養は甚だ重く、人をして無上正眞の道に至ることを得ざら令む。若し未だ利養心を生ぜずば、生ずべからず、已に生ぜば當に之を滅すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

聞くこと是の如し。一時佛羅閱城〔六一〕耆闍崛山中に在り、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時提婆達兜衆僧を壞亂し、如來の足を壞り、阿闍世に父王を取りて殺すことを教へ、復羅漢比丘尼を殺し、大衆の中に在つて是の説を作しき。「何處に惡有りや、惡は何より生ずるや、誰か此の惡を作して、當に其の報を受くべき。我も亦此の惡を作さずして其の報ひを受けん」と。

爾の時衆多の比丘有り、羅閱城に入り、乞食して此の語を聞く、提婆達兜愚人は大衆の中に在つて是の説をなす。「何處にか惡や有る。惡は何より生ずるや、誰か此の惡を作して其の報ひを受くるや」と。爾の時衆多の比丘、食後衣鉢を摂取し、尼師壇を以て右肩の上に著け、便ち世尊の所に往至して、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時衆多の比丘世尊に白して曰さく、「提婆達兜愚人は大衆の中に在つて是の説を作す、「云何惡となすや、殃なく、福なく、報ひなく、善惡の報ひを受くることと有ることなし」と」。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「惡有り、罪有り、善惡の行ひ

〔五八〕 S. XVII. 36 參照

〔五九〕 巴里文には阿闍世王子(Ajātasattukumāra)となる。

〔六〇〕 摩訶阿鼻地獄(Mahā-avīcinirāya)。無間地獄ともいひ、極惡の人の墮つる最苦の地獄。八大地獄の一。

〔六一〕 耆闍崛山(Gijjhakūṭa)鷲峯と譯し、又靈鷲山といひ、その山頂兀鷲の頂の如きより此の名あり。

し。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と俱なりき。爾の時尊者大迦葉阿練若に住し、時到れば乞食して貧富を擇ばず、一處に一坐して終に移易せず、樹下に露坐し、或は空閑處に、五納衣を著け、或は三衣を持し、或は塚間に在り。或は時に一食し、或は正中に食し、或は頭陀を行じ、年高く長大なりき。

爾の時尊者大迦葉、食後に便ち一樹下に詣りて[五五]禪定し、禪定し已つて座より起ち、衣服を整へて世尊の所に往至しせり。是の時世尊、遙に迦葉の來るを見、世尊告げて曰はく「善くぞ來れり、迦葉」と。時に迦葉便ち世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在つて坐す。世尊告げて曰はく、「迦葉、汝今年高く長大にして志衰へて朽弊す。汝今乞食乃至諸の頭陀行を捨つべし。亦諸の長者の請を受け、并せて衣裳を受くべし」と。迦葉對へて曰さく「我今如來の教に從はじ。然る所以は、若し如來は無上正眞道を成じたまはずば、我則ち辟支佛を成ぜん。然るに彼の辟支佛は盡く阿練若を行じ、時到れば乞食して貧富を擇ばず、一處に一坐して終に移易せず、樹下に露坐し、或は空閑處に、五納衣を著け、或は三衣を持し、或は塚間に在り、或は時に一食し、或は正中に食し、或は頭陀を行ず。如し今敢えて本の所習を捨てずして、更に餘行を學ばん」と。世尊告げて曰はく「善い哉、善い哉、迦葉、多く饒益する所となり、人を度すること無量、廣く一切の夫人に及んで得度せん。然る所以は、若し迦葉、此の頭陀行世に在らば、我が法も亦當に久しく世に在るべし、設し法世に在れば、天道を増益して三惡道便ち減ぜん。亦[五六]須陀洹・[五七]斯陀含・阿那含の三乘の道を成じ、皆世に存せん。諸比丘、學ぶ所皆當に迦葉の所習の如かるべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と　爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

【五五】禪定(Jhāna)は、音譯語禪と譯語定とを重ねしものにして、音譯して又禪那ともいひ、定又は靜慮と譯す。印度に於て古くより發達せし精神統一の行法。

【五六】須陀洹(Sotāpatti)とは、預流果と譯し、四沙門果の一。初めて聖者の流れに入りし位にして、三結を斷盡して此の位に入り、再び惡世界に墮落することなく、必ず無上道を成ずるの確信を得、その證悟の遲きものも、七返人天の間を往來し、苦を滅して涅槃に入るもの。

【五七】斯陀含(Sakadāgāmi)とは、一來と譯し、此の位に入りしものは死後天界に生れ、一度此の人間界に還來して、證悟するもの。

を歎ずること有らば則ち、我身を歎說するに異ることなしとなす。然る所以は、我恒に樹下に在る者を歎譽すればなり。若し彼の樹下に在るものを毀ること有らば、則ち我を毀り已るとなす。其れ露坐する者を歎說すること有らば、則ち我を歎說し已るとなす。然る所以は何ぞや。我恒に露坐する者を歎說すればなり。其れ露坐する者を毀辱すること有らば、則ち我を毀辱し已るとなす。其れ空閑處のものを歎說すること有らば、則ち我を歎說し已るとなす、所以は何ぞや。我恒に空閑處のものを歎說すればなり。其れ空閑處の者を毀辱すること有らば、則ち我を毀辱し已るとなす。其れ五納衣を著くる者を歎說すること有らば、則ち我を歎說し已るとなす。所以は何ぞや。我恒に五納衣を著くる者を歎說すればなり。其れ五納衣を著くる者を毀辱すること有らば、則ち我を毀辱し已るとなす。其れ三衣を持つものを歎說すること有らば、則ち我を歎說し已るとなす。何を以ての故に、我恒に三衣を持つ者を歎說すればなり。其れ三衣を持つ者を毀辱すること有らば、則ち我を毀辱し已るとなす。其れ塚間に在りて坐する者を歎說すること有らば、則ち我を歎說し已るとなす。何を以ての故に、我恒に塚間に在つて坐する者を歎說すればなり。其れ塚間に在つて坐する者を毀辱すること有れば卽ち我を毀辱し已るとなす。其れ一食のものを歎說すること有らば、則ち我を歎說し已るとなす。何を以ての故に、我恒に一食の者を歎說すればなり。其れ一食の者を毀辱すること有らば、則ち我を毀辱し已るとなす。其れ日の正中に食する者を歎說すること有らば、則ち我を歎說し已るとなす。何を以ての故に、我恒に正中に食する者を歎說すればなり。其れ正中に食する者を毀辱すること有らば、則ち我を毀辱し已るとなす。其れ諸の頭陀行の者を歎說すること有らば、則ち我を歎說し已るとなす。然る所以は我恒に諸の頭陀行を歎說すればなり。其れ諸の頭陀行の者を毀辱すること有れば、則ち我を毀辱し已るとなす。我今諸比丘に敎ふ、當に大迦葉の所行の如く。漏失有ることなかるべし。**然る所以は迦葉比丘に此の諸行あればなり。是の故に諸比丘、學ぶ所は常に大迦葉の如くなるべ**

四

聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「其れ病者を瞻視すること有らば則ち我を瞻視し已るとなす。病者を看ること有らば則ち我を看已ると爲す。然る所以は、我今躬ら疾病を看視せんと欲す。諸比丘、我一人を見ず、諸天世間・沙門婆羅門の施の中に於て、最上にして是の施に過ぐるものなし。其れ是の施を行じ、爾れ乃ち施となせば大果報を獲、大功德を得て、名稱普く至つて甘露の法味を得ん。所謂如來至眞等正覺なり。施の中の最上にして是の施に過ぐるものなしと知りて、其れ是の施を行じ、爾れ乃ち施をなせば大果報を獲、大功德を得ん、我今此の因緣に因つて是の說を作す。病者を瞻視すれば我を瞻視し已るとなし、異り有ることなし。汝等長夜に大福祐を獲よ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「其れ[五四]阿練若のものを歎譽することあらば則ち我を歎譽し已ると爲す。然る所以は、我今恒に自ら阿練若行を歎譽すればなり。其れ阿練若のものを誹謗すること有らば、則ち我を誹謗し已るとなす。其れ乞食を歎說すること有らば則ち我を歎譽し已るとなす。然る所以は、我恒に能く乞食者を歎說すればなり。其れ乞食を謗毀すること有らば、則ち我を謗毀し已るとなす。其れ獨坐する者を歎說すること有らば則ち我を歎說し已るとなす。然る所以は、我恒に能く獨坐する者を歎說すればなり。其れ獨坐するものを毀ること有らば、則ち我を毀り已るとなす。其一坐一食のものを歎譽すること有らば、則ち我を歎譽し已るとなす。然る所以は、我恒に一坐一食のものを歎譽すればなり。其れ一坐一食の者を毀ること有らば、則ち我を毀り已るとなす。若し說いて樹下に坐するもの

【五四】阿練若（Araṇya）は阿蘭若に作り林中に住むこと、頭陀法の一。

比丘、苦樂心を捨てて復憂喜なく、苦なく、樂なく、護念淸淨の[五一]四禪を樂しむ。是の如く比丘、法法の相に意止を觀ぜよ。彼習法を行じ、盡法を行じ、幷に習盡の法を行じて自ら娛樂せば、便ち法の意止を得て現在前せん。知るべく、見るべし。亂想を除去して依猗する所なく、世間の想を起さず、已に想を起さずば便ち畏怖なけん、已に畏怖なくば生死便ち盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復有を受けず。實の如く之を知る。諸比丘、一入道に依つて衆生は淸淨を得、愁憂を遠離し、復喜想なく、便ち智慧に逮び、[五二]涅槃の證を得ん、所謂五蓋を滅して四意止を修するなり。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我是の中に於て一法の速に磨滅するものを見ず。梵行を憎嫉す。是の故に諸比丘、當に慈忍を修行すべし、身に慈しみを行ひ、口に慈しみを行ひ、意に慈しみを行ふ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し一人有つて世に出現する時、諸天・人民・魔及び魔天・沙門・婆羅門の最尊、最上なるものも、與に等しきものなく、福田第一にして、事ふべし、敬ふべし。云何が一人と爲すや。所謂[五三]多薩阿竭阿羅呵三耶三佛、是れを一人世に出現する時、諸天・人民・阿須倫・魔及び魔天・沙門・婆羅門の上に過ぎ、最尊最上にして與に等しきものなく、福田第一にして事ふべく、敬ふべしと謂ふなり。是の如く諸比丘、常に當に如來を供養すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

思念を凝らし、欲惡の法を離れて、欲惡の法を離れしことによりて、修禪者は喜びと樂しみとを感ずる狀態にして、未だ思慮(覺)と分別(觀)とを失はないもの。

【四九】第二禪(Dutiya jhāna)とは、かくて更にその思慮分別を靜め、心を一點に集中することによりて、思慮分別の滅せし(無覺無觀)定より生ずる喜びと樂しみとを感ずる狀態。

【五〇】第三禪(Tatiya jhāna)とは、更に進みてこの粗雜なる喜びと樂しみとをも捨離して、全く平靜なる心の狀態に入り、正心正念に、所謂聖賢の「捨心に住して正念なるものは樂に住む」の樂しみを全身に感ずる狀態。

【五一】第四禪(Catutthajjhāna)とは、更に進みて苦樂を捨て、苦樂なき平靜なる心、湛然不同の境に入るをいふ。

【五二】涅槃證(Nibbānasacchikiriyā)涅槃の實證の意。

【五三】多薩阿竭阿羅呵三耶三佛(Tathāgata arahā sammāsambuddha)譯して如來・應供・正等覺者といふ。

散落心有れば亦自ら散落心有りと覺知し、散落心なくば便ち自ら散落心なしと覺知し、普遍心有れば便ち自ら普遍心有りと覺知し、普遍心なくば便ち自ら普遍心なしと覺知し、大心有れば便ち自ら大心有りと覺知し、大心なくば便ち自ら大心なしと覺知し、無量心有れば便ち自ら無量心有りと覺知し、無量心なくば便ち自ら無量心なしと覺知し、三昧心有れば便ち自ら三昧心有りと覺知し、三昧心なくば便ち自ら三昧心なしと覺知し、未解脫心なれば便ち自ら未解脫心を覺知し、已解脫心なれば便ち自ら已解脫心を覺知す。是の如く比丘、心相に意止を觀じ、習法を觀じ、盡法を觀じ、幷に習盡の法を觀じ、思惟法觀じて自ら娛樂す。知るべく、見るべく、思惟すべく、思惟すべからず。所倚なく、世間想を起さず、已に想を起さずば便ち畏怖なく、已に畏怖なければ便ち無餘なり。已に無餘なれば便ち般涅槃し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復有を受けず。實の如く之を知る。是の如く比丘、內に自ら[三七]心心の意止を觀じて亂念を除去し、愁憂有ることなかれ。外に心を觀じ、內外に心心の意止を觀ぜよ。是の如く比丘、心心の相に意止を觀ぜよ。

云何が比丘、法法の相意止を觀ずるや。是に於て比丘、[三八]念覺意を修め、觀に依り、無欲に依り、滅盡に依つて諸の惡法を捨て、[三九]法覺意を修め、[四〇]精進覺意を修め、[四一]念覺意を修め、[四二]猗覺意を修め、[四三]三昧覺意を修め、[四四]護覺意を修め、觀に依り、無欲に依り、滅盡に依つて諸の惡法を捨つ。是の如く比丘、[四五]法法の相に意止を觀ぜよ。

復次に比丘、愛欲に於て解脫し、惡不善の法を除き、[四六]覺有り、[四七]觀有り、猗念有り、[四八]初禪を樂しんで自ら娛樂す。是の如く比丘、法法の相に意止を觀ぜよ。復次に有覺有觀を捨て、內に歡喜を發して專ら其れ意を一にし、無覺無觀を成じて念猗喜安の[四九]二禪に遊んで自ら娛樂す。是の如く比丘、法法の相に意止を觀ぜよ。復次に比丘、念を捨てゝ護を修し、恒に自ら身覺を覺知し、諸の賢聖の求むる所を樂しみ、護念清淨の[五〇]三禪を行ず。是の如く比丘、法法の相に意止を觀ぜよ。復次に

【三七】心心のとは、心について心をの意。

【三八】以下七覺意を出す。念覺意(Satisambojjhaṅga)とは、修道の時よく自覺して定と慧とを均等にすること。

【三九】法覺意(Dhammavicaya) とは、擇法覺意ともいひ智慧を以て眞僞善惡を擇びわけること。

【四〇】精進覺意(Viriya) とは、努力精進すること。

【四一】念覺意の念は喜の誤りか。喜覺意(Pīti)とは、心法に契うて喜びを感ずること。

【四二】猗覺意(Passaddhi) は除・輕安覺意ともいひ、心輕く安らかなること。

【四三】三昧覺意(Samādhi) とは、定覺意ともいひ、入定を得るとき煩惱の生ぜざること。

【四四】護覺意(Upekhā)は、又捨覺意ともいひ、苦樂怨親を離れて心平等に住すること。

【四五】法法の相とは、法について法をの意。

【四六】覺(Vitakka) は又尋ともいひ、思慮のこと、尋求の意。

【四七】觀(Vicāra) は、又伺といひ、分別のこと、伺察の意。

【四八】初禪(Paṭhama jhāna) とは、入定の次第にして、戒を持ち感官を制御し、身心を清淨にして、閑靜處に端坐して、

し、[30]苦痛を得し時は卽ち自ら我苦痛を得たりと覺知し、[31]不苦不樂痛を得し時は卽ち自ら我不苦不樂痛を得たりと覺知し。若し食の樂痛を得し時は便ち自ら我食の樂痛を得たりと覺知し、若し食の苦痛を得し時は、便ち自ら我食の苦痛を得たりと覺知し、若し食の不苦不樂痛を得し時は亦自ら我食の不苦不樂痛を得たりと覺知し、若し不食の樂痛を得し時は便ち自ら我不食の樂痛を得たりと覺知し、若し不食の苦痛を得し時は亦自ら我不食の苦痛を得たりと覺知し、若し不食の不苦不樂痛を得し時は亦自ら我不食の不苦不樂痛を得たりと覺知す。是の如く比丘、內に自ら痛を觀ぜよ。復次に若し復比丘、樂痛を得し時は、爾の時は苦痛を得ず。爾の時自ら我樂痛を受くと覺知せよ。若し苦痛を得し時は、爾の時は樂痛を得ず、自ら我苦痛を受くと覺知せよ。若し不苦不樂痛を得し時は、爾の時は苦なく、樂なし、自ら我不苦不樂痛を受くと覺知せよ。彼[32]習法にして自ら娛樂し亦[33]盡法を觀ぜよ。復[34]習盡の法を觀じ、[35]或は復痛有りて現在前す、知るべく見るべし、原本を思惟するに依倚する所なくして自ら娛樂し、世間の想を起さず。其の中に於て亦驚怖せず、驚怖せざるを以て便ち泥洹を得、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復有を受けず、眞實の如く知る。是の如く比丘、內に自ら痛を觀じて亂念を除去して愁憂有ることなかれ、外に自ら痛を觀じ、內外に痛を觀じて亂念を除去して愁憂有ることなかれ。是の如く比丘、內外に痛を觀ぜよ。

云何が比丘、[36]心心法を觀じて自ら娛樂するや。是に於て比丘、愛欲心有れば便ち自ら愛欲心有りと覺知し、愛欲心なければ亦自ら愛欲心なしと覺知し、瞋恚心有れば便ち自ら瞋恚心有りと覺知し、瞋恚なくば亦自ら瞋恚心なしと覺知し、愚癡心有れば便ち自ら愚癡心有りと覺知し、愚癡心なくば便ち自ら愚癡心なしと覺知し、愛念心有れば便ち自ら愛念心有りと覺知し、愛念心なくば便ち自ら愛念心なしと覺知し、受入心有れば便ち自ら受入心有りと覺知し、受入心なくば便ち自ら受入心なしと覺知し、亂念心有れば便ち自ら亂念心有りと覺知し、亂心なくば便ち自ら亂心なしと覺知し、

【三〇】苦痛(Dukkhavedanā)

【三一】不苦不樂痛(Adukkhamasukhavedanā)とは、苦にも樂にも非らざる感覺。

【三二】習法(Samudaya dhamma)にしてとは、生起するものであると觀ずること、習法は生法の意。

【三三】盡法(Vayadhamma)とは滅法の意、滅するもの。

【三四】習盡の法(Samudaya-vayadhamma)とは生じては滅すべきものゝ意、

【三五】巴里文にありては「『受は存在するものである』。『受は現在せるものである』との考へが彼にありて、それが全てを知り、解ることの扶けとなるので、彼は依止することなくして住し、この世に於ける何ものをもとらない」となつてゐる。(M. vol. I. P. 59)

【三六】心心法を觀ず(Cittānupassī)とは、心に於て心を觀ずること。

風種有り、是の如く比丘、身を觀じて自ら娛樂す。復次に比丘、此の身を觀ずるに諸孔有りて不淨を漏出すること、猶し彼の人竹園を觀じて、若しは葦叢を觀ずるが如し。是の如く比丘、此の身を觀ずるに諸孔諸の不淨を漏出する有り。復次に比丘、死屍を觀ずるに、或は死して一宿、或は二宿、或は三宿、四宿、或は五宿、六宿、七宿すれば、身體膖脹して臭く、處不淨なり。復自ら身を觀ずるに彼と異ること無し。吾身も此の患ひを免れざるなり。若し復比丘、死屍を觀ずるに、烏鵲鵄鳥に噉食せられ、或は虎狼・狗犬・虫獸の屬のために噉食せらる。復自ら身を觀ずるに彼と異ることなし。吾身も此の患ひを離れざるなり。是れを比丘身を觀じて自ら娛樂すと謂ふなり。復次に比丘、死屍を觀ずるに、或は噉ひ、半ば散落して地に在りて臭く、處不淨なり。復自ら身を觀ずるに彼と異ることなし。吾身も此の法を離れざるなり。復次に死屍を觀ずるに、肉已に盡きて唯骨有り、血在つて塗染せらる。復此の身を以て彼の身を觀ずるに、亦異り有ることなし。是の如く比丘此の身を觀ぜよ。復次に比丘、死屍の筋纏束薪を觀じ、復自ら身を觀ずるに彼と異ることなし 是の如く比丘、此の身を觀ぜよ。復次に比丘、死屍を觀ずるに、骨節分散して異處に散在す。或は手骨・脚骨各〻一處に在り、或は膊骨或は腰骨、或は尻骨、或は臂骨、或は肩骨、或は脇骨、或は背骨、或は頂骨、或は髑髏。復此の身を以て彼と異ることなし。吾此の身を免れず。吾身も亦當に壞敗すべし。是の如く比丘、身を觀じて自ら娛樂せよ。復次に比丘死屍の白色、白珂色なるを觀ぜよ。復自ら身を觀ずるに彼と異ることなし。吾も此の法を離れず。是れを比丘、自ら身を觀ずと謂ふなり。復次に比丘、若し死屍・骨青・瘀想を見れば貪るべきものなし。或は灰土と同色にして分別すべからず。是の如く比丘、自ら身を觀じて惡念を除去せば愁憂有ること無し。此の身は無常にして分散の法なり。是の如く比丘、內に自ら身を觀じ、外に身を觀じ、內外に身を觀じ、所有なしと解せよ。云何が比丘、內に痛々を觀ずるや。是に於て比丘、〔二九〕樂痛を得し時は卽ち自ら我樂痛を得たりと覺知

【二九】 樂痛(Sukhavedanā) 樂の感覺。

く、一入道有つて衆生の行ひを淨め、愁憂を除去して諸惱有ることなし、大智慧を得て泥洹の證を成ず。所謂當に[二五]五蓋を滅し、[二六]四意止を思惟すべし。云何が[二七]一入と爲すや。所謂心を專一にす。是れを一入と謂ふなり。云何が[二八]道となすや、所謂賢聖八品道なり。一に正見と名け、二に正治と名け、三に正業と名け、四に正命と名け、五に正方便と名け、六に正語と名け、七に正念と名け、八に正定と名く。是を謂いて道と名く。是を一入道と謂ふなり。

云何が五蓋を滅すべきや。所謂貪欲蓋・瞋恚蓋・調戯蓋・眠睡蓋・疑蓋なり。是れを當に五蓋を滅すべしと謂ふなり。

云何が四意止を思惟するや。是に於て比丘は、內に自ら身を觀じ、惡念を除去して愁憂有ることなく、外に自ら身を觀じ、惡念を除去して愁憂有ることなく、內外に身を觀じて惡念を除去して愁憂有ることなく、內に[二九]痛々を觀じて自ら娯樂し、外に痛々を觀じ、內外に痛々を觀じ、內に心を觀じて自ら娯樂し、外に心を觀じ、內外に心を觀じ、內に法を觀じ、外に法を觀じ、內外に法を觀じて自ら娯樂す。云何が比丘內に身を觀じて自ら娯樂するや。是に於て比丘、此の身を觀じて其の性行に隨ひ、頭より足に至り、足より頭に至り、此の身中を觀ずるに皆悉く不淨にして、貪るべきもの有ること無し。復此の身を觀ずるに、毛髮・爪齒・皮肉・筋骨・髓腦・脂膏・腸胃・心肝・脾腎の屬有り。皆悉く觀知し、屎尿生熟の二藏、目涙・唾涕・血脈・肪膽皆當に觀知すべし。貪るべきものなし。是の如く諸比丘、當に身を觀じて自ら娯樂し、惡念を除去して愁憂有ることなかるべし。復次に比丘、還えつて此の身を觀じて地種有りや、水・火・風種有りやと、是の如く比丘此の身を觀ずべし。復次に比丘、此の身を觀じて諸界を分別せよ。此の身に四種有り、猶し巧能な屠牛の士、若しは屠牛の弟子の牛を解くに節解きて自ら此れは是れ脚、此れは是れ心、此れは是れ節、此れは是れ頭と觀見するが如し。是の如く、彼の比丘は此の界を分別し、自ら此の身を觀察するに、地・水・火

【二五】五蓋(Pañcanivaraṇa)は又五障ともいひ、心を蓋ふ五種の煩惱。一、貪欲蓋(Kāmacchandanivaraṇa) 二、瞋恚蓋(Vyāpāda,) 三、調戯蓋(Uddhaccakukkucca) 四、惛眠蓋(Thīnamiddha) 五、疑蓋(Vicikiccha) の五にして、調戯蓋は又掉悔蓋ともいひ、掉は掉擧にして、心さわつき佛道を修するに堪へぬこと。悔は後悔の念。惛眠と惛沈と睡眠にして、惛沈とは心沈んで修道に堪へぬこと。

【二六】四意止は上に出ず。

【二七】一入道は、一乘道(Ekāyanamagga)

【二八】痛々とは、受(Vedanā)ともいひ、快不快苦樂の感覺をいふ。

て療治すべからずとは記せじ。是の故に愚人、我提婆達兜に毫釐の善法有るを見ず。是れを以ての故に、彼の提婆達兜は罪を受くること一劫にして療治すべからずと記するなり。然る所以は、提婆達兜は愚癡にして利養に貪著し、染著心を起して五の逆悪を作せば、身壞命終して地獄に入らん、然る所以は、利養心は重くして、人の善本を敗り、人をして、安穩處に到らざらしむ。是の故に諸比丘、設し利養心の起ること有らば、便ち當に滅することを求むべし。若し心有らずば想著を興すこと勿れ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。

爾の時彼の比丘座より起ち、衣服を整へ、世尊の足を禮し、世尊に白して曰さく、「今より[二三]悔過す。唯だ願くば恕を垂れたまへ。愚癡の致す所より不善行を造れり。如來の所説に二言有ることなし。然るに我愚癡にして猶豫の想を起せり。唯願はくは世尊、我悔過を受けたまへ、往を改め、來るを修めん」と。乃ち再三に至る、世尊告げて曰はく、「善い哉、比丘、汝所念を悔ゆ。汝の及ばざるを恕せば、如來に於て猶豫の想を興すこと莫れ。今汝の悔過を受く、後更に作すこと莫れ」と。乃ち三四に至る。爾の時世尊便ち此の偈を説きたまはく、

設し重罪を作すこと有らば　悔過して更に犯さゞれ　此の人禁戒に應じて　其の罪の根原を拔く

と、爾の時彼の比丘及び四部衆、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

四種の阿那含　二心及び二食　婆達の二の契經　智者は當に覺知すべし

壹入道品第十二

一

[二四]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまは

【二三】悔過とは、懺悔のこと。

【二四】M. 10, Satipaṭṭhāna 巴利文にありては拘流(Kurū)の劍磨瑟曇(Kammāssadhamma)に於ける説法長阿含卷二十二大念住ィ。中阿含卷二十四念處經にあたる。

の有りてにや」と。時に阿難告げて曰く、「如來の說きたまふ所、終に虛設ならず。身口の所行に異り有ることなし。如來は眞實に提婆達兜の別を記したまふて、罪を受くること深重にして、當に一劫を經るも療治すべからざるべし」と。

爾の時尊者阿難、卽ち座より起ち、世尊の所に至り、頭面に足を禮して一面に在つて住す。爾の時阿難、世尊に白して曰さく、「一比丘有りて我所に來至して是の說をなせり。『云何が阿難、如來は盡く提婆達兜の原本を觀じ已つて。然る後に罪を受くること一劫にして、療治すべからずと記別したまふにや、因緣の記別を得べきもの有りてにや』と。是の語を作し已つて各自ら捨て去りぬ」と。世尊告げて曰はく、「彼の比丘は必ず晩暮にして學んで出家せしなり。未だ久しからずして方に我法中に來至せんのみ、如來の說く所は終に虛妄ならず。云何が中に於て復猶豫を起さん」と。

爾の時世尊、阿難に告げて曰はく、「汝彼に往至して比丘に語げて言へ、『如來は卿を呼びたまふ』」と。阿難對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時阿難、世尊の敎へを受けて便ち、彼の比丘の所に往至し、到り已つて彼の比丘に語げて曰く、「如來は卿を呼びたまふ」と。彼の比丘對へて曰く、「是の如し、尊者」と、爾の時彼の比丘、便ち衣服を嚴り、阿難と共に世尊の所に至り、到り已つて世尊の足を禮し、一面に在つて坐す。爾の時世尊、彼の比丘に告げて云はく、「何ぞや愚人、汝は如來の所說を信ぜざるか。如來の敎ふる所に虛妄有ることなし。汝今乃ち如來に虛妄を求めんと欲するや」と。時に彼の比丘世尊に白して曰さく、「提婆達兜比丘は大神力有り、大威勢有るに、云何が世尊、彼を記して、一劫の受罪重しとなしたまふや」と。佛比丘に告げて曰はく、「汝、口語を護れ、長夜に於て苦を受くること無量なる勿れ」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

遊神は世俗の通なれば　至意にして解脫することなく　滅盡の跡を造らず　復還つて地獄に墮す

若し我當に提婆達兜は、身に毫釐の善法有るを見ば、我終に彼提婆達兜は罪を受くること一劫にし

九

聞くこと是の如し。一時佛、[一五]羅閱城[一六]迦蘭陀竹園所に在して。大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「云何が諸比丘、頗らくは[一七]提婆達兜は清白の法を見ること有りや。然も復提婆達兜は惡深重をなし、罪を受くること劫を經るも療治すべからず。我法の中に於て、毫釐の善の稱記すべきものを見ず。是の故を以て我今說く、提婆達兜は諸罪の原首にして療治すべからず。猶し人有つて深き厠に墮ちて形體沒溺して一の淨處の有ることなく、人有り來つて其の命を濟拔し、淨處に安置せんと欲し、遍く厠の側を觀じて、彼の人の身に淨處あり、吾手を捉へて拔濟して之を出さんと欲し、彼の人を熟視するに一の淨處の捉ふべきものなく、便ち捨て丶去るが如し。是の如く諸比丘、我提婆達兜の愚癡人を觀ずるに、毫釐の法として記すべきものを見ず、罪を受くること劫を經るも療治すべからず。然る所以は、提婆達兜は愚癡に意を專らにし、偏に利養に著し、[一八]五逆罪を作し已つて、身壞命終せば惡趣の中に生ぜん。是の如く諸比丘、利養は深重にして、人をして安穩の處に至るを得ざらしむ。是の故に諸比丘、以て利養心を生ぜば便ち當に捨離すべし。若し生ぜずば染心を興すこと勿れ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し、一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在して、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時一比丘有つて、如來は[一九]調達を[二〇]記別したまひ、罪を受くること一劫にして療治すべからざるを聞きぬ。時に彼の比丘便ち尊者阿難の所に至り、共に相[二一]問訊し已つて[二二]一面に在つて坐す、爾の時彼の比丘阿難に問うて曰く、「云何が阿難、如來は盡く提婆達兜の原本を觀じ已つて、然る後に罪を受くること一劫にして、療治すべからざることを記別したまふにや、所由の記することを得べきも

[一五] 羅閱城(Rājagṛha)とは、譯して、王舍城といひ、摩竭國の首都。

[一六] 迦蘭陀竹園所(Veḷuvana Kalandakanivāpa) 竹林栗鼠養飼所ともいひ、摩竭陀王頻毘婆羅の奉獻せし竹林精舍のこと。

[一七] 提婆達兜(Devadatta)とは、調達と譯し釋尊の從弟。釋尊成道の後出家して弟子となるも、世尊の名聲を嫉み、五百の比丘を率ひて別立し、阿闍世太子をそゝのかして父王を弑せしめ、自ら世尊を殺害して新佛とならんとせしが、ならず、後阿闍世王懺悔して世尊に歸依するや、形勢の不利に、遂に病死するに至れり。

[一八] 五逆罪とは、殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出佛身血の五、破和合僧とは、教團の和合を破ること。出佛身血とは佛身に危害を加へることをいふ。

[一九] 調達とは、提婆達兜の譯語。

[二〇] 記別とは、豫言のこと。

[二一] 問訊とは、挨拶を交はすこと。

[二二] 一面とは、傍のこと。

「我此の衆に於て初めて一法を見ず。降伏し易きものにして、時宜を得易く、諸の善法を受く。所謂心是れなり。諸比丘、當に心を分別すべし。善く諸の善本を念ぜよ。是の如く、諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[二]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の衆中に於て、若し一人有つて是の念を作すものあり『我悉く之を知る』と。然して後、此の人『飲食を以て大衆の中に在つて虚りに[三]妄語せず』と。我或は復異時に於て此の人を觀見するに、染著の心を生じ、財物を念じ、便ち大衆の中に於て妄語を作す。然る所以は諸比丘、財物の染著は甚だ捨て難しと爲す。人をして三惡道中に墜墮せしめて無爲の處に至ることを得ず。是の故に諸比丘、已に此の心を生ぜば、便ち當に捨離すべし。設し生ぜずば復心を興して財物を染著すること勿れ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

[四]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此の衆中に於て是の念を作すものあり『正使命斷ずとも、衆の中に於て妄語を作さず』と。我或は復異時に於て此の人を觀見するに、染著の心を生じて財物を念じ、便ち大衆の中に於て妄語をなす。然る所以は、諸比丘、財物の染著は甚だ捨て難しと爲す、人をして三惡道の中に墮せしめて、無爲の處に至ることを得ず。是の故に諸比丘、已に此の心を生ぜば便ち當に捨離すべし、若し生ぜずば復心を興して財物に染著すること勿れ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

【二】 S. 17. 11－20 參照。

【三】 妄語（Musāvāda）とは、口に出放題をいふこと。

【四】 S. 17. 11－20 參照。

く、「當に一法を滅し、一法を捨離すべし。我汝等に證す、阿那含を成ぜん。云何が一法と爲すや。所謂愚癡[八]なり。是の故に諸比丘、當に愚癡を滅すべし、我卿等の與に阿那含を證せん」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

愚癡の染がす所　衆生惡趣に墮つ　當に勤めて愚癡を捨つべし　便ち阿那含を成ぜん

爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[九]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を滅し、一法を捨離すべし。我汝等に證す、阿那含を成ぜん。云何が一法と爲すや。所謂慳貪なり。是の故に諸比丘、當に慳貪を滅すべし。我今汝等に證す。阿那含を成ぜん」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく。

慳貪の染する所、衆生惡趣に墮す　當に勤めて慳貪を捨つべし　便ち阿那含を成ぜん

爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

[一〇]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我此の衆に於て初めて一法を見ず、降伏すべからず、時宜を得難くして、諸の苦報を受く。所謂心是れなり。諸比丘、此の心は降伏すべからず、時宜を得難く、諸の苦報を受く、是の故に諸比丘、心を分別すべし、心を思惟すべし。善く諸の善本を念ぜよ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[一一]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき、爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

【八】愚癡(Moha)。停徊して決斷力のないこと。

【九】Iti-vuttaka 5

【一〇】A. I. 3. 9

【一一】A. I. 3. 10

卷の第五

不逮品第十一

一

[一]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を滅すべし。我卿等に證す、[二]阿那含を成ぜん、云何が一法と爲すや。所謂[三]貪欲なり。諸比丘當に貪欲を滅すべし。我卿等に證す、阿那含を得ん」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

貪婬の染がる所　衆生惡趣に墮つ　當に勤めて貪欲を捨つべし　便ち阿那含を成ぜん

爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ

二

[四]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を滅すべし、我汝等に證す。阿那含を成ぜん。云何が一法と爲すや。所謂[五]瞋恚是れなり。諸比丘、當に瞋恚を滅すべし。我汝等に證す。阿那含を得ん」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

瞋恚の染がす所　衆生[六]惡趣に墮つ　當に勤めて瞋恚を捨つべし　便ち阿那含を成ぜん

爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[七]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく

【一】Iti-vuttaka 1.

【二】阿那含(Anāgāmi)は、四沙門果の一、不還果と譯し、この位に入りしものは、此の世界に還來することなく、天界に於て涅槃に入るが故にこの名あり。三結及び五下分結を斷じて此の位に入る。

【三】貪欲(Lobha)。

【四】Iti-vuttaka 2

【五】瞋恚(Dosa)。

【六】惡趣とは、惡世界のこと、地獄・餓鬼・畜生の三惡道をいふ。

【七】Iti-vuttaka 3

九

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し比丘有つて一法を修行せば、便ち惡趣を壞敗すること能はず。一は善に趣くと爲し、一は泥洹に趣くと爲す。云何が一法を修行せば、惡趣を壞敗すること能はざるや。所謂心に篤信なきなり。是れ此の一法を修せば惡趣を壞敗らずと謂ふなり。云何が一法を修行せば善處に趣くとは所謂心に篤信を行ず。是れ此の一法を修せば善處に趣くことを得と謂ふなり。云何が一法を修行せば泥洹に至ることを得るや。所謂恒に心念を專らにするなり。是れ此の法を修行せば泥洹に至ることを得と謂ふなり。是の故に謂ふ、諸比丘心意を專精にして、諸の善本を念ぜよ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し一人有つて世に出現せば、此の衆生の類便ち壽を增し、算を益し、顏色光潤にして、氣力熾盛、快樂極りなく、音聲和雅なり。云何が一人と爲すや。所謂如來至眞等正覺なり。此れを一人世に出現せば、此の衆生の類便ち壽を增し、算を益し、顏色光潤にして、氣力熾盛、快樂極りなく、音聲和雅といふなり。是の故に諸比丘、常に當に專精一心に佛を念ずべし、是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

無慢二と念と壇と　二施と堅無厭　施福と魔波旬と惡趣と及び一人なり

增壹阿含經卷第四

護心品第十

を畏るべし。然る所以は、苦の原本、愁憂苦惱稱記すべからず。此を無福と名く」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

快き哉福の報ひ　願ふ所のものは　速に滅盡に至ることを得て　無爲處に到る　正使億數の天魔波旬も　亦嬈すこと能はず　福業を爲すものは　彼恒に自ら　賢聖の道を求めて　便ち盡く苦を除き　後に憂ひ有ることなし

是の故に諸比丘、福をなして厭ふこと莫かれ。是の故に諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し一法を承順すること有らば一法を離れずして、魔波旬は其の便を得ること能はず。亦來つて人を觸嬈すること能はず。云何が一法と爲すや。謂く功德福業なり。然る所以は、自ら往昔を憶ふに、[四八]道樹下に在つて諸の菩薩と與に一處に集在しぬ。弊魔波旬、諸の兵數を將ひること數千萬億、種々の形貌、獸頭、人身、稱計すべからず。天・龍・鬼神・阿須倫・迦留羅・摩休勒等皆來つて雲集す。時に魔波旬我に語つて言く、『沙門、速に地に投ぜよ』と。佛、福德大力を以て魔怨を降伏し、諸の塵垢消えて諸穢有ることなし。便ち無上正眞道を成じぬ。諸比丘當に此の義を觀ずべし。其れ比丘有つて功德具足のものは、弊魔波旬其の便を得て其の功德を壞すること能はず」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

福有れば快樂しく　福なきものは苦し　今世後世に　福をなして樂しみを受けよ

是の故に諸比丘、福を爲して倦むこと莫かれ」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

【四八】道樹とは、菩提樹のこと。

「我の如きは今日審に衆生の根原所趣を知る。亦布施の報ひを知る。[四四]最後の一摶の餘りは、已に自ら食せずして他人に惠施す。爾の時慳嫉の心毛髮許りの如きも起らず。此れ衆生は施の果報を知らざるを以てなり。我皆悉く之を知る、施の果報は平等の報心異ること有ることなし。是の故に衆生は平等の施を能くせずして自ら墮落す、恒に慳嫉の心有つて心意を纏裹す」と。爾の時世尊便ち偈を說いて曰はく、

衆生は自ら如來の言教を覺らず　常に當に普く惠施すべし　專ら眞人の所に向へば　志性淸淨なるを以て　獲る所の福倍す多し　等しく共に其の福を分てば　後に大果報を得ん　施す所今善き哉　心廣く福田に向へば　此の人間に於て逝き　必ず天上に生れん　以て彼の善處に到り快樂自ら娛樂し　吉祥甚だ歡悅なり　一切の乏短なく　天の威德業を以て　玉女を營從となす　平等の施の報ひの故に　此の福祐を獲るなり

爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[四五]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等[四六]福報を畏るゝこと莫かれ。然る所以は、此れは是れ受樂の應、甚だ愛敬すべし。名けて福となす所以は、此大報あればなり。汝等當に福なきことを畏るべし。然る所以は、此れを苦の原本と名け、愁憂苦惱稱記すべからず、愛樂有ることなし。此れを無福と名く。比丘、昔我自ら念ずること七年、慈心を行ぜり。復七劫を過ぐるも此の世に來らず。復七劫中に於て、[四七]光音天に生じ、復七劫に於て空梵天處に生れて大梵天となり、與に等しきものなく、百千世界を統べ、三十六反天帝釋の形となり、無數世に轉輪王となる。是の故に諸比丘、福を作して惓むこと莫かれ。然る所以は、此れを受樂の應と名け、甚だ愛敬すべし。是れを名けて福となすと謂ふなり。汝等當に福なきこと

【四四】施を分けること、分施(Dānasaṃvibhāga)。

【四五】Itivuttaka 22。

【四六】福報(Puñña)。

【四七】光音天(Ābhassarūpaga)。色界第二禪天の第三、この天界の有情は音聲を絕つて、語る時に口より淨光を出すが故にかく名く。

弟子中最一の優婆塞にして、好んで布施を喜ぶものは、所謂[四二]須達長者是れなり」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時阿那邠持長者便ち世尊の所に往至して、頭面に世尊の足を禮し、一面に在つて坐す。世尊に告げて曰はく、「云何が長者、貴家は恒に貧乏に布施する耶」と。長者對へて曰さく、「是の如し、世尊、恒に貧乏に布施す。四の城門に於て廣く布施す。復家中に在つて所須を給與す。世尊、我或時是の念を作せり。『幷せて野獸・飛鳥・猪狗の屬に布施せんと欲す』と。我亦是の念無し、『此れに與ふべし。此れに與ふべからず』と。亦復是の念無し。『此に多く應與ふべし。此に少きを應與ふべし』と。我恒に是の念あり『一切衆生は皆食に由つて其の命を存す、食有れば便ち存し、食なければ便ち喪ふ』」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、長者、汝乃ち菩薩の心を以て專精意を一にして廣く惠施す。然して此の衆生は食に由つて濟ふことを得、食なくば便ち喪ふ。長者、汝當に大果を獲べし。大名稱を得て大果報有らん。聲十方に徹して甘露の法味を得ん。然る所以は、菩薩の家は恒に平等心を以て、以て惠施し、專精意を一にして衆生の類を念じ、食に由つて存し、食有れば便ち濟ひ、食なければ便ち喪ふ。是れ長者、菩薩は心の安ずる處に廣く惠施すと謂ふなり」と。爾の時世尊、便ち偈を説いて曰はく、

盡く普く惠施して　終に悋悔の心なかるべし　必ず良き友に遇ひて　彼岸に到るを得濟すべし

是の故に長者、當に平等の意にて廣く惠施すべし。是の如く長者、當に是の學を作すべし」と。爾の時長者、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[四三]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

【四二】須達(Sudatta)給孤獨長者の本名。給孤獨長者を見よ。

【四三】Iti-vuttaka 26°

諸の行路に糧食に乏しきものを拒逆せじ」と。

爾の時阿那邠持長者世尊に白して曰さく、「唯願はくは世尊、及び比丘衆は弟子の請を受けたまへ」と。爾の時世尊、默然として長者の請を請けたまへり。爾の時長者、世尊の默然として請を受けたまふを見て、卽ち佛を禮し、三匝して所在に還歸り、舍に到り已つて卽ち其の夜、甘饌種々の飯食を辦具し、廣く座具を敷き、自ら白さく、「時到れり、食具已に辦ぜり。唯願はくは世尊、願はくは時に臨顧したまへ」と。

爾の時世尊諸の比丘衆を將ひて衣を著け、鉢を持し、舍衛城に詣つて長者の家に至り、到り已つて各〻自ら座に就く。諸の比丘僧も亦各〻次に隨つて坐す。爾の時長者、佛比丘衆の座定まるを見、手自ら斟酌して種々の飲食を行じ、已に種々の飲食を行じて各〻鉢を收めて坐す。更に卑座を取り、如來の前に在つて法を聽聞せんと欲す。爾の時長者世尊に白して言さく、「善い哉、如來、諸の比丘に隨つて須ふる所の物、三衣・鉢盂[三九]・鍼筒・尼師壇[四〇]・衣帶・法澡灌及び餘の一切の沙門の雜物を聽さん。盡く弟子の家に之を取ることを聽さん」と。

爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等若し衣裳・鉢器及び尼師壇・法澡灌及び餘の一切の沙門の雜物を須ひんには、聽して此れを取らしむ。疑難を足し、想著の心を起すこと勿れ」と。爾の時世尊、長者阿那邠持のために、微妙の法を說き、微妙の法を說き已つて、便ち座より起ち、去り給ふ。爾の時に當つて阿那邠持復、四の城門に於て廣く惠施し、第五は市中、第六は家に在つて、食を須ふるものに食を與へ、漿を須ふるものに漿を與へ、車乘・妓樂・香熏・瓔珞[四一]を須ふるものに悉く皆之れを與へぬ。

爾の時世尊、長者阿那邠持の四の城門中に於て廣く惠施を作し、復大市に於て貧乏ものに布施し、復家內に於て布施すること無量なるを聞きたまひぬ。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我

津液得上味相、口腔中に常に液體あつて味をますこと。二十七、廣長舌相、舌廣く長く之を伸ばせば髮際に至ること、二十八、梵音深遠相、音聲清らかにして遠くに達すること。二十九、眼色如金青相、眼玉の紺青なること。三十、睫如牛王相、牛王の如く睫毛のすぐれてゐること。三十一、眉間白毫相、兩眉の間に白毫あり、右に旋つて常に光を放つこと。三十二、頂成肉髻相、頭の頂上に肉ありて隆起して髻の如き形をなすこと。

【三六】　五盛陰は、五陰に同じ。

【三七】　阿那邠持　(Anāthapiṇḍika)。給孤獨と譯す、給孤獨長者のこと。

【三八】　居士とは、出家せず家にありて佛敎に歸依する男の信者のこと。

【三九】　鉢盂(Patta)とは、托鉢に用ひる鐵鉢のこと。

【四〇】　尼師壇(Nisīdana)。座具と譯す。

【四二】　瓔珞(Alaṃkāra)。印度の貴人、殊に婦人少年などが頸、胸などにかける珠玉の飾りのこと。

法輪を轉ずるは本施の果報なり

爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給獨獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「檀越施主は云何が精進持戒の諸の賢聖の人に承事し、供養すべきや」と。爾の時諸比丘、世尊に白して曰さく、「世尊は是れ諸法の王たり。唯願はくは世尊、諸比丘の與に此の義を說きたまへ、盡く當に奉持すべし」と。

爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「諦に聽け諦に聽いて善く之を思念せよ、我當に汝の與に其の義を分別すべし」と。對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。爾の時諸比丘、佛より教へを受く。世尊告げて曰はく、「檀越施主は精進持戒の諸の多聞のものに承事し、供養せんに、猶し迷へるもの丶與に其の路を指示し、糧食の乏短に食を給施し、恐怖の人をして憂惱なからしめ、驚畏するものに教へて懼れ莫からしめ、歸する所なきものに、與に覆護を作し、盲者に眼目と作り、病の與に醫王と作るが如し。猶し田家の農夫の田業を修治し、穢草を除去し、便ち能く穀食を成就するが如し。比丘常に當に[三六]五盛陰の病を除き棄て、無畏泥洹の城中に入ることを求むべし。是の如く諸比丘、檀越施主は精進持戒の諸の多聞のものに承事し、供養して施すべし」と。

爾の時[三七]阿那邠持長者彼の衆に集在す。爾の時長者阿那邠持世尊に白して曰さく、「是の如し、世尊。是の如し、如來。一切の施主と受者には猶し吉祥瓶のごとし　諸の施を受くる人は毘舍王の如く、人に勸めて施を行ずること父母に親しむが如し。受施の人は是れ後世の良祐なり。一切の施主と受者とは猶し[三八]居士の如し」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、汝の言ふ所の如し」と。阿那邠持長者世尊に白して曰さく、「今より已後、門は守るに安んぜず。亦比丘・比丘尼・優婆塞・優婆斯及び

共に其指と指との間に網の目の如き筋あること。七、足趺高好相、足の背高く裕かにして圓滿なること。八、腨如鹿王相、腨の肉の纖圓なること、鹿王の如きこと。九、手過膝相、手長くして膝に達すること。十、男根象・馬の如く體內に密着せること。十一、身縱々廣相、身の丈兩手を擴げし長さに等しきこと。十二、毛孔生青色相、一々の毛孔より青色の一毛生じ亂雜せざること。十三、身毛上靡相、身毛右に旋り、上に向ひて靡びけること。十四、身金色相。十五、常光一丈相、身より光を放つこと一丈なること。十六、皮膚細滑相、皮膚の細滑なること。十七、七處平滿相、兩手の掌等の七處平かにして圓滿なること。十八、兩腋滿相、兩腋の下の充滿してゐること。十九、身如獅子相、態度獅子王の如きもの。二十、身端直相、形の正しく曲らないこと。二十一、肩圓滿相、兩肩豐かにして肥えてゐること。二十二、四十齒相。二十三、齒白齊密相、齒清白にしてよくそろうてゐること。二十四、四牙白淨相、犬齒の特に白く大なること。二十五、頰車如獅子相、兩頰豐かにして獅子の頰の如きこと。二十六、咽中

是の故に諸比丘、當に善法を修行すべし。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と爾の時諸比丘佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「云何が檀越施主を觀ずべき」と。爾の時諸比丘世尊に白して曰さく、「世尊は是れ諸法の主、唯願はくは世尊、諸比丘の與に此の義を說きたまへ、聞き已つて盡く當に奉行すべし」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「諦に聽け諦に聽いて善く之を思念せよ。我汝の與に其の義を分別すべし」と。對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。爾の時諸比丘、佛より敎へを受く。世尊告げて曰はく、「檀越施主は當に恭敬すること子の父母に孝順なるが如くすべし。之を養ひて之に侍し、[三三]五陰を長益し[三四]閻浮利地に於て種々の義を現ぜよ。檀越施主を觀じて能く又戒・聞・三昧・智慧を成ぜば、諸比丘は饒益する所多く、三寶中に於て罣礙する所なく、能く卿等に衣被・飮食・床榻・臥具・病瘦の醫藥を施さん。是の故に諸比丘、當に慈心有つて、檀越の所に於て、小恩をも常に忘れざるべし。況や復大なるものをや、恒に慈心を以て彼の檀越に向ひ、身口意に清淨の行を說いて稱量すべからず、亦限り有ること無く、身に慈しみを行じ、口に慈しみを行じ、意に慈しみを行じて、彼の檀越所施の物をして、終に唐捐せず、其の大果を獲て大福祐を成じ、大名稱有つて世間に甘露の法味を流聞せしめよ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時世尊便ち偈を說いて曰く、

施は以て大財を成じ　所願亦成就す　王及び諸の賊盜も　彼の物を侵すこと能はず　施は以て王位を得　轉輪處を紹繼す　七寶の具足の成ずるは　本施の致す所なり　布施は天身を成じ　首に雜寶冠を著く　諸の妓女と與に遊ぶは　本施の果報なり　施は天帝釋を得　天王の威力盛なり　千眼の形を莊嚴するは　本施の果報なり　布施は佛道を成じ　[三五]三十二相具はる　無上の

【三三】　五陰(pañcakhandā)は、又五蘊に作り、身心を構成する五種の要素にして、蘊とは積聚の義にして、色(Rūpa)受(Vedanā)想(Saññā)行(Saṅkhāra)識(Viññāṇa)の五が假りに寄り集りて身心を構成することより、肉體を五蘊假和合のものといふ。色とは物質、受は感受作用、想とは外境を心に浮べる作用、行とは意志作用、識とは意識のこと。

【三四】　閻浮利地(Jambudīpa)は、又閻浮提洲ともいひ、須彌山の南にありて、吾々の住む世界のこと。印度の傳說に於ては須彌山說を以て世界の成立を說明し、中央に須彌山あり、此の山の四方の大海の中に四大洲ありといひ、これはその一。

【三五】　三十二相とは、印度に於ける人相說にして此の相を具へしものは、在家にあれば轉輪聖王となり、出家せば佛陀となると。三十二相とは一、足下安平相、足の裏に凹みなきこと。二、千輻輪相、足の裏に種々の輪文あること。三、指纖長相、手足の指の細長きこと。四、手足柔軟相、手足の軟かきこと。五、足跟滿足相、踵の凹める處の圓滿なること。六、手足縵網相、手足

して移易せず。恒に其の意を專らにして自力勤勉せよ。是の如く比丘、彼放逸の行なくして恒に自ら謹愼せば、未生の[二一]欲漏は便ち生ぜず、已生の欲漏は便ち能く滅せ使め、未生の有漏は便ち生ぜず、已生の有漏は便ち能く滅せ使め、未生の[二二]無明漏は便ち生ぜず、已生の無明漏は便ち能く滅せ使む。比丘、彼の無放逸の行に於て、閑靜一處、恒に自ら覺知して自ら遊戲せば、欲漏心便ち解脱を得、有漏心無明漏心便ち解脱を得、已に解脱を得ば便ち解脱智を生じ、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じて復[二三]有を受けず」實の如くに之を知る」と。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

甘露跡を憍ぶることなかれ　放逸は是れ死の徑なり　慢なくば則ち死なく　慢ぜば則ち是れ死なり

是の故に諸比丘、當に念じて無放逸行を修行すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし。當に一法を廣布すべし。一法を修行し、一法を廣布し已れば、便ち神通を得て諸行寂靜、沙門果を得て[二四]泥洹處に至らん。云何が一法と爲すや。謂く無放逸行なり。諸の善法に於て云何が無放逸行なるや。所謂一切の衆生を觸嬈せず。一切の衆生を害せず。一切の衆生を惱さず。是れを無放逸行と謂ふなり。彼れ云何が善法と名くるや。所謂賢聖八道品なり。[二五]等見・[二六]等方便・[二七]等語・[二八]等行・[二九]等命・[三〇]等治・[三一]等念・[三二]等定、是れを善法と謂ふなり」と。爾の時世尊便ち偈を說いて曰はく、

一切衆生に施すに　法を人に施すに如かず　衆生に福を施すと雖も　一人の法施は勝る

【二一】欲漏(Kāmāsava)。欲情のこと。

【二二】無明漏(Avijjāsava)根本の煩惱のこと。この三を三漏といふ。

【二三】有(Bhava)。生存、存在の意、復有を受けずとは、再び迷ひの生を受けざること。

【二四】泥洹處は。無爲處に同じ、涅槃のこと。

【二五】等見(Sammādiṭṭhi)とは、正見に同じく、正しき見解のこと。

【二六】等方便(Sammāvāyāma)とは、正精進に同じく、正しい努力。

【二七】等語(Sammāvācā)とは、正語ともいひ、正しき語。

【二八】等行(Sammākammanta)とは、正業ともいひ、正しき行爲。

【二九】等命(Sammā-ājīva)とは正命ともいひ、正しき生活。

【三〇】等治(Sammāsaṅkappa)とは、正思ともいひ、正しき思惟。

【三一】等念(Sammāsati)とは、正念ともいひ、正しき思念。

【三二】等定(Sammāsamādhi)とは、正定ともいひ、正しき三昧のこと

十

〔一六〕聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我此の法中に於て一法を見ず。未だ欲想有らずば便ち欲想を生ぜず。已に欲想を生ぜば便ち能く之を滅す。未だ瞋恚想を生ぜずば便ち生ぜず。已に瞋恚想を生ぜば便ち能く之を滅す。未だ睡眠想を生ぜずば便ち生ぜず。已に睡眠想を生ぜば便ち能く之を滅す。未だ調戲想を生ぜずば便ち生ぜず。已に調戲想を生ぜば便ち能く之を滅す。未だ疑想を生ぜずば便ち生ぜず、已に疑想を生ぜば便ち能く之を滅す。亦惡露不淨を觀ずべし。已に惡露不淨を觀じ未だ欲想を生ぜずば便ち生ぜず。已に生ぜば便ち能く之を滅す。未だ瞋恚を生ぜずば便ち生ぜず。已に瞋恚を生ぜば便ち能く之を滅す。乃至疑、未だ疑想を生ぜずば便ち生ぜず。已に疑想を生ぜば便ち能く之を滅す。是の故に諸比丘、常に當に意を專らにして不淨想を觀ずべし。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

二斯及び二心と　一墮と一生天と　男女想受の樂と　二の欲想は後に在り

護心品第十

一

〔一七〕聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。一法を修行し、一法を廣布し已れば便ち神通を得て、諸行寂靜となり、沙門果を得て〔一八〕泥洹界に至らん。云何が一法と爲すや。所謂〔一九〕無放逸行なり。云何が無放逸行と爲すや。所謂心を護るなり。云何が心を護るや。是に於て比丘常に心〔二〇〕有漏有漏法を守護し、當に彼の心有漏有漏法を守護すべし。有漏法に於て便ち悅豫を得ば亦信樂有り、住

〔一六〕A. I. 2. 6–10

〔一七〕Iti-vuttaka 20 參照

〔一八〕泥洹界は、涅槃界にもつくり、證りの境涯。

〔一九〕無放逸行は、不放逸行ともいひ、放逸ならざること Appamāda。

〔二〇〕有漏(Bhavāsava)。生存に對する欲望。

八

［九］聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

「我此の衆中に於て一法の最勝最妙なるを見ず。世人を眩惑して永寂を生ぜず、牢獄に縛著して解け已ること有ること無し。所謂女人、男子の色を見已つて便ち想著を起し、意甚だ愛敬し、人をして永寂に至らざらしめ、牢獄に縛著して解け已ること有ること無し」意捨離せず、今世後世に周旋往來して五道に廻轉し、動もせば劫數を歷ん」と。爾の時世尊便ち偈を說きて曰く、

若し顚倒の想ひを生ぜば念じて恩愛の心を興せ　念じて意の染著を除けば　便ち此の諸の穢れなからん

是の故に諸比丘、當に諸色を除くべし」想著を起すこと莫かれ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

［一〇］聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

「我此の衆中に於て一法を見ず。［一一］欲想無くして便ち欲想を起し、已に欲想を起せば便ち增益す。［一二］瞋恚の想無くして便ち瞋恚を起し。已に瞋恚を起せば便ち增多す。［一三］睡眠想なくして便ち睡眠を起し、已に睡眠を起せば便ち增多す。［一四］調戲想なくして便ち調戲を起し、已に調戲を起せば便ち增多す。［一五］疑想なくして便ち疑想を起し、已に疑想を起せば便ち增多す。亦惡露不淨想を觀ずべし。設し亂想を作さば欲想なくして便ち欲想有り、已に欲想有れば便ち瞋恚睡眠を增多す。本疑想なくして便ち疑想を起し、疑想已に起れば便ち增多す。是の故に諸比丘、亂想を作すこと莫かれ。常に當に意を專らにすべし。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

［九］A. I. 1. 7.

［一〇］A. I. 2. 1. 5

［一一］欲想(Chanda saññā)

［一二］瞋恚想(Vyāpāda saññā)とは、瞋りの想ひ。

［一三］睡眠想(Middhasaññā)

［一四］調戲想(Uddhacca saññā)とは心のざわつき。

［一五］疑想(Vicikicchāsaññā)

是の故に諸比丘、當に心を降伏すべし。穢行を生ずること勿れ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

六

[七]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我恒に一人の心中の所念の事を觀見するに、臂を屈伸するが如き頃に天上に生れん。然る所以は善心に由るが故に、已に善心を生ぜば便ち天上に生れん」と。爾の時世尊、便ち偈を說いて言はく、

設し復一人有つて　善妙の心を生ず　今諸比丘に告げて　廣く其の義趣を演べん　今正に是れ
其の時なり　設し命終るもの有らば　便ち天上に生るゝを得ん　心の善行に由るが故に

是の故に諸比丘、當に淨意を發すべし。穢行を生ずること勿れ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[八]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我此の衆中に於て、一法の最勝最妙なるを見ず。世の人を眩惑して永寂に至らず、牢獄に縛著して解け已ること有ること無し。所謂男子は女人の色を見已つて便ち想著を起し、意に甚だ愛敬し、人をして永寂に至らざらしめ、牢獄に縛著して解け已ること有ることなく。意捨離せず、今世後世に周旋往來して五道に廻轉して動もせば劫數を歷ん」と。爾の時世尊便ち偈を說いて曰はく、

梵音柔軟の聲は　如來見ること難しと說く　或は復時に見ること有り　繫念して目前に在り
亦女人と往來し　與に言語すること莫れ　恒に羅伺は人を捕へ　無爲に至ることを得ず

是の故に諸比丘、當に諸色を除くべし。想著を起すこと莫かれ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

【七】A. I, 5. 4, (Iti-vuttaka) 21

【八】A. I. 1. 7

[三]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我一法の心より疾きものを見ず。譬ふるに喩ふべきものゝなきこと、猶し獼猴の如く、一を捨て一を取り心專ら定まらず。心も亦是の如く、前想の後想と同じからざる所のものは方便の法を以ても摸則すべからず。心の廻轉すること疾し。是の故に諸比丘、凡夫の人は心意を觀察すること能はず。是の故に諸比丘、常に當に心意を降伏して善道に趣かしむべし。亦是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[四]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我一法の心より疾き者を見ず。譬ふるに喩ふべきものゝなきこと、猶し獼猴の如く、一を捨て一を取りて、心專ら定まらず。心も亦是の如し。前想後想の所念同じからず。是の故に諸比丘、凡夫の人は心意の所由を觀察すること能はず。是の故に諸比丘、常に當に心意を降伏して、善道に趣くことを得べし。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

[五]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我恒に一人の心中の所念の事を觀見するに、此の人臂を屈伸するが如き頃に[六]泥黎の中に墮つ。然る所以は惡心に由るが故に。心に病生じて地獄に墜墮するなり」と。爾の時世尊便ち偈を說いて言はく、

猶し一人有つて　心に瞋恚の想ひを懷くが如し　今諸比丘に告げて　廣く其の義趣を演べん
今正に是れ其の時なり　設し命終るもの有らば　假令地獄に入らん　心の穢行に由るが故なり

【三】S.XII. 62. 2
【四】S.XII. 62. 2
【五】A. I. 5. 3.(Iti-vuttaka) 20
【六】泥黎(Niraya)　地獄のこと。

とを得ざらしむ。是の故に諸比丘、染著の意を生ずること莫かれ。已に生ぜば當に滅すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

[二] 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「篤信の優婆斯に唯だ一女有り。彼れ云何が教訓を成就すべき」と。爾の時諸比丘、世尊に白して曰さく、「我等世尊、此の義を解せず。世尊、是の諸法の本は如來の陳べたまふ所、承受せざるものなし。唯だ願はくは世尊、諸比丘の與に、此の深法を說きたまへ。聞き已つて奉行せん」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「諦に聽け諦に聽いて善く之を思念せよ。吾當に汝の爲に其の義を分別すべし」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し」と。爾の時諸比丘、佛より教へを受く。世尊告げて曰く、「猶し彼の篤信の優婆斯の如し。」女に教訓て曰はく、「汝今在家のものは當に拘讎多羅優婆斯難陀の母の如くなるべし。然る所以は、此れは是れ其の限、此れは是れ其の量なり。世尊、證を受くる弟子は所謂拘讎多羅優婆斯難陀の母是れなり。若し女、意に鬚髮を剃除し、三法衣を著け、出家學道せんと欲せば、當に讖摩比丘尼・優鉢花色比丘尼の如くなるべし。然る所以は此れは是れ其の量なり。此れは是れ其の限なり。所謂讖摩比丘尼・優鉢華色比丘尼は好んで正法を學び、邪業を作して非法を興起することなし。設し汝、此の染著の想を生ぜば、然も當に三惡趣中に墜々つべし。善念心を專らにして、果さゞるものは果し、獲ざるものは獲、未だ證を得ざるものは今當に證を受くべし。然る所以は諸比丘、信施の重實なることは消すべからず。人をして道に至るの趣を得ざらしむ。是の故に諸比丘、染著の想を生ずること莫れ。已に生ぜば滅すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

【二】 S. 17. 24

卷の第四

一子品第九

一

[一]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「猶し母人の心に篤信を懷くが如く、唯だ一子有りて恒に是の念を作す。『云何が教へて人と成爲使むべきや』と」。

爾の時諸比丘、世尊に白して曰さく、「我等、世尊、此の義を解せず。世尊、是の諸法の本は如來の陳べたまふ所なれば承受せざるものなし。唯願はくは世尊、諸比丘の與に此の深法を說きたまへ、聞き已つて奉行せん」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「諦に聽け諦に聽いて、善く之を思念せよ。吾當に汝の爲に其の義を分別すべし」と。諸比丘對へて曰く、「是の如し、世尊」と。爾の時諸比丘佛より敎へを受く。世尊告げて曰く、「猶し彼の優婆斯の心に篤信を懷くが如し。是の敎訓を作す『汝今家に在りて質多長者の如く、亦象童子の如くなるべし。然る所以は、此れは是れ其の限、此れは是れ其の量なればなり。世尊、證を受くるの弟子は所謂質多長者、象童子なり。若し童子の意にして、鬚髮を剃除し、三法衣を著け、出家學道せんと欲せば、當に舍利弗・目犍連比丘の如くなるべし。然る所以は此れは是れ其の限、此れは是れその量なればなり。所謂舍利弗・目犍連比丘は好く正法を學び、邪業をなして非法を興起すことなし。設し汝此の染著の想を生ぜば、便ち三惡趣の中に墜墮すべし。善念心を專らにし、得ざるものは得、獲ざるものは獲、未だ證りを得ざるものは今當に證りを受くべし。然る所以は諸比丘、信施の重きこと實に消すべからず。人をして道に至るこ

【一】S. 17, 23

く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し一人有つて世に出現せば、爾の時天及び人民皆悉く熾盛にして、〔一〇四〕三惡の衆生便ち自ら、減少せんこと、猶し國界は聖王の治化の時、便ち城中の人民熾盛にして、隣國の力弱きが如し。此れも亦是の如く、若し多薩阿竭の世に出現したまふ時は、三惡趣の道便ち自ら減少せん。是の如く諸比丘當に佛に向つて信ずべし。是の故に諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

〔一〇五〕聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し一人有つて世に出現せば、與に等しきものなく模則すべからず。獨歩して侶なく、儔匹有ることなく、諸天人民の能く及ぶものなし。信・戒・聞・施智慧の能く及ぶものなし。云何が一人を爲すや。所謂多薩阿竭阿羅呵三耶三佛、是を一人と謂ひ、世に出現し給ふて與に等しきものなく、模則すべからず、獨歩にして伴なく、儔匹有ることなく、諸天人民の能く及ぶものなし。信・戒・聞・施・智慧皆悉く具足す。是の故に諸比丘、當に佛を信敬すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

須倫と益一道　光明及び闇冥　道品と沒盡と信と　熾盛と無與等となり。

增壹阿含經卷第三

【一〇四】三惡の衆生とは、三惡道の衆生のこと。

【一〇五】A. I. 13. 5

爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、

「若し一人有つて世に出現せば便ち三十七品有りて世に出現す。云何が三十七品道なるや。所謂[九八]四意止・[九九]四意斷・[一〇〇]四神足・五根・[一〇一]五力・七覺意・[一〇二]八眞行、便ち世に出現す。云何が一人と爲すや。所謂多薩阿竭阿羅呵三耶三佛なり。是の故に諸比丘、常に當に佛に承事すべし。亦當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[一〇三]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

「若し一人有つて世より沒盡せば、人民の類多く愁憂を懷き、天及び人民普く廕覆を失はん。云何が一人と爲すや。所謂多薩阿竭阿羅呵三耶三佛、是を一人と謂ひ、世より沒盡せば人民の類多く愁憂を懷き、天及び人民普く廕覆を失はん。然る所以は若し多薩阿竭世に滅盡したまはば、三十七品も亦復滅盡せん。是の故に諸比丘、常に當に佛を恭敬すべし。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

「若し一人有つて世に出現せば、爾の時天及び人民便ち光澤を蒙り、便ち信心有つて、戒聞施智慧に於て、猶し秋の時の月光盛滿して塵穢なく、普く所照あるが如し、此れも亦是の如く、若し多薩阿竭阿羅呵三耶三佛、世間に出現したまはゞ、天及び人民便ち光澤を蒙り、信心あつて戒聞施智慧に於て、月の盛滿して普く一切を照らすが如し。是の故に諸比丘、恭敬心を如來の所に興せ。是の如

【九八】　四意止（Cattārisatipaṭṭhānāni）は四念住とも四念處ともいひ、内外三世に身・受・心・法の四處を念じて惡念を除く四種の思念。

【九九】　四意斷（Cattārisammappadhānāni）とは四正斷とも四正勤ともいひ、惡法を捨て善法の增上を計る四種の努力にして、已に生ぜし惡法はこれをとゞめ、未生の惡法はこれを生ぜざらしめ、已に生ぜし善法はこれを增上せしめ、未生の善法はこれを生ぜしむるごとに努めること。

【一〇〇】　四神足（Cattāroiddhipādā）は又四如意足ともいひ、三明六通を得る修禪の方法にして、欲と精進と心と思惟とに自在を得ること。

【一〇一】　五力（Pañca balāni）とは證悟を得るの力となるもの、信・勤・念・定・慧の五。

【一〇二】　八眞行とは、八正道（Ariyāṭṭhaṅgikamaggā）のこと。

【一〇三】　A I. 13. 4

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し一人有つて世に出現せば便ち一人有つて道に入り、世間に在り。亦二諦[89]・三解脱門[90]・四諦眞法[91]・五根[92]・六邪見滅・七覺意賢聖[93]・八道品[94]・九衆生居[95]・如來十力・十一慈心解脱有つて便ち世に出現す。云何が一人と爲すや。所謂多薩阿竭阿羅呵三耶三佛なり。是れを一人と謂ひ、世に出現するなり。便ち一人有つて道に入り、世間に在り。亦二諦・三解脱門・四諦眞法・五根・六邪見滅・七覺意賢聖・八道品・九衆生居・如來十力・十一慈心解脱有つて便ち世に出現す。是の故に諸比丘、常に恭敬を如來の所に興し、亦當に是の學を作すべし」。と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。」

四

[96]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し一人有つて世に出現せば便ち智慧の光明有つて世に出現す。云何が一人と爲すや。所謂多薩阿竭阿羅呵三耶三佛なり。是れを一人と謂ひ、世に出現せば、便ち智慧の光明有つて世に出現す。是の故に諸比丘、當に信心すべし。佛に向つて傾邪有ること無かれ」。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し一人有つて世に出現せば　無明[97]の大冥便ち自ら消滅す。爾の時凡愚の士は此の無明の爲に纒結所見れ、生死の五趣實の如くに知らず、今世後世を周旋往來して劫より劫に至り、解け已ること有ることなし。若し多薩阿竭阿羅呵三耶三佛世に出現したまふ時には、無明の大闇便ち自ら消滅す。是の故に諸比丘、當に念じて諸佛に承事すべし。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」。と。

【八九】二諦とは、眞俗二諦のこと。眞諦とは諦かな眞理をいひ俗諦とは世俗の淺き智慧。
【九〇】三解脱門は、三三昧に同じ。
【九一】四諦眞法とは、四聖諦のこと。
【九二】五根(Pañca-indriyāni)とは信・勤・念・定・慧の五にして、證悟を得るための道具。
【九三】七覺意(Satta-bojjhaṅgā)とは念・擇法・精進・喜・輕安・定・捨の七をいひ、證悟を得るに必要なる肢脚となるもの、七覺支とも七菩提分ともいふ。
【九四】八道品とは、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定の八をいひ、涅槃に到達するための道を八に分ちしもの、八正道に同じ。
【九五】衆生の所住處を九に分ちしもの、人・天・梵天・光音天・遍淨天・空處天・識處天・無所有處天・有想無想處天をいふ。
【九六】A. I. 13. 6
【九七】無明とは、煩惱のこと、(Avijjā)の譯。

長短を知らんと欲せば、[八一]住壽一劫、復是れ此の間の衆生の福祐なり。日月王をして阿須倫の爲に觸惱せられざらしむ。爾の時阿須倫は便ち愁憂を懷き、卽ち彼より沒す。是の如く諸比丘、[八二]弊魔波旬は恒に汝の後に在つて、其の方便を求めて善根を壞敗せんとす。波旬便ち極妙奇異の[八三]色・聲・香・味・細滑の法を化して、諸比丘の意を迷亂せんと欲す。波旬是の念を作す、『我當に會遇して比丘の眼の便を得べし。亦耳・鼻・口・身・意の便を得べし』と。爾の時比丘、極妙の[八四]六情の法を見ると雖も心染著せず。爾の時弊魔波旬便ち愁憂を懷き、卽ち退きて去る。然る所以は、[八五]多薩阿竭[八六]阿羅呵の威力の致す所。何を以ての故に、諸比丘、色・聲・香・味・細滑の法を近づけざればなり。爾の時比丘恒に是の學を作せ。人の信施を受くること極めて甚難となす。消化すべからず。[八七]五趣に墮墜して無上正眞の道に至ることを得ずば要らず意を專らにして、未だ獲ざるものは獲、未だ得ざるものは得、未だ度せざるものは度し、未だ得證せざるものは敎へて證を成ぜしむべし。是の故に諸比丘、未だ信施有らざれば想念を起さゞれ、已に信施有らば便ち能く消化して染著を起さゞれ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし』と。爾の時諸比丘佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

[八八]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し一人有つて世に出現せば、多く人を饒益し、衆生を安穩にし、世の群萠を愍れみ、天人をして其の福祐を獲せしめんと欲す。云何が一人と爲すや。所謂多薩阿竭阿羅呵三耶三佛なり。是れ一人世に出現して多く人を饒益し、衆生を安穩にし、世の群萠を愍れみ、天人をして其の福祐を獲せしめんと欲するなり。是の故に諸比丘、常に如來の所に恭敬を興せ。是の故に諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

【八一】 住壽一劫とは壽一劫のこと。

【八二】 弊魔波旬とは惡魔波旬のこと、(Māraṃ āi imā) 惡者殺者と譯し、空想と幻覺と現實の混同せし印度の經典には至るところにこの惡魔の跳梁を見る。

【八三】 五境のこと、五根卽ち眼・耳・鼻・舌・身の五官の對象となるもの、

【八四】 六情とは、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根のこと。六根によりて欲情を生ずるが故にかく名く。

【八五】 多薩阿竭は(Tathāgatā)の音譯、如來と譯す。佛の十號の一

【八六】 阿羅呵は(Arahā)の音譯、又阿羅漢に作り、應供と譯す。佛の十號の一、

【八七】 五趣は五道に同じ。

【八八】 A. I. 13. 1.

三

我弟子中の第一の優婆斯にして、恒に忍辱を行ずるものは所謂無優優婆斯是れなり。[七九]空三昧を行ずるものは所謂毘讎先優婆斯是れなり。無想三昧を行ずるものは所謂優那陀優婆斯是れなり。無願三昧を行ずるものは無垢優婆斯是れなり。好く彼を教授するものは尸利夫人優婆斯是れなり。善く能く戒を持するものは鴦竭摩優婆斯是れなり。形貌端正なるは雷焔優婆斯是れなり。諸根寂靜なるは最勝優婆斯是れなり。多聞にして博智なるは泥羅優婆斯是れなり。能く頌偈を造るものは脩摩迦提須達女優婆斯是れなり。怯弱する所なきものも亦是須達女優婆斯是れなり。我聲聞中最後に證を取りし優婆斯は所謂藍優婆斯是れなり。

無優と毘讎先　優那と無垢と尸と　鴦竭と雷焔と勝と　泥と修と藍摩女となり。

此は三十優婆斯なり。廣說すること上の如し。

阿須倫品第八

一

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「形を受くることの大なるものは、阿須倫王に過ぐるものなし。比丘當に知るべし。阿須倫の形は廣長八萬四千[八〇]由旬、口は縱廣千由旬あり。比丘當に知るべし。或は是の時有つて阿須倫王、日を觸犯せんと欲する時は、倍に復身を化して十六萬八千由旬となり、日月の前に往く。日月王見已つて各〻恐怖を懷き、本處に寧ぜず。然る所以は阿須倫の形甚だ畏るべきが故に。彼の日月王は恐懼を懷くを以て復光明有らず。然るに阿須倫は敢えて前んで日月を捉へざるなり。何を以ての故に、日月の威德に大神力有り、壽命極めて長く、顏色端正にして樂しみを受くること窮りなく、壽命の

[七九]　空三昧・無想三昧・無願三昧、これを三三昧といひ、沈思によつて一切萬有は本來空にして本體なしと觀ずるを空三昧といひ、空の故に相の取るべきなしと觀ずるを無相三昧といひ、空無相の故に願ふべきものなしと觀ずるを無願三昧といふ。

[八〇]　由旬(Yojana)　印度の里程六哩乃至七哩、八十俱盧舍を一由旬とすと。

不尼と摩訶納　拔陀と優多羅と　師子と毘舍と離と　優多と天と摩羅となり。
四十優婆塞盡く上の如く廣說すべし。

[七三] 清信女品第七

一

我弟子中の第一の[七四]優婆斯にして、初めて道證を受けしものは所謂難陀難陀婆羅優婆斯是れなり。智慧第一のものは[七五]久壽多羅優婆斯是れなり。恒に坐禪を喜ぶものは[七六]須毘耶女優婆斯是れなり。慧根の了々たるものは毘浮優婆斯是れなり。說法に堪能なるものは鴦竭闍優婆斯是れなり。善く經の義を演ぶるものは跋陀婆羅須焰摩優婆斯是れなり。外道を降伏するものは婆修陀優婆斯是れなり。音響清徹なるものは無優優婆斯是れなり。能く種々に論ずるは婆羅陀優婆斯是れなり。勇猛精進なるものは所謂須頭優婆斯是れなり。

難陀陀と久壽と　須毘と鴦竭闍と　須焰及び無優と　婆羅陀と須頭となり。

二

我弟子中の第一の優婆斯にして如來を供養するものは所謂[七七]摩利夫人是れなり。正法を承事するものは所謂須賴婆夫人是れなり。聖衆を供養するものは捨彌夫人是れなり。當來過去の賢士を瞻視するものは所謂月光夫人是れなり。檀越第一なるものは雷電夫人是れなり。恒に慈三昧を行ずるものは所謂摩訶光優婆斯是れなり。悲哀愍を行ずるものは毘提優婆斯是れなり。喜びの心の絶えざるものは拔提優婆斯是れなり。行じて業を守護するものは[七八]難陀母優婆斯是れなり。信解脫を得るものは照曜優婆斯是れなり。

摩利と須賴婆と　捨彌と光月と雷　大光と毘提と陀と　難陀及び照曜となり。

【七一】摩訶納釋種（Mahānāma Sakka）。釋種は釋迦種族。その王で阿那律の兄、大名と譯し、迦維羅衞城の滅亡の時池に入つて死す。
【七二】護心は、四等心（四無量心）の一、怨親憎愛の念のなき平等の心、捨心ともいふ。
【七三】清信女品の三經は A. I. 14. 7
【七四】優婆斯（Upāsikā）は又優婆夷とも音譯し、清信女と譯す。在家の女の信者をいふ
【七五】久壽多羅（Khujjuttarā）憍賞彌の王妃（Sāmāvatī）の婢にして、法を聞いては、歸へり王妃に告げ、多聞第一と稱せらる。
【七六】須毘耶（Suppiyā）、須比耳とも音譯し　病者の看護第一と稱せらる。
【七七】摩利（Mallikā）、拘薩羅王波斯匿の王妃、厚く佛陀に歸依せり。
【七八】難陀母（Uttarā Nandamātā）難陀比丘尼の母、禪定第一と稱せらる。

法を說くものは所謂最上無畏優婆塞是れなり。說く所に畏れなく、善く人の根を察するものは所謂頭摩大將領毘舍離是れなり。

生漏と梵摩兪と　御馬及び聞寥　毘𦂶と優波離と　殊提と優と畏と摩となり。

三

我弟子中の第一の優婆塞は、惠施を好んで喜ぶものは所謂[六五]毘沙王是れなり。施す所の狹少なるものは光明王是れなり。善本を建立するものは王[六六]波斯匿是れなり。[六七]無根の善信を得て歡喜心を起すものは所謂王[六八]阿闍世是れなり。至心に佛に向つて、意の變易せざるものは所謂[六九]優塡王是れなり。正法を承事するものは所謂月光天子是れなり。聖衆に供奉して意恒に平等なるものは所謂[七〇]造祇洹王子是れなり。常に喜びて彼を濟ひ、自ら己が爲にせざるものは、師子王子是れなり。善く人を恭奉して高下有ることなきものは無畏王子是れなり。顏貌端正にして人のために殊勝なるは所謂雞頭王子是れなり。

毘沙王と光明と　波斯匿と闍王　月と祇洹と優塡と　師子と畏と雞頭となり。

四

我弟子中の第一の優婆塞は、恒に慈心を行ずるものは所謂不尼長者是れなり。心恒に一切の類を悲念するものは所謂[七一]摩訶納釋種是れなり。常に喜心を行ずるものは所謂拔陀釋種是れなり。恒に[七二]護心を行じて善行を失はざるものは所謂毘闍先優婆塞是れなり。行忍を堪任するものは所謂師子大將是れなり。能く種論を雜へるものは所謂毘舍御優婆塞是れなり。賢聖にして默然たるものは難提婆羅優婆塞是れなり。善行を勤修して休息有ることなきものは所謂優多羅優婆塞是れなり。諸根寂靜なるものは所謂天摩優婆塞是れなり。我弟子中、最後に證を受けしものは所謂拘夷那摩羅是れなり。

見よ)。

【六二】婆羅門(Brāhmaṇa)印度四姓の一、僧族の階級。吠陀を誦し、神を祀り、祈りをする特種階級、婆羅門族は自ら神の口より生ると稱す。

【六三】優波離(Upāli)。

【六四】優迦毘舍離(Ugga Vesālika)。郁伽とも音譯し、毘舍離のHatthi村の人、美味の食物の供養第一と稱せらる。

【六五】毘沙(Bimbisāra)は瓶沙とも頻毘婆羅とも音譯し、摩竭陀國王。阿闍世王の父。

【六六】波斯匿(Pasenadi)拘薩羅國の王、末利夫人の勸めによつて厚く佛陀に歸依せり。

【六七】無根、阿闍世太子は父王を幽閉し遂に死に至らしめたが、後王となり、痛く逆惡を悔ひ佛に歸依するに至りしが、自ら伊蘭の毒樹より栴檀樹の生ぜしが如く未だ曾て自身に根の無かりし信仰生ぜりといひ大に歡喜し敎團の外護者となる。

【六八】阿闍世(Ajātasattu)、摩竭陀國の王、毘沙と韋提希との間に生れしもの。

【六九】優塡(Udena)拘睒彌の王。

【七〇】造祇洹王子とは、祇多太子(Jeta)のこと。須達多と共に祇園精舍を建立して佛陀に獻上せり。

分別するものは所謂遮波羅比丘尼是れなり。衆人を育養して乏しき所を施與するものは守迦比丘尼是れなり。我聲聞中の最後の第一の比丘尼は[五三]拔陀軍陀羅拘夷國比丘尼是れなり。

曇摩と須夜摩と因提と龍と拘那婆須と降と遮波と守迦と拔陀羅となり。

此の五十の比丘尼は上の如く廣說すべし。

[五四]清信士品第六

一

我弟子中の第一の[五五]優婆塞は、初めて法藥を聞き、賢聖の證を成じたるものは、所謂[五六]三果商客是れなり。第一の智慧は[五七]質多長者是れなり。神德第一のものは所謂犍提阿藍是れなり。外道を降伏するものは所謂掘多長者是れなり。能く深法を說くものは所謂優婆掘長者是れなり。恒に坐して禪思するものは[五八]呵侈阿羅婆是れなり。魔宮を降伏するものは所謂[五九]勇健長者是れなり。福德盛滿するものは闍利長者是れなり。大[六〇]檀越主は所謂[六一]須達長者是れなり。門族成就するものは泯兎長者是れなり。

三果と質と乾提掘と波と及び羅婆勇と闍利と須達と泯兎是れを十と謂ふ。

二

我弟子中の第一の優婆塞にして、好く義趣を問うものは所謂生漏[六二]婆羅門是れなり。利根にして通明なるものは所謂梵摩俞是れなり。諸佛の信使は御馬摩納是れなり。身の無我を計するものは喜聞笒婆羅門是れなり。論ずるに勝ふべからざるものは毘裘婆羅門是れなり。能く偈誦を造るものは優婆離長者是れなり。言語速疾なるもの亦是れ[六三]優波離長者是れなり。喜んで好寶を施して悋しむ心有らざるものは所謂殊提長者是れなり。善本を建立するものは所謂[六四]優迦毘舍離是れなり。能く妙

【五三】拔陀軍陀羅拘夷國(Bhaddākuṇḍalakesā)王舍城の長者の女、盜人と戀に落ち流轉の後尼犍子の弟子となりしが後舍利弗の弟子となる。

【五四】清信士品の四經は A. I. 14. 6.

【五五】優婆塞(Upāsaka)清信士と譯し、在家の男の信者をいふ。

【五六】三果商客とは、佛成道後未だ菩提樹を離れ給はざる時、蜜麨を供養して初めて歸依した二人の商客の帝波須(Tapussa)跋利迦(Bhallika)の兄弟のこと。三は二の誤りか?

【五七】質多(Citta)。は舍衛城外の Macchikasaṇḍa 村の人、屢ゝ比丘等と法論し說法第一と稱せられた。

【五八】呵侈阿羅婆(Hatthaka Āḷavaka)。阿臘毘(Āḷavi)の人、牛長者と譯し、阿臘毘夜叉に食はれんとせしを、佛陀に救はる。

【五九】勇健(Sūra Ambaṭṭha)。不壞の信第一のもの。

【六〇】檀越(Dānapati)とは佛に歸依して比丘衆に布施する信者のこと、その布施で比丘衆が貧窮の海を越ゆるが故にこの名あり。

【六一】須達(Sudatta)。給孤獨長者のこと。(給孤獨長者を

て人間に在らざるものは所謂優迦羅比丘尼是れなり。長く草蓐に坐りて服飾を著けざるものは所謂離那比丘尼是れなり。五納衣を著けて次を以て[五三]分衞するものは所謂阿奴波摩比丘尼是れなり。

無畏と多毘舍　婆陀と阿奴波と　檀と須檀と奢多と　優迦と離と阿奴となり。

四

我聲聞中の第一の比丘尼にして、空塚間を樂しむものは所謂優迦摩比丘尼是れなり。多く慈に遊んで生類を愍念するものは所謂清明比丘尼是れなり。衆生の道に及ばざるを悲泣するものは、所謂素摩比丘尼是れなり。得道の者を喜び、願ふて一切に及ぶものは、所謂摩陀利比丘尼是れなり。諸行を護守して意遠離せざるものは所謂迦羅伽比丘尼是れなり。空を守り、虚を執じてこれ無有と了するものは所謂提婆修比丘尼是れなり。心無想を樂しんで諸著を除去するものは所謂日光比丘尼是れなり。無願を修習して心恒に廣濟なるものは所謂末那婆比丘尼是れなり。諸法に疑ひなく、度人の限りなきものは所謂毘摩達比丘尼是れなり。能く廣く義を說いて深法を分別するものは所謂普照比丘尼是れなり。

優迦と明と素摩　摩陀と迦と提婆と　日光と摩那婆　毘摩達と普照となり。

五

我聲聞中の第一の比丘尼にして、心に忍辱を懷くこと、地の容受するが如きものは、所謂曇摩提比丘尼是れなり。能く人を教化して檀會に立たしむるものは所謂須夜摩比丘尼是れなり。床座を辦具するもの亦是れ須夜摩比丘尼是れなり。心已に永く息み亂想を興さゞるものは、所謂因陀闍比丘尼是れなり。諸法を觀了して厭足なきものは所謂龍比丘尼是れなり。意强く勇猛にして染著する所なきものは所謂拘那羅比丘尼是れなり。水三昧に入つて普く一切を潤すものは所謂婆須比丘尼是れなり。焰光三昧に入りて悉く萠類を照すものは所謂降提比丘尼是れなり。惡露不淨を觀じて緣起を

【五三】分衞具には、擯茶波多(Piṇḍapāta)乞食と譯す比丘が食を乞ひ廻ること、托鉢に同じ。

り。信解脫を得て復退還せざるものは所謂迦旃延比丘尼是れなり。四辯才を得て怯弱を懷かざるものは所謂最勝比丘尼是れなり。

大愛及び讖摩　優鉢と機曇彌と　拘梨と奢と蘭闍　那羅と迦旃と勝となり。

二

我聲聞中の第一の比丘尼にして、自ら宿命無數劫の事を識るものは所謂[四九]杖陀迦毘離比丘尼是れなり。顏色端正にして人に敬愛せらるゝものは所謂醯摩闍比丘尼是れなり。外道を降伏し、立つるに正教を以てするものは所謂[五〇]輸那比丘尼是れなり。義趣を分別して廣く分部を說くものは所謂[五一]曇摩提那比丘尼是れなり。身に麁衣を著け、以て愧とせざるものは所謂優多羅比丘尼是れなり。諸根寂靜にして恒に一心の如きものは所謂光明比丘尼是れなり。衣服齊整常に法敎の如きものは所謂禪頭比丘尼是れなり。能く種論を雜へて亦凝滯なきものは所謂檀多比丘尼是れなり。偈を造りて如來の德を讚ふるに堪任するものは所謂天與比丘尼是れなり。多聞博知にして恩慧下に接するものは所謂瞿卑比丘尼是れなり。

拔陀と闍と輸那　曇摩那と優多と　光明と禪と檀多と　天と及び瞿卑となり。

三

我聲聞中の第一の比丘尼にして、恒に閑靜に處りて人間に居らざるものは所謂無畏比丘尼是れなり。苦體乞食して貴賤を擇ばざるものは、所謂毘舍佉比丘尼是れなり。一處一坐して終に移易せざるものは所謂拔陀婆羅比丘尼是れなり。遍行乞求して廣く人民を度するものは所謂摩怒呵利比丘尼是れなり。速に道果を成じて中間滯らざるものは所謂陀摩比丘尼是れなり。三衣を執持して終に捨離せざるものは所謂須陀摩比丘尼是れなり。恒に樹下に坐りて意改易せざるものは所謂協須那比丘尼是れなり。恒に露地に居りて覆蓋を念はざるものは所謂奢陀比丘尼是れなり。空閑處を樂しみ

【四九】　杖陀迦毘離（Bhaddā-kapilānī）宿命通第一と稱せられ、沙伽羅（Sāgala）市に生れ、大迦葉に嫁し、合議の上共に出家す。

【五〇】　輸那（Soṇā）。舍衞城に生る多くの子を有せしが、夫の死後子供等に疎んぜられ、出家す。

【五一】　曇摩提那（Dhammadinnā）王舍城に生る說法第一と稱せらる。法與と譯す。

梵達と須深摩　婆彌と躍と曇彌　毘利陀と無畏と　須泥陀と須羅となり。

十

我聲聞中の第一の比丘にして、星宿を曉了し、預じめ吉凶を知るものは所謂那伽波羅比丘是れなり。恒に三昧を喜びて禪悅を食となすものは所謂婆私吒比丘是れなり。常に喜びを以て食となすものは所謂須夜奢比丘是れなり。恒に忍辱を行じて、對至して起たざるものは所謂滿願盛明比丘是れなり。日光三昧を修習するものは所謂彌奚比丘是れなり。算術の法を明にして差錯有ることなきものは所謂尼拘留比丘是れなり。等智を分別して恒に忘失せざるものは所謂鹿頭比丘是れなり。雷電三昧を得て恐怖を懷かざるものは所謂地比丘是れなり。身本を觀了するものは所謂頭那比丘是れなり。最後に證を取りて[四〇]漏盡通を得しものは所謂[四一]須拔比丘是れなり。

那迦と吒と舍那　彌奚と尼拘留と　鹿頭と地と頭那　須拔は最も後に在り。

此の百賢聖は應に悉く廣演すべし。

[四二]比丘尼品第五

一

我聲聞中の第一の比丘尼にして、久しく出家して尊び、國王に敬せらるゝものは所謂[四三]大愛道瞿曇彌比丘尼是れなり。智慧聰明なるものは[四四]讖摩比丘尼是れなり。神足第一にして、諸神を感致せしむるものは所謂[四五]優鉢華色比丘尼是れなり。頭陀法十一限礙を行ずるものは所謂[四六]機梨舍瞿曇彌比丘尼是れなり。天眼第一にして照す所無礙なるものは、所謂[四七]奢拘梨比丘尼是れなり。坐禪入定して意分散せざるものは所謂奢摩比丘尼是れなり。義趣を分別して廣く道教を演ずるものは所謂波頭蘭闍那比丘尼是れなり。律の教へを奉持して加犯する所なきものは所謂[四八]波羅遮那比丘尼是れな

[四〇] 漏盡通、六神通の一、有漏の煩惱を滅盡して如實に四諦等の理を知り、梵行を成就し、なすべきことをなし已り、更に迷ひの生を受けないことをいふ。

[四一] 須拔(Subhadda)。釋尊の最後の弟子。

[四二] 比丘尼品の五經は A. I. 14. 5

[四三] 大愛道瞿曇彌 (Mahāpajāpatī Gotamī)。釋尊の叔母で、母摩耶の沒後母に代りて撫育す難陀の生母、女性にして敎團に入つた最初の人。

[四四] 讖摩(Khemā)。

[四五] 優鉢華色 (Uppalavaṇṇā)。舍衞城の長者の家に生れ、家庭の不幸のために處々を流浪して懊惱の結果出家するに至れり。

[四六] 機梨舍瞿曇彌(Kisāgotamī) 舍衞城の貧女、嫁して幼兒の死に喪心し、佛陀に逢ひて心眼を開く、弊衣第一と稱せらる。

[四七] 奢拘梨(Sakulā)。

[四八] 波羅遮那(Paṭācārā)もと舍衞城の長者の女、持律第一と稱せらる。

八

我聲聞中の第一の比丘にして、體性利根にして智慧深遠なるものは、所謂[35]鴦掘魔比丘是れなり。能く魔外道邪業を降伏するものは所謂僧迦摩比丘是れなり。水三昧に入り以て難しと爲さゞるものは所謂[36]質多舍利弗比丘是れなり。廣く所識有つて人に敬念せらるゝものは、亦是れ質多舍利弗比丘是れなり。火三昧に入りて普く十方を照すものは所謂[37]善來比丘是れなり。能く龍を降伏して三尊に奉ぜしむるものは所謂那羅陀比丘是れなり。鬼神を降伏して惡を改め善を修せしむるものは所謂鬼陀比丘是れなり。乾沓和を降して善行を勸行するものは所謂毘盧遮比丘是れなり。恒に空定を樂しみて、空の義を分別するものは所謂須菩提比丘是れなり、志 空寂微妙の德業在るものも亦是れ須菩提比丘是れなり。[38]無想定を行じて、諸念を除去するものは所謂者利摩難比丘是れなり。無願定に入りて意起亂せざるものは所謂焰盛比丘是れなり。

鴦掘と僧迦摩と　質多と善と那羅　閦叉と浮盧遮と　善業と及び摩難となり。

九

我聲聞中の第一の比丘にして、慈三昧に入つて、心に恚怒なきものは梵摩達比丘是れなり。悲三昧に入つて、本業を成就するものは、所謂須深比丘是れなり。善き行德を得て若干の想なきものは所謂婆彌陀比丘是れなり。常に心を守護して意捨離せざるものは、所謂躍波迦比丘是れなり。焰盛三昧を行じて終に懈墮せざるものは所謂曇彌比丘是れなり。言語麁獷にして尊貴を避けざるものは、所謂[39]比利陀婆遮比丘是れなり。金光三昧に入るものは亦是れ比利陀婆遮比丘なり。金剛三昧に入りて沮壞すべからざるものは所謂無畏比丘是れなり。所說決了して怯弱を懷かざるものは所謂須泥多比丘是れなり。恒に靜寂を樂しみて意亂に處らざるものは所謂陀摩比丘是れなり。義勝ふべからずして終に伏すべからざるものは所謂須羅陀比丘是れなり。

羅とも音譯し、釋尊の子、學行第一と稱せらる。

【三三】般兎（Panthaka）。

【三四】周利般兎（Cullapanthaka）。形體化作第一と稱せらる。王舍城の人、摩訶般兎の弟、記憶力乏しく、修道困難なりしが、佛陀の拂塵の敎へによつて悟れり。

【三五】鴦掘魔(Aṅgulimāla)。指鬘と譯す。千人の指を斬つて首飾りとせば生天するとの師の言に從つて九百九十九人を殺し、最後に佛陀に逢ひ歸佛するに至れり。

【三六】質多舍利弗(Cittasāriputta)

【三七】善來(Sāgata)。

【三八】無想定（Asaññasamāpatti)とは、一切の心作用を滅せし禪定の境地、色界第四禪天中の無想天に生るべき因となる定。

【三九】比利陀婆遮(Pilindavaccha)。

道品の法を具足するものは、所謂優波先迦蘭陀子比丘是れなり。說く所和悅、人の意を傷けざるものは所謂婆陀先比丘是れなり。安般を修行して惡露を思惟するものは、所謂[三〇]摩訶迦旃延那比丘是れなり。無常を計我し、心に想有ることなきものは、所謂優頭槃比丘是れなり。能く種論を雜へて心識を暢悅するものは、所謂[三一]拘摩羅迦葉比丘是れなり。幣惡衣を著けて羞恥する所なきものは、所謂面王比丘是れなり。禁戒を毀らず、誦讀して懈らざるものは所謂[三二]羅雲比丘是れなり。神足力を以て、能く自ら隱翳するものは所謂[三三]般兎比丘是れなり。能く形體を化して若干の變を作すものは所謂[三四]周利般兎比丘是れなり。

尸婆と優波先と　婆陀と迦延那　優頭と王と迦葉と　羅雲と二の般兎なり。

七

我聲聞中の第一の比丘にして、豪族富貴にして天性柔和なるものは所謂釋王比丘是れなり。乞食して厭足なく、教化すること窮りなきものは所謂婆提婆羅比丘是れなり。氣力强盛にして畏難する所なきもの亦是れ婆提婆羅比丘是れなり。音響清徹にして、聲梵天に至るものは、所謂羅婆那婆提比丘是れなり。身體香潔にして四方に熏乎するものは、鴦迦闍比丘是れなり。我聲聞中の第一の比丘にして、時を知り、物を明にして所至に疑ひなく、所憶忘れず、多聞廣遠にして奉上に堪任するものは、所謂阿難比丘是れなり。服飾し莊嚴し、行步に影を顧みるものは、所謂迦持利比丘是れなり。諸王敬待し、群臣の宗ぶ所のものは、所謂月光比丘是れなり。天人の奉ずる所にして、恒に朝に侍省するものは所謂輸提比丘是れなり。以て人の形を捨て、天の貌に像るものも亦是れ輸提比丘なり。諸の天師導きて正法を指授するものは所謂天比丘是れなり。自ら宿命の無數劫の事を憶するものは所謂菓衣比丘是れなり。

釋王と婆提波と　羅婆と鴦迦闍　阿難と迦と月光と　輸提と天と婆醯となり。

衣と雨時衣とを加へしもの。

【二二】婆拘羅(Bakkula)は薄拘羅とも音譯せらる、無病第一と稱せらる。

【二三】滿願子 (Puṇṇa Mantāniputta) 滿慈子又は富樓那ともいひ、說法第一と稱せらる。

【二四】優波離(Upāli) 十大弟子の一、持律第一と稱せられ、佛滅後の王舍城の結集に律を誦した、もとは賤しい理髮師であつたもの。

【二五】婆迦利(Vakkali) 信仰の堅固第一と稱せらる。

【二六】難陀(Nanda)、諸根を制御すること第一と稱せらる、釋尊の異母弟、

【二七】須菩提(Subhūti) 無諍住第一と稱せらる。

【二八】比丘尼(Bhikkhunī) 乞士女と譯し、女の家を棄て、出家したもの。二十歲にして具足戒を受けて一人前の比丘尼となる。

【二九】須摩那(Sumana)。

【三〇】摩訶迦旃延那 (Mahākaccāyana)。尉禪尼國王の輔子の子、分別敷演第一と稱せらる。巴利語文典の祖と稱せらる。

【三一】拘摩羅迦葉 (Kumāra Kassapa)。美しく說法すること第一と稱せらる。

【三二】羅雲(Rāhula) は、羅睺

らにして思惟するものは、所謂陀素比丘是れなり。[二一]五納衣を著けて榮飾を著けざるものは所謂尼婆比丘是れなり。常に塚間を樂しみて人中に處らざるものは所謂優多羅比丘是れなり。恒に草蓐に坐して日に人を福度するものは所謂盧醯寗比丘是れなり。人と語らず、地を視て行くものは所謂優鉗摩尼江比丘是れなり。坐起行歩常に三昧に入るものは、所謂删提比丘是れなり。好みて遠國に遊び、人民を教授するものは所謂曇摩留支比丘是れなり。喜びて聖衆を集め、法味を論說するものは所謂迦淚比丘是れたり。

狐疑と婆嵯離と　陀蘇と婆と優多　盧醯と優迦摩と　息と曇摩留と淚となり。

五

我聲聞中の第一の比丘にして、壽命極めて長く、終に中夭せざるものは、所謂[二二]婆拘羅比丘是れたり。常に閑居を樂しみ、衆中に處らざるものは、所謂婆拘羅比丘是れなり。能く法を廣說し、義理を分別するものは、所謂[二三]滿願子比丘是れなり。戒律を奉持して觸犯する所なきは[二四]優波離比丘是れなり。信解脫を得て、意に猶豫なきは、所謂[二五]婆迦利比丘是れたり。大體端正にして、世と殊異するものは、所謂[二六]難陀比丘是れなり。諸根寂靜にして、心變易せざるものも亦是れ難陀比丘なり。辯才卒に發して、人の凝滯を解くものは所謂婆陀比丘是れなり。能く義理を廣說して違ふこと有らざるものは、所謂斯尼比丘是れたり。喜んで好衣を著け、本清淨を行ずるものは、所謂[二七]須菩提比丘是れなり。常に好みて諸の後學を教授するものは難陀迦比丘是れなり。善く禁戒を[二八]比丘尼僧に誨ふるものは所謂[二九]須摩那比丘是れなり。

婆拘と滿と波離と　婆迦利と難陀　陀と尼と須菩提と　難陀と須摩那となり。

六

我聲聞中の第一の比丘にして、功德成滿し、適く所に短たきは所謂尸婆羅比丘是れなり。衆の行

ññaka)、(九)樹下住(Bukkhamūlika)、(十)露地住(Abbhokāsika)、(十一)塚間住(Sosān ka)、(十二)隨所住(Yathāsanthatika)、(十三)常座(Nesajjika)。

【一三】天眼(Dibbacakkhu)。肉眼を超越した清淨な眼で、五眼の一。

【一四】阿那律(Anuruddha)釋尊の從弟。

【一五】離曰(Revata)　離波多とも音譯す。

【一六】軍頭婆漢(Kuṇḍhāna)は籌を取るに好運第一と稱せらる。

【一七】賓頭盧(Piṇḍolabhāradvāja)憍賞彌國の輔相の子。

【一八】鵬耆舍(Vaṅgīsa)婆耆舍とも音譯し、佛弟子中詩人第一と稱せらる。

【一九】四辯才とは、法無礙辯・義無礙辯・辭無礙辯・樂說無礙辯の四をいひ、(一)法無礙辯とは一切諸法の名稱を說くに無礙なること。(二)義無礙辯とは諸法の義理を明すに無礙なること。(三)辭無礙辯とは一切の語を用ふるに無礙なること。(四)樂說無礙辯とは衆生の欲するところを知つて說法に自在なること。

【二〇】一坐一食とは、一日に一食すること。頭陀行の一、

【二一】五納衣とは、三衣に裰綴

是れなり。[一二]頭陀難得の行は所謂大迦葉比丘是れなり。[一三]天眼第一にして、十方の域を見るものは、所謂[一四]阿那律比丘是れなり。坐禪入定して心の錯亂せざるものは、所謂[一五]離曰比丘是れなり。能く廣く勸率して齊講を施立するものは陀羅婆摩羅比丘是れなり。房舍を安造して招提僧を興すものは所謂小陀羅婆摩羅比丘是れなり。貴豪の種族より出家學道せしものは、所謂羅吒婆羅比丘是れなり。善く義を分別して道教を敷演するものは所謂大迦旃延比丘是れなり。

馬師と舍利弗と　拘律と耳と迦葉　阿那律と離曰　摩羅吒と旃延となり。

三

我聲聞中の第一の比丘にして、受籌に堪任して禁法に違せざるものは、所謂[一六]軍頭婆漢比丘是れなり。外道を降伏して正法を履行するものは所謂[一七]賓頭盧比丘是れなり。疾病を瞻視して醫藥を供給するものは、所謂識比丘是れなり。四事に衣被飲食を供養するものも、亦是れ識比丘なり。能く偈頌を造り、如來の徳を嘆ずるものは[一八]鵬耆舍比丘是れなり。言論辯了にして疑滯なきもの亦是れ鵬耆舍比丘なり。[一九]四辯才を得て難に觸れて答對するものは、所謂摩訶拘絺羅比丘是れなり。清淨閑居、人中に樂しまざるものは所謂堅牢比丘是れなり。乞食して辱めに耐え寒暑を避けざるものは所謂難提比丘是れなり。靜坐に獨處して意を專らにして、道を念ずるものは所謂金毘羅比丘是れなり。[二〇]一坐一食して處を移さゞるものは所謂、施羅比丘是れなり。三衣を守持して食息を離れざるものは所謂浮彌比丘是れなり。

軍頭と賓頭盧と　識と鵬と拘絺羅　善牢と及び難提と　金毘と施羅と彌となり。

四

我聲聞中の第一の比丘にして、樹下に坐禪して意移轉せざるものは所謂狐疑離曰比丘是れなり。身を苦しめて露坐し、風雨を避けざるものは、所謂婆嗟比丘是れなり。獨り空閑を樂しみ、意を專

一人。

【八】 馬師(Assaji)。阿說示と音譯し、馬勝と譯す。五比丘の一人。

【九】 舍利弗(Sāriputta)は、身子と譯す。本名は優波帝須(Upatissa) 舍利(Sāri)とは母の名、故に人呼んで舍利弗といふ。初め六師外道の刪闍耶(Sañjaya)の弟子なりしが、佛の成道後間もなく、目犍連と共に弟子となる。佛の十大弟子の一人、佛陀は嘆じて法將と宣ふ。

【一〇】 大目犍連(Mahāmoggallāna)は、本名は拘律陀(Kolita)といひ、目犍連はその姓十大弟子中、神通第一にして、比丘の模範と稱せらる。

【一一】 二十億耳(Soṇakoṭikaṇṇa)

【一二】 頭陀(Dhūta)は欲念清滅の意で、比丘の最小限度の生活法にして、漢譯經典にては十二あるが、南方の巴利經文では、十三をあぐ今巴利文より十三をあぐれば、(一)持糞掃衣(Paṁsukūlika) (二)但持三衣(Tecīvarika)、(三)常乞食(Piṇḍapātika)、(四)次第乞食(Sapadānacārika)、(五)但一座一食(Ekāsanika)(六)鉢乞食(Pattapiṇḍika)、(七)不重受食(Khalupacchābhattika)、(八)阿蘭若住(Ā-

卷の第三

弟子品第四[一]

一

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我聲聞中第一の比丘にして、寬仁にして博識、善く勸化を能くし、聖衆を將養して威儀を失はざるものは所謂[二]阿若拘隣比丘是れなり。初めて法味を受け、[三]四諦を思惟せるもの亦是れ阿若拘隣比丘なり、善く勸導を能くして人民を福度するものは、所謂[四]優陀夷比丘是れなり。速に神通を成じて中に悔ひ有らざるものは所謂[五]摩訶男比丘是れなり。恒に虛空を飛び、足地を蹈まざるものは善肘比丘是れなり。虛に乘じて敎化し、意に榮冀なきものは所謂婆破比丘是れなり。天上に居て樂しみ、人中に處らざるものは所謂牛跡比丘是れなり。恒に惡露。不淨の想を觀ずるものは善勝比丘是れなり。聖衆を將養し、四事に供養するものは[六]優留毘迦葉比丘是れなり。心意寂然として諸結を降伏するものは、所謂[七]江迦葉比丘是れなり。諸法を觀了し、都て所著なきものは所謂象迦葉比丘是れなり。

拘隣陀と夷と男　善肘と婆は第五　牛跡と及び善勝迦葉の三兄弟となり。

二

我聲聞中第一の比丘にして、威容端正にして行歩庠序たるものは、所謂[八]馬師比丘是れなり。智慧無窮にして諸疑を決了するものは、所謂[九]舍利弗比丘是れなり。神足輕擧、飛んで十方に到るものは、所謂[一〇]大目犍連比丘是れなり。勇猛精進にして、苦行に堪任するものは、所謂[一一]二十億耳比丘

【一】弟子品の十經は A. I. 14. 1―4. 弟子品以下の四品の異譯として、宋法賢譯の阿羅漢具德經一卷あり。漢巴對照する時は、巴利文は單にその名をあぐるにとゞまるも、漢譯は詳述せり。

【二】阿若拘隣(Aññākoṇḍañña)は、又阿若憍陳如と音譯し、五比丘の一。

【三】四諦は、具には四聖諦(Cattāriariyasaccāni)といひ、佛敎の根本敎理をなすものにして、現實と理想の因果を示すもの苦・集・滅・道の四をいひ、苦と集とは現實の迷ひの因果を示し、滅と道とは理想の證りの因果を示すもの(後の本文を見よ)。

【四】優陀夷(Udāyi)。又は迦留陀夷(Kaḷodāyi)とも呼ばれ出家の後も婬欲盛にして、屢ゝ罪を犯せり。

【五】摩訶男(Mahānāma)。五比丘の一。

【六】優留毘迦葉(Uruvelakassapa)三迦葉の一、(三迦葉を見よ)。

【七】江迦葉(Nadīkassapa)。那提迦葉と音譯す。三迦葉の

佛法及び聖衆 乃至死念に竟る 上と同名なりと雖も 其の義各々別異なり

增壹阿含經卷第二

廣演品第三

べし、便ち此の諸善功徳を獲べし、是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし。一法を廣布すべし。一法を修行し已れば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂念死なり。」佛諸比丘に告げたまはく、「云何が念死を修行せば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致さん」と。

爾の時諸比丘、世尊に白して曰さく、「諸法の本は如來の宣べたまふ所、唯願はくは世尊、諸比丘の爲に此の妙法を說きたまへ、諸比丘は如來より法を聞き已つて便ち當に受持すべし」と。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「諦に聽け諦に聽いて善く之を思念せよ。吾當に汝の爲に廣く分別して說くべし」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と、諸比丘前んで教へを受け已る。世尊告げて曰はく、「若し比丘有つて正身正意に結跏趺坐し、繫念して前に在り、他想有ることなく、專精死を念ず。所謂死とは此に沒して彼に生じ、諸趣を往來し、命逝きて停らず、[一五]諸根散壞して腐敗せる木の如く、命根斷絕し、宗族分離して形なく、響なく、亦相貌なし。是の如きを諸比丘、名けて念死と曰ひ、便ち具足することを獲て大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致さん。是の故に諸比丘、常に當に思惟して死念を離れざるべし。便ち當に此の諸善功徳を獲べし。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

【一五】諸根とは、諸感官のこと、これに、眼・耳・鼻・舌・身・意の六種あつて、六根といふ。

るべし。便ち此の諸善功德を獲べし。是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、一法を廣布すべし。一法を修行し已れば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂念身なり」と。佛諸比丘に告げたまはく、「云何が念身を修行せば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致さん」と。

爾の時諸比丘、世尊に白して曰さく、「諸法の本は如來の宣べたまふ所、唯願はくは世尊、諸比丘の爲に此の妙法を說き給へ。諸比丘は如來より法を聞き已つて便ち當に受持すべし」と、爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「諦に聽け諦に聽いて善く之を思念せよ。吾當に汝の爲に廣く分別して說くべし」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。諸比丘前んで教を受け已る。世尊告げて曰はく、「若し比丘有つて正身正意に結跏趺坐し、繫念して前に在り、他想有ることなく、專精身を念ず。所謂念身とは髮毛・爪・齒・皮肉・筋骨・膽・肝・肺・心・脾・腎・大腸・小腸・白脂・膀胱・屎尿・百葉・滄蕩脺泡・溺淚唾涕・膿血肪脂・涎・髑髏腦なり。何ものか是れ身たるや。地種是れなりや。水種是れなりや。火種是れなりや。風種是れなりや。父種と母種との所造となすや。何處より來り、誰の所造となすや。眼・耳・鼻・舌・身・心、此れ終には何處に生ずべきやと。是の如きを諸比丘、名けて念身と曰ひ、便ち具足を得て大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致さん。是の故に諸比丘、常に當に思惟して身念を離れざる

八

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。一法を修行し已れば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く具り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂念安般なり」。佛諸比丘に告げたまはく、「云何が念安般を修行せば便ち名譽有り、大果報を成じ、衆善普く具り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致すや」と。

爾の時諸比丘世尊に白して曰さく、「諸法の本は如來の宣べたまふ所、唯願はくは世尊、諸比丘の爲に此の妙義を說き給へ、諸比丘は如來より聞き已つて便ち當に受持すべし」と。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「諦に聽け諦に聽いて善く之を思念せよ。吾當に汝の爲に廣く分別して說くべし」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。諸比丘前んで教へを受け已る。世尊告げて曰はく、「若し比丘有つて正身正意に結跏趺坐し、繫念して前に在つて他想有ることなく、專精安般を念ず。所謂安般とは若し息長き時は亦當に觀知すべし。『我今息長し』と。若し復息短かければ亦當に觀知すべし。『我今息短し』と。若し息極めて冷ければ亦當に觀知すべし。『我今息冷たし』と。若し復息熱ければ亦當に觀知すべし。『我今息熱し』と。具さに身體を觀じて頭より足に至り、皆當に觀知すべし。若し復息に長短有れば亦『息に長き有り、短き有り』と觀ずべし。心を用ひて身を持ち、息の長短を知り、皆悉く之を知り、息の出入を尋ねて分別し曉了す。若し心身を持ちて息の長短を知り、亦復これを知り、息の長短を數へて分別し曉了す。是の如きを諸比丘、名けて念安般と曰ひ、便ち具足するを得ば大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致さん。是の故に諸比丘、當に當に思惟して安般念を離れざ

で天念を離れざるべし、便ち當に此の諸善功德を獲べし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、一法を廣布すべし。一法を修行し已れば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂念休息なり」と。佛諸比丘に告げたまはく、「云何が念休息を修行せば便ち名譽有り、大果報を成じ、衆善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致すや」と。

爾の時諸比丘、世尊に白して曰さく「諸法の本は如來の說きたまふ所、唯願はくは世尊、諸比丘の爲に此の妙義を說きたまへ、諸比丘は如來より聞き已つて便ち當に受持すべし」と。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「諦に聽け諦に聽いて善く之を思念せよ。吾汝の爲に廣く分別して說くべし」と。諸比丘對へて曰さく「是の如し、世尊」と。諸比丘前んで敎へを受け已る。世尊告げて曰はく、「若し比丘有つて正身正意に結跏趺坐し、繫念して前に在り、他想有ることなく、專精休息を念ず。所謂休息とは心意の想息み、志性詳に諦にして亦卒暴なく、恒に心を專一にし、意閑居を樂しみ、常に方便を求めて三昧定に入り、常に不貪を念じて勝光上達なり。是の如きを諸比丘名けて念休息といひ、便ち具足することを得て大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致す。是の故に諸比丘、常に當に思惟して休息念を離れざるべし、便ち此の諸善功德を獲べし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

便ち大果報を成じて諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致すと謂ふなり。是の故に諸比丘、常に當に思惟して施念を離れざるべし、便ち此の諸善功德を獲べし」是の如く諸比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。一法を修行し已れば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露の法を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂念天なり」と。佛諸比丘に告げたまはく、「云何が念天を修行せば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致すや」と。

爾の時諸比丘世尊に白して曰さく、「諸法の本は如來の說きたまふ所、唯願はくは世尊、諸比丘の爲に此の妙義を說きたまへ。諸比丘は如來より聞き已つて便ち當に受持すべし」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「諦に聽け諦に聽いて善く之を思念せよ、吾當に汝の爲に廣く分別して說くべし」と。諸比丘對へて曰く、「是の如し、世尊」と、諸比丘前んで敎を受け已る。世尊告げて曰はく、「若し比丘有つて正身正意に結跏趺坐し、繫念して前に在り、他想有ることなく、專精天を念じ、身口意淨うして穢行を造らず、戒を行じて身を成じ、身より光明を放つて照さゞる所なく、彼の天身、善き果報を成じ、彼の天身を成じ樂行具足して、乃ち天身を成ず。是の如きを諸比丘、名けて念天と曰ひ、便ち具足して大果報を成ずることを得て諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致すなり。是の故に諸比丘常に當に思惟し

するが故に、夫れ禁戒とは猶し吉祥瓶の如く、所願便ち剋くす。諸の道品の法は皆戒に由つて成ず。是の如く比丘にして禁戒を行ぜば大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致さん。是の故に諸比丘、常に當に思惟して戒念を離れざるべし、便ち此の諸善功德を獲べし。是の如く諸比丘當に是れを學すべし」と。

爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。一法を修行し已れば便ち名譽有り、大果報を成じ諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂念施なり。」佛諸比丘に告げたまはく、「云何が念施を修行せば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致すや」と。

爾の時諸比丘、世尊に白して曰さく、「諸法の本は如來の說きたまふ所、唯願はくは世尊、諸比丘の爲に此の妙義を說きたまへ。諸比丘は如來より聞き已つて便ち當に受持すべし」と。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「諦に聽け諦に聽いて善く之を思念せよ吾當に汝の爲に廣く分別して說くべし」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と、諸比丘前んで敎へを受け已る。世尊告げて曰はく、「若し比丘有つて正身正意に結跏趺坐し、繫念して前に在り、他想有ることなく、專精施を念じ、『我今施す所は施の中の上なるもの』と、永く悔ゆる心なく、返報の想ひなくば快く善利を得ん『若し人我を罵るも、我は終に報へず、設し人我を害して手拳相加へ、刀杖相向ひ、瓦石相擲つも、當に慈心を起すべし。瞋恚を興さず。我施す所、施の意絶えず』と。是れを比丘名けて大施といひ、

雙八輩なり。是れを如來の聖衆と謂ひ、恭敬し、承事し、禮順す、應賞し。然る所以は是れ世の福田なるが故に。此の衆中に於て皆同一の器にして、亦以て自ら度し、復他人を度し、三乘道[一四]に至る。此の如きの業を名けて聖衆と曰ふなり。是れを諸比丘、若し僧を念ぜば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果に逮びて自ら涅槃を致すと謂ふなり。是の故に諸比丘、常に思惟して僧念を離れざるべし。便ち此の諸善功德を獲べし。是の如く諸比丘、是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。一法を修行し已れば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じ、諸の亂想を除き、沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂念戒なり」と。佛諸比丘に告げたまく、「云何が念戒を修行せば便ち名譽あり、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致すや」と。

爾の時諸比丘、世尊に白して曰さく、「諸法の本は如來の說きたまふ所、唯願はくは世尊、諸比丘の爲に此の妙義を說きたまへ、諸比丘は如來より聞き已つて便ち當に受持すべし」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「諦に聽け、諦に聽いて善く之を思念せよ。吾汝の爲に廣く分別して說くべし」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。諸比丘前んで教へを受け已る。世尊告げて曰はく、「若し比丘有つて正身正意に結跏趺坐し、繫念して前に在り、他想有ることなく、專精戒を念ず。所謂戒とは諸惡を息むるが故に、戒は能く道を成じ、人をして歡喜せしむ。戒は身を瓔絡し、衆好を現

【一四】三乘とは、聲聞・緣覺・菩薩の三をいひ、乘とは運載の義で、これらの三は衆生を運載して迷の世界より悟りの世界に至らしむるが故に乘といふ。

を除き、塵勞有ることなく、【一〇】渴愛の心永く復興らざらん。夫れ正法とは欲に於て無欲に至り、諸の【一一】結縛、【一二】諸蓋の病を離るゝなり。此の法は猶し衆香の氣の如く、瑕疵亂想の念有ることなし。是れを比丘、念法を修行せば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果に逮びて自ら涅槃を致すと謂ふなり。是の故に諸比丘、常に思惟して法念を離れざるべし。便ち當に此の諸善功德を獲べし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。一法を修行し已れば便ち名譽有り、太功德を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂念僧なり」と。佛諸比丘に告げたまはく、「云何が念僧を修行せば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致すや。」

爾の時諸比丘、世尊に白して曰さく、「諸法の本は如來の說きたまふ所、唯願はくは世尊、諸比丘の爲に此の妙義を說きたまへ。諸比丘は如來從り聞き已つて便ち當に受持すべし」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「諦に聽け諦に聽いて善く之を思念せよ。吾當に汝の爲に廣く分別して說くべし」と。對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。諸比丘前んで敎へを受け已りぬ。世尊告げて曰はく、「若し比丘有つて正身正意に結跏趺坐し、繫念して前に在り、他想有ることなく、專精衆を念ず。如來の聖衆は善業成就し、質直にして義に順ひ、邪業あることなく、上下和穆して法と法とを成就す。如來の聖衆は戒成就し、三昧成就し、智慧成就し、解脫成就し、解脫知見成就す。聖衆とは所謂【一三】四

【一〇】渴愛(Tanhā)。人間の根本の欲望、根本の煩惱のこと、盲目的に生起して、喉の渇けるが如し故にこの名あり。
【一一】結縛(Saṁyojana)。煩惱のこと。
【一二】蓋(Nivaraṇa)。煩惱の異名心を蓋ふて證りを得しめざるが故にかく名く。
【一三】四雙八輩(Cattāri purisa-yugāni aṭṭha purisa-puggalā)。預流・一來・不還・阿羅漢の四雙と、預流向・預流果・一來向・一來果・不還向・不還果・阿羅漢向・阿羅漢果の八輩をいひ佛陀の敎團は此の四雙八輩集れり。故に敎團をいふ。

にして、欲意・恚想・愚惑の心、猶豫慢結皆悉く除盡す。如來の慧身は智涯底なく、罣礙する所なし。如來の身とは[七]解脫成就して[八]諸趣已に盡き、復生分我當に更に生死に墮すべしと言ふことなし。如來身とは知見の城を度し、他人の根を知り、度不度に應じ、此に死して彼に生れ、周旋往來して生死の際に解脫有るものと解脫なきものとを、皆具さに之を知る。是れを念佛を修行せば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致すと謂ふなり。是の故に諸比丘、常に思惟して佛念を離れざるべし。便ち此の諸善功德を獲べし、是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。一法を修行し、廣布し已れば便ち名譽有つて大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂念法なり」と。佛諸比丘に告げたまはく、「云何が念法を修行せば便ち名譽有り、大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致すや」と。

爾の時諸比丘、世尊に白して曰さく、「諸法の本は如來の說きたまふ所、唯願はくは世尊、諸比丘の爲に此の妙義を說きたまへ、諸比丘は如來より聞き已つて便ち當に受持すべし」と。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「諦に聽け諦に聽いて善く之を思念せよ。吾當に汝の爲に廣く分別すべし」と。對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。諸比丘前んで敎へを受け已る。佛之に告げて曰はく、「若し比丘有つて正身正意に結跏趺坐し、繫念して前に在つて他想有ることなく、專精法を念ぜば、諸の[九]欲愛

に佛の德性の一、說法する時に當つて更に畏れるところのなき智力にして、(一)一切法を了知することに於て畏れなく、(二)一切の漏滅盡して畏れなく、(三)染法は修道の碍となるを說いて畏れなく、(四)能く出離の道を說いて畏れることなし。

【六】　三昧(Samādhi)は、又三摩地とも音譯し、心を一點に集注して寂靜になること。

【七】　解脫(Vimutti)とは涅槃のこと。涅槃の理想の境に入る時は、一切の繫縛を離脫するが故に、涅槃のことを解脫といふ。

【八】　諸趣とは、三趣(地獄・餓鬼・畜生)五趣(三趣に人・天を加へたもの)等の惡世界、生死の迷ひの世界のこと。

【九】　欲愛(Kāmataṇhā)とは、五官の欲のこと、三愛の一。

卷の第二

[一]廣演品第三

一

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。已に一法を修行せば便ち名譽ありて大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て[二]無爲處に至らん。便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果に逮んで自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂念佛なり」と。佛諸比丘に告げたまはく、「云何が念佛を修行せば便ち名譽有つて大果報を成じ、諸善普く至り、甘露味を得て無爲處に至り、便ち神通を成じて諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致すや」と。

爾の時諸比丘世尊に白して曰さく、「諸法の本は如來の說きたまふ所、唯願はくは世尊、諸比丘の爲に此の妙義を說きたまへ、諸比丘は如來より聞き已つて便ち當に受持すべし」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「諦に聽け諦に聽いて善く之を思念せよ。吾この爲に廣く之を分別すべし」と。諸比丘答へて曰さく「是の如し、世尊」と。諸比丘前んで敎へを受け已る。世尊告げて曰はく、「若し比丘有つて正身正意に[三]結跏趺坐し、繫念して前に在つて他想有ることなく、專精佛を念じ、如來の形を觀じて未だ曾て目を離さず、已に目を離さずして便ち如來の功德を念ず。如來の體とは金剛所成[四]十力具足、[五]四無所畏にして衆に在つて勇健なり。如來の顏貌端正にして雙びなく、之を視て厭くことなく戒德成就すること、猶し金剛の如くして毀るべからず。淸淨にして瑕なきこと亦琉璃の如し。如來の[六]三昧は未だ始めより減ずること有らず、已に息永寂にして他念なし。憍慢强梁の諸情憺怕

【一】廣演品の一品は前の十念品を更に布演したもの、巴利原典にはなし。

【二】無爲處とは涅槃のこと。無爲（Asaṁkhata）は有爲（Saṁkhata）の作られ、聚められ、因緣によつて生じたものに對して、本來常住にして、生滅變化の支配を受けない眞理をいひ、涅槃の異名。

【三】結跏趺坐とは、膝を組んで坐し、兩足の趺を胜につけて壓する坐法、坐禪することをいふ。

【四】十力（Dasabalā）。佛の德性の一(一)佛は適するものと然らざるものとを知り、(二)諸業の必至の果を知り、(三)ある結果に達する正しき道を知り、(四)成素を知り、(五)有情の諸種の性向を知り、(六)諸感官の比較的勢力を知り、(七)あらゆる度の冥觀及び入定、及びこれらの精神を淨潔にし、堅固にする力を知り、(八)前生を憶念する智慧を有し、(九)天眼を得て能く一切を知る力を有し、(十)諸漏の滅盡を知る力を有する。

【五】四無所畏とは十力と共

く三塗八難の中に處るものなり。時に王長壽は八萬四千歲、善く梵行を修め、四等心、慈・悲・喜・護を行じ、身逝き命終つて梵天の上に生れぬ。時に王善觀は父王の敎を憶ひ、未だ曾て暫くも捨てず。是法を以て治化し、阿曲有ることなし。迦葉知るや不や。爾の時の摩訶提婆は豈に異人ならんや。是の觀を作すこと莫かれ。爾の時の王には今の釋迦文是れなり。時に長壽王とは今の阿難の身是れなり。爾の時の善觀とは今の優多羅比丘是れにして、恒に王法を受けて未だ曾て捨て忘れず、亦斷絕せず。時に善觀王は復父王の勅を興し、法を以て治化して王の敎を斷たず。然る所以は父王の敎へは違ふこと得難きを以ての故に。爾の時尊者阿難便ち偈を說いて曰く。

（餓鬼）の三をいひ、三惡趣に同じ。八難とは在地獄の難、在畜生の難、在餓鬼の難、在長壽天の難、在北鬱單越洲の難、盲聾瘖瘂の難、世智辯聰の難、生佛前佛後の難、いづれも佛を見ず正法を聞くを得ざるの難。

【九六】　三法衣とは、比丘の用ひる三種の衣服卽ち僧伽梨(Saṅghāti)（大衣）と鬱多羅僧(Uttarāsaṅgha)（上衣卽ち七條衣）と安陀會(Antarāvāsaka)（下衣、卽ち五條衣）をいひ、これと鐵鉢との、三衣一鉢は比丘の唯一の財產をなす。

【九七】　梵行(Brahmacariya)とは婬欲を離れし淸らかなる行業、解脫を求める出家行者の生命とするところ。

【九八】　四等心、四等を見よ。

【九九】　轉輪聖王は略して輪王・轉轉王(Cakkavattirāja)ともいひ、印度人の描いた四天下を統領する理想の王、王には七寶自ら具はり千子がありといふ。

【一〇〇】　此の次に卷末の「今に於て我……」の偈文以下が挿入さるべきもの。

【一〇一】　三業とは身口意の三の所作、行爲をいふ。【三九】を見よ。

【一〇二】　外道(Titthiya)　正當敎派より他の異端者を呼ぶ名。佛敎徒の側よりいへば、他の婆羅門等は總て外道となる。

【一〇三】　天(Deva)　とは印度の神々をいふ。

【一〇四】　龍(Nāga)　もと印度に住した龍種族の蛇類を崇拜した神話より起つたもので圖は人面人形にして、冠上に龍形を表はしてゐる。

【一〇五】　摩休勒は摩睺勒に同じ、【七二】を見よ。

【一〇六】　この三を三惡趣、又は三惡道といふ。

【一〇七】　法眼淨とは法眼(Dhammacakkhu)ともいひ、萬物の眞相を如實に觀得る心の眼をいひ、遠離離苦の故に淸淨といふ。第一沙門果の預流果と同じ意味に使はる。

【一〇八】　十念品（第一―十）A. I. 20. 93-102.

【一〇九】　祇洹精舍を見よ。

【一一〇】　神通(Abhiññā)　神變不思議なわざ、證果を得た聖者には此の力ありとせらる。

【一一一】　沙門果(Sāmaññaphala)とは證悟の段階を四に分ち、四沙門果といひ、阿羅漢に到達する第一位を預流果といひ、その上に一來果、不還果、阿羅漢果がある。（後の各項を見よ）

【一一二】　念佛(Buddhānussati)とは佛を念ずること。

【一一三】　念法(Dhammānussati)とは敎法を念ずること。

【一一四】　念衆(Saṅghānussati)とは比丘の僧伽を念ずること。僧伽(Saṅgha)とは衆と譯し、和合衆の意、四人以上の比丘が一處に和合して集つて修行せるもの、敎團のこと。

【一一五】　念戒(Sīlānussati)とは戒を念ずること。

【一一六】　念施(Cāgānussati)とは布施を念ずること。

【一一七】　念天(Devānussati)とは天を念ずること。

【一一八】　念休息(Upasamānussati)とは寂靜、靜止を念ずること。

【一一九】　念安般(Ānāpānasati)とは呼吸を觀念すること、長い息は長い息、短い息は短い息として呼吸を念ずること。

【一二〇】　念身(Kāyagatāsati)とは肉體の無常であることを念ずること。

【一二一】　念死(Maraṇasati)とは死を念ずること。

【一二二】　以下は【一〇〇】の本文につゞくべきもの。

逮びて自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂［一二〇］念身非常、當に善く修行すべし、當に廣く演布すべくんば、便ち神通を成じ、衆の亂想を去り、沙門果を得て自ら涅槃を致さん。是の故に諸比丘、當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべくんば、便ち神通を成じ、諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂［一二一］念死、當に善く修行すべし、當に廣く演布すべくんば、便ち神通を成じ、衆の亂想を去り、沙門果を得て自ら涅槃を致さん。是の故に諸比丘、當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。是の如く諸比丘、是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

佛と法と聖衆の念　戒と施と及び天念　休息と安般念　身死の念は後に在り

增壹阿含經卷第一

［一二二］今に於て我首の上に　已に衰耗の毛を生ず　天使已に來至せり　宜しく時に出家すべし

我今已に人中の福を食せり。宜しく自ら昇天の德を勉め、鬚髮を剃除して三法衣を著け、信堅固を以て出家學道し、衆苦を離るべしと。時に長壽王、第一の太子善觀に告げて曰く、「卿は今知るや不や、吾已に首の上に白髮を生ぜり。意に鬚髮を剃除し、三法衣を著け、信堅固を以て出家學道して衆苦を離れんと欲す。汝吾位を紹ぎ、法を以て治化し、吾言教に失違有らしめて凡夫の行を造ること勿れ。然る所以は若し斯の人あつて吾言に違ふものは凡夫の行を爲すものなり。夫れ凡夫とは長

ṇāna）の音譯、又般泥洹とも記し、圓寂と譯す。生死の境の外に出ること、大涅槃ともいふべく、未來に於て到達するもの、佛陀の入滅をすべて般涅槃といふ。

【八六】明行成（Vijjācaraṇa-sampanna）は明行足ともいひ、明と行とを具足するもの丶意、明とは智慧のこと、行とは行爲のこと、智慧と行爲の完全な方の意。佛の十號の一、

【八七】善逝とは、【五】を見よ。

【八八】世間解（Lokavidū）。世間の一切を悉く知れる人の意。佛の十號の一。

【八九】無上士（Anuttara）無上なる人の意。佛の十號の一、

【九〇】道法御（Purisadhamma-sārathi）は調御丈夫ともいひ、人と法とをよく調御するもの丶意で、佛の十號の一。

【九一】天人師（Satthādevamanussānaṃ）人天の師匠である意。佛の十號の一、

【九二】佛（Buddha）。佛陀の略、覺者と譯し、覺めたもの丶意。

【九三】衆祐。世尊に同じ、世尊を見よ。

【九四】摩訶提婆の物語は本生物語（Jātaka 9. Makhādeva Jātaka）に出づ。

【九五】三塗は又三途とも記し、火塗（地獄）血塗（畜生）刀塗

すべくんば、便ち神通を成じ、諸想を除去し、沙門果を獲て自ら涅槃を致さん。是の故に諸比丘、當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべくんば、便ち神通を成じ、諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂〔二八〕念休息、當に善く修行すべし、當に廣く演布すべくんば、便ち神通を成じ、諸の亂想を去り、沙門果を獲て自ら涅槃を致さん。是の故に諸比丘、當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべくんば、便ち神通を成じ、諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂〔二九〕念安般、當に善く修行すべし、當に廣く演布すべくんば、便ち神通を成じ、諸の亂想を去り、沙門果を獲て自ら涅槃を致さん。是の故に諸比丘、當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし」と。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべくんば、便ち神通を成じ、諸の亂想を除き、沙門果に

弟子のこと、三乘の一。
【七七】毘婆尸(Vipassi) 過去七佛の一、刹帝利より出で、姓を拘利といひ、壽命八萬歲波多利樹の下に成道し、三次に説法す。
【七八】至眞は應眞に同じ、【三〇】を見よ。
【七九】【一三】を見よ。
【八〇】式詰(Sikhi) は又尸棄とも音譯し、過去七佛の一、刹帝利より出で姓を拘利といひ、芬陀利樹の下に成道し、壽命七萬歲、三次に説法す。
【八一】毘舍婆(Vessabhū)、過去七佛の一、刹帝利より出で姓を拘利といひ、壽命六萬歲、沙羅樹の下に成道し、三次に説法す。
【八二】拘留孫(Kakusandha) 過去七佛の一、婆羅門より出で、姓を迦葉といひ、壽命四萬歲、尸利沙樹の下に成道し、一次に説法す。
【八三】拘那含(Konāgamana) 過去七佛の一、婆羅門より出で姓を迦葉といひ、壽命三萬歲、烏暫婆羅樹の下に成道し、一次に説法す。
【八四】迦葉(Kassapa)、過去七佛の一、姓を迦葉といひ、婆羅門より出で、尼倶樓陀樹の下に成道し、一次に説法す。壽命二萬歲。
【八五】般涅槃とは (Parinib-

比丘、當に一法を修行すべし、當に廣く一法を演布すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべくんば、便ち神通を成じ、衆の亂想を除き、沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂 一五 念戒、當に善く修行すべし、當に廣く演布すべくんば、便ち神通を成じ、衆想を除去し、沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。是の故に諸比丘、當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。是の時、諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべくんば、便ち神通を成じ、衆の亂想を去り、沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂 一六 念施、當に善く修行すべし、當に廣く演布すべくんば、便ち神通を成じ、衆の亂想を除き、沙門果に逮びて、自ら涅槃を致さん。是の如く諸比丘、當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。是の如く諸比丘是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべくんば、便ち神通を成じ、諸の亂想を除き、沙門果を獲て自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂 一七 念天、當に善く修行すべし、當に廣く演布

【六九】 族姓子(Kulaputta)とは、良家の子の意。
【七〇】 伽留羅(Garuḍa, Garuḍa)は又迦樓羅・誐嚕拏とも音譯し、金翅鳥と譯し、龍を執らへて食となす鳥類の王、鷲の如き猛鳥を神話化せし想像上の怪鳥。
【七一】 摩睺勒(Mahoraga)とは、摩睺羅伽とも音譯し、大腹行と譯す。大蟒のこと。
【七二】 甄陀羅(Kiṃnara)は、又緊那羅とも音譯し、疑神、人非人と譯す、八部衆の一、人とも神とも畜生とも定め能はざる歌舞をなす怪物、歌樂神とも音樂天ともいふ。
【七三】 道品とは、道に趣く品類の意、涅槃に到達するために修むる道を三十七に分ちしもの、四念處・四正勤・四如意足・五根・五力、七菩提分・八正道これなり。(各項は後の註を見よ)。
【七四】 これを七佛通誡の偈といひ、釋尊のみならず、七佛通じてこれを以て戒行の根本とせられしもの。
【七五】 辟支佛(Paccekabud-dha)。 獨覺又は緣覺ともいひ、飛花落葉等によつて、師なくして獨り覺るもの、三乘の一、
【七六】 聲聞(Sāvaka)。 佛の敎へを聞いて證る人の意。佛

[一〇八]十念品第二

一

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國[一〇九]祇樹給孤獨園に在しき。爾の時、世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべくんば便ち[一一〇]神通を成じて、衆の亂想を去り、[一一二]沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂[一一一]念佛、當に善く修行すべし、廣く演布すべくんば、便ち神通を成じ、衆の亂想を去り、沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。是の故に諸比丘、當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。是の如く諸比丘、是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべくんば、便ち神通を成じ、衆の亂想を去り、沙門果に逮びて自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂[一一三]念法、當に善く修行すべし、當に廣く演布すべくんば、便ち神通を成じ、衆の亂想を去り、沙門果に逮びて、自ら涅槃を致さん。是の故に諸比丘、當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべし。是の如く諸比丘この學を作すべし」と。爾の時諸比丘佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に一法を修行すべし、當に一法を廣布すべくんば、便ち神通を成じ、衆の亂想を去り、沙門果を獲て自ら涅槃を致さん。云何が一法と爲すや。所謂[一一四]念衆、當に善く修行すべし、當に廣く演布すべくんば、便ち神通を成じ、衆の亂想を去り、沙門果に逮びて、自ら涅槃を致さん。是の故に諸

欲天の第五、この天界へ生れしものは、自ら五欲を變化し娯樂するが故にこの名あり。

【六二】他化自在天(Paranimmitavasavatti)とは六欲天の第六、魔王の住所。他人の變化する樂事をかつて已が樂しみとするが故にこの名があり。

【六三】豔天(Yama)は。又須夜摩天・夜摩天・焔摩天・焔天ともいひ、欲界六欲天の第三、善時又は時分と譯す。

【六四】釋提桓因(Sakka devinda)とは、帝釋天のこと。【三四】をみよ。

【六五】提頭頼吒天王、毗留勒叉天王、毘留波叉王、毘沙門天王は、【三五】四大王を見よ。

【六六】閲叉(Yakkha)は叉夜叉、藥叉とも音譯し、勇健、暴惡と譯し、又捷疾鬼ともいひ。八部鬼衆の一、

【六七】羅刹(Rakkhasa)とは羅刹娑とも音譯し、可畏、食人鬼と譯し、惡鬼の通名。

【六八】賢劫(Bhaddakappa)とは現在の劫の名、一大劫は八十小劫に分れ、二十小劫毎に成・住・壞・空を配す。卽ち世界が成立(成)して、存在し(住)、破壞(壞)して空(空)となるに要する時間を序の如く配當したものにして、住劫中に多くの賢人が世に出るが故にこの名あり。

の時阿難便ち偈を説いて曰く、

法に於て當に念ずべきが故に　如來は是れに由つて生じたまひ　法興りて正覺　辟支羅漢の道を成ず　法は能く衆苦を除き　亦能く果實を成ず　法を念じて心を離れずば　今の報ひ後に亦受けん　若し成佛せんと欲せば　猶し釋迦文の如く　三藏の法を受持して　句逗りて錯亂せざれ　三藏持ち難く　義理窮むべからずと雖も　當に四阿含を誦すべし　便ち天人の徑を斷たん　阿含は誦し難く　經の義盡すべからずと雖も　戒律をして失はしむること勿れ　此れは是れ如來の寶なり　禁律も亦持ち難く　阿含も亦復然り　牢く阿毘曇を持ちて　便ち[一〇二]外道の術を降せ　阿毘曇を宣暢し　其の義亦持し難くば　當に三阿含を誦して　經句の逗りを失はざるべし　契經阿毘曇　戒律世に流布し　天人奉行するを得て　便ち安穩處に生れん　設し契經の法なくば　亦復戒律なく盲ひの冥に投げるが如く　何れの時にか明を見るべき　是を以て汝に囑累せん　并せて及び四部の衆　當に持して　釋迦文佛を輕慢すること勿るべし

尊者阿難是の語を説くの時、天地六返震動し、諸尊神天虛空の中に在つて、手に天華を執り、尊者阿難の上に散ず、及び四部の衆に散ず。一切の[一〇三]天・[一〇四]龍・鬼神・乾沓和・阿須倫・迦留羅・甄陀羅・[一〇五]摩休勒等皆歡喜を懷き、悉く歎じて曰く、「善い哉、善い哉、尊者阿難、上中下言悉く善からざるはなし、法に於て當に恭敬すべし。誠に所説の如し。諸天世人にして、法に從つて成就を得ざるものなし、若し惡を行ふものあれば、便ち[一〇六]地獄・餓鬼・畜生に墮せん」と。

爾の時、尊者阿難は四部衆の中に於て師子吼し、一切の人に勸めて此の法を奉行せしむ。爾の時座上の三萬の天人[一〇七]法眼淨を得たり。爾の時四部の衆諸天世人は尊者の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

athapiṇḍika)長者の略、本名を須達(Sudatta) 多といひ、舍衛城の長者にして、仁にして貧を濟ひ、食を孤獨の人に施せしより、時人稱して給孤獨長者といへり。

【五五】 拘隣(Koṇḍañña)は、憍陳如とも音譯し、五比丘の一人。

【五六】 須拔(Subhadda)は、具には須跋陀と音譯し、年百二十にして出家せし世尊の最後の弟子。

【五七】 如來藏とは、眞如のこと。眞如はよく如來の功德を含攝し、出生し、又衆生の煩惱の爲に隱覆せらるゝが故にこの名あり。

【五八】 方等とは、方廣とも廣經ともいひ、毗佛略 (Vepulla, 梵に Vaipulya)の譯。發展、廣説の義、短きものを長くせしものが即ち方等經の原義。

【五九】 釋迦文(Śākyamuni)は、又釋迦牟尼とも音譯し、釋迦は種族の名、牟尼は聖者の意、即ち釋迦族の聖者の意、漢譯經典中には時に釋迦を能仁と譯し、牟尼を寂默と譯し、能仁寂默といふことあり。

【六〇】 梵迦夷天 (Brahmakāyika)。梵天に同じ、色界初禪天の通名。

【六一】 化自在天 (Nimmāna-rati) は化樂天ともいひ、六

を以て出家學道し、衆苦を離るべし」と。爾の時王摩訶提婆、便ち第一の太子名けて長壽と曰ふに告ぐ、「卿は今知るや不や、吾首に已に白髪生ぜり。意に鬚髪を剃除し、三法衣を著け、信堅固を以て出家學道し、衆苦を離れんと欲す。汝吾位を紹ぎ、法を以て治化し、吾言教に失違有ら令めて凡夫の行を造ること勿れ。然る所以は、若し斯る人有つて、吾言教に違ふものは便ち凡夫の行爲り、凡夫とは長く、[九五]三塗八難の中に處るものなり」と。爾の時王摩訶提婆は王の位を以て太子に授け已り、復財寶を以て劫比に賜與し、便ち彼の處に於て鬚髪を剃除し、[九六]三法衣を著け、信堅固を以て出家學道して衆苦を離れ、八萬四千歳に於て善く[九七]梵行を修め、[九八]四等心慈・悲・喜・護を行じ、身逝いて命終つて梵天上に生ず。時に長壽王、父王の教を憶ひ、未だ曾て暫くも捨てず、法を以て治化して阿曲あることなく、未だ旬日を經ずして便ち復[九九]轉輪聖王と作ることを得て七寶具足せり。所謂七寶とは輪寶・象寶・馬寶・珠寶・玉女寶・典藏寶・典兵寶、是れを七寶と謂ふ。復千子あり勇猛にして智慧あり、能く衆苦を除き、四方を統領す。時に長壽王、前王の法を以て上の如く偈を作る。[一〇〇]

法を敬ひて所尊を奉じ　本の恩を忘れずして報ゆ　復能く[一〇一]三業を崇むるは　智者の貴ぶ所なり

我此の義を觀じ已つて、此の增一阿含を以て優多羅比丘に授與す。何を以ての故に、一切諸法は皆所由有ればなり」と。時に尊者阿難、優多羅に告げて曰く、「汝前に轉輪聖王と作りし時、王の教へを失はざりき、今復此の法を以て相囑累せんに、正教を失はず、凡夫の行を作すこと莫れ、汝今當に知るべし、若し如來の善き教へに違失有らば、便ち凡夫地の中に墮せん。何を以ての故に、時の王摩訶提婆は至竟解脱の地を得ず、未だ解脱至安穩處を得ず。梵天の福報を受くと雖も猶究竟如來の善業に至らず。乃ち究竟安穩の處と名けて快樂極りなく、天人の敬ふ所にして必ず涅槃を得、是れを以ての故に優多羅、此の法を奉持し、諷誦して讀み、念じて缺漏せ令むること莫るべし」と。爾

に止住して說法せらる。

【四九】毘舍離(Vesāli)は、吠舍離とも音譯し、跋耆(Vajji)國の隷車族(Licchavi)の都城で拘薩羅の東南に位し。今のムザフエルプル(Muzafferpur)地方のバサルト(Basarh)に當る。

【五〇】阿須倫(Asura)は、又阿修羅とも音譯し、略して單に修羅といひ、非天・非類などと譯し、大海に住して戰ひを好み、常に神々と爭ふをいふ。

【五一】乾沓和(Gandharva)は、犍闥婆とも音譯し、尋香、又は食香と譯し、八部衆の一、帝釋天の俗樂神、酒肉を喰はず、唯香のみを食す。

【五二】舍衛(Sāvatthi)は、拘薩羅國の首都、迦比羅國の西北、ラプチ河畔にあつて、今のガラクプール(Gorakhpur)の西北七十哩を距てたサヘトマヘト(Saheth Maheth)村のマヘトに當る。

【五三】祇洹精舍(Jetavanārāma)は具には祇樹給孤獨園(Jetavanānāthapiṇḍikārāma)といひ、舍衛城の長者須達多(Sudatta)が王子祇多(Jeta)の所有の林園を購うて精舍を建立して世尊に獻じたもの、祇多太子の林園でありしことより祇園、祇多林ともいふ。

【五四】孤獨長者は、給孤獨(An-

端正にして雙びなく、世の希有なり、八萬四千歲中、童子の身に於て自ら遊戲し、八萬四千歲中、太子の身を以て法を以て治化し、八萬四千歲中、復王法を以て天下を治化す。迦葉、當に知るべし。爾の時世尊は甘梨園中に遊び、食後、昔の常法の如く中庭を經行し給ふ。我及び侍者となる。爾の時世尊、便ち笑み口に五色の光を出したまふ。我見已つて前んで長跪して世尊に白して曰さく、『佛は妄りに笑みたまはず、願はくは本末を聞かん』と。如來至眞等正覺は終に妄りに笑みたまはざるなり。爾の時迦葉佛我に告げて言く『過去世の時、此の賢劫中に於て如來有り、拘留孫至眞等正覺と名けて世に出現したまひ、復此の處に於て諸弟子の爲めに廣く法を說きたまふ。復次に此の賢劫中に於て、復拘那含如來至眞等正覺有りて世に出現したまふ。爾の時彼の佛も亦此の處に於て廣く法を說きたまへり。次に復此の賢劫中に迦葉如來至眞等正覺世に出現し給ふ。迦葉如來も亦此の處に於て廣く法を說きたまへり。爾の時迦葉、我佛前に於て長跪して佛に白して言さく、「願はくは後釋迦文佛も亦此の處に於て、諸弟子の與に具足し說法せ令めん」と。此の處は便ち四如來の金剛の座と爲り、恒に斷絕せず。爾の時迦葉、釋迦文佛彼の座に於て便ち我に告げて言く、「阿難、昔此の座に賢劫の中に王有りて出世し、摩訶提婆と名く。乃至八萬四千歲王法を以て教化して之を訓へ、德を以て年歲を經歷し、便ち劫比に告げて言く、「若し我首を見て白髮なるもの有らば便ち時に吾に告げよ」と。爾の時彼の人王の敎令を聞きて復數年を經、王の首の上に白髮の生ずる有るを見、便ち前んで長跪して大王に白して曰く、「大王、當に知るべし、首の上に已に白髮を生ぜり」と。時に王、彼の人に告げて言く、「金鑷を捉取りて吾白髮を拔きて吾手中に著けよ」と。爾の時彼の人、王の敎令を受けて便ち金鑷を執り、前んで白髮を拔く。爾の時大王白髮を見已つて便ち此の偈を說く、

　今に於て我首の上に　已に衰耗の毛を生ず　天使已に來至せり　宜しく時に出家すべし

我今已に人中の福を食せり、宜しく自ち昇天の德を勉め、鬚髮を剃除して、三法衣を著け、信堅固

に使といふ。

【四二】 波羅捺(Bārānasi)は婆羅奈斯とも音譯し、摩竭陀國の西北、恒河の左岸にあつて、今のベナレスの地。

【四三】 三迦葉とは、優留毘羅迦葉(Uruvelākassapa)、那提迦葉(Nadīkassapa)伽耶迦葉(Gayākassapa)の三兄弟をいひ、結髮行者にして、その徒千人を擁し、佛陀の敎化を受けて、その徒と共に歸依するに至れり。

【四四】 釋翅は、釋迦族の都城迦維羅衞(Kapilavatthu)のこと。

【四五】 拘薩(Kosala)は、具には拘薩羅、佛陀時代の十六大國の一、中央印度の西北に位し、首府を舍衞城(Sāvatthi)といふ。

【四六】 迦尸(Kāsi)。北部印度の十六族の一、ベナレス地方に住する部族の名をそのまゝ用ひたもの、ベナレスの舊名。

【四七】 瞻波(Campā)。佛時代の印度の十六大國の一なる鴦伽(Aṅga)國の首都にして、恒河の流域にある都城。

【四八】 句留(Kurū)は、拘流、拘樓とも音譯し、拘薩羅の西北にありて、邊境に近き國なるが、經典によれば、佛陀は屢ゝこの地を訪れられ、一邑劍磨瑟曇(Kammāsadamma)

丘に一切諸法を囑累せざるや」。阿難報へて言く、「增一阿含は則ち是れ諸法なり、諸法は則ち是れ增一阿含にして、一にして二有ることなし」と。迦葉問うて曰く、「何等を以ての故に、此の增一阿含を以て優多羅に囑累して餘の比丘に囑累せざるや」。阿難報へて曰く、「迦葉當に知るべし。昔、九十一劫に、毘婆尸如來　至眞　等正覺世に出現したまひき。爾の時此の優多羅比丘は名けて伊俱優多羅と曰へり、爾の時彼の佛增一の法を以て此の人に囑累し、諷誦して讀ましめたまひき。此れより以後三十一劫に次で復佛有り、式詰如來至眞等正覺と名けたり。爾の時此の優多羅比丘は目伽優多羅と名けたり。式詰如來は復此の法を以て其の人に囑累し、諷誦して讀ましめたまひき。卽ち彼の三十一劫中に　毘舍婆如來至眞等正覺復世に出でたまひき。爾の時此の優多羅比丘は龍優多羅と名けたり。復此の法を以て其の人に囑累し、諷誦して讀ましめたまひき。迦葉當に知るべし、此の賢劫中に　拘留孫如來至眞等正覺世に出現したまひき。爾の時優多羅比丘は雷電優多羅と名けたり。復此の法を以て其の人に囑累し、諷誦して讀ましめたまひき。此の賢劫中に次で復佛有り　拘那含如來至眞等正覺と名けて世に出現したまひき。爾の時優多羅比丘は天優多羅と名けたり。復此の法を以て其の人に囑累し、諷誦して讀ましめたまひき。此の賢劫中に次で復佛有り、迦葉如來至眞等正覺と名けて世に出現したまひき。爾の時優多羅比丘は梵優多羅と名けたり。復此の法を以て其の人に囑累し、諷誦して讀ましめたまひき。迦葉當に知るべし。今釋迦文如來至眞等正覺世に出現したまふ。今此の比丘優多羅と名く、釋迦文佛　般涅槃したまふと雖も、比丘阿難猶世に存す。世尊は法を以て盡く以て我に囑累したまひ、我復此の法を以て優多羅に授與す。所以は何ぞや。當に其の器を觀ずべく、原本を察知して然る後に法を授く。、何を以ての故に、過去の時此の賢劫中に於て拘留孫如來・至眞・等正覺・明行成・善逝となし、世間解・無上士・道法御・天人師・佛・衆祐と號し、世に出現したまひき。爾の時王有り摩訶提婆と名く。法を以て治化し、未だ曾て阿曲ならず。壽命極めて長く、

【三七】六度とは布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六をいひ、度は波羅蜜(Pāramitā)の譯。波羅蜜は具には波羅蜜多といひ、到彼岸と譯し、これらの修行によつて迷ひの岸を離れて悟りの彼岸に到るの意。度と譯するも同じ意味。布施とは檀那(Dāna)の譯、他に惠み施すこと。持戒とは尸羅(Śīla)の譯。戒律を守ること。忍辱とは羼提(Khānti)の譯、堪へ忍ぶこと。精進とは毘梨耶(Viriya)の譯、努め勵むこと。禪定とは禪那(Jhāna)の譯、心を一點に專注すること。智慧とは般若(Paññā)の譯。

【三八】檀度とは、布施波羅蜜のこと。

【三九】身口意の三業のこと。身に行ひ、口に語り、意に思性すること。業は所作、行爲のことで、三行ともいふ。

【四〇】劫とは、劫波(Kappa)の略。印度の時間數にして、極めて長き長時と譯す。方四十里の城に芥子を滿し、三年每に一粒づつ取り去りて終にその凡てを取りつくすまでに要する時間をいふ。

【四一】結使とは、煩惱のこと。有情に結びつきて容易に離りを得しめざるより結と名け、よく有情の心を驅使するが故

沓和・阿須倫[七〇]・伽留羅[七一]・摩睺勒・甄陀羅[七二]等各〻白して言うさく、「我等盡く共に是の善男子・善女人の增一の尊法を諷誦し、受持し、廣演流布するを擁護して終に中絶せざらん」と。

時に尊者阿難、優多羅に告げて曰く、「我今此の增一阿含を以て汝に囑累せんに、善く諷誦して讀み、漏滅せ令むること莫れ。所以は何ぞや、それ此の尊經に輕慢有るものは便ち墮落して、凡夫の行ひとなすと爲す。何を以ての故に、此れ優多羅、增一阿含は三十七道品の敎へを出し、及び諸法は皆此れに由つて生ず」と。時に大迦葉、阿難に問うて曰く、「云何が阿難、增一阿含は乃ち能く[七三]三十七道品の敎へを出生し、及び諸法は皆此れに由つて生ずるや」と。阿難報へて言はく、「是くの如し、是くの如し、尊者迦葉、增一阿含は三十七品を出生し、及び諸法は皆此れに由つて生ず。且く置け、增一阿含は一偈の中に便ち三十七品及び諸法を出生するなり」と。迦葉問うて言く、「何等の偈中に三十七品及び諸法を出生するや」と。時に尊者阿難、便ち此の偈を說く、

[七四]諸の惡は作すこと莫れ　諸の善は奉行せよ　自ら其の意を淨うする　是れ諸佛の敎なり、

然る所以は諸の惡は作すこと莫れとは、是れ諸法の本、便ち一切の善法を出生す。善法を生ずるを以て心意淸淨なり。是の故に迦葉、諸佛世尊は身口意行を常に修めて淸淨なり」と。迦葉問うて曰く、「云何が阿難、增壹阿含獨り三十七品及び諸法を出生し、餘の四阿含も亦出生するや」と。阿難報へて言く、「且く置けよ、迦葉、四阿含の義は一偈の中に盡く諸佛の敎へ及び[七五]辟支佛[七六]聲聞の敎を具足す。然る所以は、諸の惡は作すこと莫れとは戒具の禁、淸白の行なり。諸の善は奉行せよとは心意淸淨なり。自ら其の意を淨うするとは邪の顚倒を除くなり。是れ諸佛の敎へなりとは愚惑の想を去るなり。云何が迦葉、戒淸淨なるもの〻意豈に不淨ならんや。意淸淨なれば則ち顚倒せず。顚倒なきを以て愚惑の想滅し、諸の三十七道品の果便ち成就することを得ん、已に道果を成ず、豈に諸法に非ざらんや」と。迦葉問うて曰く、「云何が阿難、此の增一を以て優多羅に付授して、餘の比

【二八】　梵釋は、梵天、帝釋天のこと。

【二九】　釋師は、釋尊のこと。

【三〇】　法身、三身の一、法とは積聚の義、又は依止の義で、卽如は眞如法性の理、身とは積聚の一法に萬法が積聚し依止するといふことをあらはしたもの。眞如法性そのもの〻顯現たる無色無形の理佛のこと。

【三一】　契經は（Sutta）の譯、佛陀の敎說を集錄したもの、三藏の一。

【三二】　律は、毘奈耶（Vinaya）の譯、戒律のこと。三藏の一。

【三三】　阿毘曇（Abhidhamma）は阿毘達磨とも音譯し、譯して論といひ、敎說を註釋したもの、三藏の一。

【三四】　三藏（Ti-piṭaka）經・律・論の三をいひ、佛敎聖典の總稱。

【三五】　尊者（Āyasma）とは佛弟子の尊稱、年少のものが年長の比丘に對して呼ぶにこの語を用ふ。

【三六】　大乘とは、摩訶衍那（Mahāyana）の譯、小乘の對、大きな乘もの〻意で、大苦を滅し、大利益を與へる敎法をいふ。

尋ぬるに明かに了り難く　持ち難く曉り難く明にすべからず　比丘の自ら稱する功德の業は今之を尊第一と稱すべし　猶し陶家の所造の器の如く　意に隨つて作す所狐疑なし　是の如く阿含增一の法、は三乘の敎化に差別無し　佛經微妙にして極めて甚深なり　能く結使を除くこと流河の如し　然して此の增一は最も上に在り　能く三眼を淨めて三垢を除く　其れ專心に增一を持すること有らば　便ち[五七]如來藏を總持すと爲す　正使今身結を盡さずとも　後の生に便ち高才の智を得ん　若し經卷を書寫するもの　繒綵花蓋を持して供養するものあらば　此の福無量にして計るべからず　此の法寶遇ひ難きを以ての故なり　此の語を說く時地大に動き　天華香を雨らして膝に至り　諸天空に在つて善い哉と歎じ　上尊の說きたまふ所は盡く宜しきに順ふ。契經は一藏、律は二藏　阿毗曇經を三藏となす　[五八]方等大乘の義は玄邃にして　及び諸の契經を雜藏となす　佛語を安處して終に異らず　因緣本末皆隨順す　彌勒諸天皆善しと稱へ[五九]釋迦文の經は久しく存することを得　彌勒尋で起ち手に華を執り　歡喜して持し用つて阿難に散ず　此の經は眞實如來の說なり　阿難をして尋で道果を成ぜ使む

と、是の時尊者阿難及び梵天諸の[六〇]梵迦夷天を將ゐて、皆來會して集り、[六一]化自在天諸の營從を將ゐて、皆來會して聚り、[六二]他化自在天諸の營從を將ゐて皆悉く來會し、兜率天王諸天の衆を將ゐて皆來會して聚り、[六三]豔天諸の營從を將ゐて悉く來會して聚り、[六四]釋提桓因諸の三十三天の衆を將ゐて悉く來集して會し、[六五]提頭賴吒天王乾沓和等を將ゐて悉く來會して聚り、毘留勒叉天王諸の厭鬼を將ゐて悉く來會して聚り、毘留跛叉天王諸の龍衆を將ゐて悉く來會して聚り、毘沙門天王[六六]閱叉[六七]羅刹衆を將ゐて悉く來會して聚りぬ。

是の時彌勒大士[六八]賢劫中の諸菩薩等に告ぐらく。「卿等諸の[六九]族姓子、族姓女を勸勵して增一の尊法を諷誦し、受持し、廣演流布して天人をして奉行せしめよ」と。是の語を說く時、諸天世人、乾

の神のこと、因陀羅はアーリヤ民族の守護神なりしが、佛敎に入つて正法の護持者となる。

【三五】　四大王(Cātummahārājikā)とも四天王ともいひ、六欲天の第一。須彌山の中腹に又由犍陀羅と名くる山ありて、此の山の頂四つに分れ、その各〻に王ありて世を護り東は提頭賴吒(Dhataraṭṭha)持國天と譯し、南は毗留勒叉(Virūḷhaka)、增長天と譯し、西は毗留跛叉(Virūpakkha)、廣目天と譯し、北は毗沙門(Vessavaṇa)、多聞天と譯す。

【三六】　彌勒(Metteyya)過去佛に對應して、佛滅後五十六億七千萬年の後に出現して佛となるもの、慈氏と譯し、今尙菩薩として兜率天に住む。兜率天(Tusita deva)は欲界六欲天の第四、須彌山の頂上十二萬由旬の所に在りて、七寶の宮殿あつて、諸天こゝに住し、內外の二院あつて內院に彌勒ありて說法すと。

【三七】　菩薩は菩提薩埵(Bodhisatta)の略、覺有情、大士などと譯し、三乘の一、大心有つて佛道に入りし人。四弘誓願を發し、六度の行を修し、上菩提を求め下衆生を化し、三祇百劫の修行を經て佛果を證する人、されど本生經

息に　心意堅固にして亂念無く　正使地動くも身を傾けず　此れを禪度と名けて棄つ應からず　智慧力を以て塵數を知るに　[四〇]劫數兆載にして稱るべからず　書疏の業聚意亂れず　此れを智度と名けて棄つ應からず　諸法は甚深にして空理を論ずるも　明し難く了り難くして觀ずべからず　將來の後進孤疑を懷く　此れ菩薩の徳は棄つ應からず　阿難自ら陳べて是の念あり　菩薩の行は愚なるもの信ぜず　諸の羅漢信じて解脱するを除く　爾乃ち信有れば猶豫することなしと　四部の衆道意を發し　及び諸の一切衆生の類　彼牢き信あつて狐疑せず　此の諸法を集めて一分と爲す　彌勒善しと稱し快哉と說く　大乘を發趣して意甚だ廣く　或は諸法[四一]結使を斷ずる有り　或は諸法の道果を成ずる有り　阿難說いて曰く此れ云何が　我如來の此の法を演べたまふを見るに　亦如來より聞かざる有り　此の法豈に疑ひ有るべきに非ずや　設し我見ると言ふも此の義非なり　將來の衆に於て便ち虛有り　今諸經を稱くに聞くこと是の如し　佛の處所の在城國土[四二]　波羅捺國に初めて法を說き　摩竭國に[四三]三迦葉を降したまひ　[四四]釋翅・[四五]拘薩・[四六]迦尸國　[四七]瞻波・[四八]句留・[四九]毘舍離　天宮・龍宮・[五〇]阿須倫　[五一]乾沓和等・拘尸城　正使經を說くの處を得ずも　當に原本[五二]舍衛に在りと稱すべし、吾の從ひ聞く所は一時の事　佛の舍衛に在しまし及び弟子[五三]祇洹精舍に善業を修む　[五四]孤獨長者の所施の園なり　時に佛中に在して比丘に告げたまはく　當に一法を修めて心を專一にすべし　一法を思惟して放逸なる無かれ　云何が一法ぞ謂く念佛　法念僧念及び戒念　施念と去り相次で天念　息念安般及び身念　死念の亂れを除くを十念と謂ふ　此れを十念と名け更に十有り次で後に當に尊弟子に稱くべし　初め[五五]拘隣を化す眞の佛子なり　最後の小なるものを[五六]須拔と名く　此の方便を以て一法を了り　二は二法より三は三より　四五六七八九十　十一の法了らざるはなし　一より一を增して諸法に至る　義豐に慧廣くして盡すべからず　一一の契經義亦深し　是の故に名けて增壹含と曰ふなり　今一法を、

く。出家して二十歲に至り初めて比丘となる。

【一七】羅漢は阿羅漢(Arahat)の略。應眞を見よ。

【一八】福田とは、教團のことをいひ、如來及び比丘に供養すれば福を生ずることよりこの名あり。

【一九】阿僧祇は(Asaṅkheyya)の音譯、無數又は無央數と譯し、印度に於ける數の名にして算數の及ばざる數の極をいふ。

【二〇】如來とは(Tathāgata)の譯語、如實の到達すべきところに到達せし人の意にして佛の十號の一、佛のこと。

【二一】世雄は、佛の尊稱。

【二二】三清淨眼と肉眼(Maṃsacakkhu)天眼(Dibbacakkhu)慧眼(Paññācakkhu)(?) Iti-vuttaka 61 三眼清淨なるをいふ。

【二三】梵天(Brahmadeva)。欲界六欲天の上に位する色界の初禪天、初禪天の主なる大梵天こゝに住してこの世界を領す普遍の原理なる梵の神格化したもの。

【二四】帝釋(Sakka)具には釋提桓因(Sakkadevindra)といひ、須彌山の頂上三十三天に住し、四天王及び三十三天を領し、正法の護持者、梨俱吠陀(Ṛg-Veda)の因陀羅(Indra)

生を照すこと日の初の如し　彌勒光を覩及び釋梵　收捨遲く無上の法を聞く　四部寂靜にして專ら心を一にし　法を聞くことを得んと欲して意亂れず　尊長迦葉及び聖衆は　直視して顏を覩る目眴がず　時に阿難經を說くこと無量なり　誰か能く備具して一聚と爲さん　我今當に爲に三分と作すべし：十經を造立して一偈を爲らん　[三一]契經は一分　[三二]律二分　[三三]阿毗曇經復三分なり　過去の三佛皆三分して　契經と律と法とを　[三四]三藏と爲す　契經は今四段に分つべし　先を增一と名け二を中と名く　三を名けて長と曰ひ瓔珞多し　雜經後に在つて四分と爲す　[三五]尊者阿難是の念を作さく　如來の法身は敗壞せず　永く世に存して斷絕せず　天人聞くことを得て道果を成ぜん　或は一法有り義亦深く　持し難く誦し難くして憶すべからず　我今當に一法の義を集むべし　一日の相從つて緒を失はじ　亦二法有り還つて二に就く　三法三に就くこと連珠の如く四法四に就き五亦然り　五法は六に次ぎ六は七に次ぐ　八法義廣く　九次第して　十法十より十一に至る　是の如く法寶終に忘れず　亦恒に世に處して久しく存在す　大衆中に於て此の法を集め　卽時に阿難座に昇る　彌勒善しと稱し快哉と說く　諸法の義合して宜しく之に配すべし　更に諸法有り宜しく部を分つべし　世尊の所說は各〻異り　菩薩意を發して[三六]大乘に趣く　如來　此の種〻の別を說きたまひ　人尊[三七]　六度の無極を說きたまふ　布施と持戒と忍と精進　禪と智慧力とは月初の如く　度無極に逮び諸法を覩る　諸有の勇猛頭目に施すに身體血肉惜しむ所無し　妻妾國財及び男女　此れを[三八]檀度と名けて棄つ應からず　戒度無極にして金剛の如く　毀らず犯さず漏失なく　心を持して戒を護ること坏瓶の如し　此れを戒度と名けて棄つ應からず　或は人有り來つて手足を截るも　瞋恚を起さず忍力强きこと　海の含容增減無きが如し　此れを忍度と名けて棄つべからず　諸有の造作善惡の行[三九]　身口意の三に厭足なく　人の諸行の道に至らざるを妨ぐ　此れを進度と名けて棄つ應からず　諸有の坐禪出入

四これにして、慈は拔苦、悲は與樂、喜は隨喜、捨は護ともいひ、怨親憎愛を越えて心の平等不動なるをいひ、慈悲と隨喜と平等の心を全世界に滿たし溢れしむるを無量心といふ。

【一〇】衆生とは(Sattva)の譯語、有情とも譯し、處々に衆多の生死を受くるが故に衆生といひ、或は衆多のものと共に生ずるが故に衆生と名く。

【一一】五道とは、地獄・餓鬼・畜生・人・天の五をいひ、有情の世界にありては此の五處に生死往來するが故に道と名け。又五趣といふ。

【一二】正覺とは、具には正等覺といひ、(Sammāsambuddha)の譯、正しく遍く證れるものゝ意。佛の十號の一。

【一三】最尊は佛の敬稱。

【一四】犍椎(Ghantā)は木製の厚き板にして合圖のために打つもの。

【一五】四部とは、四衆ともいひ、出家の男女の比丘・比丘尼・在俗の男女の優婆塞・優婆夷をいふ。

【一六】比丘(Bhikkhu)、乞士除饉などと譯し、男の家を棄てゝ出家の生活に入りしもの、常に乞食して淸く自活するより乞士といひ、よく戒行を持ち福田に飢饉なき故除饉と名

惟すらく正法は本 云何が流布して久しく世に在るや [一三]最尊は種々に言教を吐きたまひ 總持も懷抱して漏失せず 誰か此の力あつて 衆法の在々處々の因緣の本を集めん 今此の衆中智慧の士 阿難は賢善にして無量聞なり 即ち[一四]揵椎を擊ちて [一五]四部を集む [一六]比丘八萬四千衆盡く[一七]羅漢を得て心解脫し 以て縛著を脫して [一八]福田に處る 迦葉世を哀愍するが故に加尊恩過去の報ひを憶ひ 世尊法を授けて阿難に付したまへり願くは法を布演して長く世に存せんことを云何が次第して緒を失はず[一九]阿僧祇に法寶を集め 後四部をして法を聞くことを得已に聞きて便ち衆苦を離るゝことを得使めんやと 阿難便ち辭して吾堪えず 諸法は甚深にして若干種なり 豈に敢て[二〇]如來の敎へを分別せんや 佛法の功德無量の智なれば 今尊迦葉能く任に堪ふ [二一]世雄は法を以て耆舊に付したまへり 大迦葉今衆人の爲に 如來の在世に半座を請へりと 迦葉報へて言く是ありと雖も 年衰朽へ老ひて忘失多し 汝今總持智慧の業あり能く法の本をして恒に世に在ら使む 我今[二二]三清淨眼あり 亦復能く他心を知るの智あり 一切衆生種々の類 能く尊阿難に勝るもの有ること無し [二三]梵天下降し及び [二四]帝釋 護世の[二五]四王及び諸天[二六]彌勒兜率より尋で來集し [二七]菩薩數億計るべからず 彌勒[二八]梵釋及び四王 皆悉く叉手して啓して白さく 一切諸法は佛の印する所 阿難は是れ我法の器なりと若し法の存することを欲せざらしめんとは 便ち如來の敎へを敗壞すとなす 願はくは本の要を存して衆生の爲に 危厄を濟ふことを得て衆難を度せんことを [二九]釋師出世したまふも壽極めて短し 肉體逝くと雖も [三〇]法身在せば當に法本をして斷絕せざら令めたまふべし 阿難辭すること勿れ時に法を說かんことを 迦葉最尊及び聖衆・彌勒・梵釋及び四王 阿難に哀請して時に言を發し如來の敎をして滅盡せざらしむ 阿難仁和にして四等を具す 意轉微に入つて師子吼し 四部を顧眄し虛空を瞻、悲泣して淚を揮ひ自ら勝へず 便ち光明を奮つて顏色を和げ 普く衆

方の意。佛の十號の一。

【三】迦葉(Kassapa) 佛十大弟子の一、具さには摩訶迦葉(Mahākassapa) といひ、佛弟子中上行第一と稱せられ、第一回の經典結集の上首となる。

【四】阿難は、具には阿難陀(Ānanda)といひ、釋尊の從弟にして、出家し、二十五年間世尊に侍し、多聞第一、記憶第一と稱せらる。

【五】善逝(Sugata)とは來る祥瑞なりの義で、涅槃の岸に逝きし人、佛の十號の一。泥洹(Nibbāna)涅槃とも音譯し、一切の煩惱の滅盡によつて內外の繫縛を離脫した理想の境涯をいふ。

【六】舍利は(Sarīra)の音譯。遺骨のこと。

【七】拘夷とは(Kusināra)の音譯、具には拘尸那羅といひ、佛の入滅の地、末羅(Mallā)人の都城。

【八】摩竭、(Magadha)の音譯、具には摩竭陀、當時の印度の十六大國の一、釋迦族の南、拘薩羅の東南にありて王舍城がその首都。今の佛陀伽耶を中心として廣がれる大國。

【九】四等(Cattāryappramāna-cittāni)は四無量心ともいひ、慈(Mettā)、悲(Karuṇā)、喜(Muditā)、捨(Upekhā)の

を護り、律と同じからしむるは此乃ち玆邦の急なるものなり、斯れ淳々の誨、幸に藐々として聽く怱んことを、廣く見て護禁を知らざるは乃ち是學士の[二四]通中の創なり、[二五]中本起は康孟祥の出、[二六]大愛道品を出すは乃ち是れ禁經を知らざるなり。[二六]比丘尼法は慷く切り、直ちに割きて之を去るに堪ゆ。其の此乃ち大に鄙み痛恨すべきものなり。此の二經は有力の道士乃ち能く見て以て心を著すべし。其の輕忽にして意を爲さざる者の如きは幸に我同志鼓を鳴らして之を攻めて可なり。

卷の第一

東晋罽賓三藏瞿曇僧伽提婆譯

序品第一

自ら[一]能仁第七仙に歸しまつり　賢聖無上の軌を演說せん　永く生死長流の河に在り　[二]世尊は今爲に黎庶を度したまふ　尊長[三]迦葉及び衆僧　賢哲[四]阿難に無量聞なり　[五]善逝泥洹したまひて[六]舍利を供し　[七]拘夷國より[八]摩竭に至る　迦葉端思して[九]四等を行ず　此の[一〇]衆生の類は[一一]五道に墜ち　[一二]正覺道を演べて今世を去りたまふ　尊の巧みなる訓へを憶ひて悲泣を懷く　迦葉思

安と同學の人。

【一五】 僧碧、姓は傅氏、北地泥陽の人。

【一六】 阿城の役とは、東晋の太元九年(建元二十年 A.D. 385)慕容泓、慕容沖兵を起し、冲遂に泓の兵を倂せ、阿房城に據つて帝と稱し、同年姚萇も亦北地より起つて秦王と稱し、後符堅を執へて長安に據れり、この間に生ぜし戰爭のことか、阿房城は今の陝西省關中道咸陽縣に屬す。

【一七】 僧伽跋澄譯鞞婆沙論十四卷。

【一八】 同人等譯の尊婆和須蜜菩薩所集論二十卷。

【一九】 同人等譯の僧伽羅刹所集經三卷。

【二〇】 出經とは、譯經のこと。

【二一】 應眞とは、阿羅漢(arhā)の譯。應供とも譯し、供養を受くべき資格のある人の意、聖者のこと。

【二二】 沙彌とは (sāmaṇera) の音譯、出家して一人前の比丘になる前をいひ、七歲より沙彌となることを許され、二十歲に至り具足戒を受けて比丘となる。

【二三】 白衣とは、白衣の生活のもの、即ち在俗のもの、出家は黄衣を纏ひ、官吏は色衣を纏ふ。

【二四】 通中の創とは、共通の創の意。

【二五】 中本起經二卷、後漢建安年間康孟祥曇果の共譯。

【二六】 中本起經卷下、瞿曇彌來作比丘品第九のこと。

【一】 能仁とは、釋迦(Sākiya)の譯語、「能力ある」の意より能仁と譯したもの、過去七佛の第七に位する故第七仙といひしもの。

【二】 世尊とは薄伽婆(Bhagavā)の譯語、世に尊ばれる

增壹阿含經序

晉　沙門　釋道安　撰

四阿含の義は中阿含に同じく、首に其の旨を明すを以て、復重ねて序せず。增壹阿含とは、此法條貫くに數を以て相次するなり。數十に終り、其に一を加へ令む。故に增一といふ。且數々皆增す、增すを以て義と爲すなり。其の法たるや、多く禁律を錄し、繩墨切勵乃ち度世の檢括なり。外國の　巖岫の士江海の人、四阿含に於て多く玆を詠味す。外國の　沙門曇摩難提なるものあり、兜佉勒の人、齠齔にして出家し、執與廣聞にして、二阿含を誦し、故きを溫ねて日に新なり、諸國を周行し、土として涉らざるはなし。秦の建元二十年を以て長安に來詣す。外國の鄉人咸皆之を善しとす。武威の太守　趙文業求めて　出さ令む。佛念譯傳し、曇嵩筆受す。歲　甲申の夏に在りて出し、來年の春に至りて乃ち訖り、四十一卷となし、分ちて上下部となす。上部二十六卷全て遺忘なく、下部十五卷は其の錄偈を失ふ。余　法和と共に之を考正し、僧䂮・僧茂漏失を助校し、四十日にして乃ち了る。此の年　阿城の役あり、皷を近郊に伐つ。而して正專斯業の中にありて、全て二阿含一百卷、鞞婆沙、婆和須蜜、僧伽羅刹を具し、此の五大經を傳ふ。法東流してより　出經の優なるものなり。四阿含は四十　應眞の集むる所、十人一部を撰し、其の起盡に題して錄偈を爲る、法世に留まること久しくして遺逸散落せんことを懼ればなり。斯の士前に諸經を出す。班々として其の中に有るものを今二阿含となす。各　新錄一卷を爲り、其の故目を全うして其の得失を注し、經を見て之を尋ぬるに差易からしむ。上下部を合して四百七十二經、凡て諸の學士此の二阿含を撰するに其の中往々律語あり、外國の　沙彌　白衣と共に視るに通ぜざるなり。而今已後幸に共に之

【一】　道安の序は宋本、元本、明本に載するもの、今は缺本となれる曇摩難提譯に附せられし序文にして、此譯に附すべきものに非らず。
【二】　繩墨は墨繩のこと、切厲は、はげしいこと。度世は世を濟度すること。
【三】　巖岫の士、江海の人とは、隱遁生活をなす人。
【四】　沙門とは、桑門又は沙門那とも記し(śramaṇa)の音譯、勤息又は止息と譯し、家を棄てゝ道を求めるもの、出家。曇摩難提は梵語(Dharmanandinの)音譯、法喜と譯す。
【五】　兜佉勒とは(Tukhāra)の音譯、月支國のこと。月支國の人。
【六】　齠齔とは、若年のこと。
【七】　執は熟に通じ、執與とは習熟參與の義と見るべきか。
【八】　中阿含と增壹阿含のこと。
【九】　趙文業は符堅の祕書郎趙政のこと、字を文業といひ、洛陽清水の人。
【一〇】　令出、飜譯せしむると。
【一一】　佛念とは、竺佛念のこと。支那涼州の人。
【一二】　曇嵩は、出三藏記集卷十三同卷十高僧卷一はいづれも慧嵩とせり。
【一三】　甲申は、建元二十年。
【一四】　法和は、滎陽の人、道

昭和四年三月中浣

洛北紫野の僑居にて

譯者　林　五邦識

するのを見、佛は比丘等に、互に類を以て集り、惡友を近づけること勿れと誡しめ、象舍利弗一度在家生活に還えつたが、一日二人の婦女の肩に凭れてゐるところを、行乞姿の阿難に見られ、恥ぢて再び出家したこと、十二因緣の說法、勢羅・翅甯の二梵志の敎化、一食の法のこと、習行・誓願の二種の沙門のこと、提婆達多世尊に危害を加へんとして却つて墮獄することを說いたものである。

禮三寶品　第五十　佛寺を禮拜する十一事、法と僧とを禮するに十一法あること、佛大天王の本生を物語つて法を付囑すること、末佉梨等四人の墮獄の果報、五道に趣く因と涅槃の道果のこと、智薰增長の五時、破群の比丘の比丘尼と共に遊樂するを誡しめること、生漏梵志に三世の劫數無限なることを說き、一異比丘に大小の二劫を說くことを說くものである。

非常品　第五十一　衆生の流轉と、無常想を思惟すべきことゝ、清淨音響王の本生物語、五弊のこと給孤獨長者の四子の歸依、舍利弗・阿難・長者の病床に十二因緣を說く、長者の生天、給孤獨長者の嫁善生のために、婦人の四種の型を說いて敎化せられしこと、舍利弗に出家學道するためには、豪貴の家に生るべきことを說いたものである。

大愛道般涅槃品　第五十二　大愛道比丘尼五百の比丘尼と共に、世尊の入滅を見るに忍びずとして、世尊に先立ちて入滅すること、婆陀比丘尼の說法、劫數の長いことを、一芥子と石とに喩へて說き給ふこと、聞法に五種の功德のあること、施主の五功德、福田の勝劣、波斯匿王の懺悔、波斯匿王の十夢のことを說いたものである。

本經はもと四百七十一といふ多數の獨立した小經の類聚したものであつて、その間何等の連絡の存しないものであるが故に、その概要を敍するにあたつても、單にその項目をあげるにとゞめたものである。從つてその敎說の內容の整理といふことも、本經の上にのみ限るべきものでないから、こゝには省略することゝした。

○

本譯書は大正藏經を底本としたものであるが、その字句の上に、適宜その註に從つて、他の宋・元・明・聖語藏によることゝした。

註釋に於ける原語は、ともあれ本經は巴利五尼柯中に、それに該當するものゝ存することから、特に梵語と記さない限りは、悉く巴利の原語を示したものである。

本書の譯出にあたり、刊行豫定の狂ひから、本書の刊行豫定を早めたがために、十分の推敲を經ることの出來なかつたことは遺憾の至りである。終りに櫻部文鏡・佐々木秀英二君の助勢を待つたことを附して、こゝに感謝の意を表する。

を說き、最後の弟子、須跋の出家、入涅槃のこと、佛法中に八未曾有法のあること、地震の八因、八大人念・八衆・布施の勝劣及び八種の功德あること、地獄に趣く道と涅槃に到達する道とに八種あることを說いたもの。

馬血天子品　第四十三　馬血天子のために八正道を說き、八關齋法のこと、牧牛者難陀への教化、提婆達多のことを例示して利養に貪著するを誡しめ、魔波旬の降伏のことゝ、阿闍世の苦悶と佛陀の教化、執着すべからざる世間の八法、生死に流轉しない八種の人のことを說いたもの。

九衆生居品　第四十四　九種の衆生の居處のこと、嚫願の九種の德、惡比丘に九法あること、比丘の九法を成就すべきこと、婦人に男子をして囚はれしめる九法あること、一切諸法根本經のこと、佛親しく病比丘を看病せられしこと、世に尊重すべき九種の人あること、滿呼王子の懺悔、釋提桓因への說法を說いたもの。

馬王品　第四十五　摩醯提利婆羅門はその娘を佛に侍せしめんと請ふも佛は受け給はず、一比丘その女を得んと請ふたので、婦人に九の惡法あることを說いて誡しめ、羅刹女の本生を物語られしこと、舍利弗と目犍連との爲に、長大を得ざる九法と成就を得る九法とを說くこと、諸比丘のために善法を增長し、惡法を滅するために梵行を修すべきこと、世間の四食と出世間の五食のこと、慈心の行ずべきこと、空三昧が三昧の王なること、外道世尊を妬み、尸利掘長者をそゝのかして毒殺せしめんとし、却て歸依するに至つたことを說いたものである。

結禁品　第四十六　禁戒に十事の功德あること、聖者の居る所に十事あること、如來の十力、國家に親近するに十種の非法あること、國王に十法あること、比丘の十法、十論・十義・十演のこと、十想を修するものは、有漏を盡くして無漏を成ずることを說いたものである。

善惡品　第四十七　生天と墮獄と涅槃に到達するに十法のあること、十種の惡業の報ひと、十事の功德と、羅云の爲に平等の施を說くと、拘頭比丘の爲に十善の法を說くと、地獄の受苦、壽命の長短を說いたものである。

十不善品　第四十八　十惡業報のこと、過去七佛の制戒のこと、彌勒出現の時の國土の狀況、弟子の多少のこと、過去七佛の種姓、說法、その父母、侍者、菩提樹、壽命のこと、師子長者の供養、舍利弗の神力のことを說いたもの。

放牛品　第四十九　放牛の法の十一法に因み、比丘に佛道を知ると知らざるとに十一の得失あることゝ十二因緣皆十一法より出づること、舍利弗・目連等と共に經行し、提婆達多も亦他の比丘と共に經行

た湯施に功德のあること、在家白衣の生活に還えらんとする一比丘を誡しめるに、婦女に五種の惡あることを說き、多耆奢比丘の證悟、僧伽摩長者のこと、を說いたもの。

聽法品　第三十六　聽法の五功德、浴室を造る五種の功德、楊子を人に施すの五功德、屠牛者の業報、二龍佛の母摩耶に說法せんとして三十三天に昇らんとするを妨げ、目連の爲めに降伏せしめられたこと、忉利天に於ける說法のことを說いたもの。

六重品　第三十七　六重の法、目連東方奇光佛如來のところで偈を說くこと、跋耆國師子園に於ける舍利弗の說法、呪願の六種の德、墮獄の六法、生天の六法、涅槃に到達すべき六法のこと、第一最空の法、生漏梵者への說法、一尼犍子、馬師比丘の導きにより、遂に佛の說法に法眼淨を得たこと、を說いたもの。

力品　第三十八　六種の凡常の力のこと、無常想を思惟すべきこと、外の六塵と內の六入とのこと、六入の滅すべきこと、如來は施と教誡と忍と法說義說と衆生を將護することゝ、無上正眞道を求めるに倦くことのないこと、指鬘外道の歸佛の物語、靈鷲山等の諸山の異名について、六情を六種の虫に喩へること、無常想を思惟して、六情を斷ずべきこと、治化について波斯匿王への說法、如來の六種の功德、佛毘舍離の疫病流行に惡鬼を退治せられしこと、六師外道のこと、六情を滅すべきことを說いたもの。

等法品　第三十九　法を知り、義を知り、時を知る等の七法と、晝度樹の七喩を賢聖の弟子に喩へ、七事水喩の人と、聖王の七法と、七識の住處、七覺意、轉輪聖王の七寶と、その七寶成就の相と、童眞迦葉の證悟と、滿願子の舍利弗のために七車の喩を說くことを說いたもの。

七日品　第四十　世界の成立と破壞のこと、跋耆國人の七法を具足することに因み、七丘の七不退の法、貪・瞋等の七使のこと、無上の福田たる人に七種あること、十念の修すべきこと、有漏を除くの法、七功德を成ずる法、死想を思惟すべきこと、波斯匿王のために七尼犍子と七裸形の人と、七黑梵志と七裸形の婆羅門を說く、迦旃延の說法とを說くもの。

莫畏品　第四十一　釋種の摩訶男への說法、那伽波羅比丘の婆羅門教化、七處の善を觀じて四法を察すべきこと、舍利弗諸比丘のために八種の道と七法とを說くこと、佛迦葉と阿難とに法を付囑することを說いたもの。

八難品　第四十二　佛の出世に遇ひながら、法を聞くことの出來ない八難のあること、八大地獄のこと、入滅の近づくや、阿難に四未曾有の法のあること、阿難の問ひに答へて、婦人に對する態度のこと

の坐の說法、地・水・火・風の四界のこと、經・律・阿毘曇・戒のこと、四禪・四沙門果のこと、四種の人と四種の華に喩へることを說いたもの。

苦樂品　第二十九　世に先苦後樂・先樂後苦・先苦後苦・先樂後樂の四人あること、身は樂む、心は不樂、心は樂で身は不樂、心身共に不樂、身心共に樂の四人有ること、四梵の福のこと、四食のこと、四辯のこと、四の不可思議のこと、四神足、四起愛のこと、印度の四大河・四姓・四等心のことを說いたもの。

須陀品　第三十　佛と須陀比丘との問答のこと、世尊の說法中に脚を舒べて居眠りをした老比丘を誡められたこと、滿財長者子、給孤獨長者の娘修摩提を娶り、それが機緣となつて、佛に歸依するに至つたことを說いたもの。

增上品　第三十一　生漏婆羅門への說法、一比丘のために四事の法を說くこと、四事の行跡、佛の正法中に、慈・悲・喜・護の四園と四禪の四池のあること、八正道の筏に乘つて四流を涉ること、人天に生れ、又涅槃に到達するに各々四事のあること、佛の成道前後の生活、四流と四樂、無常想の修すべきこと、目連と阿難の弟子との諍ひを說いたもの。

善聚品　第三十二　五根・五蓋・禮佛の五功德、閻羅王の五天使と罪人の地獄に於ける苦相と、佛と阿難との問答、天人の五衰と、佛の滅後に那羅陀比丘、文荼王の夫人の死を緣として王に說法すること、病人及び看護人の心すべき五事、布施の五功德、布施の五種、布施の時に五事あることを說いたもの。

五王品　第三十三　波斯匿王を初め五王が互に論議し、決せずして佛に裁決を仰いだこと、月光長者、子を天に祈り、一兒を得、尸婆羅と名け、佛尸婆羅の本生を物語らる、次に五の戰鬪人に五事あること、掃地の法に五種あること、長く遊行するものに五難あり、多く遊行せざるものも五功德あること。比丘の五種の非法、一處に住せざる人に、五功德あること、大樹の火に燒かれるを見て、破戒の比丘の苦に喩へて誡しめられることを說いたもの。

等見品　第三十四　舍利弗諸比丘に五盛陰を說くこと、波斯匿王の子流離のために、釋迦族の滅亡に至る經過、天人五衰の相、出家沙門の愧ずべき五法、王舍城に於ける頻毘娑羅王への說法、世に得べからざる五事、五種の教化し難き人、三十三天と阿須倫との戰ひのこと、五陰のこと、世に人類の減ずるは所行の非法によることを說いたもの。

邪聚品　第三十五　邪聚・正聚・佛の出現に五事あること、五惠施のこと、婦女の五力、五種の欲想のあること、人に對して禮すべからざるの五事、優頭槃の奉つ

かくべきことゝ、風・痰・冷の三病に三良藥あることゝ、身・口・意の三惡行を棄て三善行を修すべきことゝ、欲・色・痛の三を遠離すべきことゝ、身・命・賊の三不牢要を說いたもの。

三供養品　第二十二　佛と阿羅漢と轉輪聖王とは供養を受ける資格のあること、三善根、樂と苦と不苦不樂の三痛、婦女と呪術と邪見とは世に隱れて妙であるが、日と月と如來の語とはこれ三世の法であつて、露れて妙であること、三有爲相、愚者の三相三法、戒・定・慧の三法を覺知せざるが故に三惡趣に墮在すること、三種の敬愛の法、貪欲・睡眠・調戲の三法は墮獄の因となること、貪欲・飲酒・睡眠の三法の遠離すべきことを說いたもの。

地主品　第二十三　波斯匿王世尊を供養し、ために地主王の物語をせられること、釋提桓因、婆拘盧比丘を試みること、二十億耳比丘の敎化、婆提長者の本生物語、三種の香のこと、世尊提婆の乞食するを見てこれを避け、阿難を誡しめ給ふこと、戒・定・慧の賢聖の三法・三不善根・三聚・三觀想を說くもの。

高幢品　第二十四　幢のこと、毘沙鬼のための說法、同族の釋迦族のための說法、一比丘のために五蘊の無常變易を說くこと、成道後鹿野苑に五比丘を敎化し、次で三迦葉を歸服せしめること、三齊の法のこと、信・財・梵行の三現在に存すれば福を獲ること。長壽王の本生物語によつて、拘深比丘の爭ひを好む心を誡められること、身邪・戒盜・疑の三結使のこと、空・無願・無想の三三昧のことを說いたもの。

四諦品　第二十五　苦・集・滅・道の四聖諦、四種の饒益、如來出現の四未曾有の法、擔(五盛陰)のこと、卵・胎・濕化の四生、有結と無結、四果、空中の隨嵐風、四種の鳥と雲とのことを說いたもの。

四意斷品　第二十六　四意斷の修むべきこと、三十七道品の法は不放逸を第一とすること、波斯匿王のために四種の人あること、世の人に敬愛せらるる四法と然らざる四法のあること、及び老病死無常の道理を說き給ふこと、無常と苦と無我と涅槃とを說くこと、婆迦梨比丘の自殺のことを說いたもの。

等趣四諦品　第二十七　四聖諦の義、欲・見・戒・我の四受と、給孤獨長者の爲に布施の眞義を說き、菩薩の四法に六波羅蜜を具足すること、四無所畏のこと。四衆は多聞を第一とすべきこと、四種の金翅鳥のこと、施に四功德のあること、四種の人の世の福田たることを說いたもの。

聲聞品　第二十八　目連・迦葉・阿那律・賓頭盧の四比丘が跋提長者及びその姉難陀を敎化すること、欲・瞋・痴・利養の四結の滅すべきこと、手阿羅婆長者への四種

一結の染著心を遠離すべきこと、帝釋天をして須菩提比丘の病を訪はしめ給ふことを説いたもの。

五戒品　第十四　五戒を誡しめ、五善を勸めたもの。

有無品　第十五　有無の二見と、法財の二施と、有法・有財の二業と、法・財の二恩と、智愚に二あることゝ、智慧と滅盡の二法と、力と無畏との二法と、二因二緣あつてよく正見を起すことを説いたもの。

火滅品　第十六　難陀比丘のこと、有餘・無餘の二種の涅槃、善・不善と、邪・正の二法と、燭明の法と、忍・思惟の二力と阿那律の説法と、羅云を誡め給ふことを説く。

安般品　第十七　羅云のために安般法を説いて四無量心の修むべきことを勸め、佛と轉輪聖王と辟支佛と漏盡阿羅漢の出現し難いこと、煩惱と不煩惱の二法、邪見と正見のこと、正見の尊ぶべきこと、頂生王の物語を引いて欲愛に厭くことなきを誡しめ、善・惡の二知識のこと、周利槃特と舍利弗とが世典婆羅門を教化すること、阿闍世が提婆に勸められて、父王を弑することを説いたもの。

慚愧品　第十八　慚愧の二法、厭足の有無、法財の二施、迦葉の梵志の婦人教化、佛、阿闍世の放つた醉象の降伏、難陀比丘の梵行に堪えずして在家生活に還えらんとするを誡め給ふこと、佛は叔母大愛道夫人の爲に法を説き給ふこと、是非の二法と福罪の二報について説いたもの。

勸請品　第十九　成道直後の梵天への説法と、鹿野苑に於ける初轉法輪と、釋提桓因のために、斷欲の法を説くこと、精進の意あるものとないものとの二法と、貧家と豪家に生れる原因となる二法と、拘絺羅の須深梵志婦一の説法と、上色婆羅門に對する迦旃延の説法と、よく法を説く人と、よく聞く人とは共に遇ひ難きこと、闍婆婆利女がその林園を教團に獻上したことを説いたもの。

善知識品　第二十　善知識に親しむべきこと、五百の比丘の提婆達多に誘惑されて教團を去つたこと、曇摩留支比丘の本生物語、人に師子王の如きものと、羊の如きものとの二あること、反復を知るものと知らざるものとのこと、精進と怠慢、止と觀との二法、恭敬と精進の二法、法を説くに難易あること、父母を供養するの功德、朱利槃特が佛の拂塵の教へによつて證悟したこと、怨憎と共會の二法について説いたもの。

三寶品　第二十一　三寶歸依の功德と、施と平等と思惟との三福業、妊娠の三因緣と、慈心を起して三處に意を安んずべきこと、身口意の三業に善をなすべきことゝ、諸根寂靜と、飲食に節度を知り、經行を失はざることの三法を、常に心に

放牛品…2、4、6（但し、卷四十七の首部）
禮三寶品………1－3、5、9、10
非常品………3、5、6、7、10
大愛道般涅槃品……1、5、7

これによつてこれを見れば、他の何れの巴利文の中にも存しないものが、序品の外に、四百七十一經中百七十六經（後半の缺くものを算入せず）であつて、その他の諸經は巴利尼柯耶中の相應部・中部・長部・小部、或はその註疏、律文中のものに相當するものである。その摘出は今は煩を避けて省略する。

四　諸品概要

序品　第一　本經編纂の由來を述べて、阿難がその弟子優多羅にこれを付囑すること、並に優多羅の本生譚を敍べたもの。

十念品　第二　佛と法と聖衆と、戒と施と天と休息と安般と身と死とを念ずることを說く。

廣演品　第三　前の十念を更に布衍したもの。

弟子品　第四　阿若拘隣を初め百比丘について說いたもの。

比丘尼品　第五　瞿曇彌を初め五十比丘尼について述べたもの。

淸信士品　第六　三果商客を初め四十人の在俗の男の信者について述べたもの。

淸信女品　第七　難陀婆羅を初めとして、三十人の在俗の女の信者について述べたもの。

阿須倫品　第八　偈に十經の所說の要點をあげて、「須倫と、益と、一道と、光明と、闇冥と、道品と、沒盡と、信と、熾盛と、無畏等」なりと敍べてゐる。

一子品　第九　一子一女子の喩をあげて比丘等を誡しめ、更に善道を勸め、色欲と亂想の過失と、觀不淨想を說いたもの。

護心品　第十　不放逸を說き、布施の意義を明にし、福報を說き、信を勸めて、心に善本を念じ、佛を念ずべきことを說いたもの。

不逮品　第十一　貪欲・瞋恚・愚痴・慳貪を滅せば不還果の證果を得ること、更に財物に執着する心と妄語とを誡しめ、提婆達多の墮獄を豫言せられたもの。

一入道品　第十二　心を專注するを一入といひ、八正道を道といひ、この一入道によつて五蓋を滅し、四意止を修すべきことを說き、更に身口意の三業に慈悲を勸め、如來を供養し、瞻病の功德、閑靜處に住するの功德、これによつて迦葉の三果を成じたこと、利養の證果の障碍となること、惡の遠離と、利養の過失について說いたもの。

利養品　第十三　利養を貪つたがために、修羅陀比丘が在俗の生活に還えつて、死して墮獄したことと、味欲の滅すべきこと、摩利夫人によつて波斯匿王の導かれたこと、那憂羅公長者への說法と、二十

これによつて見れば、漢譯増壹阿含中の諸經にして、巴利増支部中の諸經に該當するものは四百七十一經中百五十六經である。

次に漢譯増壹阿含中の諸經にして、巴利の増支部はもとより、他の諸尼柯耶、及びその註疏の中にも全く存しないもの、いはゞ漢譯増壹阿含にのみ存するものは、

の十不善品の第二經に「我釋迦文佛の壽命極めて長し、然る所以は肉身滅度を取ると雖も、法身存在す」といふが如き、大乘涅槃經の法身常住說の現れるに見ても、屢々當來佛としての彌勒のことの現れるに見ても、著しき變遷を示すものであつて、大乘的色彩を極めて濃厚に帶びるものであり、その他卷十八、四意斷品の第九經に、「如來に四不可思議有り、小乘の能く知る所に非らず」といふが如きは、明かに大乘に對する小乘を意味し、これを輕んずる傾向を帶びるものであり、或は卷二十九、六重品の第二經には、目連が東方し恒河沙佛土の奇光如來のもとに往詣するが如きは、淨土に關する思想の片鱗を示すもので幾多の教理の變遷の迹を見るものである。從つて增壹阿含の現形は、巴利の增支部に見るが如き、增一的傾向を帶びた經典に、佛說の敍述を附加し、次第に發展するに至つたもので、大乘經典の成立以後に於て完成したものといふべく、その年代は、その譯出の成りしは西紀三八四年であるから、恐らくその原形は西紀二三世紀の頃に存したものゝやうである。

然してこれが部派の所傳であるが、俱舍稽古上には以て大衆部の所誦とするのであるが、南傳「論事」(Kathāvatthu)の上には、各部派ともそれぞれの主張の證權として、五尼柯耶を引證するを見れば、五尼柯耶、四阿含とも、諸部派の通誦と見るべきものであり、從つて漢譯增壹阿含の如きも亦、諸部派の等しく通誦したもので、部派の教理の發展につれて、增壹阿含も亦現形の如き發展を見るに至つたものである。

三　漢巴對照

巴利增支部は教說を整理して、一法より十一法に至る高次的に單純に類聚せられたものであるが、漢譯增壹阿含にあつては、先きにも述べしが如く、多くの記事の附加竄入を見るが故に、殆んどその增壹の體裁を失ふものであつて、漢巴の諸品の對照を試みる時は、明かにそれらの竄入の痕が見られるのである。例へば十念品・弟子品・比丘尼品・清信士品・清信女品の如きも、巴利文のそれにあつては、殆んどその列名に近いものであるが、增壹にあつては一々に附加の記事を見、十念品の次の廣演品に於て、十念を更に布衍するが如きは、巴利文には全く存しない所である。今增壹、增支の諸品對照の結果を見るに、漢譯增壹阿含中の諸經にして、巴利增支部中に存するものは、

十念品……1—10
弟子品……1—10
比丘尼品……1—5
清信士品……1—4
清信女品……1—3
阿須倫品……2、4、7、10
一子品……5—10

―各一一經。第三品―二〇經。の三品四十三經がこれであつて、その各品の品名は、その第一經の內容から取つて附したものである。

次にその成立年代であるが、南傳の律の小品(Cullavagga XI.)によれば、佛滅直後に、大迦葉を上首とする五百の長老の比丘によつて、王舍城に於て行はれた第一回の結集の時、既に二種の律と共に五尼柯耶の結集を見たといひ、爾來第二第三の結集を經、その間その三藏と註釋とは、いづれも口授相傳によつたものであつて、巴利三藏の書寫は西紀前八五年、セイロン王ヴツタガーマニ (Vaṭṭagāmaṇi) の治世に初めて行はれ、現存の巴利三藏はその當時のものであるといはれてゐるが、その間原典に幾多の改變を加へられてゐることであり、後世の附加竄入をさへ免れないことであるから、現存のものが果してその當時のものであるかは甚だ疑しいことであり、殊に五尼柯耶 (Pañca Nikāya) 中にあつても、その輯錄編纂の方法よりしても、その成立年代の最も新しい增支部が、佛の入滅直後の結集に於て編纂せられたといふが如きは、全く信ずべくもないことであつて、その成立は、增一的輯錄の原型ともといふべき巴利長部第三十四經の十上經(Dasuttara S.)、漢譯長阿含卷九の十上經、異譯の長阿含十報經(安世高譯)及び巴利長部第三十三經の衆集經(Saṅgīti S.)、漢譯長阿含卷八の衆集經、異譯の大集法門經(施護譯)及び長阿含卷九の增一經の如き經典が、漸次發達して現存の如き增支部を形成するに至つたものと見るべきである。然して巴利五尼柯耶は、西紀一世紀頃に成つた彌蘭陀問經 (Milinda Pañha S.) 中にその名の出でるに見ても、その成立は此の經の以前なることが知られ、從つて尼柯耶中、その成立の最も新しいものといはれる增支部も亦、既にギリシヤ王メナンドロス (Menandros. Pali, Milinda) の出現時代、卽ち西紀前一世紀の前後にはその原形を存してゐたもののやうである。

漢譯四阿含は巴利五尼柯耶の成立よりも、更に後るゝものであるが、四阿含中の增壹阿含に至つては、最もその成立年代の新しいものであつて、單純に一法二法等とその名目をあげる巴利增支部に比して附加竄入のあることは素より、これを對照する時は、漢譯增壹阿含中に存するものにして巴利增支部の諸經に該當するものは僅かに百五十一經に過ぎないものであり、既にその序品に至りては、こは明に後人の竄入であるが、大乘經典にいふ經典書寫の功德を說き、或は「世尊の說く所各々異り、菩薩意を發して大乘に趣く」といひ、又「方等大乘の義は玄邃なり」といふが如き、卷二の廣演品第一經には如來の金剛身を論じ、卷四十四

第十品(Asura-V.)°第十一品(Valāhaka-V.)°第十二品(Kesi-V.)° 第十三品(Bhaya-V.)°第十四品 (Puggala-V.)° 第十五品 (Ābhā-V.)° 第十六品(Indriya-V.)° 第十七品(Paṭipadā-V.)° 第十八品(Sañcetanika-V.)° 第十九品 (Yodhajīva-V.)° 第二十品 (Mahā-V.)° 第二十一品(Sappurisa-V.)° 第二十二品(Sobhana-V.)° 第二十三品(Sucarita-V.)°第二十四品(Kamma-V.)° 第二十五品 (Āpatti-V.)° 第二十六品 (Abhiññā-V.)－各一〇經° 第二十七品－一一經。

の二十七品二百七十一經がこれである。

第五集(Pañcaka-Nipāta)

第一品 (Sekhabala-V.)° 第二品(Bala-V)°第三品(Pañcaṅgika-V.)° 第四品 (Sumanā-V.)° 第五品(Muṇḍarāja-V.)° 第六品(Nivaraṇa-V.)° 第七品(Saññā-V.)° 第八品(Yodhājīva-V.)° 第九品(Thera-V.)° 第十品 (Kakudha-V.)° 第十一品 (Phāsuvihāra-V.)°第十二品 (Andhakavinda-V.)° 第十三品(Gilāna-V.)° 第十四品(Rāja-V.)° 第十五品(Tikaṇḍaki-V.)° 第十六品(Saddhamma-V.)°第十七品(Āgkāta-V.)° 第十八品 (Upāsaka-V.)° 第十九品(Araññā-V.)° 第二十品 (Brāhmaṇa-V.)° 第二十一品(Kimbila-V.)°第二十二品(Akkosaka-V.)° 第二十三品 (Dīghacārika-V.)° 第二十四品(Āvāsika-Vagga)°第二十五品(Duccarita-V.)－各一〇經° 第二十六品(Upasampadā-V.)－二一經°

の二十六品二百七十一經がこれである。

第六集(Chakka-Nipāta)

第一品 (Āhuneya-V.)° 第二品 (Sārāṇīya-V.)° 第三品 (Anuttariya-V.)－各一〇經°第四品(Devatā-V.)－一二經° 第五品(Dhammika-V.)－一二經° 第六品 (Mahā-V.)° 第七品(Devatā-V.)° 第八品 (Arahatta-V.)－各一〇經° 第九品 (Sīti-V.)－一一經° 第十品(Ānisaṁsa-V.)－一一經° 第十一品(Tika-V.)－一〇經° 第十二品－八經°

の十二品百二十四經がこれである。

第七集(Sattaka-Nipāta)

第一品(Dhana-V.)－一〇經° 第二品(Anusaya-V.)－八經° 第三品 (Vajji-V.)－一二經°第四品 (Devatā-V.)° 第五品 (Mahāyañña-V.)° 第六品(Auyākata-V.)° 第七品(Mahā-V.)° 第八品(Vinaya-V.)°第九品(Vaggasaṅgahita Suttantā)－各一〇經°

の九品九十經がこれである。

第八集(Aṭṭhaka-Nipāta)

第一品(Mettā-V.)° 第二品(Mahā-V.)° 第三品(Gahapati-V.)° 第四品 (Dāna-V.)° 第五品(Uposatha-V.)° 第六品 (Sa-ādhāna-V.)°第七品 (Bhūmicāla-V.)° 第八品(Yamaka-V.) 第九品(Sati-V.) 各一〇經°

の九品九十經がこれである。

第九集(Navaka-Nipāta)

第一品(Sambodha-V.)° 第二品 (Sīhanāda-V.)－各一〇經° 第三品 (Sattāvāsa-V.) 一一經° 第四品(Mahā-V.)° 第五品 (Pañcāla-V.) 各一〇經° 第六品 (Khema-V.)－一一經° 第七品(Satipaṭṭhāna-V.)° 第八品(Sammappadhāna-V.)°第九品 (Iddhipadā-V.)－各一〇經°

の九品百經がこれである。

第十集(Dasaka-Nipāta)

第一品(Ānisaṁsa-V.)° 第二品(Nātha-V.)°第三品(Mahā-V.)° 第四品(Upāli-V.)° 第五品(Akkosa-V.)° 第六品(Sacitta-V.)°第七品(Yamaka-V.)° 第八品(Ākaṅkha-V.)° 第九品(Thera-V.)° 第十品(Upāsaka-V.)－各一〇經° 第十一品(Samaṇasaññā-V.)－一二經°第十二品(Paccorohaṇi-V.)－一〇經° 第十三品(Parisuddha-V.)－一一經° 第十四品(Sādhu-V.)－一一經°第十五品(Ariyamagga-V.)－一〇經° 第十六品(Puggala-V.)一二經° 第十七品 (Jāṇussoṇi-V.)－一一經° 第十八品(Sādhu-V.)－一一經° 第十九品(Ariyamagga-V.)° 第二十品 (Puggala-V.)° 第二十一品(Karajakāya-V.)° 第二十二品－各一〇經°

の二十二品二百二十經がこれである。

第十一集(Ekādasaka-Nipāta)

第一品 (Nissaya-V.)° 第二品(Anussati-V.)

品	巻	法
(三一)増上品(一一經)	二三	五法
(三二)善聚品(一二經)	二四	
(三三)五王品(一〇經)	二五	
(三四)等見品(一〇經)	二六	
(三五)邪聚品(一〇經)	二七	
(三六)聽法品(五經)	二八	
(三七)六重品(一〇經)	二九－三〇	六法
(三八)力品(一二經)	三一－三二	
(三九)等法品(一〇經)	三三	七法
(四〇)七日品(一〇經)	三四－三五	
(四一)莫畏品(五經)	三五	
(四二)八難品(一〇經)	三六－三七	八法
(四三)馬血天子品(一〇經)	三八－三九	
(四四)九衆生居品(一一經)	四〇	九法
(四五)馬王品(六經)	四一	
(四六)結禁品(一〇經)	四二	十法
(四七)善惡品(一〇經)	四三	
(四八)十不善品(六經)	四四－四五	
(四九)牧牛品(一〇經)	四六－四七	十一法
(五〇)禮三寶品(一〇經)	四八	
(五一)非常品(一〇經)	四九	
(五二)大愛道涅槃品(九經)	五〇－五一	

がこれである。

次に現存巴利の増支部は十一集(Nipāta)一七〇品(Vagga)二千三百九十一經より成つてゐる。即ち、

第一集(Eka Nipāta)

第一品(Rūpa-Vagga)－一〇經。第二品(Nīvaraṇapahāna-Vagga)－一〇經。第三品(Akammaniya-Vagga)－一〇經。第四品(Adanta-Vagga)－一〇經。第五品(Paṇihita-Vagga)－一〇經。第六品(Accharāsaṅghāta-Vagga)－一〇經。第七品(Viriyārambhādi-Vagga)－一〇經。第八品(Kalyāṇamittādi-Vagga)－一〇經。第九品(Pamādādi-Vagga)－一七經。第十品(Adhammādi-Vagga)－四十二經。第十一品(Ekādasama-Vagga)－一〇經。第十二品(Anāpattādi-Vagga)二〇經。第十三品(Ekapuggala-Vagga)－七經。第十四品(Etadagga-Vagga)－八〇經。第十五品(Aṭṭhāna-Vagga)－二八經。第十六品(Ekadhamma-Vagga)－一〇經。第十七品(Bīja-Vagga)－一〇經。第十八品(Makkhali-Vagga)－一七經。第十九品(Appamattaka-Vagga)－二五經。第二十品(Jhāna-Vagga)－二六二經。

の二十品六百八經がこれである。

第二集(Duka-Nipāta)

第一品(Kammakāraṇa-V.)－一〇經。第二品(Adhikaraṇa-V.)－一〇經。第三品(Bāla-V.)－一〇經。第四品(Samacitta-V.)－一〇經。第五品(Parisā-V.)－一〇經。第六品(Puggala-V.)－一二經。第七品(Sukha-V.)－一三經。第八品(Nimitta-V.)－一〇經。第九品(Dhamma-V.)－一一經。第十品(Bāla-V.)二〇經。第十一品(Āsā-V.)－一二經。

第十二品(Āyācana-V.)－一一經。第十三品(Dāna-V.)－一〇經。第十四品(Santhāra-V.)－一二經。第十五品(Samāpatti-V.)－一七經。第十六品(Kodha-V.)－一〇〇經。第十七品(Attiavasá-V.)－三三經。

の十七品三百十一經がこれである。

第三集(Tika-Nipāta)

第一品(Bāla-V.)－一〇經。第二品(Rathakāra-V.)－一〇經。第三品(Puggala-V.)－一〇經。第四品(Devadūta-V.)一〇經。第五品(Cūla-V.)一〇經。第六品(Brāhmaṇa-V.)－一〇經。第七品(Mahā-V.)－一〇經。第八品(Ānanda-V.)－一〇經。第九品(Samaṇa-V.)－一〇經。第十品(Loṇaphala-V.)－一〇經。第十一品(Sambodhi-V.)－一〇經。第十二品(Āpāyika-V.)－一〇經。第十三品(Kusināra-V.)－一〇經。第十四品(Yodhājīva-V.)－一〇經。第十五品(Maṅgala-V.)－一〇經。第十六品(Acelaka-V.)－一三經。

の十六品百六十三經がこれである。

第四集(Catukka-Nipāta)

第一品(Bhaṇḍagāma-V.)－一〇經。第二品(Cara-V.)－一〇經。第三品(Uruvelā-V.)－一〇經。第四品(Cakka-V.)－一〇經。第五品(Rohitassa-V.)－一〇經。第六品(Puññābhisanda-V.)。第七品(Pattakamma-V.)。第八品(Apaṇṇaka-V.)。第九品(Macala-V.)。

佛說四未曾有法經(一卷)　西晉、竺法護譯
舍利弗摩訶目連遊四衢經(一卷)　後漢、康孟詳譯
佛說十一想思念如來經(一卷)　劉宋、求那跋陀羅譯
佛說四泥犁經(一卷)　東晉、竺曇無蘭譯
阿那邠邸化七子經(一卷)　後漢、安世高譯
佛說阿遬達經(一卷)　劉宋、求那跋陀羅譯
佛說玉耶女經(一卷)　失　譯
玉耶經(一卷)　東晉、竺曇無蘭譯
佛說大愛道般泥洹經(一卷)　西晉、白法祖譯
佛母般泥洹經(一卷)　劉宋。慧簡譯
舍衞國王夢見十事經(一卷)　失　譯
佛說舍衞國王十夢經(一卷)　失譯附西晉錄
國王不梨先泥十夢經(一卷)　東晉、竺曇無蘭譯

二　組織及びその成立内容

増壹阿含は巴利の増支部と共に、釋尊の教說を法數に從つて整理し輯錄したもので、巴利善見律(Samantapāsādikā I. p. 27 P.T.S.)にその性質を明して、「増壹尼柯耶とは何ぞや、一々の支分を增加することによつて、チツタパリヤーダーナ(Cittapariyādāna)經等九千五百五十七經を有す」(漢譯善見律卷一、)といひ、五分律卷三十(大正藏卷二十二 No. 1422)に、「此れは是れ一法より增して十一法に至るを、今集めて一部と爲し、增一阿含と名く」といふが如く、その法數も一法より漸次高次に上つて、十一法に達するものである。(四分律卷五十四、大正藏卷廿三 No. 1423 も亦これと同意) 然るに本經の註疏である分別功德論卷二によれば、この經はもと百事あつたものが、阿難より附囑を受けし優多羅の入寂の時には既に九十事を失ひ、その弟子善覺は師より十一事を傳承したといふのである が、これは附會も甚だしいものであつて、かゝる事實は、佛の入滅を去ること遠からざる時に、然も一比丘のみの傳承に非らざる經典に於てはあり得べからざることである。

現存漢譯増壹阿含は五十一卷五十二品四百七十一經(大正藏による)より成つてゐる。卽ち

品	經數	卷	
(一)序品		卷一	
(二)十念品	(一〇經)	一	一法
(三)廣演品	(一〇經)	二	
(四)弟子品	(一〇經)	三	
(五)比丘尼品	(五經)	三	
(六)淸信士品	(四經)	三	
(七)淸信女品	(三經)	三	
(八)阿須倫品	(一〇經)	三	
(九)一子品	(一〇經)	四	
(一〇)護心品	(一〇經)	四	
(一一)不逮品	(一〇經)	五	
(一二)一入道品	(一〇經)	五	
(一三)利養品	(七經)	六	
(一四)五戒品	(一〇經)	七	
(一五)有無品	(一〇經)	七	二法
(一六)火滅品	(一〇經)	七	
(一七)安般品	(一一經)	七—八	
(一八)慚愧品	(一〇經)	九	
(一九)勸請品	(一一經)	一〇	
(二〇)善知識品	(一三經)	一一	
(二一)三寶品	(一〇經)	一二	三法
(二二)三供養品	(一〇經)	一二	
(二三)地主品	(一〇經)	一三	
(二四)高幢品	(一〇經)	一四—一六	
(二五)四諦品	(一〇經)	一七	四法
(二六)四意斷品	(一〇經)	一八—一九	
(二七)等趣四諦品	(一〇經)	一九	
(二八)聲聞品	(七經)	二〇	
(二九)苦樂品	(一〇經)	二一	
(三〇)須陀品	(三經)	二二	

旨句味往々にして盡さゞるものがあつたが爲に、僧伽提婆は漢語を學び、沙門慧持等四十餘人と共に更に改譯したものであつて、經錄に二經再出大同小異と云へば、その改譯は僅かに一部の修正に過ぎなかつたものゝやうである。然して第一譯は何時頃より佚したものであるか不明であるが、大周刊定衆經目錄卷八には「今二本倶に存す」といへば、唐代には未だ存し、至元法寶勘同總錄卷六には「初缺」とあれば、勘同總錄の成つた元代には既に佚して存しなかつたもので、譯文の拙劣なるために、自然に佚するに至つたものゝやうである。然して第二譯は勘同總錄卷六に「蕃本と同じ」といふによれば、當時存在した西藏本と內容を同じうしたものゝやうである。

本經の註疏としては分別功德論五卷(失譯、大正藏第二十五卷 No. 1507)の一部を存するのみで、それも本經の序品より弟子品の一部に至るの註疏であつて、他は全く存せず、それも後の大乘教徒が、大乘教に立脚して註釋を施したものである。

巴利文の增支部(Aṅguttara Nikāya)は、巴利原典協會(Pali Text Society)に於て、西紀一八八五年より一八八八年にかけてモーリス(Richard Morris)氏の手によつて二卷の校訂刊行を見、氏の沒後ハーディ(Edmund Hardy)氏その事業を繼續して、一八九六年より一九〇〇年にかけて全部の校訂を終り、全五卷の刊行を見るに至り、フント(Mabel Hunt)氏はその索引一卷を刊行した。然してこれが翻譯には獨逸のニャーナチロカ(Nyanatiloka)氏が西紀一九二二年にこれを獨譯し、Die Reden des Buddha Aṅguttara-Nikāya と題してミユヘンに於て刊行したものゝ外、他の譯出を見ないが、我國にあつては表現社版の現代意譯根本佛教聖典叢書第四卷に於て、赤沼智善氏は一法品より五法品迄の抄出譯を試みてゐるのみである。

然してその註疏としては、佛音(Buddhaghosa)論師の滿足希求(Manorathapūraṇī)を存し、一九二四年にワレザー(Max Walleser)氏の手によつて、巴利原典協會より、その第一卷が刊行せらるゝに至つた。

又漢譯增一阿含經中の諸經にして、支那に於て別譯せられたものに、左の二十三經がある。(大正藏經第二卷 No. 126—148)

佛說阿羅漢具德經(一卷)　宋、法賢譯
佛說四人出現世間經(一卷)　劉宋、求那跋陀羅譯
須摩提女經(一卷)　吳、支謙譯
佛說三摩竭經(一卷)　吳、竺律炎譯
佛說給孤長者女得度因緣經(一卷)　宋、施護譯
佛說婆羅門避死經(一卷)　後漢、安世高譯
佛說食施獲五福報經(一卷)　失譯
頻毘娑羅王詣佛供養經(一卷)　西晉、法炬譯
佛說長者子六過出家經(一卷)　劉宋、慧簡譯
佛說力士移山經(一卷)　西晉、竺法護譯

增壹阿含經解題

一　傳譯及び註疏

增壹阿含經は漢譯四阿含の一であつて、巴利五尼柯耶(Pañca Nikāya)中の增支部(Aṅguttara Nikāya)に相當するものであるが、その增壹といひ、增支といひ、いづれも釋尊の教法を組織し、整理して法數に從つて輯錄したものであつて、漢譯阿含はその中に巴利經典の註釋の分をも含むことを見れば、その註釋を含むものを譯出したものであり、從つてその成立は巴利文のものより後代のものであるが、殊にスタイン(Aurel Stein)氏の梵文阿含の斷片の發見によつて、漢譯阿含は巴利系のものより、寧ろ北方梵語系統のものであることが知られ、殊に增壹阿含經の如きはその組織、内容の上よりして明かにこれに屬するものである。

漢譯增壹阿含には前後二譯あつて、その第一譯は符秦の建元二十年(西紀三八四)、兜佉勒(Tukhāra)國の人曇摩難提(Dharmanandi)が長安に於て譯出したもので、五十卷、(衆經目錄卷一、同卷三、歷代三寶記卷八による。されど出三藏記集卷九の道安の本經の序には四十一卷四百七十二經、出三藏記卷十の僧伽羅刹經序には四十六卷となつてゐる。)その第二譯は東晋隆安元年(西紀三九七)罽賓國(Kaśmira)の三藏僧伽提婆(Saṃghadeva)が建鄴の東亭寺に於て譯出したもので、五十一卷(開元釋敎錄卷三による。大周刊定衆經目錄卷八、至元法寶勘同總錄卷六は五十卷とし、勘同總錄には或は四十二卷、或は三十二卷とし、開元釋敎錄卷三亦或は三十三卷亦六十卷とす。宋・元・明・聖語藏は何れも五十卷とし、麗藏は五十一卷とす。)であるが、その第一譯は今は存せず、その第二譯のみが現存するのである。然るに現存の宋・元・明藏は譯者を曇摩難提とし、經尾に「十一法竟二十五萬首盧其有八十萬言五百五十五聞如是一時也」と記し、麗藏は譯者を東晋の僧伽提婆とし、五十一卷五十品としてゐるが、譯者は麗藏のもの正しく、品數分法次第等は宋・元・明藏に依るべきである。

曇摩難提譯の第一譯は現存しないものであるが、道安の序によれば、その一斑が覗はれ、四十一卷上下二部より成り、上部二十六卷、下部十五卷を包括し、併せて四百七十二經あつたといふが、その品數については何等いふところがない。

現存の僧伽提婆譯の第二譯は、中阿含後記の文及び、高僧傳卷一の僧伽提婆傳によれば、前譯の譯文拙劣のために、義

目次

阿含部 八

林五邦譯

國譯一切經

大東出版社藏版